KAIZO

改造

七月號

1928

新刊 思潮文献 日本自殺情死紀

本書は自殺史を兼ねた思想史であり犯罪史話でありまた世相記である。本書は統計の註釋めいた單なる自殺情死の研究ではない。然も内容は興味津々たる得難き文献志である先づ次ぎの内容を見られよ。

内容目次一班

自殺概史…**自殺心中三千年史**…（太古よりの自殺物語）…**自殺心中世相史**…（明治以後の自殺心中）…**遺書及絶筆集**…（巖頭の感等の有名なもの百數十通）…**自殺家印象錄**…（北村透谷の短き一生）…古白の苦悶と悲劇…川上眉山の死…藤村操の死を哭す…野村隈畔の心中…乃木將軍遺書の秘密…酒匂押川の自殺…田澤稻舟の死…芥川龍之介の死の前後…有島武郎の死…三土教授の自殺）…**自殺心中風土記**…（踏切り地獄…魔の連絡船…山と海の精靈…琵琶湖心中…降下自殺名所…自殺心中ところ〳〵）…**「自殺論」論說集**…藤村操の死に就て●黒岩周六…桂川を評して情死に及ぶ●北村透谷…「今戸心中」と情死●高山林次郎…乃木大將の自盡を評す●谷本富…自殺觀●田中香涯…自殺と生活の興味●德富蘇峰…自殺に就て●武者小路實篤…自殺に對する疑問●清澤洌…自殺論●ショペンハウエル…

四六判最上製美本　全壹册四百餘頁

正價金貳圓　送料十八錢

島爲男著 ◯**夏目さんの人及思想** 本當に行屆いた夏目さん研究であると大評判の書（三版）正價金貳圓 送料十二錢

稻毛詛風著 ◯**歐洲文化の印象と批判** 哲學者の觀たる歐洲見聞錄何人も必讀の要書（新刊）金參圓八拾錢 送料十八錢

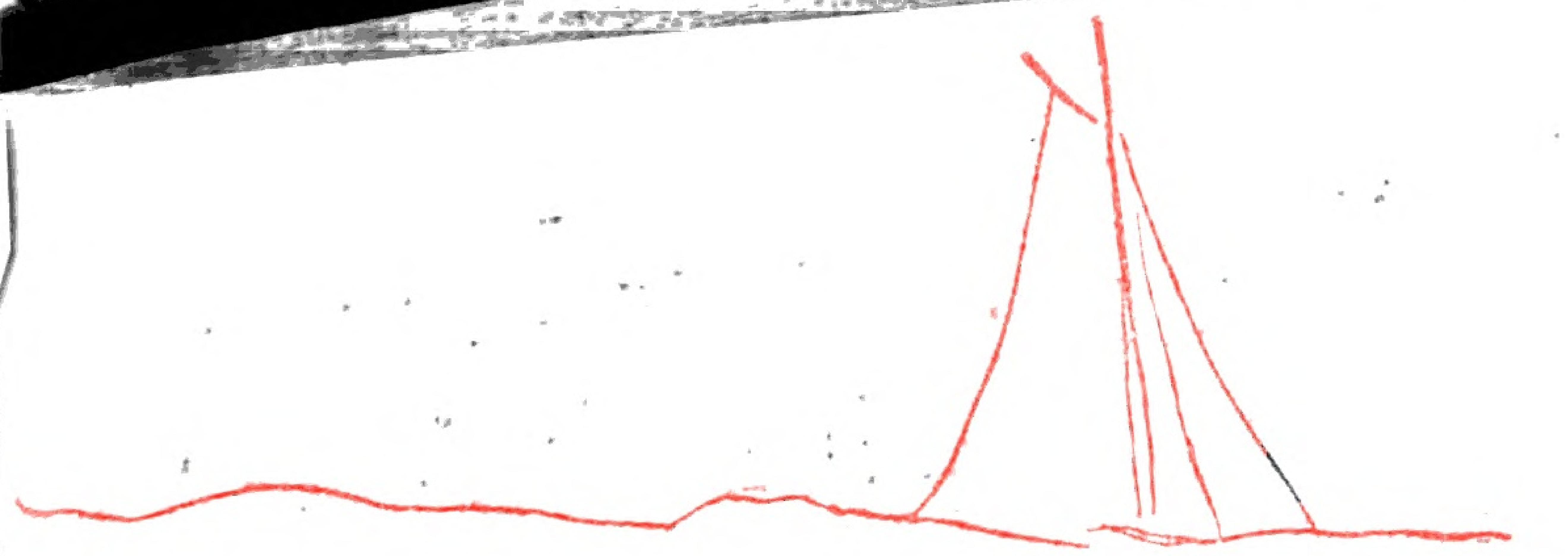
小林好日著 ◯參考**增鏡新釋** 本文校定の正確・語義解釋の精細・現代語譯の巧妙・評論の明快適切等で他の追隨を許さざる良書にして懇切丁寧を極めたる（新刊）金四圓五拾錢 送料十八錢

小松尚著 ◯參考**徒然草新釋**（新刊）金參圓五拾錢 送料十八錢

龍澤良芳著 ◯參考**大鏡新釋** 註釋書、文検受驗者、國文研究者の絶好參考書たる有益の新刊（新刊）金參圓八拾錢 送料十八錢

春藤與市郎著 ◯**古今世界陸戰史** 戰爭!!是が何故に起る不戰條約の成否や如何先づ之を戰爭史に見よ（新刊）金參圓貳拾錢 送料十八錢

假營業所 東京市神田西小川町二ノ三 振替貯金口座東京八七貳番 大同館書店



改造七月號目次

重大性ある對支策の根本革正

北方軍閥はあえない最期を遂げた。代つて南方新軍閥が新たに北京城頭に青天白日旗を樹立するに至つた。しかしその標旗には輝かしい理想のなく、新鮮なる生氣の何ものも感ぜられない。政友會に民政黨が代つた位ひの新味しかなく、且つ何等の期待もかけられない。「打倒軍閥」の跡から「聯立軍閥」が生れそして「打倒帝國主義」から帝國主義のくさみの多量にかかつた新帝國主義が生誕したのである。馮玉祥にどこのくさみがあり、蔣介石にどこの外的勢力の香ひが漂ふかは誰でも嗅ぎわけのできるやうに濃厚である。しかも北方軍閥を打倒したる新軍閥が今や三つ巴の醜態を現出しておるのは淺ましい限りである。新軍閥はこうした醜態を當分連續して行くだらふ。そのうちに沒落した北方軍閥が蘇生せぬとも限らぬ。昨年七月放逐された中國共産黨が統制的に進出せぬとも限らぬ。ここなかく平穩な南方日和が持續するとは思はれない。虎視眈々たる馮玉祥が蔣の反對勢力である共産系と結合し、そして背後の勢威をかりて躍出することも想像できる。要するに支那は内政的にもまだずゐぶん多事であらふし、北方、南方、共産系が一丸となつて不平等條約撤廢の大旗下に勇進する迄にはチト日がかかるやうである。しかし我國大衆は隣國の大火災に對しては出來るかぎりの同情もし、又我國としての準備もせねばならない。我國は下手な干渉をすることはよさなければならないが、かりにも或一派の勢力と結合して我勢力を張らうなぞと云ふ謬見をいだいてはならない。支那が軍閥の手を離れて統一さるるのは東洋全局の上にそして我國前路の上に望ましい限りである。しかしそう云ふ註文を他國に對してするのは少々贅澤すぎる。ただ我國は一歩退いてよく考へねばならぬときだ。一の張作霖、一の蔣介石にたよつて我國策を遂行する手段とすることは斷乎として此機を以つて清算すべきである。内亂あるごとに我在留邦人が常に生命財産の脅威をおぼゆるはこうした反動政策の當然生むべき當然すぎる反映である。我國はしづかに支那政局の歸局するところを想察しつつ、全日本民衆の意のあるところを合流して對支政策を根本的に立て直すべきである。從つて撤兵問題を緊急に片付けるべきである。我國資本家の意向が我國の意向の主要素において打算するときは再び支那時局を紛糾へと導く。そして我國と彼とは永遠に輯睦の機到らざるを想ふべきである。



如何にして無產階級政治戰線の當面の難關を克服すべきか?

大山郁夫

一　問題の所在

年來久しく問題視されてゐた新選擧法の下に行はれた今春の總選擧、ならびにそれを受けて衆目環視の下に開かれた所謂最初の普選議會が、かげらうの如く過ぎ去つた今日に於て、現在日本の無產階級の手に殘されてゐる收穫の總額は、果たしてどれほどであるか?——

この問ひに對する最も手ッ取り早く、しかも最も印象的な答へは、『たゞ八名の無產黨議員が議會に送り込まれたゞけで、それ以外には、具體的には何物も殘つてゐない!』といふ一言につきる。それはしかし、一應適切な答へではあるが、決して最終的な答へではない。といふのは、それは決して問題をそのまゝそこに停止せしめないで、寧ろ問題をそこから發展せしめる可能性を帶びてゐるし、更らにまた、それに關聯して提起され得る幾多の新問題の端緒をも包藏してゐるからである。

それはそれでいゝ。否、さうでなくてはならない。若しくも、我々が確信してゐる通りに、この際日本の無產階級の政治運動が、現在の瞬間に於て直面してゐる空前の――よし絶後のでなくとも――一大難關を突破しつゝ果敢なる一大飛躍を斷行することが、その前途への當然の進展のために不可缺かつ不可避の條件である限り、我々は無論我々の問題をさうした地位に置きッ放しにしてはならない。否、我々は寸刻も遲疑せず、それをそこから敏活に發展せしめると共に、更らにそれに關聯して幾多の新問題をも提起し、同時にそれらを一つ一つ次から次へと解決しつゝ前進しつゞけなければならぬ。

で、問題は前に戻つて、我々が本文の劈頭に於て、先き頃の總選擧および普選議會が日本の無產階級に與へたものは、ただ一握りの無產黨議員團だけであつて、それ以外には具體的な何物もないことを卒然と言ひ立てたのは、無論、決して投げ遣り的乃至捨て鉢的氣分からではない。それはまた、無關心な傍觀者の態度からでもなければ、冷やかな嘲笑を含む皮肉屋の口吻からでもない。それは更らにまた、或る隱くされた意圖から普選に對する大衆の熱情に水を向けようとする反動運動者の立場からでもなければ、實踐の世界から遠くかけ離れた『大處高處』から賢げに物をいふことを誇りにしてゐるかに見える無產階級的戰術論の技師の見地からでもない。

否、我々が發したさうした言葉は實に、我々が過去の或る期間に亙る熱火の如き現實鬪爭の渦中を潛ぐつて來た後に暫し息ついて、我々の苦戰の跡を生々しく印する場面の全狀勢を俯瞰して、思はず心の底から張りあげた叫びに外ならないのだ。それ故にこそそれは、何等かの皮肉的意味を寓してゐるよりは、寧ろ一種の悲痛感を伴つてゐるのであり、また投げ遣り的な絶望氣分によつて裏附けられてゐるよりは、寧ろ自責的乃至自己鞭撻的精神によつて貫かれてゐるのである。

しかも、それは究極に於て、我々の眼前に展開して來た新局面に對する注意深き觀測と、我々自身の從來の行動の態度および方針の當否に關する再度の自己批判とに向つて我々を驅り立てるばかりでなく、更らにその新局面に策應するための我々の行動の新たなる方向づけを我々に督促しないでは已まないのだ。

約めていへば、我々は今、現在の瞬間に於て我々の進路を遮ぎつてゐる一大難關に直面して、單に我々が過去に於て如何に戰つて來たかを顧みてそれに假借なき自己批判を行ふばかりでなく、更らに將來如何に戰ひ進むべきかの方針についても、今一應愼重なる再考慮を加へなければならない必要に迫られてゐるのだ。しかもその必要は、我々の當面の難關の異常に重大であるだけに、一層緊切に感じられるの

だ。

我々が今直面してゐる難關の異常なる重大性については、管々しい說明は全然不必要であらう。ただ假りに二三の例をあげるとすると、たとへば過ぐる總選擧に際して無產派の戰鬪的な部分に向つて加へられた政府の空前の組織的大彈壓の如き、またそれに引き續いて行はれた日本共產黨檢擧事件の如き、またそれと相前後して起つた勞働農民黨解散事件の如き、更らにまた現在治安維持法改惡問題によつて暗示されてゐる形勢の極度の險惡化の如き、いつれとして今無產階級の政治運動の前に立ち塞がつてゐる難關の重大性を明白に——あまりにも明白に——物語つてゐないものはないのだ。

しかも、かゝる狀態の下に於て、一握りの無產黨議員團が議會に送り込まれたが、——そして彼等のうちには若干の戰鬪的分子も含まれてはゐたが、——しかし彼等が全體として示した非戰鬪的態度は餘りにも慘めであつた。少くともそれは、多少の期待を彼等の活躍の上に繫いでゐた無產大衆を徹底的に失望せしめるに充分であつた。

無論、階級的に眼ざめたる無產大衆は、普選が單に普選そのものとしては無產階級に如何なる獲物をも齎らすものでないことを、誰れに說き聞かされるまでもなく、自覺的に熟知してゐた。だが、それにも拘はらず、その普選の機會に乘じて幾人かの無產黨議員が自己の議會外大衆鬪爭の尖端であることを意識してブルジョア議會に侵入した以上、彼等が或る機會を摑んで或る程度に果敢なる議會內鬪爭を展開するであらうことを、それらの無產大衆が待ち設けたのに、強ち無理だとはいへなかつた。それもしかし、結局に於て空望に歸した。我々は今それに對する責任を一々無產黨議員團の上にのみ轉嫁しようとしてゐるのではない。彼等の非戰鬪的態度の原因は、議會內にも議會外にもあつた。そして、それはそれとして、別に究明されなければならない。だが、いつれにしても、第五十五議會に於ける無產黨議員團の行動が、戰鬪的プロレタリアートが今直面してゐる重大なる難關を克服することに露も貢獻しなかつたことだけは、拒むことの出來ない一つの客觀的事實である。

要するに、もし無產階級政治運動の上にも一張一弛のリズムが起ることが免れないと言ふことが出來るとすると、現在の瞬間に於てこそ日本の無產階級政治運動は少くとも表面上には、過去數年來に見られた最も甚だしき沈滯狀態の上を低徊しつゝあるものといへよう。しかも日本の無產階級陣營內の實際上の勢力は、寧ろ從前よりも一層增進はしてゐても、些かでも減退してゐるものとは絕對的に考へられないのだ。そこにもまた、我々に當面の難關の重大性を思はせる要因の一

つが潜んでゐる。

我々はしかし、たゞ客觀的見地から無產階級政治運動の上に起る一張一弛のリズムを眺めてばかりゐるやうな態度に終始してはゐられない。殊に、その當面の重大なる難關に關しては、我々は如何に絕大なる努力を拂つても、飽くまでそれを克服することによつて、前途への潑剌たる躍進の通路を打開しようと決心してゐるものである。

それには、結局たゞ鬪爭による一途あるのみだ。無產階級にとつては、その最後の解放の日までは、不斷の鬪爭がそれ自身に宛てがはれた運命なのだ。しかも、さうした鬪爭は、當然のことゝして、常に明確に目的意識的のものでなくてはならないし、從つて刻々の狀勢の變化に對する油斷なき觀測と、それにつれて絕えず訂正されて行く適切なる計畫の上におかれなければならぬ。我々は常に貴き鬪爭經驗を活かすことを忘れてならないと同時に、絕えず新しき鬪爭經驗を創造して行かねばならぬ。かくて我々の實踐は、不斷の問題の連續によつて伴はれる。精しくいへば、我々は常に、旣に我々の手中におかれてゐる各種の問題を刻々敏活に發展せしめると共に、更らにそれに關聯して幾多の新問題をも提起し、同時にそれらを一つ一つ次から次へと解決しつゝ進み行かねばならぬ必要に迫られてゐる。それは何時ものことだが、殊に今や異常に重大なる一難關に直面してゐる瞬間に於て、我々は尙一層とその必要を痛感せしめられる。

かゝる見地に立つて、我々は今當面の最大急務として、現在の瞬間に於ける支配階級側および無產階級側の陣列の配置に關する一般的狀勢の觀測を試み、更らにそれに立脚して、我々の眼前の難關の克服のために何をなすべきかの問題を見究めようとしてゐるのである。いふまでもなく、それはどこまでも、直接に我々の實踐に關聯してゐるものとして企てられようとしてゐるのだ。我々の觀察は常に我々の實踐から出て來て更らに常に我々の實踐に入るべきものとして運命づけられてゐるやうだ。また實際我々には、さうしたこと以外の何事にも拘はりあつてゐる暇もないのだ。

現に私は昨今、東京府會および神奈川縣會の選擧に際して立候補した數名の同志の應援のために、脇目もふらず東奔西走してゐる。だが私は、さうした慌たゞしき活動の合ひ間にも、絕えず當面の政局の刻刻の動きに心を引き寄せられ、更らにまたそれに對應して我々の側に於て取られるべき行動の方針について考へさせられてもゐる自分自身を見出す。で、本稿は實に、今その政治戰線を縱横に馳驅しつゝある私の心の記錄として見られるべきものである。

二　階級對立の尖鋭化とその政治的表現の發展

我々が無產階級戰線から當面の政局の上に眼を放つとき、我々は我我の視野に入り來る萬般の事象の複雜なる交錯が、究極は一に階級對立の尖鋭化といふ根本的事實を起點とし、且つそれを中心として動搖し展開してゐる光景を、まざまざと看取することが出來るのだ。

まことに、今日の日本の無產政黨運動の搖籃時代から、始終直接間接にそれに參加して來た我々が、絕えず我々の眼前に見据ゑて來たものは、實に階級對立の尖鋭化の政治的表現そのものであり、またその不斷の直線的進行であつた。しかもそれは、最近の約一個年間に於て、如何に驚くべき步調を以て、急迫化して來たことか！　そして現に今、如何に息づまるやうな緊張狀態を現出してゐることか！

階級對立の尖鋭化、――この言葉は最近無產階級の陣營に於て最も多く繰り返されて來た言葉の一つである。そしてその際限もなき使用によつて、それが持つ本來の刺激性が幾分か失はれて來たやうにさへ見える。だが、さうした言葉の魅力の增減などはどうであれ、それが表現してゐる內容そのものが今日の一切の政治的事象の迫出力として、特に近來に至つて益々露骨にその作用を逞しうするやうになつたことだけは、最早誰れの眼にも隱れのない顯著な一事實である。

我々が今少しく現代社會史を前に溯つて回顧するとき、我々の記憶は必然的に、例の大正九年に於ける反動景氣の襲來後に資本階級が漸次に攻勢に轉じて無產階級の陣營を極度に色めき立たせ始めた時代へと我々を運んでゆく。その頃から都市に農村に、工場に田園に、資本家對勞働者および地主對小作人の對立抗爭が、それぞれの側に於て漸次に益々廣汎に統一的に組織化され、且つ益々深刻味を帶び來り、曾て久しく默々として人知れず進行してゐた階級對立の尖鋭化の過程が、急に一般に現實問題として注意され始め、且つその比類なき重大性が痛切に意識されるやうになつた。

さうした機運の成熟に伴つて、無產階級運動の上に所謂方向轉換が行はれて、その政治行動への突入が階級戰線上の中心問題を形成するやうになり、やがて無產黨の誕生が現實化されるまでの運びに立ち至つた。そして反動景氣の襲來から無產黨の生成までの數年間に跨がる期間は、實に今日我々を圍繞してゐる幾多の現實政治鬪爭上の諸問題の胎生期ともいふべきものであつた。

さうした過程に於て無產階級側の陣立てがその永き産みの苦しみ、――その餘痛は今日に及んでも猶ほ完全に治癒されてゐるとはい

へない——を經つゝあつた間にも、資本の攻勢は益々加速度的に進擊をつゞけつゝあつたが、殊に昨春に於て突如として全社會を震撼した金融恐慌の勃發を機として、一層急激に拍車を加へられた觀を呈した。全國を吹き捲くつた失業の嵐、操業短縮、工場閉鎖、賃銀の低下、勞働時間の延長、等々。農村にも全國的規模の上に現はれた立入禁止の猛襲。更らに各地に於ける休業銀行の頻出、それに伴ふ金融の梗塞、等々。かうしたことは、今から一個年ほど前の出來事であつただけに、まだ一般世人の記憶の上に生々しく殘つてゐることだから、茲で一々それらを算へ立てる必要はなからうが、兎に角かゝる狀態の下に、勞働者農民を眞ッ先きにして、それに中小商工業者俸給生活者等々を加へた極めて廣汎なる民衆層が、急轉直下に窮乏の深淵に追ひ詰められてゆくといつたやうな慘狀が、至るところに見られたものであつた。かくて、それに關聯して茲で特に注意されなければならないことは、勞働者農民の間の同盟を基礎として立ち、それに無產市民群の參加を迎へ入れ、それらのすべてを構成要素として行動する所謂階級的大衆黨としての無產黨の活動範圍が、かゝる狀態の下に於て急速に擴大されつゝあつたことである。

更らに他方、ブルジョアジーの側に眼を向けると、そこでは何よりも殊に、立法、司法、行政の全領域に亘つて、支配階級の、、、、、の下におかれてある一切の政治的機關の階級的、、が極端にまで押し進められつゝあつた傾向が見られた。既成諸政黨——殊に民政黨政友會の二大政黨——は、その超階級的假面を最後のものまでも一氣に脫ぎすてて、露骨にブルジョアジーの前衞としての地金をあらはし、曾ては彼等自身と離合反復常なき間柄にあつたかに見えた、、、と今では完全に融和抱合しその對無產階級關係に於て一團となつて猛烈に進擊的態度を取るに至つた。かくて無產階級は、政治的に經濟的に、完全に支配階級の全壓力を集中的に受けなければならなくなつた。無論前にも示唆しておいた通り、これはその時に至つて始まつた新現象ではなく、遠き過去から徐々に進行して來た一の過程がその機に乘じて一擧に激化されたものにすぎなかつたがしかもその激化が餘りにも急激且つ著大に現はれたことは、まさにそのことが起つた時期を標識するものとして見られ得るほども異常なものであつた。そしてそれは、特に政治的方面に於て、際立つて眼についた。階級的對立尖銳化の政治的表現は、かくしてその全幅の發展を遂げたのであつた。

かゝる方向に沿うて起つた形勢の推移が、一般的に資本家地主の階級的、、に歸着しつつあつたとはいふまでもないがしかし我々はまたその間に於て、特に金融ブルジョアジーが資本家地主のブロックの主導力としての地位を着々と築きあげつゝあつたのを見た。從つて一切

の政治機關の階級的利用は、金融資本の支配の確立を中心目標とし行はるるに至つた。我々はこの傾向の現れを、所謂財界安定策の名に押し出された諸計畫や、帝國主義、、、、の著大なる膨脹や、その他諸般の對内および對外政策——特に對支政策——の上に、極めて明白に反映されたのを見た。そのうちにも、多年消極政策を唱道して來た若槻内閣が或る朝何も知らずに眼さめた民衆の前に十七億圓を突破する豫算を投げ出して彼等を驚倒せしめたことや、その豫算を鵜呑みにした既成諸政黨が、更らに若槻内閣の末期から田中内閣の初頭にかけて、總額九億圓を出る血税の負擔を民衆に强要するが如き結果を伴ふ各種の補償案の議會通過のために協力したことなどは、民衆の心の上に、將來永遠に消えることのあるまじき、、、、、、、、の種子を蒔いたものといへるのだ。恰度その時である、我々が勞働農民黨の陣營から、『九億の金を以て民衆を救へ』のスローガンを掲げて蹶起し、全被壓民衆の生活と自由とのために猛烈なる日常鬪爭を展開したのは。——

要するに、當時の政局の上に頻々として續出した一聯の事象が我々に與へた最も意義深き教訓は、支配階級によつて企圖されてゐる金融資本の支配の確立ならびに帝國主義政策の發展は、日本の資本主義の現在の發展段階に於ては、最早單に無産階級といはず、廣汎なる全被壓民衆層の生活と自由との上に、、、、、を課することなくしては完成し得られるものでない、といふ一事であつた。

若し我々が、前に言つたやうに、反動景氣の襲來から無産階級運動の方向轉換時代を經て無産黨の生成に至るまでの一期間を、現在我々を圍繞してゐる幾多の現實政治鬪爭上の問題の胎生期として見ることが出來るならば、我々は今その續きとして、金融恐慌を中心としての前後數個月に跨る一期間を、それらの諸問題の生成期乃至發育期として見ることが出來ないであらうか？

私は今それの肯定を前提として、尚ほ筆を進めてゆくであらう。

三　政治的自由獲得鬪爭とその内面的意義

金融恐慌の直後、我々は勞働農民黨の陣營から、その社會的擾亂期に於ける我々の日常鬪爭を掲げたまゝ、秋の府縣會選擧戰に打つて出るための準備に入らなければならなかつた。

それは勞働農民黨にとつては、全國的規模に行はれる地方議會の選擧戰への最初の參加といふ意味に於て新しき經驗ではあつたが、しかも他の一面から見れば、それは黨が從前から續行して來た不斷の日常鬪爭の繼續であり、またそれが選擧といふ特殊事情の下に幾分かの特殊形態を取つたものに外ならなかつた。

ところで、勞働農民黨がその府縣議戰に臨むに際して採擇した中

心的闘爭目標は何であつたか？　それは實に「政治的自由獲得」といふ表現によつてその內容を明示されたものであつた。そしてまた、この闘爭目標こそは、舊勞働農民黨がその比較的に短かつた存立の期間を通じて驚くべく急速なるテンポに於て果敢に且つ執拗に展開した多岐多端の日常闘爭の指導統一原理としての役割を終始一貫して演じたものであり、更らにまた、舊勞働農民黨が一の貴重なる形見としてその遺業の繼承者の手に殘したものでもあつた。我々は今後に於ても尙ほ引續いて、その政治的自由獲得闘爭を戰ひ抜かなければならないと同時に、この闘爭目標の設定およびそれに照應する各種の闘爭形態の創造だけでも優に舊勞働農民黨の短かつた存立をして一の輝ける歷史的意義を帶びしめたものであることを、常に回想しなければならないのだ。

前に言つた通りに、舊勞働農民黨の昨年秋の府縣議戰に於ける闘爭は、その核心に於て、從前の日常闘爭の延長であつた。從つて、黨がその府縣議戰に臨むに當つて政治的自由獲得を中心的闘爭目標として採擇したといふのも、實は黨が既にそれ以前に於て不斷に續行してゐた日常經驗のうちから到達してゐたそれを、その際更らに一層明確に規定したものにすぎないのだ。

實際、舊勞働農民黨は、少くとも一昨年末の分裂當時以來特に猛烈に展開しだしたその多面的な日常闘爭の進行の過程を重ねつゝあつた間に、その實踐上の幾多の經驗に導かれて、次第々々にあらゆる闘爭を政治的自由獲得闘爭に集中統一せしめるやうになつてゐたのだ。我々は今茲で、黨が如何に一昨年の後半期から議會解散請願運動を指導して來たか、また昨年の初頭から如何に對支非干涉運動を支持して來たか、等々の經過を敍述する暇を持たないが、しかし黨がさうした各種の闘爭の間から不可抗的に政治的自由獲得闘爭を着々と展開して來た跡を一瞥すれば、その生成の過程が誰れにも容易に把握できるであらう。

更らに金融恐慌直後に於ては、舊勞働農民黨の活動は一段と强烈な刺激を受けた。それ以來の黨の闘爭の進展は、すばらしき高速度的展開以外の何物でもなかつた。我々は茲でもまた無論それを詳述してゐられないが、それにしても、我々は今それに關する二三の實例を擧げることによつて、それと政治的自由獲得闘爭との連鎖を跡づけようとする欲求を抑へることは出來ない。當時失業の嵐が全國に吹き荒れてゐたたゞ中に於て、黨は各處の工場で開かれてゐた工場代表者會議とか工場委員會とかを通して猛烈に勢焔をあげてゐた工場閉鎖、操業短縮、賃銀値下、勞働時間延長、等々への反對運動に參加して、熱烈にそ

れを支持した。また農村に於ては、黨は當時全國的規模に於て現はれた立入禁止の猛襲に對する農民の必死的な反對運動を極力應援して、惡戰苦闘を共にした。尙ほまた別個の方面に於ても、黨は或ひは休業銀行の頻出に對して各地方に預金者大會を開催し、或ひは勞働者農民無產市民の生活の脅威となつてゐた諸問題、特に住民問題の解決を目標として、借家人同盟運動の如きものを提起し指導しつゝ、間斷なく戰つた。そして、かうした運動のうちから、町村民大會とか、民衆大會とかの如き、一の特殊的な大衆的闘爭形態が次第に必要に應じて案出されるやうになつたことも、茲に一言附け加へておかれるべきであらう。だが、いま我々の注意の焦點をなしてゐるものは、大衆の現實生活上の直接的諸要求に根ざしたさうした樣々の闘爭も、黨の指導の下に皆政治的自由獲得闘爭にまで合流高潮せしめられるやうになつたといふ一事である。

それは何故であるか？

今日に於ける支配階級の極度の反動化が如何に全民衆の生活と自由の、、に歸着してゐるかについては、最早再説の必要はあるまい。それは我々が前に一應觸れた問題でもあるが、でなくとも、それは單に無產階級の陣營に於て日々の實踐の上に餘りにも痛烈に體驗されてゐることであるのみならず、傍觀者的態度に終始してゐる人々をさへも驅つて時に切齒扼腕せしめてゐることでもある。今や、我々が頭をめぐらして我々の周圍を見れば、支配階級の全壓力の日々の加重の下に、民衆生活の最主要部分が一面に人生の墓場の如き陰慘味を漂はしてゐる光景が我々の視野に入つて來るではないか？　かゝる狀態の下に於ては必然的に、生活の戰ひは自由の戰ひ以外の何物でもあり得ないし、自由の戰ひは生活の戰ひ以外の何物でもあり得ない。

更らにまた、日本の最近世政治史を沿革的に見て、日本の資本主義の歷史的發達の上に見られた特殊事情のために、日本のブルジョアジーは、、、、、、、に對して自由主義の戰ひを戰ひ抜くことなしに、早くも世界の帝國主義の潮流に卷き込まれて反動化し、、、、と双方から歩み寄つて握手し、今や對無產階級的立場に於て一致融合して、、、支配の主體となつてゐる。——と、かう言つたやうな所謂現段階論に屬する考察も、私には今その細論の準備がないから省くことにするが、兎に角かゝる歷史の辯證法的展開の下に於て、ブルジョア・デモクラシーの獲得の任務が、ブルジョアジーならぬプロレタリアーの手に轉がり落ちて來てゐるのだ。即ち、今日支配階級の極度の反動化の狀態の下に於て、大衆の現實生活上の直接的諸要求に根ざす闘爭さへもが、必然的にブルジョア・デモクラシーに立脚する政治的自由獲得闘爭に合流すべき運命におかれてゐることは、既に前に述べた通

りだが、更らにそれより一層根本的な要點として强調されなければならないことは、さうした政治的自由獲得鬪爭を戰ひ拔くことこそは、現在の無産階級の政治鬪爭を、より高き段階へ進展せしめるために絕對的に不可缺の條件をなすものだ、といふ一事である。

以上述べたことは、無産階級の政治的自由獲得鬪爭を、それが直面する客觀的狀勢との連環に於て跡づけたものである。だが我々は更らに、それがその主體的條件に關聯して持つ意義をも、一應は吟味しなければならぬ。換言すれば、我々はその內面的意義の上にも一瞥を與へなければならぬ。

我々が無産階級の政治鬪爭に於てブルジョア・デモクラシーの獲得の必要を說くのは、決してブルジョアジーの歷史的使命を代行しようといふ意味に於てゞはない。第十八世紀の西ヨーロッパ諸國の新興ブルジョアジーは、そのデモクラシー獲得の鬪爭に於て、『自由』『人權』を絕叫しつ、、、、、、、に挑戰し、その手から彼等の要求を戰ひ取つた。その彼等の要求は何であつたか？ それは實に個人的自由主義および私有財産權の確立であつたのだ。彼等は當時の新興階級として生産過程に於て占めたその地位から、必然的にそれを必要としたのだ。で、彼等は『自由』『人權』のイデオロギーを高く揭げ、全人類の名に於て、それを、、、、、、の手から戰ひ取つたのだ。そして、彼等がそれを戰ひ取つてから、そこにブルジョアジーの天國が打ち建てられたのだ。

ところが、今日の日本のプロレタリアートに敵對して立つてゐる支配階級の陣營に於ける、、、は、最早ブルジョアジーの自由・人權の抑壓者ではなくて、その無二の味方となつてゐるのだ。そして、そのブルジョアジーの自由・人權こそは、今日ではその極度に發達した形態に於て、プロレタリアートの自由・人權の上に押ッ冠ぶさる重壓となつて來てゐるのだ。

今日に於てプロレタリアートが『自由』と『人權』とを叫んでゐるのは、無論ブルジョアジーの自由・人權を要求してゐるのではない。ブルジョアジーの自由・人權は、根本に於て個人的自由主義および私有財産權の上に立脚してゐるものであり、そしてそれは今日のブルジョア議會で制定される法律によつて完全に保護されてゐるものである。だが、さうした法律の保護が、どれほど、、、、、プロレタリアートの上に及んでゐるかを考へて見よ！

この問題を考察すれば、現在無産階級の陣營に於て、何故に政治的自由獲得鬪爭が、プロレタリアートを主體として戰ひ拔かれなければならないことが主張されてゐるかゞ、容易に看取されるであらう。

我々は曾て勞働農民黨の陣營から、「勞働者に工場を與へよ！」「働く農民に土地を與へよ！」等々のスローガンと共に、「すべての人民に自由を與へよ！」のスローガンを叫ぶことを忘れなかつた。我々はまた、我々が掲げた政策のうちに、失業手當法、最低賃銀法、八時間勞働法等々の制定耕作權の確立、居住權の確立、その他幾多の同類の諸項目——大衆の現實生活上の直接的諸要求に根ざすところの——に併せて、政治批判の自由および言論集會出版結社の完全なる自由の獲得、選擧法の徹底的改正、無産階級抑壓諸法令の撤廢、團結權、罷業權、團體協約權の確立、裁判によらざる一切の、、、、家宅侵入、、、、、の處罰、、、處罰の廢止、、、、、、、、、、、、、、、、、、に對する國家補償、等々、その他尙ほ若干の自由・人權に關する諸項目をも挿入した。

かうした要求は、我々の無産階級政治戰線に於ける實踐から不可抗的に迸り出たところの新らしき自由・人權に關する階級的要求である。それは今日のブルジョアジーの自由・人權の擁護のための必要上から奪ひ去られたるプロレタリアートの自由・人權の奪還の要求である。

かくて、今日プロレタリアートが要求する自由・人權は、最早第十八世紀末のブルジョアジーによつて叫ばれたところの、個人的自由主義および私有財産權を內包するそれではない。否、今日プロレタリアートが要求する自由・人權は、その根抵に於て、プロレタリアートが今日の社會的生産過程に於て現實に占めてゐるその地位から不可抗的に出て來る獨自の階級意識を基準として、社會的上政治的上、階級的に批判しゝゝするための基礎的條件となるべき自由・人權をさしていふのである。今日支配階級の極度の反動化の狀勢の下に於て、無産階級の政治闘爭の主體的條件の發展と共に、かゝる要求が益々熾烈に燃えあがるやうになつたのは、決して偶然ではないのだ。

更らにまた、この意味に於けるプロレタリアートの自由・人權の要求が達成され得る——若しくは社會的に肯定され得る——實質的根據は、矢張りプロレタリアートが今日の社會的生産過程に於て現實に占めてゐるその地位から生ずるもの、である。だが私は、今はこの要點を詳論してゐる暇を持たない。

かうした要求の達成をそれ自身の直接目的とする政治的自由獲得闘爭は、その形式から見ればブルジョア・デモクラシーのための闘爭であるが、しかしその內容から見ればそれとは對蹠的地位にあるものである。從つてそれは最早、ブルジョアジー——彼等獨自の自由・人權に飽滿してゐるところの——の手によつてではなく、プロレタリアート——獨自の階級的意識によつて批判しゝゝする自由を許されてゐると

ところの——の手によつて戦はれなければならないものである。そしてそれを戦ひ抜くことは、決してブルジョアジーの歴史的使命を代行することゝ同意義をなすものではない。否、プロレタリアートはそれを戦ひ抜くことによつてのみ、その政治闘爭を、より高き段階へと進展せしむることが出來るのである。曾て第十八世紀の、、、、であつた新興ブルジョアジーが彼等の獨自の『自由』『人權』の叫び聲に奮ひ立つた如く、今日、、、、の純粋の擔當者となつて來てゐるプロレタリアートは、その政治的自由獲得闘爭のスローガンからその政治行動への無盡藏の刺激力を汲み取りつゝあるのだ。

尚ほ、政治的自由獲得の闘爭目標の今一つの重要意義が、現在我々の最も緊張せる注意の焦點の一つとなつてゐる全勞農政黨合同問題に關聯して強調されなければならないが、それは後節に譲ることにする。

四　階級戦線統一問題

(茲まで來て時間が非常に切迫したために、私はこれから先きの敍述を極度に切り詰めなければならない。以下或る部分を箇條書きの形式に約めようとしてゐるのは、全くそのためである。)

(一) 昨秋の府縣議に際しての左勞働農民黨の闘爭の成果は、その政治的自由獲得の闘爭目標の妥當性を充分に實證した。それについては、私はその府縣議戦後に本誌に發表した『全被壓民衆解放戦線の一進展』に於て、私の見解を詳述しておいた。(今私がかう書いてゐる時、今回の東京府會および神奈川縣會の選擧の開票の結果の一部分が諸新聞紙の夕刊に發表されたが、それによると、無産黨全體の旗色が、昨秋の府縣議戦の時よりは著るしく惡るくなつてゐるやうに見えるが、その根本原因は、私が後節で述べようとしてゐる無産階級政治戦線の當面の難關と密接なる連鎖におかれてゐるものと思はれる。)

(二) 府縣議戦後に及んで、資本家地主の側に於ける階級戦線の統一は一層完備されて、そこから來る政治的社會的經濟的壓迫は、無産階級に向つて益々強烈の度を加ふるに至つた。それに對して、無産大衆の側に於ては、全勞農政黨の合同を樞軸とする階級戦線の統一への要求が益々高められだした。その頃から或る數地方に起り始めた舊勞働農民黨の大衆と日本勞農黨の大衆との間の共同闘爭——後には社會民衆黨の大衆の參加も次第に見られるやうになつた——は、この方向に沿うて擧げられた最初の烽火と見られたものであつた。そして、さうした共同闘爭は、必然的に政治的自由獲得闘爭にまで高潮せしめられて行つたのであつた。

（三）かくて、政治的自由獲得闘爭の意義は、益々より廣汎なる大衆の間に浸潤し、徹底して行つた。それにつれて、從來組合主義的政治闘爭に、より多く傾いてゐたところの、舊勞働農民黨以外の無産諸黨の指導者たちも、少くとも表面上、段々とこの傾向に追隨して行くことを餘儀なくされ始めたやうに見えて來た。

（四）舊勞働農民黨は、當初から『單一無産政黨主義』を標榜してゐた無産階級政治運動の產物であり、また立黨以來終始一貫してその單一無産政黨主義の實現の問題から離れて行くことが出來なかつた。ところが、事件の複雜なる推移は、一昨年の末に至つて遂に同黨の上に例の分裂問題を惹き起し、そしてその時同黨から分離して行つた人々は、それぞれ右翼および中間派の無産黨を組織した。それらの人々の一部が、後に合同問題が熾烈に燃え上がるやうになつてから、彼等自身の曾ての舊巣であつた舊勞働農民黨に向つてその黨內の『宗派的分裂者を排除せよ』といふやうな、同黨自身にはその意味がはつきり摑めないやうな註文を向けだしたのは、運命のアイロニーとも見られ得ることであつた。それは兎に角、舊勞農民黨の上に右の分裂が起つた瞬間から、從前の『單一無産政黨主義』は、同黨にとつては最早、將來の再合同の問題に變形して行つた（話は筆者の個人的經驗に關することになるが、私は分裂當時から舊勞働農民黨に專屬することになつたのだが、私は右の意味に於て『單一無産政黨主義』の實現への努力を聲明して黨に迎へ入れられたのだ。）

（五）分裂當時以來、舊勞働農民黨は、黨が當初から固執してゐた全面的政治闘爭を政治的自由獲得闘爭に具體化しつゝ進めて行つたことは、既に述べた通りだ。そして黨は、絕えずその眼界から離すことができなかつた再合同の問題をも、明示的によりは寧ろ暗默的にではあつたが、その政治的自由獲得闘爭に結び附けて取扱つてゐた。かくて、他の無産諸黨の指導者たちが、その組合主義的指導精神の故に政治的自由獲得闘爭に何等の關心を示さなかつた間——それは昨秋の府縣議戰直後まで續いた——は、黨は他黨幹部たちの『指導精神』を極力排擊することに努めた。この戰術の眼目は、一方に於ては他黨幹部たちのその指導精神を徹底的に克服することにより、他方に於てはそれに伴ふ暴露によつて、他黨の大衆を政治的自由獲得闘爭に導き入れ、かくすることによつて所期の再合同の實現にまで到達しようといふにあつた。後に黨が無條件合同の問題を取り上げるやうになつてお

らは、この戰術は、方法論的には未熟な物の見方に立脚せしめられた餘りにもギゴチなく、餘りにも機械的なものとして淸算されたが、しかしその根本的態度は當時の狀勢の下に於て正當視すべきものとされた。

（六）ところがこの形勢は府縣議戰後に於て急遽に轉換した。即ち前に言つた通りに、その頃から次第に各地方に擴がつて行く傾向を示しかけた各黨大衆間の共同鬪爭は、意識的にも無意識的にも、政治的自由獲得の鬪爭目標によつて導かれる階級戰線の統一を目指して進みそれにつれて、他黨の幹部たちもこの大勢に押されて全勞農政黨合同問題への關心を示す態度を取るやうになり、且つ政治的自由獲得鬪爭を口にするやうにさへなつた。かうなると勞働農民黨にとつては最早政治的自由獲得鬪爭の立場から他黨幹部たちの指導精神を云々する必要はなくなつた。他黨幹部たちの眞の意向はどうであつたにせよ、全勞農政黨合同の問題が、各黨大衆の階級戰線の統一への熱烈なる要求の壓力によつて實現されることになりさへすれば、政治的自由獲得鬪爭がその合同後の黨によつて益々强力に展開され得べき見込みが充分に立つた。かゝる形勢の下に於て、勞働農民黨は待ち設けてゐたやうに、急轉直下して、一路無條件的合同の提唱に轉向して、そしてそれ以來最後までその態度を變へなかつたのだ。たゞ國會總選擧後に於て黨がそれに附帶して『社會民主々義に對する批判の自由の保留』を『合同の旗じるし』もしくは『合同の態度の基準』として採用することを決定するに至つたのは、總選擧中の鬪爭經驗と、總選擧後の政局の進展に對する觀測とによつて導かれた結果に外ならなかつた。

（七）勞働農民黨が昨秋の府縣議戰直後の形勢の轉化に應じて、左翼、右翼並に中間派を含む全勞農政黨の合同問題に對して取つた新態度は、大體以上に述べた通りであつた。だが、他黨の同問題に對する態度はどうであつたか？　それを詳述することは私の現在の企圖以外に屬することだから、こゝでそれに觸れないが、たゞ社會民衆黨が同問題に關聯して飽くまで頑强に共産主義者の排除を主張したこと、および日本勞農黨が社會民衆黨に對しては無條件的に、そして勞働農民黨に對しては『宗派的分裂主義者の淸算』を『單一絕對條件』として、勞農政黨の合同を提議したことの如きは、當時の各黨大衆間の共同鬪爭欲求によつてその方向を照明されてゐた全勞農政黨の合同の實現の前途に、尙ほ幾つもの障碍が橫はつてゐることを我々に思はせた。

(八) かくて全勞農政黨合同問題は、いまだにその當時の狀態のまゝに停頓してゐる、たゞ國會總選擧に際して、勞農、日勞、社會民衆黨間に、局部的には幾多の支障を見ながらも、全體的には或る程度までの選擧協定が成立したのは、その合同問題が齎らした微少な効果として見るべきものであつた。それに今一つ附記しておきたいことは、當時その合同問題の協議に際して、舊勞働農民黨の側の當事者であつた我々に、それに關聯して社會民主主義に對する批判の自由の保留の必要の如き主要問題に對する考慮が全然意識されてゐなかつたことだ。それは當然我々に期待されてあるべき筈のことであつたが、しかし實は我々にはその時分はまだ、その問題を具體的に念頭に浮べる用意が缺けてゐたのだ。

* * *

以上私は、昨秋の府縣議戰直後に起つた勞農政黨合同問題を、舊勞働農民黨のそれに對する態度を基準とする視角から一瞥したまゝをスケッチして見た。それを試みた私の意圖は、同黨が從前から展開して來た政治的自由獲得闘爭と勞農政黨合同問題との連鎖を明かに跡づけようとするにあつた。そして私は、私のその不完全極まる叙述にも拘はらず、その意圖だけはあらかた達成されたことと思ふ。少くとも私はさう希望する。尙ほまた私は、この問題に關しては、その協議に參加した舊勞働農民黨側の當事者の一人としての見解を述べたには相違ないが、しかしそのうちの幾らかでも論斷めく部分は、皆私一己の個人的責任に於て陳述されたものであることを附記しておく。

五　無産黨の受難時代の到來

やがて國會總選擧がやつて來た。

舊勞働農民黨はそれを機として、當面の反動時代に於ける資本家地主の政府および政黨の對内および對外政策上の眞意圖を、勞働者農民の現實生活上の直接的諸要求に鋭く對立せしめて明確に指摘し、特に第五十四議會を通じて現はれた——もしくは現はれようとした——各種のゝゝ法、彈壓法、ゝゝ計畫、等々を徹底的に暴露し、極力それに對する勞農大衆および無産市民の注意を喚起し、且つ益ゝ加はり行く支配階級の全面的攻撃の脅威とゝゝゝゝの危險との前に、それらの被壓迫民衆の、より鞏固なる同盟の必要を強調し、更らにさうした全場面に於ける一切の闘爭の合流集中點としての政治的自由獲得闘爭をこの際一歩前方に押し進め、それを立法部の徹底的民主化の要求にまで高めることを決定した。等々。かくして黨の國會總選擧戰に臨む準備は整へられた。

總選擧に於て舊勞働農民黨が如何に猛烈なる支配階級の組織的大彈壓の砲火の下に立たねばならなかつたかについては、私は本誌の四月號に發表した『激流に抗して』のうちに於て、私の香川縣に於ける實際經驗をその典型的一例として比較的に詳述しておいた。

その間に於て、舊勞働農民黨が掲げた政治的自由獲得鬪爭の正しさは、また新たに層一層と明瞭に實證された。殊に普選法の、、性や、一切の無產階級抑壓法令の惡辣性やは、『普選』の下に行はれたその總選擧に參加した我々の陣營に於ける鬪士たちによつて、直接に肉體を以てテストされた。

舊勞働農民黨以外の無產黨所屬の候補者の中にも相當の程度の彈壓を加へられたのが可なり多くあつたことは、たとへば足尾で立候補した日本勞農黨の麻生氏の記述を見てもわかる。だが、全體として見て、最も戰鬪的な無產黨であつた舊勞働農民黨候補が一律に最も強烈な彈壓にさらされたことは、拒むべからざる事實だ。このことはしかし、同黨が豫てから果敢に展開して來た政治的自由獲得鬪爭が、如何に支配階級の、、となつたかを反映するものであり、從つてその効果の程度を標識したものといへるのであつたのだ。

これに反して、右翼の一端にある社會民衆黨の候補者の多くが、地主資本家の政府から彈壓の名に値するほどのものを受けたやうにも見えず、寧ろ或る點に於ては政府から擁護されたかの觀のあつたことは、彼等の議員萬能主義や階級協調主義に立脚する妥協的態度が、如何に支配階級の、、するところとなつてゐるかを物語つてゐるものではないか？　支配階級にとつては、かゝる社會民主主義的指導精神の上に立つ無產黨に對して寬容の態度を示すことは、、であるよりは、寧ろ、、なのだ。即ち支配階級は一方それに對して寬容的態度を示すことによつて、必ずしも無產階級を敵とするものでないことを、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、世間的には或る程度の、、、、、、以て加へることが出來るのだ。

昨秋の府縣會選擧直後に於ける合同問題の對議に際して、舊勞働農民黨が左翼、右翼、中間派をこめての、すべての勞農政黨の無條件合同を提唱したのは正當であつたが、しかしその際我々が多少その合同欲求の勢焰に氣を呑まれた恰好で、合同後に於ける社會民主々義に對する批判の自由の保留の問題を持ち出すのを忘れたのは、明かに失敗であつた。その影響は總選擧戰の時まで續いて、舊勞働農民黨をして社會民衆黨の明白なる難點に對する暴露をさへも差し控えしめた。そしてそのために、舊勞働農民黨によつてなされた既成政黨に對する暴露が、小市民層の有權者たちを驅り立てゝ社會民衆黨への投票に走らしめた樣な現象さへ見られた。それらの有權者たちは、最早既成政

黨に投票する誘惑を失つたが、さりとて右翼の勞働農民黨に投票する氣にもなれず、同じ無産黨なら社會民衆黨位がよからうといふやうな結論に導かれたやうだ。無論かうしたことは、勞働農民黨と社會民衆黨との對立候補が並び立つた選擧區に於て起つたのであつた。

總選擧戰中に於ける大彈壓の犠牲となつた勞働農民黨は、僅々二名の當選者を出したにすぎなかつたが、しかし總得票數からいへば、すべての無産黨中の最高位に居り、且つその成績は昨秋の府縣議戰の際のそれに優つたことは、數字的に説明され得ることだ。殊に、總選擧戰直後に於て、黨は近き將來に於けるすばらしき發展の諸徴候を示しさへした。

ところへ日本共産黨檢擧事件が突如として發表され、それに續いて勞働農民黨の上に解散の强制が加へられた。それらの兩事件に對する私の意見は、本誌の五月號に載せられた私の小論に示されてあるから、今はそれを省く。とにかく、最も戰鬪的な無産黨がその成長の過程に於て一度は遭遇すべきことが豫てから期待されてゐた受難期が、今やその極限に達したのだ。しかもその全行動に於て合法的大衆黨としての、、、、、、、、なかつた勞働農民黨がかゝる結末を見たのは、つまるところ、それが總選擧戰中に於ける彈壓の試錬を經て、益々眼ざましき發展の氣勢を見せてゐたからに外ならないことが考へられる。かくて我々は、同黨の悲壯な最後のうちに、その政治的自由獲得鬪爭の、、、、を見ることが出來るのだ

だが、勞働農民黨はその形骸を失つたゞけで、その生命は絶たれてゐない。それは直ぐ續いて産まれた新黨組織準備會によつて繼承されてゐる。そして、今後假りにその新黨組織準備會までが何程執拗に破壞されるやうなことがあらうとも、いやしくも嘗て勞働農民黨を構成してゐた實在の人々の生存が奪はれない限り、それはいつまでも絶たれることなく續いて行くであらう。

六　如何にして當面の難關を克服すべきか?

以上私は無産階級戰線の當面の難關が造出されたまでの經過を敍述し來た後、漸くにして『如何にしてそれを克服すべきか?』の本題に入つたところで、私が本文のために用ひ得る時間が既に殆んど盡きた。で、私は遺憾ながらこの問題に關しては後日の再論を期することにして、茲では以下の論述を極度に壓縮しなければならぬ。前例によつて、私は箇條書きの形式を用ふるであらう。たゞこの際私が些かの慰めとしてゐることは、私の茲までの敍述の中に、これから箇條書は

れなければならないことの端緒と見られるべきことの多くが、既に伏線のやうに處々に書き留められてあることだ。だから、私のこれから先きの論旨も、それに與へられる言葉の不足のために誤解される虞れが幾分か減ぜられようかも知れぬ。

（一）支配階級の反動化の增進、——無産階級に對するその全面的攻撃の刻々の激化、——かうした現象は、第五十五議會が終了した今日、我々が現政局上の狀勢を概觀して、益々痛切に感ずることである。で、この狀勢に對應するための無産階級側の根本的方策が、從前から持ち越しのまゝになつてゐる全勞農政黨の合同を樞軸とする無産階級戰線の統一、およびそれを第二の基階としての政治的自由獲得鬪爭の一層有力なる展開への努力の上におかれなければならないことは無論である。それが關鍵となつて、そこから他の副次的諸方策が派生する。

（二）勞働者農民の緊密なる提携が如何に階級的大衆黨の政治的自由獲得鬪爭を強力に展開するための有力なる一要素であるかは、既に總選擧に際して、我々の實踐に於て或る程度までテストされたことである。從つて、それが更らに、全勞農政黨合同を樞軸とする階級戰線の統一のためにも同樣に重要性を帶ぶるものであらうこともまた自明のことであらねばならぬ。それ故に、それの急速なる促進のための各種の努力——殊に適切有効なるアジテーションなど——が如何なる方面からにもせよ、不斷に行はれることは、極めて望ましきことである。

（三）かかつて各黨大衆間の共同鬪爭欲求が全勞農政黨合同問題の提起への有効なる槓杆となつたことから見て、この傾向の、より強き、より普遍的な促進のための努力は、我々によつて非常に重要視されなければならないことである。殊に各地方に於ける各黨の支部員たちが自發的にその問題に深き關心を持つて來ることは大に望ましきことだ。この點に關して、大衆の共同鬪爭欲求の壓力の、當該問題に對して逡巡的態度を脱け切らない黨幹部への影響の如何なるものであるかは、既に或る程度に於て實驗ずみとなつてゐることだ。

（四）企てられたる全勞農政黨合同は、飽くまで鬪爭のための合同でなければならない。それは、全面的政治鬪爭——殊に政治的自由獲得鬪爭——のための合同でなくてはならない。それは決して、鬪爭を避けるための合同であつてはならない。社會民衆黨の幹部諸君が主張する右翼だけの合同などは、或る他の一部を加へられて來た地方政黨

の中次ぎを通しての合同の提案と同じく、一方に於て全勞農政黨合同に背反する部分的合同であると同時に——よしその口實はどりであるにせよ、——他方に於ては直接に鬪爭を避けるための臆病な合同だ。我々は我々の實踐に於て、對支配階級の鬪爭に於ての理由もなき、、、から出た一步退却は、敵の勢力の壓倒的一步前進を意味する者であつて、しかもそれは短き年月や生優しき努力では到底取返しのつかない結果を產むものであることを、餘りにも痛切に知つてゐる。また日勞黨の幹部諸君が新黨組織準備會との合同を忌避する口實の一つとして、さうすることによつて黨への解散の強制を招來する懼れのあるといふ言ひ分を持ち出したことは、我々から見れば、それは誤まつた杞憂の上に立つてゐるといふことの外に、「鬪爭せずに解散されないことの方が、鬪爭して解散されることよりは望ましいことだ」といふのと同意義に聞える。我々は、日勞黨の幹部諸君に、この態度の訂正を要求したい。

（五）全勞農政黨合同問題に關聯して、「何から始めるべきか？」の問題が、まづ第一に決定されなければならないことは無論だ。我々から見れば、いやしくも全勞農政黨合同問題が單なる言葉の問題に終らしめられてはならないものである限り、無產階級政治戰線の現狀の下に於ては、當初から階級的立場からの鬪爭を主張し、且つ或る程度にまれを實踐して來た日勞黨と、勞農黨の後身である新黨組織準備會との間の合同がまづ完成され、それから次にそれが主潮となつて無產階級の全陣營內に於ける一切の勢力を總體的合同の方向へ卷き込むやうに仕向けられるのが、その實現のための唯一可能な途でもあれば、また正當の順序でもある。

（六）それに關聯して思ひ出されるのは、最近擧行された全日本農民組合と日本農民組合との合同大會での一插話である。この合同大會が全勞農政黨合同の前驅として、多くの勞農大衆によつて熱心に歡迎されたは當然のことだが、たゞ一つ畫龍點睛を缺いたやうに惜しまれたことは、その記念すべき合同大會に於て、單に階級戰線統一の意圖のみが強調されたゞけで、そのための具體的方法が何一つ決定されなかつたことだ。その際、日本農民組合千葉縣聯合會の代表が、日勞黨と新黨組織準備會との間の合同を促進することを以て全勞農政黨合同の端緒とすべきであることを力說したが、不幸にしてそれは採決されなかつた、だがこの提議は實にこの合同問題の前途の進行の方向へ一石を投じたものである。そしてそれは其後の鬪爭の展開につれて屢々思ひ出されるに違ひないであらうし、また窮極に於てそれが唯一可能の

途であることを實踐に於て確實に學び取られるであらう。

（七）全勞農政黨合同問題に關聯して、日本勞働農民黨がその解散の直前に於て始めて取りあげたところの、合同の態度の基準としての、合同後に於ける社會民主々義に對する批判の自由の保留の問題は、極めて注意深き取扱を必要とするものでこそあれ、それは當然我々によつて是非とも直面されなければならない問題である。特に、或ひは總選擧戰に際し、或ひは議會開會中に當り、或ひは野田の爭議などの場合に於て、社會民主主義が大衆の面前で破綻百出の現狀を暴露した今日、我々は『鬪爭のための合同』を議するに當つては、如何なる原因からでも、この根本的な性質を帶ぶる問題を回避してはならない。

＊　＊　＊

戰鬪的無產大衆が、今異常に重大な難局に直面してゐることは、拒むべからざる事實である。しかも當來の無產階級の、、、、、、必然であることを學び取つた我々は、毫もそれがために萎縮すべき理由を見出さない。否、逆に、我々は激流に抗して意氣益々揚ることを覺える。我々は無產階級運動の上に一張一弛のリズムの起ることの免れないことを知つてゐる。だが、我々は同時にまた、今我々の眼前に現はれてゐるその一弛の狀態を單に一の現象として傍觀してゐることを許れない。我々は我々の意識的努力によつてそれを再び一張の狀態に進めることを、我々の上に課せられたる一大義務として痛感する。そのために我々は、一方に於て、、、、、、、に於て寸毫も退嬰的態度を取つてはならないと同時に、他方に於て我々が今無產階級陣營の內部に於て直面してゐるところの、鬪爭のための戰線統一の實現への努力を些かなりとも緩めてはならない。この問題に關して本篇に於て述べられた私の見解は、極度の匆忙裡に作られたものであるから、不可避的に未定稿式の粗雜極まるものであり、從つて私としては單に備忘錄的意味に於て書き留めたものにすぎないのであつて、それに對する自他の訂正を他日に待たうとしてゐるものである。（完）

藝術的觀照における內面と外面

恒藤恭

一

價値の觀照から藝術的作品と經濟財とを比較して見ると、一つの顯著なる對照が眼に觸れる。と云ふわけは、經濟財の一つ一つは其れに特有なる個性をもたぬに反して、藝術的作品の各者は其れに特有なる個性をもつ。

この事たる、藝術價値と經濟價値との本質的差違に由來する。數量的に規定され得るところの成分によつて構成されることは、經濟價値の本質に屬する。かやうな經濟價値の成分の數量性は其れの連續性に基くものであるが、これらの性質は藝術價値の成分には缺如してゐる。それ故、經濟價値を包容する一個の世界を規定するならば、その內面において諸々の經濟價値はあたかも水が一個の水盤をみたすやうに不可分の連續體を形成しつつその世界に充滿するであらう。しかるに、同樣の構想を藝術價値について試みるときは、諸々の藝術價値はあたかも無數の水滴か水盤の上に散布せるやうな狀態を呈しつつ藝術價値の世界の中に包容されるのを見るであらう。斯やうな事情か存在するために、個々の經濟財は——經濟價値の觀點から見られるときは——その間に數量的差異を示すに止まり、何らの個性的差異をもあらはすものでない。それとは反對に、個々の藝術的作品は——藝術的價値の觀點から見られるときは——それ獨自の個性的內容をそなへ、その相互の關係は數量的に規定されることをゆるさない。

藝術的作品の價値的個性からして、その個性的なる存在樣相か了解される。藝術の世界においては、各個の作品は謂はば眞空的空間によつて互ひに隔てられてゐる。その各者はそれぞれ一個の小世界を成す。各個の作品の具有する個性的價値はこの小世界の構成を支配する原理であり、斯かる原理を把持することによつてこの小世界の構造は理會される。而してその理會の方法には二つの種類がある。その一つは、この世界の構成原理を案緣として諸々の構成要素を分析した上、更に

これを原形態にまで合成する手續を、思想的に企てる方法である。その他は、この世界の構成原理が諸々の構成要素を統制して一個の不可分的全體を形成してゐるすがたを、端的に見きわめる方法である。前の方法は理論的理會作用であり、後の方法は直觀的理會作用であるが後者を特に觀照作用と呼ぶこととする。

藝術的作品の個性的存在樣相は必然にその觀照作用に對し特殊の制約を課する。すなはち藝術的作品の觀照作用は、一個の作品については必ず一個の觀照域を固持しなければならぬ。その故は、各個の作品の具有する藝術價値の個性は、その作品の表現する形の多樣なる藝術的意味要素をば、一の不可分的藝術的意味にまで綜合する爲に、それらの意味要素を支持する實在的要素は互ひに相連結して、他の一切の實在的要素との交渉から絕緣されたところの一の封鎖的領域を形成するからである。

次に、藝術的作品の觀照域は一個の觀照面しかもたない場合もあれば、二個以上の觀照面をもつ場合もあり得る。——かやうな考へ方が妥當であるかは問題であるが、或る種の藝術的作品の構造を理會する上に、かやうな考へ方は多少役立つ所があると思ふ。藝術的作品の觀照域が二個以上の觀照面をもつ場合の一つとして、それが內的觀照面と外的觀照面との二者から成る場合について、以下においてそこばくの考察を試みたい。但、ふつうに謂はゆる造形的藝術の範圍について考察することとする。

二

或る種の藝術的作品、例へば音樂的作品においては、その內容は時間の系列に從つて配置され、且つ斯かる配置の狀態の儘に觀照作用の對象たるべきであるといふ制約の下に成り立つ。觀照作用その者は必然に時間の流れの中に展開するのであるが、この種の藝術的作品においては、心理的時間の系列に沿うて成り立つ觀照作用の過程と藝術的時間の系列に沿うて配置された藝術的意味內容の形態との間におのづからなる平行關係が見出される。

しかるに他の種の藝術的作品、例へば繪畫的作品においては、その內容は空間の系列に從つて配置される。この場合にも觀照作用はやはり心理的時間の中に發展せざるを得ないが、作品の側において此れに平行した藝術的意味內容の時間的發展が與へられるわけではない。勿論、繪畫的內容とても心理的時間を通して觀照者の意識と交渉するのではあるけれど、斯くして觀照者の意識の內面に與へられる印象的內容の多樣が或る時點において統一され、それらの各者が空間的系列の裡に秩序づけられ、繪畫的に意味づけられた內容として觀照される事を必要とする次第である。藝術の世界においても時間と空間との二樣の存在形式が支配するものと考へられるならば、繪畫的作品の場合においては、時間は謂はば理想的なる一點に凝縮し、この一點において擴がる空間の中にその意味內容が配列されるとも云ふべきであらう。

もとより觀照者が或る繪畫的作品に當面するとき、その作品の觀照に交渉をもつところの身體の諸感覺機關は一齊にその活動を開始し、それぞれ自己の機能をいとなむに忙しい。視覺もはたらき、觸覺もはたらき、運動感覺もはたらくであらう。そして其れらの精神物理的活動によつて條件づけられた種々の意識作用がそれぞれ特有の印象をもたらしつゝ、體驗の流れの中に現れる。觀照的意志はすべて其れらの過程を統制しつゝ、所要の準備作業の終るを待つ。心理的事實としては斯かる作業は觀照作用の一面に他ならぬが、圖式的說明の見地から云へば斯かる作業が完了された上眞の觀照作用は開始される。そこでは綜合的統一を受けた印象の多樣は、體驗の內面における複雜なる感情的要素の動搖起伏にも拘らず相對的に不變的な構造をもつて持續する。これに對して藝術的作品の意味內容はあたかも事實に對するイデーの如き地位に立つであらう。いづれにせよ、心理的時間の經過において次々に現れ來る雜多の意識內容は常數的要素（コンスタント）の地位に置かれ、觀照作用の內容にはさまで影響を及ぼさぬものと看做され得るのであつて、其處に統一的意味內容の支持者としての繪畫が所要の心理的效果を收穫するのである。

一個の繪畫が占有する空間的廣がりの中に如何ほど多樣の形象なり色彩なり明暗なりが與へられて居やうとも、それらを素材として一個の統一的藝術內容の成立すべきことが要求される。その爲には一の繪畫的意味內容を支持する物理的平面が他の一切の空間的部分から區劃されねばならぬ。言ふ迄もなく此要求は畫面が一定の人爲的限界によつて圍まれることによつて滿足される。そして斯かる空間的限界は繪畫的意味內容の統一性の成立するための形式的制約となり、かゝる制約の下に更に繪畫的意味內容の內面的統一性の制約がはたらく。

繪畫における隔離的限界、例へば額ぶちはその周圍の空間から畫面を獨立せしめた上、其處に統一的意味の成り立ち能ふための自由の境地を提供する。理論的理會作用の見地からすれば、ある繪畫の畫面に表現されてゐる統一的內容は、無數の最も單純なる構成要素にまで分解され得る。これらの要素の各者はそれぞれ一個の單純なる意味內容を具有して居り、他の諸々の單純なる意味內容と連結することにより無限に多樣なる統一的意味內容を合成し得る可能性をもつてゐる。繪畫における隔離的限界はかやうな無限の可能性に一定の局限をあたへる機能をいとなむ。その爲に、この限界內に置かれた形象、色彩、明暗などのあらはす意味內容は、作品の個性に照應する構成法則によつて自由に支配され能ふやうな同質性を獲得する。直觀的理會作用の見地からすれば、右のやうな事情によつて、觀照作用は一個の觀照域を確保され、同一の畫面のひろがりの內部においては、何等の異質的意味內容にも妨げられることなく、安んじてその畫面の中から統一的意味を把握し得るための形式的可能性をさづけられるのである。

三

ある繪畫的作品の觀照域が同質化された意味要素によつて充されてゐる狀態をさして、その作品の觀照域は一個の同質的觀照面から形成されてゐると言ふこととする。かやうな言ひ表はしの要求される理由の一つとして、ある種の繪畫的作品の觀照域は二個以上の同質的觀照面から形成されてゐると思惟し得る事實を擧げたい。

例へば、キリストの一代記をあらはす一聯の壁畫、なにがし神社の緣起をゑがき出した繪卷物、又は左右二幅對の山水の動物などの場合について考へてみる。これらの作品は、互ひに隔離された二個又はそれ以上の數の畫面を持つてゐるが、それらの畫面のすべてを通じて一個の統一的意味が成り立つてゐる。但、玆にいはゆる意味は飽くまでも繪畫的意味たるものとして考へられねばならぬ。この種の作品においては、宗教的意味とか、文學的意味とかが副として附着せしめられてゐるが、かやうな附加的意味の統一性は、作品が作品として成り立つ爲の制約たる繪畫的意味の統一性その者から壓制されることを要する宗教的連想や文學的連想やは觀照作用の發展を心理的に促進する意義をもつけれど、觀照作用は繪畫的意味の統一性を把握することを本領とする。

この種の作品において、各個の畫面は徒らに相隔離されてゐるわけではなく、この爲にそれぞれ或る程度の獨立性を與へられてゐるが、さりとて斯やうな獨立性は一の觀照域を成立せしめる底のものでもない。すなはち個々の畫面は、一方には統一的意味によつて支配され、同質的意味要素を以て充されてゐるが、他方には相連續して同一の觀照面を形成することを拒んでゐる。斯かる事態を判然と理解するために——この場合には二個又は二個以上の畫面を通じて一個の觀照域が成立して居り、その内部においてその數だけの部分的觀照域がわかれてゐると云ふやうに想定し得るであらう。そして個々の部分的觀照域を互ひに比較するとき、異質的意味要素を見出し得ず、それらを同質的觀照面と考ふべきであることが、この種の作品の特色を成す。各個の觀照面にあたへられてゐる部分的意味は、互ひに他の部分的意味を補充し又は促進し、牽制し又は支持しつつ、一の全體的意味の成立に協力する地位に置かれてゐる。

この種の藝術的作品の觀照域の構造と類似した構造を有し、しかもその本質を異にするのは、いはゆる綜合藝術の觀照域である。前者にあつては、觀照作用はひたすらに同一種類の藝術的意味との關係において成り立つけれど、後者にあつては、觀照作用は二個以上の異種類の藝術的意味と交渉するのであり、前者にあつては、單一の觀照域があたへられるに反し、後者にあつては複數の觀照域があたへられる。だから、綜合藝術の場合には、低次の觀照作用が高次の觀照作用によつて統制され、それに照應して高次の複合的觀照域が展開されるわけであり、單一的觀照域と複合的觀照域との對照は、かの單一國家と聯邦國家との對照にも比すべきであらう。

四

ある繪畫的作品又は彫刻的作品はそれに相應した一定の距たりから觀照されねばならぬが、繪畫的作品の場合には一定の距たりにおいて一定の位置から觀照されることが望ましいとされる。言ひかへると此場合には作品の內容の統一性に對應して一個の觀照點が定まる。しかるに彫刻的作品の場合においては――普通には――藝術的內容は空間の三次元の系列に沿うて配置され、且つその配置された內容を支持する面の連續が或る容積の空間を封鎖してゐる。その爲に繪畫の場合とは違つて、一定の距たりを保ちながらも觀照者が位置を變へて彫刻的作品に向ふにつれて、別樣の意味內容が觀照される。斯やうに位置を異にするにつれて次々に展開される所の意味內容の諸相の中でその或る一つを以て問題たる作品の唯一眞正の內容たるものと考へることは到底恣意にもとづく所爲たることを免れない。彫刻的內容が特有な仕方で三次の系列に配序されてある爲に、觀照作用にとつても特有の制約が生まれざるを得ぬ。彫刻的作品の觀照において運動感覺が特に重要なる役割をつとめる事は顯著な事實ではあるけれど、單にその點のみについて見れば、繪畫の觀照においても程度の差こそあれ斯かる事實を觀取することが出來る。

彫刻における觀照作用の特性は、觀照點が作品を中心として引かれた圓周の上に連續的に成り立つことにあると思ふ。斯かる觀照線は繪畫の場合における觀照點とおなじ意義をもつのであり、從つて彫刻的作品の場合においては、藝術的意味內容の統一性は繪畫的作品の場合に比して一層複雜なる制約の下に成立する。立體的形象美が平面的形象美から區別される質の相違點はかやうな事情に胚胎して生まれる。若しも彫刻の觀照作用についても一つの觀照點のみが原理的に可能たるのであるならば、彫刻の示す形象美と繪畫の示す形象美との間に本質的差異を見出し能はぬであらう。

彫刻的作品について成り立つ觀照點の連續に應じて、作品の觀照面は次々に展開され、それから其れへと作品の形態が異なる樣相において現れる。各觀照に對應して現れるところの作品の形態の樣相が、それぞれ獨立の觀照面によつて支持されると考へねばならぬとすれば、一つの彫刻的作品の觀照域は數多くの觀照面に分れる事となるが、その各個の觀照面は繪畫的效果をあたへるに過ぎず、從つてその作品は複數の同質的觀照面をもつところの繪畫的作品と本質を一にするに至るであらう。かやうな歸結を避けるためには、觀照點の連續に照應して作品の形態が提示する數多くの樣相は一個の同質的觀照面の中にあたへられると思惟する外はない。すなはち彫刻的作品の場合には、その立體性に制約されて觀照作用が環狀の線に沿うて動的に成立する點において、繪畫的作品の場合と趣を異にするものの、觀照域が一個の同質的觀照面から形成される點においては、二者はその軌を一にすると考へざるを得ない。

觀照面の同質性は、その面によつて占められる藝術的空間の同質性として考へることが出來る。抽象的なる物理的空間とは異なつて、藝術的空間は具體的に意味づけられた空間を意味するからである。

物理的空間の見點から考へると、彫刻的作品における觀照面の占有する空間は、その內部に立體的空間を封鎖してゐる。この內部的空間を塡充する物質、たとへば大理石又は靑銅の塊りの物質として有する力のあらはれが、彫刻の觀照面において觀取されるとも考へ得るであらう。若しも斯かる關係の存在が肯定されるならば、觀照面における藝術的空間の同質性がやぶられ、二つの種類の意味要素が併存する事となりはせぬであらうか。かやうな疑問は一應は成り立つものの――彫刻的作品を構成する物質の力のあらはれが觀照面の內容を意味づけるといふ思想は、理論的理會作用に由來するものであり、觀照作用の立場においては、かやうな力のあらはれも觀照面に配序された意味要素の中に完全に投入せざるを得ない。すなはち彫刻における內部的空間は依然として藝術的空間の外に置かれるものと考ふべきであり、彫刻における觀照域は、その物理的構成は複雜であるけれど、恆に一個の同質的觀照面から成るものと言ふべきである。(彫刻の觀照域についても、一個以上の同質的觀照面から成るものが考へられるけれど、その考察をはぶく)

五

繪畫にせよ、彫刻にせよ、普通には一個又は二個以上の同質的觀照面をもつと思惟されるのであるが、それとは異なつて二個の異質的觀照面をもつ藝術的作品が存在する、云ひかへると、或る種の藝術的對象は內的觀照面と外的觀照面とを併せそなへつゝ成立すると言ひ得ると思ふ。建築物の大部分、或る種の器物の如きはその例である。

造形的藝術の作品の或る種のものは、その構造の本質上、內外二個の觀照面を有するに反し、他の種のものは斯かる二樣の觀照面をもたぬ。たとへば、繪畫は觀照者に向けられた平面の上に成立するのであつて、畫布又は畫紙の裏面に別個の觀照面があたへられ得るとは考へることが出來ない。もとより一枚の畫布又は畫紙の兩面に繪畫が畫かれてゐる場合はあり能ふけれど、この場合には、互ひに獨立せる二個の繪畫が偶然斯かる位置に成立してゐるのであり、その本質的構造には何らの變化も見られない。彫刻の場合においては、斯かる偶然的構造すらも殆んど見出され能はぬであらう。

繪畫や彫刻やが斯かる本質的構造を具有することの意義は、何らかの仕方で理論的に說明され得るであらうが、それは其れとして、あらゆる造形的藝術は斯かる本質的構造において成り立たねばならぬといふ必然的理由を見出すことは出來ない。

普通の建築物、たとへば寺院、宮殿、住宅などについては、われわれはその外觀と內觀とをわかつて考へる。また花瓶とか、文箱とかと云つたやうな器物の場合に、われわれはその外面をも內面をも觀照す

る。これらの對象も、藝術的作品として觀られ得る限り一定の隔離的限界にかこまれつつ一個の自足完了的なる小世界の趣をそなへつつ存在する。但、繪畫や彫刻などとは違つて、この種の作品にあつては、隔離的限界によつて周圍の空間から絶縁された觀照域の中に、更に別個の限界が存在し、これによつて二個の觀照面が區劃されてゐる。そして此れらの二個の觀照面は物理的空間における同一の面の兩側に沿うて反對の方角に向つて展開してゐるのであるから、同一の側における觀照面にあたへられた意味要素の統一性を把握すると同一の意味において、二つの側の觀照面にあたへられた意味要素の統一性を把握することは不可能である。云ひかへると、觀照作用は内外二面のいづれか一方に向つてはたらきかけると同樣の仕方で、それらの雙方に向つてはたらきかけることを得ない。すなはち同一の觀照域の中で觀照作用は更に内在的なる限界をあたへられて居り、この限界を超えるためには單なる直觀のみによらず、思惟のたすけを俟たざるを得ない。かくして此限界が超えられることに因り、外的觀照面における統一的意味と内的觀照面における其れとは、より高き統一性をさづけられる。斯かる考へ方に立脚して、この場合には、二個の異質的觀照面から形成される所の觀照域が存立すると言ふ次第である。

觀照作用に對して内面と外面とを呈示するところの對象の多くは、人間の實際生活の需要に應じて制作されたものであり、その特殊の構造もかやうな事情によつて條件づけられてゐる。だから、この種の對象の具有する主的意味内容は藝術的純粹性において缺ける所があることを免れない代りに、その存在において人生一般と交渉する所が深く、その意味内容は現實の生活の内容の中に複雜に織り込まれるのを常とする。從つてわれわれが人生の諸形象について内面と外面とを區別し且つその相互的交渉を問題とする場合の思惟方法は、不知不識の間にこの種の對象の觀照作用に對して影響を及ぼすと同時に、その觀照を通してあたへられる意味内容は、われわれの一般的思惟方法に對して暗默の間に影響せむとするのである。

六

一つの平面の上に一本の直線を引いただけでも、われわれがその直線のいづれの側に觀點を定めるかによつて、その觀點を含む側は内側と考へられ、反對の側は外側と考へられるであらう。しかし此場合には、むしろ此側、彼側といふ方を適當とする。直線の代りに例へば一つの圓形をゑがくならば、圓形その者の構造からして内と外とが定まる。圓周の外にひろがる無限の面に對して、その内側には十分に限界づけられた面が成り立ち、一つの自足完了的世界のすがたをあらはす。平面的圓形の代りに立體的球形を考へるならば、空間における内と外との對立は一層判然と觀取される。平面的圓形のかこむ面は繪畫における觀照面の構造を象徵し、立體的球形の示す外側の面は彫刻における觀照面の構造を象徵する。更に立體的球形の外側の面及び内側の面を

綜合するならば、建築物における觀照面の構造の象徵があたへられる。

一の平面の上に一個の繪畫が懸けられてゐる時、その繪畫をかこむ限界はその外側にある無限の空間を暗示するが、限界の内側にひろがる所の面が示す意味内容に對して交涉する所をもたぬ。またこの面の背後に奥深くひろがる無限の空間も暗示されて居るが、それは畫面における形象のもつ現行な藝術的空間において成り立たしめる上に間接の貢獻をなすに止まり、面その者の成立に對して本質的交涉をもつものではない。しかるに彫刻的作品の構成材料たる石塊、銅塊、木塊などが占有する空間は、作品の觀照面の成立と本質的に交涉するものであり、觀照面のあらはす一つ〳〵の空間的形狀は、常にそれの内側にひろがる空間の形狀を制約する。かくて彫刻的作品を觀照するときわれわれの關心はおのづと觀照面の内側の空間へみちびく何等かの間隙を求めむとするであらう。彫刻の觀照においては觀照點は連續して一の環狀を成すと思惟されるが、かくして動的に展開する意味内容を綜合的統一にまでみちびく所の意味中心は謂はゞ彫刻的作品の觀照面より内側に潛入した場所に求められねばならぬ。すなはち斯やうな内側に潛在する中心點から迸出する無數の目に見えぬ光線が觀照面に配分された個々の彫刻的内容をして意味を帶びしめるとも喩言し得られるであらう。

かやうに、彫刻的作品における觀照面は、その内側に包まれた空間の消息を暗示し、觀照的精神をして觀照面を超えた彼岸の存在に無關心たることを得ざらしめる。しかも彫刻の特性は、單にかゝる暗示を暗示たる事に留まらせつゝ、一個の同質的觀照面を固く維持することに存すると言はねばならぬ。

七

一個のトルソにおいて、われわれは物理的空間を占有する一塊の物質が藝術的空間において構成する形態の意味を觀照するのであるが同時にその形態をとほして顯現せむとする所の——物質の空間的性狀を支配し統制する無形の力の意味内容をも觀照する意圖をいだかざるを得ない。

ふつうの人體の彫刻などにおいては、これに加へて、何等か主觀的なる意識内容のあらはれの投影すらをも觀照面において凝視せむとする場合がある。たとへば、ラオコオンの群像において絶望的苦惱にも似たるものを觀照し、ある十一面觀世音の彫像の顏面のほとりに女性のやさしい同情のこゝろの動きを觀照しやうとするが如きである。かやうな關心の方向においては、空間における外面と内面との對立をよすがとして、別個の意味において外面的なるものと内面的なるものの對立の意味を觀照せむとする欲求があらはれる。しかも斯かる欲求は日常の生活において絶えずわれわれの意識にあらはれ來る欲求でもある。

他人の自我の意識內容を認識することは如何にして可能なるであらうか―　かやうに問題が理論的に如何やうに說明されるにもせよ、日常の生活においてわれわれは他人の肉體の動的及び靜的形態をとほして他人の體驗する意識內容を認識しつゝ生きてゐる。もとより他人の自我の中に展開される意識の世界は到底踰えることの出來ない限界によつてわれわれ自身の意識の世界から區劃されて居り、直接に知覺され能ふものは他人の身體の形相のみである。そこで、この關係において自他の個我的意識の世界は內的なる世界として、自他の身體を包容する所の外的なる世界に對立せしめられる。しかもわれわれは一方においては理論的に斯かる意味における內的世界が空間の範疇によつて規定され得ないものであることを知りつゝも、他方においては感情的に又は因襲的に、自他の肉體の內面に斯かる內的世界が展開するものと考へがちである。恐らくわれわれは思ひの外に力强くかやうな考へ方によつて支配されつゝ生活してゐる。

われわれはまた理論的立場においては如何なる見解を把持してゐるにもせよ、個我の意識作用はある實體的なるもの、言ひかへると一つの魂によつて支へられてゐるといふ素朴的信念から到底脫却し能はぬ感情的、因襲的惰性をもつてゐる。そこで日常生活における他人との接觸において、われわれは他人の身體の內部、ことに頭腦の內部において、何等か或る實體的なるものが活動しつゝあるといふ意識を絕えず心の底の何處かに所有してゐる。そして斯やうな意識は、如何なる性質のものであるにもせよ立體的形態を有する對象を觀照する場合に、いつかしら觀照作用に影響を及ぼさねばやまぬ。若しも美的對象の觀照について感情移入說の說明が役立ち能ふとするならば、右のやうな意識が感情移入作用に對し甚だ重要な意義をもつべきことが推知されるであらう。

かやうに、他人と接觸するとき、われわれは主觀的精神のありかとして考へられた所の他人の身體の內面への觀照的關心を潛在的に意識するのであり、更に生物たると否とを問はず、諸々の立體的對象に向つても此れに類似した觀照的關心を以て當面せむとする傾向をもつてゐる。それは、或る對象の示す外的對象面の限界を超えて、その內側に包まれた空間の消息を直觀せむとする所の欲求であり、斯かる欲求の根柢には、その對象の本質、核心又は實體を成すとも云ふべき所のものを把持せむと希求する心持が、隱微の裡にはたらいてゐると考へられるであらう。

八

ひとつの陶製の壺とか、靑銅の花瓶とかを見ても、それがすぐれた作品であるならば、その外面にも內面にもその器物の固有する精神が充實し橫溢してゐることが感ぜられる。例へば、その花瓶の腰部に高まる金屬の面には何らか力强い精神が張り切つてゐるとも觀られ、その壺の口から底の方へ、なだれ落ちる線に沿うて幽遠なたましいのさゝ

やきを聽く思ひをするでもあらう。斯かる意味における器物の精神は內的及び外的觀照面の双方を通じて其處に成り立つ意味內容を統制する所のものであるけれど、しかもその器物が物理的空間の無限のひろがりの中に自己特有の空間を內にかこみつゝ存在することの故に、われわれの直觀的意識はその空間に不思議の意味內容をながめ、われわれの思惟はやゝともすれば其處にかの器物的精神のありかを求めやうとする。

この種の器物において、その內的觀照面と外的觀照面とをわかつ所の限界の構成、及びその限界から各個の面へひろがつて行く所の部分の構成について、特に藝術的技巧が重んぜられる事實も、右のやうな觀方からするならば、いろ〱の暗示を提出するであらう。ひとつの硯を手に取つて、その內面を覗きこむ瞬間に、その中にひろがる世界の深さは、往々にして料り知ることが出來ない。華麗の圖様にかざられた梨子地の箱の蓋をひらいたときに、重厚と威嚴との氣品にみちた境地を見出すことも、しづかな滿足のこゝろである。

この種の器物の藝術的價値においてすぐれたものには、實際的用途を離脫せしめられてゐる場合が多いが、何らか液體又は固體を內部に容れるために役立てられるといふ元來の用途によつて、當初その存在意義を有したものであるとの事情は、その外面的形態において永久に表明されてゐる。そして其物の元來の用途は或る意味において其物の本質を成すともいふべく、內的觀照面は斯かる本質を直接に包容する面としての象徵的意義を保持するとも見られる。

內的觀照面がかやうに目的又は價値の見點との關聯をもつことは、やがて內面的なるものと外面的なるものとの對照についての別個の旨趣に想ひ到らしめる。

九

個々の實在的對象に對して客觀的意味を賦與する根據たる價値又は理想は、對象を構成する感性的實在要素の中に見出されるものではない。そこで、直接に知覺され得ぬ所のもの、直接の知覺の及び得る限界の彼方に在る所のものを內面的世界に屬するものとして觀やうとする吾々の思惟傾向は、價値又は理想をも內面的なるものとして觀、之を外面的なる實在的事物に對立せしめる。そしてかやうな考へ方は主觀的意識及び實體としての精神を內面的なるものとして觀やうとする思想態度と結合されがちである。

かやうな仕方で、異なる意味において內面的なるものを相互に結合し又は同一視し、かつ之を物理的空間における外面的なるものに對照せしめる思惟傾向からして、物理的空間の意味においての內面に特殊の超越的意味をみとめやうとする傾向が生まれる。神社、寺院、廟所の如き宗教的建築物、宮殿、議院、裁判所の如き政治的建築物などにおいて、その著しい例が見られる。

イタリア、フランスなどのやうなカトリック教國において到る處に聳

え立つ、蔵古りたカテドラルの壯麗な建物は、宗教的對象における內的及び外的觀照面の具有する藝術的機能を最も有効に發揮せしめることにより、その建物の宗教的、實踐的意義をも十分に高める企圖に成功せる例を示す。元來、建築物にあつては、構成材料の物理的諸性狀を支配する力學的法則を媒介として、建築物の內面と外面とが相互に他の構造を制約する關係に基いて成立するところの——建築物の內面的意味內容と外面的意味內容との有機的結合こそは、純粹なる觀照作用をみちびく手引たるであらう。ロマネスク風寺院、ゴシック風寺院などの示す建築美は、かやうな意味における有機的結合を巧みに表現しながら、それ以上に複雜にして微妙なる內的觀照面と外的觀照面との對照及び融合を提示するものに他ならぬ。

たとへば、中世的形態を多分に保存したまゝに群集せる周圍の民屋を脈して空高くそびえ立つゴシック風の寺院の外觀は、價値に乏しい風俗の生活の世界から意味たかき信仰の生活の世界を隔離するための限界として役立つにふさはしい威嚴にみちてゐる。前面の廣場に立ちつくして幾ばくかの時をその目ざましい外觀の鑑賞につひやした後、人の手垢に黑光りのする扉を押して一歩を內部に踏み入れるならば、明るい外光に慣れた眼はしばらくそのはたらきを止め、急激な對境の變化のために意識は中心の一點に凝縮しやうとするであらう。やがてうす暗がりに漂ふ光明に照らし出されて、穹窿形の天井や、それを支へる圓柱の數列などをはじめ、諸々の形象と色彩とが浮き上り、靜寂の美にみちた世界が深く且つ高く展開し來るであらう。直觀はしづかに併しいそがしく作業をいとなみ始める。ほのかに明るくひらかれた空間の中に平行し、交錯し、旋回し、重疊するところの無數の直線及び曲線、それらによつて形成される正方形や、矩形や圓形や、卵形や、圓錐や、角錐やの數知れぬ形象の上に、直觀の作業はきづかれて行く。それと共に建築的意味の統一性がはつきりと意識の前に現れ、この統一性に從へられた一切の形象を支へるところの永遠に安固なるもののうちに、感情はすべての屈託をあづけて憩はうとする。かなたの觀照面においては左したる意味をもあらはさなかつた窓のロザリオが、こなたの觀照面では此世ならぬ美しさに輝いて、內面的なるものの榮光を示す。しかし足もとに默々とひろがる有數の平面から湧き上る意味內容が力強くわれわれの意識に迫つて來る事實を、人は氣づかないで佇んでゐるであらう。やがて一歩々々を心して踏み出しながら側廊をあゆんで行くと——內陣につながれた主觀的意識の意味における內面性、斯かる意識の支持者としての靈魂の意味における內面性、靈魂に對して永遠の救濟をさづける所のものから由來する聖的權威の意味における內面性——さうした內面性の諸相を渾然として融合し象徵する所の觀照面が上下四方に肅然としてひろがる中に、こなたの石柱のかげ、かなたの聖像の下に跪いて默禱をさゝげる人たちの影を見出すであらう。やがては煩しく物さわがしい世俗の生活に充ち滿つる一切の外面的なものから完全に隔離されたといふ意識、限

りなく奥深い世界に通ずる所の空間の内面に完全に包容しつくされたといふ意識、さもなくば其れに類似した意識が自らのうちにも湧き出るのを覺えるであらう。

十

繪畫や彫刻やにおいては、われわれは何處までも或る距離をへだてて觀照面に對立すべき位置におかれ、觀照面に客觀化された精神内容は、何となくわれわれの精神に對してよそよそしく對立するのであるが、建築物の内面にあつては、われわれは觀照面のかこむ空間の中に身を置くところから、われわれは觀照面に客觀化された精神その者の内部に呼吸してゐるやうな感じをいだく。だから其處に實現されてゐる意味内容が嚴肅で重苦しいものであるにもせよ、快活平明なものであるにもせよ、また和かく安慰なものであるにもせよ、それから受ける印象はわれわれの生活感情にひた〳〵と直迫せむとする傾向をもつ。

古き思想家の説に聽かずとも、ゴシック風寺院の建築の内觀はおのづと自然の森林の景趣へと連想をいざなふものであるが、さまざまの種類の自然的對象が概して繪畫や彫刻などと共通の構造においてわれわれの觀照的關心に對立する中に、森林は内外二様の觀照面をそなへてわれわれの心を惹きつける。山と山とによつて圍まれた溪谷にわけ入つて、自然のふところに抱かれやうとねがふわれわれの欲求を、森林こそは十分にみたして與れる。森林の内面にあつては、自然はもはやわれわれと對立することなく、沈靜な自然の精神の中にわれわれの生活が完全に包容しつくされるのであるから

外界への狹い通路をもつ花瓶とか水差とかのやうな器物において、觀照的精神はその通路から器物の内面にひろがるところの小さく、しかも深い世界に滑り入ることにひそかな愉悦を意識する。鉢物とか竹籠とか云つたやうな、半ば封鎖されただけの内的觀照面をもつ器物は、開け放された側面をもつ日本古代の建築物の或る種のものと類似した構造を示す。器物の包容する空間の大きさは現實にわれわれの身體をいれるに足らぬけれど、それにあつては想像が缺けた條件を補つて與れ、いはばわれわれの魂が自由にその内面に己れを置き、器物を形成してゐる篤實な堅固な精神の中にいだかれることをよろこぶ。

觀照作用にとつての内的觀照面がそのまゝわれわれの生活のしたしい環境を成すところの住宅の場合には、生活感情と觀照意識との錯綜は著しく複雜となつてゐるが、それらの事柄を吟味するのはあまりに煩しい。たゞ一つの場合をあげると、わが國の田舍の農家の或る種の建築ほど内面と外面との意味の有機的結合が見事に成就され、かつ二つの觀照面の對象の象徴的機能が巧みに發揮されてゐる類例はさまで多くないであらう。

個人的住宅の場合には、一般的社會生活の外面性と家庭生活の内面性とを對照せしめるわれわれの生活意識が、建築的意味の觀照作用に影響を加へる。家庭の外面は一個の觀照域を限界する機能をもつと同

時に、社會から家庭を隔離し、社會的生活面に向つて一個の家族的生活面の獨立性を表現する機能をいとなむ。其處では、一つひとつ現實の生活意味を具有する形象が內的觀照面をみたして居り、その面に客觀化された精神は、觀照者の生活意識と觀照意識とをほとんど合一に近い狀態にみちびからとする。また、われわれが街上をあゆむとき、各個の家屋の展開する外的觀照面は、一方にはその內部に成り立つ生活域の內容への興味をよび起すと同時に、他方には公衆から隔離された家族生活の外面のあらはす不可透性を意識せしめむとする。劇場、學校、公會堂の建築において、それとは異なつた方向に建築の內面と外面との結合及び通路の意味のはたらくことも直ちに連想される。この種の建築において、數多くの觀照主體が一つの共通の觀照面によつて包容されるといふ關係の經驗が、集團的意識の生長に對し暗默の間に絕えず深い影響を及ぼしつゝあることも明白である。

十一

純粹なる藝術的作品においては、隔離的限界はその內側の世界を完全に封鎖し、限界の內部から外部へみちびくところの如何なる通路も求められない。これを主觀の側について見れば、觀照作用は純粹なる直觀の立場において成り立つのであり、觀照の世界にひたる限り、觀照者は自己を現實の生活へと結びつける一切の交渉から絕緣するのである。しかるに、實際的用途にも併せ役立つところの藝術的作品にあつては、隔離的限界は大きかれ小さかれ何程かの裂け目を殘して居りそこに限界の內外をむすびつける通路があたへられる。そのために、作品の形成する世界の自足完了性はさほど強固でなく、その外部にひろがる空間に成り立つ世界との交渉が何程か維持されてゐる。これを主觀の側について言へば、現實の生活に根ざすさまざまの思念が觀照意識に容喙し協力する事となり、作品の表現する藝術的意味內容の中に暗示的、象徵的、連想的等の思想成分が混化する結果を生む。

一つの觀照域に內外二樣の觀照面の並び存在するやうな藝術的作品の構造は、物理的空間の性質、作品の構成物質の性質及び人間の官能時に視覺的官能の性狀に基いて成立するものであるが、內的觀照面と外的觀照面との對立の意義は、物理的諸現象及び心理的諸現象の方面からして理會されるだけでは十分でなく、この種の作品の存在を生み出したところの實際生活の要求についてかへりみ、われわれの現實の生活を常に支配してゐるところの——種々なる意味において內面的なるものと外面的なるものとを區別し、互ひに對立せしめる思惟方法の見地からしても說明を企てることを必要とするであらう。

斯やうな考へ方を用ひるときは、この種の作品においては、隔離的限界に存する何程かの間隙をとほして、その內側の世界に外部の人生から生まれた若干の意味要素が流れ込み、純藝術的意味要素と混合して觀照域に留まるために、內的觀照面と外的觀照面との對照が一層顯著なる色彩を帶びるに至ると言ひ得られるであらう。

われわれは人間の肉體美及び精神美についてかんがへ、個々の人間において、或る場合には二者がよく照應し、或る場合には然らざることを經驗して、ひとつの不思議を觀る。いづれにせよ、人間における精神的性狀と肉體的性狀とは、異なる性質の樣相を示すものであり、これらの二樣の性狀のさまざまの結合の仕方は、獨自の對象として視られた個人の個性的内容を定めるための重要なる内素を成す。建築物や器物やにおける内面と外面との對照は、人間における内面と外面との對照に何程か平行した意義を有するものであり、藝術的内容にみたされた獨自の世界の個性を形成する上に、特有の機有をいとなむのである。

科學の進歩より見たる人類社會の將來

石川千代松

人間の社會が將來如何に進むだらうかと云ふ事は、それ迄人間が如何に進んで來たかを見て始めて我等の見當が付くものだと私は思ふ。併し人間の社會も人間が元であつて見ると、人間たるものが如何にして今日迄になつたかと云ふ事が先決問題である。

人間が出來たのに關して非常な進歩に誰れも知る通り進化論である。西洋でも東洋でも何れの人種でも野蠻の時代には、天變地異と云ふて、雨、風、雷、洪浪、地震の様なものが何んであるかが分らなかつた。であるからそれ等のものは皆何にかそれを生ずるものがあるだらうと思つて居た。例へば地震は日本の下に大きな鯰が居て夫れが動くと起るのであると云ふた。處が夫れが始終起らないのは、鹿島明神が其頭を押さへ居るからだ。併し幾等明神様でも稀には居眠り位はするので、其押へて居る手が弛むと鯰が暴れ出す、すると地震が起るのだと考へたものである。雷も昔時の人は神様が居て太鼓を叩くのだと云ひ、電光は雷神の火だと思つて居た。

斯様にして何んでも解らない事があると、夫れは何にか人間より力の強いものが居て夫れ等が人間に害を施したり又は悪い事をするのである。とさう考へたのである。

夫れで神様も出來たのだし、又悪魔も出來たのである。で我々人間が出來た事に就ても夫れが中々分らなかつたので、昔時の人又は今日でも野蠻人は色々に考へたもので、第一人間が死ぬのが解らないから、死ぬのは何處へか行くのだと思つた。又人間の生れる事も夫れは幾等野蠻人でも始終見て居るから、女の腹から生れて來る位の事は知つて居たが、如何にして子供が女の腹に出來るかは、それは解らなかつた。

夫れ計でなく始めに此地上に如何にして人間が出來たか、それも野蠻人には分らなかつた。であるから何れの國でも人間は自然以外の力で出來たものだと思はれた。ヤソ教でもアダムは神様が造つたものだとされて居るし、イーブはアダムの肋骨を一本取つて夫れで神が造つたのであるとされて居る。今日斯んな馬鹿の事を信ずるものは狂人でなければないが、モセスがあの本を書いた後には本統にさう思つて居

たのだらう。

併し面白い事には世の中にサルの樣に人間に能く似たものがあつて夫れが、又人間と同じ樣な事もするのである。であるから此サルは實に面白いもので、野蠻人には之れが動物であるとは思へないのである。殊に人間に近いゴルリラやチンパンヂイの樣なサルの居る土地の野蠻人は彼れ等は矢張我々の仲間の人間であると思つて居る。

が少し開けた人間と云ふものは中々我儘勝手なもので、自分丈けが偉いものであると思はれ度いので、人間丈けが神樣に造られたもので他のものは皆生いて出たものであると思つて居た

斯樣に人間は他の動物とは違つて居ると思つて居た處今から丁度百年前にフホン・ベヤが人間の卵を見付けたので人間も他の動物と同じ樣に卵から發生するものである事が判つたのである。尤も夫れより遙か前にダーウヰンの祖父のエラスマスとゲーテとラマークとが、人間は下等な動物から進化して出來たものであると云ふ說を立てたが當時は事實が、まだ充分でなかつた爲め此の說もキウビエの爲めに打ち破られたのである。夫れからベヤは斯樣に人間の卵を發見したり動物の發生を研究して、脊椎動物の發生の初期が相互非常に能く似て居るから、札が付けてなかつた胚兒が魚だか、兩生類だか、爬蟲類だか又は獸類だか判らなくなつた事もあつた。であるに關はらず、ベヤは脊椎動物の進化に氣付かない計りでなく、ダーウヰンの進化論が出た時にも贊意を表さなかつた。處がそれ等の事柄が一八五九年に現はれたダーウヰンの種原論で全然變へられたのである。

今迄疑ひか疑はれて居た、或は歐洲の學界から全然忘れられて居たラマークの議論もダーウヰンの種原論に依つて完全に證明せられ、地上の生物界が最初簡單なものであつたのが、變遷進化に依つて今日の有樣になつた事がダーウヰンに依つて明白になつた。ダーウヰンは種原論には故意に人間の事は書かなかつたが、人間もさうである事は種原論を讀めば、普通の腦の所有者であれば誰れにも、明白に判るのである。であるから、當時少壯であつたハツクスレー、ヘツケル其他澤山の學者達は直ぐに此問題に着眼し、ハツクスレーの「自然に於ける人類の位置」だの、ヘツケルの「形態學一般」等が出て、人間も他動物と同じく、下等のものから進化したもので、我々に一番近い親戚はサルであらうと論じ、ヘツケルの如きは、人猿の中間物は、無言のピテカントロープスと云ふものであつたらうと豫想したのである。處が此のピテカントロープスの實物が、ヘツケルが豫想してから三十年後の一八九四年に、ジヤワに於て發見せられたのは甚だ面白い事ではあるまいか。

夫れに前後して一方には澤山の人間の發見があつたし、他方には又ゴルリラ、チンパンヂイやオラングウータンの樣な我々に最も近いサル類の心理狀態から、構造、血精に至る迄の研究が盛んに行はれて來此三類のサルは類人猿として我々に最も近い血族のものであるが、人間とは違つたものであると思つて居た。處が最近の研究から見ると血

精ではチンパンヂイと人間とはチンパンヂイとオラングウータンより遙かに近い事が解つた。此事實は實に驚くべき事で、一八六三年にハツクスレーが構造の上から高等のサル（即ち今の類人猿）と下等のサルとの相違は高等のサルと人間との相違よりも大きいと云ふたのでも當時の人を驚かせたが、血精の研究が、同じ類人猿の内でもチンパンヂイは人間と一緒にして、オラングウータン丈けを類人猿とした方が穩當であると結論する事が出來て來たのである。

何れにしてもチンパンヂイと人間とは親子兄弟でなくとも從兄弟の關係はある事がそれで證明されたものである。では何時頃から人間とサルとが分れたか。我々が有する證據物件が此點ではまだ甚だ少なく又、夫れ等が不完全であるから、今日でもまだ確實な事は云へないが、第三紀の終りの頃で、あのピテカントロープスやハイデルベルヒ人が居た頃であるだらうと多くの學者は考へて居る。

此人間が始めて出た頃は今から何年位前であらうと問ふと、夫れは專門の學者間でも其算出方が大層違つて居るが、オスバーンは第一氷河期から今日迄の處が大概五二、五〇〇〇年位であるだらうと云ふて居る。五十二萬年と云ふと、神武天皇から見ても實に長い年月で、夫れより前にピテカントロープスが居たものとすると、人間がサルから分れたのは實に久しい前の事である。

何んにせよ、人間はサルの先祖から出て來たもので、人間が全生物界から離れて別に獨立して居たものでないと云ふ事は我々には莫大の教訓を與へるものである。此教訓と云ふのは我々人間も生きたものとしては總て他の生物に働く自然の勢力が我々人間にも同樣に働くと云ふ事である。即ち全生物界を支配する總ての自然の勢力——遺傳と變異の如きもの——は我々人間をも支配して居るのであると云ふ事である。

であると、我々人間が今日迄發達して來た經路が、總て他の動物——其内でも殊に脊椎動物にあつたのと同樣に今後發達して行くであらうと思はしめるのである。

では脊椎動物は今日迄如何に發達して來たか。誰れも知る樣に脊椎動物又はそれになる前に居たものは、今日のナメクヂ魚の樣なものであつたらうが、夫れが發達して八ッ目鰻の樣なものが出來た。處が此八ッ目ウナギはまだ手足はない。手足が出來たのは魚から上のもので、夫れが兩生類になると、其骨が全體に定まつて來て、手でも足でも始めに一本の骨があつて、其先き二本の骨が關接して、夫れから次ぎに九個の手首と足首の骨が出來て、其先きが手足の平の骨と指の骨である。此手足の骨が兩生類の内でも或は退化をしたりし、爬蟲類でも蛇の樣に全く無くなるものもあるし、海龜の樣に泳ぐのに好都合の形になつたものもあり、鳥になると夫れが一層變り前肢は翼となり、獸類でも前後の兩肢が又色々に變り、鯨の樣に前肢が魚の鰭の形になつたりするものがあり、又人間の樣に手足が丸で變つたものもあるが、何れにしても同じ骨が變つたので、夫れと丸で別のものが出來たので

ない。

それは脊椎動物の他の部分を見ても同じ事であるし、又他の動物でもさうである。節肢動物でも軟體動物でも、又は棘皮動物でも同じ事で、今迄出來た動物の大きな仲間を見ると、夫れ〳〵極つた形態があつて、夫れが色々に變るけれ共、其變化を見るに一方に發達すれば他方には退化が來るのである。例へばサルと人間とを見ても之れは能く判る。サルは手足を殆んど同様に使ふが、其手は我々の手の様に巧みに使へない。

總て動物の變遷進化は斯様なもので單細胞生物のアメーバの様なものは一つの細胞で何にもかもするのである。運動も求食も生殖も何れも皆一つの細胞でする。であるから、其仕事は何れも皆完全には行かない。纖毛蟲になると、同じ單一の細胞でも纖毛が出來て、夫れで移動をするし、又眼點と云ふ様なものが出來て、夫れで感覺の仕事をする。夫れから纖毛蟲になると核が二つに分れて生活の時の仕事をするものと、生殖の仕事をするものとが違ふ。夫れが段々進んで多細胞動物になると、細胞の間に生活と生殖との仕事が違つて來て、生活の細胞には生殖は出來ない様になつた。夫れから生活の細胞は亦色々に分れて、或は運動計りする細胞になつたり、又は感覺丈けの細胞になつたり、其外色々の組織細胞となるのである。斯様になると運動をのみ司どる筋肉細胞は運動は能く出來るが、感ずる事は出來ない、感覺細胞は之れに反し、感覺の仕事は能く出來るが運動は出來ない。之れが分業で、組織計りでなく、器官でも之れと同じである。ワイスマン先生が動物の退化を論ぜられた時『退化も亦進化の一部』である。と云はれた様に若し動物界に退化がなかつたらば、進化は到底出來ない譯である。之れが又分業の結果で、生物の生存上一方に進化が起れば夫れと關聯して退化の起る事は自然の結果で不死の單細胞生物が高等な多細胞生物となると同時に死が起つたので、單細胞の時一つの細胞で行はれて居た生活と生殖とが分れたから生活細胞が死ぬ様になつたのである

斯様に分業するのは、それが即ち進化で、之れは單細胞生物でも、多細胞から成る個體（ペルソン）でも、ペルソンが集つた社會でも同一で、アリ、蜂、又は白アリの社會に見る各個體の様に分化したものも全く同様で、女王と王とは生殖の事のみを司どり、職蟲は總て他の仕事をする代りに生殖は全く致さない様になつたのである。之れ等所謂社會的の昆蟲は全く、多細胞生物體と同じ様に出來たもので、王と女王とはペルソンの生殖細胞に比ぶべきもので、職蟲が生活細胞である。丁度異細胞動物の生活細胞が生殖する力を失つたのと同様、之れ等職蟲は生殖力を失なつたものである。

人間の社會は生活と生殖の方面に於ては社會的昆蟲程には進んで居ないが、職業上の分業は之れ以上に進んで居る事は疑ひのない事である。又人間の社會で今日の所謂職業婦人でもアリやハチの職蟲の様に生殖作用を失はない事は、又我々人間の社會をして之れ等昆蟲に比へ

て、進化に一層好都合であると思はれる。何故と云へばアリやハチの社會では生殖の仕事は王と女王丈けであるから應化も王と女王に限られるのである。處が人間の社會では色々の職業の人が別々に應化する事が出來る。であるから澤山の應化が同時に行はれる事になる。

併し又一方から考へると、今迄出來た動物が、今日如何なる有様であるかと問ふと、脊椎動物丈けで見ても其仲間の內魚類は太古紀の中頃既に全盛時代が過ぎ、兩生類も其終りのペルム期が全盛時代で、爬蟲類は中世紀に一番能く發達し、獸類も今日は既に其發達は過ぎたのである。第三紀の終り頃に居た、巨大の獸類は今日では鯨と僅かな象の他には最早や見る事は出來ない。夫れならば人間は如何であるかと云ふと、人間は第三紀の終り又は其後第一氷河期の時分あのピテカントロープスの様な形ちで出て來たものであるだらうが、今から二萬年位前のクローマニオン人の頃體格上では最早や今日の有様と餘り違はない處迄發達し、腦の大きさ抔も今の歐米人と殆んど同じ位になつたのである。

して見ると人間の體格上の進化は、或は今日が最上でありはせまいか。吾人の腦の發達も今日のものより以上進歩するとも思へない。知惠に於ても三四千年も前のギリシヤ人だの、釋迦、孔子抔の時分の人より偉くなつたとは思はれない。又今日迄地上にある色々の動物から考へて見ても、我々人間が今日迄有つて居る手足其他の外に新しい器官が出來やうとも思はれない。我々の頭に鬼の様な角が生へるとも思はれないし、又ヤソ教で教へる様な翼の生へたエンジエルが出來やうとも思はれない。夫れは前にも云ふた様に何れの動物も其持つて生れて來た力で久しい間適應して來たものであるから、「今日生存して居る生物の形態や構造は餘分に退化する事も亦進化する事も出來ないであらう。」我々の身體が「若しそれ以上退化すれば種の滅亡を來たすし、又餘分に進化すればそれを支持する力が足りなくなる」（ワイスマン）何故と云へば生物の形態も構造も亦生理的の仕事も生物の生存に關係して出來たものであるからである。

それ等の事から考へて見ると、吾人人類が體格の上に於て今日より以上進化すると思はれないのである。であるならば、何故にクローマニオン人の文化が今日の様でなかつたらうか。

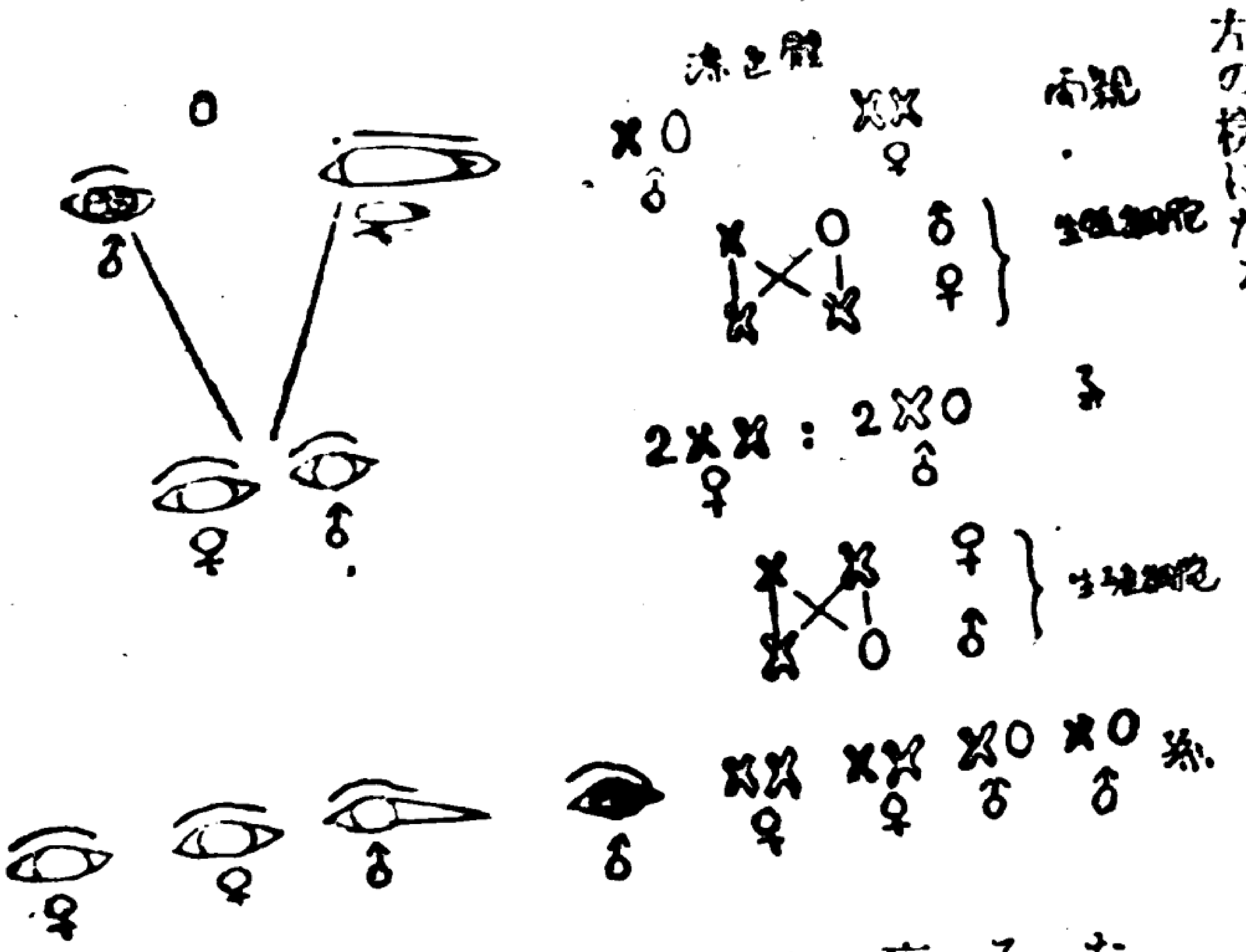
それが人間が動物と違ふ所で、夫れには人間の言語が非常な關係を有つて居る。人間が他動物殊にチンパンヂイの様なもの以上に利口になつたのが直立と言語である事は明かな事で、直立したから手足を遊つて使用し、手で色々の器具を造る事も出來て來たのである。併しそれ以上に我々をしてサル以上に發達せしめたのは夫れは言語である。知慧がこの點に於て、オラングウータンやチンパンヂイに劣る濠洲の野蠻狐が彼れ等より發達して居るのは何んに依るかと云ふと、夫れは全く言語である。動物の內にも群棲するものは澤山あるが、彼れ等の間には極めて簡單な氣持ち位を現はす外、相互ひに見聞した事を傳達する事が出來ない。それが人類をして一人一人は三千年も前のもの

に比べて夫れ程向上して居ないとしても群棲の上に大層な進化をさせた譯である。又群を成すものの個々の人間は向上せないでも、全群の平均が向上する事は出來るのである。前に述べた變異と遺傳とは動物にも人間にも働くもので、此の様な生物體全體に働く法則には彼我に於て少しも變りはないが、我々は少なくとも優生學と教育とに依り平均のものを向上させる事は出來るであらう。

尤も優生學を以てしても人間では動植物で行ふ様に簡單に行かない事は誰れも知る。我々が生物の改良を試みるのには其改良せんとする形質單位が如何なるものであるかを知るのが第一である。處が人間の生殖質に入る單位は非常に複雜したもので、夫れ等が純粹である事は誠に稀である。であるから、例へば私に二人の男女があつて、此二人が結婚したならば、其間に出來る子供は如何であるだらうと問はれた時其可否を定める事は實に困難である。彼のベートーベンの父は泥醉者で母は料理人の娘で肺病やみであつたから、若し今日の優生學者に其間に出來た子供は如何であるだらうと問ふたらば、夫れは駄目だと云ふだらう、それと同じ様にシュウベルトの父は百姓で母は下女だつたし、ファラデーの父は貧乏で病身の鍛冶屋で母は無學の勞働者であつた。それ等の外シエーキスピアやリンカーンにしてもパスツールにしても其父母は甚だ有望でなかつたのである。

斯様な事を考へると人間では其父母或は先祖を見て直ぐに子孫の善惡を定める事は、容易に出來る事でない。併れ共人間に現はれて來る單位で、夫れが如何に遺傳するかが間接に知れるものがある。例へば能く例に出る色盲の如きものは其一つで、其單位は性の單位と結び付いて居る事が判つた。人間の性が決定されるのには、生殖細胞に特別な染色體があつて、之れが二つ入ると女となり、一つ入ると男となるのである。少し委しくそれを云ふて見ると、人間の細胞には男では四十七の染色體があつて、女には夫れが四十八ある。其内普通の遺傳單位の染色體は男女共に四十六づつであつて、女は外に二つの性決定染色體があり、男には夫れが一つある。處が男女の生殖細胞にも無論同じ數の染色體があるが、生殖細胞が成熟して精卵が合一する前になると、卵の方では四十八の染色體が半數に減じて何れの卵にも二十四の染色體がある様になる。處が此二十四の内一つは性決定の染色體である。精虫の方では四十七の染色體を有する細胞が分れる時、一つの細胞には二十三の染色體が入り、他の一つには二十四が入る事になる。して此二十四の内一つは性決定の染色體である。であるから男性の生殖器の内に出來る精虫で其半數は性決定染色體が一つあつて、他の半數のものには夫れがない。此性決定染色體をXとすると、二十四の染色體の卵と二十三の精虫と、一緒になると此卵には四十七の染色體が入る事になり、其四十六が普通の染色體で、一つがX即ち性の染色體で此卵が發生すると男となる。處が二十四の卵を二十四の精虫が受精すると、四十八即ち四十六の普通染色體と二個のXとで、夫れから出來る個體は女となるのである。

右は女と男が此X染色體に依つて出來る事を說明したのだが、此X染色體の一つに色盲の單位が喰付いて居るのである。處が茲に又それを說明する前に書いて置く必要のある事は、此二つのX染色體（普通のXと色盲のXと）の內普通のXは色盲のXに對して優性である事である。であるから若し一個體の中に此二つのXが一緒に入ると夫れから出來た女は色盲でないのである。男の體にはXは一つしか入らないから其のXが色盲のものであるならば、それに打ち勝つXがないから、此男は色盲である。斯樣であるから、それを圖式で示して見ると左の樣になる。



此圖では左は個體に現はれた處で、♂は男で♀は女である。で此圖では色盲の父と色盲でない母とから出來た子供に男が半數と女が半數出來たとするとドチらも色盲でない。併しそれは女の子の方には色盲の單位は入つて居るが、其體では普通のXに打ち勝たれて夫れが現はれて來ないのである。併し斯樣な色盲携帶の女と普通の男との間に出來た子供には又色盲の男が一人と色盲でない男女が一人づつと色盲携帶の女が一人出來る譯である。之れ等を染色體で說明したのは同圖の右にある。

之れは一つの例に過ぎないが、此外斯樣な例はまだ澤山あつて、其遺傳する有樣が此樣に解つた場合も少なくない。固より人體に入つて居る殆んど無數の遺傳單位を急に調べる事は六つヶ敷いし、又それが、完全に判る事は到底出來ないかも知れないが、世界中で共力して事實を集めて行けば積極的に好良のものを造り出す事は困難かも知れないが、消極的に不良なものを除去する事は出來るであらう。今例に出した色盲の場合では若し只今迄の事柄が正しければ色盲の系統の家でも女子の方では一寸では判らないが男子は色盲でなければ、夫れから後に女子から色盲のXが入つて來ない限り、其子孫に色盲は出て來ない譯である。斯樣にして色々の遺傳質を調べるには無論長い年月を要し又斯樣な調査は成るたけ廣く行はなければ結果を得る事は中々困難であるが、斯樣にして色々の不良分子を段々に除去し去る事は不可能ではない。無論人間で夫れが困難な事は澤山の遺傳單位が減數分割其他に依つて非常に複雜した結合や分離が起り得るから、惡い分子を除去すると云ふ目的でも決して輕卒に行ふことの出來ないのは、前に云ふたベートーベンの場合でも明かであるし、シエーキスピアの父が屠殺者で母は自分の名さへも書けなかつた無學文盲の女であつたのを知ると、コンクリンも云ふ樣に結婚の事柄は一優生學者に相談するよ

り賢い神に任せて置く』方が安全かも知れない。

であるから不良のものだから、又は白痴の者だからと云ふて一概に其種を絶やすと云ふ事が必ず宜しい事とは云へない。

けれ共國民の大多數が今も云ふた様な遺傳事實を知つて注意するのは夫れは取りも直ほさず國民全體の程度を高めるものであるから、今後人間の向上は之れに依るべきであると信ずる。コンクリンも亦『學者の研究で出來得る事は、人種の標準を大體に於て今日のものの內で一番好良のものに近づけると云ふ事で、此の改良は優生學と教育とを利用すれば結果が得らるる事である』と云ふて居る。

斯様であるから、人間の將來は個人の體格がそれ以上に發達するとも思はれないし、又智力でも今日以上には發達せまいと考へられるが、團體又は社會としての發達は望み得る事である。して此社會としての發達は今も云ふた様に人間のみが出來る事で、此點に於て人間が總て他の動物と違ふ所である。アリ、ハチ、白蟻の社會も他の動物に比ぶれば大いに發達したもので、爲めに彼れ等は大層好良な位置を有つて居るが、無論人間の社會と比ぶべきものではない事は云ふ迄もない。人間は前にも云ふた様に言語の發達に依つて相互ひに意思を通ずる事が出來る。又文字に依つて目前にある人とのみ通信が出來る計りでなく、又離れた處に居るものにもそれが出來るし又過去の人が經驗した事も亦將來の人にも通ずる事が出來る。變異遺傳等生物界の大法則には人間も無論支配されて居るが、人間は其法則を知つて之れを利用する事が出來るのである。宇宙間に働く、大きな力は生物全體に及ぼすものであるが、人間は其原理を研究して電信、電話、無線電話、ラヂオも何れも皆此自然の力を利用したものである。處がそれ等自然の法則を知つてそれを利用するに至つたのは何れも皆人間相互の關係に依るものである。孟母三遷の教もそれであり、學校で教育するのも亦之れである。大きな發見も絶對に獨創と云ふものは少なく、何れも夫れ相應の歴史を有つて居る。今云ふた無線電信や、ラヂオの様なものも近くはヘルツ遠くはファラデイ、ガウス、ウエーバー邊から出て來たものであらうし、ダーウヰンの陶汰說もマルサスの人口論からだし、デゲーネルの大陸移動說も世界地圖から思ひ付いたのではないか。

であるから、我々人間今後の進化も亦社會的でなくてはならない。して自分の考ふる所では此方の進歩にはまだ澤山の餘地があると思ふ。今日迄の經路を考へても此社會の進化は長足力で進んで來た事が解る。世界の交通は往時に比べると非常に迅速になつて來たし、ラヂオの發見で地球の一方に起つた事も瞬間に全世界に傳はる様になつた。ニウヨークの出來事を今日東京で知るのは明治の始め頃横濱の出來事を知るよりも早い。であるから全世界の人間は、少なくとも開明人とでも云はるるものの間に横はる障害物は段々に除去さるる事になり、一方で出來た發見は直きに又他方の人間が知る事が出來る事になつたのである。斯う考へると、又それは考へなくとも事實であるから、全生物界が變遷進化して來て、單細胞であつたものが、同細胞生物とな

り、夫れが異細胞生物となつて、又此異細胞生物の個體が集まつて一方には群生生物（ヒドラクラゲ、管クラゲの様なもの又は多くの樹木の如きもの）となり、又一方にはアリ、ハチ、白アリの様な所謂社會が出來、遂には我々人間の様な系統の違つた個體が澤山集まつて種族、社會、國家が出來た様に今後はそれ等國家が一つの大きな團結體になるのではあるまいか。此點に關し此節盛んに行はれる國際聯盟と云ふ事は誠に喜ばしい事で我々將來の進歩も發展も實に茲にあるのではあるまいか。一個體を構成する細胞組織が分化と積分とに依つて個體の存在が保たれて行き、又夫れが段々と進化して一國内の各人團體等の分化と積分とで一國が保たれて行き又夫れが隆盛になつて行くのと同じ様に今後は各國家の共同に依つて人類全體の進歩が謀られるものではあるまいか。

斯様にして眞のウォルド・ユニテイ（World Unity）が生れるのであらう。併し乍此のウォルド・ユニテイは或る人が夢見る様な國家觀念を超越したものではない。今日の國家も國境も捨てて世界の人類を一團體とすると云ふ様なものではない。總ての人間が一様に生れたものでなく、人々の國に依て境遇に相違がある様に、人種も違ひ國家も違ふものが、一つの團體になる事は遠い將來に於いては出來得る事か知らないが、今日では到底出來ない相談である。各國家に其最も長ずる所を發達進歩せしめ其得る所の事柄を全體に及ぼせば、夫れが人類發達の上には最も望ましき事ではあるまいか。即ち今日の國際聯盟をより一層擴張して、人類共同の幸福に關する事は之れに依つて定むる事が最も良い事であるし、又今後人類研究の進歩は實に又之れにあるものと信ずるのである。

處が茲に大きな問題は將來人間の發達が斯様であるとすると本邦で用ひて居る言葉と文字とである。狂人で無い以上は本邦で今日用ひて居る漢字が、世界の文化に對して適當なものであると云ふ者はあるまい。何んとか云ふ大臣は國粹保存とか云ふて漢字とか右書きとか云ふて居るが今日一人でも斯様な人が大臣になつて居るのは實に困つた事である。若し斯様な人が本統に國粹保存を思ふならば、右書き杯を八釜しく云ふ前に北海道の驛名の書き方でも變へた方が宜しい。斯んな人は本統に國を思つて居るのでないから、仕方はないが、オシヤマンベを長者萬邊と書くのは國粹保存であるか。大臣にでもなる人間は今少し物事を理解した人間でなくては困る。

之れは偖て置き今日の國語に澤山の漢字のあるのには實に困る。國語國字が其の爲めに如何に不都合であるかは、外國へ行つて電話をかけて見ると直ぐに解る。私の様に外國語の下手なものでも、外國で外國語で電話を掛けた方が、日本で日本語で電話をかけるより遙かに能く解る。之れは我日本語が漢字の爲めに音の言葉としては全く破壞されたからである。聲音は無論耳で聽くべきものであるのに、我々は漢字を使用した爲めに我々の日本語は耳で聽くよりは目で見て判斷する様になつたのである。學校で講義をしても耳では解らない言葉が澤山

ある。一寸動物學の講義をしてもダイガクとかセウガクとか云ふても夫れが大學と小學だか大頭と小頭だか解らない。であるから横文字で Mandible, Maxilla と書くとか又は漢字で大顎と小顎と書くとかせないでは聽く者に解らない。斯樣な事は何れの話をしてもザラにある事で、それ等に消費さるる時間を積んで見ても全國の小中大學校等のものを集めたらば、夫は實に大層なものになるであらう。私は玆にローマ字の宣傳をして居るのではないが、今后世界の文化が國際的になつて來た時には、又夫れが私が考へるには世界の大勢であると思ふが、斯樣な時が來たらば我國字は如何なるものであらうか。それは私が別に說明する必要もないと思ふ。

併し斯樣に私が云ふたからとて、私は決して國語を變へよと云ふのではない。殊にお斷りして置くが諸君は私が玆に云ふ文字と言葉とを混同されては困るのである。文字共物には何も日本魂も何にもないのである。日本の言葉を漢字で書いても、夫れで大和魂が無くなる譯ではない。又若し夫れがさうであるならば、夫は困つたものである。併し文字共物は何んであつても、夫れは一つの手段で、言葉とは違ふのである。「君が代は」は日本語で「君が代は」と云はなくてはいけない、之を英佛又はドイツ語で唱つては夫れこそ國粹が保存されない。併し君が代は「君が代」と書いても「きみがよ」と書いても又は「Kimi ga yo」と書いても少しも違ひはない。であるから、私は之れを Kimi ga yo とローマ字で書くのが一番宜しいと思ふのである。何故と云へば斯う書けば夫れが世界的に解るからである。人間將來の進化を論じた序に一寸述べたのである。(終り)

なかなか辭職せぬ田中內閣

田中首相辭職の意義

上杉愼吉

田中首相の、所謂人事行政は、世人の擧げて非難するが如く、頗る亂暴であるやうである。政府部內の人でも、政友會の內からも、これでは困つたと云つて居る人が隨分多い。現に或る人は、公然田中君を嫌つて、脫黨までしてしまつた。閣僚の二三子も、某氏を國務大臣とするのに反對したと傳えられて居る。今度の優諚問題もこれから起つたことである。人の採用の當を得ると否とは極めて大切なことであつて、百人が百人、誰が見ても如何はしいと思ふやうな人を、要位に据ゑると云ふことは、政治に信頼する國民に取て重大であつて、政府の威信は失はれ、人心の期待は去り、國民が政治を眞面目に考へぬやうになり、恐るべき結果を生ずることは、歷史の經驗に徵して明かなることである。古來政治の失敗は多くの場合に、人を得るの過ちに發して居るに鑑みなば思ひ半ばに過ぐるであらう。しかし、私共が、人事行政の故を以て、田中首相退くべしと論ずることは敢てせぬところである。苟くも首相の重責に居る人である、その人は一代の傑物であらう、人を見る如何の明あるかも分らぬ、如何なる見込が立つて居るかも知れぬ。世を擧げて非難するやうな人を、わざ〳〵登用するのは、何の必要あつてか、私利の爲めに私恩を賣ると云ふやうな世評が、我我としては、これを信ずることを好まぬけれども、寔に矜惜しむべきことである。しかし、某々氏は立派な腕前の人材であると云ふ人もあるのである。そうかも知れぬ。要するに、事實と見解の問題である。私共として、理論としてはこれが爲めに、首相の辭職を是非必要なりと論定することは出來ぬ。

○

田中內閣の內外に對する政策も、私は大部分反對である、しかし、

いい事もある。全部反對であるとしても、これまた、見解の問題である。政治家に非ざる私が、唯だ一に道理を確持することを任務とする外他を顧みることを、特に避けたいと思つて居る私などが、この故を以て、首相の引退を強要しやうとは思はぬ。田中内閣は田中内閣の信ずる處を遂行するがいい。批評は十分にするが、それは忠告勸說の程度に止まり、罷めよと云ふことは敢てせぬ。

○

田中内閣の出處進退は、憲法上から見て、初めから間違つて居る。最後に、あのクウデタアに等しき解散を斷行し、總選擧には無理な干涉を試み、特別議會には切り崩しで多數を取り、二回の意義なき停會を繰り返へし(これなどは國辱である)、内務大臣一人を辭職せしめて恬然として居ると云ふだけでも、もう立憲國の内閣として認むべき價値は極めて低くいのである。しかし、これも我が國の憲政の程度がこれ位のものである。民政黨がやつても、同じ事であらうと云はるればそれまでの事である。この點も、私としては、我が憲政の健全なる發展の爲めに、飽くまで批評し議論もするけれども、またこの理由に依て、辭職を勸告しやうとはせぬ。それは國民としても爲すまじき事、私共としては度を過ぎたる事であらう。

○

私は、今回の事は、田中首相が狼狽して度を失ひ、意外の失策をしたものとのみ考へることを得ぬ。其の人の全人格に缺陷あり、平素の心掛けが間違つて居る、少くとも誠意弛緩の心持が、この一事に偶然あらはれたるものと思つて居る。餘り失禮な云ひ分であるが、田中君從來の行狀から見て、首相になつてからのやり方から見て、そう結論し得るだけの事實は十分あると信ずる。

○

しかし、それもこの際は云はぬ。私は一切の問題を取り去つてしまふ。私は、以上の諸點に於て、田中内閣に對し、最も不滿に思ふ一人ではあるけれども、凡て皆絕對的ではない。見解も違ひ得る。今後改めれば、それでいいのであつて、必ず内閣が變らなければならぬと云ふことはない、罷める方が實際上國家の爲めに有利ならんと思ふだけである。しかし、凡ては眼中に置かぬとしても、政治家の論議に任かして置くとしても、所謂る優諚問題なるもの——これだけは、已むに已まれぬ。田中首相はどうしても罷めなければならぬ。

○

國務大臣が辭職すると云ふことは、矢張り、一の輔弼である。惡るい事をした、過ちがあつた、そこで辭職をして、お詫をする、責任を取ると云ふだけが辭職の作用ではない、惡るい事も、過失もなくとも辭職するに依て、國政の上に或る目的を達することが出來る場合には辭職を願ひ出づることもなければならぬ。田中首相を攻擊することは一切止めるとしても、田中首相の自から信ずるが如く、この問題の處置に就て、毫も疚しきことは無い、間違ひは無かつた、としても、首

相は辭職しなければならぬのである。私は熱心に心から田中首相のここに思を致さんことを祈つて止まぬ。

○

理由は最も簡單である、あらゆる色も肉も取り去つてしまつて、推測も疑惑も交じへず、その骨だけ、政府も自ら認め居る最小限度に就て見ても、これだけは確實である――水野氏は久原氏を入閣せしむることに反對し辭表を提出したるに、首相よりその意を翻かへさんことを求めたること、首相は參內して、文部大臣は留任することに熟議の結果決定せるも、辭表は天覽に供ふると言上し、天覽の上お下げになりしと、首相の言明し居ること、水野氏は首相に向て留任を諾したること無し、辭表を却下せられ、拜謁してお言葉を賜はりたるに依り、ここに初めて留任と決したりと言明し居ること、――これだけは當人達の云ふ通りを云ふのである。苟くも常識ある者がこれを考ふれば、かゝることがあり得るものではない。首相と水野氏との間少くとも言外の默契ありしことは明かであるけれども、それも云はぬとして、これだけを敢て考ふても、實に何とも仕末のつかぬ、重大なる結果を生ずるのである。**首相が辭める外に仕末はつかぬのである。**

○

首相はどうしても分らぬのである。首相と水野氏とが、これ以上を云はぬ限り、客觀的にはどうしても分らぬことである。これ以上は、恐れ多くして、何とも云ふことは出來ぬ、そこが要點である。世論の既に盡くして居るが如く、(一)若し水野氏が留任を承諾して居なかつたとすれば、首相の、留任と決して居りますが、辭表は一應天覽に供すると申し上げ、それでお下げになり、その爲め、水野氏が恐懼して已むを得ず留任することにしたとすれば、首相は恐ろしきことをしたことになる、滔天の極惡である。(二)又若し然らずして、留任を承諾して居たとすれば、何の爲めに辭表を天覽に供したか、水野氏翻意の口實と體裁を得んが爲めであると云ふの世評は免れることは出來ぬ。しかし、これはどちらが眞相なるかは到底分り得ざることであるから論議の外に置くとしても、かゝる重大なる、直接恐れ多き關係に思ひ及ばなければならぬことが、どうしても明かにすることを得ぬとなれば、つきつめた結果はどうなるか、忠誠なる國民をして、至尊を仰ぎ奉り、宸襟如何にましますかと、哀泣するの外無きに至らしむるに至るのである――私は一心唯だこれを堪え得ざる痛心事とするのである。

○

筆端寡來何も云ふことは出來ぬ。私は今憲法上の責任論も何もせぬ。唯だ思ふ我が國に於て政治の大眼目、基礎根柢となるべき一事は、天皇の大權思ふ存分に行はれ、親政の實忝く擧がり、而して、億兆國民の心、一毫の隙もなく、これに渾一融合し奉るに在る。これなくんば憲法も何もあつたものではない。內外の政策も、上天意を奉戴し、下國民の輿論を指導し、これを一にして、初めて力強き根柢を有して行

はれ得るのであつて、然らずんば、對支の方策も、共産主義の處置も皆浮泛してしまふ。而して、君民の間にこれを燮理するもの、實に首相の任務である。聖意は明煌日星の如く、民論は正々公々でなければならぬ。田中首相はこれを妨げたり、妨げつつありとは、決して斷言せぬ。然れども、一旦此の問題の起れる、一方は行き能はざる道である。首相の辭職以外に、一切を掃ひ去つて、我が國家政治の大本をして小疵なからしむる方法は無い。必ずしも、首相を攻撃して、引責せよと云ふのではない。辭職がこの場合に於て、唯一の輔弼献替の途なることを首相忠誠の志、必ず覺知するに至られんことを祈つて止まぬ。

○

倒閣と云ふが如き末節ではない。徒らに首相を批議するのでもない此の事ありし以上は、これを解決し、政治の根本を立て直ほすの途は首相の辭職の外には無いとするのである。首相辭職の意義は實にここに存する。

田中内閣の打倒者は誰か

河野密

一

田中内閣は第五十五議會で倒れなかつた。

あらしに沈みかけた船が、積荷を海中に投じて自ら救ふやうに、滿身創痍の田中内閣も、鈴木内務大臣を海神の血まつりにしてやつと息苦しい一夜を切り抜けた。

然し田中内閣はこれで安定したのではなかつた。一難去つてまた一難、内閣改造問題で暗礁に乘り上げ、とうとう優詔問題まで惹き起して了つた。『優詔問題』と云ふ思がけない横波に見舞はれた時は、愈々田中内閣も最後かと思はれた。ところがまたまた水野文部大臣をいけにえにして蛙の面々とボロ船の運轉を始めたには滿天下些か啞然とした形である。

人々は田中首相の『無恥』を言ふ。また人々は田中首相の『圖太さ』を言ふ。然しあらしのやうな民衆の怨嗟の聲をよそにして、『御大禮まで』と云ふ信號をかゝげて進む田中内閣の存在に、民衆は今如何ともすることが出來ないのだ。田中内閣は唯存在してゐると云ふ名ばかりである、然かも一指以てこれを打倒し得ざるを如何にせむ。貴族院立

ち、學者立ち而して田中内閣の暗黒なる影を政界から排殺せしむることが出來ないのである。

これは抑も何を語るか？

二

田中内閣存續の祕密は日本立憲政治の祕密である。

日本の立憲政治は政黨政治ではない。日本の憲法制定史が示すやうに日本の憲法は政黨政治、、の原則の上に立つてゐる。これが憲法の草案起草者伊藤博文の主旨であり、かれて日本憲法の精神である。

然し乍ら立憲政治は政黨否認の政治ではあり得ない。苟も立憲政治と名のつく以上、日本の立憲政治と雖も、憲法草案者の妄想を超えて進むことはまた止むを得ない。日本の憲政發達史が示すやうに、勿論多くの迂餘曲折を經てゞはあるが、政黨政治は漸く我が立憲政治の習律として發展して來たのである。

この甘酸い日本の立憲政治は二個の政黨政治を實現せしめた。一つは伊藤博文の政友會創立の宣言に表はれた政黨論に基づく政黨政治であり、今一つは立憲政治の本旨に於ける政黨論に基づく政黨政治である。

伊藤博文の政友會創立の宣言書に曰く、

『(前略) 抑々閣臣の任免は憲法上の大權に屬し、其の簡拔・採用或は政黨員よりし、或は黨外の士を以てす、皆元首の自由意思に存す。而して其の已に擧げられて輔弼の職に就き、獻替の事を行ふや、黨員政友と雖も、決して外よりこれに容喙するを許さず。苟もこの本義を闡にせざらむ乎、或は政機の運用を誤り、或は權力の爭奪に流れ、其害言ふべからざるものあらむとす。予は同志を集むるに於て全くこの弊竇の外に超立せむことを期す』

政友會の創立宣言並に趣意書の中には、「憲法を格守しその條章に循由し」とか、「國家に對する政黨の責任を重んじ」とか、抽象的の規定はあるが、政黨政治の確立には一言もふれてゐない、むしろ政黨を以て大臣輔弼の責を全うするための要具と解し、議會に於ける調和作行の安全瓣と觀るのである。自ら議會超然主義の原則を標榜した伊藤博文の政黨論こそ、その後永く政友會に依つて具體化された、妥協政治の理論的根據でなければならぬ。

然し乍らこの超然主義はその誕生の瞬間から一個の敵を以てゐた。それは既に自由民權論として藩閥政治と戰ひ、明治十四年三月大隈重信の憲法制定の意見書として伊藤博文の專制主義に反對し、遠く憲政擁護運動にまで根をひいた『政黨政治論』である。議會を中心とする政黨政治の確立こそ、この運動の眼目であつた。

明治十四年三月の大隈重信の意見書は曰く、

『立憲の政は政黨の政なり、政黨の爭ひは主義の爭なり。故に其主義過半數の保持するところとなれば其政黨政柄を得るべく、之に反すれば政柄を失ふべし。是即ち立憲の眞政にして、又眞理の在る所なり』と。

この二個の政黨論の間を縫つて、日本の立憲政治は極めて奇異なる發達をとげた。欽定憲法として具象化した超然主義の勝利がその第一期である。超然主義の政黨化にあらはれた妥協政治、情意投合政治は第二期である。憲政擁護運動を中心として開展された議會を中心とする政黨政治確立への要望は第三期である。然かも日本立憲政治の畸形的な發達は、この第三期に於てすらも、政黨自らが政黨の確立のためにもてあますと云ふ甘酸い狀態の間を彷徨してゐるのである。政黨政治の外見を具備するまでに政黨は發展して來た。然しその內容は？　而して一般の政治的機構は？　新しき酒は古き革囊の中で徒らなる煩悶を繰り返さなければならない。

田中內閣存立の秘密は正にこの點にある。議會政治否認の聲明書は超然主義の隔世遺傳である。議會再解散、責任支出、緊急勅令の濫發は、既に我々が遠く後に殘した筈の反政黨政治の餘孽である。已に田中內閣の成立そのものが逆轉的の意義を示してゐるではないか――樞密院の助力に依る政黨政治の確立！と。さればこそ老大なる反對黨民政黨も遂に如何ともすること能はず、徒に指を啣へて『議會政治否認』の聲明書を傍觀せざるを得なかつたのである。さればこそ巨大なる民政黨は、その巨體の故に更にかさむ罐詰費用を苦にしながら、再解散の聲に耳をふさがざるを得なかつたのである。

三

田中內閣存續の秘密はまた日本資本主義の秘密である。高度の資本主義への轉形期にある日本の資本主義は、今極度の不安と焦燥との間を經過しつゝある。大資本の制覇は中小資本家の沒落、中產階級の墜落を促し、產業の合理化政策は失業者の續出に依る社會不安を社會の下層に凝結せしめつゝある。然かも一方、日本資本主義の脆弱なる半面はこの轉形期に於て最も露骨に表はれ、その勞働政策に於て、その合理化政策に於て、その擴張再生產政策に於て、全て政府の庇護の下に行はれなければならない狀態である。彼等の要求するところは、極端なる反動政策であり、露骨なる資本擁護政策であり、生產品の破壞に依る人工的景氣促進政策である。

かゝるものとして選ばれたのが田中內閣であり、かゝる政策の忠實なる遂行者が田中內閣である。

田中內閣の勞働政策は至るところに於て勞働者農民の團結權罷業權を奪つた。例へば足尾に於て、野田に於て、香川に於て資本家或は地主と官憲との合成力は、多年の血と淚の結晶をつきくずして了つた。民衆の不安と反抗とを擁護せんとする露骨なる政策は、勞働農民黨外二團體の、、、、つた。共產黨事件そのものは止むを得ないとするもその利用、その宣傳的態度は、明に、社會の下層に凝結せる社會不安に對する、、、、、、、、つてゐるとしか思はれない。治安維持法の改惡に關する急緊勅令案に就てもまた然り。鬼面恫喝に依つて、民衆の合法的な、正常的な解放運動をすら抑止せんとする惡意の潜んでゐることを誰れが否定しやうか？

田中内閣の資本安定政策が、民衆の犠牲に於てなされつゝあることに就ては民衆は、既にあまりに多くの例證を知つてゐる。休戰整理に表はれた小口預金者救濟の怠慢、震災手形並に休戰整理に於ける黨派的色彩の濃厚さ。而して對支出兵にまつはる資本臭をすら如何にせむ。濟南事件は或は國民的不祥事であらう、然しこれをすら田中内閣は、一部、、、、、、、、、したとの譏を果して脫れ得るであらうか？

かくして田中反動内閣存立の秘密は正に日本資本主義の秘密である。されはこそ民政黨と言はず一切の既成政黨は、その根幹に斧を切りこむことが出來ないのである。實業同志會化の秘密、明政會籠絡の秘密は、その源をこゝに發してゐるのである。資本主義の秘密の上に立つた資本主義の秘密の暴露は何人にも可能でない。

四

重ねて言ふ、田中反動内閣は第五十五議會に於て倒れなかつた。あらゆる大衆の怨嗟と呪咀とにも拘らず倒れなかつた。民政黨の弱腰の故に、明政會の馬脚の故に。無産黨議員團が五月五日に發した聲明書こそ大衆のつばを彼等の面上になげかけたものである。

『……然り我等の一票は一に田中反動内閣の打倒である。全てを失ふとも田中反動内閣を打倒し得は、以て全國民大衆に答へる事が出來ると信じてゐた、然るに見よ、明政會は既に馬脚を現はし民政黨また鬪志を失ひ、總括的不信任案の前途暗澹たるものがあるではないか、今や内閣打倒の支柱は我等無産黨議員團あるのみとなつた……』

田中反動内閣はその改造に際して優詔問題を惹起し、決然たる與論の反對に遭遇した。貴族院立ち、民政黨立ち、學者また立つた。然し田中内閣は遂に倒れなかつた。それは依然としてその小面憎い存在を民衆の面前にさらしてゐる。

然らば田中反動内閣の打倒者は誰れであらうか？ 他なし、日本の立憲政治の中に眞に政黨政治を樹立し得るもの、資本主義の秘密の中に、、、、し得さるもの、社會の下層に鬱積せる民衆不安であり、その具體的な代辯者である。言ひ換へれば、田中反動内閣を打倒し得るものは民衆それ自身の威力である。

優詔問題は流石の民政黨をしてすら内閣打倒の叫びをあげしめた。然しそれが單なる法理論であり、政治的道德論である限り、それは斷じて田中首相の鐵の爪をその椅子から離すことは出來ない。『政黨政治確立』の原則に立つてこそその叫びは打倒の叫びとなり得るであらう。民衆を背後に有たない叫びは空虚である。

この意味に於て田中内閣ははるかによくその恐るべき敵の那邊にあるかを知つてゐる、頃日の新聞紙に南無妙法蓮華經子は合掌して曰く**『共産黨は人心と田中内閣を離反せしめつゝあり』**と。田中内閣の反對者は全て共産黨である！ 然しこの短い言葉の中にこそ、**田中内閣の敵は暗示されてゐる。それは民衆を背後に有つもの、民衆の具體的の代表者である！** 私は民衆諸君が、この殊勝なる一文の中から、言外の意を汲まれむことを希つて止まぬ。

時評

國難來！

山川均

張作霖の『離京の通電』なるものを讀むと、彼が支那の武力統一を夢みつゝ東山省から北京に乘り出したのも、赤化防止のためであつたし、いままた悄然として北京を去るのも、ひとへにこれ、支那を共產主義から救はんがためだといふことである。『期する所は……赤化の禍を解かんとするにありたり――作霖に民に益ありとせば萬事を犧牲とせん、願ふ所は、中華の國體が共產化せざらんことなり……』。そこで張作霖は、自己の權力維持に益ありとせば、國民の利害に關係ある一切萬事を犧牲としてゐるものだといふ吾々の疑ひは、大なる誤解であつて、彼は中華民國を共產主義から救ふことが民の益であると考へたから、支那統一の甘夢にひたりつゝ、一年有半の間、元帥府にふん反りかへつてゐる『犧牲』をさへも拂つたのであつた。

西にレーニン在り、東に誰れかゞ在つたのは、いまは昔のことである。今日は西に張作霖がゐて、東には、わが田中大將が在る。

張作霖が、赤化防止のために奮鬪したやうに、わが田中大將は、內にあつては『國民精神を作興し』、外にあつては、特殊支那を『共產黨の活動』から防止するために、首相の印綬を帶ぶるといふ、この多年の宿願たる犧牲を甘受したのであつた。田中大將は、就任の初頭において、かくの如く言明することを『欣快』としたのであつた。

この國際的の赤化防止內閣、少なくとも東洋における現存秩序の憲兵たることを『欣快』とする內閣が、國內的には、いかなる政府であることを『欣快』とするかは、想像するにかたくない。

少なくともこの內閣は、二月二十日の有名な議會政治否認の宣明によつて、それはよし民政黨に國體の破壞者、憲法の蹂躙者として致命傷を與へる目的は見事に外づれたにもせよ、累卵の危きに迫つたへと

彼らが想定する）國體を擁護する目的だけは、見事に成就した。國體が少しも破壞せられることなしに今日儼として存在することが、その證據ではないか！　二月二十日の聲明書は、田中大將の內閣は、或る一事のためには、如何なる『犠牲』を拂ふことをも辭しない內閣だといふことを實證した。そしてこの「或る一事」は、張作霖の場合と同じように、決して政權の維持ではなくて、たゞひとへに、國體を赤化の禍から解くことにあつたのである！

東洋の憲兵をもつて任ずる田中內閣は、支那を共產黨の活動から救ひ、若しくはこれを×××のために××にすることに成功したか否かはしばらく措き、國內的には、共產黨の檢擧に成功した。かつて民政黨の前身たる憲政會の內閣は、「大正十二年に二十餘名の共產黨員を檢擧して、××を擁護したことがある。●　田中內閣はいまや二十餘名を二十餘倍した共產黨員を檢擧して、××を擁護し得たことを誇つてゐる。想定せられた××の危機が大きければ大きいほど、この危機から××を救ふた功績もそれに比例して大きいにちがひない。そこで皮肉にも、危機の大きいことゝ、××擁護志願者との、、は一致する。かつて政友會內閣が、二十餘倍の共產黨員をつかまへて日本の國體を累卵の危きから救ふた××××××したことを考へたなら、田中內閣は少なくともその際を二十餘倍大きくして、國難來を叫ぶ權利がある。田中首相が四月十一日の聲明書において、『天人ともに許さゞる惡虐の所業』に對して『痛恨骨に徹して熱淚の迸花たるを禁じ得ぬ』と云ひ、翌十二日の政友會代議士會の宣言が、『素より多年薫治されたる國民性が、輕薄なる外來の思想に動搖さるゝことなきは勿論なれども』といふ、立派な保證がついてゐるにもかゝはらず、なほかつこの『輕薄なる外來思想』の影響を、『國家の大難』、『國民思想上未曾有の國難』として最大級に重大化し、『志士身を挺して大義に殉ずるは正にこの秋也』と絕叫することに××を感じたのは、まことに見やすい道理であつた。

そこで未曾有のこの國難にあたつて、身を挺して大義に殉した志士の筆頭が、わが田中大將であつたことは言ふまでもない。政府は、臨時議會の召集を前にして、この未曾有の國難來を發表し、この國難から危うく××を擁護した赫灼たる勳功を、大きく額に燒印して臨時議會に臨んだにもかゝはらず、臨時議會はどうした間違ひからか、この志士的內閣に對して不信任を示さうとした。しかし、『政黨員の多寡によつて內閣が替はるのは、議會中心政治であつて、『我國體とは相容れない』。田中內閣は、共產黨事件を『拔本的に』解決するために、議會が何と云はうとも、國民は何と思はうとも、そして議會の再解散を行つても、政權は田中大將の政友會の手に保留しなければならぬ。

『志士身を挺して大義に殉ずるは正にこの秋』だ！

からして張將軍と田中大將とは、申合せたようにひとへに、『赤化の禍を解く』ために政權を掌握し、ひとへに赤化の禍を解くために、『萬事を犠牲として』政權にかぢりついてきた。田中大將の『良き友』（六月五日『東京日日新聞』田中首相談）は、一と足さきに、率夫に

出發した。張作霖の『良き友』田中大將は、『外來思想』に對する『拔本塞源の道』たる治安維持法の改正によつて、赤化防止內閣の×××使命を完了しようとして急いでゐる。

治安維持法改正の『緊急』性

憂國の志士小川平吉氏は、田中內閣の內部にあつて、この素晴らしい『拔本塞源の道』を考案した人であり、治安維持法改正の張本人であると見なされてゐる。さきに小川氏は、恐らくは××に反した左書きの驛名を、命令一下、拔本塞源的に右書きに書き替へさせ、まづ天下に威令を示して鐵道大臣の經歷をはじめた人である。小川鐵相が、驛名の書き替へから、治安維持法書き替へのヒントを得られたものであるか否かは、明らかでない。けれども、いやしくも憂國の志士にとつては、×××は、もちろん自分の面目の上に蠅がとまつたほどに痛くも痒くもない。治安維持法の『十年』といふ文字を『死刑』と書き替へるためには、一鑵のペンキをも必要とせぬ。小川鐵相とその一味の人々とにとつては、それは少なくとも、驛名を書き替へるのと同じほどに容易なことである。

大正十四年の治安維持法制定の意義は、第一には、わが國の國體ないしは國家的存在が危機に瀕してゐるといふ、强烈な印象を國民に與へることによつて、帝國主義的進出のために身構へつゝあるブルジョアジーの周圍に、强大な反動的政治勢力の結成を促進することにあつた。第二には、私有財產制度の觀念を、××の觀念と、不可分的に結びつけることにあつた。第三には、これはまた當時の政府が、國民の注意を轉換し、政權の維持に有利な形勢を打開するものであつたことは、言ふまでもない。

しかしながら、この國體擁護の良藥を、國民をして一と思ひにのみ下させるためには、かの大正十二年の、共產黨の大檢擧を必要とした。前代未聞のセンセーショナルな、×××××、いはゆるゝ××××りの『大檢擧』によつて人爲的に作爲せられた空氣のうちに、この法律は初めて、あらゆる反對を排して制定することができた。卽ち國民が恐怖し、戰慄し、呆然として開いた口の塞がらぬ間に、この良藥が注ぎこまれたのであつた。

かように現行の治安維持法は、當年の共產黨事件を直接の（或は表面の）理由として、『過激思想』の『拔本塞源の道』として制定せられたものであつた。

この『拔本塞源の道』が講ぜられてから四年にして、またもやこゝに再び『拔本塞源の道』を講じようとするのが――ないしは『拔本塞

源の道」の道普請をしなければならないといふのが——治安維持法の改正なのである。けれども如何に拔本的な道普請をしたところで、この道は、依然として覇道であり、依然として同じ方向に導びくところの道であつて、懲役と書いた道標を死刑と書き替へても、××に導びく道が、天國に導びく道に變化するわけではない。

ごう〳〵たる輿論の反對を押切つて制定せられた現行の治安維持法は、一たい吾々に、何を與へたらうか？　それは二十五名の×××の代りに、五百名××××吾々に與へたにすぎぬ。それはせい〳〵五百人の治安警察法違反者の代りに、五百人の治安維持法の罪人を作らしめたにすぎない。それはいはゆる「××」を拔本塞源的に取除くべく代りに、後に來るべき政友會内閣のために、憲政會内閣のそれに少なくとも二十倍する容積において、再び「××を擁護」する機會を用意したにすぎなかつたのではないか。

治安維持法改正の企てに對しては、二重の反對がある。第一の反對は、いはゆる嚴罰主義に對する反對であつて、第二の反對は、政府が議會政治の否認に歸着するが如き方法によつて、この改正の目的を遂しようとしてゐることに對する反對である。

治安維持法は、一般に、「惡法」の名で通用する。惡法は、治安維持法のみではない。しかし「惡法」が直ちに治安維持法を意味するほどに、この法律は、惡法のあらゆる性質を代表的に具備してゐる。さきにも指摘したやうに、この法律の眞實の意義、その目的の目的が、法律の規定そのものにあるのではなくて、反動的政治勢力結成の作用に存する、、、立法であつたといふことは、言ふまでもなく、この法律の最も根本的な惡性質である。法文が曖昧不明確であつて、その適用が、支配階級の、、、、、に一任せられてゐること、この點において特にこの法律は、支配階級に、事實上の×××××××を與へてゐるに均しいこと、さらに×××制度が××と結びつけられてゐること、少なくとも一般國民の受ける印象において、この二つの觀念を不可分的に結合せしめることが、意識的に計劃せられてゐること、この點においては、この法律は、×××制度をもつて、××なる觀念の内容——少なくとも内容の一部——にしようとする正式な試みを意味してゐることなどは、この法律を、最大級の意味で惡法たらしめたものである。

しかしながら一般に、この法律が「惡法」といふ代名詞で通用してゐるのは、むしろこれらの根本的な性質よりも、その嚴罰主義にある。即ち、かような目的を、嚴罰主義によつて遂行しようとする點にある。

田中内閣によつて企てられてゐる治安維持法の改正は、この法律の、かような根本的な性質を變更しようとするものではなくて、すでに嚴罰主義と認められてゐるところの性質だけを更らに繼ぎ足して、嚴罰主義を一そう徹底せしめることにある。言葉をかへて云へば、治安維持法が、そのために代表的の惡法と認められてゐるところの性質を、さらに最大限度の極端にまで增大することなのである。

帝國主義ブルジョアジーの成熟に照應する反動的政治勢力結成の作用をはなれては、治安維持法制定の意義を理解することはできぬ。そこでこの根本的な見地から見るならば、治安維持法の制定が、犯罪防止の上にどのような効果をもたらしたか、それは兎も角何らかの効果を持つたかといふような問題は、そも〳〵末の末たる問題であり、畢竟どうでもよい問題なのである。

しかしながら、假りに問題を、治安維持法の直接の效果の問題——その表面上の立法の目的——に限つてみるならば、嚴罰主義が、これによつて阻止しようとする犯罪の上に如何なる影響を與へ得たかといふことは——即ち嚴罰主義の效果は——この法律が制定され、拔本塞源の道が講ぜられてから僅かに四年にして、再び拔本塞源の道を講ずる必要を生じたことが、何よりも雄辯に證據だてゝゐるのである。

憲政會内閣は、最長期一年の禁錮に値ひする治安警察法違反の行爲を『拔本塞源』するために、十年の懲役をもつて臨む治安維持法を制定した。この驚くべき嚴罰の壓力は、××××の大きさを持ち、そして政府の發表するところによれば、その運動方法において、さらに巧妙を極めたところの第二の××××迫出したといふのである。十年の懲役は、容易に死刑と書き替へられる。けれどもその結果は、どうだらう。不幸にして第二の田中大將をして、五百人を××××した××××××成功して××××の熱涙を注がしめ、××××の規模において×××擁護する機會を殘すことに歸着しないといふことを、何人が保證し得るだらうか。

治安維持法改正の主張そのものが、嚴罰主義の無效を意味してゐるにもかゝはらず、そして帝國主義的資本の意識した代表者でない限り、すべての人々が、まさにこの點について治維法の改正に反對し、その效果のないことを豫期することにおいて一致してゐるにもかゝはらず、獨り帝國主義的資本の政治上の指導者のみが、これを欲するのは、一たいどうしたことだらう。それは治安維持法制定の眞實の意義、その目的の目的が、おのづから別個のところに存するからにほかならぬ。

治安維持法の改正、ないしはそれと同一の目的を、緊急勅令によつて果たさうとすることが、如何に議會政治を破壞するものであるかといふことも、多くの人々によつて充分に指摘せられてをり、世論は完全に一致してゐると云つてよい。

臨時議會に提出された政府の治維法改正案は、意識的に、審議不了として葬られた。治安維持法の改正が、差し迫つてゐる國家の危機を救ふために必要缺くべからざるものだとしたならば、少なくとも、政府がそう信じてゐたならば、何をおいても、この議案の成立のために、政府は會期の延長をしたにちがひない。ところが實際には、政府は臨時議會の會期を延長するどころか、會期の終るのさへも待ち兼ねて、治維法改正案の死骸を置去りにして、命から〴〵遁走したのであつた。政府が臨時議會の會期を延長しなかつたのは、治維法改正案の

意識的な握り潰しに同意したことを意味してゐる。少なくとも內閣そのもの〻生命が危機に瀕したこの瞬間には、政府はその他のあら〻危機を顧みる暇がなかつた。といふことは、爭ふことのできない事實であつて、××の擁護を使命とするかの如くに振る舞つてゐる田中內閣には、實はもつと擁護しなければならぬ何物かゞあつた、といふことになる。

かやうに田中大將の國體擁護內閣は、その存在を維持するためには、國體擁護の『拔本塞源の道』たる治安維持法改正案をも葬り去りにして逃走し、治維法改正案の故意の不成立に同意したばかりでなく、かの『思想國難決議』なるものに同意したことによつて、治維法改正の精神を、積極的原則的に否認したのであつた。

『共產黨事件に關する政府の提案及び報告によれば、政府は主として嚴刑峻罰を以てこれを撲滅せんと欲するが如くに察せられた。われ等はこれに對して……惡思想は嚴刑峻罰のみに由て撲滅し得ざることは、露獨の實例に照して明白なる事……しかしそれが兩大政黨の贊成を得て、殆ど滿場一致の決議となりたる以上は、かれらは實行の責を負はなければならぬ。……彼の嚴刑峻罰主義によつて提出せられたる治安維持法改正案が、審議未了として自然消滅に歸せるが如きも、右決議の結果と見て好からう……』（五月十七日『東京日日新聞』、尾崎行雄氏）

この『思想國難決議』なるものこそ、如何にたわいもない尾崎式遊戲であり、この決議の通過によつて、嚴刑峻罰主義の企てが自然消滅に歸したといふようなことが、如何に無邪氣な獨りよがりであるかは別問題として、少くも、その發明者によつて說明せられてゐるように、この決議が治安維持法の懲役十年を死刑と書き替へる嚴刑峻罰主義を、明らかに否認した決議であつたことだけは事實である。そして政府は、總括的不信任案を阻止する代價として——しかも極めて安價な代價として——喜んでこの決議に同意したことも事實であつた。この場合にも、×××擁護と政府の命脈の擁護とが、田中內閣によつて如何に評價せられたかは、註釋の必要がない。

かうして命を取り留めた田中內閣は、議會の閉會によつて、命に對する安全が保證せられると、やをら命から二番目に大切なもの〻擁護に取りかゝる！

この治維法改正、ないしはそれに均しい目的を、しかもこの議會の直後において、緊急勅令の濫用によつて遂行することが、議會政治の明らかな否認として反對せられることは、當然自明の事柄であつて、議會政治を原則的に否認したところの田中內閣は、いまこの原則を、具體的に應用する實例を示さうとしてゐるのである。

政府は、治維法の改正を、何故に緊急勅令によらなければならないかといふ理由を說明して（吾々の知り得る範圍においては）たゞ『緊急緊急』と繰り返へしてゐるにすぎぬ。政府は、未だかつて、何故に『緊急』であるかについて、彼ら以外の何者を得心せしめるに足る說明をもしたことがない。現に田中大將の指揮刀の下にある政友會の

內部に對してさへも、反對論者を納得せしめるに足る何らの說明の與へられてゐないことは、爭ふことのできない事實であつて、最近、政友會の內部における反對論者の『泣寢入り』が傳へられてゐるが、それは何故に『緊急』であるかを說得せられた結果ではなくて、政府當事者がそれほど緊急と認めるのなら、しばらくそれに信頼するほかない、といふ文字通りの『泣き寢入り』なのである。それは毫末も、××擁護の『緊急』が認められたためではなくて、せい〴〵政權擁護の『緊急』が、それ以上に認められたことを意味するにすぎぬ。

『……原法相が、これを緊急勅令とする理由として擧ぐる（閣議において）ところによれば、日本共產黨事件に關し……從來說明を缺いてゐた共產黨の細胞組織、分布狀態等を詳細に報告して、治安維持法を緊急勅令にて改正を必要とする所以を力說したものであると』。（五月三十日『國民新聞』）。

もしこの報導を事實としたならば、緊急勅令による改正を必要とする理由は、實際には、これを不必要とする理由となるにすぎぬ。いはゆる共產黨の細胞組織等々は、四月十日の政府の發表によつても、すでに或る程度まで詳細に說明せられてゐるところであつて、少なくとも、それは臨時議會以後に起つた新たな形勢でも何でもない。いかなる犯罪も、嚴刑酷罰のみによつて『拔本塞源』することはできないが、直接に社會的根據にもとづく種類の犯罪において、特にそうだと云ふことができる。そこで若し、治安維持法の豫防的な效果が問題とならぬとしたならば、政府の發表が『巧妙周到を極はめた』といふ犯罪行爲を檢擧するためには、現行の治安維持法は充分であつたと結論せられる筈なのである。

『政府の言ひ分――共產黨の機關雜誌たる「赤旗」は尙發行されてをり、共產黨の運動は少しも緩和されてゐない、故に來る通常議會を待たず、緊急勅令を以て治安維持法を改正して、共產黨の根絕を圖らんとするものである』。（五月二十三日『國民新聞』）

全國に亘り、起訴者の數が五百名に上ぼるといふ空前の大檢擧によつても、『共產黨の運動は少しも緩和されてゐない』と假定したならば、これは慥かに驚くべきことに違ひない。けれども依然として緩和されないといふこれらの運動は、治安維持法の改正を俟つまでもなく、現行の法文によつても直ちに檢擧し得られるものであり、政府はまた檢擧につとめてゐるに違ひない。してみれば、假りに『共產黨の運動が少しも緩和されてゐない』としたならば、その理由は、治安維持法の法文の不備――ことにその刑罰の減重――に求むべきものでないことは言ふまでもない。

田中內閣が、議會政治否認の非難を冒してまでも、そして與黨の內部における有力な反對を押し切つてまでも、理が非でも治安維持法を改正しなければならない眞實に『緊急』な理由は、一二の閣係の面目を立てる緊急な必要に基づくのであつて、もしこの面目が立ち損なへば、內閣は直ちに第二の改造問題のために、自壞を免かれぬからだと

傳へるものがある。

そこで×××の問題は、面目の問題に還元し、痛くも痒くもない他人の首よりは、政治家の千枚張りの顔の表皮の方が、遙かに擁護に値いするといふ結論に到達する。

内閣の改造

―時評―

内相の辭職によつて臨時議會を切り拔けた代りに、田中内閣は議會後の改造問題で行きつくかも知れない。政界の事情通は、かういふ觀測をした。しかし政界の事情に通せぬ素人たる吾々には、内閣の改造なるものが、ことに僅か一人の大臣の缺員を補充することが、それほどこんがらかつた六ケ敷いことのようには思はれぬ。ことに政策を基礎として組織せられてゐる内閣の場合には、閣員はたゞ、政策のプログラムを忠實に實現するための執行人であつて、人選は極めて單純な筈である。そこでその政策が、眞實に統制ある政策だつたなら、一人や二人の閣員を補充するくらゐ、簡單至極なことはないかの如くに思はれる。

ところが實際には、いづれの内閣にとつても、改造は最大の難關とせられてゐる。内閣の改造は、いはゞ一種の切開手術であつて、往々にして、そのために命を取られることがある。これはブルジョア政黨が、いかに多くの對立した利害の結合物であるかを思はせる。

臨時議會の表門の狼から、命からぐ〵逃出した田中内閣は、直ちに内閣改造といふ、裏門の虎が待つてゐた。田中内閣は、議會の難關を切り拔けるためには、鈴木内相といふ致命的な患部を切り捨てた。内閣改造のなやみは、この傷口の化膿にほかならぬ。

しかしながら田中内閣の改造問題は、畢竟、政友浪費者内閣たるを明かにした。この三人によつてだけでも、國民はどれだけの損害を蒙つてゐるか。シベリア出兵による何億圓、二度の山東出兵の數千萬圓はこゝに數へないとしても、久原氏の震災手形で千八百萬圓に加へて、勝田氏の手によるいはゆる西原借款は、一億二千萬圓の尻ぬぐひを國民にさせてゐるのである。清浦内閣時代のいはゆる國際公債五億五千萬圓では、年額千萬圓に近い利息を損失せしめてゐる勘定になるし、やめかけの會の内輪の問題であつて、そのために内閣が潰ぶれようとどうしようと、それこそ自業自得であつて、局外者は、たゞ見物してゐるよりほかはない。

ところが今度の内閣の内閣改造は、閣員の人選について、ごう然たる輿論の反對をひき起こした。或る新聞は、から言つた。

「政友會は頭數が殖えたのに比例して、多分の銅臭を輸入してゐるのである。そして久原氏に加へて勝田氏の入閣によつて、はしなくも田中

首相を中心として銅臭を發散する賦質に（即ち辭表の提出後に――引用者）勝田氏の手で朝鮮銀行に融通した五千萬圓は、國民の手には返つてこないで、國民自らが、それ以上の負擔をこれら特殊銀行のためにしてやらなければならない結果になつてゐるのである……』。（五月二十六日『東京朝日新聞』）。

これは一新聞の言論ではなくて、ほとんどすべての言論機關が、この人選に反對した共通の理由であつた。なるほど、これだけの損害を國民に蒙らしめた人たちが、三人揃ひも揃つて要閣に立つといふことは、それが本來の性質において、如何に政黨內部の內輪の問題とはいへ、がう然たる非難の聲のあがるのは、少しも不思議はない。

しかしながら、議會政治を承認する立場に立つて見れば、これは議會の欲するところであつたとも云ひ得られる。一ヶ月前に、議會はこの何億圓といふ損失を蒙らしめた浪費者を首班とする內閣の存續を許したのではなかつたか。民政黨は、解散を恐れて、不信任案の握り潰ぶしを望んだのではなかつたか。そしてキヤスチング・ヴオートのうちのその又キヤスチング・ヴオートを握つて臨時議會をリードした（と自ら信ずる）尾崎氏らは、少なくとも民政黨の內閣が出現することよりは、この浪費者內閣の存續することの方が、有意義であり、國民にとつて利益であり、そして正しき政治に近づくものだと主張したのではなかつたか。そこで數億圓の損害を國民に蒙らしめて平然たる人が、數千萬圓の損害を國民に蒙らしめて恬然たる人を、閣員に選んだといふことが不思議なのではない。かゝる內閣を存續せしめた張本人が、今日は、尤もらしい顏をして、この人選に反對してゐることが、遽かに解すべからざることなのである

政黨內閣が、いはゆる政治上の前科者、ないしは政治上の浪費者を、閣員に列したとするならば、それは內閣全體が、この前科を負ひ、浪費の全債務を負擔することを意味してゐる。從つて、閣員の人選を問題とすることは、そも〳〵末である。いはんや議會において闘ふ氣力のない反對黨が、この種の問題をほぢくつて、あわよくば內閣をつゝきこはさうとするに至つては、みぢめな了簡だといはざるを得ぬ。

田中內閣の改造は、閣員の人選が、輿論のがう然たる非難を浴びた點からも、政友會の內部に波瀾をまき起こし、その根底に深刻な動搖を與へた點においても、さらにこの難關を切り拔けるためには、臨時議會の難關を切り拔けるために、その片腕を切り棄てたように、片脚を切り棄てる必要に迫られて、改造の擴大をよぎなくされた點において、見事な失敗といふことができる。

けれどもこの內閣改造のうちから、何らかの意義あるものを求めるとしたならば、吾々は、それが久原氏の起用であつたといふに躊躇せぬ。久原氏は、純粹の資本家であり、財閥の一巨頭である。今日は、資本を支配する能力をもつ者は、直ちに政治を支配する能力をもつ者だといふ事實は、久原氏の起用によつて、最も代表的に示されたと云つてよい。資本は吾々を、政治的に支配する。けれどもこの支配

は、常に職業的政治家を通して行はれた。資本家自身の間にも、素町人の傳統にしばられて、『實業家は政治に携はつてはならぬ』といふ信條さへも殘つてゐた。かような傳統と偏見とは、資本の政治的支配を曖昧にし、多くの人々の目から、現代政治の本質を蔽ひかくす作用の一つとなつてゐた。かような傳統と偏見の遺物が一掃され、町人と政治家との前時代的な區別が完全に撤廢され、資本家自身が、政治の主人として立ち現はれることは、資本の階級自身に取つての必要であるばかりでなく、すでに實質の上では既成の事實たる事柄を、さらに形式の上でも完成する點において、政治勢力の關係を、簡單明瞭ならしめる點において、たしかに政治上の一進歩といふことができる、或る人は、久原氏を閣臣に列することは、風教に害があるといふ人がある。何故に久原氏が大臣になることが風教に有害であつて、その代理人が內閣に立つことが、風教に無害だらうか。そして現代のブルジョア職業政治家のうちの何人か、或る久原氏か他の久原氏かの代理人でないものがあるだらうか。

いはゆる優諚問題も、內閣改造が惹き起こした波瀾の一つであつた。

『....殊にこの度の優諚問題の如き、政府には最早共產黨を云々する資格はない、共產黨の害惡は、固よりいはずと知れたことだが、現政府が國家國民に齎らす害惡の大なるは比較にならぬ。治安維持の緊急勅令は、これを共產黨に加へる前に、まづ現政府に死刑を與へるために發せらるべきだ....』（上杉愼吉氏談、五月二十六日『東朝』）

『....田中首相は內閣不統一の醜態を彌縫せんがため、水野文相は自己の進退を粉飾せんがため、畏くも聖慮を煩はし奉るの詐謀をめぐらしたる事跡蔽ふべからず』。『....田中總理大臣の態度は、輔ひつの重責をあやまり、責任內閣の大義を沒却し、累を大權におよぼし、憲法の精神を破壞するものとして、その罪斷じて許すべからず....』。（民政黨の聲明書及び決議）。

『....私かに大權を僭し、國務大臣の進退を決したるもので、その罪一層重大である....』（諸學者の決議）。

これはいはゆる優諚問題についての、世論の見本であるか、私は固より、優諚問題の眞相を知らぬ。またこのところに、優諚問題を論議しようとしてゐるものでもない。たゞ優諚問題に關聯して吾々の見落すことのできないのは、議會を無事に切り拔けた內閣が、議會閉會後における、寧ろ意外な偶發的な出來事のために倒壞した內閣が少なくない。そして田中內閣が、もし優諚問題のために倒壞してゐたならば、さらに一つの實例が加はつたといふことである。現に田中內閣も、議會における鬪爭によつて憲政會內閣に取つて代はつたものではなくて、議會外における、寧ろ意外な出來事のために、政權を頂戴したものであつた。優諚問題のために、田中內閣は當然に倒壞すべきものであるか否かは、しばらく別個の問題として、いやしくも在野黨をして、議會における鬪爭よりも、政權掌握の捷徑として、かへつてこの

種の機會に着目せしめる誘引が極めて強い政治狀態は、たしかにわが國の議會政治に、變態的な要素の殘つてゐることを意味してゐる。それと同時に、この變態的な要素を過大に評價することもまた誤つてゐる。

老政治家の立脚地

臨時議會は、少數派によつてキヤスチング・ヴオートを握られたと云はれてゐる。そしてこの少數派は、また尾崎行雄氏によつて、キヤスチング・ヴオートを握られたと云ふことができる。

實際、臨時議會は、わが老政治家、尾崎行雄氏によつてリードせられたと云つてよい。尾崎氏の『國難決議』は、無産政黨をのぞく、議會におけるすべての勢力を完全に支配した。この臨時議會の舞臺こそ、尾崎氏の五十年の全政治生活を通じて、最も得意の一幕であつたにちがひない。

けれども尾崎氏は、一たい、どこにリードしたのだらうか？　いふまでもなく、政權を維持するためには、あらゆる醜惡な手段に訴へ盡した政府とその與黨、そして政權を維持するためには、如何なる代價をも支拂はうとしてゐる政府と與黨とが、最後の望みを掛けてゐる通路にリードしたのであつた。

そこで吾々は、もう一度問題を提起しなければならぬ。臨時議會を、實質にリードしたのは誰だつたか？　それは尾崎行雄氏であつたと云はれるのと、少なくとも同じ程度の正しさをもつて、政府とその與黨であつたとも云ふことができる。たゞ異るところは、尾崎氏は饅頭の皮を貰ひ、政府と與黨とは、その餡を拾つたゞけである。

しかしながら、吾々は決して尾崎氏が、意識的に田中大將の從卒として働らいた、と云はうとしてゐるものではない。況んや臨時議會における尾崎氏の行動が、駐英大使任命を交換條件として援助を申込み、憲政會のために拒絕せられた腹いせでなかつたことは、尾崎氏自ら聲明せられてゐるところであつて（五月二十日『東京日日新聞』）吾々もまた喜んでこれを承認したいと思ふ。たゞ尾崎氏の行動には、心なき人々をして、或は奇を好む人々をして、かくの如き假說を設けてまでも解釋を試みることに強い誘惑を感ぜしめるほどに、それほど不可解なものであつたことは爭はれぬ。

尾崎氏が、總括的な政府不信任案にあくまで反對したのは、それが無意義な政爭だといふ點にある。なかんづく、政友會內閣を倒ほした跡に民政黨の內閣を迎へることは、無意義であるといふことにあつた。たしかに、或る意味では無意義である。けれども政友會內閣の存在を助けることも、同じく無意義ではなからうか？　それは單なる無

意義にとゞまらないで、少なくとも、政友會内閣の反動的政策を積極的に支持するといふ、積極的な意義をもつてゐる。

もつとも尾崎氏は、政友會内閣が自ら倒れる分には、必ずしも異議のある譯ではない。現に尾崎氏は、『現内閣は近く崩解すべき運命を持つてゐる』とも言はれてゐる。けれどもこの内閣を倒してはならぬ。『内閣打倒などといふ聲が聞えるが、これは怪しからぬことだ……内閣の非を叫ぶのは、打倒などといふ怪しからぬ意味で話したのではない。曲つたことを直さんが爲である……この非を矯正せんがための運動から内閣が倒れるのは自業自得で致方あるまい、自分は既に現はれてゐる事實に基づいて現内閣を糺彈する、けれども糺彈と倒壞とを混同してはならぬ……』（五月二十八日『東京朝日新聞』）。

この談話の一節を讀んで、何人も直ちに起こすべき疑ひは、政友會内閣が自ら崩壞するに値ひするものであり、糺彈に値ひするものだとしたならば、この糺彈から内閣が倒れるのは自業自得であつて致方あるまいといふ立場から、尾崎氏は何故に臨時議會においても、その結果として政友會内閣が潰ぶれて民政黨内閣が出來るといふやうな、人間界の考慮に捉はれないで、政府不信任に向つて直進されなかつたのだらうか？　臨時議會における尾崎氏は、明らかに、内閣の糺彈から當然に起こる政權の移動を考慮に入れて行動されてゐることは自明であつて、それ故にこそ、民政黨内閣をして政友會内閣に取つて代はらせることが、尾崎氏に取つては、總括的不信任に反對する理由となつたのである。こゝでは尾崎氏は、内閣の糺彈と倒壞とを、混同せぬまでも、離なるべからざる關係において理解せられてゐるのである。そして尾崎氏は、政友會の反動主義的内閣を倒壞するに至らしめない程度において、その非を糺彈されたのであつた。これが各種の『國難決議』であつて、從つてこれらの決議の内容とその強度とは、それが矯正しようとする政府の非違の大きさに照應したものではなくて、自ら崩壞すべく運命にある政府を、倒壞するに至らしめない範圍に限定せられてゐたものだといふことになる。

この點においては、政友會に身賣りをしたといふ側面からの非難を浴び、そして何らの辯明をも試みなかつた、かの武藤山治氏の出處進退は、はるかに簡潔であつて、はるかに解し易いものがある。『現内閣は特別議會において、來るべき通常議會には、地租及び營業税の委讓と、一億二千八百萬圓の國家負擔が輕減するの案を提出する旨を聲明したのである、それが出來るか出來ないか、通常議會まで待てばわかることであるから、人事問題などは暫らく看過して通常議會まで現内閣を續かせたいといふのが私の希望である……私としては……内閣を倒すのは議會でなければならぬと思ふ』（五月二十八日『東京朝日新聞』）。議會政治を絶對に承認する以上は、内閣の存續と倒壞が定まるのは（例外的な場合は別として）原則としては議會においてゞなければならぬ。この主張に對しては、議會政治の擁護者たる尾崎氏は、無條件的に一致せられるにちがひない。武藤氏は、政友會内閣の存續を希望

する人である。それ故に、内閣の存續と倒壞とを決定すべき議會においては、政友會内閣の支持者として行動し、議會閉會後の今日は、人事の如き問題で、議會の審判によらないで内閣の倒壞を計るが如き行動を取らないといふのである。

尾崎氏の場合は、精密にその反對であつて、政友會内閣の秕政は糺彈する、しかし政友會内閣の存續そのものには、贊成もせず、反對もせぬ、けれどもこの政友會内閣の存續と倒壞とが決定せられる最も正常な機會であるところの議會においては、政友會内閣を倒壞に至らしめない範圍で、その秕政を糺彈する、しかるにこの機會の去つた議會閉會後の今日は、そのために内閣が倒壞すると否とを考慮せずに、内閣の非違を糺彈する……猪が着彈距離の内にある間は、猪を殺さぬように發砲する、猪が射程の外に出た後は、射擊とその結果とを混同することなく、猪の生命に顧慮しないで發砲する……等々。

しかしながら私が、尾崎氏の行動を取り上げたのは、ことさらにこの老政治家の出所進退を批判するためではない。私が興味をもつのは、老政治家尾崎行雄氏といふ一人格ではなくて、たま〳〵尾崎氏の行動に代表せられてゐるところのものが、社會的政治的に何を意味してゐるかといふことなのである。

尾崎氏は、わが國における、政黨政治の發達に貢獻した尊敬すべき政治家であつて、或る時は、憲政の神樣でさへもあつた。けれども、すべての神々が古めかしいものとなつたように、憲政の神樣も古めかしいものとならざるを得ぬ。尾崎氏は、わが國における政黨の父――少なくとも、多くの父親の一人――である。けれども尾崎氏の孵化した政黨の雛は成長して、尾崎氏の期待したところのものとは、全く毛色の變つたものとなつた。政黨は、今や完全に、金融資本を尖端としてピラミッド型に形成せられた階級的政治勢力の、指導組織となつた。尾崎氏は、この政黨にあいそを盡かした人なのである。

しからば尾崎氏には、これらの政黨と對立するところの、どのような新らしい立場があるだらうか？　これらの政黨と眞實に對立する對立の立場は、たゞこれらの政黨が指導し、またはこれらの政黨が代表するところの社會階級と對立した、獨立の社會階級の立場があるのみである。尾崎氏は、政友會と民政黨とのいづれにも反對される。けれどもこの二つの競爭政黨のいづれにも共通した立場に對して、尾崎氏を眞實に、根本的に對立せしめるところの物質的な基礎、社會階級的な基礎は、尾崎氏の脚下には存しない。尾崎氏は、抽象的な『正しい政治』をもつて、これらの政黨に對立してゐるにすぎぬ。

抽象的に『正しい政治』の立場は、尾崎氏をして、政友會にも反對させ、民政黨にも反對させる。この二つの政黨の政爭は、無意味な政爭であつて、この政爭から生まれる内閣の更迭は、いふまでもなく無意味な政變なのである。これは如何にも、尾崎氏がこれらの政黨と對立してゐるかのように思はせる。けれども抽象的な『正しい政治』の立場は、これらの政黨と對立した立場ではなくて、これらの政黨を、

いはゞ超越したところの立場である。尾崎氏の立場は、これらの政黨と決定的に闘つてゐる者の立場ではなくて、厳格にして律義な（しかしながら聊か古るめかしくなつた）父親が、あいそを盡かした二人の放蕩息子を見おろしてゐる公平な態度である。

政友會内閣を倒壞することは、その跡に民政黨内閣を出現せしめることを意味してゐる。政友會と民政黨との政爭の範圍内に眼界をかぎるなら、政友會内閣の倒壞には、民政黨内閣出現以外の意味はない。けれども政友會と民政黨とに對立した社會階級的の立場から見るならば、政友會の反動内閣の倒壞には、民政黨内閣の出現以外の別個の意義がある。尾崎氏と無產政黨とは、政友會と民政黨とのいづれにも反對する一點に於いて一致する。けれども無產政黨は、抽象的な「正しい政治」の代りに、これらの階級的政黨と決定的に對立する獨立した立場を持つてゐる。それ故に、民政黨を支持するといふ立場以外に、なほ且つ政友會内閣の倒壞のために闘ひ得る別個の立場を見出すことができる。これに反して、政友會と民政黨との代表する社會階級の範圍内においては、もしくは、これらの社會階級を超越してゐると空想する立場においては、政友會内閣の倒壞は、民政黨内閣出現以外の何事をも意味しない。抽象的な「正しい政治」の立場からは、政界革新の素朴な願望と、「憲政擁護」によつて購はれる安價な自己滿足以外の何物をも望まれない。

しかしながら、これは必ずしも、老政治家尾崎行雄氏の識見の不足を意味するものではない。何人も、平地に立つて丘陵の向ふを見ることはできぬ。これは視力の問題ではなくて、立脚地の問題なのである。

北方軍閥沒落と滿蒙問題

滿洲政局の將來と日本

長野朗

北伐軍の北京占領と張作霖の奇禍は滿洲の政局に重大な變化を與へずには置かない。現下の問題として、京津一帶から退却して居る奉軍が果して巧く兵を纏めて東三省に歸り得るかどうか、張作霖の生死問題と、生命を取止めたとしても現地位を保ち得るかどうかといふことである。奉軍は其兵を全ふして關外に撤退するため、北伐軍と妥協し、其追擊を緩めさして損害無く行はふとしたが、既に時機を失して居たのと、北伐軍の中心となつて居る馮玉祥を疎外したためそれも出來そうでなく、孫傳芳や張宗昌等の客軍は全く離れるだらうが、純粹の奉軍をどれだけ纏めて滿洲に入れ得るか、その纏つて滿洲に歸つた兵力を誰れが握り得るかにより、滿洲の主權者も變つて來る。次には東三省の主人公の問題であるが、張作霖の生死が判明しない今日、何んとも斷言出來ないけれども、張が死去するか又は失脚するとすれば、今日の奉天派には適當な後繼者もなく、殊に吳俊陞が斃れては愈々寂寞の感がある。張學良では貫目がなく、楊宇霆は智あつて勇なく、張作相は人好しだが平凡だし、東三省の纏まりは甚だ困難である。東三省が今のやうに統一されて居るのは、張作霖個人の力に負ふことが多く、彼れが民國六年奉天省の督軍となつてから以來、孜々として統一のため努力した結果である。即ち吉林にも黑龍江にも自己の腹心を督辦として据え、土着軍閥を逐ふて奉天系軍隊を配備し、官吏にも主腦部には奉天系を据えて居るから、表面巧く統一されて居るけれども、この壓へが一度緩んだ場合、現狀を維持し得るか疑問である。東三省には結合する力もあれば分離せんとする力もある。分立せんとする力といふのは、各省自治の思想である。張作霖の大奉天主義にはいづれも多少の反感を有つて居る。東三省の政治經濟の實權を奉天派の手に握り

奉天のためには他の二省を犠牲にする奉天第一主義には、次第に反感が昂まりつゝある。軍權政權を奉天系が握つて居るだけでなく、鐵道や金融、投資にも奉天の勢力が進展して居る。又租稅の徴收にも奉天の財源は保存して置いて、吉林や黑龍江から先に搾り上げたため、吉林官帖（吉林省の流通紙幣）の如きは忽ち額面の百分の一にまで暴落した。從て之の二省ではどうして奉天省の誅求から免れるかに腐心し盛んに財政の窮乏を宣傳して居るが、實は財政にはかなりの餘裕があつて、鐵道を敷設して居る位である。殊に省民省治の思想の濃厚なのは吉林である。吉林は滿洲の古都にして滿人文化の中心をなして居たため、吉林人の吉林といふ思想はかなり強く反奉的の氣分が多く、奉天からの統制の手を拂ひ除けたいが、今日まで政界軍界共に奉天系に壓へられて居るために隱忍して居る。張作霖の東三省統一の如きも、東蒙古から黑龍江に及び、吉林は最後に廻した位である。それで督辨にも張作相のやうな好々爺を据え、張作相も努めて吉林人の御機嫌を取つて居る有様である。然し張作相は張作霖あつての張作相だから、張作霖が倒れたら果して吉林を抑へ得るかは疑問である。黑龍江は吉林に較べては省の成立が新しく、殖民地的の所だから、吉林程に獨立熱は盛んでなく、奉天から見れば制し易い所である。然し一方には三省統一に有利な素因もある。第一に東三省自體が成立日尚淺く、奉天人、吉林人、黑龍江人と呼んでは居るが、いづれも山東や直隷の移民か又は其子孫が多いから、省の傳統と歴史がなく、鄕土觀念が他省のやうに濃厚でない。第二は交通網や經濟關係からも奉天と分離が出來なくて、之に咽喉を扼せられて居る。それに奉天は東三省と支那本部との連鎖的立場にあり、海への出口を制して居ることも、奉天省の位置を重からしむるものである。從て張作霖が絶えず中央に乘出して居たのは、その中央に於ける勢力を利用して東三省の統一に資せんがためでもあつた。從て中央と關係を有する强大なる勢力が奉天に存在すれば、東三省の統一は可能である。

次に東三省の政局に關係を有するものは中央政局との關係である。滿洲近代史に於て注意すべき一事は、滿洲の漢人化であり支那本部化である。以前の滿洲は滿洲人、蒙古人其他の原住民族の滿洲であつて主として放牧を業とし、經濟的にも民族的にも支那本部とは全く別種のものであつた。然るに清朝末期頃から今日まで漢人の滿洲大移住により原住民族は全く驅逐されて漢人之に代り、滿洲の全人口二千八百萬人中漢人は實に二千五六百萬人を占めて居る。又產業も農業を主體とし、支那本部の延長となり、同時に政治的にも支那本部の一部分として動いて來たのである。殊に張作霖は東三省統一のため中央に勢權を植ゑ、東三省の力を利用して中央に於て野心を逞ふせんとしたため、之の傾向は一層甚だしくなつた。從て北京の政權が誰れに歸するか、統一勢力か對抗した數個の勢力が現はるゝかは、滿洲政局の將來には看過すべからざる問題である。何故かといふに、北京に位置するものに取つては、滿洲の北支那に及ぼす威力に無關心であることを許さ

ぬ。滿洲の位置がかく重大となつたのは、滿洲の開發に伴ふ實力の增加と、其地理的關係にある。滿洲の開發につれて其富は增進し、人口の增加も亦滿洲の實力を大ならしめた。加ふるに滿洲の位置は退いて守るに易く、進んで首都北京を制するに便である。周邊は日本とロシヤを控へて居るから敢て犯さるゝことなく、本部との間には山海關の險扼があつて恰も囊の口を締めたやうになつて居る。東三省の富と人とが增すにつれて中央に及ぼす威力も增すから、之を利用して中央を制せんとする野心家が現はるゝのは自然である。そこで首都が北京に依然置かるゝことになれば、滿洲にあるものは中央に乘出さんとし、中央にあるものは滿洲の勢力を利用せんとするから、中央の戰亂は絕えず滿洲に波及する。もし滿洲が強大な力により統一さるれば、その統一者は中央に乘り出して來るだらうし、滿洲が分立狀態にあれば、中央の諸勢力は各々之の分立狀態にある各部を利用して自己に都合の好いやうに働かせやうとするから、滿洲の治安が紊さるゝ虞れがある。

次には滿洲今後の政局と日本との關係に就いて少しく述べて見やう。滿洲の政權を握るものに取つては、日本の滿洲に有つて居る威力は決して閑過出來ない。張作霖が東三省を統一し中央に乘出し、十數年の間其位置を保ち得たのは日本の勢力を利用したからである。日本の勢力は關東州及滿鐵を中心として存在して居る。張作霖勢力の中心も奉天にある。そこで張は日本の勢力を巧く利用して東三省に於ける其位置を重からしめた。張の政策としては、絕えず日本の意を迎へ、自己の反對派と日本との間を離間し、日本の寵を獨占せんと努めて來た。然し彼れが一度東三省の統一を完成して中央に乘出すや、彼れの日本に對する態度は變つて來た。彼れが中央の舞臺で大元帥になつたり、或は大總統や更に皇帝までも夢見て居るのは一種の賭博氣分であるが、東三省の問題になれば自己の生存問題であるだけ彼れも眞劍にならざるを得ない。そこで日本との關係も、日本と絕緣することは自己の地位を保持する上から出來ないが、日本の勢力が滿洲に駸々として伸びて來るのは、彼れとしては忍びない。そこで陽には日本に好意を表し、陰に日本勢力の進展を極力排除するといふのが彼れの採るべき當然の政策である。そのため彼れは官製排日もやつた。他國を引き來つて日本を制することも試みた。種々の排日密令も下し、日本の利權も蹂躪した。ために日本人の間に反張氣分が著しく增大したのも事實である。然し張作霖に代つて誰れかゞ出ても同じ方法に出るだらう。たゞ東三省が統一せず、三省分立狀態になれば、奉天省は其位置の關係から日本に親しまざるを得ないだらうが、黑龍江省はロシヤと今日以上の關係を有つて來るだらう。又吉林省は排外的な利權回收熱を一層增長させるだらう。然し全般から見て、滿洲に於ける日支の關係が益々惡くなることは自然の傾向である。何故かといふに、前にも述べたやうに、滿洲の漢人化は最近殊に著しく、漢人の移民がとしどし北方及東方に發展して滿洲に充實するにつれて、其經濟的勢力も增

大して來るし、漢人の有つ力も增へて來る。その結果はこゝに他民族との爭鬪が起り、滿洲族と蒙古族とは既に漢人に壓倒され殆して滅び去つたので、今度は朝鮮人及日本内地人との間に激烈な民族發展の爭鬪が行はれつゝある。そのために朝鮮人の壓迫も起り、邦人に對しても排斥運動が至る所で行はれて居る。ために日本人は生存力の旺盛にして生活程度低く、且つ經濟能力の大なる漢人に押されて次第に退却し、滿鐵と其附屬事業により辛うじて二十萬人足らずのものが生存して居る。そこで支那側としてはもう一押しで日本人の勢力を滿洲から一掃し得るから更に其力を增して來るだらうし、日本の方では何んとかして根本的に之の頽勢を一變して陣形を立て直さうとするから、そこに激烈なる民族爭鬪が行はるゝのは自然である。その傾向は張作霖の存否に關係せず、滿洲の政局如何に拘らず存在するものである。たゞ南方派の勢力が更に滿洲に進入して來た場合には其の標語とする反帝國主義の立場から、日本の利權に對する回收運動が行はれ、日支民族爭鬪の勢を更に強くするだらう、從て滿洲問題が次第に險惡の度を增加することは自然であつて、姑息な方法は最早行ひ得られなくなる。そこで日本としては日本自身を如何にするか、先づ自身の腹から決めてかゝらねば、單なる積極策や消極策は意味を有つものでない。日本の進むべき理想を定め、それから生れた對内對外的の一貫した方針に基き始めて滿洲問題の根本政策が創出されて來るものだと思ふ。

支那に於ける日本の「國家資本」と「財閥コンツエルン」

鈴木茂三郎

一

過剩資本の輸出と商品と原料の市場を、ひたすら支那大陸に求めてきた吾がブルジョアジーは、現實に巨大なる輸出資本を支那大陸に投資してゐる。

概算四〇億ともいひ、三〇億ともいひ、二五億とも言はれる。いづれにするも、吾が對支輸出資本は、死藏として計數を超越するほどに大きい。

日華實業協會の調査に従ふも、廿五億圓をくだらぬ。即ち對滿投資は一三億二千萬圓、對支借款は七億圓、そしてそれらを除いた全支那に於ける活動資本の分布は次ぎのとほりで、わが特殊勢力の地域外でさへ五億圓に達する。

	紡績	海運	製造工業	不動產
上海	一九八二〇	五〇〇	六六六〇	二〇八〇
青島	四三〇〇	—	一五〇〇	三〇〇〇
漢口	三八〇	六六六	二一三〇	一二九五
天津	五八五	—	四七〇	二四〇五
計	二三二八五	五六〇〇	一〇七六〇	八七八〇

備考、單位萬圓、九江方面の二千五百萬圓を除く

その製造工業のうち顯著なるものを擧げよう。すると南滿には豆粕油房、煉瓦、硝子、煙草、製粉、鹽、柞蠶、糸、化學製品、京津にはマッチ、骨粉、煙草、山東にはマッチ、上海には石鹼、マッチ、製革、長江筋には桐油などがある。就中マッチ工業は瑞典トラスト、煙草工業は英米煙草トラストと闘ひつゝあるが目立つ。全支の機械制工場の總數七四〇、投下資本六億元のうち日本の經營のもとにあるもの一二〇工場、二億五千萬元に及ぶとはすさまじいではないか。

日華實業協會は、會長に老子爵澁澤榮一をいたゞき、國家資本の一代表兒玉正金頭取を主盟とし、大阪の日華經濟協會と、對支共同利益の爲めに策應する一聯の對支資本家の集團で、大阪綿糸布商同盟會、神戸海陸產物貿易同業組合、大阪貿易同盟會、在華紡績同業會などと共に、對支ブルジョアジー機關の權威ではある。その調査に一應の信を置いて、筆をすゝめるとして、さてわがブルジョアジーの對支經濟的勢力、位置——それは必然に政治的特殊勢力の、據つて生ずる基礎であるところの——を見極めるには、その輸出資本だけでなく、わが輸出貿易の約二割五分、輸入貿易の約一割六分の優越的位置を占める對支貿易を見逃することは出來ない。

すると綿糸布、精糖、石炭、紙、陶器硝子、機械、雜貨その他あらゆる製造商品が支那市場にさばかれるほか、支那からは南滿に大豆、豆粕その他農產物、銑鐵、石炭、木材等々……山東に牛、卵、棉花、長江をさかのぼれば桐油、棉花、皮革、植物油と、輸出入共に數へあげるなら限りなくある。長江筋は英國の勢力拔く可からざるものがあるが、商船、郵船（三菱）系の日清汽船が日章旗をはためかせてゐる。

それらはわが商權の強大なる力を如實に示すところのものだが、かくてそれは、わが輸出資本と共に、支那大陸に於て輝ける日の丸の旗の下に確保せる、わがブルジョアジーの經濟的勢力、位置を、明確に示現するものである。

二

吾がブルジョアジーの對支經濟勢力の先端に立つて、これを指導し代表するものは、滿鐵、興銀、東拓、鮮銀、正金の一團の「國家資本」

である。

英國の滙豐銀行（ホンコン・シャンハイ）麥加利銀行（チャータード）中英公司、福公司、寶林公司、華中鐵路、米國の花旗銀行（イタナショナル）博英公司、裕中公司、佛國の東方滙理、印度支那銀行）中法實業（バンクインダストリー）獨逸の德華銀行に見るが如く、多くは直接ブルジョア自からが立ち現れてゐるに引比べて、日本ブルジョアジーは、彼等の「國家資本」をその先端に立たしめてゐる。

滙豐の對支借款は三千七百萬磅、麥加利は百五十萬磅、中英公司は鐵道へ二千三百萬磅、福公司は鑛山と鐵道へ三千萬法、寶林公司は鐵道へ一千萬磅、花旗、博益、裕中公司は鐵道、運河などへ一千萬ドルと五百五十萬兩、東方滙理は京漢鐵道と南京政府へ八百萬磅、中法實業は四千萬法と一千萬磅をそれぞれ貸付けて、あらゆる利權を手中に確保したが、しかしこれら列强の資本輸出機關と、尖鋭に對立しつゝ、わが「國家資本」も亦、より膨大なる對支利權を獲得したのである。

次ぎに要約して示さう。

興銀、鮮銀、正金と東拓

(1)西原借款による利權、そのうち滿蒙四鐵道の一部は、滿鐵によつて實現されつゝあるが、西原借款は所謂參戰借款であつて、支那を歐洲大戰に捲き込んで、支那に於ける獨逸の利權を奪ひ、又擴張することによつて、「國家資本」の借款の目的は達成されたのである。

(2)始めには財閥、資本家の共同投資機關として企畫された中日實業東亞興業をその支配の下に置いてゐる。從つて中日の桃冲炭坑、電信電話借款、東亞の南、潯鐵道等の利權をおさめてゐる。

(3)漢冶萍鐵山に四千五百萬圓を貸付けて年産廿餘萬トンの鐵礦供給權を確保してゐる。これによつて內地銑鐵の六割五分迄を産出する八幡製鐵所は八割の原礦（桃冲その他支那原礦を加ふ）を保留されてゐる。

(4)正金は爲替資金の放出によつて商權の擴大をはかり、鮮銀、東拓はすゝんで事業管理にまで及んでゐるがとりわけ東拓は北滿南滿に約五千萬圓の企業資本を投じて北滿電氣、東洋畜産、滿蒙毛織除和公司、大興鐵道の別會社を統制するほか、北滿に極東林業、中東海林の木材、上海に新農、裕華兩公司の棉花栽培を直營してゐる。

南滿洲鐵道王國の體系

南滿洲鐵道こそは、南滿の滿鐵王國の主權の主體である。

滿鐵は滿鐵本線（六九八哩）と撫順の石炭と油岩オイルと鞍山の銑鐵と、機械工場と、附屬地、都市、港灣を根幹として、南滿電氣、南滿瓦斯、大連汽船、大連船渠、大連窯業、山東鑛業（魯大公司）を、その資本の下に從屬させ、四洮線（二五九哩）吉長線（七七哩）洮昂線（一四二哩）の借款鐵道を支配する一大コンツェルンである。滿洲紡績、滿洲製粉、昌光硝子その他附屬地のあらゆる事業は、滿鐵王國の支持と保護の下にはぐくまれ、廿萬の在滿邦人はその經濟的地盤

の上に呼吸しつゝある。

「輸出資本」として支那にあるかゝる「國家資本」の本質は、その企業形態が會社であると銀行であるとのけじめを見得ない、滿鐵、東拓は預金と爲替を取扱はない銀行であり、正金、鮮銀、興銀は事業を直營せざる事業會社であり、ひとしく産業的資本と銀行的資本の結合せる「武裝せる資本」である。「武裝せる資本」が國家の名に於て、帝國主義政策の先端として、より戰鬪的であることは言ふを待たない。

三

コンツエルンの基礎産業は鐵と石炭の重工業の上にある。それはあらゆる産業の基礎であり、又巨大なる資本を要するところから、資本の集中、集積を必然に要求するからである。あらゆるコンツエルンは例外なしにその範疇を出でない。撫順炭坑と鞍山製鐵と重工業鐵道を基礎とする滿鐵コンツエルンに於て吾々はすでにこれを見た。しかして國内の諸財閥コンツルエンも、亦此の範疇を出でない。

鐵に於て三井財閥は三井銀行と共に日本製鋼、三菱財閥は三菱銀行と共に三菱製鐵、三菱造船、住友財閥は住友銀行と共に住友製鋼、住友伸銅、大倉財閥は大倉鑛業、淺野財閥(安田系)は淺野晝夜銀行と共に淺野造船、淺野小倉、久原は久原鑛業(銅)東洋製鐵を有する。

石炭に於て三井財閥は北海炭坑、三井鑛山、大日本炭坑その他、三菱財閥は三菱鑛業、九州炭汽その他、古河財閥は古河鑛業、大正鑛業、古河鑛業、(銅)、住友財閥は住友合資、住友炭坑、大倉財閥は入山採炭、大倉鑛業、淺野財閥は磐城炭坑を有する。

それは、それ〴〵の金融資本と結合せる財閥コンツエルンの基礎産業である。

從つて財閥コンツエルンの資本が、「武裝せる資本」として「輸出資本」と本質を同じくすることは見易い。從つて又、「輸出資本」との根本的な矛盾、撞着のあらふ筈が無い。いな結合は深い。

殊に近年の狀勢は、益々結合の度合を深めないでは置かないものがある。それは諸財閥の原料確保の要求の切實を極めつゝあることやら財閥支配によるブルジョア政黨の確立によつて促進される。

わが財閥は、何故に原料確保を切實に要求するか。石炭は言ふまでもなくとぼしい。鐵原礦は國内には殆んど無いといつて好い。で銑鐵は印度と支那、鋼材は獨と白、並に銑鐵と鋼材を、國家資本による八幡製鐵所に求めてゐる。それは需要の七、八割の多きに達する。しかも八幡は、銑鐵の一部を鞍山と本溪湖に、原礦の全部を漢冶萍と桃中に仰がねばならぬ。

しかるに財閥を中心とするわが鐵工業は、國庫の補助を受けながらも、なほ生産設備に對して銑鐵は四割六分、鋼材は六割四分を生産しつゝあるにすぎない。

そも〳〵それは、何んに基いてのことであらふか、彼等は率直に、躊躇するところなく答へるであらう。

現在の生產設備は、現在の需要に對して製鋼に於て三割五分不足し又三割の過剩となる。といふ意味は、生產設備の不整備を意味する。だが一切の禍根は、安い良い原料が確保されてゐないことに在ると、近年の重工業產業の不振は、彼等に於て特にその感深きものがあらふ。

近年のブルジョア政局の動搖と不安、財閥支配による純ブルジョア政黨の發達、かゝる狀勢のあはたゞしき動きは、諸財閥の政治への一齊進出を動因として、捲きおこされたのだが、かくして彼等は、「國家資本」—國內と國外にあるを問はぬ—の結合を深め、それへの統制を强め、さうすることによつて、財閥コンツエルンの基礎產業原料の確保を期し、あはせて不振から逸早くも救出されやうとするにある。

財閥コンツエルンは、「輸出資本」としての「國家資本」とその本質をひとしくするにとどまらない。その對支利害をも、だから同じくするものである。

■

わが財閥コンツエルンの對支利害は、國家資本の對支利害と結びついてゐる。けれども財閥自から、資本を引つさげて支那にのぞみたるものは少ない。そのなかにひとり大倉財閥は、鶴彥翁大倉が、軍閥的資本家蛋作霖を友達と呼ぶことに、他愛もない興味を持つてゐたゞけに本溪湖に鐵と石炭、東蒙古に水田、天津に裕元紡織を營むほか、約二千五百萬圓を投じてゐる。三菱財閥の大連に於ける油脂工業、安田財閥の南滿における正隆銀行とその融資による小企業の管理、といつたものなどは、蟲眼鏡でさぐらねば發見出來ないほど小さい。

對支紡績產業に於ける、鐘紡に對する三井、大日本紡に對する住友、日本棉花に對する安田、富士瓦斯に對する三菱、日清紡績に對する東京川崎系との關聯などは、所有株式の利益の分け前を取得するといつたゞけのことで、對支紡績產業の上には、財閥コンツエルンの資本の動きは見られないのである。

久原財閥は近ごろ、關東軍でアヘンの特許を獲得し、承德で粗製その利權の提供を受けたとの疑ひを深めてゐたが、民政黨から久原遞相のアヘン事件を摘發したことによつて、その疑ひは、もはや疑ひではなくなつたわけだが、田中內閣成立にあたつて、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、保證されたと傳へられる。それは信ずべき理由がある。がいづれにてもあれ、久原はアヘンをもつて支那に商權の基礎を置かんとするやに思はれるが、支那大陸におけるアヘンの、、、、年額十億圓、そのうち、、、、、、、、ふものは六、七千萬圓、白晝公然とセメント樽によつて陸揚される。

對支貿易の妙味は、そこにあるといはれ支那軍閥の私有財產も、そこから蓄積されると言はれる。がアヘンへの久原の參加は、もとよりわが對支商權の大きな力となり得るものではない。

わが財閥の對支輸出資本は、ここに見たやうに、まことに微弱ではある。かつて住友財閥の總支配者鈴木馬左也が、利權を探ねて張作霖を訪問したところ、張うそぶいて曰く、

鈴木といふ姓は、日本人には多いから、聞知したこともあるが、住友とは一向聞かない。何んの商法？

が、さうしたことは「國家資本」と結合する彼等にとつては、何等驚くに足らない。むしろ投資の冒險と損失を「國家資本」に背負はせたところに、彼等の採算がある。

しからば三井財閥はどうか。財閥の企業群の一つの、小野田セメントは大連に分工場をもち、東洋棉花は三井直屬であつた上海紡績を引繼ぎ、三井自からは大連に油房、浦東に製氈を經營してゐる。

それだけのことが、すでに三菱財閥その他の諸財閥をしのいでゐるのに、彼の商權は、到底彼への追隨をゆるさゞるものがある。

一體日本の貿易商は、株式組織の形態をそなへたものだけでも、二五〇社その總資本三億圓をくだるまいと思はれる。

そのうちでも、三井物産、三菱商事、大倉商事、久原商事、住友合資、岩井商店、東洋棉花、日本棉花、江商株式、原合名は、貿易商のいはゆる大手筋である。古河は大豆で一敗地にまみれて對支貿易から手を引いた。だが三井物産は一と手で、日本の總貿易額の二割を獨占するほど大きい。外國間の貿易を加へれば二割五分にもならふ。

對支貿易に於ても、支那大陸の全土に、取引の網を張り、奥地にまで出張員の毛細管を行きわたらせてゐる。第一に私販、第二にコカイン、モヒの密賣者、次いで三井物産の買附係が、、、、、をかざして奥地へ〳〵と突進するのだ。對支商權の覇權は彼にある。

五

「國家資本」と財閥コンツェルンのその關聯するところの對支經濟的勢力、位置、それは如上すでに見たるとほりである。

ブルジョア政府の對支政策は、かゝる狀勢の指令するがまゝに決定される。

出兵前における政友會と民政黨の對支方針の對立は—だがもとより根本的に相異するものでは、斷じてないことは、出兵後の民政黨の動搖的な對支態度によつて理解されよう—支那における三井(、、、)と三菱(、、、)の直接的な經濟的勢力、その位置の、曇りなき反映であつたが、諸財閥と結合する「國家資本」のもとに、經營と生活を依存する小企業と同胞はともかくとして、彼等との直接の經濟關係から獨立するところの、小企業、小商人等在支同胞の利害などは、「國家資本」と諸財閥の、巨大なる利害の上に、一旦緩急のおこらんとする今日、彼等の問ふところではない。

況んや、「國家資本」と「財閥コンツェルン」の心を、心とせず、彼等との對支利害を、利害とせざる、國內の一般大衆の意志、利害など、彼等の一顧にだに、値ひせざるところである。支那時局に對する、、

、、、、、、、、、、はこれを立證する。

「國家資本」と「財閥コンツェルン」の、對支經濟的勢力、その位置が、政府に、それを指令せしめたのである。

張遭難後の滿洲

米田實

一

六月四日早朝張作霖、吳俊陞等一行を乘せた列車は、奉天の滿鐵、京奉兩鐵道クロース點で强き爆裂彈に見舞はれて、吳俊陞死し、張作霖も重傷した、此一事こそは、滿洲そのものばかりで無く支那の局面に執りても、否な日本の對支關係にとりても、重大なる影響を生ぜずには止まぬのであらう。

思ふに張作霖は今度のやうな時期に於て、南軍並びに一部奉天系大官が共に希望してゐるやうな大元帥退職若くは退隱を聲明すること無しに北京から奉天に退いたのである、だから今度の如き密謀が待ち構へぬとは、彼れ自身も、其周圍も決して保證し得無かつたに違ひ無い。それにも拘らず其車をもかえず、堂々貴賓車に收つてゐたのは、奉天滿鐵驛に雲集する官私內外の出迎人に對する體裁もあつたらう、又た大元帥の名目に對する體面もあつたらう、かくして彼は南軍便衣隊若くは反張的奉天大官に關係ある分子の犧牲となつた、而して此報に接した南方國民政府は、表面の辭禮は兎も角として、中心欣喜雀躍してゐるに違ひ無い。何となれば、一方に日本が「武裝解除」の寶刀を振り上げて居る限り、南軍の滿洲前進が困難なので、困つてゐたのに、剛毅且つ頑强な張作霖の奇禍がその失勢を導きでもすると、その餘の群小は與みし易く、宣傳戰に依つても目的を達し得ると考へて居るからである。次ぎに奉天系大官中にも（軍人を含む）半分位ゐは竊かに欣んだに違ひ無い。何となれば、彼等の或ものは、最初から「保境安民」を可とし、張が手を中原に出す爲め、常に恐ろしい大軍費を使ひ、東三省民に重税を課し、又た奉天票の大下落を導かねばならぬことを悲しんでゐた。又た他の或るものは、南方同樣、孫文の三民主義に共鳴して居り、又た武治を嫌つて文治國の出現を望み、それ丈け張作霖

に滿足し得なかつた。殊に最近南方との妥協に傾いてゐた北京方面の面々は妥協が最善策なるを知り、それにはドウしても南方の希望通りに張作霖を隱退せしめねばならぬことを知り、協議會等で一致しても、皆な何分張作霖に言ひ出す勇氣を缺いてゐたのである。言ひ出すが最期、自己の首をチョン切らるゝ位ゐの可能性を想像せねばならぬからである。又た彼等の或るものは、張作霖の意嚮と傳へられた「張學良、吳俊陞重用」が實現する曉、不遇とならねばならぬものであつた。コウ言ふ分子中、張作霖との情誼輕く、或は曾つて重くとも今日輕くなつてゐる面々が、張の失脚を喜ぶは、洵に自然ではあるまい乎。

だが、支那南北兩方が如何なる態度で張の奇禍に對する乎は、我國にとりては寧ろ第二位の問題である。第一位の問題はドウしてもその如何なる影響を我國の對支對滿關係の上に及ぼすか、にあらねばならない。

二

然らばその影響はドウかと言ふと、第一、先づ滿洲に於て排日の氣勢を高めて、我が政策の實行を困難にするに違ひ無い、否な之は已に或程度現はれかけてゐるが、今後は一層その度を加ふると思はるゝのである。

それは何故か、張作霖の奇禍が不幸にも滿鐵のクロス點に於て起り然かもそれが驚く可き程破壞力大なる爆裂彈に依つて行はれた爲めである。之が京奉線に起つたとすれば、問題は極めて簡單だつた。滿鐵と京奉とのクロス點であつたので、事件發生の瞬間から、支那人に對日疑惑を植へ付けたのであつた。比較的周到な注意で知らるゝ日本人の警戒部面で、ドウして之が起り得た乎が彼等間には問題とされねばならなかつた。其後日本側の聲明で、警戒の一半が支那側の希望で支那側でやつて居たことが判明しても、下の京奉線のレールが安全であり、列車の被害も上部の方即ち滿鐵線に近い方が甚しいので、依然疑惑を減ずることが出來ぬのであつた。大きに支那人の刺客は從來誰も知るやうに短銃を使ふものが多く、爆彈を使ふものは少い。彼等は自己の生命を惜む爲め、自己に危險の無い短銃を選み、屢自己を危うし易い爆彈を避くるからである。尤も近年支那でも化學的知識が進み、奉天にも文明式の兵器廠が出來、强力の彈藥も出來れば、自己を安全にして爆彈の成功を期する新知識も了解せられ、爲めに或部分の支那人は決して昔日の支那人では無いけれども、一般支那人の考へ方になると、舊態依然だと言つて善い。又た南方便衣隊などには、大分狂熱的愛國者もあり、大膽の擧に出る勇氣もあるが、北方人の頭腦はコウ言ふ點で後れてゐる、かくして疑ひは日本人の上に馳せられ易い。殊に日本は昨年以來、或は滿蒙積極政策或は東方會議などゝ聲を大にし、恰かも侵略でも企てそうに見えてゐるが、張作霖は近頃事毎に日本の要求に反對し、大分雙方の疎隔を見るに至つた。此事實と張作霖なき滿洲の不安と、更らに最近日本の滿洲治安維持宣言とは不安心に惱ま

されてゐる東三省人を驅つて對日疑惑を高めしめたものに外ならぬのである。

彼等も善く考へたら、張作霖の亡滅を望まねばならぬものは日本では無くて、第一南方國民黨政府であり、第二、奉天系中の反張分子であり、第三、ロシアであることが分らねばならぬ筈だ、蓋し先づ、統一力あり、傳統的關係ある張作霖が滿洲に在る以上、滿洲を含む支那統一政府を孫文系で造り上ることは六ケしいのである。次ぎに奉天の大官邁には自己保全の立場から如何なる行動をも避けぬものがある、現に大正十四年(一九二五年)末、郭松齡の叛亂のときの如き奉天の面々で之に內應したものが多かつた。郭松齡が捕へられて後大急ぎで殺されたのも、彼が奉天に齎らされた時、大官邁が迷惑を蒙むるので早く之を殺さしめたとは、消息通の知る所である。從つて今度の變革で盛衰の危運に際してゐる彼等殊に軍人系の面々が例に依つて思ひ切つた奇策を斷行するとも、何の不思議、無いのである。若しそれ張作霖の治下で非常に虐遇せられ、東支鐵道でも、ヘルビン等でも、その他すべてに力を失つて來たロシアが、馮玉祥勢力勃興の機に滿洲の張系勢力打破策を考ふるに至つては自然と言ふ外は無い、而して此中、南方便衣隊說と奉天反張系陰謀說こそ、最も適當の見方ではあるまい乎と思はれる。

だが、今後之に關する確なる證據が發見せられ、事態が明かにならざる限り、依然本事件は滿洲人の對日疑惑乃至惡感を助長して日本の諸活動を困難するのを、避くることが出來無いだらう。尤も之も今後に於ける我國の遣り方に依つて緩和し、それを「一時的のもの」と化することも出來るが、近年の東三省民の對日疑惧に鑑み、それが決して容易で無いことを思はねばならぬ。

三

第二の影響は、何と言つても東三省勢力の分散及び之より生ずる內外交上の結果であらう。之迄のところでは奉天省張作霖の膝元でその直接勢力の及んで居たところだが、此方の吉林省も張作霖の馬賊時代から麾下に屬し、張作霖が清朝に歸順して巡防隊長となると、同じく巡防隊營長となり、民國に變つても作霖下に騎兵團長となり、全く進退を共にしてゐる張作相(四十八歲)が督辦となつて居り、黑龍江省も同じく清末巡防隊時代から張作霖と意氣相合してゐた兄弟同然の吳俊陞(六十七歲で、作霖よりも十歲の兄だ)が督辦兼省長をやつて居たので、十分統一はとれてゐたのである、東支鐵道方面に軍事的地盤ある、張煥相策略に富み、有力な子分も多いと言ふ楊宇霆なども、到底動きは取れなかつた。だが張作霖が今回の奇禍に依つて其活動力を失ふこととならば、それは現に東三省に起りつゝある青年間の思想的變動等とも助長せられて、甚しくは滿洲混沌の狀を誘致すべく、甚しくなくとも、數雄割據の勢を生せずには措かぬだらう。

先づ吉林省は將來更らに變動を見るだらうけれど、差當り張作相の

天下だらう、黒龍江省になると肝腎の吳俊陞逝いた今日、其子之に代るの說もあるが、恐らくは汲金鈍、楊宇霆、王樹常等の競爭場裡たるではあるまい乎。奉天省は一應張學良の支配を見るとしても、之が久しく安泰なり得るや疑はしい。況んや之に依つて他の二者まで支配せしめんとするの困難なのは、言ふ迄も無い。

勿論此見方が張作霖の再起し難き場合を豫想してのことなるは、讀者の了解を請ひ置かねばならぬ。萬一、作霖の病、天佑に依つて快癒し衙天の意氣を回復し來るとしたら、此見方は變へられねばならぬ。尤も彼が快癒したとしても、その最近の失勢、そが、漸く過去の人物たらんとする大體の傾向に伴ひ、又た吳俊陞を失つた點に顧み、その滿洲支配力が減退せねばならぬのは明白だ、が唯だそう言ふ變化は彼の亡滅の場合ほどに急激でなく、徐々に來るものと思はねばならぬ。

而してコウ言ふ東三省中心勢力の喪失が我國に及ぼす影響はドウかと言ふと、先づ之迄のやうに確實な交渉の相手方を失ふ點に於ては、不利少なからぬことを感ぜねばならぬだらう。人或は言ふ張作霖は大分頑强で無理なところがあつたと、然かもそれほど頑强でない相手でも、それが甚だ力弱く、約束した所を行ふ能力も意思もなく「あした待つ間のかけらう」のやうなものであつては、何にかあらう、又たそれが領內治安を保ち得ず、度々日本に居留民保護問題を提供するやうなものであつても、何にかあらう、コウ言ふ點から見ると、張の失勢は滿洲につき我國にとりて事端を滋くする可能性あることも拒まれ得無いのである。

四

だが、他方から見ると、張の失勢は支那にとりては、差當り南北妥協の可能を大にし、滿洲を戰禍から救ふことともなり易いのである。何となれば今日滿洲の豪傑連を見ると、鹿を中原に逐ふやうな野心ある人物は一の作霖を除いては無いのである。彼れ無くば、南方國民政府も大に安んずるに違ひ無い。次ぎに張學良になると、年少新進なる丈け、新思想、三民主義を理解し、英語をも話す位ので、南方の面々と變らぬ位だ。他にも同種の人物が多い。かう言ふ調子で、一方に於て滿洲の治者階級が保境安民に滿足しつゝ、他方に於て本土の新政策樹立の平和な會議に參加することともならば、滿洲內部の政權爭奪は兎も角として、本土から滿洲に跨る如き戰禍丈けは大に避け得らるゝ可能性が多くなると言はねばならぬ。コウなり得る一面丈け滿洲平和維持を望む我國にとつても、歡迎に値ひするものだと言はねばならぬ。コウ言ふ風に見て來ると、滿洲統一が減じて內爭を甚しくして來ることは、我國にとりて厄介千萬でもあり得るが、保境安民主義の實行が容易になり得ることは、善い點であると言へるのである。

五

併し此變化が我國に有利になるか、不利になるかは、結局のところ

我國の外交の此間に處して其宜しきを得るか若くは巧妙であるかに依つて別るゝだらう。

萬一、その途を誤つたら、それこそ或は滿洲に高まつてゐる排日熱と馮蔣諸軍隊の「打倒日本帝國主義」呼號を一致せしむる虞を造り、それは統一を失つた滿洲に於て滋き事端を造り、止むを得ず我國をして國民の欲せぬ冒險にひき入れらるゝこととも〔なら〕う。同時に此際能く世界民族問題の與ふる教訓を考慮して順路を失はざらば、今回の事件は却つて新日滿關係改善の一好機ともなるだらう、結局は「すべてに我に在り」と予は言ひ度いのである。

此外に、張の失勢馮の擡頭は北滿に於けるロシアの活動を強めるだらう、之も我國にとりて注意を値ひするに違ひ無い。唯だ玆には之に言及する餘裕が無いので略して置く。

政友會政府の對支政策批判

小村俊三郎

一

政友會政府の對支政策に對する批判を中心に、支那南北の統一や滿洲の問題、並びにこれを繞ぐる列強の關係等を論じやうとするについては、先づ斷つて置かねばならぬことがある。それは政府が既に支那に向つて出兵し、民間にも虐殺事件のあつたため、對支膺懲論等が盛んである今日であるから、これに關する言論批評を愼しめといふ世論についてである。が、自分はむしろこれに反して、政府が既に、、な出兵をし、その始末がどうなるか分らぬ、支那は勿論對内對外にも、如何なる影響が起つて來るかも計られぬ。譬へば一定の方針もない船頭が、舟を乘出して暴風雨に逢ひ、果ては暗礁にのり上げるかも知れぬといふ今日であるから、猶更聲を大にして、必要な注意を與ふることが、乘合つた國民の義務であるとこそ思ふのである。かゝる時肝腎な、、、反對黨までが、たゞひたすらに遠慮謹愼してその口をつぐんでゐるのでは、政黨も議會もいらぬといふことにならう。今度の事件とは、多少趣をば異にしても、英國の阿片戰爭の如き、南阿戰爭の如き、自由黨は何時も、保守黨政府の政策に反對した。戰爭論者のみが愛國者でもなければ、非戰論者のみが非愛國者でもなく、國家は却つ

てこれが爲めに救はれるのである。對獨戰爭にすら、ラッセル達のやうな良心主義者はこれに反對した。我日露戰爭のやうな場合は、勿論格別である。

又た濟南に虐殺事件があつたため、全支那を膺懲せよとの議論があるがため、軟論を愼めとの說に對しても、自分は略ぼ前と同樣の意見を有する。けだし、かゝる議論は、暴を以て暴に代へ、血を以て血を洗ふと同樣で、公憤に燃ゆる激情は兎に角、實際には合理的でもなければ、可能性もない。日支の大局に顧りみても、國際の道義に照らして見ても、他に正當な解決の道を求めねばならぬ。遠慮なくその意見を公表することが、即ち國家を救ひ、大局を救ふ所以であつて、モーラル・カレッヂをもつた眞の勇者の然すべきことであらうと思ふのである。

二

次に現政府の對支政策を、政友會政府のそれだとして、これを批判するについても、多少の前置が入用だ。近來の軍事と外交とは、表面から見て、その總べてが政黨化したといはねばならぬ。それは政友會の總裁たる田中男が、同時に總理でもあり、外相でもあり、陸軍大將でもあるが上に、その執りつゝある對支積極政策は、政友會の標榜でもあるからである。然るにその政友會政府の對支政策は、對滿交涉行詰りの前後から、殊に最近の對支出兵方針の遂行に至つては、政友會出身の關係乃至その黨部までが、果してどれだけの程度に、これを諒知してをるかも疑問であり、乃至肝腎な田中男が、總裁、總理、外相として、またどれまでの範圍に、その樞機を握つてをるかさへ、實は甚だ疑問である。

外間に傳ふるところでは、外務省でも、政務次官と亞細亞局長との外、當然に關係をもつべき歐米、條約、通商の各局長すら、餘り評議に參與してをらぬとのことである。海軍當局の如きも、南北支那の警備については、對支政策の如何により、重大な責任を負はねばならぬ上、、、、、、、如何によつては、、、、に向つても、更にそれ以上の覺悟を要する譯であるのに、政府政策、、、が、どこにあるか分らぬといふので、海軍省も軍司令部も、參謀官と、徒らに憂慮を重ねつゝあるとかいふ評判である。又た肝腎な陸軍省と參謀本部とでも、軍部戰略は、必ず政府の政策に伴ふべきであるが、それに一定不動のものがなくては、その用兵作戰も出來ぬ上にかゝることでは軍隊心理と國民精神の上にも、、、、、、、を來さぬとは限らぬと心配してゐるものがあるとかいふことだ。殊に最近に奉天爆彈事件があつてから、滿洲に如何なる變動があるかも知れぬといふのでかの覺書で聲明した必要且有効な手段云々の手前に對しても、猶更豫め政策の如何を知つて置く必要がある。しかし、その政策協定のため、これまで外務省主宰の下に設けられてゐた外務、陸海軍の三省會議で聞いて見ても、更に要領を得ぬといふので、三省會議廢止の意見まで、軍部から持ち上が

つたとかいふ程で、結局は、、、、、、、のものが、主として政府の政策を左右し、政友會は勿論、、、も若くは知らぬかも知れぬといふことになつたと、新聞にまで報道さるゝに至つた。政友會政府の所謂對支積極政策、出兵政策なるものも、その正體を洗つて見れば、、、、、、ものになつて來る。これを他の内政方面人事方面等の關係に照らして見ても、それが本當であるかも知れぬ。かの[illegible]論者の如きも、、、、を知つたならたゞあきれる外はないであらう。然からば尚更自由に忌憚なくこれを批評し、論議することが、即ち國家國民のために忠實なる所以であらねばならぬ。しかし、兎に角、それが政友會政府の外交政策である以上、たとひ田中大將自身若くはその側近傍系のものに、これを誤まられたとしても、その總べての責任は、政友會が負はねばならぬことになるのは、いふまでもない話である。

三

政友會政府の對支政策根本の誤りは、先づ第一に支那の大勢人心が平和統一を熱求し、北伐の完成と共に、その時機が爛熟し、これに反し、北方軍閥の沒落が、目前に接近してゐたことには、一切無理解無頓着で、新興の南方勢力には、、、、、、もなき反對に、孤城落日の奉天派にだけ、、、、、、、、、を示めし、終にこれと心中同然の憂目を見た。次ぎに支那の所謂赤化的傾向から來た通商貿易の脅威でも、滿洲や山東における利權の保持伸張でも、支那國内の平和統一の大勢人心に同情して、これを援助し、內亂の終熄と秩序の整頓にあり、國民心理の安定と、對外政策の妥當に歸することを圖つてやり、その諒解の下に、一切の解決を期することが、根本の大計でなければならぬのに、政友會政府の對支政策は、たゞ徒らに積極政策を呼號し、極端な反動政策のみを振廻はし、遂には、、、、、、、、、、、、、、、、支那の平和統一の大勢と正面衝突をし、揚げも卸しもならぬことになつた。

以上は主として、支那全體に關することだが、政友會政府は、その大局と大勢とを見る明に、全然缺けてゐたために、たゞ滿洲の一局部をのみ見、その目を通して見たものは、またたゞ張作霖一派の勢力だけであつた。そして自己が力の崇拜者であるために、張作霖の力をも無暗に買かぶり、これと所謂親善の交渉を試み、散々な失敗の揚句、一顧をも得るところがない代りに、あらゆる侮辱と排斥とを受けたにも拘らず、尚これを唯一の相手としてゐた。然るにかの爆破事件によつて、その唯一の相手をも失ひ、滿洲には却つて南方勢力が、間接直接に侵入して來る趨勢を導いた以上、山東出兵も、天津北京出兵も、乃至滿洲に關する例の警告も、皆な、、主義の發現であつて、南軍の進出を妨ぐる手段に過ぎぬと、支那の大衆に映はしめ、その本土にて滿洲にも、其[illegible]取らぬ以上に、底の知れない排日の恨みを植付くるに至つた。對支出兵が、第二のシベリヤ出兵であれば、濟南の虐殺も、寛第二の尼港事件である。しかも、この先き、またどういふ事件が

認するかも計られぬ。その總べては、要するに、支那の大勢人心を誤解してこれを敢行し、これを刺戟したために、自ら招いた禍であるといふことも出來る。

四

政友會政府の對支政策根本の誤りは、これを徹底的に批評すれば、大體右の通りである。言ひ方が露骨に過ぎて、彼等には氣の毒な上に、それは皆な我政府自身の政策に關し、その國民の立場に立つた議論であるから、主として主觀的片面的の見方に流れた。これを客觀的双方的に見れば、勿論支那にもまた根本の誤りがある。逆殺事件の如き、事後の問題は別論とし、そもく我政友會政府をして、前述のやうに支那の大勢を誤斷せしめ、妄りに積極政策、出兵政策を振廻はして、彼我の人心を刺戟し昂奮せしむるに至つた根本の責任は、支那自身がこれを負はねばならぬ。

一昨年以來所謂共産主義の横行、帝國主義打倒の宣傳、不平等條約廢棄の運動、不法課税の頻發に加ふるに、漢口事件、南京事件等の續出は、日本のみならず、列國の反感を激發し、その對支政策を、反動主義の一方に走らしめた。また一般に所謂支那の民族性の上に、國民革命を以て自ら任ずる南方派中にも、內爭に加ふるに內爭を以てし、その北伐や平和統一の前途に對し、同じく日本及列國をして極度の悲觀と懐疑とに陷らしめた。且それは獨り日本と列國とに止まらず、昨年の末頃までは、支那南北の國民及び國民黨の內部にも、同樣の悲觀と懐疑とが漲ぎつてゐた。それは自分がその頃支那に遊んで、實見したところである。それ位いであつたから、昨年末の共産黨分離から討伐、延いて勞農露國との斷交にまで進んだことも、また本年初めの南京會議で、國民黨とその政府との根本改造を斷行したことも我日本では一切これに無關心で、更にこれを信用するものがなかつた。同時にこれ北伐陣容の立て直しも、その勝利も、平和統一の望みも、同樣にこれを馬耳東風に附した。偶々自分等が、これを筆にし口にして、一般の注意を促がさうとしても、たゞ物笑ひの種にせられる位のものであつた。

そんな工合であつたから、元來反動思想を以て固まつてゐた政友會の政府が、支那の大勢人心を誤斷し、その結果また北方軍閥の力をも過信したのも無理のないことゝも言へる。支那の將來に絶望した彼等が、たゞ滿洲の一局部に、その眼光を集中し、その利害關係に・・問題が手傳つて、偏北擴張の一點張りと見らるゝに至つたのも、けだし已むを得ぬ成行であらう。そしてそれは獨り政友會とその政府のみでなく、思想問題とも關聯し、世界一部の反動思想の影響もその上に、わが幣原外交に對する・、、をも加へ、、、、、、、、、、、、、、、が政友會政府とその意見感情を同くし、極度の反動政策を執ることとはなつたのである。故にその積極政策も、出兵政策も、皆なこのやうな反動思想を背景とした産物である。これを一面から見れば、歐洲大戰

以來の自由主義、平和主義に對する挑戰であつて、從つてその結果としても、、、、、、、、、、、、、、、、、、の關係をも、これをパリ會議、ワシントン會議前に逆進せしめんとする傾向に、我日本の、、、、を導かんとしてゐるものである。

五

これは勿論日本のため、支那のため、併せて東洋と世界の平和大局のため、決してこのまゝに一任して置かるべき問題ではない。さりながら、その根本の原因は、主として何れにあるか。それは即ち過去の支那が、我政友會政府をして、その大勢を誤斷し、、、、、するやうな政策を執らしむるに至つたものだといつても、過言ではないのである。我國民から言へば、國民自身にも、その大勢を認識し、大局を維持し、政府をしてこれを誤らしめぬだけの判斷と、努力に缺けてゐた誤りは免れぬが、しかしこれを誤つた國民は、獨り日本國民のみではない。英米の如き、皆な昨年以前の支那に懲りて、日本の反動政策を慫慂して今日に至つた。それ故に、日本が山東滿洲に向つて、いよ〳〵極端の反動政策を實行するに至つても、彼等の批判は、今日までのところ、日本に對しては幸か不幸か、皆なその判斷を鈍らしてゐるのである。が、我國民の注意すべき點は、今日までにおける列國の批判でなく、今後におけるその行動である。否な列國の批判や行動を顧慮するよりも、我國自身の政策が、日本のため、支那のため、即ち東洋大局のため、果して正當なものであるかどうかの點であらねばならぬ。

兎に角、日支兩國の現在關係は、我極東の大局のため、これをこのまゝに、放任して置く譯には行かぬ。それには、日本を誤らした支那も惡るければ、その誤りを犯かした日本も惡るかつた、即ち兩國の間に全然諒解が缺けてゐたためであるといふを、双方で覺悟し合ひさへすれば、そこに融和の端を見出だすことが出來る。山東出兵も、滿洲出兵も、乃至、、、、、、、、、支那の虐殺事件も、日本の、、、、も、皆なその諒解を缺いだことに發した、結果であると觀念すれば、同樣に解決の緒に就くことも出來やう。そしてその根本の誤りは、最初から繰返して來た如く、支那における平和統一の大勢を、日本が理解することが出來ず、支那もまだ日本にこれを理解せしむることが出來なかつたとしたところで、今日は既に北伐が一段落を告げ、奉天軍閥の潰敗をも見たことであるから、その大勢は誰れが目にも略ぼ既に明かとなつた筈である。で、この際日本が蹶然としてその過ちを悟り、今度は進んでその平和統一の事業に同情し、これを援助することを以て根本政策とすることにしさへすれば、それが即ち支那に取つて、最大重要の事柄であり、そのためには、列國に先んじてまづ日本の同情援助を得る必要もあるのであるから、その他の問題は、双方の間に、自然と解決の道がつき、即ち禍を轉じて福となすことが出來ると思ふ。よしそれが多少困難だとしても、極東の大局には換へられぬから

兩國の識者は、協心戮力飽迄その目的に向つて進まねばならぬ。

六

が、しかし、問題は現在の我政友會政府が、過去一切の行掛りを棄て、毅然且斷乎として、この根本政策に向つて、邁進することが出來るものであるや否やの點にある。果して現政府にそれが出來ず、そして現在のやうに、内政上の如何なる問題に向つても、自己の責任にも無知覺であり、全國の輿論にも無感覺であり、一切を犠牲にして、ただその政權にカジリ付いてをるやうに、外交上の如何なる問題に對してもまた同樣に不死身であり、不傳導體であるならば、到底、日支兩國の大局關係を救ふことは出來ぬ。何となれば、支那の平和統一は、北伐の一段落を告げた現在の時機が、最も重要な瞬間であり、この際再び我日本の政策態度を誤つては、兩國の關係は、ます〱救ふことが出來なくなり、如何なる事態を生じ出すかも計り知れぬからである。それには勿論支那にもその自省自責を求めねばならぬが、しかし、我等日本國民としては、先づ我現政府の反省を促がさねばならぬ。到底その反省が出來ぬとあれば、進んでこれを更迭せしむる外はない。それには先づ我國民に向つて、何故に我政府の政策が、誤まつてをるかといふことを知らしめ、同時にその解決の手段についても、これを明かにせぬ以上進んで現政府の反省を促がし、又た退いてこれを更迭せしむることも出來ぬから、主として抽象的にこゝまで論じて來た自分は、再び政友會政府の對支政策に對し、その具體的批判に立返らればならぬ順序である。が、與へられた紙面には限りがあるから、その詳細に及ぶことの出來ぬのを遺憾とする。

マルクスとエンゲルスの生活

マルクスとエンゲルス

岡田一夫

カール・マルクスとフリードリツヒ・エンゲルスの名と事業は人類と共にあるであらう。何者、近代的プロレタリアートの世界史に於ける地位を認識し、プロレタリアートをして自らを解放するの條件を知らしめたからである。そして又人類一般の解放の條件は、プロレタリアートの自己解放にのみかゝるからである。

人類はマルクスとエンゲルスなる二人の名を切離しては考へないであらう。人類の記憶には此の二人は同時に現れるであらう。彼等の事業は常に彼等二人に歸せられなければならぬ。それは渾然として融合せる二人の事業である。だからカール・カウツキーはエンゲルスの死に際して云ふ。「然り、吾々はエンゲルスの逝去を以てカトル・マルクスのそれよりも遙かに苦痛を覺ゆるであらうとも云はれ得る。何者、吾々にとりては、エンゲルスの死と共に始めてマルクスも亦全く死んで了つたからである。エンゲルスがなほ生存せる間は、その精神生活がマルクスのそれとあんなにも深く融合して居た爲に、マルクスはなほ吾々の間に生きて居た。吾々は兩者の活々たる影響の下にあつた。今や兩者共になし。」と。それ程に彼等は緊密に結び付いてゐる。その思想に於て又その交情に於て彼等の間には毫末の間隙をも見出す事は出來ない。而もその事は、彼等の青年時代よりその墓に至るまで續いたのである。彼等の間に往復せられたる書翰を讀むものにして、友を有する人の喜びを今更の如く想ひ起さないものはあるまい。マルクスの天稟を以てするも、エンゲルスなくしてはかの偉業の幾何をなし得たであらうか。吾々はこの場合單にエンゲルスの精神的、思想的協力をのみ念頭においてはいけない。彼のマルクスに對する物質的、金錢的協力をも思ひ浮べなければならない。

勿論マルクスは自分の一家の生活確立に努めた。然しその努力は多くは不運を以て報ひられた。例へばメーリングの云ふ如く、バーゼルで印刷されて居た彼の共産黨事件に關する著作はドイツの國境で[illegible]の手に落ちて了ひ、マルクスはなほ印刷費用の責任をも負はなければ

ならなかつた。ナポレオン・ボナパルトのクーデター（一八五一年十二月二日）に關する著書はアメリカに於てやつと世の光を見る事が出來た。それも一勞働者がその印刷の爲に彼の四十弗の貯蓄を犠牲にしてくれたからである。更にかの『フォークト氏』なる著作は一文の收入になるどころか、却つて失費となつた。

マルクスは又一八五〇年代にはニューヨーク・トリビューン及びニュー・アメリカン・サイクロペーディアに執筆した。がそれから來る收入は決して彼の一家の經濟を確立するに足りなかつた。此の兩者の出版者ダーナは『理論的にはフーリエー主義者であつたが、實際的には冷酷なるヤンキーであつた』（メーリング）。彼はマルクスを如何に利用すべきかは知つて居たが、彼の商賣に貴重なる此のマルクスの生計を如何に確立すべきかは彼の關する所ではなかつた。

永く續く貧乏は當然にマルクスの一家に不健康を齎らした。彼自身、愛妻、愛兒は代る〲貧乏人の受くべきものを受けた。そうしてこの事は又當然に失費を伴ふものであつた。その事はまた貧乏を深める原因であらう。そうしてそれはまた不健康へ。

實にエンゲルスは此の如く貧困と苦鬪せるマルクスを助けて、彼をしてプロレタリアートの解放運動の爲に、又彼の畢生の大著、資本論の完成の爲に、自らを犠牲にして悔いなかつたのであつた。エンゲルスは自ら好まない父の工場の支配人となつてマルクスを經濟的に助けたのみならず、そのニューヨーク・トリビューン、ニュー・アメリカン・サイクロペディアに對する寄稿に協力した。マルクスが最初ニューヨーク・トリビューンに寄稿せんとする時に當り、彼の英語は未だ新聞の通信を書くに充分でなかつた。そこで、『彼は二十ケ國語を話る』と友人間で云はれた位語學に堪能であつた所のエンゲルスは、マルクスに代つてその名の下にドイツ革命及び反革命に關する一連の論說を書いた（その後まとめられて獨譯されたが、その著者は誤つてマルクスとされた）。後にマルクス自ら通信を書くやうになつてからも、エンゲルスはその英文に手を入れる勞を惜まなかつた。更にマルクスがニュー・アメリカン・サイクロペディアに寄稿するに當つては、軍事に關する論文の多くはエンゲルスの筆になつたものであつた。エンゲルスは最も高くマルクスの天稟を評價し、自らは常に第二ヴァイオリンたる事に甘んじた。エンゲルスにとりては、マルクスの大著の完成とプロレタリアートの解放とが他のあらゆるものに値した。

一八六七年の春、マルクスは資本論第一卷の原稿を出版者に渡す爲にハムブルグに旅行し、次いでハノーヴァーなるクーゲルマンを訪ねて、そこに數週間愉快なる日を送つた。そこからマルクスはエンゲルス宛に書いた。『君なくして僕は此の著述を決して完成し得なかつたであらう。そして僕は君に確言する、君が君の有能な力を主として僕故に商賣の爲に浪費し、朽ちさせた事、而もその上に、なほ僕の瑣細な貧乏まで總て僕と共に味はざるを得なかつたといふ事は、二六時中僕の良心を惡夢の如く重からしめて居た、といふ事を。』と。資本論第一

巻の最後の校正を終へた歴史的の瞬間、一八六七年八月十六日、夜中の二時、マルクスはエンゲルスに書き送つた。『愛するフリードリッヒよ！　たつた今この本最後のボーゲンの校正を終へた。……かくてこの巻は出來上つた。それが出來たのは偏に君のお蔭だ！　君の獻身的な援助なくして此の三巻を仕上げる巨大なる仕事は僕には不可能であつた。僕は感謝に滿ちて君を抱擁する』。

マルクスの死後エンゲルスは明に世界の勞働者運動の第一ヴァイオリンとなつた。謙譲な彼はなほ常に自らを低くした。『あなたは私に相當以上の功績を歸して居られる……若し吾々が、マルクス程の人と四十年の永きにわたつて協力するの幸福を有つた樣な場合に於ては、その人の存命中には、吾々の自ら値すると信ずる程には認められないのが普通である。がそのより偉大なる一方が死んで了ふと、他のより小なる一方が過當に評價され勝ちである。そして丁度今の私の場合がそうである樣に思はれる。歴史は之等總ての事を結局は整理するであらうが、それまでは幸に整理から免れてゐる……』。エンゲルスはメーリングに宛ててそう書いて居る。

ロンドンに於けるマルクス、エンゲルスの私生活

後藤信夫

今では芝居小屋の巣窟となつて居る倫敦のウエスト・エンドの一角にソホーと呼びなされた倫敦でのラテン區(クオーター)がある。マルクスの一家が一八五〇年から數年間の亡命生活を營んだデイーン・ストリートの家が、今もなほ其處に殘つて居る。一八五〇年代に此のソホーの一角は大陸から追はれた獨佛の革命家で一杯であつた。恐らく今日よりも遙かに雜然と汚かつた此の界隈は、當時の倫敦市中に於ける一獨立國の趣きがあつた。『赤狼』のウオルフやシラムやリープクネヒト等が空腹を堪へ乍ら燃える樣な氣焔を擧げて居たのは此處である。マンチエスターに行く迄エンゲルスの住つて居たのも此處である。此の時代のマルクス一家が如何に困窮のどん底にあつたかについては我々はよく識つて居る筈だ。

デイーン・ストリートの家には部屋らしい物とては二間しかなかつた。併し此の家は多くの故郷を追はれた人々にとつては沙漠の中のオ

アシスにも比すべきものであつた。何となれば其處には廣い倫敦の何處にも求め得られない多くの物があつたから。第一に、其處には美しい氣高いマルクス夫人が居た。無邪氣で可愛らしい子供が居た。そしてよく氣のつく親切なレンヘンと呼ばれた彼等の下女が居た。此くして多くの人の亡命生活はマルクス家と離すべからざる關係にあつた。しやれ者の小男ルイ・ブランがマルクスを訪れたのも此のディーン・ストリート時代の事である。『革命及反革命』『ブリユメール十八日』や『ニューヨーク・トリビユン』への寄書が此の時代に書かれ、『資本論』のための宏大なる下書が此の時代に書かれた。併しマルクス夫妻にとつて此の時代は慰め得られざる悲しみの連續であつた。貧窮の故の營養不良と手當の不充分のために彼等の二人の男の子と一人の女の子とを失つたのは此の時代なのである。

マルクスの一家が倫敦の北の郊外なるグラフトンテラスの一軒立ちに引きうつつたのは一八五七年頃の事である。之は爾來十數年間彼等の住居となつた。第一インターナショナルが創設せられ、『資本論』の第一卷が出版されたのは此の間の事である。

當時エンゲルスはマンチエスターの會社に勤め乍らラフアルグの所謂『二重生活』を續けて居た。彼には事務所に於てする商業生活と郊外の小さな家に於てする自由人の生活とがあつた。事務所に於て彼は有能な經營者であつた。そして自分の家に於ては『トリビユーン』への寄稿家であり、戰史の研究家であつた。數多くの大陸やアイルランドから逃れて來た人々は此處に慰安と隱所を見出した。

一八七〇年にエンゲルスが二十年の桎梏から解き離されて倫敦に來た。リイジエンツパーク・ロードの彼の新居はマルクスの家に歩いて十分とかゝらない所にあつた。今迄も互ひに食ひ込み合つて居た二人の生活は此の時以來殆んど何れ丈けがマルクス何れ丈けがエンゲルスの其と分ち難きにまでになつてしまつた。

七〇年代の始めにマルクスは近くの少し小さな家に引移つた。二人の娘が結婚したもので、今までの家が大きすぎる樣になつたのである。此の家はマルクスが死ぬ時まで住つて居た、謂はゞ臨終の家である。

彼の書齋は、此のメイトランドパーク・ロードの家の二階の公園寄りにあつた。窓と反對側に大きな爐があつてその兩側に書棚があつた。そしてその書棚は古新聞や書物で天井まで一杯につまつて居たと、ラフアルグは語つて居る。窓ぎわの卓にも新聞と云はず本といはず、原稿といはず、ありと凡るものがうづ高く積み重ねられて居た。併し何人も之等の物に手を觸れる事は許されて居なかつた。大判の本と小さなパンフレットとが隣り合せになつて居ても其はマルクスにとつては問題でなかつた。どんな時でも彼は人が自分の手足を動かす樣に容易に正確に必要な書物や紙片をひき出す事が出來た程、彼はその所在をよく知つて居た。さうしてマルクスの仕事机は部屋の眞中にある、二尺に三尺位の極めて簡單な其であつた。又仕事の疲れを休める爲めには長椅子もあつた。彼はよくその上に横になり乍ら好きな小説をよん

だりしたと云はれて居る。

多くの勉強家がさうであつた如く、マルクスも夜更しをよくした。併しその爲め朝寢をすると云ふ事はなかつた。そして、朝の珈琲をすまして二階に上つた時から彼の日課は始まるのである。何偏か食事の用意が出來たと報らせて漸く下に降りて來たと思ふと、食事もそこそこに又二階の仕事場に立籠つてしまふ事も珍しい事ではなかつた。事實、過勞はマルクスの壽命を短かくした一つの大きな原因となつた事は我々の知る通りである。

午後には大ていエンゲルスが訪れて來て、議論に一二時間を費した。二人が余り、戸口と窓との間を對角線に歩き乍ら議論を闘はしたもので、其處だけ絨毯がすり切れて、まるで草原の中の歩道の樣になつてしまつて居たと云はれて居る。天氣でもよくて氣分の向いた時には、二人連れで近くのハムステッド・ヒースに散歩に出かける事もあつた。此處はマルクス一家が始めて倫敦に落着いた一八五〇年頃から皆の特別に好んで、よく日曜等の散策に來た所であるが、當時のヒースは今よりもズット廣く、今よりも遙かに野趣に富み、春になるとヒヤシンスや水仙が青草原に咲き亂れたものだと、ワーブクネヒトが書いて居る。何れにしても、マルクスの勞作を生む上に、彼の書齋と、大英博物館の讀書室と同じ役割を此のハムステッド・ヒースが演じたと云ふ事は爭はれないであらう。

ヒースをマルクスの家のあつた南の端から上つて行くとジヤツクストロース・キヤスルと呼ばれる休み場がある。此の邊がロンドンの町からかなり離れて居た其の頃には此の家は多くの人に散策の後の憩ひ場所を與へて居た。マルクスの一家や彼の友人が何百偏となく此所に立ち寄つた事であると云ふ。併し其は半世紀も前の事だ。乘合自動車がハイゲイトへと走つて居る今日、マルクスの面影を偲ばんとする人は寧ろ直ちに東の方ハイゲイトへと志すであらう。其處にマルクスと彼の妻エンニー及び彼等の永年の忠實なる伴侶であつたレンヘン――ヘレネ・デムート――が眠りつゝ横つて居るからである。

『私はあれ程幸福な結婚を稀にしか見た事はない』とボルンは彼の追想記に書いて居る。彼等は喜びに於ても悲しみに於ても――此の後の物は彼等の生涯を通じて余りにも多かつた――其の運命を分ち合つた。そも〳〵の初から波風に富んで居た彼等の結婚生活は、普通の意味で云ふ幸福と呼ばれるにしては、余りに苦勞と、悲しみに滿ちて居たであらう。併し、『結婚當事者たる二人の個人の成長を助けて育てゝ行く樣な結婚こそは最上の結婚である』としたならば我々はマルクス夫妻に見出す以上の結婚を見出す事は甚だ難しいであらう。ボルンの如く彼等の大陸時代の知人もワーブクネヒト、ラファルグ、コワレフスキーの如き後年の友人も一人としてマルクス夫人に對しての讃辭を惜む者はない。彼の女は容貌に於けるが如くその魂に於ても情操に於ても、稀に見る美しき、調和をもつた人であつた。彼の女の死がマルクス自身の死を導いた事を思へばマルクスの生命の何れ程大きな部分が

彼の女によつて占められて居たかを察するに余りあるであらう。

エンゲルスの結婚生活に就て我々は比較的知る所が少い。アイルランド人であり獨立黨員の熱烈なる後援者であつた彼の最初の妻のメリーは一八六三年に死んだ。此の事件に關係してエンゲルスとマルクスとの間に一度限りの小さな行き違ひにあつた事は人の知る所である。エンゲルスは後メリーの妹のリツジーと結婚した。併しリツジーもエンゲルスに先だつてしまつた。マルクスが二人の男の子と四人の女の子を持つたに反し、エンゲルスは子供がなかつた。その代りエンゲルスはマルクスの子供達に對して第二の父親の役割を演じたのである。

マルクスとエンゲルスとの生涯を通じて最も著しい一つの特徴は、彼等が彼等自身に就いて物語る事少かりし點である。彼等は必要なる場合にのみ彼等自らに就いて書いて居る。我々は『經濟學批判』の序文に依て、辛うじて、如何にマルクスがその唯物觀の定式に到達したかと窺ひ知る。『フオークト氏』は恐らくマルクスが自已の立場を釋明する爲に物した唯一のものであらう。『私は十年の間、絕えず攻擊を受けつゞけて來たけれ共、いまだ曾つて、一度も自已の傳記を以て獨逸の公衆を惱ました事はない』と一八六〇年に書いて居る。マルクス亡き後、エンゲルスは屢々彼等の歩み來りし道程を振りかへつて居る。併し其は同志へ對する忠告と註釋のためであつて、私人的感傷からしてゞはない。彼等は一度も人の情に訴へて書いた事はない。彼等は彼等の科學的社會主義者としてのなすべき事の何たるかを知り、其を實行しただけの事である。

其故我々は辛うじて少數の人々の手になつた回想記の內に彼等の面影を偲び得るに過ぎない。併し彼等が彼等の生命を以て記し殘した『言葉なき傳記』に人は多くの物を學ぶであらう。

マルクスの遺族

石濱知行

マルクスの遺族について述べるまへに、順序としてまづ彼を廻ぐる家族の大體のことを記るして置かう。それがためにはここに極く簡單な系圖を書くのが便宜であると思はれる。

- ハインリツヒ(父)
- アンリエツト(母)
  - カール・マルクス
  - エニー(妻)
    - エニー(長女)
    - ロンゲ(夫)
      - チヤン
      - アリー
    - ローラ(次女)
    - ラフアルグ(夫)
    - エドガー(長男)
    - ハインリツヒ(次男)
    - フランチスカ(三女)
    - エレノア(四女)
    - アヴエリング(夫)

父のハインリッヒ(Heinrich)はマルクスが小供の時に大きな影響を與へた一人で、マルクスは父を平常尊敬する三人の聖者の一人に考へ、死んだ時にはその内ふところに父の寫眞を入れてゐた位であつたが、マルクスの二十歳の時(一八三八)死んだ。母アンリエット(Henriette)は特別に特色のある婦人ではなかつたが賢母としてよくマルクスを愛撫した。マルクス四十五歳の時(一八六三)トリエールで死んだ。妻のエニー(Jenny)はマルクスの父の親友ウエストフアーレンの長女で兩人は子供時代からの遊友達であり、伯林大學時代には許嫁となり、千八百四十三年乃ちマルクスが二十五歳の時にクロイツナハで結婚した。それ以來彼の女は一生涯を通じてマルクスの良き伴侶であり、共働者であり、困苦を共にした。兩人の交情が常に濃かであつたことは、マルクスが三册の詩集を作りそれに『愛の書』といふ名をつけ、扉に『我親愛なる、永久に愛するエニー・フオン・ウエストフアーレンへ』と書いてエニーに贈つた伯林大學時代の昔から(マルクス・エンゲルス全集第一卷リヤザノフの解説による)、娘エリーナーをして『二人は一緒に今一度若返つた。――母は戀する乙女に、父は戀する靑年に、一緒に人生に歩み入る乙女と靑年に――そして御互に生涯の別れを告げてゐる病める老人と死なんとせる老妻とではなかつた』(リープクネヒトのマルクス追憶による)と言はしめた千八百八十年の晩年に至る迄、終始を通じて渝らなかつた。その良妻エニーもマルクスに先立つて千八百八十一年十二月二日倫敦の地で死んだ。エンゲルスは彼の女の墓畔に立つて次の如き別辭を朗讀した。

『我友よ！　我々が今や葬らんとする氣高きこの夫人は千八百十四年ザルツヴエーデルに生れた。彼の女の父、ウエストフアーレン伯爵はやがて政府顧問官としてトリエールに移轉し、そこでマルクス一家と親しんだ。子供達は共に成長した。二人の天才(マルクスとエニーを指す)も居た……。エニー・マルクスは彼の夫の運命、仕事、闘爭を共にしたのみならず、最尚の理解と燃ゆるが如き情熱を以てそれに參加した。鋭い批判的悟性、政治的タクト、精力と性格の情熱、運動に於いて闘爭の同志に示した犧牲を以て、四十年間に、一人のかくの如き女性がなした所のものは公には知られてゐないし、また同時代の如何なる新聞にも載せられてゐない。……若しこゝに他人を幸福にする事を最大の幸福とする女性があつたとすれば、それはこの女性であつた。』(ダンネンベルグのカール・マルクスに依る)

マルクスの敬愛した三人、父、母、妻は彼を殘して先立つて行つた。マルクスは、しかしまた、前後四人の最愛の子供を失はなければならなかつた。彼と愛妻との間に千八百四十九年に生れた次男ハインリッヒ(Heinrich)は翌年急死した。千八百五十一年に四女フランチスカ(Franciska)が生れたが十一ヶ月で乳呑兒のまゝ死んだ。この時はまだ妻エニーが生きてゐる時で、小供を埋葬する費用がなかつたために方方借り廻つた揚句漸く埋葬する事が出來た。『この子は世の中に生れて來たとき搖籃を持たなかつた。そして又最後の小さい家(棺)もこ

子には長く拒まれてゐた』と妻エニーは書いてゐる。千八百四十七年に生れた長男エドガー（Edgar）も、千八百五十五年に死んだ。千八百四十四年に生れた長女エニー（Jenny）は、巴里コンミユーンの闘士シヤルル・ロンゲ(Charles Longue)の倫敦亡命中、これと結婚した。ロンゲはカルバドーのケーンに生れ、千八百六十八年のバーゼルに於けるインタナショナル會議に於いて演說した廉を以て一年の刑に處せられ、千八百七十一年五月の有名な巴里コンミユーンではプルードン派を代表して又コンミユーンの機關紙公報(Journal officiel)の編輯者として參加したが、戰不利となるや倫敦に亡命し、そこでマルクスの長女エニーと結婚した。ロンゲはその後クレマンソーと共に新聞『正義』(La Justice)を發刊し、千八百八十六、八十七、九十年に亘つて巴里市會議員となり、千九百一年には義父マルクスの『コンミユーン』の佛譯を試みた。千九〇三年巴里で死んだ。エニーはロンゲと結婚して夫を助けたが、千八百八十三年一月、父マルクスに先立つ事二ケ月にして死んだ。ロンゲとエニーの間には數人の子供が生れたが、それについては後で述べる。

『マルクスは彼の家庭を何にもまして愛した』とカール・ヘンケルは言つてゐる。かくの如く愛したる彼の家庭も、彼の死の直前に於いては血緣としては僅に次女ローラと四女エレノアの二人を殘すのみとなつた。かくしてマルクスは千八百八十三年三月十四日永久の眠を眠つたのである。

私は更に筆を進めて、マルクスの遺族のことについて出來る丈詳しく述べて見やう。

マルクスの長女エニーがロンゲと結婚した事は先にのべた。彼女は父の限りなき哀悼のうちに父に先立つて死んだが、彼女とロンゲとの間に出來た子供——マルクスの孫——は彼よりも長く生き殘つた。その孫の中で我々が文獻で知り得るのは二人——アリー(Harry)とジヤン(Jean)丈にしか過ぎない。ジヤンは千八百七十六年五月十日倫敦で生れた。當時祖父のマルクスはまだ存命中で、このジヤンを限りなく愛撫した。エンゲルスとリープクネヒトが馬となり、マルクスが馭者事となつて、ジヤンがそれら三大社會主義者の上に跨り、『ユー・ノーテイ・ホース！』『ゴー・オン・プリユ・ヴイト！』と怒鳴り散らす所はリープクネヒトの追憶記の中で一番美しい場面の一つである。マルクスの子供好きは有名なものである。ステルンは『マルクスと子供』なる論文(Josef Luitpold Stern Marx und die Kinder)の中で『しかし彼は子供の愛人であり、その御伽話の話し手であり、その遊び友達であり、その馬であり、その登攀桿（クレッテル・スタンゲ）である。……一つの繪がある。マルクスは怪物となつて床につく這ひ、背中の上や、手、足、ヒゲ、のあたりには子供の群が歡聲を擧げてゐる。』と言つてゐる。この一つの繪とはおそらく、ショルの筆になるマルクスと子供といふ題の繪であらう。私は昔私の著書の中でこの繪を紹介したことがある。こんな御祖父さんに可愛がられたジヤンは幸福な少年時代を送り得た事

であらう。この腕白小僧のジャンとは誰あらう、今日フランス社會黨の一員として活動しつつあるジャン・ロンゲその人である。ジャンは大きくなつて辯護士となり、「小共和國」—Petite République—の編輯者となり、ジャン・ジョーレスと共に健筆を紙面に振せた。後「リユーマニテ」—L'Humanité—が、S. F. I. O. の機關となるやその主筆となつた。千九百十四年には選ばれて社會黨議員となつた。ツールの大會—この大會でフランス共産黨が成立した—の後、S. F. I. O. の機關として、「民衆」—Le Populaire—を編輯した。今日はハンブルグのインタナショナル局の一員である。多くの著書の中で有名なるものとしては、「フランスに於ける社會主義運動の進化」「國際社會主義運動」「社會主義辭典の第八卷」「マルキシズムの國際的政策」等がある。ここにマルクスとの間に一つの挿話がある。マルクスが彼の妻エニーに詩を捧げた事については前に一寸述べて置いたが、この詩集はマルクスの死後ラファルグの手に入り、ラファルグの死後はこのジャン・ロンゲの所有に歸した。ジャンはこの祖父と祖母の愛のかたみを大事にしてゐたが、或る時人に借したまゝ遂にどこかへ行つて終つた。今日マルクスの詩としては僅かに二篇だけが殘つてゐるにすぎないが、もしこの詩集が發見されたら單にリヤザノフの喜のみではあるまい。

ロンゲとマルクスの長女エニーとの子供乃ちマルクスの孫はこのジャンの外にアリーといふのがあつたが、これは千八百七十八年に生れて、千八百八十三年の三月廿日、乃ちマルクスの死後一週間にして死んだ。倫敦のハイゲート墓地にあるマルクスの墓碑の第三番目に「アリー・ロンゲ、彼等の孫」とあるのは乃ちこの子供の事である。マルクスの次女ローラ（Laura）は、マルクスの生前ポール・ラファルグと結婚した。結婚後は英佛間を往復してゐたが、マルクスは死の直前ドラヴエイユで圓滿なる家庭生活を營んでゐるラファルグ夫人ローラを訪ひ、共に瑞西に遊び、ゼネバ湖畔に六週間暮した。ローラの夫君ラファルグはフランスに於ける社會運動の鬪士であつた。彼は千八百四十二年キユーバのサンチヤゴに生れ、五十一年フランスに來つて學生となり、共和及び社會主義運動に身を投じた。千八百六十五年リエージユで開催された學生の第一回國際會議に加はり、その後英國に渡つてマルクスの知己を得て、その次女ローラと結婚した。巴里コンミユーンに參加したが敗れてスペインに逃げ、スペイン社會黨の爲に力を盡し、それからロンドンに歸つた。千八百八十二年フランスに歸りジユール・ゲードと提携して社會運動を始めた。千八百八十三年及び九十一年の兩度に亘つて、それぞれ六ヶ月、一年の刑に處せられた。千八百九十一年選ばれて國會議員となる。彼は更にフランス勞働黨を設立し、千九百五年迄ゲードと行動を共にした。又多くの新聞にも寄稿した。La Petite République, l'Egalité, Petit Socialiste, L'Humanité 等は彼の執筆した重なる新聞である。著書として有名なのは「怠惰の權利」「社會經濟論」「資本の宗教」「共産主義と經濟的進化」「歴史に於ける理想主義と唯物主義」「私有財産、その起源と進化」

等である。千九百十一年十一月二十五日、子供なき淋しき家庭をうれへて夫妻相携へて、ドラヴイユの別莊で自殺した。社會黨は黨葬を以て彼の死を悼んだ。

マルクスの三女エレノア(Eleanor)は、始めフランス人のリツサガレイ(Lissagaray)と戀愛に陷つた。リツサガレイは巴里コンミユーンに加つた鬪士で、倫敦に逃げて、そこでエツーナーと近づいた。リツサガレイはその後「巴里コンミユーンの歴史」を書いた人である。しかしこの二人の戀は實を結ばずして破綻した。そしてエレノアはその後英國人エドワード・アヴエリングと結婚した。彼等二人は千八百八十四年共に、チヤンピオン、バレーン、ワツツ、ヘインドマン、モリス等の運動家と共に英國社會運動に積極的に參加した。(ベーアの英國社會運動史による)アヴエリングは千八百五十一年の生れで、始めは醫科大學の先生などをして居たが、その後、社會運動に身を投じた。多才の人で論說、演說、作劇等に秀いでてゐた。後年サミユエル・ムーアと共に分擔してマルクス資本論の英譯をこころみた。その際アヴエリング夫人エレノアは、引抄の完全を期するために一切の引抄箇所を原文と對照し、從つて同書に於ける引抄の大部分を占めてゐるイギリス文獻からの引抄については、ドイツ文よりの重譯ではなくイギリスの原文を其儘用ゐるに至つた。(資本論第一卷英譯文のエンゲルスの序文による)。エレノアも亦夫に劣らず才能に惠まれてゐた。千八百八十三年五月號のプログレツス紙に彼の女は父マルクスの略傳を書いた。又ニユーヨーク・トリブユーンに書いた父マルクスの論文を集めて『革命及び反革命』とした時、彼の女はそれに序文を書いた。この序文に於いて彼の女はマルクス一家が貧窮のドン底にあつた境遇を興味深く敍述してゐる。又マルクスが靑年時代詩作に耽つた事實は、彼が父に宛てた手紙によつて始めて判明したのであるが、この手紙が發表される前に、彼女はこの手紙の解說として一つの論文を書いた。それは『ノイエ・ツアイト』の千八百九十七年十月號に出てゐる。彼女の文章家であつたことは、彼の女がリーブクネヒトの請に應じてマルクス晩年の家庭を書いた手紙を見れば明らかである。エレノアは筆の人ばかりではなかつた。自ら社會運動の陣頭に立つを辭せなかつた。千八百八十九年には巴里の勞働組合會議委員となり、千八百九十四年には社會民主同盟に參加した。又獨立勞働黨の千九百九十三年に於ける創立にも寄與する所が多かつた。この夫妻は共に天分に秀いでてゐたが、その共棲の生活はあまり幸福ではなかつたらしい。十余年の結婚生活後エレノアは遂に自殺して果てた。

かくしてマルクスの子供の中三人は病死し、二人は自殺し、後まで續くことの出來たのはロンゲ夫妻の系統のみとなつた。從つて今日フランスの政界に活躍せるヂヤン・ロンゲのみがマルクス夫妻の唯一の孫である。

以上マルクスの遺族については紙數の許す限り出來るだけ詳細に述べたつもりである。しかし、ここに血緣ではないが、その生涯をマル

クス一家の爲めに盡した一人の忠實なる女性を逸してはならぬ。それは、レンシエンと呼ばれてゐたヘレネ・デムート孃(Helene Demuth)のことである。

レンシエンは小さい時からマルクス夫人の實家たるウエストフアーレン家に仕へてゐたが、千八百四十九年の八月マルクスがパリを追はれて倫敦に行くや、レンシエンも家族と共にそこに赴いてそれから死ぬまでマルクス家の忠實なる下婢として働いた。彼の女の忠實はマルクスにもマルクス夫人にも、又多くの子供等にも愛慕された。それのみでない、故國を追はれた多くの社會運動家でマルクスの家に出入する者は皆彼の女の温き精神上、物質上の恩顧をうけた。リープクネヒトの如きは、金に困る毎に彼の女から金をせびつてゐた。彼の女の威令の前にはマルクスも頭が上らなかつた。リープクネヒトは時々マルクスと將棋を指すが、それをやる度にマルクスは神經を尖らし氣嫌が惡くなるので、彼の女はある時斷然と兩人に將棋を禁じたといふ逸話がある。マルクスが永久の眠につく時は、エンニー夫人は既にゐなかつたが、レンシエンは末娘エレノアと三週間殆んど眠らずにその最後を見護つた。「彼の女は動かなかつた。そして青年は走り去つた。彼女は困窮と貧乏の下に幸運のうちにも不運のうちにも留つてゐた。夫妻の死後はじめて安息が來た』彼の女の心づくしの看護にも拘らずマルクスが長逝するや、その晩年をマルクスの畏友エンゲルスの宅に送り、後安らかに死んだ。マルクス、マルクス夫人の希望によつて彼の女はマルクス夫妻と同一墓碑の下に葬られた。『彼の女は決して下婢ではなかつた。看護する人であり、助ける人であり、又女友達ででもあつた』とヘンケルは言つてゐる。

傳記者の傳ふる所によれば彼マルクスは非常に犬好きであつたといふことである。しかしながら、マルクスの死後この『遺族』——彼の愛犬はどうなつたか、それについて筆者は殘念ながら何ごとも知らない。(終)

迫害下のマルクス

堺 利彦

一八四二年十月、わづかに大學を卒業した廿四歳のマルクスは、初めてライン新聞の主筆となつた。ライン新聞はブルジヨア急進主義の機關紙であつた。若きマルクスの大膽峻烈なる筆鋒はドイツ全國の注目を引いた。新らしい一つの星が新聞界に出現した。然るに彼が主筆就任の後、幾許もなくして、政府の檢閲官から警告が發せられた。今少し態度を和らげなければ禁止にすると。そこで新聞社の株主等が騒ぎだした。翌年三月、マルクスは遂に去り、新聞は禁止された。『急進主義の假面が落ちた。全能の專制主義が赤裸々で全世界の面前に立つ

てゐる』マルクスはそう云つた。

一八四三年夏、マルクスはエニー・ソオン・ウエストフアーレンと結婚して暫くの蜜月旅行の後、同年秋、ドイツを見棄てゝパリに行つたそこで彼は、ルーゲ、ハイネ、バクーニン、ヘルウエヒ、フオイエルバハ、エンゲルス、その他と共に、雜誌『獨佛年誌』や、『フオールウエルツ』を發行し、盛んにプロシヤ政府を攻擊した。

一八四五年一月、フランスの有名なる頑迷首相ギゾウは、プロシヤ政府の依賴に依つて、『フオールヴエルツ』の發行を禁止し、その殆んど全部の社員に對して追放を命令した。マルクスは妻子と共にベルギイのブリユツセルに移つた。その時、ドイツの故鄕バルメンに居たエンゲルスは、こうした災難の費用は友人間の共同負擔でなければならぬと云つて、何程かの金をマルクスに送つてゐる。

マルクスはそれから三年間、ブリユツセルに亡命生活を續け、一八四八年、エンゲルスと共に『共產黨宣言』を書くに至つた。丁度その頃、フランスに『二月革命』が起つた、そしてその騷ぎの結果として、『プロシヤの長い手』が再びマルクスの上に屆いて來た。マルクスはベルギイ政府から追放を命令された。

然し今度は行先に困らなかつた。フランスには革命の假政府が樹立されてゐた。假政府にはマルクスの知己があつた。マルクスは客分として假政府に招待された。おかしい事には、この時、先きにマルクスをフランスから追放した首相ギゾウは、却つて自らロンドンに亡命してゐた。

一八四八年春、マルクスはドイツに歸るを得た。そして民主黨の左翼として働きだした。彼は民主黨の機關紙『新ライン新聞』の主筆となつた。エンゲルスも副主筆の地位に就いた。然るに間もなく、同年秋、『新ライン新聞』は起訴された。謂ゆるケルン事件が起つた。その法廷に於けるマルクスの辯論は有名なものとして殘つてゐる。彼は無罪の判決を受けた。然し五月にはライン地方に騷擾が勃發し、『新ライン新聞』は遂に有名な『赤刷』を以て廢刊し、マルクス主筆は一切の責任を帶び、マルクスは再び追放を命令された。彼は主筆として、法律上には財政上の責任が無いにも係はらず、負債全部を片づけてケルンを引揚げた。『新ライン新聞』では、マルクスは三人の子供をかゝえて、非常に苦しい生活をしてゐた。彼は職工達の給料を拂ふ爲に、自分の月給は取れないことが何度であつた。實際、食物に缺乏したこともあつた。パリ引揚の際には、エニイ夫人が大切な親讓りの寶物までを質に入れた。

斯してマルクスの一家族は更にパリの人となつた。然しパリの假政府は既につぶれてゐた。大統領ルイ・ボナパルトが得々とやつてゐた。マルクスは直ぐに又パリ立退を餘儀なくされた。この時の事を書いたエニイ夫人の日記がある。

『私達はパリに一月ほど居た。こゝにも私達の爲に休みどころは無かつた。或日の朝、警察のなじみの顏が、カルルと『エー・サー・ダ

ーム」は、廿四時間内にパリを立退くべしといふ通知を持つて來た。……私はロンドンに安全な避難所を求めるべく、再び手廻りの小道具を片づけた。カルルは私達より先にパリへ急いだ。（「エー・サー・ダーム」とは、フランス語で「及び夫人」を意味す。）

この時、エニイ夫人は四番目の子供を待設けてゐる所であつた。但し夫人は獨りで夫の跡に殘されたのでなく、名だかい「忠婢」レンヘンに世話されてゐた。

マルクスは一八四九年六月の末、ロンドンに着し、カンバウエルの或る處に住みこんだ。その室料が一週一ポンド、十二シリング、六ペンスで、ずいぶん高いものだつた。マルクスは、故郷に持つてゐた僅かの財産を處分したので、僅かにこの部屋に住みこむまでの事は出來たが、あとの生活の方法がなかつた。その中、お產があつたが、極貧中に生れた子供の運命は早世であつた。

實際、その時、マルクスの一家はパンばかりで生活して居た。そのパンも、マルクス自身は子供の爲に食はない事が屢々あつた。エンゲルスはバヴアリヤの一揆に加はつてゐたが、それも結局ロンドンにやつて來て、マルクスと共に仕事をさがしてゐた。

こうした生活の戰ひの間に於いて、別に亡命同士間の爭ひがあつた。マルクス・エンゲルスの一派は、今や當分の間、革命勃發の可能性がないと考へたが、それに反對する性急な、主觀的な一派——シヤツペル・ウイルリヒ派——は、マルクスを目して裏切者と僞し、臆病者と僞し、反動の手先と僞した。彼等一派は、如何なる時期であらうとも、勇氣のある大膽な人物と少しの金がありさへすれば、革命はいつでも起る樣に考へたいのであつた。

或夜の論爭の結果、ウイルリヒは遂にマルクスに決鬪を申込んだ。マルクスはそれを無視して答へなかつたが、マルクス派の一靑年シユラムが遂に堪りかねてウイルリヒを罵倒した。とう／＼決鬪がベルギイの海岸で行はれた。武器はピストルであつた。結果は幸いに、シユラムが頭部に負傷したに過ぎなかつた。

最後に、マルクス夫人エニイが、友人ワイデマイエルに送つた當時の手紙を抄錄する。

『私があなたの家にお世話になつてからモウ殆んど一年になります。……あなたの奧さんから親切なお手紙をいただいた時にも、お子さんの出來たお知らせを受けた時にも、私はとう／＼御無沙汰しました。……

『然し事情が迫つて來て私の手にペンを取らせます。……どうぞ出來るだけ早く「評論」の金を御送り下さい。殘りの分も出來るだけ早く集めて御送り下さい。私共は今、困りぬいて居ります。……

『夫はこんな事について大變敏感です。……夫は日常の生活のわづらひの爲、殆んど全く弱りこんで居ります。……夫はあの新聞の爲にどれほど犧牲を拂つたか知れません。つぎこんだ金は何千ターレルだか知れません。

『新聞の政治的名譽と、友人達の個人的名譽とを救ふ爲、あらゆる重荷を自分の肩に負ふことを辭しなかつた。彼はあらゆる收入を犠牲にした。そして出發の際には、記者の給料の滯りや、その他の諸拂も皆な片づけた。そして自分は其の國から無理やり追出されたのです。私共が自分の爲に何一つ取らなかつた事は御存知の通りです。私はフランクフルトに行つて、私の殘してゐた最後の銀道具を質に入れました。ケールンでは私の家具を賣りました。夫は反革命の不幸な時代が來ると共に、パリに行きました。私は三人の子供をつれて其あとを追ひました。そしてパリに落つくと、直ぐに追出されました。……

『私は海峽を越えて夫の跡を追うた。それから一個月の後、四番目の子供が出來た。ロンドンの事はあなたの御存知どほりです。三人の子供、そして四人目が又出來たのです。家賃だけでも月に四十二ターレルです。私達はそれを總て自分の手で、何かを賣つては片づけました。けれども、私達の僅かな品物は直ぐに盡きてしまひました。『評論は約束を違へて、ほんの少しの外、送金して與れません。從つて私達は本當にひどい有樣になつて居ます。

『……子供の爲に乳母を置くなどは問題外です。私は絶えず胸と脊にひどい痛みを覺えながら、自分で子供を育てゝ居ます。……子供は生れた日から病氣で、夜も晝も苦しんで居ります。一晩だつて、二三時間以上眠る事はありません。……

『或日私が坐つて居ると不意に家主がはいつて來ました。家主にはこの冬中で二百五十ターレルの借があります。……私達がそれを直ちに拂ひ得ないので二人の役人が直ぐに踏みこんで來て、私の手廻りの小物や、寢床や、敷布や、着物や、赤ん坊の搖り床や、二人の娘のオモチヤまで差押へましたので、娘達は泣き出しました。……私は凍えてゐる子供等と、私の暖い胸とを抱いて、堅い床の上に寢てゐました。

『翌日、私達は家をあけねばならなかつた。寒い、雨のふる、いやな日でした。私は部屋を探しに出かけました。四人も子供があると云ふと、誰も私達に部屋を貸して與れません。私は夜具を賣つて藥屋やパン屋や肉屋や牛乳屋に拂ひました。兎にかく私達はあらゆる物を賣り盡して、ライセスター街のドイツホテルの小いさな二室に移りました。……

『親しき友よ、どうぞ許して下さい、こんな長い手紙を書いた事を。私の胸は今あふれる樣です。私はこの胸の中を、最も古い最も親しい、最も善い友人の前に注ぐより外ないのです。然しこんな小いさな苦みが私達をへこますと思はないで下さい。私は善く知つてます、苦しむのは私達ばかりでない。私はこれでまだ選ばれた幸福者だと喜んで居ります。親しき夫が私のそばに立つて私を支へてゐて與れます。けれども私は實につらいのです。私があれほど快よく多くの人を助けて來たのに、今自分は僅かの事の爲に、こんなにまで苦しんで、そして誰も助けて與れる者がないかと思へば、私はほんとに堪らないのです。……』

我々は今、涙なしにこの手紙を讀むことは出來ない。然るにその當時、マルクスはこの窮狀の中にありながら、それでも矢張り一方には、他の亡命者が餓ゑてゐるのに、彼一人は贅澤に暮して居ると云はれてゐた。

ジャーナリストとして見たマルクス

嘉治隆一

一

普通によく世間で慣用せられる意味に從つてジャーナリストといふ言葉を使つた譯では決してない。何となればマルクスはそれには餘りに學者過ぎたからである。之をたゞ一個非凡の文筆家の活動の中から純然たる著述家的半面を除き去つた殘餘の部分、即ち新聞雜誌の記者乃至寄稿家としての半面を特に取り出して觀察しやうとするのに外ならない。然し又、記者といつても單に營利本位の新聞や雜誌に就職したり、寄稿したりして生活した人といふ意味でも勿論ない。何となれば彼はそれには餘りに革命家過ぎたからである。だから彼のジャーナリスト的方面は彼の生涯に於いて重要な地位を占めたけれども、結局に於て麵麭の問題とは殆ど交渉がなかつたといふことになる。でなければ文筆を以てあれだけの質と量とを殘した彼が、如何に時世の然らしむる所とはいへ、あんなに一生涯貧乏の中に暮さずに濟んだ筈である。何れにしても彼自身はこの事を餘り苦に病んでゐなかつたのみか、寧ろ多くの新聞への寄稿なり、勞働者の集會に於ける講演なりを無報酬で爲し、寄稿の中には匿名のものも多かつたといふことに對して一種の誇をさへ感じてゐたもの丶如くである

二

卓れた學者であつた彼は、その當然の歸結として新聞記者たるよりも雜誌記者となるに適した文才を有つてゐた。といつても彼は新聞の記者としても、寄稿家としても、又、編輯者としても、乃至は主筆としても立派にその責任を果した。彼の「ライン新聞」(一八四二年、ケルン)や「獨佛年誌」及び「パリ・フォールウェルツ」(何れも一八四四年、パリ)や「ドイツ・ブラッセル新聞」(一八四七年、ブラッセル)や、「新ライン新聞」(一八四八—四九年)や、「新ライン新聞・政治經濟評論」(一八五〇年、ロンドン)、或は又、アメリカの「ニューヨーク・トリビュン」(一八五二—六一年)並に「レヴオリユーション」(一八五一年)等を通じて行つた華々しい活動。それから又、「ドイツ軍誌」、「アネクドータ」等に始り、各國の勞働組合や無產政黨の機關

數十種に及ぶ驚く可き勞作。之等は實に彼の才能を充分に證明するものであり、假に彼の遺した不朽の名著の多くや、彼が自ら盡した實際運動への功績の數々を不問に附するとしても、優に人類の將來に對する立派な貢獻たることは疑ない。

而も同時に考へる可き事柄は、彼が之等の諸論文を執筆するに當り、そして、又編輯の事務を運ぶに當つて、素晴しい手腕を示したことであつて、今日、彼の遺稿などを讀んでそこに見苦しい伏字や抹殺などの毫も見出せないことは、勿論、彼我國情の相違にも因ることではあらうが、確に驚嘆すべき事實といふの外なく、之など彼が如何に、鋭利に、巧妙に官憲と抗爭したかといふことを示してゐる。實際、彼が僅に二十四歳の時に迎へられて主裁した「ライン新聞」の如き、通常檢閲、州檢閲の外に中央政府特派の檢閲が血眼になつて三重の眼を通したにも拘はらず、常にその網の目を潛つて潑剌たる大魚が逃れ去るといふ有樣で、專制主義プロシアの檢閲制度が斯樣まで侮辱され、且つその威力が挫かれたことはないといはれた程である。

三

尙、この外、特に忘れてはならないのは、彼が、之等新聞雜誌の經營者としても並々ならぬ犠牲を拂つたといふことである。その著しい實例は二月革命當時の「新ライン新聞」(ケルン)とその延長としてロンドンで繼續した「新ライン評論」とである。前者はもと多くの株主の出資によつて維持せられてゐたものであるが、革命運動が進展し、同紙の論調も竿頭一歩を進めたゝめに、株主の中のブルジョア連は手を引き、小ブルジョア連は屏息するといふ有樣で、負債は愈々増し、彈壓は益々加はるに至つたので、マルクスは私財七千ターレル(一萬圓以上)を投げ出して新聞の窮狀を救ひ、又、別に借財を以て職工に支拂を濟ませたが、發行は停止に遇つて、囊中拂底の中にロンドンに引上げたのである。

然し、如何に渴しても決して盜泉の水を飮まないといふのが、彼の生涯を一貫した主義であつた樣に思はれる。一八六〇年に彼がロンドンに於て、金錢上の濡衣を着せられた時に書いた「自傳手記」を見れば、彼が飽くまで潔白であつたことが知られる。そしてその中には昔、新聞社で同僚であつたカムプハウゼンが後にプロシアの首相となつてマルクスを誘惑しやうとした場合、又、フランス共和政府の一員をして彼の仲間に深い同情と理解とを寄せてゐたフロコンが一定の金錢的援助を申出でた場合に、之を斷然拒絕したといふ事が打明けられてゐる。この「手記」は彼がフォークト氏と論爭した時に辯護士に自己の潔白を證明するためのものであつたが、このフォークト氏との經緯は餘りに有名な事件である。

四

「新ライン評論」の時でも、マルクスは主義のためと意地とでその

經營を續けてはゐたが、購讀者は料金を納めないし、負債は募るといふので、貧乏は彌が上にも加はり、一家は極端なドン底生活に陷つた。而も、當時は未だエンゲルスから毎月の援助が來る様になつてゐなかつたので、マルクス夫妻の苦心は大抵ではなかつた。

その頃、イエニイ夫人が、在米の一同志に送つた手紙の中にも、マルクスは如何に窮境に沈んでも、革命を口にし乍ら物乞ひをして歩く連中の仲間に身を落す位ならば死んだ方がましだといふ覺悟を失はないから、他人からいはれのない金錢など決して貰はない。それで濟まないが、「評論」の誌代の滯納の分を集めて送つてほしい。然し、それすらマルクスの耳に入ると叱られる故、なるべく洩らさない樣といふ意味のことが見えてゐる位である。

マルクスは「ニユーヨーク・トリビユン」に對しては比較的永く通信を送り、一文五弗宛を得てゐたと彼の娘は書き殘してゐる。同紙に載せられた記事は、彼が「ピープルス・ペーパー」に寄せた論文と共に「カールス・ペーパース」として世間の呼物となつてゐたさうであるが、南北戰爭以來、「トリビユン」と絶緣したのが、彼の記者生活の終決であつた。勿論その後も色々の新聞雜誌への寄稿は廢しはしなかつたが、その度數と分量とは次第に減じて行き、專ら著述に時が割かれる樣になつたのである。

ジヤーナリストとしてのマルクスは、科學的著述の執筆者として、實際運動の闘士としての彼に劣らない貢献を無産階級に致した。而して勿論それによつて彼が物質的に報いられる所は殆ど無に近かつたけれども、彼の努力は今日各國に於て立派に實を結びつゝある。之にもました報酬が又とあらうか。

マルクスの面影

山川均

マルクスといへば、私どもの頭には直ぐ辯證法的唯物論が浮び、唯物史觀が浮び、剩餘價値學説が浮んで來、さもなければインタナショナルの運動が浮んでくるほどに、それほどマルクスの名は、これらの學問上の成業や國際プロレタリア運動の實踐と結びついてゐる。學者として、また革命家としてのマルクスの、、、、は、マルクスのその他の一切のものを蔽ふてゐるかのようである。しかしもつとよくマルクスを見つめてゐると、この紫外線のような强烈に眼を射る光の蔭から、友人として、同志として、先輩として、父として、祖父として、また夫としての――即ち人としての、マルクスの柔らかな光が漂ふてゐることを見るのである。

○

「俗物どもや駈けだしの革命家が、マルクスの晩年の傳記を讀んだなら、驚いて戸惑ひするだらう。いかにも、革命家たるものが、革命以外のことに精力の一部分たりとも費やすのは、宜しくないことだ。たいていは一時間だけの武者修業者にすぎないこの連中に從へば、眞實の革命家といふものは、その生涯を通じていかなる瞬間にも、氣を張りつめて警戒してゐるべきものだ。彼は堅い革命的な金剛石で捏ね上げられ、一切の人間らしい情緒から超然としてゐなければならぬ。

『吾々は、人間らしく考ふべきだ。吾々が非常な尊敬と畏怖を拂つてゐる人々も、つまりは吾々と同じような人間であつて、ほんのちつとばかり賢こく、ちつとばかり多く教育され、そして革命の事業のために有用であるにすぎない——吾々はかういふ風に考へてゐる。たゞ古るいエセ古典的な戯曲の中だけでは、人間が英雄に描き出されてゐる。彼らが歩るけば山が震へ、足を踏みしめると地球が裂ける。彼らは食べるにも飲むにも、英雄らしく食べ、英雄らしく飲む。

『マルクスもまた、しばしば斯ういふ風に描かれてゐる。一たいに亢奮した嚴そかな調子でものを云ふ傾きのある、かの愛すべきクララ・ツェトキン老の描寫に現はれるマルクスがそうである。マルクスをかように解するのは、快心のモットーは何かといふ問に對して、マルクス自ら、『私は人間だ、いやしくも人間らしいものは、私にないものはない』と答へたことを忘れてゐるものと思はれる。道德上の罪にしても、彼には無いことはなかつた。或る場合には信用し過ぎたり、或る場合には甚しい不公正だつたことを、彼は一再ならず後悔した。マルクスの歎美者のうちには、彼れの痼疾的な酒好きの方は容易に宥るすことができるが、間がな隙がな煙草を吸つてゐることの方は、一そう我慢のできない人々があつた。マルクス自身も戯談に、『資本論』の印税は、その間に吸つた煙草の代にも足りないとよく云つてゐた。マルクスは貧乏のために、安煙草を吹かしてゐた。かうしてマルクスは、生命と健康とのかなりの部分を吹かしてしまつた。これが彼れの晩年にいたつて、ことに甚しかつた慢性的の咽喉炎の原因であつた……』(リヤザノフの『カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルス』から。この興味ある著述の全譯は、改造社版全集第一卷に、附錄として收められてゐる)。

○

煙草といへば、マルクスには滑稽な逸話がある。マルクスはよくパイプをも用ひたが、特に葉卷が大好きで、葉卷の鑑定は、自身だけでは大分得意でゐた。尤もマルクスも若い頃はそうだつたかも知らぬが、永年安煙草ばかり買つてゐるので。今ではほんとの味など、さつぱり分らなくなつてゐた。一八六二年の大博覽會時、マルクスの最も困つてゐた時分に、さる金持がドイツから上等の舶來煙草を持つて來

てくれた。そこでリープクネヒトを初めマルクス周圍の連中が、「老人」を一杯喰はせてやらうといふ相談をした。マルクスがその部屋に這入つて來ると、『ヤア、いゝ香りだな』と早速鼻をぴこつかせてゐる。そこでリープクネヒトらは『本ものゝハヴァナです』と云つて出したのは、ハヴァナどころか、西部ロンドンのうちで一番ひどい貧民窟のセント・ガイルス街を探し廻はつて、やつと見附けてきた一番惡るい安煙草だつた。マルクスは頻りにこの『本ものゝハヴァナ』を味ひながら煙を吹かしてゐたが、『ウン、僕も初めは少し怪しいと思つてゐたんだが、こいつは上等だ』と上機嫌であつた。そのあとで若い連中は初めてほんとの事を話すと、今度はマルクスの方が頑として承知しない。マルクスによれば、初めの葉卷がほんとのハヴァナであつて、後から皆がからかつてゐるのである。

一八七三年の春には、マルクスは再び大病にかゝり、今度は醫者から絶對に禁煙を命ぜられ、マルクスは少からず閉口した。しかし三四日たつと、マルクスは、禁煙を守つてゐるといふので、大に意志の強いことを自慢した。マルクスはまるで子供のように、この禁煙は、何人も企及すべからざる大事業と見なしてゐるようであつた。エンゲルスやレスナーやその他の友人が訪ねてくると、もう幾日煙草に觸れないと云つて、得意になつた。マルクスはこの意志鞏固の證據を、何か一生の一大事件のように話してゐた。

○

マルクスが將棋に負けると、家内中に當りちらしたといふ話も、彼を英雄に祭り上げてゐる人々には、不思議に思はれる。

一八五〇年代の初めごろには、ロンドンのドイツ亡命者連中の間では、暇だつたので、一時、將棋がはづんでゐた。或る日のこと、マルクスは新手を發明したから片つ端からやつつけるといふ恐しい鼻息で、なるほどリープクネヒトはじめ、みなマルクスに負かされた。しかしやつてゐるうちに、リープクネヒトはマルクスの手をのみこんでしまつたので、つゞけさまに二度マルクスを負かせた。いつでもマルクスは、旗色が惡るくなるといら／＼し、負けるといよ／＼怒り出すのが常だつた。この晩もマルクスは不機嫌な顏をして、明日の朝、自分のうちで復讐するからと云つて歸つて往つた。

翌朝十一時かつきりに、リープクネヒトはマルクス家にゆくと、マルクス夫人も顏を見せないし、レンヘン婆やもいつものように愛想よくしなかつた。何だか變だと思つてゐるうちに、マルクスが出て來て、早速勝負が始まつた。マルクスは、ゆうべ夜どほし新手を考へたといふので、初めのほどは一勝一負で、とう／＼眞夜中までさし續づけたが、最後には、マルクスがつゞけて二番負けた。マルクスはまだやると云ひ張つたが、この時、『マルクス夫人の主權の下におけるマルクス家の獨裁官レンヘン』が、斷乎として、『もうお止めなさい』と云つた

ので、マルクスの負でお仕舞ひになつた。

あくる日の朝、リープクネヒトが起きたばかりのところへ、レンヘンがあたふたとやつて來た。何事が出來たのかと思ふと、マルクス夫人から、どうぞ今後は決して、夜、モール（マルクスのこと）と將棋をさして下さいませんように、といふことだつた。この時は、マルクスがあんまり當り散らすので、さすがのマルクス夫人も、とう〳〵我慢がしきれなかつたのであつた。

全ヨーロッパの支配階級から、インタナショナルを背後からあやつつてゐる黒頭巾の怪物と思はれたドクトル・マルクスも、將棋に負けて、妻君や婆やに駄々をこねる『大きな子供』（マルクス夫人は、マルクスのことを常にかう云つた）だつたのである。

○

マルクスが子供を可愛がり、その界隈の子供等からも慕はれたことも、有名な話である。一緒に街を歩るいてゐて、いつの間にかマルクスの姿が見えぬと思ふて、彼はきつと道ばたの子供の頭を撫でたりしてゐるのが常だつた。

『この科學の英雄の深刻な精神と、子供のような心情を充分に理解するためには、マルクスをその子供たちと一緒に見る必要がある』。『マルクスにとつては、子供たちの仲間は、一つの必要であつた。彼はこれによつて休養し、元氣を恢復した』。リープクネヒトはかう書いてゐる。マルクスは僅かの暇や散歩のおりにも、いつも子供らを連れてゆき、一緒になつて罪のない荒つぽい遊びをしたものだ。かういふ時には、彼は『子供たちのうちの子供の一人』になりきつてゐた。

マルクスの子供たちが大きくなつたり、死んだりしてからは、孫たちがその代りをした。ことに娘のエニー（ロンゲーの妻）に生れたジョンニーは、パリからよくロンドンのマルクスの家に來てをつた。マルクスはジョンニーの云ふなり次第になり、ジョンニーも、それをよく心得てゐた。そこで或る日のこと、ジョンニーは、素晴しい思ひつきを考へ出した。ジョンニーは、『モール』を馬車に見立て、馭者臺のつもりでその肩に乘つかり、そしてエンゲルスとリープクネヒトとが、馬車馬の役目を仰せつけられた。仕度ができると、ジョンニーは『ゴー・オン』『ブル・ウィート』『フラー』などゝいふ英、佛、獨の國際的の掛け聲をかけて、この馬車で裏庭を乘り廻はした。マルクスは、額からは玉のやうな汗を流しながら、四つ足で走り廻はつてゐたが、とう〳〵閉口してジョンニーのお許るしを乞ふた。

○

議論や論爭の場合には、マルクスは思ひ切つた激しい言葉や皮肉を浴びせることも平氣だつたが、それでゐて、婦人と子供のゐる時には、馬鹿に神經質でおかしいほど溫順であつた。話が少しでもいかゞはしいことに觸れてくると、彼はひどく、どぎまぎし、居たゝまらぬ

ように、椅子の上でもぢもぢしだし、小娘のように、眞つ赤になつた。ところが當時の若い亡命者の中には、よい加減不作法な連中が揃つてゐて、俗謡などを所かまはず、大きな聲で歌つて喜こんでゐた。或る日のこと、マルクス夫人は留守だし、レンヘン婆やも子供たちも見えないので、いゝ氣になつて、この連中は有りたけの聲を出して、あまり上品でない歌を歌ひ出した。マルクスも、初めのほどは一緒に歌つてゐた——歌つてゐたといふよりも、一緒に怒鳴つてゐたが、ふと隣の部室の物音で、娘たちのゐることに氣がついた。するとマルクスは、急に何とも云へぬ困つた顔をして、例の通り、椅子の上でもぢもぢを始めたが、とうとうたまり兼ねたとみえて、「よせ！　よせ！娘たちが！」と囁やくように云つて一同を取り靜めた。しかしこの娘たちはほんのまだ子供であつて、歌の文句がその品行に影響しようもなかつたので、リープクネヒトに笑つてゐたが、マルクスは大眞面目で子供の聞いてゐるところで、そのような歌を歌ふのは宜しくないことを、吃り吃り説明した。

かういふことには、マルクス夫人は、マルクスよりももつと厳格であつた。リープクネヒトは、「諸君がかりそめにも、そうしたことを言ひ出そうとでもしたならば、彼女は、出かゝつた言葉を諸君の舌の根に凍りつかせるような顔つきをした」と書いてゐる。

マルクスは少しの飾りもない人であつた。「彼は子供のように、假面を被つたり扮裝することは出來なかつた」。リープクネヒトはまた、その思ひ出にかう書いてゐる。社會的の理由とか政治的の理由から、細心の注意が必要な場合でない限り、彼はその考へなり感じなりを、率直に口に出したばかりでなく、そのまゝを顔色に現はした。そして遠慮氣兼を必要とするような場合には、まるで子供のように、はたで見てゐておかしいほどに不器用だつた。「彼は偉大な政治家だつたにもかゝはらず、いな寧ろ、偉大な政治家だつたから、外交的の才能をもつてゐなかつた」。「未だ曾て、マルクス以上に信用のできる人はゐなかつた。彼は「眞實」の化身であつた。彼の顔を見れば、何を望んでゐるかゞ直ぐ分つた。マルクスは、曾て僞善を行つたことがない。彼は無邪の子供のように、僞善をすることが出來なかつたまでゞある。それで彼れの妻は、よくマルクスのことを、私の大きな子供と云つてゐた。……實際、マルクスは、うわべの形式に氣をつけたり、遠慮氣兼のいるような社交界に這入つたが最後、われらの「モール」はまるで子供のようだつた。そして子供のようにはにかんで顔を赤くした」。

そこでマルクスは、何よりも一番、氣取り屋が嫌ひだつた。ルイ・ブランが初めてマルクスを訪づれた時、マルクスの家は二間しかなかつたので、ブランを待たせておいて、マルクスは隣の部室で身仕舞をしてゐると、ブランは隔てのドアが明け放しになつてゐたことには氣がつかずに、壁にぶら下がつてゐた古るぼけた鏡を見つけて、早速その

前に席をかへた。ブランは有名な小男で、しかも有名な氣取り屋だつた。この一寸法師が、思ひ切り肩を張つたり胸を突き出したり、いろ〱な姿勢をして、どうしたら一番えらそうに見へるかを研究してゐるのを垣間見て、マルクス夫妻が吹き出したといふ話がある。

○

マルクスはエンゲルスと並び、多くの勞働者や後進者から愛せられ、親しまれた。それと同時に、マルクスは常に彼らの教師であつた。マルクスはまた、教師として非凡な才能をもつてゐた。

『マルクスは、嚴格な教師だつた。彼は吾々に、學ぶことを迫つたばかりでなく、吾々が果して學んだか學ばなかつたかを突き止めなければやまなかつた。私は、英國の勞働組合を研究してゐたが、マルクスは毎日、どこまで進んだかを質問し、最後には、多數の聽衆の前で長い講義をしなければ承知しなかつた。マルクスも傍聽してゐたが、彼は私を賞めなかつた。しかしやつつけもしなかつた。賞めることは、彼れの習慣でなかつた。そして彼が賞めるのは、たいていは憐愍からだつた。で私は、賞められなかつたことをもつて自ら慰めた。その後で、マルクスは私の斷定について、私と議論をした。私はこれを、間接に賞められたものだと考へた。

『教師としてのマルクスは、嚴格であつて、しかも氣を落とさせないといふ、稀有の才能をもつてゐた。

『マルクスの、教師としてのいま一つの性質は、吾々をして自らを批判させ、達成したものをもつて滿足しなかつたことである。彼は、彼れ一流の皮肉嘲笑をもつて、思索上の安逸を殘酷に罰つた……』

○

私は、ゆるされた僅かな紙數で、人としてのマルクスの面影をうかがふために、おもにリープクネヒトの思ひ出の中から、三四の逸話を拾ひ出してみた。

マルクスの面影は、かような逸話にも現はれてゐるが、また彼が交友との間にまじえた書翰の中にも見出される。マルクスの書翰の大部分は、理論上實踐上の重要問題を論じたものではあるが、人としてのマルクスとその內面生活の光が、いたるところに閃めき出してゐる。この點で、マルクスの書翰集はその全著作のうちに、特殊な興味をもつた比類のない部分をなしてゐる。そこでマルクスを全たき形で知らうとする人々にとつては、書翰集は無くてならぬものとなつてゐる。いまこの浩瀚な書翰集の全部が、ことごとく全集中に收められて讀書界に提供せられることは、『資本論』や『剩餘價値學說史』の反譯と同じほど、重要な意義をもつものだと思ふ。

六月號森戸氏の論文について

【編者記】本誌六月號森戸辰男氏の『田中首相の超精神主義』は一と二との間にあつた二、三節を都合により省略した。

【第二節】では所謂共産黨事件の本質が共産黨と我國體との正面衝突にあるとなす聲明書冒頭の一句が批評されて居り、その要點は略ぼ次の如くだ。無産階級運動の一翼としての共産黨の根本特質はブルジヨワ、、、、、の主張であり、從つて、その正面の敵は大地主大資本家の階級であるべき筈だ。然るに茲ではブルジョワ、、、、の代りに國體が、大地主大資本階級の代りに或る他の者が、置換へられてゐる。何が故か。これは單なる認識上の誤謬としてのみ簡單に片付られないで、この社會的根據が探求されねばならぬ。そしてこの見地よりするとき、それは八方塞がりの、、、、、、、、が共産黨事件を「國難來」として誇大的に吹聽し、その渦中から唯一眞正なる皇室中心主義黨、國體擁護黨として名乘り出づることによつて局面を新にし、以て喪はれた國民の信望を幾分たりとも回復しようとする窮餘の策と、無産階級の最近の進出によつて脅威を感じ、これが根本的剿滅を希望しつつも、、、、、と自階級の利益との名において堂々之を敢行するの自信と實力とを持合はさない我國の大ブルジョワジーが、國體の旗印を高くかかげその威によつて有無を云はさず左翼無産階級運動を斃死せしめようとする彼等の、、、、戰術との、野合から産れた畸形兒以外の何者でもない。（この論旨は我等五月號所載の森戸氏の論文により詳細に發展されてゐる。）

【第三節】は聲明書によつて共産主義の對立物とせられてゐる我國體の現狀に關する首相の見解を主題とする。そこでは、國體觀が反動主義者の得意の壇場であるにも拘らず、最も大事なその現狀について、それの「確固不動」を誇らかに揚言するその口の下から、それがまさに危機に當面してゐるかの如く浩歎する聲明書の矛盾を指摘し、かくの如き曖昧千萬な現勢の認識からは、其場凌ぎの彌縫的な彈壓政策以外に、進歩的諸運動に對する合理的方策の確立は到底期待され得ない次第が論述されてゐる。

東京日日新聞社經濟部編・木村莊八氏 小野賢一郎氏裝・四六判美裝 四百餘頁・定價一圓八十錢 書留送料十八錢 普通送料十二錢



經濟風土記

學術文藝を超絶せる

獨自の文品

經濟風土記は現代日本の生活記錄である。大都市文明を環る我が國土の姿を、地方産業の中にまた山河風物の中に探り求めて、日本自らが忘れて居た多くの「日本」を發見した新日本誌である。土地の口碑傳説、郷土の民謠、農民藝術、さては人物の出世談、身元調べの末に至るまで、數百數千萬都會人に對する無限の清涼劑であり、興奮劑である。

經濟風土記は學術書ではない、日本獨特の國風を經濟の中に見出す常識の書である。日本を學問的に分析する前に經濟に生きる現在の姿そのまゝを地方別に然も綜合的に大觀した新らしい日本誌である。山川草木人文の流離、みな筆者の健脚と達筆によつて編み込まれないものはない。日本郷土が生める活きた經濟地理書とでも云はうか、その一頁毎に我々の生命に觸れた新鮮な歡びを感ずる。

（増刷又増刷第十版出來）

我等の肆たらしめよ!!
郷土の誇をしてせめて

伊藤金次郎著

わしが國さ

普及版 増補 下冊發賣・四六判美裝 四三〇頁・定價一圓三十錢 書留送料十八錢 普通送料八錢

◆文藝、學術、娯樂等の出版物に食傷氣味なる讀書界に此超文壇的名著を贈る!!

東京・神田・駿河臺（ニコライ下） 刀江書院 振替東京七三一一八 電話神田 三二七一 三一八九

ブルガコフ著　島野三郎譯

經濟哲學

最新刊

本書は露西亞屈指の經濟學者にして哲學者たる著者が、一代の蘊蓄を傾倒して著したる世界最初に見る經濟哲學の體系である。本書一度世に出づるや露西亞學界の視聽翕然として集り、諸學者は聲を放つて『經濟としての世界を論究せしものにして本書の如く精細深刻なるは嘗つて見ざる處。實に二十世紀初葉の露西亞が世界に誇るに足る一大文獻』であると嘆稱した。譯者はペトログラード大學に於いて哲學史學を修めたる篤學の士。譯文は嚴正なる推敲を加へ、一行半句も忽せにせず、その平明流麗は原書の意味を傳へて餘蘊がない。

〔目次〕第一編　經濟哲學の問題。第二編　經濟理論の自然哲學的基礎。第三編　根本的經濟作用の意義。第四編　先驗的經濟主觀に就いて。第五編　科學の性質。第六編　自由と必然との綜合としての經濟。第七編　社會決定論の境界。第八編　經濟の現象學。第九編　經濟哲學としての經濟的唯物論。（附錄一、ブルガコフ小傳。二、ブルガコフ主要論文）

四六判クロース上製

定價貳圓五拾錢

送料二十二錢

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

高畠素之著

マルクス學解説

（四六版 三八〇頁）

定價壹圓
送料拾八錢

最新刊

本書は現代思想の主潮たるマルクスの學説を、通俗的に、而も相當專門的に、一般讀者に理解せしむる目的の下に著述したるもので、この任務に於て、著者が我國最適任者の一人であることは、何人も認むるところであらう。本書の前身（マルクス十二講）は既に多大の歡迎を享けた。が、更に幾多の改訂を加へた本書は、マルクス學全盛の今日、實に各人必讀の書である。

〔目次〕

（一）マルクスの生涯及び事業。（二）唯物哲學説。（三）唯物史觀説。（四）國家學説。（五）資本主義崩壞説。（六）勞働價値説。（七）餘剩價値説。（八）分業及び協業説。（九）機械學説。（十）資本蓄積説（十一）利潤説。（十二）地代説。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

自然科學

第三卷第二號

五月廿五日發賣

定價壹圓 送料十二錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

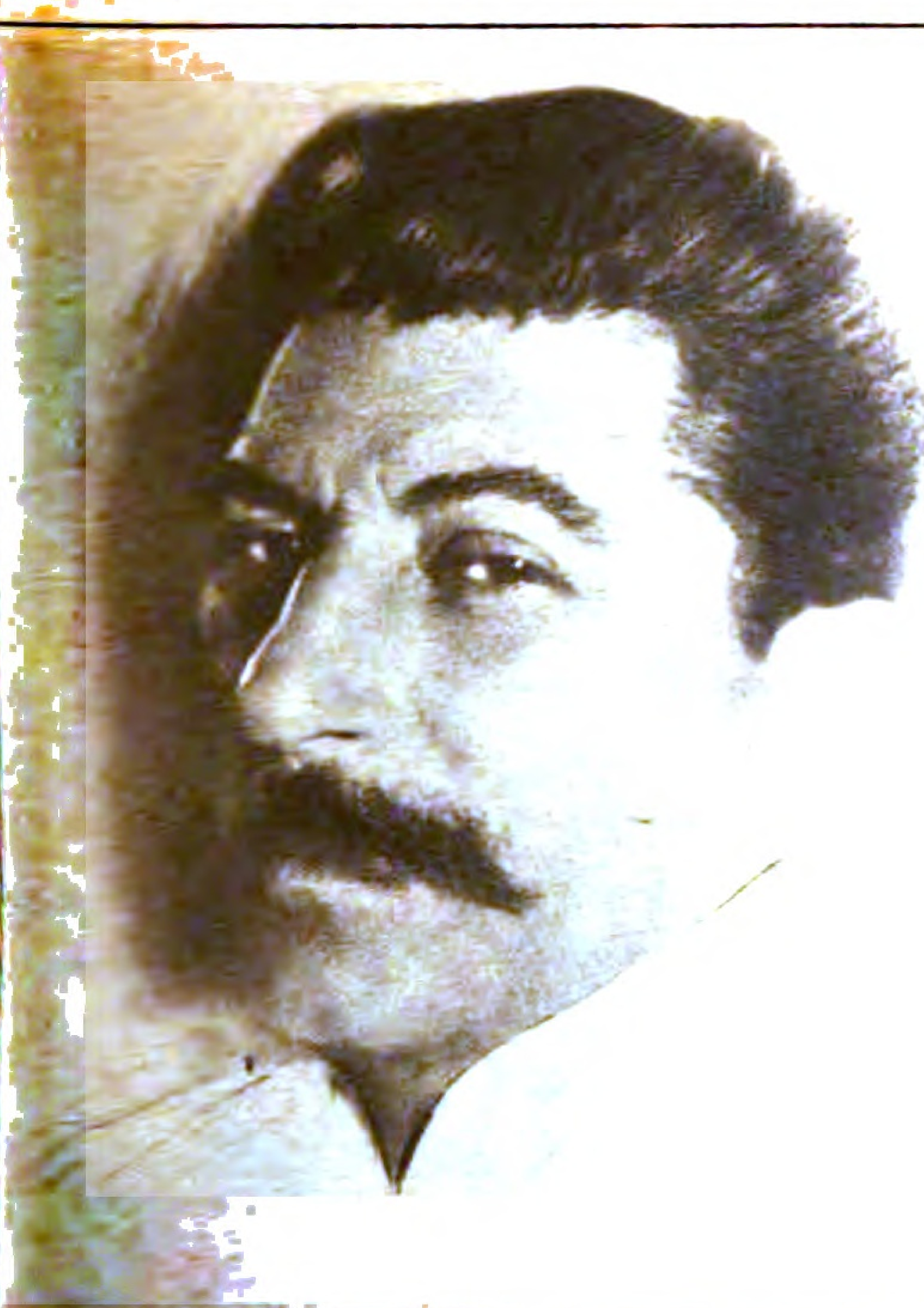


露西亞土產

アンリー・バルビュスとソウエト文藝家代表

この寫眞にはソウエトの大きな賓客の一人、アンリー・バルビュスがゐるばかりでなく、現在ソウエト文壇の各團體の代表者が一堂に集つてゐるので興味がある。中央の痩せた人がアンリー・バルビュスで、向つて右がマルクシズムの文藝理論を確立させたといはれるコーガン教授、その右には最左翼の作家ベヅミャンスキー（？）が如何にもプロレタリアの作家らしく、コーガン教授の左二人目にはゴーリキーの友人、全露作家協會長のウエリサイエフがゐる。ウエリサイエフの背後は同伴者の重鎭でおなぢみのピリニヤーク、ピリニヤークの右二人目はやゝ右翼に近い人であるが、ゴーリキーに「ソウエトに文學が滅んでゐない……」といはせた若いレオノフがゐる。レオノフの顏が藏原惟人君の顏によく似てゐる。其他の人々は私の逢つた事のない人々だが、多分「農民作家」、「鍛冶派」の代表者であらう。

アンリー・バルビュスは革命記念日の二月ほど前からソウエトへ來て、革命後の十年間のソウエトの施設を實地に觀察し、非常な確信と熱情をもつて「ソウエトの友の會」の組織を提唱したことは、世界の思想史に一時期を劃する動因になるであらうと各國代表者がいつてゐた――やさしい内氣な人で、演説は詩の朗讀のやうな感じがした。（雨雀）



スターリン（上）とブハーリン（下）

スターリン——彼はレニンの遺書を秘密にしたといつて反對派のトロツキーに批難された時、「自分は發表しやうとしたが、大會が否決したのだ、その遺書にはトロツキーはボリシビキーでないと書いてある……」と答えた——十一月八日には彼はカレーニン、ブハーリン、クララチトキンなぞと、レニン廟の上に立つて、百萬の民衆に叫びかけてゐた。

ブハーリン——哲學者で、文藝批評家で社會學者であるブハーリンはソウエトのあらゆる方面から愛されてゐる——ブハーリンの話す時は、聽衆は彼の一言隻句も聽き洩すまいとしてゐる——かと思ふと大きな温い笑ひが聽衆の中から起つて來る。







（上）セルギー・エセーニン展覽會（下）最左翼の作家ベヅミヤンスキー、ウートキン、ジヤーロフ。





（上）新職業婦人と勞働者の讀書

今日ソウェトのあらゆる役所、あらゆる工場にはきつと立派な倶樂部があつて、その倶樂部の中には圖書館がある。新職業婦人としてのインテリゲンツアは書籍の貸出しや讀書の相談相手になつてやる。

（下）勞働者の教育

ソウェトの學校は工場と密接な關係を持つてゐる――またレニン夫人の努力によつて「無學者撲滅運動」が女性の手で行はれてゐるが、この運動の成績は最も驚くべき統計のレコードを示してゐる。



（上）勞働婦人の讀書と食事

勞働婦人の讀書力の增大は驚くべきもので、私はモスクワ、レニングラード及びミンスク等で訪ねた數十の俱樂部の讀書室は七分まで女で占領されてゐた。私が最後まで宿つてゐたモスクワのホテルの女中頭（四十二三歲）は始終ブハーリンの本を小脇にかゝへて、暇があればそれを愛讀してゐた。私の友人が、「あなたはブハーリンの愛讀者ですか？」と質ねると、女中頭は笑ひながら、「え……私はオポヅイツアの誤謬を理論的に知りたいのです……」と答えた。







兒童の食事――安眠

兒童の食事と安眠――ソウエトの施設の最も成功したものゝ一つは託兒(ナース)所であらう。勞働婦人は幼兒を最も安全な託兒所の哺育の手に託して安心して一日の勞働に從事することが出來る。ソウエトでは今夏更らに三百の託兒所を農村に新設して農業婦人の勞働を自由ならしめる計畫であるときいた。





托兒所の幼兒教育

(下)托兒所の兒童は進歩的な女性教育者によつて教育される。こゝの教育はソウエト教育の基本となるものである。

(上)ピオニーロの遊戯と讀書――ピオニーロ(先驅少年少女團)はソウエトのイデオロギーによつて最も進んだ文化教育が施されてゐる――宇宙的、生物學的、社會學的教育が實驗的方法によつて行はれてゐる。



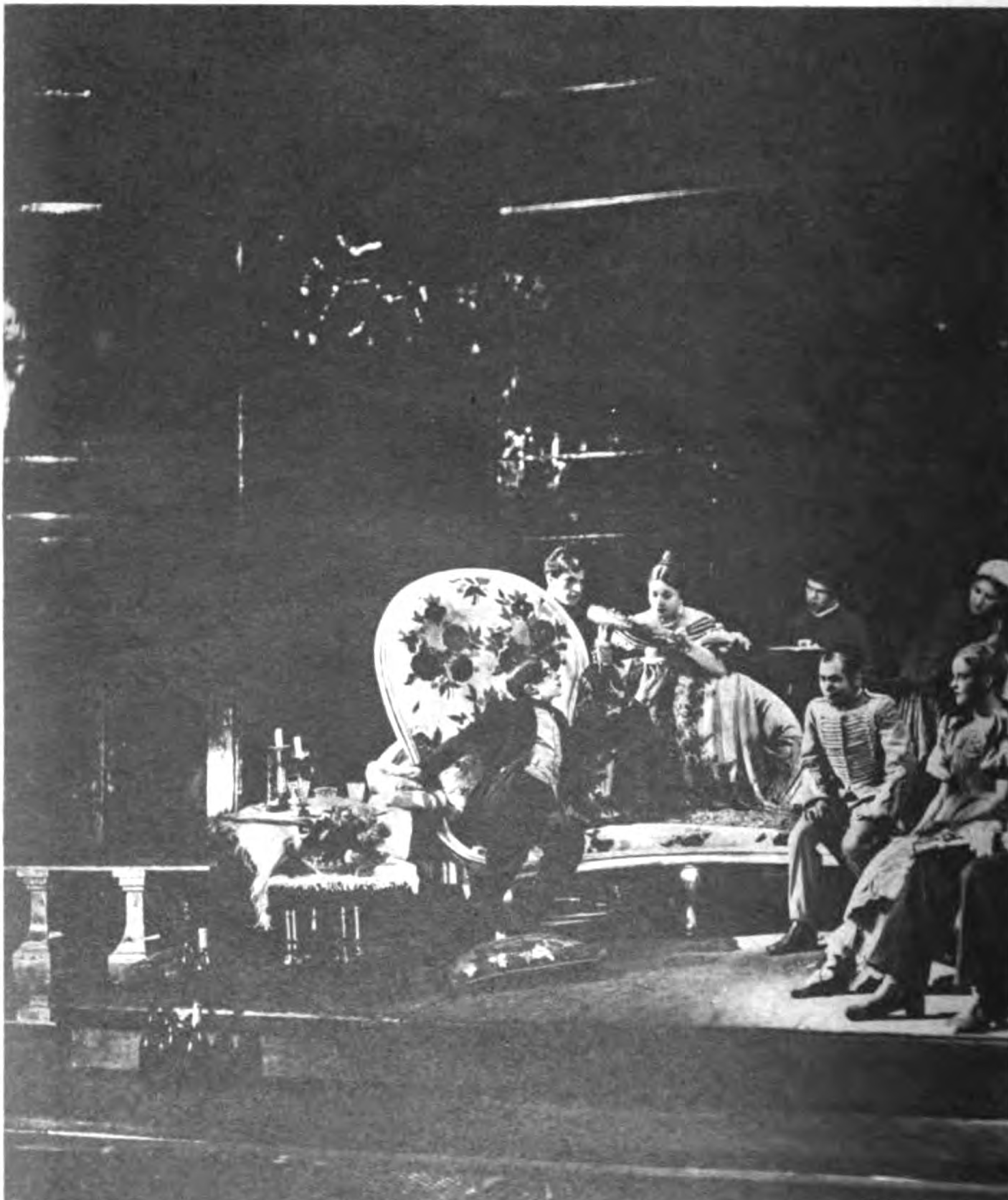


名優カチヤロフの事

ソウエト・ロシアばかりでなく、全ヨオロツパ的な名優といはれてゐるカチヤロフは今日では若い俳優のチエホフ（チエホフの甥）の爲めにその人氣を奪はれてゐる形もないではないが、然し今日でも彼の人氣は大したものである。私達は最初に彼をピリニヤーク家の會合で見たが、其の席にはチエホフ夫人のクニツペルもゐた。カチヤロフはその時エセーニンの詩を朗讀した。クニツペル夫人は少しすさんだ感じを私達に與へた。その後、私達は第二藝術座にカチヤロフの「カラマゾフの兄弟」の朗讀をきいたが、イワンの幻影を見て狂人のやうになる時の獨白はすてきだつた。オストロフスキーの「賢者は質朴なものである」では少し癖のある俳優といふ感じを與へたが、イワノフの「裝甲列車」（藝術座）では初めて名優らしい印象を受けた。裝甲列車に關しては後の寫眞に就いて說明しやう。

メエリホリドの「檢察官」

メエリホリドの「檢察官」ほど多樣な批評を受けた芝居は恐らくないであらう。ゴーゴリの愛好家はこぞつてこれを批難し、イデオロギストはイデオロギーの方面からこれを病的な演出として批難した、にもかゝはらず、メエリホリドは殺到的な演劇愛好者をこの芝居に呼び寄せたといはれてゐる。一言にしていへば、「不健全な面白さ」をこの芝居が持つてゐた。然も舞臺監督者としてのメエリホリドの天才的要素が一貫した主張を觀客に向つて投げ與へずには置かなかつた。この芝居は「歌舞伎」の要素を取入れてゐるといふ點で、批評家の注意を呼び起したが、私の見るところはたゞ道具を舞臺背後、または舞臺上部に用意して置いて、それを舞臺前方に操り出して來るといふ點に過ぎなかつたやうだ。メエリホリドの「ビオ・メカニズム」(生物學的機械主義)といふ言葉は面白い言葉だが、メエリホリドの芝居を見ると却つて意味が不明になるのは可笑しい。







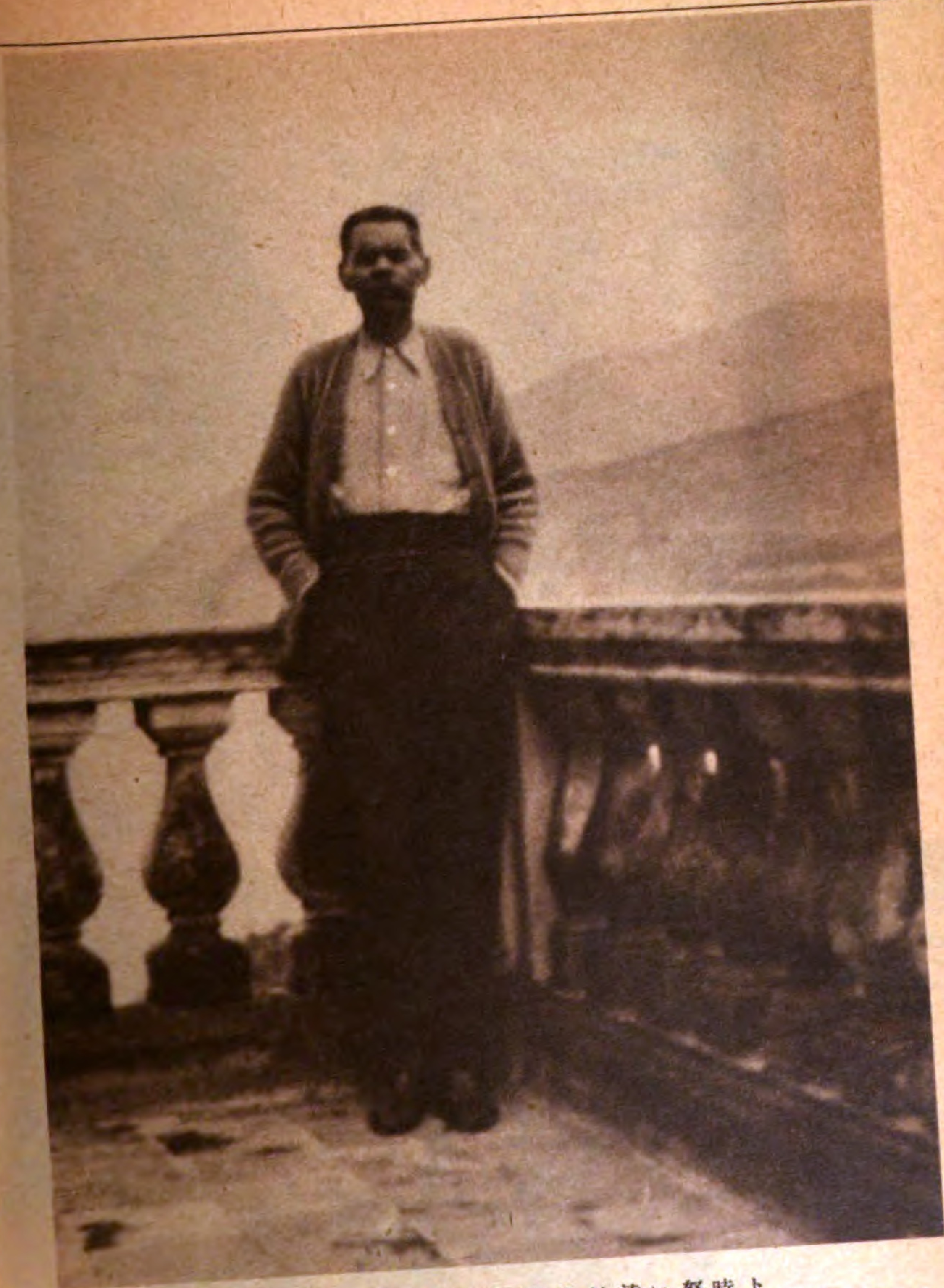
（上）イヴノフの自作朗讀——、フセオドル・イヴアノフはピリニヤークと等しく同伴者の一人であるがピリニヤークのやゝ右傾してゐるのに反して彼は可なり左傾して行く傾向がある。（下）イヴノフの「裝甲列車」は私のソウエトで見た芝居の内で最も堅實な感じを與へたものゝ一つである。白軍と赤軍との戰爭を題材としたもので舞臺はしつかりしたリアリズムで、カチヤロフの主人公ウエルシーニンは實に立派なものだつた…………………。



スタニスラウスキーとルナチャルスキー

（上）右は全ソウエトの舞臺監督及び俳優の父としてのスタニスラウスキー、左は十年間に教育及び藝術の方面に驚くべき功績を殘した、教育人民委員としてのルナチャルスキー。（下）對外文化聯絡協會長のカーメネバ夫人（トロツキーの妹さん）——米川、小山内、鳴海、アルキン、尾瀬の諸君に自分。この協會は"BOKC"（ヴオクス）の略字で呼ばれてゐる。

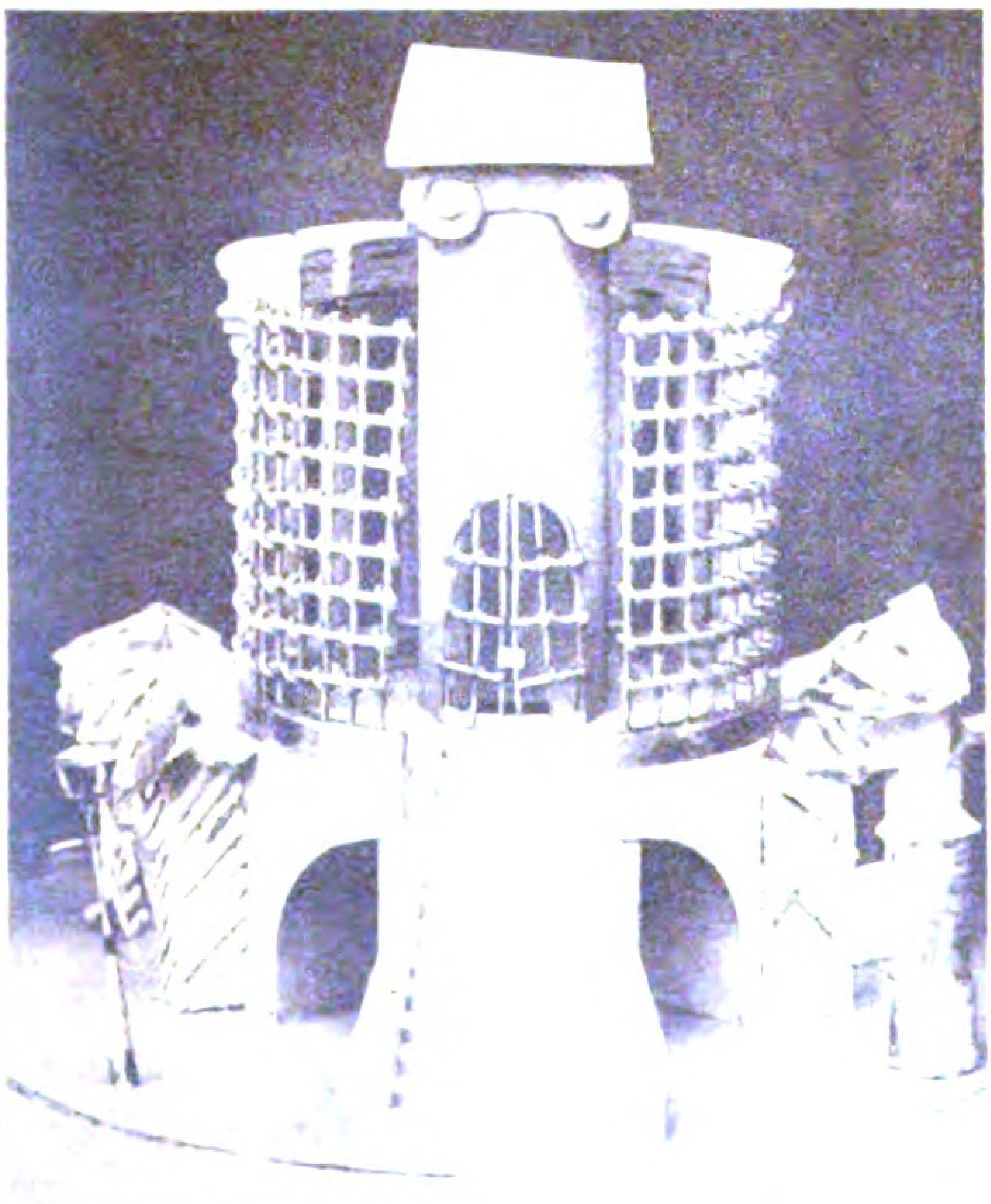




ソレントに於ける
マクシム・ゴーリキー

黒田乙吉さんがソレントにゴーリキーを訪ねた時、ゴーリキーの勤勉と努力にひどく打たれたといつてモスクワにゐる私達に話して呉れた――彼は病弱な肉體を持ちながら、朝早く起き、夜おそくまで讀書執筆に日を送つてゐたさうだ。コーガン教授はゴーリキーが、他のイミグラントと共にソウエトを捨てなかつたのは、彼は個人主義者乃至デカダンでなかつた證據だといふ意味のことをいつてゐた。ソウエトの少年達の美しい手紙がゴーリキーを動かしたといはれてゐる。モスクワは何んなに熱狂してゴーリキーを迎へたことであらう！





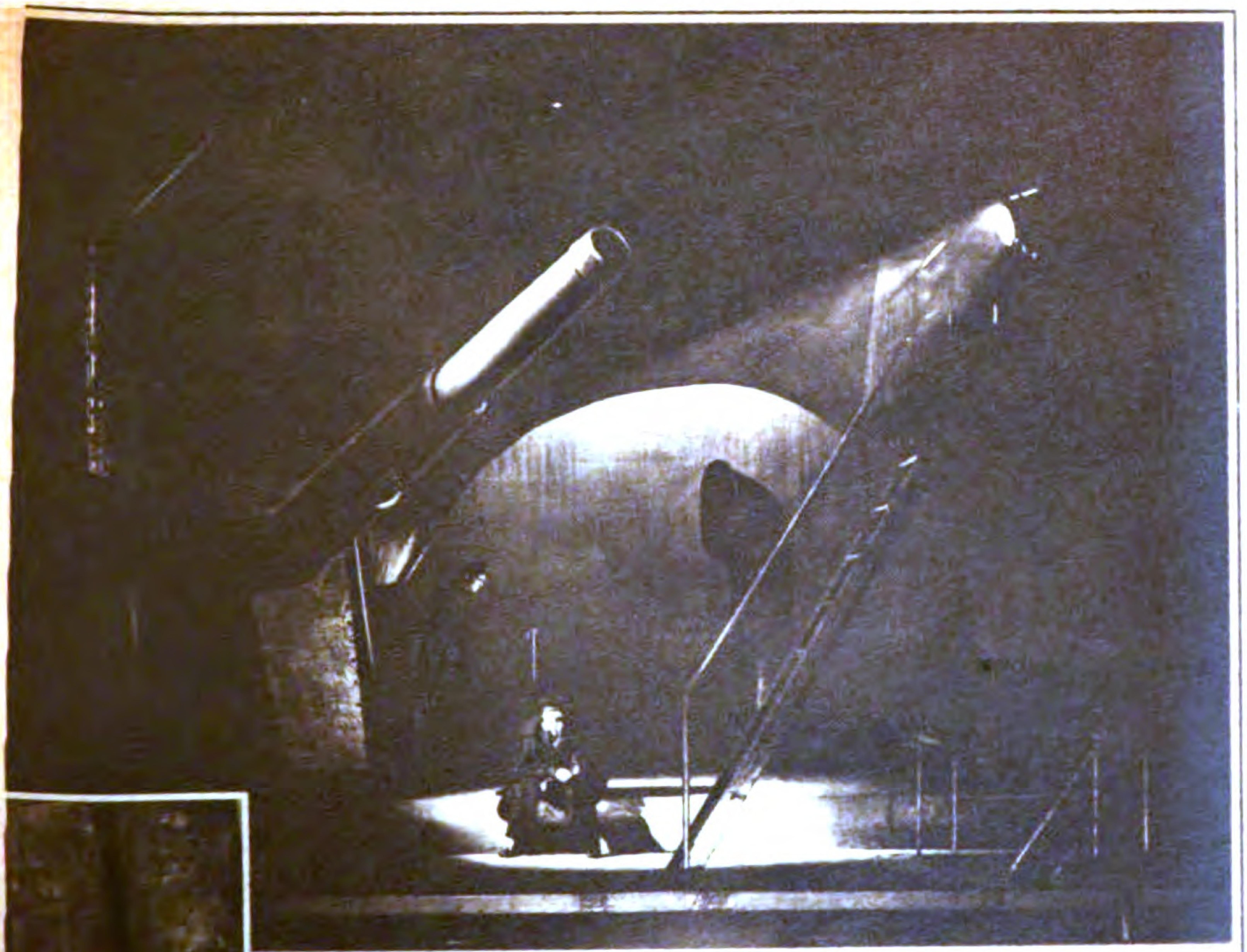


農業に従事するカリーニン

（上）私はモスクワを去る四五日前メーデーの日にカリーニンがレーニン廟の上から八十萬の示威行列に激勵の言葉を發してゐるのを見たが、行列の終へた後、彼はチンクシャの顔に微笑を浮かべてポケットから赤いハンケチを出して私達にあいさつして行くのを見た。前額の深い鐵は彼の苦勞を示してゐるが、全體にとぼけたユーモラスな感じを與へる人だ。

王座と牢獄

（下）この寫眞はユデア劇場の革命的戲曲「ギリシンケルト」の舞臺面である——一つの構成主義的舞臺が、廻轉裝置で一方が王座になり一方が牢獄になつてゐる。裝置家はマンデリベルクで監督はラフアリスクである。



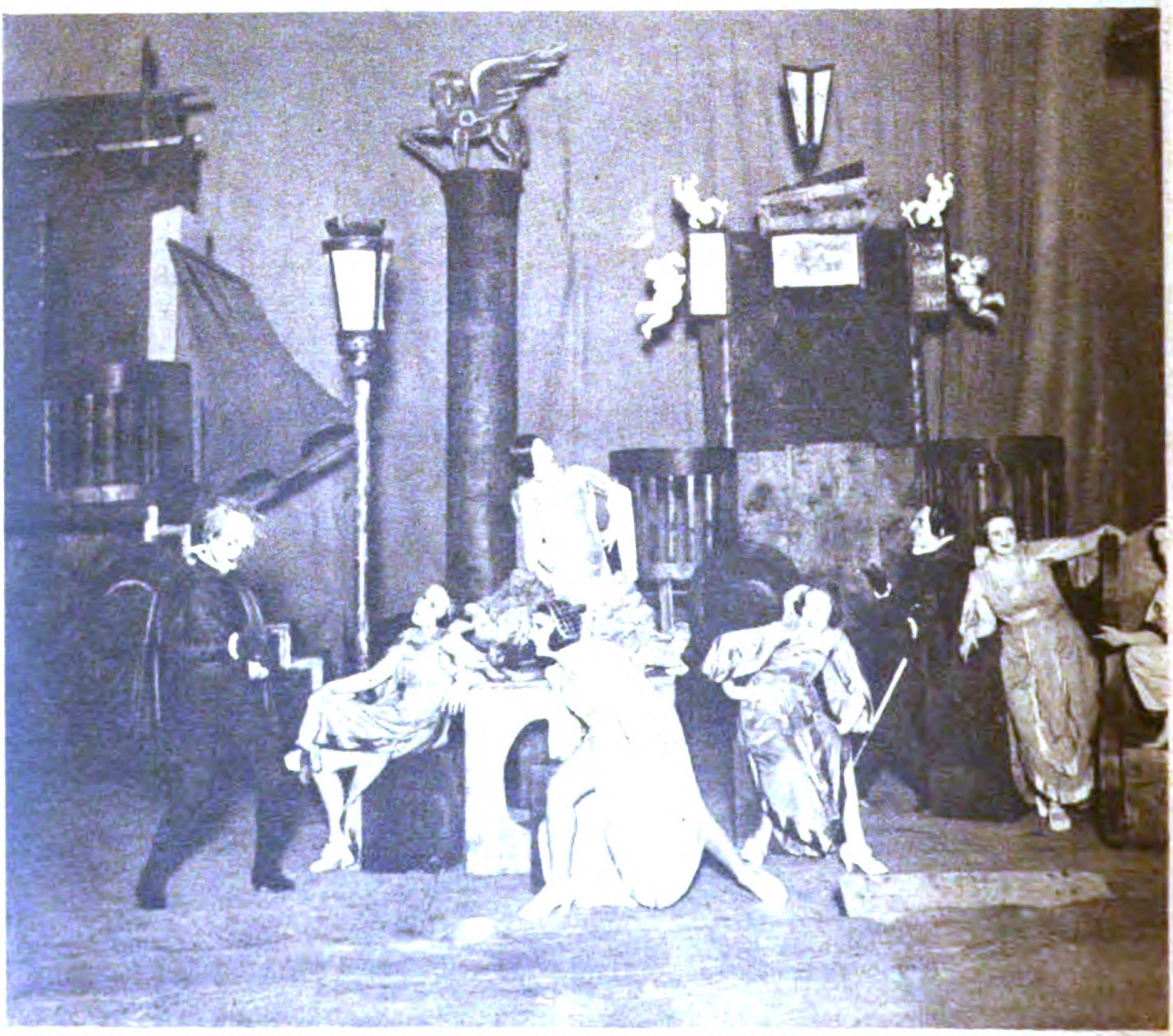


「ラズローム」（上圖）

ラウリニヨフの「ラズローム」をワフタンゴフ劇場に見た――ケレンスキーの二月革命から十月革命への推移を描いたもので、イワノフの「裝甲列車」に比肩するほど堅實な芝居だ。舞臺裝置は寫實主義と蜂窩式構成主義を調和させたもの。舞臺のテーブル其他が觀客に對して斜めになつてゐるのはこの芝居の特質だ。こゝに掲げた寫眞はケレンスキー一派の陰謀が破れてボリシキキの勝利の旗が甲板に掲げられる少し前の靜寂の時間！

「シャイロック」（下圖）

ユデア劇場の「ヴェニスの商人」、シャイロックの同族であるユデア人の俳優達によつて演ぜられてゐる點で特別の興味を感ずる。ユデア劇の運動は一昨年來朝したユデアの劇作家ヒルシベーンなぞによつて始められたもので、演技の上からも装置の上からもソウエト・ロシヤの最も先驅的な位置を占めてゐる。私はこの俳優の人達の爲めに日本演劇史の輪廓を話したことがある。右端の女優さんはエスペランテストで面白いユーモリスト。





クレムリン（上圖）クレムリン（クレームリ）宮殿は今のソウエト政廳のあるところ、昔伊太利の名匠によつ建築されたといふ古風な宮殿。スパスカヤ・ワロータ（時計塔）の時計は十五分間毎に時を告げるが、この時計が十時を打つのを相圖にメーデーの分列式と示威行列が行はれる。この塔の左が「赤の廣場」（クラスナヤ・プロスチヤチ）で、こゝには多くの自由思想家達が盜賊や放火者と共に死刑に處された刑場「額の場所」がある。これも伊太利人によつて造られた美しい大寺院、ウアセリスキー寺院の傍を城壁に添うて下りるとモスクワ河の岸に出る。

メーデー（下圖）メーデーに參加した東方民族のダンスの一團は私達を強く打つた――この人達は革命前まで、思想は勿論のこと、自分自身の言語さへ使用することを禁ぜられてゐたものである。



チヤアリイ・チヤプリン

森　岩　雄

(1) プロログ、彼の文化史的存在價値

子供がチヤアリイの映畫を見ると、そのをどけた姿とをどけた行爲に、蟠りのない笑ひを笑ふ。

若者の中で、人はパンのみにて生くるものに非ざることに氣づいた者は、チヤアリイの映畫を見ると、そのをどけた姿と行爲に笑ふことは無心の子供と等しく笑ふけれど、更にその上、彼の悲しい心を悟つて、思はずホロリとする。中でも理窟を云ひたい者は、チヤアリイは單なる道化ではない。彼は藝術家だ、哲學者だ、天才的人物だと彼の存在に昂奮する者も出て來る。

人生の戰ひを戰ひ抜いた老人が、チヤアリイの映畫を見ると、彼等は全く子供と同じやうに、理窟ぬきでそのをどけた姿と行爲に、微笑する。彼等は子供達の如き哄笑をしたいところなのだが、世の中は彼等から哄笑させるだけの氣力を奪ひ去つて居るから、僅に微笑するに止る。

左樣、わがチヤアルズ・スペンサア・チヤプリン氏は、現代に於て、斯の如き存在價値を、スクリーンを通じて我々人類の文化生活の間に占めて居る。

由來、他人を喜ばせ、笑はせるが爲に、自らを輕侮し、故意に自らを滑稽化して見せる職業に從事する人種があつた。道化といふものが即ちそれである。歷史やら傳說やらに基くと、昔の王樣の傍には、必ず、彼等の髭の塵を拂ふことに汲々たる、化物染みた扮裝をした所謂道化なるものが存在して居たことを知る。

王侯の權力が名義だけになつて、實權をブルジョアが把握するに至ると、怪物染みた扮裝こそしてゐないが、之を要するに、同じ意味の道化、幇間なるものが生れた。

特權階級はその權力が強いから、それらの道化を獨占して置くことが出來る。けれども被支配階級は、獨占することが出來ない。自分達を笑はせ、喜ばせて吳れるものを、從つて共同の力で所有しやうと願ふ。その願望から生れ出たものが、寄席とか、曲馬團とか、さうした

ところに見受けられる道化である。とり分け、映畫を支持する者の數は、寄席や曲馬團の比ではない。世界何億のスクリンを見入る大衆を對照として生れて出た、映畫の道化といふものの勢力は、必然的に、恐る可きものである。

陰謀と秘密に閉ざされた宮廷に、蒼白い陰險な顔に殊更な笑ひを浮べて泳ぎ廻つてゐた道化は、いつしか、世界何億の人々の前に、堂々と跳ね廻り得る道化に進展して來た。チヤアリイ・チヤプリンは、その道化の中の道化とも考へらるべき人物である。

今、世界に代表的な道化を物色すれば、可成澤山の人物が擧げられるであらう。例へば、ダロツクとか、フラテリニとか、エド・ウキンとか、彼等は道化として立派な藝術家であるし、又、立派な人物でもある。けれども、彼等を支持する數は決して、チヤアリイの敵ではない。そして、その階級も極めて偏つたものであると云ひ得る。

その意味に於て、チヤアリイ・チヤプリンは、全世界の道化である。此の道化、果して、いかなる笑ひを、いかにして提供して居るのであらうか。

(2) 生ひ立ち

チヤアリイの傳記に依ると、

一八八九年（彼は今年三十九になる譯だ）ロンドンで生れた。父は寄席藝人で若くして死んだ。母は結婚前は喜歌劇役者として人氣があつた。夫に死なれると、夫の連れ子のシドニイと、自分達の間に生れたチヤアリイと二人を育てるのに、まるでヂケンスの小説にでも出て來るやうな、悲慘な經驗を繰返さねばならなかつた。

病氣や貧乏や寒さが、チヤアリイの行手には一杯待ち受けて居た。家に一足しか靴のないことがあつた。その靴を母子が代る代る穿いて、傳道館の接待スウプを飲みに出かけたこともあつた。そんな手痛い苦痛が、遂に弱い母親の心身を疲らせ切つて、彼女の氣を狂はせて了つた。チヤアリイ、その時年は五つ。母は慈善病院に連れ去られ、兄のシドニイとチヤアリイとは、まるで街に遊ぶ雀のやうに、あはれな境遇に落ちて了つた。

六つの年、チヤアリイは街のオルガン彈きに雇はれ、帽子を持つて客の間を廻つては、喜捨の金を集めたりした。母親は時々快くなつて病院から出されたこともあつたが、直きに又惡くなつて入れられて了ふ。チヤアリイは南京豆の一握りを握つて、母親の所に面會に行き、母と共に木の下に坐つて、涙ながらに南京豆を喰べ合つたこともあつたといふ。

母の病はチヤアリイが十四になつても、未だ惡かつた。兄のシドニイは南アフリカ行きの船のボーイになつてロンドンを見棄て、泣き叫ぶあはれな母は、チヤアリイが一人、看守らねばならなかつた。

が、彼の母は俳優として勝れた腕を持つてゐたので、病氣のよい時などには、それとなく、チヤアリイに、パントマイムなどを教へ込ん

だ。もともと、藝人の血筋だし、八つの年に、初舞臺を踏んだ經驗もあるし、チヤアリイのその方に對する興味は年毎に大きくなつて、十七の年には、滑稽無言劇で評判のカルノオ一座に加はり、愈々正式に舞臺生活に入つた。現在、彼の演技の根柢を爲すものはカルノオ一座の傳統である。

カルノオ一座が米國に旅興行に赴いた時、チヤアリイも一座してゐたが、その時、はじめて彼は活動寫眞に興味を覺え、その後、數回米國へ旅してゐる間に、遂に決心して映畫界に身を投じた。二十四の年である。

爾後、彼は人氣と金と名聲とを得る一方で、遂に現在の地位――映畫喜劇の第一人者たる榮譽を荷ふに至つた。

(3)　姿

彼は異人としては背が低い。撫肩だから餘計にさう見える。五呎四吋しかない。

映畫の中に出て來る彼は、山高を被り、チヨビ髭を生やし、ケーンを持ち、ダブダブ靴を穿き、家鴨のやうな足取りで世界に笑ひかける。平常の彼は、映畫とはまるで感じが異る。髭がなく、柔い薔薇色の髮の毛も、半分ばかりは銀白になつて居る。目は碧い。顏には、殊に額にはくつきり皺が濃く浮いて見える。靜かに歩く。聲は女のやうに低く優しい。言葉も女の使ふやうな、温順しい言葉を使ふ。

仕事にかかると、併し、優しい聲だが、それに力と熱が加はつて、緊迫されるやうな心持がする。體は敏捷に動き、すべてが非常に神經的た恐るべき精力家である。駈足が速く、長續きがする。仕事が始つてそれに熱すると、誰よりも疲れない。

彼が昂奮しても、それはいつでも禮儀を忘れない、節度を伴ふ昂奮である。

(4)　生活

彼の生活は二つに分かれる。

ハリウツドの山の手、ビヴアリイ丘に作られてある私宅に於ける生活と、ラブレア通りの、小ぢんまりとした撮影所に於ける生活と、此の二つである。

丘の家にも、撮影所にも日本人が澤山に雇はれて居る。日本人は愛想氣がないが、忠實で正直だから、彼は安心して居られると云つて居る。

丘の家は決して豪奢ではない。けれどもいかにも英國風の趣味で、かつちりまとまつた感じである。撮影所も同樣である。此の撮影所は彼一人の爲の撮影所であるから、規模は決して大きくはない。併し、私宅と同樣に、徹頭徹尾、彼の趣味によつて出來上つてゐる。靜かで、床しくて、平和である。

仕事に興が乘つて忙しい時は九時頃、丘の家から撮影所に、さうでない日でも十時頃にはやつて來る。そして六時頃まで働いたり、考へた

りする。

撮影所の化粧部屋兼居間には、彼の有名なダブダブ靴やケーンや山高の豫備品が幾つか並んで居る。机の上には、勉強中の讀物が置いてある。新刊通俗小說などは置かれて居ない。社會問題を論じた本や詩集が、よく見受けられる。

別の場所に「一洋離の部屋」と彼が呼んでゐる、何の飾りもない、ただ卓と椅子だけが置かれあるガランとした部屋がある。そこに、彼は腹心とだけ集つて、寄り寄りに知惠を絞り合つて、映畫の組立てを考へる。飾りや色彩を殊更その部屋に使用して居ないのも、氣を散らせない爲であるといふ。電話さへ取次がないやうにして、ひたすら、閑寂なる氣分の裡に、よき頭腦の子供を生まうと努力する。彼が此處に籠つて居る時などは、どんな人物でも彼に面會が出來ないのは無論である。

彼は仕事をよく休む。ひどく神經家で、機嫌買ひである。煙草を喫ふことは喫ふが、好きで吸ふ方ではない。お酒も强い方ではない。まるきりの禁酒家でもない。拳鬪が好きだ。尤も見ることが。だから拳鬪の面白い試合があれば、大抵仕事を休む。自働車を運轉することも好きだ。運轉は決して上手ではないが。

いよいよ仕事にかかると大變である。先づ彼は他の監督のやうに脚本といふものを持たない。ただ、あらましな段取を書いて置くに止める。彼には脚本を字で書くより、頭に書いて置いた方が、はるかに確かで有効なのである。フイルムは、ちようど、性急な文士が原稿紙を書きつぶすやうに、いくらでもやり直しに費す。彼の周圍は、彼一人がお山の大將であるだけに、恐く「イエス・マン」ばかりがゐる。「結構で」「實に成功です」「恐れ入りました」。こんなことばかり云つてゐる手合だから、彼は疑ひ深くなつて居る。出來上つた成績を毎日試驗する時、彼の顏は嚴肅そのもののやうである。彼は自らのみを信ずる。人の言葉に氣を動かすやうに見えて、その實、人の言葉を中々に受け入れない强い自己を持つて居る。

今は時めく一本立ちの監督になつてゐるスサランドは、長く彼の助手をして居たが、その評に云ふ。「チャプリンの機嫌がよいか惡いか、それを見別ける秘法があります。濃い綠色の服を着て居る時は不機嫌の時です。頭を垂れ、猫背になり、重い足取りで歩いてゐるやうな時はきつと濃い綠色の服を着てゐます。氣持の輕い時は、チャプリンは足早です、チョッキに指をあてて、いぢくり乍ら、チョコチョコして居るやうな時だつたら、大抵の話が聞きとどけられます。そんな時は輕い色の服をきつと着て居ます。一番によいのは、チャプリンが白いフランネルのヅボンを穿いて、出て來た時です。」

(5) 戀愛

チャプリンがいかなる戀愛觀を持ち、いかなる戀愛生活をして來たか、ゴシツプの大渦卷の中に入つて居る人だけに、その眞相を探ることは中々難しい。

彼の自ら記した書物の中に、その初戀の女のことに就いて語つて居る一節がある。それに依ると、年は十九、まだ世の中は幸福ばかりが待つて居るとしか思はれぬ頃、ロンドンで、しつくり合つたフロックコオトを着、ケーンを携へ、山高帽子を被り、公園で生れてはじめてあひびきの約束をして、相手の娘が電車から下りて來るのを今か今かと心を躍らしながら待つて居たことがあつたといふ。相手の娘のことについては、その名がヘテイといふだけで、何者だか詳しいことは少しも書いてゐない。役者となつて十九の年、はじめて娘とあひびきする。その娘が電車でやつて來るなどは、一寸面白い情景である。それから十何年の後、チヤプリンはその娘の兄に會つたところが、その兄が默つて娘の寫眞を彼に渡したと書いてある。その初戀の娘が、その後死んで了つたことを意味して居るのだか、何だか、その邊が甚だ曖昧としてゐるのは殘念である。

一般的に有名になつたのは、彼が、處女らしい處女として、女の監督ロイス・ウエバアに愛されてゐたミルドレッド・ハリスなる女優と結婚してからであらう。併し、氣難し屋のチヤアリイと、小娘のミルドレッドの結婚生活がどういふ結末を告げたか、フランスの批評家で、彼の理解者ルイ・デリュクはから書いて居る。

――

「チヤアリイは一人の赤ン坊を持つた――二三ケ月もたたないうちにその赤ン坊は死んで了つた。チヤアリイは非常に泣いた。これは我々には關係のないことだが。所が今彼等は離婚して了つた。この愛された女は、夫が彼女にパンも呉れてやらず、醉つぱらつては彼女をひどくぶつと云つた。チヤアリイは、何も云はなかつた。彼は少し瘦せた。又彼は再び獨りぼつちになつた。彼は獨りでないときは「彼」ではなくなるのだらう。かわいさうな男だ。」

ミルドレッドと彼女の賢明なる母親は、さやうにして、彼から莫大な手切金を取り、石油成金のところへ行つた。その後、ある料理屋で、その石油屋がチヤアリイを散々非道い目に逢はせたといふ、後日譚まで傳つて居る。

これに懲りた彼は暫く旅に出たりした。その旅先きで、獨逸の女優ポラ・ネグリと逢つたことが、世界的情事として、各通信社に莫大な電報料を費ひやさせ、又、事實、ポラ・ネグリは、彼の後を慕つてでも來たやうに、ハリウッドに間もなく姿を表したりした。それが爲に、更にその噂は大きくなつた。實際二人だけの秘密として保たれて居る事柄もあつたかも知れぬが、妖婦ポラは、一代の好色兒ルドルフ・ヴレンチノとその後艶名を馳せ、チヤプリンは再び孤獨に歸つて了つた。

けれども、それも長くは續かなかつた。彼はミルドレッドと同型のリタ・グレイ、彼女は彼の「サンニイサイド」で、森に踊る少女の役などをつとめて居たが、彼女を戀して、遂に結婚をして了つた。「黃金狂時代」の撮影中で、彼が戀愛にばかり夢中になつて、撮影を怠り、全員の心を不穩なものに導いたりしたが、結局、その映畫の女主人公と

して雇ひ入れたリタ・グレイを妻にし、新たに、ジョオヂア・ヘエルを雇つて映畫を完成させた。併し、その映畫が完成し、「サーカス」にとりかゝる頃、ミルドレッドと同じ理由の下に、彼は子供まで生れたリタから離婚の訴訟を提起され、彼は沈默し、痩せ、不機嫌になつて了つた。

そして今、彼は半白の頭髮となり、寂し氣な足取りで、丘の家と撮影所との間を、毎日往復して居るのである。

ここに、尤も、彼が一巻物時代から、長く彼の相手を務めて居るエドナ・パアヴイアンスといふ女性が居る。「巴里の女」で主役を演じて居ることは人の知るところであるが、彼女との間にいかなる關係があるか、單なる友情から、今に至るまで彼女の生活を彼は保證して居るのであらうか。

何れにしても、彼は結婚に對しては、常に不幸である。米國のヒステリイ的婦人雜誌記者は、チヤツプリンの如き天才には、普通の女優風情の如き者は妻たる資格はない。などと彼を恰も別種の人間であるかの如くに解釋して居る者がある。フロイドなどに分析させたら面白いことを必ず云ふと思ふが、彼が變態的なところのある、一種のフエミニストであることは、色々のことから事實らしく思はれる。

(6) 作　品

彼の作品はここに全部を擧げて檢討する事は許されないが、大體に於て、これを三つの時代に分けて、特色づける事が出來やうと思ふ。

先づ第一期は、カルノオ喜劇の傳統に依つて鍛き上げられた彼の技巧が、つまり、彼の寄席藝そのものが映畫化され、一般の見物に喜ばれて居た時代の作品で、勿論、極めて初期の作品で、デブ君とかメエベル・ノオマンドとか、さういつた達者な俳優と組んで、それぞれが技巧の極を盡し合つた時代である。バアレスクの「カルメン」などはその頃の傑作であらう。

第二期はさうした「仁輪加」仕立ての、寄席藝風の面白さが彼の映畫の全部ではなくして、彼自身が、彼の映畫に少しづつ滲み出て來た頃の映畫、「彼自身」といつても、要するに感傷的な哀愁や、懷疑的な淡い運命觀などを意味するものである。「イイジイ・ストリイト」「ザガボンド」「冒險者」「午前一時」等はその中でも記憶さるべき作品であらう。

第三期の作品は、愈々彼が自由な製作條件の下に映畫を作ることが出來るやうになり、從つて彼自身の姿がより色濃く映畫に浮び上つて來るやうになつてから、現在に至るまでが含まれるのである。

その中でも、漂泊の人と犬との生活を描いた「犬の生活」、一兵卒を主人公にした歐洲大戰映畫「擔へ銃」、子供の生命と運命とを劇的に描いた「キツド」、砂金掘りの生活を皮肉に巧みに扱つた「黄金狂時代」が、最も好評で、一番に專門家の間で論議されたのは、彼は監督だけして主演しない、喜劇ならざる、運命劇「巴里の女」であらう。

以上は、一般批評家の結論を擧げたのであるが、チヤプリン自身は、かういふことを、自分の作品に就いて語つて居る。

「私は規則立つて脚本通りに映畫を作りたいとは思ひますが、自分にはどうしてもそれが出來ません。「巴里の女」はその中でも一番計劃的に段々に撮影して行つたものですが、それとても脚本などはなく、頭の中だけでやつて行つたのです。話の面白さでは、自分は「偽牧師」が一番に勝れて居ると思つて居ます。殊にあの映畫の結末は自分が好きなものの一つです。「黄金狂時代」では私は興奮して了つてゐました。どんなものになるか、それさへ解らずにただ感興のまゝに働きました。後になつて、あまり長過ぎたと思ひました。喜劇の長いものは危險です。二時間も見物を笑ひ通しに笑ひ通させるといふことは、生理的にも困難を極めることです。」

(7) 運命論

彼は好んで「運命」なる言葉を使ふ。

彼の最も眞面目なる劇、「巴里の女」には、明らかに「運命のドラマ」と銘打たれて居る。「運命の十字路」とか、「宿命」とか、さういつた字幕が、他の彼の映畫中に屢々見受けられる。彼はそれほど「運命」といふ者に關心を持つて居る。

さうした點から、彼は正に一箇の運命論者であると斷ずることが出來得る。

彼は現代の社會に對して、その缺陷を感じ、その矛盾を憤る心を持つて居る。不公平なる階級の存在、不當な壓迫、さうした事實に、燃えるやうな不平を持つて居る。現代の社會組織の缺陷を彼の如くに意識し、憤慨するならば、彼は何故敢然と立つて積極的な戰ひをしないのか。さういふ要求も起つて來るかも知れぬ。併し、積極的であるべく、彼は餘りに戰鬪的精神が彼の運命論によつて委縮されて居る。人間はいくら戰はうとしたつて、いくら努力しやうとしたつて、所詮は運命の力によつて左右されるに過ぎない。むきになつて見ても、拳を固めて見ても、いつ、それこそ地震が來て、死んで了はないとも限らぬ身の上だ。運命の前には人間一切の努力はすべて無力に等しい、と、彼は冷く考へ込んで居るのである。

彼の淋しい笑ひ顏は、さう考へ込んで、人間を淋しいものにしか思へない爲に起つた表はれであると自分は解釋する。

サーカスの中で、滑稽な扮裝をした道化役者が樣々なふざけ方をして客を笑はせやうとする。客はさほどに笑はない。が、チヤプリンの小道具方が眞面目で仕事をして失敗する。それの方が客に面白く見られて、大喝采を得て、彼が道化役になる。何といふ運命であらう。

戀人同志が故鄕を出奔する爲に打ち合はせる電話が、止むなく中途で一寸切れる。その寸秒の間の出來事の爲に、二人は別れ別れになつて、遂に悲劇に直面する。これも亦、何といふ運命であらう。

戀人を得、金を掴る、此の夢想が叶へられさうになつた浮浪漢がふとしたことで、その思ひが何れも成就せず、落膽してゐると、又新得して兩方の幸福が舞ひ込んで來る。これも亦、何たる運命であらう。

その他、その他、彼がナポレオン一代記を映畫化せんとした、抑々の興味も、ナポレオンが一代の運命兒であるからこそではないであらうか。

此の樣に、彼はあらゆる彼の映畫の主題を運命に採る。が、ロンドンの貧民窟より起つて、喜劇王と云はれるまでになつた、彼自身こそ、最も卓出したる運命劇の主人公ではあるまいか。恐らく、此の自身の運命劇に對しても、彼は、彼らしい冷い淋しい笑ひを以て、自分の幸運を白眼視してゐることであらう。彼はさういふ種類の男である。

(8) 社會觀

此のやうに、彼は運命に對して、人間の位置を非常に弱いものに觀じる。強氣な、肯定的な所を微塵も持つてゐない。

弱々しい感傷、纖細な諧謔、それから釀し出される心細いやうな人間的な心持。彼はその心持をもつて、遠慮會釋のない運命の粗暴性を、ぢつと目を弱く光らして眺め入る。そして、その運命の爲に打ちひしがれた、憐れな人間に對しては無限の同情を寄せる。

だから見給へ。彼の扮する主人公は、現代に於て虐げられつゝある階級に屬する、例へば、小使、小泥棒、掏摸、勞働者、乞食、ホボ、砂金取、百姓、兵卒に限られ、彼の相手となるものには宿無しの犬とか、あはれな女とかゞ出場する。敵役となつて登場する者は、肥つたブルジョア、將校、暴力團、役人、慈善團體の會員、巡査等で、彼等はあらゆる手段を講じて、彼及び彼の仲間を迫害する。

これが、いかなる映畫にも必ず彼の忘れない組立の要素を爲して居る。

從つて、彼は、明らかに彼が弱者の味方であり、或は又、弱者自身であることを表明し、代表し、支配階級の社會に向つて、戰鬪を、併し甚だ意氣昂らざる弱氣の戰鬪を、死に者狂ひになつて挑み、社會の不公平を說き、社會の僞善を暴露する。

だから彼はよく社會主義者として、世の中から見做され、それが爲に、一部からは神の如くに、一部からは惡魔の如くに喧しく論じられてゐる。

彼は果して社會主義者であらうか。

無遠慮なる新聞記者が、或時、その問題に就いて彼に短刀直入に質問したことがある。

「あなたはボルシエヴイキではありませんか。」

「僕は藝術家です。藝術家といふものは、人生に興味を持つものです。所で、ボルシエヴイキの主張は、新しき人生の一面を語つて居るものです。ですから僕はボルシエヴイキに興味を感じてゐるのは事實です。」

此の新聞記者に答へた彼の感想は、たしかに彼自身を僞らずに告白したものだと思ふことが出來る。彼の仲良しには澤山の社會主義者がゐる。彼はよく彼等と議論する。けれども彼は常に彼等の主張に全く

同感することは出來ないと語つて居る。

例へば彼の「僞牧師」といふ映畫の、彼の得意としてゐる最後の場面に就いて語らう。その映畫で彼は可愛い泥棒になつて居るが、官憲に捕へられて護送されて來る。やがて國境にさしかゝる。官憲は彼の心を愛して、國外に放逐してやる。彼は自由になつて、兩手を擧げて喜ぶ。ところがその國でもピストルが鳴り、暴漢が荒れ廻つて、彼の望む平和は得られない。彼は愛憎をつかして不圖、國境の棒杭を見る。その棒杭には「第三インターナショナル」と書いてある。彼はニコリとして、その國境の線上を、つまり地圖にない國の人間として、どこまでも歩いて行くといふ場面がある。

此の一場面などは、彼が社會現象として社會主義運動に興味を抱いてゐることは事實だが、單にそれだけで、それ以上では絶對にないといふ彼の傾向をよく物語つて居るものである。いかなる點より考へても彼の思想や行動は決して「第三インターナショナル」の黨員のそれではない。何れかといへば、彼は、貴族主義的なヒューマニストに近い色彩を一番に豐富に持つて居ると云ふことが出來やう。

今後の彼は知らず、すくなくとも、今迄の彼は、さうであつたと云ひ切ることが出來ると思ふ。

(9) 詩人として、音樂家として。

彼が天才的シネアストとして、斯界に君臨してゐることは絶對である。が、彼が、他の藝術のよき理解者であり、又、器用なるそれらの藝術家であることも忘れてはならぬことである。

彼は詩を好む。彼の最も好む詩人は、オリヴァー・ゴールドスミス、カアル・サンドバアグ、クロオド・マツケイであるといふ。ゴールド・スミスは、その牧歌的な、ボヘミアン的な、純情愛すべき所を愛してゐるのであらう。サンドバアグは、その新鮮な氣分と、虐げられてゐる階級に對する思ひやりとに共感してゐるのであらう。そして、黒人の詩人たるマツケイには、そのコスモポリタン的な、纎細にして技巧的な點に共鳴してゐるのであらう。各々、チヤプリン自身の心と、同じ心を持つた詩人達であるからであらう。

彼にも幾つかの詩がある。その中、彼を最もよく表して居るものを次に掲げて見やう。

いつの日にも忘れ得ぬ人

黄昏　獨り居て　燃ゆる火を見つむ
思ひは　遠くさりし日に
かの君とわれとのみ
陽と雨の中に暮しける樂しき日に
かゝる樂しき日に　再びわれ住み得ば
何物を與へても惜しからず
いつの日にも忘れ得ぬ人
嘆きは死し　思ひ出は生く
今　何等悔いなき忘れ得ぬ人よ

われら二つの生命を結びしものは運命
いかなれば別るる爲にのみ逢ひし縁ぞ
苦しみと悔いを伴ふとも
まことの愛の心に忍び入るはただ一度
おゝ　忘れ得ぬ人よ
いつの日にも忘れ得ぬ人よ」

甚だ拙譯だが、彼の詩情はよく窺はれる。

彼は又、よく音樂の理解者であり、最も器用なる演奏家であり、作曲家である。米國の生んだ新音樂ジヤッツの一人者、ポール・ホワイトマンの仕事を最も早くに認め、是に聲援を與へたものは彼である。

彼の作曲も幾つか發表されてゐる。一九一六年版として、「おゝ、かのセロよ」「ピース、パトロル」「いつの日にも忘れ得ぬ人」これらは誠に單調ではあるが、彼の心持がしみじみとして出てゐる。

二三年前に、彼が作曲したヂヤッヅが、レコードに入つた。「唄を歌ふ」「お前と一緒にポンペイで」がそれであるが、前者は哀調よく彼の心境を物語るものであり、後者は、フエミニストとしての彼を、最もよく表してゐるものであると思ふ。

彼は左利きで、巧みにヴアイオリンを奏でる。

(10)　エピログ、彼の將來

究竟の彼は一體どう成り變つて行くであらうか。

彼の藝は愈々円熟を加へ、彼の顔の皺は愈々深く刻まれて行くであらう。

現代はたしかに彼を要求し、彼の存在を喜んで居る。けれども將來はどうであらう。將來の大衆は、弱々しき人間の魂を描き出す彼の映畫を、現在の如く喜んで眺めるであらうか。此の人の世の忙しさ、運命の神の皮肉さを、ぢつと胸に悲しみながら、冷い笑ひにそれをまぎらして行くだけで、彼の仕事はいゝものであらうか。

これは彼にとつて尠くとも大問題である。彼自身、最近、彼自身について、かやうな述懐を洩した。これを記して、わがチヤプリン小論のエピログとしやう。

「自分の演ずる人物は、仔細に見れば、段々と變つて來ました。出たらめなところがなくなり、少しづゝ悲劇的になり、憐れつぽくなりました。をどけ方が少なくなつて、分別臭くなりました。誰かが云つたやうに、假面を被つてゐる部分が乏しくなつて、赤裸々の人間性が余計になつて來ました。

今迄の人物の扮裝を變へるかどうかといふことに就いては明言出來ません。變へるとしたら、全く別個の人物のやうに變へるつもりです。「サーカス」では、昔の心持を少し出して見たいと心掛けて見ました。恐らく同斷的に過ぎたかも知れません。これから先きどうするか。將來はいつでも定めるに困難なことです。」

支那のモダーン・ガール

池田桃川

一

四千年來の文化文明を誇る老帝國支那も、吹きまくる世界思潮の凄まじい風から、除外されることは出來ないと見え、この頃頻りと、歐化米化の流行が、思想や、生活の上に現はれてきた。デモクラシーが說かれ、マルクスが論ぜられ、バーナード・ショウが語られる一方では、ザンギリ頭に、赤ネクタイを結んだ若い女が、サンガー女史の本をポケットに忍ばして、ノーマ・シエーラーを讃美する。長袖長裙のぞろりとした服裝は、いつしか、肉も露はな短裙袖無しの洋裝と化し、五彩の花車廂深く、今ぞとつぎゆく香り床しき花嫁姿は、純白の婚禮服に、花束抱いて、愛人の腕に擁せられるといふ當世風と變り、深窓垂簾の中に隱れて、顏さへ見せなかつた處女も、燕のやうに輕快に、そして雲雀のやうに囀りながら、花の香むせるやうなダンスホールに入つて、夜を徹し踊り狂ふ。そこに、目に見えない時勢の推移といふ不可抗的の力があるとは言へ、古來の傳統習慣に生きんとする老大國の婦女子に、外國の空氣が、かほどまでの影響を與へようとは、何といふ急な變り方であらう。先哲の男女七歲の訓も、三去三從の女大學も、彼女等の前には、もう紙屑も同樣である。これが、纏足の危なかしい家鴨腰をふり立て、ふり立てして步く古代賢母の遺物めいたお袋の腹から飛び出したものとは、どうしても受けとれないほど、兩者の間に、物と時との隔たりを見る。家鴨の子に、現代の息が掛つて、鵞と化けた。この不肖の兒は、親讓りの良妻賢母型を破り、婦人解放、男女平等への道へと、スク／＼と伸びて行かうとしてゐる。

政治も、社會も、個人も、すべてのものが一齊に、古い封建の束縛的制度及風習からのがれて、自由にして新鮮なる組織及生活へ芽生へせんとしてあせりつゝ今日、婦人が、婦人解放、男女同權、參政權獲得等種々の婦人運動に奔走しつゝあるのは、むしろ當前の現象と言つてよいかも知れない。上海廣東に於ける宋靄齡、何香凝等諸女士の運動を始めとし、何々婦人會や、何々婦人工會などが、その集團的の力を以て、婦人の解放を叫び、男女の同權を唱へ、畜婢納妾の禁止を宣

言しつゝあるのは、その効果の如何は別として、一部男子及智識階級の婦人に、注意と刺戟を促がしつゝあるのは事實である。が而し、遺憾ながら、これ等の婦人運動は、全般的に、國民的に、影響を及ぼすこと頗る薄く、從つて捗々しい効果をあげる運びに進んでゐない。のみならず、運動そのものに對して、國民一般が、眞面目に批判し、考察するまでには、尚相當の年月を經ねばならない狀態に在る。然らばナゼに、支那の婦人運動は、その聲の大なるに比し、その發育も遲く、効果を擧ぐることが尠ないかといふに、それは、大體次の四つの原因に由來する。

二

第一は、婦人の覺醒など言ふことが、支那大國民の上から見て、僅一小部に止まることである。言ふまでもなく、この種の婦人運動なるものは、遠く海を越えて來た外來思想の影響であつて、支那人自身の發見ではない。言はゞ物眞似である。尤も、歐米の本ものゝ運動主旨に共鳴し、贊成し、教へられた結果、その主旨と實行方法とを、自國の婦女の上に移さんとしたものには相違なからうけれど、本を質せば矢張り物眞似である。眞似の上手なことに於ては、わが日本人も、支那人に優ることがあつても、劣ることはないが、自國の文化は打ち捨て、一にも西洋、二にも西洋と、政治運動や社會政策から、日常の起居衣食に至るまで西洋かぶれした支那の新らしい國民が、鵜呑みの婦人運動を振り翳す段に於ては、眞似が過ぎて、チト當てられ氣味の感がないでもない。支那人は一體に語學がうまいが、頭がよくて語學の達者な秀才才媛が、外國に二三年留學して持つて返るお土產の多くは、ダンスと、カフエー女の交際術と、流行の服と、輕薄と、活動俳優の名と、口笛と、語學と、それに、學問の表皮と、婦人運動位なものであつて、本統に專門の學術を究めて歸るものは、百人に一人あるかなしである。而してそれ等のお土產は、當代の秀才才媛に、一番相應しい外國留學の研究科目であつて、誰が監督しなくとも、感心に各自で專念修業する。その修養科目を、歸國の上、國民の頭へ注入する。目先きの變つた新らしいものに惚れ易い若き國民は、紅の水へ點ずるが如く、それ等の科目に染つて、西洋文明崇拜の本性を發揮する。たとへ、そうした洋行歸りが齎さなくとも、外來の思想文化は、海に接近した上海や廣東へ、直接に流れ寄り、同地の新人にそれを感染させる。而しながら、かくの如くにして入つた外來の思想文化は、ホンの國民の一部を色どりするに止まり、四千年來の古い思想文化に生きて來た老大國民を、根本から染め替へることは出來ない。出來る時があるにしても、それはきのふけふ、オイソレといふ運びには行かない。婦人運動の如きに對しても、全國民が素早く目覺めないのは、無理もない話である。

第二は、支那國民は、今內亂に疲れ、政客軍人は爭議戰爭に忙がはしく、共に他を顧みる暇がないからである。事實、今時の支那國民

は、いかにして生き、いかにして自分の生命と財産を完全ならしめんかといふことに、大變頭を使つてゐる。田舍にゐる者は、軍隊の通過する每に、軍用金の調達を仰せつかつたり、食糧品の提供や運搬を强ひられたりする外、時とすると、男は人夫に引つ立てられ、婦女子は凌辱せられ、家財は掠奪されたりなどすることもあつて、一時として油斷は出來ない。多年汗水流して、粒々辛苦してやつと少し計りの財産を造りあげたかと思ふと、「土豪劣紳」として、財産を沒收せられたり、殺されたり、時には又、思ひがけない土匪などの襲擊を受けて、根こそぎ持つて行かれる。その業を勵み、生を安んずるといふ泰平の世の恩惠といふものがちつともない。風の戰ぎにも枕を蹴つて飛び起きる亂世の民の有樣である。これでどうして、自分以外の、さうした面倒臭い學問的な儲からないことを考へたり論じたりする暇があらうか。自分一人を持てあましてゐる彼等に、外のことまで考へてくれと持ち込むのは、實際不可能の話である。田舍の人ばかりでなく、都會の住民も、今は決して安穩でゐられない。それは、前にも言つた通り、軍隊がその土地に來る每に、軍用金として幾らかづつ絞られる。何しろ軍用金の仰せつけは、總商會に對し、絕對命令なので、どうにも仕樣がない。命令に背けば命がないものと思はねばならない。その外に、內亂につれて色んな社會運動が起り、ヤレ罷業だとか、外國品の販賣禁止だとか、色んな商賣上の打擊を被むる。この種の運動を牛耳るものは、無頼漢の親方や、學生など、多く無產階級であるが、その度に少なからぬ害を被る商民こそいゝ迷惑だ。これでは、わが身を守る急務の外、頭を外へ使はれないのは、當り前の話である。

戰禍、內亂のたゝりは、都會と言はず、田舍と言はず、一樣に及び、生民は、その身を守るに、戰々恟々たる狀態である。かくの如き不安の狀態に置かれたる國民は、實際婦人解放のごとき一文にもならぬことは、どうでもよいのである。又事實、それ等の文化運動を顧みる餘裕はない。婦人運動が、國民の一部に止まることも亦無理からぬ次第であらう。

第三は、婦人そのものが、また經濟的に獨立し得ないことに在る。婦人の解放を叫び、男女の同權を高唱しても、婦人が社會に立つて、その一員として獨立し得ない間は、それを實際に行ふことが出來ないではないか。男の從となつて生きてゐる彼女等は、どうして男と同等しやうな權利が得られたり、金の關係を無視した解放などが出來るであらうぞ。解放や同權を主張する前に、彼女等は先づ經濟的に獨立することが急務である。

その宣言發揚するところの婦人運動の聲は大きいが、婦人の經濟的獨立は、日本に比べて、支那はまだ頗る貧弱である。支那で婦人が職業を得てゐるのは、學校の先生か看護婦位のものであつて、銀行會社停車場などに執務してゐる所謂職業婦人は、珍らしいほど少ない。假令日に、社會の一員として、男子と共に働かうといふ考が、あるにはあるとしても、いざとなれば、やらないのは、勇氣がないのか、それ

とも恥とするのか、或は氣まりが悪いか何れかに知らないけれども、男と机を並べて事務を見る職業婦人は極めて少ない。乗合自動車の車掌にでもなれと言つたら、彼女等の多くは、顔を眞赤にして逃げ出すであらう。團體に、演說に、遠吠えはよくやるが、それを實際的に行ふべき手段として、經濟的獨立を計るべき實務に就からうとはしないから困りものだ。由來、支那人は遠吠えは達者だ。何か一つの政爭が起ると、所謂政客連は、通電といふ遠吠えをやつて、一つには自己の存在を明らかにせんとする。近頃では、この遠吠えが、婦人にまで移つてきた。實行力のない遠吠えのみでは、いかなる運動も、運動そのものすら認められないであらう。ましてその効果をやである。かくの如き實のない運動が、空文視されるのは仕方もないことだ

第四は、婦人運動をやる婦人そのもの丶素質がよくないことだ。素質が悪いと言へば語弊があるが、つまりこの運動は、社會に中堅をなす純良な婦人を大同團結しての運動ではなくして、一部奇矯に走らんとする變態婦人か、然らずんば、爲めにせんとする政治的色彩を帶べる婦人か、或は工人的の婦女子かであつて、一方に偏したものに非ずんば、無知階級者の運動である。これでは、社會國家を動かす本統の力は出ない。

支那の新らしい婦人運動が、捗々しい効果を擧げ得ない理由は、以上四つの原因に由つて略その一斑を想像し得られること丶思ふ。この婦人運動の副産物として、目覺め過ぎ、解放され過ぎたモダーン・ガールが茲に生れる。

三

婦人の裸體游行といふ突拍子もない事件が、この程漢口で持ちあがり、世人をアッと驚倒させてしまつた。裸體游行の主旨なるものを見るに、われ〳〵が男子から馬鹿にされるのは、男子と同等になり得ないからであつて、常に男子に服從的態度を取るに起因する。そこでわれわれは、まづ服從的態度を改め、男子と同等になる爲めに、男女一切の差別を除かねばならない。而して、女子が男子に對して、著しく差別的觀念を生じ易いのは、羞耻である。これがあるから、女子は男子に對して、思ひ切つたことも言へなければ、しもしない。故にわれわれ女子は、この羞耻心を除く爲め裸體游行を行ひ、男女差別の觀念を薄らげ、そして漸次同等の地位まで進まねばならない。もと〳〵男も女も裸であるべき筈のが、色々の習慣から、衣服をつけ、遂に性的差別觀念を生じ、羞耻心を生むに至つたから茲に還元して、赤裸々なる一個の人間となる分に、何も遠慮することはない、同志の士は振つて、この游行に參加されたい云々と言ふのに在る。裸體游行を、蛇行列か提灯行列かなんぞと一緒にしてゐるのも奇抜だが、羞耻心を除くため、妙齢の女が、陸の人魚の如く、白晝大道を游行しようと言ふのだから、開いた口が塞がらない。更に、羞耻心を除くことが、男女同等に至る一つの手段と心得るに至つては、何と評してよいか、只も

う苦笑する外はない。一時はこれを眞面目に宣傳し、これに加入を申し込んだ妙齡の女も少しあつたと言ふから、支那婦人のモダーン振りも、實に驚歎に値する。

婦人の解放といふことを、生れたまゝの裸に還ることゝでも思つてゐるのであらう。男女同權は、性的無差別とでも考へてゐはしないだらうか。でなければ、そんな奇想天外的な、調子外れの見解が下せる筈はない。

一體、女から羞恥觀念を引いて何が殘る。それとも、支那の女は、白晝大道を、素つ裸のまゝ、男子環視の中を、平氣で、大手を振つて通行出來るであらうか。

婦人運動の聲に刺戟され、解放や同權といふ意味を穿き違へ、目覺め過ぎ、行き過ぎ、而してモダーン過ぎた彼女等の、この天下一品の企ては、とかく極端に走りたがる支那國民性の一部の表はれであると共に、婦人運動に對する一種の皮肉でなくて何であらう。見やうに由つては、絶對從順なるべき東洋婦人には、婦人運動など、外國の眞似をしても駄目だ。女は兒を生む。兒を生めば、乳を呑ませる。家庭の人となつてしまつたら、婦人運動も何もない。戀愛を生命とする女は、一度家庭といふ戀愛の坩の中に入つてしまへば、男女同權も、參政權も忘れてしまつて、夫君の夕食の菜と、子供のおしめ洗濯とが關の山である。結局婦人運動の如きも、未婚時代、一時の血氣と物好奇とから關係する一種の流行に過ぎないんだ。何も騷ぐことも、心配することもない——といふやうな皮肉な面當のための運動と、解すれば解されないこともないが、それにしては餘り念が入り過ぎてゐるし、眞面目な考としては、正氣の沙汰とは受けとれない。幾分はどうかしてゐるだらうけれども、彼女等が、氣違ひの寄り合ひでないことは慥かだ。要するに、こんな奇想天外な企てを考へついたのも、外來思想を鵜呑みにして、只もう歐化米化に心醉した半囓りの若者共が、前後の考もなく、うか〳〵と、夢のやうな熱に浮かされたものと見るべきであらう。が彼女等は飽くまで眞面目であつたと傳へられてゐるから笑止千萬だ。

四

さて、漢口に於けるこの裸體遊行の企ては、すぐに上海にも飛火して、秘かに、その宣言が發表され、それと共に、參加希望者の募集が行はれた。多少の應募者もあつた模樣であつたが、漢口の運動が、その筋から禁止されたので、上海の方も立消えとなり、花々しかるべき裸體遊行も、とう〳〵行はれずに濟んでしまつた。而し一部の新聞の傳ふるところに由れば、漢口の遊行は、一二回夜陰窃かに行はれ、現にその遊行を寫した寫眞さへ密賣されてゐると傳へてゐる。もしそれが事實であるとすれば、この思ひがけない陸の人魚の行列は、沿道の男の目を喜ばしめ、且つ遊行參加者の羞恥心を强めたのみであつて、勿論何等目的に近い効果を擧げたことゝも思はれない。

由來、支那國民は、極端から極端に流れ易い性格者であつて、これは支那國民の一つの特徴である。一方、非常に平和愛好のおとなしい國民であるかと思へば、一方に於ては、世界にも稀な程の慘忍な行爲を敢てする。楊州十日記や、金陵小月記等を讀むまでもなく、彼等の殘虐性は、今回南京に於て、外國婦人に向つて加へられた暴行に由つても、その全班を想像し得らるゝであらう。田に耕し、水に牛飼ふ天下の農民も、何かに刺戟され一朝土匪と化すると、まるで人間が變つたやうな荒仕事を平氣でやらかし、人民を愛撫する天子の如き武后も、利權と嫉妬のためには、わが實子まで締め殺したではないか。本の上で知つた共產主義に、只譯もなく共鳴してしまつて、その主義を實行する爲めに、地方の富豪を虐殺したり、良民に掠奪暴行を加へたりした共產黨の行爲も、彼等が極端に走り易い性癖の一例とも見られる。裸體遊行の如きも、婦人解放の程度を外した極端な一例で、正に正鵠な心理を失した現代支那人の心性を表現する一大傑作である。

こういふ突飛な新しがり屋の女は、ちよい〳〵現はれると見えて、革命女士として名高い吳木蘭は、第一革命當時、軍裝して自ら娘子軍を率ゐ、又かの沈佩貞女士の如きは、十數年前、婦人の奴隷的屈從を解放し、立つて男子と戰へと叫んだことがあり、更に先年男學生排日運動に狂奔した際、女學生連は、その勞を慰める爲め、路傍に茶菓を運び、學生會に於ては、衣服の世話などまでしたと言ふではないか。これが若し日本だつたらどうであらう。支那は日本より遲れてゐるようで、あるものは、日本より進み過ぎてゐる。

どんたのをモダーン・ガールと言ふか、委しいことは知らないけれど、それが若し、銀座あたりをブラするザンギリ頭の、スカートの短かい洋裝の若い人や、不二家あたりで、細い金卷の煙草を燻らし、イヤ洒ア洒アと若い男達と恥面もなく親しく話すすつきりした和裝の青兒などとするなら、支那のモダーン・ガールは、日本のそれ等より、進んではゐても、遲れてはゐないと言つてよい。內面的に、正しい、清い、デリケートな情操と、聰明、教養とを多分に持つべきであるか否かは別問題として、その表面的のモダーン振りなら、支那も決して日本に負けてはゐない。裸體遊行の如き突飛な眞似は暫らく措き、支那モダーン・ガールの、姿を見よ、服を見よ。それ等は、モダーンの名に相應しいだけの、嶄新にしてチヤーミングな容貌になれるものゝみである。支那の若い女性の髮は、言ひ合はせたやうに皆ザンギリであつて、長髮の方がダツト少ない。そのザンギリは、後頭部に於て、斜めに削る如く切り取り、兩鬢を少し永くあまして、耳隱しの如く、前にツンと突き出し、前から見れば、一寸格好よく出來てゐる。服裝の如きも、洋服なら、スカートを短かく、靴下を長く、胸も腕も露はに、高蹻の巴里靴を、爪先で、飛ぶやうにして歩いてゆく。支那服なら、目も覺めるやうな花模樣の、金絲浮かしのぬひとりしたのなどを、ぞろりと着、腕首に、金時計など捲きつけ、腰をひねつたやうにして輕く歩く。そして、カフエーに入る。ダンス・ホールに行く。[illegible]

馬へ出かける。凡そ人々の群る情熱の巷へは、どこへでも、しやなりしやなり出向き、十六七の小娘が、生意氣に、煙草など吹かし、チ、チク、チ、チクと囀りつゝ、人生の春を誇らしげに、モダーン振りを發揮する。享樂のむせるやうな紅いアトモスフエヤーに、夢の如く生きてゆくこれ等モダーン・ガールが、一歩を過つて身も心も汚れ果て、更に又一歩を誤つて、裸體游行を企つるなどは、それが內面的に、眞純な情感、教養ある心性などを持つてゐないことを證するもので、只外面的のモダーンたるをもの語るものである。

五

更に最近に至つて、短袴、ザンギリのモダーン・ガールは、漢口あたりでは、中山服といふ軍服と軍帽に變り、女軍士といふ服裝をして、大道を濶歩して、女だてらに、あられもなく、浴場に入つて三助を呼び立て、カフエーでビールを傾け、口笛で愛人を呼び、小さい鞭で車夫をひつぱたいたりなどするさうである。日本でも、女浴客が三助を呼んだり、石礫で愛人の家の雨戸を叩いたりすることはあるやうだが、軍服姿の大道濶歩や、鞭をあげて群集を指揮するなどの話はまだ聞かぬやうだ。尤もこれは、革命軍や、工人會の女糺察隊であらうが、こういふ男まさりの活動ぶりには、日本のモダーンも顏色なしであらう。

若い女の男裝したのは、上海あたりでもちよいちよい見かける。男の服を着て、鳥打帽をかぶり、細いステッキなんか持つて、盛り場を歩きひどいのになると、自分より若い女性の手を引き、樂しさうにぶらついてゐる。先日或る一人の美少女のために、二人のモダン・ガールが喧嘩を始め、爭奪のため、短刀までぬき掛つたとかいふことだが、これは日本の女學校あたりでも常套事である同性愛、即ちSの奪ひ合ひである。而し、日本の女學校では、姉として妹を愛する程度であるが、支那のは、男として女を愛してみたいといふ心理である。自分の妹となつた、自分を姉と呼んだ――それでは畢竟同性愛に過ぎない、それよりもう一歩進み、自分が男となり、夫の積りになつて、その妹分を、情人とし、妻としてみたいのであつて、美少女の男に對する心理を、自分のみに充分に享受し、怖れ戰くものに似たセンチメンタルな對異性の感覺を、慘虐に體得して、一種變態戀愛心理を滿足せしめんとするのである。同性愛では、異性愛の如き深刻味がない。どうしても物足らぬ。本統の心の動きが摑めない。そういふ變態戀愛を得んとするために、一つは男裝をする。が又一つには、その姿で、好きな男と、もつれ合つて步く。その時は、鳥打帽をかぶつてゐても、勿論女の心持になりきる。女にも見まがうほどの若い美くしい少年は、鳥打帽の下から、そのつぶらかな眼を輝やかし、兩頰を染めて、喃々と語る態は……それがあとで女だと分るなど、探偵物にしても、中心人物となりそうな話である。

次は、廣東での話である。いづれは、モダーン・ガールに屬すべき

種類の女であらう。胡某、楊某などいふ四五人の仲間が、いつもリウとした服装をして、唇には眞赤な口紅をつけ、眉にはまゆづみを引き、活動寫眞の中からぬけ出てきた女優のやうな華やかな姿を、夜毎日毎に、劇場や、公園、盛り場などに現はし、そこの多情漢を悩殺してゐた。ある時、その仲間の一人胡某女士を見染めた楊某といふ富豪が、どうかして第何番目かの夫人にしたいと、札ビラを切つて勧誘してみたが、どうしても靡きそうにない。胡某のみならず、この仲間の品行のいゝことは驚ろくばかりで、噂のたねにするやうなローマンスが一つも見つからない。それほど揃ひも揃つて堅いので、楊某たるもの、益々情慾の焔を燃やし、どうかしてモノにしたいと、品を代へ、手を代へ、人を頼んで口説いこみたが、梃でも動く様には見えないで、相變らず、その美くしい容姿を、劇場などに見せびらかす。たまには、カフエーに現はれ、ホロ酔ひ機嫌で、花の崩るゝ如く一かたまりとなつて踊つてゆく。二十過ぎた爛熟の絶頂に在る彼女等が、いかに貞操堅固と言つても、朝から晩まで、あんな享樂の巷をさ迷ふてゐながら、たとひ程度を越えたる交際はしないでも、異性の一人や二人の友達が出來さうな筈なのに、この仲間だけは、そんなものが、一人もゐない。金持の娘さん達だけに、成程札ピラでは靡くまい。而し年頃ではあるし、始終外間と接觸してゐるからには、全然白無垢ではあるまいとの想像は、事實を裏切つて、事實白無垢だから不思議だ。楊某は、その裏面には、何か秘密があるに相違ないと考へたので、警察の叶はぬ意趣ばらしに、人を使つてその行動を探らして見ると、驚くべし、彼女等の裏面には、想像以上の秘事が隠されてゐることが發見せられた。それは、或る一美少年を共同にて養ひ、而して順番に、戀愛行の對手とし、異性に對する憧れを消してゐたといふ。この報告を得た楊某は、胡某が靡かぬ譯も、彼女等が品行方正なる所以も、一時に氷解したので、その弱點につけ込み、若し應ぜない時は、これを世間に素つ破ぬくと言つて、最後の通牒を發した。今度は、彼女等が慄へ上つて驚ろいた。絶對大丈夫と思つてゐたことが、人もあらうに、楊某に知られたとあつては、世間へ顔向けがならぬと言つて、第何夫人なんかに行つた日には、家の體面に關する、こりやどうしたらよからうと、流石のモダーン先生も、進退茲に谷まつて、茶つ葉の如く萎れてしまつた。が、そこは又現代以上の空氣を呼吸してゐる彼女等のことゝて、相談の結果、向ふの探偵を、色氣交りで買收し、楊某に、世間へ發表の出來ないやうな秘密はないかと段々探らせてみると、悪いことは出來ないものだ、そのヒ、おやぢは、嘗てその内に雇はれてきた一處女を犯し、それがばれて、金力で内濟にしたといふ事件の一伍始終を知り得た。彼女等はこれを手に入れると、小躍りして喜び、早速楊某に向つて、若し自分達の秘密を發表するなら、自分達も、處女凌辱事件を公表すると言つて應じたので、楊某グウの音も出ず、この問題は一段落をつけたと言ふか、こんなに世間に分つてしまへば、楊某は、一そのこと、も少し強硬に談判をやればよかつたと、後悔して

ゐるかも知れない。が、何方にしても、この事件などは、モダーン先生の、一部の內的生活を示す生きた一實證であらう。

六

流行を追ふ者の中には、一定の見識もなければ、相當の教養もなく、只表面的の扮飾に浮身を窶して、腐爛した輕薄浮華の徒が多い。モダーン・ガールも畢竟、自ら以て新流行の先驅者となすものであつて、本統のモダーン・ガールの理性、情操、教養を持てるものは、お河童髮や、露肉短袴の態と新奇を衒ふやうな服裝をして、自ら得意とするを厭ふであらう。所謂モダーン・ガールが、輕薄浮華な人間生活を送り、而して常に花やかな享樂的氣分に浸らんとして、勢ひ貞操觀念を失ふに至るのは、理の當然であつて、極端に言へば、彼女等は、字を知れる不良少女である。

支那の如き混亂狀態に在る國に於けるモダーン・ガールは、突飛奇矯な言行を敢てする點に於て、益々正鵠なる國民の心を紊すものだ。支那のモダーン・ガールは、國民の病だ。病の形を見て、その人の姿と思ふと大いに違ふ。只その病がどうして出來たか、そして又、その病が必要であるか否かを究めれば、それでよい。病も身のうちだ。強ひて切り取るわけにも行くまい。

オリンピックに選ばれし人々

辰野保

○第九回世界オリムピック大會も二ヶ月の後に迫つて日本からも多數の選手が之に參加することになつた。

陸上、水上、漕艇、拳鬪、角力の五種目、それに既に出場して歸朝した雪橇の一團を加へると選手總數約四十名位になる。之れ程のスポーツ關係の大團體が萬里遠征の旅に上るといふことは實に我が運動界空前の盛事であつて、一九一二年に初めて、辛うじて二名の選手を送り得た當時を回想すると、轉、今昔の感に堪へないものがある。

○ストックホルムの大會（一九一二年）に參加したのは三島、金栗の兩名であつた。當時三島彌彦は健脚海内無双と稱せられ世人の期待亦彼に依つところ最大なるものがあつたが、愈々大會に臨むや案外の不成績で豫選をすらパスし得ずして唯、日本最初の參加者といふ名を留むるに過ぎなかつた。金栗四三に至つてはもとより全然未知數で唯日本の最後の豫選會に於て拔群の成績を擧げたといふのとマラソンといふが如き超人間的レースに於ては、我が國人特有の頑張と言つた樣なものが特殊な效果を顯はすであらうといふ一種の見込から、此競走に出場せしめた譯であつた。しかし之れ亦全コースを走りきらず、途中で落伍するといふ情ない結果になつて了つた。

○所謂、他流試合といふものの皮切が濟むと日本の運動界は初めて目がさめた。野球水泳等で今日迄相當外國人相手に戰つた歴史はあるが、彼等は悉く其の本國に於ては名もなき手合であつた。本氣になつて是等と鎬をけずつてゐた事それ自體が既に馬鹿々々しい話だ。

斯う言つた氣持が漸々強くなつて來ると共に、纏つた國際競技に對する慾念はいきほひ熾烈とならざるを得ない。日、支、比、三國間の極東競技大會といふものは實に斯くの如くして生れ來たのであつた。

極東大會に日本が加はつてみると比律賓はアメリカ本國の影響を受けて流石に一日の長がある。學ぶ可き點が多々ある。

よし手近かなとこに恰好な手本があるぞ。といふので其の後は極東大會に向つて全力を注ぎました。其の結果は回を重ねるに從つて之に肉迫し、竟に一九一七年の五月には日本が優勝するといふまでになつた。しかも此の大會が芝浦で開催され、滿都のファンは目の當日本選手の活躍振を見せつけられたの

で、夫れまで野球萬能で來た日本の運動界もアスレテイツクスといふ方面に多大の興味を持ち初めて、水陸兩競技に對する同情が油然と湧き起つたのである。

○

此の趨勢を巧に御して一九二〇年の白耳義安土府の大會には十五名の選手が遙々海を越えて押し出すことにきまつた。恰もよし歐洲大戰の爲に國際大會はなか一回を休むで八年目久々の開催とある。しかも開かれる所は戰勝の美酒に醉ひ狂ふ白耳義。駒場の最終豫選會の壯觀。選手鹿島立の横濱埠頭の賑はひ等此のところ烏渡狐につまゝれたかたちがあつた。

今から考へると當時、日本の選手が安土府で勝てるといふものは何一つなかつた。陸上はトラック・フイールドとも問題にならず、それに水泳亦未だクロールの輸入なく僅に望を囑するに足りたのは既に場所馴のしてゐる金栗のマラソンと歐米三界に定評のあつた熊谷の庭球の二つのみ。しかも其のマラソン王金栗僅に十四等に入り、熊谷亦實力餘りありしにも不拘、惜しくも南阿レーモンドに勝を讓つて陣營の秋、風蕭々全軍聲を呑んで寂しく歸途に就いたのであつた。

○

しかし這回の遠征は實に獲る所が多かつた。一言して之をいへば『世界レコードの僞大さの體驗』とでも評してよからう。今日まで日本人が輕々敷口にしてゐた世界記錄を破つたなどといふ放言、聲明が俄に氣愧かしくなつて來た。到底も今迄の樣な氣持ちや物にならない。褌をしつかと締め直せ、そしてもつともつと頭を使へ、まだ〳〵努力が足りないぞ！　皆んなは斯う教へられ勵げまされた。日本運動界の新しき道は茲にひらけたのである。

練習方法が變つて來た、選手養成方法も改まつた。と同時に、極東大會なんか何だ！　唯、一路世界オリムピックへ、次の巴里の大會へ！　斯う言つた氣分が漲つて來た。水上では從來の泳法が改まつてクロールの天下が來た。神傳流、水府流の河童共が俄に宗旨を換へだした。プールが目論まれる、運動講演會などといふものが滿員の札を揭げる樣になる。女子競技會が生れる。天下の大勢、面目を一新して四年間みつちり腕を磨いた末に、愈々一九二四年第八回の世界大會には我代表選手二十名を送るといふ所まで進んで來た。

○

巴里の大會では陸上の織田、水上の高石の名が初めて國際競技寳帳に登錄せられることになつた。殊に高石は五〇米から一五〇〇米までオールアラウンドの選手として米のワイズミユラー、濠のチヤレトン、瑞典のアルネボルグ等と並んで世界的盛名をうたはれて凱旋した。一九二〇年の大會まで日本の河童連が鬼神の如く怖れてゐた米のデユークカハナモク、同じくノルマン・ロスの二人を蹴落して、一躍世界水泳界五人男の列に入つたといふことは何にしても大した手柄であつたと言はなければならない。

倘ほ又此の大會では今日迄我邦に於て全然

顧みられなかつたレスリング競技に在米の岡本克俊選手が馳せ參じて、二等賞を克ち得たといふ事も大なる收穫の一つであつた。

○

巴里遠征軍の成績を見て日本の運動界は初めて或自信を持ち得た。それは今日迄到底も及びもつかぬと觀念してゐた入賞の望が決して不可及の遠い距離にないといふ一事であつた。往年テニスの熊谷、淸水の名が世界的に高くなつたら、海外に在る日本人が悉くラケツトを持ちだしたといふ話がある樣に、一高石の出現は著しく夏の海岸を刺戟した。一織田の活躍は地方の純朴なる靑年達に强い衝動を與へた。大正十三年に創始せられたる明治神宮競技に地方靑年團が勇躍して參加し、逐年其のレコードを擧げて、今日では單に靑年團競技として特殊な取扱を爲し得ざるまでに發達したのも、畢竟前述の消息を物語つてゐるものと思ふ。

○

今年は愈々第四回目の遠征である。一九二〇年安土府の大會直後に倫敦に遊つた自分は、其處に滯留中ある有力なる運動雜誌に次の樣な記事が載つてゐるのを見た。

今回の大會は八年目といふハンディカツプもあつたらうが今迄にない盛況を呈した。參加した國の數は實に二十有八ケ國、當初は冗談かと思つてゐたが東洋から日本が馳せ參じた事は、本大會の前途愈々有望有意義なるを思はしむるを云ふ。

全く初めは冗談かと思はれた程に我々の力は問題にならなかつたことは確に述べた。が其後回を逐ふて彼我の實力が接近して行く事實は最早一點疑ふ餘地がない。然らば現在の日本選手の世界的地位は果して奈邊に位するであらうか？割合に考慮し易い陸上、水上の兩競技を主材として寸評を試みてやらう。

○

總括的に評して現在の日本選手の實力は水、陸を通じて確實に第一豫選通過圈内に入つたと見るのが最も妥當であると信ずる。成程中には入賞確實と見られる者もある、或は又ファイナルに殘りさうだと思はれるのもある。しかしおしなべて之を觀察する時に自分は如何に贔屓目に考へても前陳の結論以上に出る事は出來ない。

そんなら今回我選手の出場する各種目を通じて、何人が最も有望であるかと問はれゝば、自分は些の躊躇もなく夫は女子競技に參加する人見絹枝であると即答するものである。

此の人は一昨年單身ゴールデンブルグの世界女子オリムピツクに出場して走巾跳の一等（五米五〇世界新記錄）立巾跳の一等（二米四〇）、圓盤投の二等、百碼競走の三等といふ見事な成績を殘して個人賞牌まで貰つて來てゐる。しかも歸朝後愈々自重して合理的な練習を勵むでゐる結果は、其後の進況目覺ましく最近走巾跳に五米九八の新世界記錄を作り、又百米競走に十二秒二の之も新世界記錄を作つた。今回の大會には不幸にして走巾跳は種目になくなつてゐるので、あたら其の技を發揮する機會を得ないのは殘念に堪

えないが、百米レースに就ては必ず優勝するであらうし、圓盤投に於ても此頃の調子なら恐らくは二等以下には下るまいと思はれる。更にあの體力を善用したら八百米にも出られやうし、バネ次第では立高跳に出場しても乾度相當な所までは行くに相違ない。何は兎もあれ日本の運動界が生んだ最大なる天才兒として否、寧、國寶として取扱はるべき選手である。

○

一體トラック、イヴエンツに於てタイムのみを得て其の強味を云爲するといふ事は根本的に間違つてゐる。此處に百米を十秒八で走る選手が二人ある場合を考へるに、同じ十秒八の中にも強い人と弱い人とのある事を見逃がしてはならない。一體國際大會にでも乘り出さうといふ選手なら百を十一秒切つたなんていふのはざらである。參加國二十餘國として一國に斯る選手一人と數へても、二十何人の十秒八級の選手はゐる譯である。然るに百米の世界レコードといふものは一九一二年以來何としても十秒六を切る事が出來ない。して見れば十秒八と十秒六との間即ち五分の一秒時の間に全ての選手は包含されて了ふといふ結論になる。之が自分の言ふ強い十秒八、弱い十秒八の議論の生れる處なのだ。是等の同じ位なレコードを持つた者の中で、其間に自然に優劣を生じて第一、第二と豫選の篩にかけられて、最後に僅に六人殘るといふ事になる。斯く考へてみれば唯、單にレコードのみによつて海山何千里隔てゝゐる東西の選手を比較するといふ樣な事は、殊に短距離競爭に於てはむしろ亂暴に近いと言つても過言ではあるまい。然らば君は何で其の強みを見るか？　自分は明瞭に答へる。相手次第でいくらでも速くなり得る素質を持つた選手であるか否かによつて判定すると。之は自分の昔からの持論であり、又確信する所である。然るにフイールドイヴエンツの方は之に反して餘程レコードに頼り得る樣な氣がする。無論此の方とても舞台度胸とか、頑張りとかいふものゝ有無が重要なる勝敗の分岐點にはなるが、短距離競走程にレコードを輕視する譯にはならない。假令一度は偶然六十米以上も投げたなどといふと之れは檜舞台に出してもいゝなと思ふ。此の意味に於て自分は織田幹雄のホ・ス・ジヤムプに囑望してゐる一人である。前の大會に於て濠のウインターの作つた一五米五二四といふオリムピツク最高記錄に對し、最近同選手の一五米四一〇は可成り立派なものである。若し大會の當日其のコンデイシヨンがよかつたなら或は三四等といふ所まで漕ぎつけ得られやしないだらうか。夫につけても早大對劍牛兩大學の對抗競技が、其の開催の日時に於て、オリンピツク大會の前である事を自分は少なからず憂慮してゐるものである。其の企に於て其の人選に於て實に申分のない理想的な競技會とは思ふけれ共、何せ大試合が二つ重なるといふ事の心身の痛苦を思ふとむしろ此際二兎何れか其の一つを選ぶの賢なるをすゝむる一人である。尚ほ同選手の走幅跳も既に七米三七七に達して入賞圏内に入りかけてゐる。

何は兎もあれ人見、高石、織田の三羽鳥は世界の注目をひくに相違ない。

織田の次に自分は槍の住吉耕作、棒高跳の中澤米太郎の兩人を數へ度い。住吉の六一米〇八、中澤の三米九一は何れも一九二四年芬のミイラの六二米九六(但其前一九二〇年には六五米七八を投げてゐる)及び一九二四年の米のバーネス、同グラハム兩人の作つた三米九五(尤も一九二〇年には米のホスが四米〇九を跳んでゐる)に對比して何れも堂々たる大記錄であつて、割合に高日に投げる住吉の槍はウイツ・ザ・ウインド(追風)のコンデイションなら、或は意外な番狂はせを見せるかも分らないし、又精力絶倫をうたはるゝ中澤は僅に三米九五を跳ぶ實力ありと稱せらるゝ今日、事によると織田、住吉、中澤と並んで大番附に其名を記されるに至るかも分らない。次は相澤巖夫の二百米である。同選手の最近出した二一秒六といふタイムは一九〇四年の大會で米のハーンが作り、一九二四年の巴里で米のショルツの作つた最高記錄と對等レコードである。大であるから、若し自分が前に述べたレコード輕視の觀念をトラツクイヴエンツ、殊に短距離に對して持つてゐないとしたなら、恐らく第一位に此の人を推したであらうが、自分には乍遺憾未だ其處迄の決心がつきかねてゐる。唯、同選手は今日迄日本のスプリンターが難攻不落としてゐた短距離の第一次豫選を樂にパスして、あはよくばセコンド、トライアルまで伸して行き相であるといふ事丈けは、玆に斷言する事が出來る。殊に近來の走法愈々洗練せられ二百米の後半の百米が一際強味を增して來た點は、現在我國が有する最強のスプリンターたる名に愧ぢない。尙ほ同君の保有する百米一〇秒七の日本レコード亦此際忘る可らざるものの一つで、百、二百共に此の好個のスプリンターを送り得る事は我々の大なる誇であると云はなければならない。次に自分は十種競技の齊康雄、走幅跳、ホ、ス、チヤムプの南部忠平の兩名を舉げる。齊は元來五種競技の雄で、最近十種にかはつた人であるが、其の精力の強い事、戰鬪精神の旺盛なる事は彼のグッドコーチに匹敵せる中京に在つて、よくもあすこ迄伸したと思はれる程である。殊に同君に期待し得るのは今が一番油の乘りきつた元氣一杯の所であるといふ一事である。同選手の最高レコードは六、九四九點一八二五といふのであるが、其の實力は優に七〇〇〇點を超ゆると認められてゐる。一九二四年の大會に米の怪物オスボンの作つた七、七一〇點七七五といふ世界記錄に及ばざる事、未だ遠いが、一九二〇年に諾のラブランドの作つた六、七二四點四九五を遙に凌駕してゐる。

南部忠平は織田のワキとして早大競技部の重鎭たる事は周知の事實だが、近來其の跳躍技に於ける進歩は驚嘆すべきものがあつて、既に師匠格たる織田の塁を摩せんとしてゐる形勢は大いに人意を強うするに足る次第である。殊に最初純然たるスプリントから入つた丈けに、腰のバネの工合に特殊な面白味と強味のある點を見逃す事は出來ない。今回の

大會にも飛將軍として或は番狂はせを演ずる一人になりはしないだらうか。

三木義雄（ハードル）木村一雄（走高飛）
永谷壽一（五千、一萬）沖田芳夫（ハムマー、圓盤）
津田晴一郎（マラソン）山田兼松（マラソン）
古山一郎（圓盤投）

の七選手に就ては各々其の擔當する種目に於て日本最強の選手たるに異論はないが、何樣、其の選擇した種目には外國に名だたる豪傑が揃つてゐてレコードに於ても、未だ相當の距離のあるのは殘念至極である。唯三木のハードル、津田のマラソンといふ樣なもの、又刻苦勉勵今日をなした永谷の長距離、沖田の圓盤などが世界の強豪に伍してどの程度まで喰ひ込んで行くか、更に又四國坂出町出身の純朴な一青年山田マラソンが、如何なる超人的活躍をなすか、是等は大會の幕が切つて落された後に又ゆつくり評話を書く機會があらうと思ふ。

○

水泳に就ては未だ最後の豫選會も濟まぬしそれに陸上程選手の個性や技倆を知らないので思ひきつて筆をとる勇氣がない。唯、當然選ばるゝであらう所の高石が既に峠を過ぎたか？ 今が頂上か？ それともまだまだ上りであるか？ といふ事が重大なる問題であると思ふ。何と言つても彼が日本水泳ティームの大黑柱である以上、超弩級である以上、其の盛衰は直に全軍の士氣に大影響がある。自分をして忌憚なく言はしむれば去年の高石は少くも大きなスラムプに陷つてゐた。今年は果してどうであらう？

斯かる際に水泳の幹部役員は英吉利の連中がよく試みる「オフ イシアル レコードの秘密」といふ一手をやつてみるのも一策であらうかと考へる。高石をして元氣を恢復せしむる手段として自分は獨りそんな事も考へてみた。往年ストックホルムの大會に華とうたはれた米のテデイー・メレデイスを一九二〇年安土府大會前に何とかして返り咲かさうとしてあらゆる努力を惜しまなかつたアメリカのコーチ團の心盡しを目のあたり見て來た自分は、何とかして今度もう一度高石に花を咲かさせ度く思つてゐる一人である。此の六月二日、三日の水泳の豫選會に百米丈けしか高石の申込がしてないのを見て何となく氣懸りになつてゐる。

之亦當然行くであらう所のブレストの鶴田は稀に見る名選手である。ブレストの本場は元來獨逸で、最近にも可なり物凄いレコードを出したのがゐる樣だが、此の選手の體格、氣魄は恐らく彼等に對して些の遜色もあるまいと思ふ。或はアムステルダムのプールで意想外の好成績を見せるのぢやないだらうか？

其他最近に茨木中學に山下といふバックの恐ろしく強い少年が表はれたと言ふしするから、水上は今年も相當な點を稼いで來る事であらう。若輩連が此の次こそと手具脛ひいて待ち構へてゐた其の八百米リレーティームの陣容等、締切の關係上此處に記載し得ざるは甚だ遺憾な次第である。

○

此の外漕艇、拳闘、レスリングがあるが、割合に自分に近い陸上競技の事以外はほんとうの盲評になる處があるから之を差控へる事にした。たゞ最後に陸上競技に就て今回の大會の豫想評をしてみると、從來トラツクに於て短距離はアメリカ、中距離はイギリス、長距離はフインランドといふ樣に、大體其の得意が極まつてゐたのが、一九二四年から芬蘭土が次第に中距離にまで喰ひ込まうとする形勢を示し、夫に押されて英吉利が短距離に顏を出し始め、亞米利加は僅に二百とリレーに氣を吐くといふ樣な有樣となつて來たのであるが、今度は新興獨逸共和國が多年の殼を脫いで短距離、中距離に恐る可き力をもつて割り込んで來る模樣で、從來の英の中距離、米の短距離といふ持場は、騷然強敵を受けて愈々苦戰に陷つて了つた樣である。如何にして此の難關を切り抜けて行くかといふ事は、實にファンにとつて限りなき興趣の動く所である。更に又フィールド競技に於けるアメリカ對スカンヂナヴィア對抗、フインランドの爭覇等、暇さへあれば鳥渡行つて覗いて來たい樣な氣がするもの決して自分許りでもあるまい。

○

筆を擱くに當つて特に一言して置き度い事がある。夫はアマチユアリズムの意義。スポーツの生命に就いてゞある。

スポーツの生命といふものは唯、正々堂々たる奮鬪夫れ自體である。自己の全力を傾倒して闘ふ眞劍なる氣持それ自身である。其の力量は未だ充分ならずして、國際的には第三流に位する選手を今、我々は送らうとしてゐるのであるが、しかし我々は選手が幸にして此のスポーツマンスピリットを體得して、アムステルダムに奮戰健闘してくれたのであつたら、たとへ一箇の賞牌を手にして歸らなくも夫で何の恨に思ふ所があらう。我國の運動界には兎角に勝敗の末に拘泥する好ましからぬ風がある。我々はお互に純眞なるスポーツマンであり、送る者も送らるゝ者もともにフエアプレイ、クリーンスポーツの眞意義を理解してゐるべき筈である。其の意味に於て關係當局者に對し「今度こそ勝てるだらうな」などといふ樣な無理な駄目を押す事なく、彼等櫻咲く國に男と生れ、國際選士として送らるゝ光榮に感奮せる若い人達をして、心安くかたくならずに發たせてやつて頂き度い。關係者の一人として切に希望する所である。

漕艇の選手は一昨夜東京を發つた。其他は此の二十日に一團となつて出發する豫定である。

讀者諸君と共に心から其の前途を祝福し度いと思ふ。

(六月一日)

久原と勝田

——大臣となつて痛し痒し——

伊藤金次郎

田中内閣の人事行政の亂調子は、その組閣の當初から、心あるものゝ呆れ果てたところであつた。

たとへば、陸軍省以來の弟分である山梨半造君を、兎角の批評があるにも拘はらず、朝鮮總督とした。それから大阪の在郷軍人團を作り上げた當時、老いの骨身を惜しまず、田中のために、腰のあづさの弓を引き伸ばして、奔走にこれつとめた古稀翁池上四郎君を朝鮮政務總監に引つ張り出した。

更に、すつぽん料理では、その板前を誇つてゐても、植民地行政について、特別の技能及び識見ありとは、未だ聞いてゐない木下謙次郎君を、關東長官に祭り上げて、土用干しをした。その他等々。

◇

もつとも、これくらゐのところは、首相が私恩を賣るものとして世間、第三者こそ、苦々しく思ひはしたものゝ、政友會内では、それほど露骨に、田中の「おらが」ぶりに反感を持つまでには到らなかつたのだ。いや、見やうによつては、案外、情誼の厚い男だネと、情誼が厚くて、阿部浩や、古賀廉造や、岡喜七郎等を、しきりと重用したところの、先代黨首原敬の在りし日の俤を思ひ浮べて、田中のやり方を、末たのもしいくらゐ、感激したテアイもあつたものだ。

ところが、こんどの改造問題で、久原房之助君を持ちこんだことは未だしも、勝田主計君まで「おらが」傘下にをさめたことについては、與黨の面々、あつとばかりに呆れた。びつくりした。さうして腰を拔かしてしまつた。

政友會の總裁なのか、それとも、政友會を踏み臺にして、田中義一一門故舊への私恩の分配なのか。「肥料の分配」演説で味噌をつけた時、内心、まづい答辯ぢやなと思ひつゝも、一生懸命、反對黨の猛襲をしりぞけた與黨の面々も、「私恩の分配」には、手がつけられないとベソをかいた。全く、おれの生んだ卵だと信じて、孵化してみたら、水を戀しがるあひる子供だつたので、悄氣に悄氣かへつたところの、阿呆なめんどりといふのが、政友會の體たらくであらうか。嘲笑するにしては、あまりに、いたましい。

◇

さて、新大臣久原房之助君と、勝田主計君のことだが、久原君については、くだ〳〵しくいふまでもなく、前垂れ掛けの町人でもあり、震災手形問題なぞも絡んで、世間でも、黨の内外でも、不評判である。しかも、おらが大將の田中が、それを押し切つて、閣僚にした理由を聞くと、長州萩の幼な馴染みだとか、公私共に、財的お世話を受けたとかといふ單純な問題ではなく、實は、田中が、政友會總裁をかち得た一半のお禮心を、久原に致したものに外ならないのだと、政界秘話子は睨んでゐる。

といふのは、死んだ三浦觀樹將軍に、田中を取り持つたのは、久原君であり、その橋渡しによつて、一介の武辨、田中義一が、政友

會總裁たるに到つた有力な素地を築き得たのであつた。

三浦は、生前、頑固おやぢとして、兎角の批評はあつたけれど、あれで、なか〳〵持するところのものは、ピンと持つてゐた。したがつて、田中みたいなおッちよこ〳〵タイプを嫉忌したものだつた。同郷の後輩でもあれば、陸軍々閥關係から見ても、倅か、孫分にあたり、少しは、可愛がつてやつてもいゝわけであつたが、どうもそのタイプを、いやがつてゐたものだつた。

それを、商人仕込みで、口説き上手な久原君が、いろ〳〵と居中を調停斡旋して、ツヒに三浦の老人の一徹を緩和したものだつた。もつとも、三浦にしたところで、も少し、生きてをるであらうと思はれた弟分の寺内正毅が、早くも逝いてしまつたので、長州軍閥の大黒柱を亡失した寂寥もあり、かたがた物足りないけれど、田中義一を、一ッ男にしてやれといふことになつたものだらう。

◇

したがつて、田中としては、今日、おらが内閣を組織し、土臺石の政友會諸君なぞは申すまでもなく、世間誰れ彼らず「私恩の分配」が出來るやうになつてみれば、おのれをこゝまで「便宜」な地位に押し上げてくれた久原は勿論のこと、今一ッは、草葉の蔭の三浦觀樹へのお禮心やら菩提心やらで、久原を入閣せしめたくもならうではないか。そこで田中得意の私恩の分配も、地下の三浦子へ對しては、謝恩の分配といふ奴だ。

思へば、物覺えのえゝ男だ。阿呆の一ッ覺えとでもいふのかは知らぬが、兎にも角にも一ッには、三浦子への感謝の意味、二ッには久原への私恩の分配なのだから、アノ單純なアタマの田中からいへば、まことに、幡隨院長兵衛みたいに、義理もわきまへ、人情も解し、加ふるに、相當、おらが、一ッ、胸をポンと叩けば、仁俠も出てくるんだといふ見解であらうから、それを兎や角と黨内や、世間が批難するのを、奇怪なことゝ、腑に落ちない節々が、定めし多いことであらう。

講談本を好む田中君としては、けだし、常道を走つてをるわけ。

◇

さて、勝田主計君は、寺内内閣の中途で、大藏次官から藏相に榮進し、一年十ケ月そこ〳〵で野に下り、更に、清浦特權内閣の下に藏相をやつた人物で、大藏畑とは目せられてをるけれど、文部大臣とは、一寸、その肌合ひがをかしい。もつとも、同君を庇護するものゝ詭辯によると、なんとか庵と稱して、俳句をよくするので、文相の椅子、必ずしも、不向きでないんださうな。

俳句をやると、文相の資格ありとは、與太も、こゝまで行けば喧嘩にもならない。もしソンナ論據が成立するなら、俳聖芭蕉や、一茶が現存してゐたら、差しづめ、勝田君は、入閣の機會をつかみ得なかつたであらう。笑はせるのも程があるではないか。

◇

ところで、勝田君は、寺内内閣で藏相となつた時、四十を出て間もないほど、年齒弱少天ッ晴れの英才ぢやとほメられたものだが、議會の演說中、官僚の權化ともいふべき素質を持ちながら、「立憲政治の妙諦は、かくの如くでござる」とばかり、憲政會の反對彈劾に應酬し、生意氣をいふなと、叱られたりしたもんだつた。

次ぎの清浦内閣では、多少、圓熟してゐたので、右のやうなタワケた言說を吐いて、徒らなる反感を挑發しなかつたが、しかし、内閣の土臺骨は、アノ通り、みぢめにも、短命で終りを告げてしまつた。

政界の一部に、勝田が入閣すると、その内

閣の壽命は、大抵、短かいよといふ流說が行はれてをる。おらが內閣、田中君にとつては緣喜のわるい辻うらだ。

◇

大臣も三度となれば、見やう見まねに、相當、貫祿のつくものだが、勝田君には、それがない。この點、水野錬太郎君あたりと似通ふてをる。畢竟、萬年事務官タイプの然らしめるところで、到底、國務大臣の風格はない。その癖、西原龜三なぞといふ肌合の人物と符合して、一ト芝居打たうなぞとするから、しつぽを出すのだ。要するに、人望の足りないといふ點に歸一する。

しかし、おらが大將の田中から見れば、人望の足りない人物であらうが、西原借款で汚點のついた人間であらうと、兄貴分の寺內以來の遺產である勝田のことだ。一ツ、私恩と情弊の分配を施してやれといふことになつたものであらう。

◇

サル政界の祕話子曰く——勝田の起用を兎や角と論議するのは間違つてをる。背後に西原のをることに想到せば、萬事、釋然たりだ。即ち、田中、勝田、西原とね。——と。

以上の秘話、果して、その眞を穿つてをるか、どうか。けだし、私恩と情實で縮まつた一門一家のかれらのことだ。當らずといへども遠からずであらう。

◇

だが、久原にせよ、勝田にせよ、大臣となつた本人諸君の、いつはらぬ心根を、忖度することを忘れたが、これを一言にしていへば、私立大學の擬國會見たいな、おらが內閣に、閣僚たり得たところで、それは恐らく「痛し痒し」といつたわけであらう。

◇

ところで、最後に止めを刺しておくが、元來、政友會の肚ン中は、久原の拔擢については、さまで、心外に思つてゐないといふ。即ち、「モネー」が、萬事、ものをいふことを、先刻承知之助の政友會の有象無象は、久原、今日までの田中君及びその一味への奉仕ぶりを見て、今、內閣大臣となる。まことに、止むを得ずと、あきらめてゐるとのことだ。

しかし、勝田のそれに對しては、黨內の獵官者流はいふまでもなく、大小陣笠共、これを快しとしてゐない。なぜなら、黨の功勞者でもなく、さりとて、モネーにものをいはした先例もなく、中途から、飛び出して來て、油揚をさらツて行つた、トビみたいなかれに——たとへ、偶然の棚牡丹であるとはいへ、かれ等が、これに好感を寄すべき筈がない。

もつとも、これとて、例の田中が、大命降下の際のうれしさのあまり、有頂天となつて糸の切れた奴凧みたいに飛び廻り、おゝ、どうぢや、お前を大臣にしてやらうかのう、と、手形を盛んに濫發した結果、かくせざるを得なくなつたにもよらうけれど、子飼ひの政友會員から見れば、堪へられぬ蹂躪沙汰だ。

三多摩無宿の胎中楠右衞門が、一眼を剝いて、田中總裁に詰め寄せたのも無理ではない。

◇

そも〳〵田中といふ人は、さきに肥田なにがし兄弟から、山梨を朝鮮總督に持ち込まなければ、この邸宅で腹を切るとをどかされ、その決心を固めたとの取沙汰のあるほど、弱い男だ。楠右衞門の一喝、よく義一をして、その人事行政に正鵠を得せしむるを得ば、政友會のために幸福である。

もとより、僕等、第三者とは別問題だ。——

——

緑地・水郷

上高地と白骨溫泉

荻原井泉水

幸なことに島々から岩魚留まで、私達はトロを出させる事が出來た。――私達といつても初めからの連ではなく、私は獨として山にかかるつもりだつたが、此島々に來て、同じく上高地方面に行くといふ人達がしぜんに落合ひ、其中で槍岳に小屋を持つてゐるHといふ人が案内役になつて踏出した所に、丁度、荷を積んで上るといふトロが支度をしてゐたので、其にも一つ車を繼足さして、しかも特に早く出すやうに、H氏が懇意の上で賴んでくれたのだつた。其は普通に材木を積出すのに使ふものだといふが、茣蓙を二三枚敷いてくれた。私達七人は其上にあぐらをかいたり、又、脚をぶらさげたりした。これで三里の道は疲れずして行けるといふ安心の外に何となく、子供らしい氣持にさせられて、空がばかに明るいやうに感じた。

トロは駈が如くのだつた。蒲澤川の瀬に沿うて軌道がついてゐる。徒歩するものは其軌道の枕木をつたうてゆく。私達がトロの支度をさせてゐる間に、二人三人づつ幾組かゞ先發して行つたが、其等の人には岩魚留に着くまで遂に追付かなかつた。トロの進みは徒歩するより遲いとも早くはなかつたけれども、私達はしごくのんきな氣持で、四邊を抱きながら通りを眺めてゐた。溪が進むに連れて趣は深くなり、青葉の梢を洩れてチラチラと光る朝の日ざしが美しく、蟬がじん〱と鳴き出した。道に沿うてゐる溪はざう〱と響く程に急となり、其處に流込む小さい流は瀧をなして、時には大きな樹の根を洗ひながら走つてゐた。いろ〱の草が高く伸びて、トロとすれ〱になつては、其葉に置いてゐる朝の露をふりこぼした。ふき、やまぶき、かくばな、やぐるまさう――此邊でやぐるまさうといふのは紫[illegible]の花の咲く處ではなく、大きな葉が五枚、矢車のやうな形に出る、深山的の感

じの草なのだ、其中にをとこへし、つりがねさうなどは可憐な花をつけてゐた。二時間、三時間、さうした景色の連續に疲れて、荷物のやうに横になる者もあつた。馬ばかりが、ます〳〵汗をかいて來た。馬子は親切に、車を留めて馬に息を入れさせた。また、馬の腹にひつついてゐる虻を打つてやつたりした。「極樂水」「凉し澤」などと立札のしてある、好い飲み水のあるやうな場所では、殊に長く休んで行くのだつた。材木のやうに寢てゐた者が起きて小便をしたりした。

岩魚留に着いたのは、まだ十一時だつたが其處の茶屋で晝飯をすまして行く事にした。桂の大きな樹のある下の凉しい處に縁臺なども並べ添へてあつた。私は握り飯を宿から持つて來てゐたが、おかずに鯉の煮たのがあるといふので買つた。薄く切つてはあるが、金十五錢とは、こゝまでの運賃を思つても氣の毒なやうだつた。西洋人が四五人、罐詰を切つて何か粉の葛水のやうなものを作つて啜りながら、日本のむすびを食べてゐた。

其茶屋からすぐ德本峠にかゝる上りとなる。然し、道は思つたよりも宜しい。樹林がうつさうとしてゐるので、暑くはなく、「ゆつくりと、休まずに……」といふ山登りの格言通りに、靜かに歩を踏んでゆくとらくらくとして心が勇まれた。樹林は楓が多く、桂の木も少くなかつた。

「此峠の一番美しいのは新芽の頃です、五月の十日頃でせうか、それから紅葉の頃も好いです、楓が赤くなる外に、桂は黃色くなつて、それはきれいです。さう、紅葉は十月の五六日頃でせうね」

H氏はさう話した。その色彩を想像すると、一寸、帝展に出陳される屛風の繪のやうでもあるが、其を自然として見たらばたしかに好からうと思はれる。連れの人達の多くは皆ゲエトルをつけて、鋲靴を穿いてゐた。私は脚絆をつけて、草鞋をはいてゐた。

「白い脚絆といふものは感じの好いものですね」

とH氏に云はれた。私の其は、實は八十八ヶ所の遍路をした時のものたので、其故に白いのだつた。止むをえず、足袋も白いのをはいたが、其が好みなのではない。然し、斯うした土のしつとりとした道を歩むには、草鞋の踏み心地の方がふさはしかつた、一歩一歩、山の胸の中に探り入るといふ敬虔な感情か、しぜんに湧いてくるやうでもあつた。鋲靴を踏んでゆくのは、蹂躙つてゆくといふいかつい氣持になるであらう、山を征服するといふ誇らしい氣持になるであらうと、思はれるのだつた。H氏は又、雪のある頃に此峠を越える快さを語つた。道などに據らずに、澤傳ひに、まつすぐに降りられるので、どれ程近くて早いかしれないといふのだつた。

樹を見ると、楓や桂のやうな闊葉樹はいつか姿をひそめて、つが、もみ、からまつ、とうひといふやうな針葉樹ばかりになつてゐた。其だけ高く登つて來た譯で、海拔七千尺近い所にゐるのだつた。汗をかいてゐるとは意識せずして、自分のこめかみの邊からたらりと垂れる滴を氣味わるく感じた。「休まずに……」といふ事を守らうとして來た

もの丶、さすがに休まずには居られなかつた。休めば、胸にも背にも一ぱい汗ばんでゐるのが解つた。私は上着を脱ぎ、それからワイシヤツを脱ぎ、肌シヤツ一枚になつてピツケルを突きたてた。たつた上高地まで行くのに、アルプス縱走でもするやうなピツケルは稍ぎようさんすぎる觀はあるが、松本から島々まで見送つてきたKが「穗高頂上」といふ烙印の捺してある其を是非持つて行けと云つて、渡してくれたものなのである。

登るに從つて、展望の好くなる代りに霧がかゝつて來た。からまつの亭々とした幹や枝にまつはつて流れる霧、谷をうづめてもく／＼と溢れて這ひ上つて來る霧、今過ぎて來たばかりの道をも隱して迫つて來る霧、其もたしかに好風景ではあつた。然し其霧が霧雨となり、やがて大粒の雨となつて落ちて來た時に、私達はたゞひた急ぎに脚を早めるより外なかつた。「峠まで三百米突」「――二百米突」「――百米突」さういふ標木を力にして一氣に峠の茶屋へ驅け込んだ時、沛然とした大夕立になつた。此の德本峠の頂から前面に、穗高の全容と對する眺めが、非常に壯大であつて、アルプスの門に踏入るものをして、先づ感動を受けしむるといふ事は、屢々耳にしてゐたけれども、雨の爲に其感動に接しえない遺憾さよりも、此雨を辛うじて避けえたといふ僥倖さの方が、其時は第一に感じられた所だつた。「みつまめ」が出來るといふのが、こんな處にして珍らしく、私は茶屋のかまちに腰をかけて其を食べたりした。大雨にぐつしよりと濡れて登つて來る者が後から後から續いて、茶屋の中はぢきに、腰をかける餘地もない位になつた。

それから一里の下りは、雨の小歇みになるのを見て踏出した。下りるに連れて、ずんずと晴れて行つた。此道の谷間にはまだ雪が殘つてゐた。今、芽を出したばかりのやうな草もあつた。凡ての高山植物がさうであるやうに、芽を出すと共に忽ち花をつけ、忽ち實を結び、忽ち枯れて行くべきものなのである。道端にある草は、しだやくまざさのやうなものが多くなつた。雨に濡らされた其等の葉はすが／＼しい青さだつた。樹木は又、濶葉樹帶となつて、しらかば、みやまざくら、にれ、どろやなぎのやうなものが多く眼についた。みやまざくらといふ木の花を私は見た事はないが、此木のふりから見てもさぞ淋しい花であらう、而して里の櫻よりもずつと遲く咲いて、人にも眺められずに、散るものなのであらう。

山櫻さくと思へばちりぬるを
　　わが世は人も思はざりけり
　　　　　　　　　　　　一茶

一茶の斯の狂歌も思ひあはされて、之は決して一片の語呂の洒落ではない、そこに一茶の悲痛の氣持がにじみ出てゐるといふことも、此木の姿から考へさせられた。

峠を下りきつたといふ容易な氣分をもちながら、平らな、しつとりとした木蔭の道を行く快さは云ひようがなかつた。その道を右へ曲道にはいつて、明神の池といふのも見て行かうとした。梓川の流は其途中、はじめて逢つた。まつ白に晒された石を敷きつめた廣い磧の中

に、水とも思はれぬやうなねつとりとした青さを以つて流れてゐる、長い丸木を寄せてつないだ橋で渡つた。さて、その明神の池の美しさは、恐らく「美しい」といふ言葉を最も純粋な意味に於て用ひ得る他に餘り例のない所のものだらう。日本アルプスの稜々とした爽快な輪廓の中に、之ほどに纖々とした纖麗な結構なものがあらうとは全く思ひがけないものだつた。虚空に聳える巖々とした連峰は素より神の大きな創作に違ひないけれども、此の山の懐に秘められてある一つの池こそ、神が数寄を凝らして造つたもの、即ち神の藝術――神の詩に外ならないと思つた。池の水は深いと見れば限りない深いやうに、濃い色に湛へてをり、又浅いと見れば手をひたして遊べるやうに滑らかに澄んでゐる。縁まで迫つてゐる山の緑は何とみづ〴〵しい事か、それと同じだけの緑の山が水の中にもある。水の中から山が抜け出たやうでもあれば、又山が水の中へ没入してゐるやうでもあつた。水の中には、飛び〴〵に、好き程の位置に、小さな島が置かれてあり、その一つには落葉松、一つには白樺、一つには石楠花、一つにはなかまどといふ風に生へてゐる。島は大きな岩で出来てゐるのもある。之が金閣寺の庭ならば、何々石、何々巖などと名がありさうなものなのだ。さうだ、此池を見て感じられる事は、自然といふよりも寧ろ、相阿彌とか小堀遠州とかいふ人の造つた庭の趣だといふ事だつた。相阿彌や遠州が庭園を造る時には、或程度までは自然の寫生もあつたらうけれども、大部分は彼等の理想であらう、彼等自身が求めてゐた「美」といふものを、土と水と岩と木との自由なる配合をもつて創りあげたのだ。それを京都邊の古い寺に於ける名園として私は常に感嘆してゐる。しかも、其が其よりも完全に、ちやんと爰に神の手に依つて作られてゐるといふ事は何といふ驚異であらう――相阿彌や遠州は勿論此地へ脚を踏んだことはない――此事は彼等名匠が神の意匠に殆ど接近し得るほどに偉大なる天才だつたといふ事にも見られよう。然し又、あらゆる事に「人工」といふもの〻價値はない。「人工」はそれをどんなに巧みにしても、其巧みに「美」がある限りは、やはり「天工」の縮図に過ぎないといふ意味で、神の意匠の無限なる大いさに頭が下がるとも云ひ得よう。――私は汀に腰をおろして、飽くことなく眺めてゐた。水には黒い鯉のやうな魚が透けて泳いでゐる、如何にも原始的なる悠々乎とした感じである。大きなものは尺に餘つて見える、それはイワナだつた。此魚を釣るには自分の影を見せてはならないさうな、人間の影を非常に嫌ふといふ此魚こそ、何と太古的なる奴ではないか。

それから上高地まで半里ばかりの道は高くて涼しい落葉松をかざして、割合に廣く作られてあつた。斯うした道を馬上の人となつて、その静かな蹄の音をコツクリポツコリと聞きながら行きたいものだと思つた。梨の木が澤山にある、その木には小粒の梨が好く實るさうな、小梨平といふ處は、其名の如くずつと平らで、樹の枝はしぜんの天幕をなし、草や苔はしぜんのしとねをなしてゐた。そこに天幕を張つて

キャムプ生活をしてゐるものが點々と見渡された。美しい流がそちらからも、こちらからも流れてゐた。流には大きな水車が仕掛けてあつたりした。一つのキャムプからは學生らしい聲で寮歌を歌ふのがきこえた。一つのキャムプからは青年が出て、三脚に吊した鍋に火を焚きつけてゐた。そのテントの下の冷かさで、その水車の音を聞きながら晝寢をしたらばどうだらう、とも思つた。

宿屋があつて、其處は上高地だつた。五千尺旅館といふ。蓋し斯か五千尺の高さにあるから斯う名けたのであらう、殺風景な名のやうで却て面白くもある。今後どこぞの山に登つて、五千尺の高さと知る每に、私は上高地を思ひ出さずにはゐないだらう。宿の前には釣橋が架つてゐた。「かつぱばし」といふ。此橋の上に立つての眺めはすばらしい。正面に燒岳が大きく赭く燒けて禿げた山肌をぐつと露出して、西かと思ふ空の明るい雲にそびえてゐる。後ろをふりかへると、穗高が——奧穗高、西穗高、前穗高と緊接して、仰いでも仰ぎきれないやうに、そこに聳立してゐた。その思掛けない程に近々と身に迫られた大いさには、ぎよツとせざるをえなかつた。奧穗高は其一邊の盟主らしい威容をもつて、頂きを帛のやうな霧に包ませてゐた。西穗高はその削りとつたやうな澤に美しい雪溪を見せてゐた。前穗高は神秘を包む世界の扉のやうに前に乘り出して、丁度、私達が今まで來た路を塞げてゐるやうだつた。之で見ても、上高地といふ所が、燒岳と穗高と其に聯る群小の山に圍まれて、全くの峽谷をなしてゐるといふ地勢がよく解つた。而して此峽谷を貫いてゐる梓川の流の清らかな事か、此地に美しい生命を與へてゐるものなのだ。先に、明神池の途中で逢つた梓川は、その汎大な河原をいつのまにか、すつかり振り捨てゝ、たゞふか〳〵とした靜かな流となつて、かつぱばしの下に現じてゐた。玲瓏といはうか、明徹といはうか、此水の姿を形容するのに似たものを求めても、其は此地上にはあるまいと思はざるを得なかつた。此水の姿をしばらく見つめてゐると、心がうつとりとして、自分を忘れて、其水と一緒にさう〳〵と走り出すかと思はれた。

「穗高登山口」といふ石の標の立つてゐる所には入らずして、私達は左りへ、川添ひの道を行つた。其邊にもキャムプはあり、又キャムプの人達の爲に物をひさぐ店もあつた。「まき一把三十錢」「貸毛布」「ぼたもち」「うどん、そば」「ゆであづき」などと大きな字を書いて、店先に貼つてあるのだつた。川を前にした所に、もう一軒の宿屋があつた。清水屋といふ。私達はそこに泊る事にした。——私達といつても島々を立つ時に連立つた六七人は途中でいつか別れ〳〵になつた。槍の小屋を持つてゐるH氏は德本峠の茶店に用件があるらしく其處に殘り、學生達の數名は、穗高縱走をするといふので、脚がしぜんに早く先へ行つて見えなくなり、私は帝國ホテルのマネージャーといふI氏と二人きりになつてゐた。二人は同じ室に入れられたが、其も幸な方なので、一人きりの客は三四人づつも合宿させられるらしく、前の月の人が出盛つた頃は、さして廣くもない此宿に一晩二百人も泊り、此室に

も五六人は押し入れられたといふ話だつた。

上高地に二軒だけある宿屋の中で、爰には温泉があり、又、電燈があるのが特色だといふのである。海拔五千尺の山中に來て、地上的な贅澤をいふ氣持は毫もないけれども、德本峠で流してきた汗をさつぱりと洗ふ爲に、温泉があることは嬉しかつた。それは、望むべからざる程のものを與へられたといふ、嬉しいよりも寧ろ感謝したい氣持だつた。浴槽は淺くて、温泉は少し濁つて、ぬるい位ではあるが、少し疲れた脚を長く投出して、頭を縁にもたせかけて、いつまでも浸つてゐるには、其等が皆都合好かつた。着いたのは五時だつたが、兎角してゐるうちに、温泉の上には電燈がついた。電燈といふものが普及された今日、山の宿に泊つて珍らしくラムプを見るのも面白いものだが、然し、電燈といふものも、斯様な山中で見ると、その大きな宿のやうな形、花藥のやうな發熱線などに一種の美しさが感じられた。電燈も斯うして見ればなか〳〵風流なものだ、と云ふべきである。

夕食を終へてから外へ出て見ると、梓川の清冽そのもの丶流が、音も立てずに、しかづに暮れて行く所だつた。穗高を見ると、霧はますます厚く、うつとりと眠に入らうとするもの丶姿だつた。此邊では鳥も鳴かない。(八月十七日)

×

穗高、槍、燒岳など、それ〳〵の峰に登らうとする人達は、暗いうちから出發するらしく、其物音に夢を破られたので私も起きた——然し其は快く勇立たされるやうな目覺だつた。温泉は、町中の夕方の錢湯のやうに混でゐた、昨日のコースなどに就て語りあつてゐる彼等の誰もが、山の勇者を以て自任してゐるやうな若者である事も愉快だつた。明けきつてみれば、天氣はすばらしく好かつた。

梓川の上に、白いもやが立つてゐる。それが霞のやうに流れて、前にある低い山の根にまつはつてゐる。草鞋は外に出してある草鞋掛に掛けてあつたので、露でじつとりと濕つてゐた。私は新しいものと履き代へて出掛けた。今日は白骨の温泉まで行つて泊らうといふので急ぐ事はないのであつたが——。

川に沿うて、燒岳へ登山する道とは離れて、薄なども生へてゐる草原を少し行つて、川が木の茂みの中に崩れかゝるところで、流を渡つて、暫くは白樺の林の中を行く。木の根には美しい苔が密生し、道に沿うて、こけがびつしりと生えてゐる。丁度、大きな庭園の中をあるいてゐるやうな感じであつた。川の南側にある低い山は霞山、六百山、川の北側にある低い山は前穗山、其間にあつて、かなり廣い此邊の平らを田代原といふ。こゝから正面に、燒岳が大きく仰がれた。頂に近い所から、ほの〴〵と白く細い雲のやうなものが立騰つてゐると見えるのは、その噴煙であつた。その微かな煙が其と解るといふ程でも、けさの空は實に澄んでゐた。ずつと高く、そよ風に作られたさゞなみのやうな雲が流れて、そこに二十日過ぎの殘月が消に打上

げられたくらげのやうに白く乾いてゐた。山はすつかり秋だな、と知ると、心もすが〴〵しくなるやうだつた。穂高も、けふこそくつきりと晴れた。嶺の上に巖を積上げて大自然の長城として作られたやうな、その巍々とした姿は、地上の壯嚴なるものを象徴してゐるといつても好かつた。

田代原にある田代池といふのも一見して行つた。明神池よりも小さくて、淺い感じであるが、明神池と同じやうな浮島がいくつもあつて、其には直線的な木が立つてゐた。此池の水からももやが立つてゐた。其は水の極めてつめたい爲に起る朝毎の現象らしいが、水ともやと、もやと木々と、而して又木々と水とが、一つの模糊としたものに融合つて、靜かに動いてゐる感じは、自然がまだ朝の眠から覺めきれずに快く淺い夢を見てゐるやうであつた。けれども、もやはだん〴〵に水から離れて行つた。その水の上には藻の花がかたまつて咲いてゐた。靜く降つて、薄く積んだ淡雪のやうに——。

それからの道には落葉松、栂などが多かつた。それが痛ましく燒かれて枯立つてゐた。大正何年かに燒岳が大噴火をした時に火を被つて枯れたのである。その凄絶を極めたであらう有樣は、關東の大震火を眼のあたりに見てゐる私にも想像がつかなかつた。又、今は靜寂そのものである此高原が一度はさうした焦熱の洗禮を受けたのであるかと思ふと、嚴肅な氣持にさそはれた。枯立つてゐる木の中に靑々と高く茂つてゐる木も亦、少くなかつた。それは一概に熱火に逢つたといふ中でも、偶然に焔を直接に受けなかつたものもあらうし、木の質が火に對して割合に強かつたものもあらうし、又、木の齡が壯んであつて抵抗力の多かつた爲もあつたのであらう、斯うした木の一つ一つにも、やはり其運命といふものがあると、そんな事も考へられるのだつた。

やがて、私は湖のほとりに出た。大きな鏡のやうに瞬き澄まされた水面——それは凡ての物の姿を寫すけれども、何一つに汚されないといふ魂のやうな大いさだつた。水面からは、枯れた木が幹を立てゝゐた。此湖は燒岳噴火の際に、熔岩が梓川の流を塞いだので、水が溢れて瀦つた其以來形づくられたものだといふ。水の中から枯木が立つてゐるのも其爲なのだ。だが、是等の枯木にもあたりの景色にも、「死」とか「苦しみ」とかいふ感じは少しもなかつた。知識的に考へて見てこそ、地獄的の災禍を思はせられるものゝ、その枯木の一つ一つ——或は落葉松、或は白樺——には、ただ靜かさと安らかさとが感じられた。死滅の相を越えて、涅槃の世界に入つたものゝ如き姿だつた。折から、燒岳の上半腹にかけて、朝日の光が鮮かにさして來た。燒岳はくつきりと其全容を湖の中にひたすのだつた。一方には、穂高も亦、ひえ〴〵とした其影を水の鏡にうつしてゐた。日はだん〴〵に高く、空が輝いてくるにつれて、水の面も赤い光を增して行く——「寂光！」。私は此言葉の最も好く具體化されたものを、今眼前に拜むやうな氣持がした。——囀が、あゝ囀が、玉を轉ずる如き

聲をして鳴く。

此湖は大正年間に出來たといふので、大正池といふ名がついてゐた。私は湖沿ひの道を落口の方にあるいた。對岸に新しいバラックが二棟建つて居る、カアン、カアンといふ鎚の音はそこから響いて來るらしい。其は島々から山を越えて架けてある索道の終點たる小屋だつた。水を堰いたり、浚つたりする爲に大勢の人夫が働いてゐた。大きなダイナモが唸りを發しながら廻轉してゐた。山の腹にトンネルが作られて、レエルが引込んである。土やセメントを積んだトロが頻繁に出入りしてゐた。私はこゝに來て、天上の世界から急に地上の世界におろされたやうな氣がした。こゝでは水力電氣用の水の取入れ口を作る爲に、人間の勞力が要求されてゐるのだつた。それから再び川となつて流れる梓川を深い谷間に見おろしながら行く道は、非常に好い道であつたが、それといふのも幾多の人間の勞働を集めて、近頃漸く改修された爲に外ならない。今も石を組んで土どめ工事をする者が道の上で働いてゐた。谷から石を負うて上つて來る者もあつた。川の中にはしぜんに手頃な石が澤山にあると見えるが、其を一つ一つ、背にくゝりつけて、嶮しい小路を這ひあがつてくる、斯うして彼等は一日に幾往復をして幾つの石を運び上げるのであらうか、「好い道だ」などと安易な氣持で通りすぎさして貰ふ爲には、どれだけの人々の汗と苦しみとが費されてゐるのであらうか。しかも其の勞苦は一日のパンを得る爲にさゝげられてゐるのではないか。此人間生活をこそ禮拜しなければならないのである。

「どうも御苦勞さま、御邪魔です」

私は心から斯う云つて通らざるを得なかつた。道端に置き捨てゝあるげんのうや槌などを跨いではすまぬやうな氣がした。渓流の音が耳についてくる程、道は川に近く下りて行くやうになつた。旅行者の影は私より外になかつた。

バアン、バ、バアン

さして遠くない所ではつぱの爆發する音がした、岩を碎いて道を作つてゐるのだ、此道が完成した時には德本峠を越えずして、迂曲ながら上高地に入る事が出來るやうになるといふ事だが、さうした時の上高地には、大正池に貸ボート屋が出來、明神池が釣り堀となり、田代原には「紙屑投入箱」などが置かれるやうになるのではあるまいか…………。

索道のロープに横ぎられてゐる下も過ぎた。中繼ぎの小屋では大きな車輪がごう／＼と轟いてゐた。とある道端の小屋では、鍛冶が槌を揮つてゐた。その前に燒けたゞれた鐵の赤かつた事。

ぶなやくるみやとちなどの樹が茂つてゐる澤の中に一軒の溫泉宿があつた。中の湯といふ。上高地の湯と白骨の湯との中間にあるといふ意をとつて名けたのであらう。溫泉好きの私は、その湯をも味つて行きたい爲に、草鞋をぬいだ。――「どの座敷でも御好きな所へ」とかみさんが云ふた程、客の影は外になく、しかも座敷は山の宿らしく、こ

つだけれども、神経で、さつぱりしてゐた。私は汗ばんだシャツを脱いで、縁の手すりへ干した。湯は熱くて、サツと汗を流すには何よりだつた。飲み物を持つてきたかみさんが――「ほえ！　きちげえみてえなサイダだな」と驚いて叫んだ刹那に、其鉄道のやうなサイダアは沸騰して半分ばかりは無くなつてゐた。

中の湯では、昼飯とするには時間が早すぎたので、其から一里ばかり来て、きれいな湧水のある所で、私は弁当を開いた。道一ぱいに遠慮なく物を取ちらけて食べてゐると、めつたに通る事のない人が二三人連で行く手からやつて来たりした。

「中の湯まではおきですか、上高地までの道は好いですか……」

其人は立続けに問うた。而して、又

「これから先には、そりや危険な所がありますよ、あすこに傷害保険の申越所を置いたらば、きつと儲かると思ひますね」

と云つた。で、私は冗談に答へた。

「ほんとに儲かりさうですか、ちや結局は安全なんですね」

お互に笑つて、お互に反対の道の木立の中に別れてしまつた。初めて逢ふや否や、冗談を云ひあつて、別れては再び逢ふ事もあるまい。淋しいやうな、をかしい事ではないか。其人が危険な所と云つたのは、樹木のなく、殆ど切立てたやうな山の中腹をへばりつくやうにして通るところだつた。足の下からずりこける石が急傾斜を飛んで、底の見えない谷に落ち込んで行つた。なる程、大雨でも降つた跡には、かなりあぶなさうだが……それも僅か二三丁の間だつた。

けさからの道は西から南へかけて半円周を描くやうに、取つて来たのだつた。焼岳が又見えて隠れた。穂高も少し頭を見せてやがて隠れた。其頃から、影の深い木立とはいつか離れて、林の相がずつと変つてゐた。なら、かしなど炭に焼くのに好いやうな木が――幾年かすると伐られては、又生長したやうな木が多くなつた。雑草や萩などが一めんに生ひ茂つてゐる処もあつた。蜻蛉が無数に飛んでゐた。蟲もしげしげと鳴いてゐた。

「此峠ヲ登ルト下ニ宿ガ見エマス
御急ギニナラヌヤウニ」

といふ立札が道端に挿してあつた。たとへ斯う書いてなくとも、人里の近い所に来て居るといふ事は、その辺に蕎麦の畑があるので知られた。スロープをなした峡を一面に夏蕎麦の花が咲いてゐる。それは春さきに消え残つた雪のやうだつた。峠といふ程でもない僅かの登りを行きつめて、急な細い路をどつと下る。その細い路には萩が好く咲いてゐた。下の広場ではテニスの球の音が間ぬけたやうに、とぎれとぎれにきこえる。そこが白骨温泉だつた。

「新宅」といふ其宿の通称を聞いてゐた私は、新しい家であらうと想像してゐたが、併し其は十数年前に本家（湯本）から別れた際に得た名を今に踏襲してゐるので、ずゐぶん古びた家だつた。河底の一軒家で、其が三階建で、三四十もあらうかと思ふ室に人間が一ぱいに詰

て、或ものは欄干に乗つたり、或ものは二階の檐の上に出て來たりして、學生らしい唄をうたつたり、ハモニカを吹いたりしてゐる、其光景が山中の温泉宿といふよりも、田舎の學校の寄宿舎のやうだつた。私は下の一番すみの室へ入れられた。隣にゐる三四人の學生連は、大きな聲で話してゐる所に依ると、松本の中學生らしく、テニスをして來たり、口笛を吹いたり、岡本の文學全集を讀み上げたり、キヤラメルは何處にあるかと探しまはしたり、とても賑かな事だつた。私は餘りに早く着きすぎて――一時少し過ぎだつた――此半日をどうして暮らさうかと思ふ位だつた。

温泉はみようばん色をしてゐた。湯槽の隅からブスリ／＼と泡を吹いて瓦斯が湧いてゐた。湯につかつて熱くなつた丸太が一本横たへてあるのは、脚を載せかけるものらしかつた。此邊では十月になれば周りの山の木々が落葉するであらう、鹿なども近く鳴くであらう、さうした頃、客も殆んど無くなつた此宿に獨り籠つてゐたらば、どんなに靜かで好いであらう、まして雪がしん／＼と降りつもる頃、此湯桁に脚を載せて凡ての事を忘れてゐたならば――。

「あのうちぢやお客が見えると罐詰を切つて出すんだね、それで料理屋もないもんだ」

そんな會話の聲に、私の空想は破られた。私は湯を出てから、湯本といふ方へ散歩に行つた。二三町離れてゐる處で、そこには新築されたばかりの堂々とした大きな宿と、別の宿が二軒と、御料理と看板を出した家とあつた。温泉場で話してゐた料理屋とは之らしい。罐詰、菓物、紙などを賣つてゐる店と、薬を賣つてゐる店ともあつたが、其外には何もなかつた。私は高山植物の花を貼つた繪葉書を買つて戻つた。

此宿にも、電燈は取付けてあつたが、炭素線が赤くなつただけで、遂に光らないのだつた。本を讀むどころではない、時計の針も見えなかつた。玄關と廊下の曲り角と浴室とにはランプがつるされたが、其外は手さぐりで歩かねばならなかつた。番頭は「川の水が旱魃で少ねえからですよ、水のある時はとても明るい」と云ふ、水槽を知つたらしい客は、燈數をやたらに殖やすから斯うなるのだと云ふ。どちらが本當か知らないけれども、ランプの光に依て電燈が照らし出されてゐるのは滑稽のやうだつた。女中がろうそくと硯箱とを持つて、宿帳をつけに來た。

私はしよざいなさに縁側に出てゐた。室の中もまつ暗だが、外の廣場もまつ暗だつた。と、ずつと向うの一間で、シュッといふ音と共に美しい花火が走つた、後から後から、光をちぎつては空に擲げ上げるやうに――誰か花火を揚げたのだ。

「ワーッ」

二階の方でどよめく聲がしたと思ふまに、十數人の足音がどや／＼と階段を驅けおりて來て、廣場へ散つた。花火は續いて揚げられた。芥子の花のやうに開くのもあつた、ダリヤの花のやうに落ちるのもあ

つた。扉のやうに飛んで散るのもあつた。私は、花火といふものを此時ほど美しく感じたことはなかつた。兩國の川開きとか、仕掛ばかりは大きくとも、其が見る人に與へる感動は、此の一錢か二錢のおもちやの花火が、此の溫泉の人達に與へる感興に及ばないだらうと思つた。それにつけても、信州のやうな淋しい山國の人が花火の製作と競技に特別の熱心さをもつてゐる心持も解る氣がした。

花火をもつてゐる人の傍には、いつしか二三十人の人が集つてゐた。私もそこにまじつてゐた。もつと、もつと皆は心の中でせがんでゐたが、花火の數はやがて盡きてゐた。急につまらなくなつたらしい人達は、まだ其處を去りやらずに、涼んでゐたが、誰か一人

「木曾のナア、なかのりさん……」

とうたひ出した。

「木イ曾のおんたけさんはナンヂヤラホイ……」

とあとをつゞける者が出來た。

「夏でも寒むい、ヨイヨイ〳〵」

其時は十人ばかりの聲が揃つてゐた。彼等は手を振つて、膝をあげて、踊りの身振をしてゐた。

「あ、ヨイヨイノヨイ」

囃す聲は、もつと大勢だつた。彼等はしぜんに集るともなく輪になつて、拍子を合せてゐた。庭は眞暗だ、宿の方を見ると宿もまつ暗だ。空には何と高く、天の川が流れてゐる事か——。（八月十八日）

山國村の夏

深尾須磨子

朝

「飯にせえやあい」

兩手を喇叭に、せいいつぱい叫ぶ達つあんの聲が、小川の上にたむろする朝靄を掠めて、はつしと前山に谺を打つ。そして甲高な女聲と一緒にかへつて來る。

「ああい」

そのはずみに山裾の草むらには、達つあんのおかみさんの姿があら

はれる。脚絆に甲掛のなりも甲斐甲斐しく、おかみさんは一しきり草刈りの手を急がせる。百合の花が打つ白の點點に、おかみさんの被つた手拭があざやかさを競ふ。やがて刈り集めた草を一籠に背負つて、おかみさんは丸木橋にさしかかる。おかみさんの頭に近いところでは、たつた今出たばかりのお日樣が、それこそは露ながらの向日葵の一輪をかざす。

「へえお土産」

　おかみさんの手から曉の匂が散らばつて、青みを帶びた笹百合の一束が、わたしの手にうつされる。

「晩になつたら外へ出しなはれ。また寢られまへんで」

大甕に盛り上げた五六十本の香氣に、眠られぬ夜な夜なのわたしを案じて、優しくおかみさんがたしなめる。

　おかみさんが朝餉の支度をする間に、わたしは素足でながれに下りる。そしてありがたい天然が、調合したばかりの水をうやうやしく掬ぶ。顏を洗ふ。さざれ石を數へる。鈍子と遊ぶ。汀に咲いた狐の提燈を手折る。果はあらうことかおふけなくも妖精を眞似て、素肌に禮讃の姿態のかぎりを盡す。

　逢つあんの家の天窓からは、しきりに煙が立ちのぼつて、虎杖の味噌汁と澤庵漬の、仙人の膳が調へられてゐる。

晝

峰から峰に、あわただしく去來する水雲を追うて、絶え間なく流れる青嵐のひまを、氣まぐれな白雨が斜にしぶく。やがて晴れる。作りものめいた蜩が狹間の谷をつなぐ。日の光と蟬の歌が甦る。

　逢つあんは鳥さしに、(夏の山里にはよく迷ひ鳥の獲物があつて、『窮鳥懐に』の戒をもよそに、里人はしばしば時ならぬ味に舌皷を打つのである。)おかみさんは川下の隣村へ買物に、わたしは刈草の中から幾株かの薊をえり出して、柿の古木につながれた黒毛の牛とたはむれる。

　そこまで迫つた山の緑が、牛の毛並につややかな青丹をむき、わたしの手も眞青、顏も眞青、あたりは只もう眞青である。つぶらに見開いた牛の瞳に、かすかな葉かげらしいものが明滅する。時々尻尾の鞭で蠅を追ひながら、いぢらしいながし目を世辭がはりに、好物の薊をむさぼり止めぬ牛と相對して、不覺にもわたしも一匹の牛になる。そしてむしやりむしやりと薊を食む。しまりの悪い口もとに涎を垂らす。

　納屋から持出した荒むしろを櫟の木影にのべて、快い横臥に目を細めては、中庭のはづれから母屋の廂へ、徐々に移つてゆく日時計の推移を樂しむわたしを、いつの間にか歸宅したおかみさんが呼び覺す。

「まあそんなとこで…………蟒が小便をかけまつせ。目の中へはいつたら盲目になりますがな」

おかみさんは見事な虎杖の大束を抱へてゐる。これがまた幾朝かの味噌汁の料になるのである。

「まあ大きな……」

「歸りがけにとつて來ました。まだまだこざしたけど、そのい取つても持たれまへんさかいな」

「惜しいこと、わたしも行けばよかつた」

「また今度一緒にいきまひよ。いつものとこからもつともつと奧の方へはひつたとこだす。あそこならなんぼでもござすさかい」

云ひ云ひおかみさんは厨から庖丁を持つて來る。そして太さうな二三本の葉をむしりむしり、節をよけて二寸ばかりに切る。傍からわたしが皮をむく。兩端から縱に細かく庖丁を入れて、水を滿たした手桶に浮べる。くるりと切目がそりかへつて車形になる。（この一つ一つに細い心棒を通して、手作りの筧—自然のなら尙更けつこう—の水のまにまに廻轉させるのは、大人にも子供にも飽きぬ面白さである。）

「水車」

叫びと共に水の垂れる一つをわたしが口へ運ぶ。酸味がまづ舌の根を強ばらす。

「あくが出とりまつしやろか。鹽をつけんとあきまへんで」

おかみさんも齒ぎれのよいところを賞味する。

もう雨も來さうにない。蜩の音がほしいままに晶質の大氣に冴えて、山越しで小學校へ通ふ子供等が、束の間裏の小徑をにぎはす。

「釣りにいきまひよか」

おかみさんがだしぬけに云ふ。

「日の入りになりかけましたさかい」

谷間の日はひるのが早い。日の入りが殘す明るみのしばらくが、おあつらへ向きの釣時なのである。二人は大急ぎであたりを片付ける。支度をする。おかみさんが餌の蚯蚓を掘る。わたしが釣竿と小桶とを用意する。そして出かける。日傭の若者が川ぶち傳ひに歸つて來る。

「牛を入れてくんなはれ」

おかみさんの聲を瀨音が引取る。粘土色をした流れがところどころに苔の花を浮べて、今朝方はあらはれてゐた筈の岩も今は見えない。川もかうした谷間川の水かさは、ほんの小降りの雨にも直に響く。降る間もなく增え、止む間もなく減つてゆく。見たところ一間あまりの谿流に過ぎないが、何しろ大塚川ゆきの筏の唯一の通路になつてゐるので、杣人の歌のはずむ雪解の頃は、道草もつめぬ忙しさに、小流れは日毎に目を延す。從つて里人等は心から水神樣をあがめる。何をおいてもまづ水神樣ををがむ。

「まあここらにしまひよか」

半ばせきこめられた水勢の淀みへ、おかみさんはそつと糸を投げる。わたしも續いて投げ入れる。忽ち激しいうねりに[illegible]の浮きが方向を變へて、をののく釣竿の尖端が、わたしの全身を引きつらせる。

腕が非常時の鐘を打つ。すは手ごたへ、まさしく地球の重みである。引きあげる。何やらがはねる。をどる。何やらが只光る。糸の先に閃く二寸ばかりの發光體に、わたしの目は意氣地なく眩む。

「釣れましたか、どれどれ」

　おかみさんが釣竿を投げ出して駈けよる。

「まあ、あかもとだつせ。あかもとだつせ」

　仇敵ござんなれのけんまくで口早にどなる。そして叮嚀に魚を釣針からはなす。

　薄ぐろい小船の中では、たそがれの精がしづかに息づく。

夜

　空腹を告げて長啼く牛小屋の牛の聲が、次第次第に朦朧となつて、蚊やりの煙が家中をたちこめる。窓は云ふに及ばず、燻べ好きの達つあんが、生垣の檜葉でも杉の葉でも、手當り次第に爐にぶち込むので、あたりはまるでいぶされる狸穴のけむたさである。

　その内に煤けた釣らんぷが顏を出す。光とも云へぬおぼつかない光で、しかし眞心から夜を招待する。どんどん燃える二つの瞳が、うす闇の厨に眞赤な穴を二つ穿ける。庖丁の音がかあいい山彦をこしらへる。

「手傳ひませうか」

「おおきに、もうちきだす」

　膳がならぶ。鐵瓶がつるされる。達つあんが座る。居人の爺さんも座する。古びた爺さんの箱膳には、爺さんの命よりも大切な、熱い一本が確に添へられる。

「あんばいはどうやろな。燒けとるつもりやが」

　達つあんがにたにたする。

「默つとんなはれ。云ふたらよう食べなはらへんさかい」

　おかみさんが達つあんを睨む。

「何でせうねえ、おいしさうですこと」

　達つあんの晝間の獲物らしい燒鳥の皿に見入つて、わたしが箸の手をためらはす。くすりと笑つて爺さんが猪口を置く。

「後で分つたらよけいいかんやないか」

　達つあんが口をもぐもぐさせる。そして思ひ切つた様子で云ふ。

「杜鵑だつせ。川ぶちできよときよとしとりましたんや。餌でも探しとつたんだつしやろ。藥だつさかいあがんなはれ」

「まあ可哀さうに。いくら何でも……」

　毎晩のやうに屋根に來ては、血を吐き吐き啼くいぢらしい小動物の、あまりにも變り果てた姿にわたしはうんざりする。杜鵑の歌、杜鵑の物語、杜鵑の詩、思ひ出の底で羽ばたく杜鵑のいろいろに、わたしの食慾はつひに燒鳥の皿を遠慮する。

「それ見なはれ。そやさかい默つとつてやとよいのに」

　つぶやきながらも、血の道の藥だとおかみさんは箸を付ける。

「啼いてるべ」
逢つあんがわざと聞き耳を立てる。どうやら裏山の方らしい。まぎれもない杜鵑の二聲三聲は、全く折も折である。
「兄弟かも知れんな。本堂建てたか、本堂建てたか…………」
あらたかな一本の効驗が、默りやの爺さんを口輕にする。
「えへへへ……」
おかみさんの笑ひを後にして、わたしは緣端から庭に下り立つ。早くもこめわたした夜霧が月光を含んで、まはりは只おぼろな乳白色の氣球である。

(丹波國山國村は京都府の管轄に屬し、名にし負ふ大堰川の水上の、山峽のささやかな一村落である。古來勤王の美風にあらはれてゐるところとて、素朴敦厚の人情には、さすがに掬すべきものがある。一朝皇室に事あるごとに、走せ參じた一村の歷史は、京都年中行事の一つである、時代祭の山國隊にも窺はれる。)

水國小品

森田恒友

眞菰

左岸は常陸、右岸は下總、大利根に泛ぶ舟が、銚子に向つて下る、其兩岸の初夏の綠は、見慣れた眼にも美しい。初めてする水鄕の旅客の眼には、美しいのみならず、不思議な情狀とも感じられよう。それは物があつての不思議でない。言ひ換へれば奇岩も怪石もがあつての不思議でない。實は何も無い爲めの不思議の感である。大利根の水が漫々として緩やかに流れる上を、左岸に近く船が行けば、右岸は少し太く引いた墨畫の一線の如き中に、折々の森の頭がぽつりと見える。

その大利根の近い方の岸へ舟を着けるにも、茂つた眞菰の中を幾丁かは舟が縫はねばならぬ。眞菰を洗ふ水がぴしやり／＼と波紋を畫くのを暫らく見てからでないと岸へは着かぬ。

岸には眞菰を刈る親父、其れを束ねる女房、其の眞菰の中へ着けてあるサッパ舟の上で、一人遊んで居る子供、そんな情景が岸近く行くと現はれる。一望緑の草と銀の水とを背景として、黑點の人影となつて眼前にぽつり／＼と現はれる。

眞菰を刈る親達と、舟に遊ぶ子供とをとりまいて、無數のよしきりが鳴いて居る。

蓴菜

「今年は時候がおくれて居るので、蓴菜が遲れましたが、數日中に送ります」といふ手紙が六月に入つてから水郷の知友から屆いた。每年五月の中に味へる蓴菜だが、今年は時候の工合で少し出るのが遲れた譯だ。

　關東では常陸の牛久沼の蓴菜が最も珍重される。

　十年も前のこと、あの附近の綠野を寫生に行つて、宿屋に泊つて居ると、軒先を蓴菜賣が通る。其頃の私は酒客でないから、蓴菜の味ひを賞美する資格は無いのだが、何となし買ひたくて、蓴菜賣が來る每に宿の女房に賴んで買つて貰つた。そしたら宿のかみさんは大きな丼に一度に其の蓴菜を三杯酢にしてめしの菜に出したものだ。

「外には何も今日は無いのかね、」

「でも、旦那は蓴菜を買つたから、外には何もつけないんですよ」

と、かみさんは平氣で答へた。飯を喰ふに蓴菜ばかりのおかづには閉口したが、それでも蓴菜賣が來る每に、何となしに買ひたくなつた。透明、無味、水の香、それが蓴菜のもつ初夏である。丼に盛つたその蓴菜の透明な色を見て居ると、青草原の初夏の寫生が、明日こそうまく出來さうに思つた。蓴菜の如く透明に、やはらかく、ひとりでに咽へ落ちるような心で、自然に向へるように思ひつゝ、それを喰ふよりは、眺める爲めの蓴菜といふ感もあつたが、而しそれをつるつると咽へ落すと、本當に初夏を自分のものにしたような氣がした。

せんどう

　川筋の〇町附近は、幾年か續いて私の畫鄉であつたが、今は畫鄉といふよりは、折々疲れた頭を休めに、ぶらりと行つて、堤の上で川風に吹かれたり、其處の繩のれん式の小料理屋で川魚でも喰つて來るところになつた。

　夏が來る每の其處の樂しみは、其の附近で漁れる燈心田のどじようを喰ふことや、薄暮になつて川堤の上に涼風をとることだ。川の上に宵月が上つて、めそ釣り舟の船頭共が棹を肩いで河原の草の中を出かける。あたりがうす暗くなつて川水のみが靜かに白い。

「此の頃、釣れるけい」

と側に立つて居る老人が問ふ。

「今夜らあ、釣れべい、なんしろ此間うちはからきし駄目だつたでね」

と船頭が答へる

「釣れたら持つて來てくろや」

「はア、ようがす」

　船頭等の諾否は簡單で氣持がよい。蒼々たる青草と、漫々たる水との中に、月を頂いてめそを釣る彼等に邪念のあらう筈はない。

野天の哄笑

前田夕暮

安食といふ名からして天さかる邊土の、荒削の丸太小舎のあらむしろの上にあぐらひ、もそり、もそりと玄米を食べてゐる民族を想像せしめる印旛沼畔の一小驛である。その小驛のカツと日の照りかへすホームに、朱い濁み色の帯をした明治四十年代の車室から降り立つたのは、私と小學四年級の私の長男と、も一人歌人で辯護士であるTの三人だけであつた。

「さつぱりしたものだね。」

「全くだ。吾々のために停車したやうなものだね。」

「驛夫がゐるのかしら。」

「驛長が改札するだらう。」

などといひながら、熱く燒けた線路を跨いで、改札口にあがると、それでも驛員が一人ぼつつり睡さうに立つてゐる。

「Yさんの家はどの邊です。」と訊いてみると、急に假睡状態から自己を恢復した四十恰好の驛員は、黝ずんだ泥炭地にところどころ蘆を生えさせたやうな顔面に汗をにじませて、その汗を玉にして二三滴足もとにおとしてから、急に眼が覺めたやうに、

「はア、」と一つ返辭を吐き出した。全くその返辭は一種の瓦斯状態であつた。その瓦斯を泥炭地の廢坑から、吾々の方に放り出しておいて、

「その、」である。そのの次ぎは斯る際大抵欠伸だらうと想像して些か恐縮してゐると、果して彼は河馬となつて吾々を食はんとする巨口を、朱く炎天の歩廊に開いた。

私の子供はたしかに驚いたらしく眼を瞠つたが、くつくつと言つて往還の方へ駈け出した。そのあとを白服短靴のT辯護士が、

「やア」と言つて追ひかけて行く。私も何かなしに駈け出したくなつて、河馬君の巨口がもとの状態に閉塞せぬうちに、すたすたと二三間歩み出してゐた。驛の下は往還が白く乾いてゐた。往還に添つて簷を傾けてゐる氷屋で、氷塊を各々掌の上にのせて貰つて、吾々は吾々の臭覺と直感で、Yの家の方へ歩き出した。どうして臭覺で歩き出したか、といふと、それは一面青くみえる堤の方から、何といふこ

となしに村落の匂ひがひようひようとしてくる。その村落の匂ひのなかに、更らに、一きわ明るくぽつとした香氣が揺曳してゐる。その漂へるものの光源は酒の香氣と馬の體臭と、七面鳥の卵と百日紅と眞菰の匂ひとの合流し包含された野生植物性香氣である。

私たちの掌にとけた氷は、指の間から光の雫となつて大地にぽとり、ぽとりとおちた。

私達は口を掌の方へ近づけて、氷塊の一角を噛んだ。齒にしみる冷さは總身にひゞく。

「Yさんの家はそつちへ行くだんよ。」

と驛の方から緊張味のない睡さうな聲のかたまりがとんでくる。振り返つて見ると、さつきの泥炭地の河馬君が鳥渡片手をあげて此方を指さしてゐる。

「知つてるよお、」とTが答へる。

「そこ行つて、田圃を通つて、それからな、」とまた一つ巨口を吾々の方にむけて開いたらしい。

私達は怺へきれなくなつて

「ハッハハッハハッ。」と野天の哄笑を爆發させて仕舞つた。全く可笑しいといへば可笑しかつた。Yの家の道案内を、河馬君は時間でいへば約十分も、距離でいへば約百メートルも來てから、遙かに放送してくれたのである。その間彼は何をしてゐたか、と思ふと確に興味があつた。子供は喜んでTと往還の眞中で踊つて笑つた。踊り笑つて掌の氷塊をとうとうすべり落して仕舞つた。

私達は、その田圃を越えると高い土手の上に自然に出た。ここから印旛沼は吾々の視野のうちにその若々しい眞夏の姿をあらはして來た。私達は唯わけもなく感激して、

「おおい、」と高く兩手を空の方へあげて友の方へ呼びかけた。友の家はその蒼蘆の波の光りのたゞなかに、遙かに、遙かに遠く、ほんとにぽつちりと黒い細い煙突の側に、それらしい木立と屋根とを見せてゐる。そのあたりから、靄々とした野生植物性香氣が渺々として漂うてくるのである。

「あれだ、たしかにあそこがYの家だ。」と私達は、再び、「おおい。」と呼ばつた。そして、私達は渡しの方へ高土手を馳せおりた。土手下の日だまりでむつと草いきれが顔を蒸つた。私はかういふ強い草いきれと日光の淀みのなかに體を浸すと、眼がぼつと霞つて、恍惚とした甘美な色彩的幻想に囚らへられることがある。六七歳の折り作男に連れられて、ひどい草いきれのした野良の炎天を歩いてゐた時に、赤い牛の行列を幻覺に覩たことがあり、又十八九歳の折り東北に旅行した時、磐城のある山の麓を歩いてゐてこの恍惚とした心境に美妙な音樂をきいたことを幽かに記憶してゐた。で、あるから、私達の歩いてゐる路の、炎天の下に一人の裸童が蓮の花を持つて立つてゐるのを、私は恍惚が誘ふ夢幻的な一風景だなと思つたのでちる。が、それは實在の裸童であつた。Tと私の子供が、その裸童の巨大な腹を指さして何

か言ひながら高い笑聲をたててゐるのでもわかる。で、一層幻想的實在の甘美さを味ふことが出來た。

Yの家は渡しを越えて、更らに高い長い土手の上を風に吹かれながら行くと、もうすぐに、浴衣姿のYを門さきにたたせてゐた。

Yの家は、印旛沼のただなかにあつた。二三百年からたつた古い屋根で青空を支へた大きな家の前庭には百日紅の巨木が全樹の枝頭に花をつけて、ゆさり、ゆさりと風に搖れてゐた。木の下蔭には一寸ほども花が散りたまつてゐる。バケツで落花を掬つて日光のなかに投げると、花火のやうに風に散る。白い七面鳥が、けろけろと頸をながくのばして私達を歡迎する。庭には親子の馬がゐて朱い根元の鐵鎖の輪を食べてゐる。

私は百日紅の下で、白い夏服を脱いで裸になつた。散る花が冷たくぢかに肌にふれる。

「みんな裸になつてくれ。」と友は家の中で呼ばつてゐる。

「これ以上裸になれないよ。」と言つても、

「いや、裸になつてくれ、素裸になつて、これから沼に鮒つかみに行かう。」といひながら、これはほんとの素ッ裸で庭にとびだす。そして、私達に手拭を一本づつ渡す。

「さあ行かう。」と一人で承知して、大きな笠を頭からすつぽりと被つてさきに立つ。そのすぐ後を私、私のあとを私の子供、そのあとをT、何れもみな素ッ裸である。ただ私達は白い手拭を頬かぶりにした。此裸の一行が百日紅の木蔭を離れて廣い庭を横ぎつた時に、座敷ではYの夫人が聲をたてて笑ひ、庭では親子の馬が笑つてゐたにちがひない。なかでも鵞鳥の一群は殊に驚いて、頸を一齊に高く伸ばして、其喧躁なるオーケストラを騒然として吹奏したほどであつた。

私は裸の不安を何等感ずることなしに、風に吹かれて青薦のなかに這入つて行つた。

涼しいな、と思つた。少し涼しすぎるとも思へた。

さきに立つたYは、いきなり駈け出して、堀の中へとびおりた。そして、はじめて其處に大笊を投出して、

「おおい、早く來ないか、澤山ゐるぞ。」ともう水のなかに、ちやぶちやぶ這入つて行く。其處はYの屋敷下の自然の養魚池のやうになつてゐる沼の一部で、いつもならば滿々と水がたたへられて、なかなか背丈も立たぬほどであるが、眞夏の旱魃で沼の大半はすつかり乾上つて、纔かに二三十坪ばかりの一廓が水を殘してゐた。そこへ自然に集つて來たのが、鯉、鮒、鰻、鯰の一團であつた。水はうす濁りがして、殆んどぬるまゆ位に沸いてゐた。私達も友のあとからぼしや、ぼしやと這入つて行つた。

「ほうら、」と言つて、友は二尺ばかりの黄いろい鯰を手掴みにして、私達の方へ投げつけた。

「ひやあ、」と奇聲を發して傍に身をかはしたのはTであつた。と思ふ

瞬間、私の橫腹へぴしやりと冷たいぬめらかな感觸と衝動とかあつた。私も思はず飛びあがつた。

愉快げにはッはッはッと笑つてゐるのはYで、

「いや失敬、失敬、」と頭の上で泥手を振つてゐる。

私達は、兩手を濁つた沼のなかに突入れて、泥のなかに潜んでゐる魚族を探し初めた。

「ひやあ、」とまたTが奇聲を發した。みると、Tの顏一面泥にまみれて、たゞ眼ばかり光らせ、そして泥のなかから口を大きく開いてはッはッと笑つてゐる。一尾の大きな鯰を兩手でぎゆつと摑つたので、鯰は驚いて、滿身の泥をTの顏に撥ねたのであつた。

私はその時、足の裏でつるりとした滑かな魚の脊を感じた。と思つて、そつと手を廻してみると、ゐた、ゐた、巨大な鰻が一疋。私はいい、い、い、きなりきゆつと力を指さきに入れた。と鰻はぬるぬると固く摑つた私の掌のなかを拔けて行く。おやおやと思つて片手を素早く頭の方へ廻すと、もう片手の方は尾を拔けてたゞ泥を摑ませられてゐる。これはいかんと思つてまた片手をさきに廻さうとすると、もう鰻は完全に私の兩手から逸して泥深く沒入してゐるのだ。と今度は双手にあまる感觸の少し粗い扁平な魚類が私の手中にあつた。魚は私に捉らへられて一撥ね、滿身の力で水を撃つ。と同時に私の顏と言はず胸といはず腹といはず、さつと泥水の虹である。思はず私もTも同じ奇聲を發せざるをえなかつた。私の子供も、Yも、奇聲そのもののTも、さながら一刀を浴びた時に發するやうな叫びを、あちこちであげてゐる。その都度私達の手には必らず鯰か、鯉か、鰻かゞ摑られてゐるのだつた。捉へた魚族は沼の一端に置かれた大笊のなかにぽんぽんと投げ込まれた。

私はとうく三尺近い大鯉を探しあてた。鯉は水を切つてさつと空に騰つたかと思はれる程に二三尺跳ねた。わつと言つて四人が一時にその大鯉に殺到した。飛沫は私達の全身を濡らした。素早いTは奇聲を發してい、い、いきなり鯉に抱きついた。鯉は巾廣な尾でTの橫腹をひたり、ひたりと打つ。Yも馳け寄つてTもろともに鯉を抱きあげて、ぽんと土手の上に投げあげる、……といふところだが、事實は顚踣して二人とも水のなかに打伏せになる。その間に鯉は逸して行方知れずなりにけりといふのが大詰めであつた。

「たしかに三尺あつた。」

「いや三尺も四尺もあつた。」

と二人はそれこそ取り逃した鯉の身長をより長く、より偉大に誇張してゐる。

が、その頃、笊のなかにはもう百尾にあまる魚類が投げ込まれてゐた。Tと二人して水から笊をあげて見ると、約一斗もあらうと思はれる巨口にして腹白きものや、巨眼にして腹黄なるもの、ぬらぬらと黒くうねるもの、靜かに諦念の眼を開きゐるもの、巨頭長鬚、白眼靑尾の類で、殆んど盛りあがりうねり、波うつてゐた。

私達は其時初めてお互の顏を見た。泥のなかから生れたやうな白眼の巨口の生き物が、其處にもゐた。そして、お互に指をさし合つて野天の哄笑を樂しんだ。

中宮祠湖畔

田中阿歌麿

日光廟の結構は今更述ぶる要はあるまい。誠に結構其もの、一繪巻である。けれども伊勢神宮、明治神宮に詣でた時と自ら其氣分の異なるはどうした事か？

五月の中旬綠漸く濃く汽車の沿道に赤い山躑躅の花の美くしい頃、私は本年二度目の日光行きを企てた。一回目は中宮祠湖が結氷したと報ぜられた嚴寒の候で馬返しから中宮祠までの彼の急坂を汗も流さずに登れる頃であつた。其頃は殆んど中宮祠へ行く人も見當らず僅かに木枯しの音を道連れに、近道を攀ぢた。中宮祠湖畔の宿も誠に寂しく旅客は私の外に先づ無いといつてもよからう。宿には暖房の設備は勿論ない。が夜具は思ふ存分、體の動けなくなる程重ねる事が出來る。これ程冬の中宮祠湖畔は寂れてゐる。私は然しそれがどれほど心安かつたか知れない。

湖上は風が強かつた。狹長な湖面は風を一と纏めにして突つ放す樣である。中宮祠湖は此強い風が吹き續けるので水溫が氷點に達しながらも尚凍結する事が稀であるが特に寒さの酷しい冬は僅かに岸に近い所丈けが凍るのである。今年も僅かに凍つた。夫れを見たさに態々こんな時機に出掛けたのである。凍結區域は極く僅かでしかも夫れが強烈な風の爲めに破碎され波のまにまに搖れて居た。私は三十年來湖沼と親しみ氷の調査にも可なりの苦心をして居る。諏訪湖の氷上渡渉中陷没して膽を冷し、野尻湖の氷上に於ける長時間の水溫觀測の際は體溫で氷が次第にゆるみ人夫の手を借りて漸く陸上に遁れた事もある。けれども馴れて見ればこんな事は常に繰り返す程の勇氣も出るが中宮祠湖の此度の氷を見た時は一寸尻込みを覺えた。大きな氷盤がゆらゆらと波にもまれて居る。風は強くて身體は吹き飛ばされさうである。まゝよ死なば死ね湖沼に捧げた一身と勇を鼓して一破片に乘り移つた。筏に乘つた樣である。搖れるのと風の強いのとで身體の安定がな

い。氷殼の厚さを測らうと思つても氷片の先端へは出られず、それかと云つて足元に坑を鑿つは誠に危險である。辛うじて氷質を調べて覺束ない足取りで上陸した。

中宮祠湖の凍結に就ては遠い古へは全く不明であるが、明治年間に僅かに二回又大正になつて七年に一月二十九日から三月十五日迄に二回、夫れと昭和の今回、之れだけが私に解つて居る。湖沼學上斯くの如きを稀凍湖と云つて居るのである。

さて五月の日光行は實に麗かであつた。前にも述べた樣に日光線の沿線は躑躅が滿開であつたし綠は深味を增して居る。

霧の深い日であつた。馬返から中宮祠までの自動車は霧を惧れて出ない。あの急坂あの急カーブ、自動車の出ないのも無理はあるまい。一外人の家族は止むを得ず日光町へ引返して行つた。徒歩で中宮祠へ向ふものもあつた。

私も徒歩組に加はつた。荷物は人夫に任せて薄絹の樣な霧の坂道を登つた。益々霧は深い。近道を行けば距離は短縮されるが以前とは異つて所々に小さな石垣等があつて若い頃の樣な眞似は出來ない。闊い新道を廻り廻つて元湖であつた平地へ出た頃はいつの間にか日は沒して霧と共に夕闇は迫つて來た。恰度其頃先發のA・B兩氏がやつて來た。兩氏は途中、來る人も來る人も予でない。どの邊まで來て居るだらう。と話し乍ら急ぎ足で進むと霧の中に煙草の火が明滅して居る。それで予であることを確かめたと笑つた。夫れ程霧が深く人の姿を判定する事が困難であつたのである。

宿屋は何れを見ても客が多い。主として中等學校の修學旅行の團體で却々に賑やかである。冬の中宮祠とは全く其趣が違ふ。しかし八時、九時といへば未だ更けたといふ程でもないに道路を往き來する人の姿等は全く見えない程である。土産物賣る店も其頃になると戶を閉して了ふ。

翌る朝は此土地としては珍らしい良い天氣になつた。一片の雲もない。中宮祠湖は波を納めて鏡の樣な水面は朝陽に輝いて居る。

霧が霽れて始めて氣づいたものであるが湖の附近はまだ綠が淡く櫻花はまだ綠が淡く櫻花は漸く色づいた許りである。海拔一二七一米の地之れも當然であらう。湖畔の谷間には殘雪が布を垂らした樣に或は又湖の樣にも見える。湖上に出づれば北西方に當り白皚々たる白根連峯が聳えて往き通ふ洋形帆船と相映じてアルプスの湖沼にある樣な氣分がする。外人の喜こんで此地を訪れるのも肯かれる。又イギリス、フランス等の東京外交官は夏季中湖畔の別莊で事務を執つて居る。夫れ程此湖は外人間に喜ばれて居るのである。

端然たる男體山の雄姿は中宮祠部落の直ぐ背後に聳えて居り湖面より千百餘米も高いので部落の附近では仰ぎ見る事も容易でない。けれども一度湖畔に出づれば次第に全容を現し或は南するも西するも其形は依然として變らない。繪葉書等で之は中宮祠だと直ちに肯かれるのも此男體山が背景をなす爲めであるが、此處で亦一つ夫れに不思議な

る働きをなすものがある。夫れは東岸歌ケ濱の立木觀音で此處の湖岸にある門を前景に湖を隔てゝ男體山を容れた絶頂は一度此地を訪れた誰でもがあゝ之は中宮祠湖だと知るであらう。

今冬季を除いては春秋の遊覽夏の避暑地として著しく賑はつて居るが其昔は山深く人煙遠く離れて全く人に知られなかつた永い歳月が續いた事であらう。それが今を距る千數百年の以前神護景雲元年名僧勝道上人が深山幽谷を求め男體山上に冥想三昧の境に入り偶々目を開けば、南方遥かに樹木鬱蒼たる中に明鏡の横はるのを發見した。上人は荊棘を踏み別け幾多の困難を冒して漸くたどり着いたのが此中宮祠湖であるといふ。然し乍ら當時は勿論何等名稱のあつた筈はない。又勝道上人が何と命名したかも知らない。が此湖は一般に中禪寺湖として知られて居るのは昔から此湖畔に中禪寺といふ寺があつたからである。明治初年に神佛混淆を禁止せられてから此寺は二荒山神社となり佛寺は分離された。そして今東岸の歌ケ濱に移された。爾來内務省では專ら中宮祠湖といふことになつたのである。又舊い記錄によると德川家光は之に雪浪湖と命名したといふことであるし、近くは明治天皇より幸ノ湖の名を賜つたのである。

次に中宮祠湖はどうして出來たかといふに曾ては男體山のある處から火口原に水を湛へた如くに考へられたこともある。しかしそれは間違つて居る樣である。中宮祠湖の湖盆は石英斑岩と花崗岩とからなつて居り此地域は往昔非常な浸蝕を受けて大窪地を作り其區域は極めて大きなものであつた。然るに其後男體山の噴火があつて熔岩を流して其一部を堰止し此大なる窪地を二分し西部は中宮祠湖となつた。又東部も一部水を湛へたであらうが其周壁は何時しか浸蝕せられ今日見るが如き大谷川となつたのである。而して成生當時の中宮祠湖は今日より更に一層其面積が大きく千手ケ原、戰場ケ原は勿論湖岸の平地は共に水に被はれて居たのである。尚詳細に亘つて述ぶべきことが幾多あれども餘りに專門的になるを以つて夫れを避け、又湖沼學上の興味ある事項も此處では省略することゝする。けれども中宮祠湖乃至此附近の風致に密接の關係ある水位に就ては一通り記述を要するであらう。實に水位の低下は湖岸を露出し又名瀑華厳を凋らすのである。

中宮祠湖の受水區域は餘り大きくはない。湖の面積一一・九一方粁に對し僅かに五、六倍に過ぎないのである。又最深部は一七一米あり更に全湖盆が比較的深く一寸沖に出れば既に一〇〇米もある程であるから從つて湖盆の容積は可なり大である。夫れ故流入河川の水が如何に多く齎らしても湖畔に氾濫する樣なことは先づないと云つてよからう。されど一ケ年を通じての水位の變化は氣候の變化に伴つて繰返されて居る。大體から見ると年中最高は八月であつて之は暴風雨季節の影響である。又三月に最低水位に達するが之は冬季の末期に當り降水が雪狀なる爲め直ちに增水に關係しないからであるが此雪が融解して一時に注入を始めると水位は著しく上昇する。夫れは普通六月頃で此增水は時に夏時に於けるよりも大なることがある。水位の年

中變化は先づ以上の通りで湖岸が露出し又は華嚴瀧の水の涸れるのは即ち最低水位時たる冬季である。今回の旅行には尙此冬季の狀態であつて華嚴瀧は僅かに岩壁の下部から數條の漏水が垂れて居たに過ぎなかつた。態々登山した多くの遊覽者や修學旅行の生徒諸君は定めし落膽した事であらう。が此頃新聞紙の報ずる處によれば大谷川流域の水田に灌漑する爲め水門を開き壯觀比類なき華嚴瀧を出現したといふことである。尙此瀑の湧水は從來は最低水位時約一ケ月位であつたが先年の關東大震災の後は數ケ月に及ぶ樣になつたと云はれて居る。之は里人の云ふ處によれば華嚴瀧漏水が此時に著しく濁り又其後の地震でも濁水を發見したとの事であるから或は常に漏水する所の岩石の間隙が地震の爲めにもまれて漏水を多くし從つて湖の水位上昇に影響を及ぼしたのではないかと思はれる。之は尙一層調査しなければならぬ事項である。

私達一行三人は午後の日を受けて舟を風に任せ西行して菖蒲ケ濱に上陸した。減水して露出した砂濱を僅かに行つて小石で固めた湯本道に出た。樹木鬱蒼たる平坦な所を僅かに行けば龍頭瀧がある。坂道を登りつめて白樺の樹間を行けば戰場ケ原である。一直線の道路が其中に作られ途中に三本松といふ所がある。眞直ぐに三本の松が天空に聳えて居るが何れも立ち枯れの儘である。茅屋二三之等に住む人達は何を生業として居るであらう。松の枯れたのは其内に仆れるであらうか今の内に代りを植ゑて三本松の名を永久に傳へたい等と思ひ乍ら此處から道を左にとつて再び森の中に入り湯瀧を賞し、湯の湖東岸を辿つて湯本溫泉に着いた。

湯の湖は中宮祠湖に比べたら殆んど問題にならぬ程小さい。而し乍ら其風景は寧ろ上位に擧ぐべきであらう。男體山は湖尾遙かに聳え其形狀は中宮祠湖で見るよりも勝れて居る。白根の連峰は多くの殘雪を輝やかして西方に扣へて居る。此湖畔にもまだ殘雪がある。兎島の躑躅樹もいゝ。北東端の溫泉湧出もいゝ。

此地へ着いたのは夕方近かつたが明日の行程に都合があるので一通りの調査を始めた。此處で興味を惹いた事は水溫が著しく高い事である。まだ湖畔に殘雪を見る湖沼は高い溫度で四、五度附近なるに十幾度といふのである。中宮祠湖の水溫よりは七、八度も高い。之は多分湖畔に湧出する溫泉の影響であらう。其附近になると二十度附近にもなるのである。

湯本溫泉場は私の始めて訪れた頃とは大分變つて高樓が聳えて居る。季節の早い故か浴客もまだ餘り見えないし何れの家も寂しい。六月になつたら乘合自動車も日光から日に數回通ふといふから次第に賑ふことであらう。

日光廟に參詣の後は中宮祠湖を訪れそして湯本溫泉に浴する旅は東京を中心として一泊位の豫定で出かけたら、家族連れでも誠に容易であらう。私はそんなことを考へ乍ら翌日此地を引揚げて歸京したのである。

張作霖

松本鎗吉

無辜の民の怨嗟が野に滿ちても、匪賊の砲を雨と注がれても、泰然自若として動かなかつた彼、張作霖は、自分の乘つてゐる列車が轟然と爆破した時にも、少しも狼狽はしなかつたといふ。

「張作霖の列車が爆破された、張の生死は不明である」といふ簡單な奉天電報は、恐らく世界に大きな衝動を與へたであらう。五十四年間巧に運と運との間を綱渡りして來た彼も、今度こそは、間違なくやられたであらうとは、列車爆破電報を見た誰もが直感した所であつた。が彼の運は未だ盡きないのであらうか、かなりの重傷を負つたが、その場で斃れず、自動車で奉天城内の私邸に運ばれ、今日なほ、病床にある！

幾度か死地に陷りながら、その都度危機一髮の間に巧に死地を脫して來た幸運な彼も、彼が十數年間の努力で築き上げて來た奉天軍閥の總崩れと前後して最後の年貢を納めなければならないのではあるまいか、幾度目かの幸運が彼を見舞つて、かりに生命は取り留め得ても、再び三軍を叱咤する彼の英姿を見ることは、恐らく六ケ敷いであらう。

どうも、張作霖は、死んで行くとしか考へられない、が、もう少し生かして置きたいものである。今死んでは、彼も瞑目することは出來ないであらう。

○

支那は今、奉天軍閥凋落の秋である。奉天軍閥の殿をつとめた奉天派が三方より攻め寄せて來た南方各軍の一擊に潰滅したことは別に不思議でない。が張作霖だけは、もう少し生かして置きたい。その理由は極めて簡單である。彼は一寸得難い痛快な人物だからである。

口ばかり達者で度胸が無い支那人は、東海を埋めるに足る程澤山あるが、默々として最後まで我を張り通す男は、只今の所、張作霖唯一人しか見當らない。

若し支那が、張作霖の死去によつて、直ちに平和と統一とを得られるならば、亂世の雄張の如きものは一日も早く、その姿を消して然るべきである。が僕は、支那は、當分、只今の混亂狀態を持續して行く

ものと見てゐる。混亂狀態が續いてゐる限り、張の如き痛快無比な男は、是非一人あつてもよい筈である。

○

何處の國でも、天下を取る程の男は、大抵微賤から身を起してゐる。だから、自ら大元帥を稱し、北京中海に一ケ年間榮華の夢をむさぼつた張作霖が、貧民の伜、綠林の出であつたとて敢て異とするには足らない。が彼が五十五才の今日まで辿つて來た道筋は、一寸類の無い、數奇を極めたものである。

○

『彼は馬賊だ！』—張作霖を罵る者が最初に吐き出す言葉は、必ずこれである。事實、張は青年時代に馬賊を稼業とし遼西の曠野を馳驅したのだから、馬賊と罵られても仕方ないのであるが、彼の少年時代の境遇や馬賊の仲間入りをした動機を知つて見ると頭から馬賊呼ばりするのは、餘りに殘酷な樣な氣がする。

○

一代の風雲兒張作霖が、爆彈に見舞れ、瀕死の體を病床に橫へてゐる時、彼の身許を微細に亘つて洗ひ立てることは、心なき業であるかも知れない。が彼も亦、民國戰亂史の一頁を占める男である。彼の訃を待ちながら、その生ひ立ちを回顧してやるのだといへば、彼のことだ、却つて喜んで來れるかも知れない。

○

これから張作霖の生ひ立ちを書いて行くのだが、一々張作霖と書くことは面倒だ、だから、支那流に號で勘辨して貰ふことにする。張作霖の號は、雨亭といふのである。

雨亭の先祖は、直隸省の河間府に棲んでゐた。所が、雨亭の祖父の時代＝清の道光初葉の頃＝直隸一帶に大饑饉があり、その祖父—はつきりしたことは分らないが、恐らく水呑百姓であつたらう—は飢民に落ち、煎餅蒲團一枚を擔いで、流れ〱て滿洲へ入り、奉天省海城縣の一寒村である家塋寺村へ辿り着いて、また水呑百姓となつた。その子、即ち雨亭の實父は、餘程、放縱不羈の男であつたらしく、何を調べても「博徒と草賊」であつたと書いてある。

雨亭は二人兄弟。兄の名は作相、父に似た無賴漢で、第一革命直後、二道溝邊に棲んでゐて馬賊の爲めに殺されたといふ以外は分らない。親父が草賊で賭博に耽つてゐたといふのだから、雨亭の家が赤貧洗ふが如くであつたことは勿論である。雨亭が十歲の頃、その父が病死したのだが、棺を購ふ金さへ無く、葬式一切は、張作相の家で取計つたと傳へられてゐる。

無賴漢であつても雨亭の父は一家の大黑柱であつた。その父が死んだので、雨亭の母は、二人の幼兒を擁して路頭に迷つたが、世話する人があつて、近所の醫者の所へ、連子で再婚した。母の再婚で、母子三人は救はれ、雨亭は、生れて始めて飯らしい飯を食つた譯であるが、

どうした都合か、雨亭は十六の時、養家を飛び出して、近村の宿屋の小僧に住み込んだ。

(怜悧眉敏の美少年で皆から可愛がられたと書いてある書物もあるが恐らく本當であらう)

宿屋の小僧をしてゐる時（二十才の夏らしい）日清戰爭が起つた。性來、冒險が好きであつたらしい彼は、自ら志願して、騎兵大隊長の從卒になつた。が、戰爭は連戰連敗、負け嫌ひな雨亭は、餘程癪に觸つたらしく戰爭が濟むと同時に、兵隊を廢業して歸郷した。が水呑百姓になる氣は毛頭なかつたらしく、毎日賭博に耽つたり、仲間と近村を荒し廻つて日を暮らしてゐた。その内に二十二歲の春を迎へた。この春である、彼は賭博に大敗して、動きが取れなくなり、窮した餘り、隣村の土民隊長の家の豚を二匹盗み出したが、直ちに發見され、非道い目に遭はされた。その後、暫くは、家に蟄居してゐたが、終に廣寧方面へ出奔し、馬賊の仲間に入つた。

つまり、豚二匹を盗んだことが、彼を馬賊にしたといふことになるのである。

○

決然馬賊を志した彼は、遼西馬賊の一頭目である董大虎の部下となつて、茫々たる曠野を縦横無盡に馳驅し、掠奪を逞にした。惟ふに、雨亭には馬賊が餘程、面白かつたらしい。張景惠と張作相と血を啜つて義兄弟の盟約を結んだのは、この時代であつた。

馬賊を始めて幾何もなく、彼は嶄然儕輩を拔いて一方の頭目となり、中安堡へ根據を構へ新民府一帶に出沒して掠奪の限りを盡した。

彼が第一夫人を掠奪して來たのは、この時である、ある夜部下三四十名を率ゐて新民府の富豪趙家を襲つて、前から目を付けてゐた美しい娘を盗み出し、馬に乘せて連れ歸つて自ら妻にした。つまり掠奪結婚をした譯で、この妻が産んだ長男が、張の寵愛を一身に集めてゐる張學良なのである。

雨亭の馬賊生活は、足掛九年續いた。九年目の春、時の新民府知府増韞なる者が、四方に跳梁する馬賊懷柔を企圖し、招降官撫使を雨亭の所へ派し懇々と歸順を慫慂した（ある書物には、馬賊では出世出來ないことを悟り自ら進んで歸順したとある）とも角、彼は斷然馬賊を廢業して歸順して、新民屯駐在の管帶官となり、騎兵二百を率ゐ、清朝の粟を食むことになつた。この時、彼は二十九歲。

○

彼にとつては、馬賊生活は決して無駄ではなかつた。遼西の曠野を馳驅してゐる間に、彼は機智を磨き膽略を養つた。この機智と膽略こそ、彼をして、自ら大元帥を稱する迄に大をなさしめたのである。

馬賊稼業をやつた彼は、武人として榮達せんと志し、よく努め、騎兵隊長を振出に、巡防統帶官、奉天前路巡防隊統領と進み、辛亥革命直後（民國元年）年三十九歲にして一躍して陸軍中將となり第二十七師長となつた。如何に支那でも、隨分早い出世である。

師團長となり奉天に腰を据えた後の雨亭は一言で片付ければ、權勢慾の權化である。自身の榮達と地盤の擴張に浮き身をやつし、自分の進路を塞ぐ者は片端しから攻め付けて行つた。段芝貴を逐つて、奉天將軍となつてからは、それが一層非道かつた。が亂世に覇を稱へようとする者にとつては、當然過ぎる程當然な手段なのである。

隴を得て蜀を望むは人情の常、師團長となり、奉天將軍となつた彼は、東三省の實權者たらんと慾し、先づ、腹心の鮑貴卿を黑龍江督軍に据へ、大正七年には、終に東三省巡閲使まで漕ぎ付け八年には、强敵孟恩遠を追拂つて、鮑貴卿を吉林に移し、孫烈臣を黑龍江督軍に任じ、東三省兵馬の權を完全に握つた。

この程度で、滿足して居れば、張の武運は眞に長久であつたらう、だが、彼は、決して東三省王だけで滿足して居られるような小野心家ではなかつた。東三省を完全にわが物にした雨亭は、百尺竿頭一歩を進めて、手を關內に延ばす計畫を樹てた。

九年の夏、安徽直隸の兩派が、衝突するや、直隸派に加擔して、安徽派を叩き潰して、曹錕と共に北京政局の實權を握り、その翌年には、自ら蒙疆經略使となつて、熱河、察哈爾、綏遠の三特別區を新に勢力範圍にし、彼は、滿蒙王國の主人公として納まつた。如何に慾には際限がないとはいへ、大抵ならこの邊で慾の增長を抑へる所である、がしかし、彼は敢て之をしなかつた。却つて、北京政權の獨占を企圖し十一年直隸派の驍將吳佩孚と戰を開き、その結果は慘敗となり、兵を纏めて、關外へ引揚ぐるの醜態を演じた。が彼は、この位のことには少しも懲りなかつた。北京政府から、凡ての官職を褫奪されても平氣の平左、遂に中央との關係脫離を宣言し、東三省の聯省自治を聲明し、勝手に、東三省保安總司令として納まり、吳佩孚に復讐するため、銳意軍備の充實に努めた。翌十三年、第二奉直戰の火蓋を切り、直隸派の勇將馮玉祥の寢返りによつて思はぬ大勝を博し、直隸派を潰滅し去つたのである。

○

直隸派を破つて吳佩孚に對する怨みを霽らした彼は、再び北京政局の實際上の主人公となり、得意の絕頂にある時、即ち十四年の初冬、例の郭松齡叛反事件が起つたのである。雨亭とその子學良は、殆んど死地に陷れられたのであるが、運の強い彼は、僥倖にも九死に一生を得、却つて郭軍を粉碎し、郭の首を切つて、問題を片付けることが出來た。

この事件で、雨亭は生れて始めての大打擊を受けたのである、が彼は依然として大膽であり、少しも怯む所が無かつたのだから驚く。

郭松齡叛逆の背後には馮玉祥があつた、その當然の結果として、雨亭と馮の關係が險惡となり、それと同時に、雨亭と吳佩孚との關係が好くなつて來た。そうして、今度は、雨亭と吳佩孚とが聯繫して馮に當ることとなり、馮は大勢の非を悟つて、西北國民軍總司令をやめて、露都に去り、殘された國民軍も雨亭と吳佩孚の爲めに、北京から

追拂はれ、湖北の地へ引き揚げた。

茲に於て、雨亭は、三度、北京の政權を掌握し、十五年秋、天津へ出馬し自ら安國軍總司令と稱し、十六年、春、堂々北京へ乘込み、自ら大元帥に就任し、五十四才、茲に多年の宿望を遂したのである。

雨亭本人は嘸得意であつたらう、が見物者は、大元帥就任を以て、彼の最後の華と見た。奉天派の人氣は既に低落してゐる所へもつて來て、十五年七月廿八日、堂々北伐の征途に上つた蔣介石軍は、破竹の勢で北進を續けてゐる最中であつたからである。

張作霖の大元帥は一ヶ月の夢と誰でも見當を付けてゐた。が、北伐軍の友軍である閻錫山と馮玉祥軍の、北京進擊が意外に捗取らず、南方派は長江筋で内輪喧嘩を始めなどした爲め、北伐が休憩狀態となつたため、雨亭の大元帥の壽命は、案外にも延び、六月四日、北京落ちの日まで約一ヶ年北京中南海の玉樓に甘夢をむさぼつて居られた譯である。

しかして、北京に最後の訣別をなし、殊更威儀を整へて、關外に引揚げ、再び古巢奉天城に歸らんとする時――六月四日、何者かから、爆彈を見舞はれ、列車は爆破し、彼は瀕死の重傷を受け、辛うじて私邸へ辿りついたのである。

この稿を草した日、彼はまだ死なず、――しかし、彼の重傷果して癒るや否や――

○

隨分大雜把な記述である。しかしこの程度の記述でも一代の風雲兒張作霖が辿つて來た五十四年間の足跡が大略判るであらうと思ふ。

○

病床に呻吟してゐる張作霖に代つて、五十四年間の足跡を回顧し終つた僕は、茲で鋒端を轉じ、彼の最近における風丰性格と、私生活の一端を覗いて見る。

初めて張作霖の風丰に接した者が、最も以外の感に打たれることは、身の丈僅か五尺二寸、瘦身白皙にして眼細き優男である點である。弱冠にして綠林の徒となり、遼西に勇を鳴らした男とは到底考へられぬ底のものである。眼光はやゝ炯々たるものがあるが、それとて人を射るといふ程ではなく、人と話するに際しては殆んど相手の顏を正視せず、聲も甚だ低い。一見した所、ありふれたる支那中年男。しかるに、彼の胸は機智で滿ち、大膽剛腹、人を人とも思はぬ度胸の持主なのだから驚く。

彼も支那人である。金錢を愛する點において人後に落ちず、苛斂誅求、その度なく、私財を蓄へること億を越すであらうが、よく散じ、友情に厚く、部下を愛するといふ、こゝらが張の取柄であり、今日の大をなした所以である。只彼は不幸にして貧家に生れ、學を學ばなかつた。だから、天性の俊敏を以てするも、天下の大勢を達觀することが出來ない。これ、彼が南方勢力が支那全土を風靡してゐる理由

を解せず、國民革命の標語に對するに赤賊討伐の標語を以てし隻手を以て時代の風潮をせき止めんと試み、美事に失敗した所以である。彼の周圍に智者が無い譯ではない、楊宇霆にせよ、息張學良にせよ、大勢を觀ることにかけては、兩氏に優る、しかし自我自信の強い彼は、滅多に他人の言に耳を藉さないのである。彼が退くに際して必ず、その期を誤るのは、主としてその爲めである。

彼を非常な臆病者視してゐる向が多い。妾を數人抱へてゐて、毎日その寢所を變へたり、出入に際し、人垣を造つて警戒を嚴重にしたり、列車の中へまで機關銃を持ち込んだりするのは、皆、臆病の證據となるものであるといふ。が果して、そうであらうか、僕は彼の蓄妾は、好色の結果であり、警戒を嚴重にするのは、寢所に敵をもつものの當然の措置だと考へてゐる。

張作霖が賭博耽溺者であることは誰でも知つてゐること。連日連夜麻雀に沒頭し倦むことを知らず、且つ麻雀最中には、大切な戰爭の報告さへ受け付けないといふ。彼が賭博を好んだのは、綠林時代からでその頃のある日の如きは、妓樓に遊び賭博を始め一晩に八千余元負けたことがあるが、彼は平然として毫も意に介さなかつたといふ話しがある。

○

掠奪して結婚した最初の夫人には死なれたが、彼は家庭的には極めて幸福であつた。現在、八九人の妾を養ひ、長子學良を筆頭に十人の子を持ち、學良も既に四人の子を持つて居る、權勢慾の權化の如きは彼も家庭に於ては、善良なる夫であり、慈愛深き親であり、祖父であり、門内は常に和氣靄々たるものがあるといふ。身分不相應に榮達し巨萬の富が出來て居れば、彼と雖も、申し分なき家庭人となれる譯であるが、その彼が、敵に對しては、冷酷鐵の如く、捕へれば必ず、銃殺の刑に處して晏如たるものがあるといふから、この種の人の性格といふものは不可思議である。

○

張作霖は殆んど獨力で、大元帥まで漕ぎ付けたのであつた。が、それでも彼の爲めに犬馬の勞をとつた者、相棒の役を勤めた者も少なくない。がその多くは、時代に取殘されたり、失脚したり、自然と張から離れ去つたりして、現在では、張の周圍も蕭條として淋しい。

張と最も古い友達關係をもつものは、最近、黑龍江督辦の吳俊陞と吉林督辦の張作相と湯玉麟の三人だけである。しかるに吳は、張と同車して爆彈事件で死んで終つたから、殘りは二人である。比較的新らしい相談相手は楊宇霆と王永江の二人、だが王永江は既に死去し、今は楊只一人。この外に、王樹常と張煥相の二人物があるが、この二人は餘りあてにはならない。

これ等の人々は、張作霖が生きてゐる限りは、張を離れず、張の爲めに盡して行くであらうが、張が落命した時は、果してどうなるであらうか。同じく張が落命するにしても、奉天派の勢力が隆々としてゐ

る時なら、問題は餘り六ケ敷くない。が今日の如く、奉天軍が總崩れとなり、友軍であつた孫傳芳や張宗昌の態度まで、怪しくなつてゐる大切な時に張が世を去ると、奉天派も滅茶苦茶な最後を遂げる惧れがある。

張學良が親爺の後を繼いで、奉天派の新總師になり、楊宇霆が之を守り立てゝ行くであらうとは何人にも考へられることであるが、さうなつた時に、張作相や張煥相、その他の領袖株の人々が、弱輩學良の下風に立つことを肯んずるであらうか、誰にも斷言が出來ない面倒な問題である。

奉天派の内部では、張學良と、楊宇霆等が新派、吳俊陞、張作相等が舊派と呼ばれて來た。新派が、大勢順應主義、南方派と妥協出來る組であるが、舊派は主戰論で押し通して來た、しかして、この兩派をうまく纏め、最後の決を與へて居たのが張作霖。しかるに今や、張の威力は皆無に均しくなつてゐるし、斯ういふ具合に、奉天派の前途を推想すると、心許ないことのみが浮んで來る。病床の雨亭は、これ等の問題に思ひ惱んでゐるであらう。

○

時流に逆らう者は、いつかは必ず亡びて行く。支那本部が既に、靑天白日旗で埋められて終つた今日となつては、たとへ張作霖が頑健であつても、奉天派の辿り行く運命は略々明瞭である、だから、張作霖の死去と一緒に奉天軍閥が、崩壞し、その姿を消しても一向に惜しくはないではないかといふ人が多い、が僕は左樣には思はない。

成程、支那本部は南方勢の爲めに席捲された、北京城頭にも靑天白日旗が翻つてゐる、がしかし、靑天白日旗を振り翳してゐる人々を吟味して見ると、殆んど全部が、いかものである。ある方面の爲めに、五色旗を靑天白日旗に取り替へただけの者が餘りに多過ぎる。馮玉祥と閻錫山、主としてこの二人が奉天勢を關外へ押し出した首動者であり、二人共、名前は國民黨の名簿に載つてゐる。けれ共、この二人が、果して、いつ迄、國民黨員の假面を被つてゐるか、單なる野心家蔣介石と、老獪な馮玉祥と、引込み思案の閻錫山の三人が寄つて、寄合世帶を造つて見た所で、どうせ大したことは出來ない筈だ。若しこの三人が支那人特有の權勢地盤の爭奪を始めんか、南方勢などは直ちに四分五裂の狀態に陷るに決まつてゐる。若し、南方各派の頭株連中が、靑天白日旗を、そつちのけにして再び醜惡な私鬪を始める位なら彼等よりも役者が一枚上である張作霖を生かして置き、もう一度、鹿を中原に爭はしても一興である。

○

張が死ねば、南方派のいはゆる國民國革が無雜作に實現出來ると早合點し、南方派の尻馬にのつて、張の不幸を喜ぶことだけは、差控へて貰ひたいものである！

(完、六月九日)

免震建築に就いて

岡　隆一

常に地震に脅かされてゐる我々の耳に、「地震の征服」即ち「免震建築」とは何と快い言葉ではないか。現代の建築家の進路は此の目標に向つてゐる。元來、家屋の意義は完全に我等の生命財産を保護すると共に、其の時代に於ける人類文化を永久に記念するにある。古來建築に、水上建築、樹上建築、石造建築、耐火建築、耐震建築等々あるが、皆其時代の人類の文明段階に應じて、前述の目的を達せんがために生れたものである。

此處に、私は多年の研究に疲勞した私の頭を鞭撻して、私の免震建築に關する研究を發表する。願くは益々酷烈な批評批判、並びに鞭撻と激勵を惜みなく與へられんことを！

前述の如く人類建築の進歩は我々の生命財産の確保を基調として發達したものであるが、その中耐火構造は殆んど完成の域に到達した。だが最後の問題たる家屋の耐震的方面の攻究は、未だ完成の域に達せず、總ての斯界の權威者は共同戰線上に立ちて地震の征服に沒頭し、亦總ての學者は其研究の目標を此處に据ゑて居るのである。而して在來行はれたる學說には二大潮流があるのである。

一は現今の建築界を風靡せる所謂架構構造法である。之は建物の總ての部分を完全に剛接するもの、即ち基礎より屋上に至る迄、全く一體とし、恰もコンクリートの鑄物の如く構造する方法に依つて、直正面から地震力に對抗せんとするものである。しかし本構造法に依る時は、到底理想的な耐震的建築を得られない。それは學界總ての方面に於て既に認むる所である。現在のところでは、將來起るべき地震の大きさは大體、大正十二年九月一日の程度以下と考へ、經濟上の見地より適當の條令を設けて、其の範圍に於て構造するやう法定されてゐる。しかるに本構造法に由つて完全な耐震家屋を得んが爲には莫大の費用を要し、之加大地震に對しては、壁體並びに外部仕上等に多少の損害を受けるものと豫期しなければならない。

他の一つは、所謂免震又は避震構造法である。だが、此の構造法は未だ學界の意見が一致して理想的とする工法が發見されてゐない。然

に本構造法の進歩發達の概要を摘記すれば次の如くである。

人口都市集中に伴ひ、軟弱地盤上にも設ける建築に對する必要上、先づ考案せられたものが、ローラーを使用する方法である。建物の下部を、地盤上に設置せるローラーの上に乘せる方法である。(圖表(一)參照)

次に、圖表(二)に示したるは鐵道省某技師が考案した水平スプリング式であつて、建物の各柱下を完全なる鐵板上に立て、周圍に四個のスプリングを設置し、地震の水平力を防がうとする方法である。又圖表三にある如く建物全部を完全スプリングの上に置かんとする方法である。然し乍ら以上は孰れも實際の使用に當つて非常な困難を感じたるものである。

更に一層機械的に進歩したものは地震エネルギー吸收裝置である。此の方法は多數の水壓ポンプを使用して地震の勢力を吸收し去らんとするのである。(圖表(四)參照)

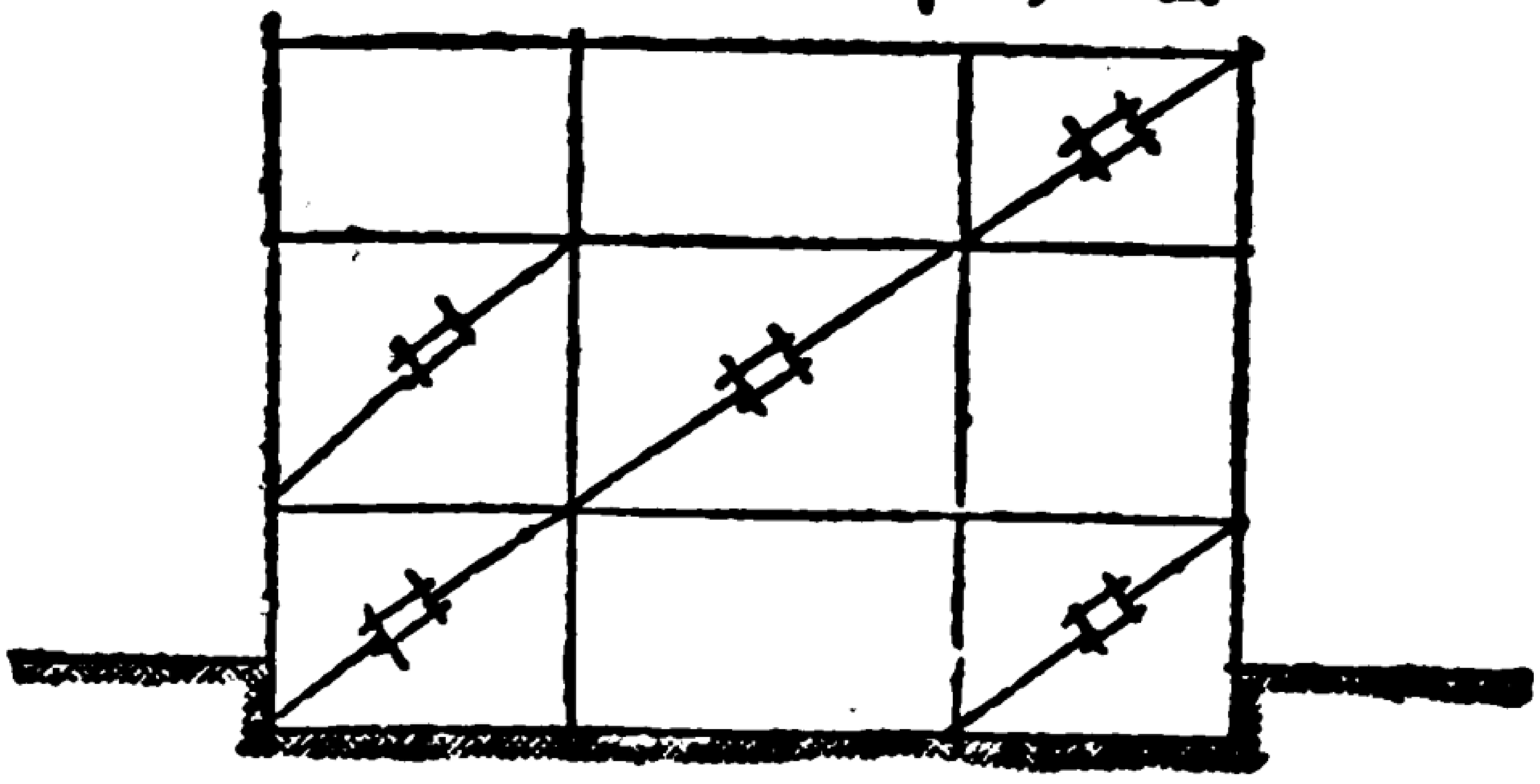
以上に列擧したものは遺憾乍ら、未だ實用化されたものは一つもない。從つて止むを得ず、今日は先に述べたる架構構造法を用ゐて建物を頑丈に作ることを主旨とするより外にない狀態である。ところが、實際に於て、地震の強さは山ノ手下町等土地の狀況に依つて異る。故に建物に由つて地盤に加はる壓力も種々異りたる形となり、設計上に施工上に非常な困難と經濟上の不利益があるに不拘、此の構造法に據るより外になかつたのであるから、一般耐震は言ふまでもなく、建築界に於ける何人も、理想的免震構造法の出現を一日も早かれと期待してゐたのである。

殊に我國は内部は勿論、周圍全く地震帶に包圍されてゐることは喋々數辯を要する迄もない。佐野工學博士の講演に由れば記錄に殘つてゐる大震災は實に三千回の多きに達し、德川幕府以來既に百萬近くの大小貧富の家屋は潰滅し、之が爲に國民の蒙りたる物質的精神的損害は實に言語に絶してゐる。

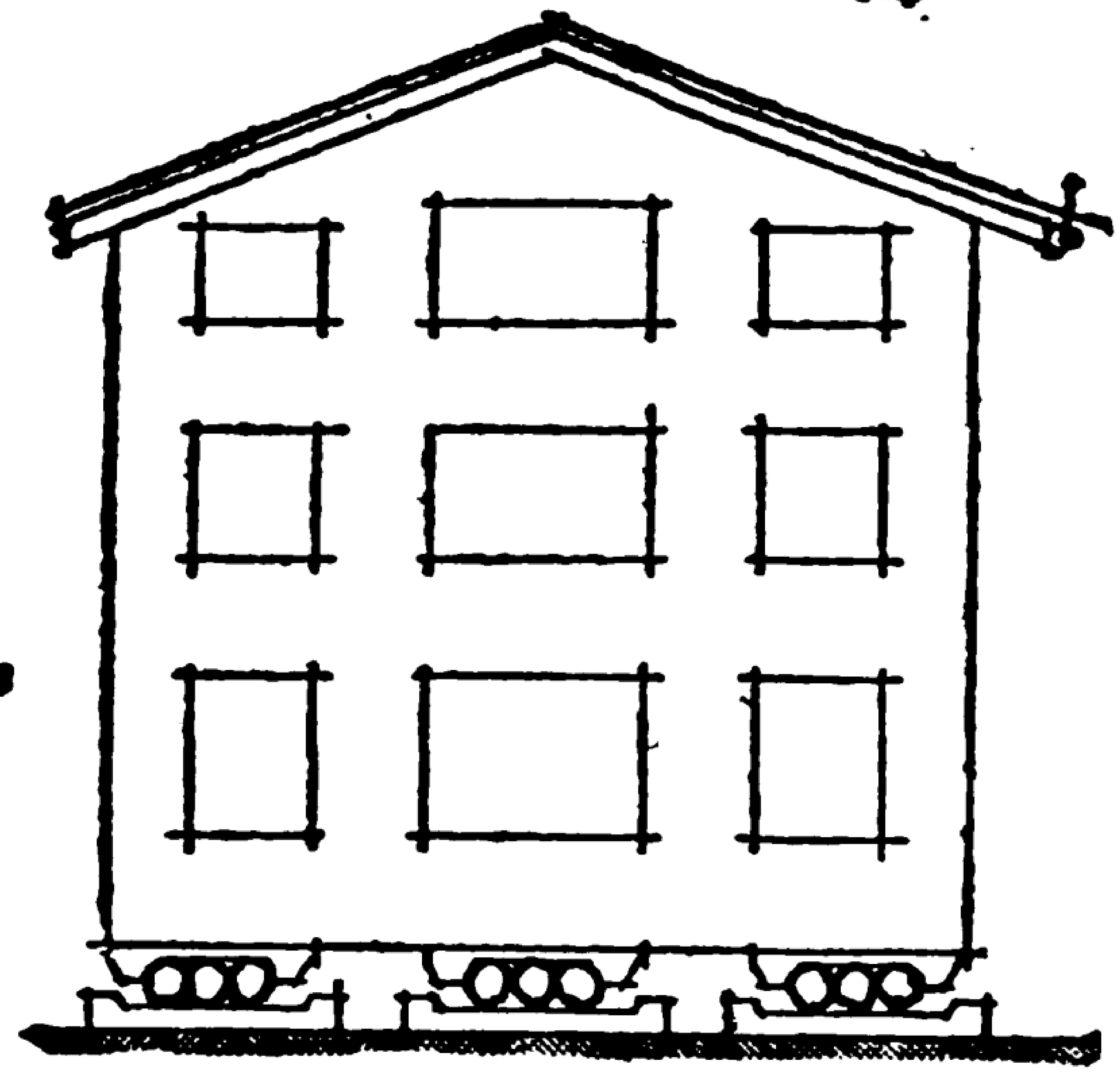
無慘酸鼻を極めたかの大正十二年九月一日の大震災を追憶すれば、轉た悽愴の感に耐へない。十數萬の生靈を失ひ、數十萬の家屋は潰滅し、失ふ處の財産七十億と云ふ夥しい犧牲を拂つた我等東京市民は更なり、我國全國民は何時か地震の征服期の來らんことを祈りつゝ、其後は勇敢にも魂打込んで、堅忍不拔の意氣を以つて復興事業にいそしみ、今や其の完成に近づきつゝある。だが悲しむべきは人間性の弱さで、震災當時の苦惱は玄米の握り飯の味と共に何時か忘れて、偸安に日を送り、最愛の子孫の爲に殘さんする大東京の建設に當つても、建設者の態度として恥づべき點の多いことは寔に遺憾である。之に反して地震の原因たる地殼の不平衡力は既に既に開始せられてゐる。復興成り美しき我等の都市が完成した曉に、再び以前にも數倍した大地震が襲來しないとは誰か斷言し得やう。而もそは何時の時、如何なる所と豫測することは出來ない。

されば百萬の富と努力とを費して孜々として築き上げたる、現代文

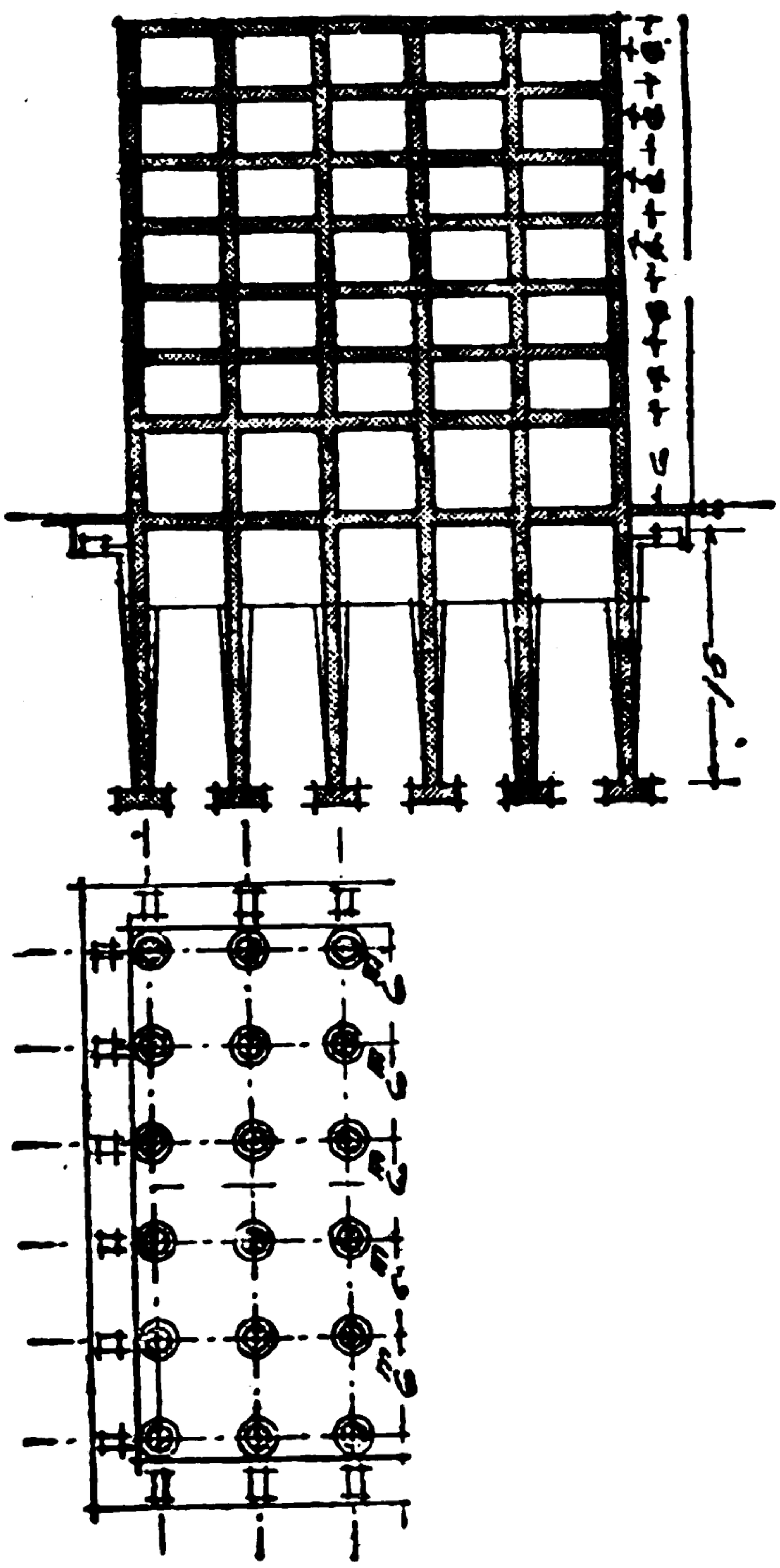
圖ノイ



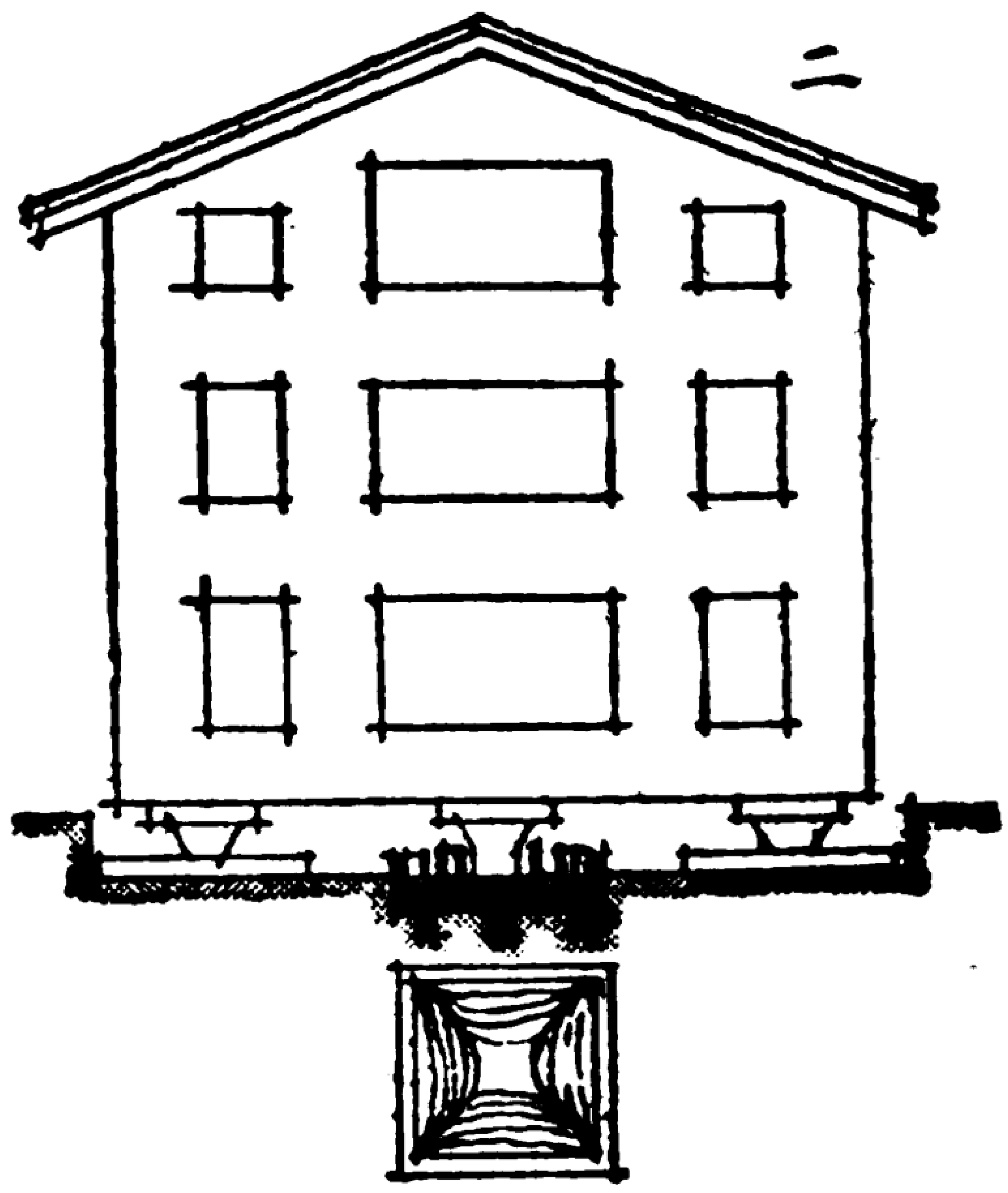
一



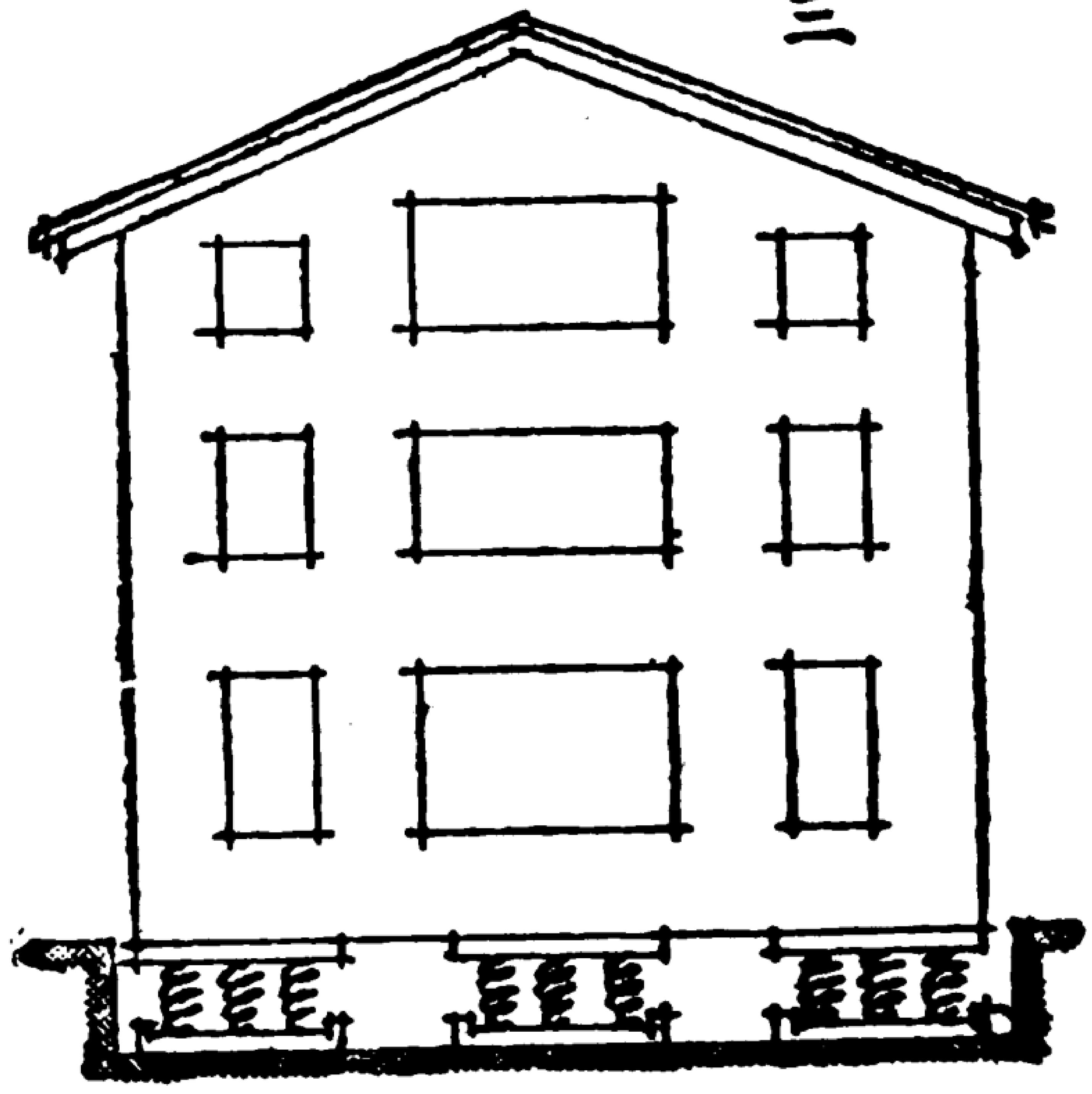
圖ノロ



二



三

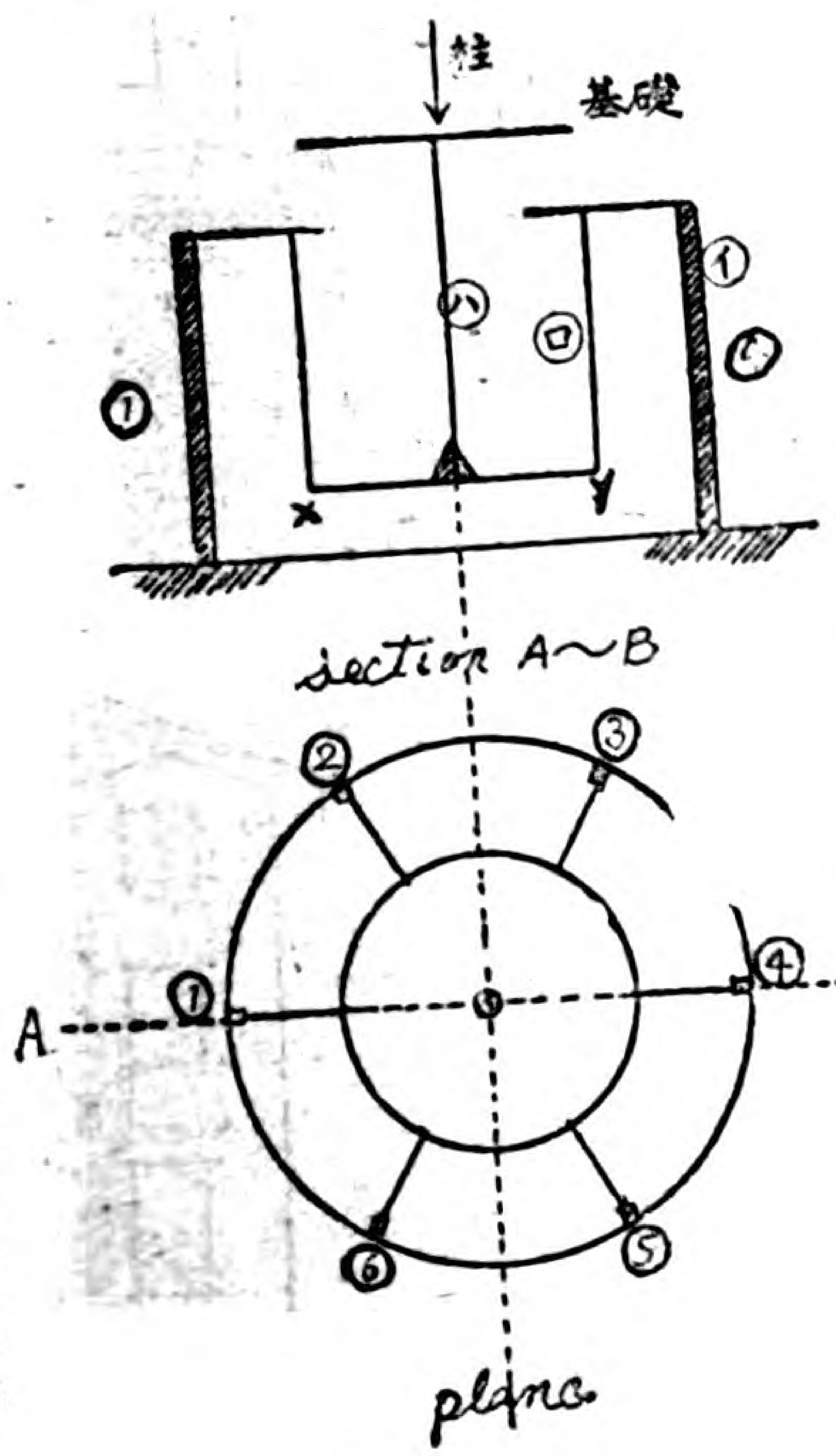


化を誇る我等の樂園は、再び一朝にして烏有に歸し、文明の美酒に醉へる我等の同胞は空しく地震の犧牲にならなければならぬ。斯くては、「地震さへなかりしならば」との繰り言は永久に斷えず、我々建築に從事する者も、事實現在の建物が希臘や埃及の建物の如く永久に存在し得べき事を明言することが出來ないのである。斯く考へ來る時、我等建築に從事する者の責務たるや、實に大なりと言はねばならぬ。今にして此の不安を一掃せざれば、吾人は安らかに地下に永眠することが出來ないではないか！

斯くて私は、麹町及牛込區役所等山手方面の建物及淀橋浄水場を始め、淺草區役所、本所深川等に在る東京市下水課各建物等、比較的軟地盤上にある實際建築設計に從事し、益々免震建築の必要を感じ來つた。加ふるに建物の敷地が追々軟地盤上に延長し行くを見て、如何にせばかかる土地に完全なる家屋即ち耐火耐震的の建築を得べきやに腐心した。結局在來の日本建築の耐震的價値の研究となり、神社佛閣さては其特殊技能を發揮せる五重の塔建築の實際調査を行ひ、床木の長さ並びに頂柱の振動に對する數字的の解釋をなし、遂に單振子の週期と地震の週期とに密接なる關係あるを發見した。又地震に當り時計の振子の止まる原理を求め、顧みて地震計の原理を研究したるとき、始めて大震災に對し殆ど學理的に地震を感ぜざる建物基礎の可能性を確信し得るに至つたのである。

即ち振子の週期と地震の週期との關係に由り、地震に際し其振動の作用を受けざる振子の玉のあるべきを想像し、斯る玉を結び付けたる平面上に建物基礎を置けば、其基礎は地震の影響を受けざる理なるに由り、此處に多年懸案とされたる免震建築に近き建築法を摑み得たるが如き感あるにいたつた。

即ち次に示すは本免震基礎の原理であつて普通總てを鋼鐵製にして、(イ)は中空、上端下圖に示す如き圓筒形、(ロ)は振子の糸に相當する棒XYは振子の玉を連結する圓板、(ハ)は此圓板上に立てられたる支柱で建物の基礎を受けてゐる。是を實際圖に示す時は、次の如くなる即ち周圍を全く鐵筋コンクリートを以て被覆し、内部空間は總て防錆油を充滿し以て耐久的たらしめ、構造頗る理論的なるを以て、普通住宅建



築より高層建築に至る、如何なる建物をも支へ得べき強度を有してゐる。其の上、簡單なる機械裝置なるを以て故障の起ることなく貴重なる我等の生命財產を保護し永久に存在出來る家屋記念館の基礎として、不都合なきものと信ずるのである。

此處に特記すべきことは、本器は其原理に於て振子及地震の兩週期間の相對關係に由りて生ずる不動點を利用せるものであつて、絕對的に何如なる震動をもたらさぬと云ふ意味ではない。否勿論特別の場合、即ち振子の長さ十分長きときは、殆と如何なる振動もなさずして、積木細工の如き建物も其上に於ては全く免震的たり得る。普通建築物に於ては地震とは無關係に、風壓の心配をしなければならないのであつて、たとへ地震に對しては如何なる微動だも感じない建物と云へども、風壓にあひて忽ち崩壞するが如き建物は實際あり得べからざるを以て、地震の有無に不拘建物は相當の風壓に耐えるやうにしなければならぬ。故に一般の場合、建物は風壓に對する強度を有するを以て、之と其結果に於て殆と等しと見らるゝ振動に對しても、相當の強度を有する。之即ち地震よりも風壓のみを考慮して、強度設計を行ひたる建物が良く小地震に耐ゆる理である。此風壓に對する建物の強度を利用するときは、振子の長さは比較的小なるもの、即ち短き免震基礎によりて良くあらゆる場合の地震を防ぎ得るものである。

換言すれば莫大なる震力を有する地震は、本機によりて之を避け、弱き即ち緩漫なる地震動は本機に依らずして建物自身の強さに於て耐ゆるものである。是れが最も經濟的なる場合たりと云はねばならぬ。此場合を求むるは純數理的であつて頗る煩瑣なるが故に其攷究は此處に省略するが、要するに本機の大さが左程大たるものとならずして、優に如何なる地震をも免れ得る事を證し得るのである。

今本機械の固有振動週期を四秒半とすれば、次に示す東京に感じたる地震の何れをも感ぜざりしことになるのである。

東京ニ感ジタル地震ノ主ナルモノ

年月日	震源地	最大水平全振幅	全週期	最大水平加速度	主要波數
明治27.6.20.	東京灣	73.0m.m.	1.8sec.	444 $^{mm}/_{sec^2}$	1個
大正10.12.8.	霞　浦	36. m.m.	1.7sec.	216 $^{mm}/_{sec^2}$	1
11.4.26.	浦賀水道	67. m.m.	2.0sec.	330 $^{mm}/_{sec^2}$	1
12.1.14.	霞　浦	21.4m.m.	1.3sec.	250 $^{mm}/_{sec^2}$	1
12.9.1.	相模灣	88.6m.m.	1.35sec.	370 $^{mm}/_{sec^2}$	3以上
13.1.15.	相模西國境	63. m.m.	1.8sec.	383 $^{mm}/_{sec^2}$	3以上
昭和3.5.21.	江戶川				

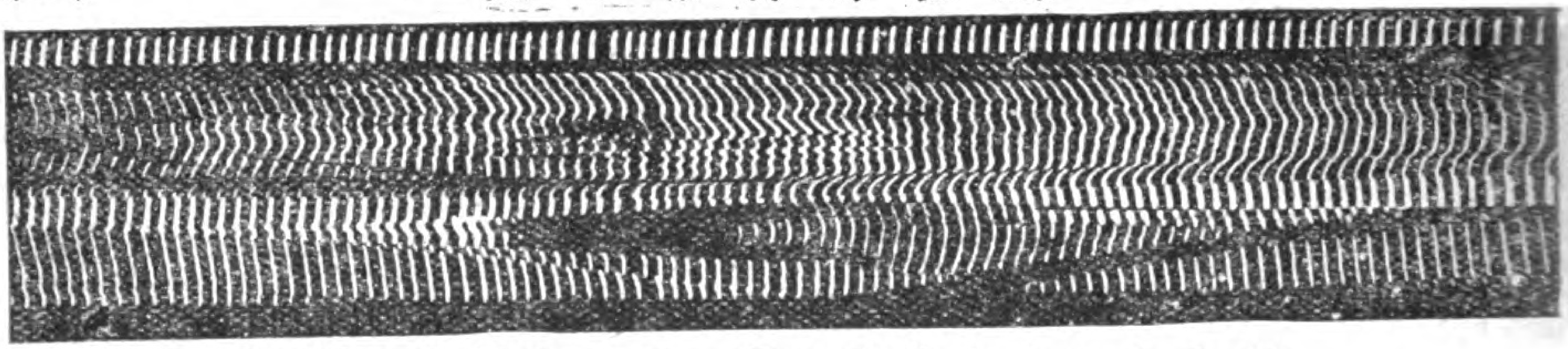
然し乍ら實際に於ては、從來我々建築家のあまり意を用ゐなかつた種の緩やかなる地震ありとせんか、其等の地震に際しては、建物が風壓に對する強度あるを以て、機械の作用に待つ迄もなく、建物地盤と共に動

いて差支なきことわりである。

更に進んで、國際經濟の見地より論ずれば本機を使用することによつて、從來の如く、地震力に對して大架裟な構造をする必要なく、其工費を多分に節減し得ると同時に、非常の場合に際して、人心の安定を保し得るから、大正十二年の大震火災の時の如く、衆人環視の中に徒らに都市の燒失を見るが如き事なく、低廉なる費用を以て、將來起り得る殆ど如何なる地震をも征服し得るのである。全く國家としての大損失を救ひ得べく、更に將來大都市の延長せんとする低地、例へば東京に於ける下町龜戸、玉の井、洲崎埋立地を始め、芝浦、大森、蒲田等軟弱地盤上に於ては、現在豫想せる以上の地震が襲來する恐れ十分あるがために、現在の構法では十分完全なるを得ない。然るに、本機を用ふれば、斯る地盤上に於ても殆ど完全なる建物を、大體同費用以下にて建設し得べく、更に水害を慮り盛土を以て地上げしたる場所などに於ても、本機の如き構法を用ゐなければ、完全たることを得ない。本機を用ふれば、安心して十分なる盛土を行ひ其上に完全建物を建設し得ることになる。以上略々述べし所は本機大體の概念であつて、これを數理的に論ずるときは甚だしく專門的に傾くから、以上の説明を以て止める。本機の實用化並びに民衆化は、實に懸つて讀者諸君の革命的事業に對する綿密なる批判と熱烈なる後援に待つこと多大なるべきを信じ、不肖を省ず、靦面もなく、本稿を草したるものである。

昭和三年六月三日

附記　本考案の一度傳はるや都下の新聞紙は競つて其紹介の勞をいとはず、更に感謝に耐えざるは高橋醫學博士を始め、明治病院八尾枝博士、遠くは名古屋市、北海道札幌市等より早速の共鳴に預り、其他多數の實地應用の希望者を得たるは實に欣快の至りに耐えない。之に益々力を得、完全なる實驗を計畫し、其實用化に、猛進努力を吝まないものである。



（フイルムより曲率を變へつゝ引伸した陽畫）

立體寫眞像の話

盛岡勇夫

立體寫眞像の製作方法は寫眞の方法で被寫物と其儘の大小自由なる相似の立體像を造るものであつて、從來ある人の彫塑像を造るためには塑像家のモデルとなつて塑像家の手に依つて出來上つたものである。そのもの、即ち塑像を、光線、レンズ、フイルム、藥品、機械等の理化學的機能のみに依り、一切の彫刻的手法を用ひずして容易且敏速に完全なる酷似像を製作する方法である。

以下製作順序を簡單に說明する。先づ撮影室には撮影機と、撮影機と連動裝置にある廻轉盤上の被寫人物の掛ける椅子と、光線放射機とがある。其の各の位置は凹凸面を適當に撮影し得る角度に、即ち椅子に掛けた被寫人物の定められたる中心に對して三十度の角度に撮影機と光線放射機とが置かれてある。

椅子に掛けた被寫人物の位置がきまると、光線放射機から人物の定められた中心に向つて、垂直に一本の細い紫光色の光線が放射される。

それを眞横から見れば被寫人物の半面が全く相似の曲光線となつて現はれる。

撮影進行と同時に連動裝置にある椅子は、一廻轉約五秒の速度で回轉を始める。放射された一本の光線は常に一定の個所に當てられて居る故、人物の廻轉に從つて鼻、目、頰、耳、後頭部と順次に全表面の曲線を現出する。それを撮影機は撮影しつゝ被寫人物が一廻轉すれば即ち五秒間で撮影は完全に終了する。

撮影されたフイルムが現像されると、約五百本に分解された、三十度から見た被寫人物の曲線の並例が印畫されて居る

次にそのフイルムは註文の寸法に、例へば等身大にもそれ以上にも、或は三分の一大にも自由の寸法に引伸し得ると同時に、三十度の角度で撮影されたものが、眞横から見たと同樣の相似の曲線に、即ち九十度の角度に整形される特種の裝置が施された引伸器にかけられる。

引伸されたプロマイド陽畫は、直ちに薄い亞鉛板に張り、寸法の大小に依り特種のミシン、或は腐蝕劑に依つて曲線に從つて正確に迅速に切斷され、約五百枚の完全なる横顏（プロフイル）を表はした薄亞鉛板が作り出される。

右亞鉛板を撮影の際光線で分解したと同樣に中心を定めて切斷面を表面に數學的基礎ある一定の間隔に放射狀に並列綜合しパラフイン溶液で固着させれば原型としての酷似立體像が出來上るのである。原型よりは從來の方法に依り石膏型を作り銅にても、金銀にても希望の材料で鑄造され外觀に於て從來の塑像と同一で而かも實物と寸分違はぬ酷似さを持つ我が立體寫眞像が出來上るのである。

以上製作に要する時間は、撮影より出來上り迄に約一週間の短時間で足り、人物撮影時間即ち從來のモデルとなる時間は僅々五秒であり、最も表情特徴を有する顏面部は一秒半位に撮影し終るのである爲に如何なる瞬間的の表情も容易に正確に寫し出されるとは他の全く追從を許さぬ特色であり、本原理は今後廣汎の應用の途を有して居ることゝ考へられる。

全日、日本兩農民組合合同大會を終つて

淺沼稻次郎

○

全國農民戰線統一の前提とし、全勞農政黨合同の根幹として、全日本農民組合、日本農民組合は一切の行懸り、感情をすてゝ、戰線統一の爲に全國農民組合を結成す。

○

昨春の金融恐慌以來、支配階級の彈壓と搾取は熾烈を極め、都會に於ける所謂、産業の合理化政策は賃銀値下、勞働時間の延長、解雇、失業となつて現れ、農村にあつては、立毛差押、立入禁止の猛襲、土地會社に依る土地の收奪となつて、無產大衆の生活の最底線迄をおびやかすに至つた。之に對抗せんとする一切の大衆行動は禁止され、府縣議戰、更には光輝ある可き、普選は殆んど、言語に絕する、資本家と地主の反動政府の干渉と、、、と暴壓の爲に、、、、と化し、それは香川、足尾、野田、に於ける農民組合、勞働組合のたゝきつぶしとなり、遂に三月十五日の日本共產黨の大檢擧となり、大衆政黨たる勞働農民黨その他二團體は解散を命ぜられた。

此の如き反動治下に處し、地主、資本家の政府の暴壓に抗する道は他にない。然も幾度か勞農政黨の合同、戰線の統一は論議されたが實現は仲々困難の狀態におかれて居る。

○

農民戰線の分野に於ては、今を去る七年前（大正十一年四月九日）神戶市に於て日本農民組合が結成されて以來、その運動は燎原の火の如く發展し、全國を通じて支部旗のひるがへらざる縣は熊本、沖繩、長崎、石川の數縣に過ぎざるに至つたが、無產政黨結成途上に於て、政黨運動に關する意見の相違より、第一次分裂（山梨縣聯合會の脫退—全日本農民組合同盟の成立）、第二次分裂（堅實派幹部十二名除名—全日本農民組合結成）が行はれた。

此の分裂亦分裂に依る鬪爭力減少は、農民組合運動の不活潑な狀態を生じ之に加ふるに資本家、地主の政府の分裂政策、立禁、立毛差押の猛襲、地主、、、、、、の完全な共同戰線、小作調停法に依る組合撲滅策、府縣議戰、國會議員選擧に於ける失敗等は、大衆自身をして過去の運動を批判せしめ、即時農民戰線の統一、新運動方針の確立を叫ばしむるに至つた。

此の大衆の要求にそふ可く、三月十五日、全日本農民組合、日本農民組合、全日本農民組合同盟の合同懇談會が大阪に開かれ、更に中部農民組合、日本農民組合總同盟を加へて四月五日六日中ノ島公會堂に全國農民團體合同の爲の協議會が開かれた。此の全國農民大衆の要望をになつた協議會も有實、分裂主義者の申合事項蹂躪、農民は農民黨へのスローガン固守の爲に、日本農民組合、全日本農民組合の代表者が農民の利害の上に起つて過去の苦き幾多の經驗に依つて、共同の利害の爲共同の敵にあたる爲、合同實現に努力した效もなく協議會は決裂するに至つた。

けれ共農民大衆の戰線統一に對する要求は益々熾烈となり、統一派として立つ日農、全日の大會に於ては此の戰線統一に關する建議案を採用し、四月廿日廿一日大阪に開かれた日農の大會に於ては、

『農民鬪爭の即時合同』

四月廿五日全日の大會に於ては、

一、農民組合の單一結成に依つて地主との闘爭力増大をはかること。
二、農民組合は各無産政黨の組織的基礎であるから、農民戰線の統一は無産政黨合同の最大根幹たらしめねばならぬ。

を議決し、大會直後の兩組合の中央委員會は先づ全日、日農の合同より、全農民戰線の統一に進む可しと決定し左の合同委員を選任した、

日農側、山上武雄、小岩井淨、渡邊茂一郎辻本菊次郎、前川正一。
全日側、吉岡八十一、河合義一、須永好、野口龍三、三宅正一、川俣清音、宗道太、淺沼稻次郎。

全日は五月四日、日農に對し合同の爲の懇談會を持つ事を提議し日農の快諾に依つて五月十日、十二日に亘つて合同の爲の懇談會が、全日本部に開かれ、

一、合同實現に依つて戰線の分裂的傾向を打破すること。
二、合同を通じて新運動方針の確立を期すること。
三、政黨問題に就ては無産政黨合同實現迄は何れの政黨とも支持關係を結ばず、但し個人の政黨加入は自由。

以上の三點に就て意見の一致を見、直ちに組織及統制方針、新運動方針、人事等に就て討議し大體大綱を決定して第三日目には懇談會を直ちに合同準備會に變更し、五月廿七日、大阪中ノ島公會堂に合同大會を開催するに至つたのである。

○

大會は日農、全日所屬の各聯合會から集る代議員百五十餘名舊全日本農民組合同盟會長高橋龜吉氏外友誼團體傍聽者三百餘名合せて五百有餘、實に近來にない盛大な、力強い會合となつた、會合は準備委員會に依つて司會され型の如く議長副議長選擧、議長挨拶、書記及各種委員任命經過報告、祝辭、祝電の披露と進んだが、友誼團體の祝辭は之すべて戰線の統一、全日、日農の合同をして無産戰線統一の根幹たらしめよと叫ばれ、全國から嵐の如く、來た祝電は之亦すべて戰線を統一せよ！　勞農政黨の合同といふ文字で埋められ、大衆が如何に合同と統一を要求し、如何に過去一ケ年有餘の對立分裂抗爭が無駄なりしかを批判しつゝある事を如實に示した。

斯くて綱領主張、規約、宣言を可決し、新運動方針を中心に活潑なる討議が行はれ次の如き運動方針が採用された。

一、組合内部にあつては
1、集中組織を確立して地方分權に陷せんとする傾向を打破し、然も地方の特殊事情を尊重して機械的統制の弊を避くること。
I、總本部を充實し、各聯合會の運動を指導し、各聯合會も亦本部指導の下に活動する様組織を充實すること。
II 統制委員制を採用し組合の統制を完全に保たしむること。
2、日常闘爭を激發すること。
I 日常闘爭を通じて組合支部の再興と未組織大衆の獲得に努力すると共に組合員の教育につとむること。
II 農民の自然發生的要求をとりあげ、農民の初歩的要求の爲の運動を積極的に展開し、實際の行動に依つて大衆に訴へ、實際の行動に依つて大衆の信頼を得ること。
III 地主階級の攻勢、低騰、捲來に對しては爭議方針を確立し機敏なる戰術を以て勇敢に抗爭すること。
IV 立毛差押、立入禁止反對の爲の大衆運動を組織すること。
3、農民組合を小作爭議の一時的機關に終

らしむることなく、不斷の教育に依つて組合員の定着をはかり、眞實の農民階級の組織たらしむること。

二、政治運動の領域に於ては、

1、耕作權確立運動。

2、自作農創定及小作調停法に依る支配階級の僞瞞政策の曝露。

3、農民運動暴壓令撤廢の爲の鬪爭。

4、政黨と組合の關係を規定す。

I 一般的規定

イ、組合と政黨を截然と區別すること。

農民組合は主として農民大衆の經濟的利害の爲の鬪爭の機關であり、無産政黨は被壓迫民衆の政治的日常鬪爭の機關である。勿論兩者は相依り相扶けて無産階級運動を進展せしむべきであるが兩者の組織任務の混合を避け截然と區別しなければならぬ。

ロ、農民組合の組織形體に依る政治鬪爭は無産政黨の政治鬪爭と結合する事に依つて全無産階級的政治鬪爭となり得るのであるが、農民組合の政治鬪爭はその經濟鬪爭の發展の結果としての鬪爭であつて組合の立場よりする政治鬪爭は一定の限界、任務が明かにされねばならぬ。

II 當面の規定

イ、無産政黨の合同に對しては之が促進に努力すること。

ロ、無産政黨の合同實現迄は組合全體としては何れの無産政黨とも支持關係を結ばず、但し個人としては何れの政黨にも加入の自由を認む。

三、戰鬪的都市勞働者の運動に信頼し、政治的にも、經濟的にも、日常鬪爭を通じて緊密なる連絡を保ち、支配階級の農民と勞働者の分離政策に抗すること。

四、金融資本家及商工資本家の搾取に對抗する爲に協同組合運動に進出し、

I 階級的消費組合の組織。

II 地主及中農の組織し來た現在産業組合内部に無産農民の指導權を確立すること

五、地主との鬪爭力增大の爲に全國農民團體の單一結成に努力すること。

その他、農民團體合同に關する件、立入禁止反對運動に關する件、徽章制定に關する件、機關紙に關する件等を可決して新役員を決定し、新任委員長、杉山元治郎氏の發聲にて全國農民團體萬歳を三唱して大會を終つた。

○

全日、日農の合同は二組合の合同であつて全農民戰線の統一ではない。然し舊全日同盟會長高橋龜吉氏が三月十五日の三團體申合事項を守つて全日同盟を脱退し參加せるは、右翼農民團體合同の失敗と共に、農民は農民黨のスローガンの如何に空虚なものであり、右翼幹部指導下の大衆の成長を示すものであり大衆の戰線統一に對する要求の熾烈を示すものである我等は此の二組合の合同を全國農民團體合同の端緒たらしめ更に個々分裂せる、無産政治戰線統一の根幹たらしめねばならぬ此處に全日、日農兩組合の合同の重大な意義がある。そして全國農民組合當面のスローガンは、

一、更に全國農民戰線の統一へ!!

一、勞農無産政黨の合同へ!!

でなければならぬ。

光榮ある戰線統一の歷史的大運動は、先づ農民組合合同運動に第一歩をふみだしたのである。農民組合は嘗つて單一無産政黨結成途上に於て赫々たる歷史を有して居る。然も今戰線統一運動に巨大な一歩をふみ出したのである、全國農民組合の使命や重大である。筆者は舊日農の前川正一君と共に今その運動の渦中にある、果してその任にたへ得るや自から疑ふ。只管大衆の支持と應援に依つて全國農民組合が此の歷史的使命を果たさん事を願ふのみ。（五月四日全國農民組合總本部にて）

漱石の思ひ出（十）

夏目鏡子述
松岡譲筆録

四十四　博士號辭退

退院をしやうといふ間際になつて、たしか二月二十日のことだつたと覺えて居りますが、自宅の方へ文部省から手紙が參りまして、明日の午前十時に學位の授與があるから通常服で出頭せよ、若し差支があれば代人を差出せといふ達しが參りました。突然のことですから、私にはつきりどうしたらい丶のかわかりませんので、ともかく電話をかけて指圖をうけやうと思ひまして、いつもお電話を拜借する御近所の山田三良さんのところへ參りました。

夏目も私から文部省の達しの話をしますと、いづれかういふことは人の內意を聞いてから、欲しいと思ふ人にはやるし、欲しくない人には、本人の意志を無視して迄やらうとは言はないのだらうから、一應の自分の內意を聞いて見る爲めに出頭しろといふのだらうといふ風にとつたらしいのです。そこで私から言つて來て居るのだから、とにかく入院中であつて見れば、ともかく森田さんでも賴んで代人を出しませうかと申しますと、それもい丶だらうが、それにしても此方で欲しいやうな挨拶をさせてはいけないよといふ電話の返事でありました。

するとその電話を聞いてられた山田さんが、あ丶は言つて來るものの、正直に代人なんか出さなくとも放たらかして置けば、文部省から屆けて來ますよといふ先刻御承知のお話なのですが、私もさう迄言はれても、さうでございますかと言ふ位でやつぱりはつきりわかりませんでした。すると代人を出すも出さないもないうちに、ちやんとその證書と申しますのか何と申しますか、ともかく文學博士にしたといふ學位記とかいふものが紙函入りで屆いて居るではございませんか。それで森田さんに手紙を書いて代人をお願ひしやうといふのもおぢやんになりましたが、さて納まらないのは夏目の腹でございます。

元々一應此方の內意をたしかめて、受けるといへばくれるものと思

つてゐたのに、いきなり欲しいとも思はず、寧ろ邪魔臭いと考へてゐるのに、斷はりなしに押しつけて、其上出頭しろ代人を出せと言つておきながら、此方から出頭もしないうちに屆けてよこす、當事者夏目の氣持に反して居りますので、こんなものはいらないから返りかへせといふことになつて、自分で當時の文部省專門學務局長福原鐐二郎さんにあてゝ手紙を書き、さうして同時に證書も病院から返送して了ゐました。當時相當噂に上つた博士辭退問題といふのがこれでございます。

これについては自分は至極當然な當た平凡たことをやつた積りだつたのでせうが、世間で騒ぐので、そのいきさつなどを書いたり話をしたりしてゐるのがあつて、それで識くされてゐるとは思ひますが、今も自分の手文庫の中に當時の文部省關係から來た達しや手紙、それから自分で書いて出した手紙の控しや原稿などが保存されてありますから、こゝへ原錄して見ませう。

まづ文部省專門學務局長福原鐐二郎氏から二月二十一日午前十時に學位授與に付出頭の達しがあります。それについての辭退の手紙の原稿があります。

拜啓 昨二十日夜十時頃私留守宅へ(私は目下表記の所に入院中)本日午前十時學位を授與するから出頭しろと云ふ御通知が參つたさうであります。留守宅のものは今朝電話で主人は病氣で出頭しかねる旨を御答へして置いたと申して參りました。

學位授與と申すと二三日前の新聞で承知した通り、博士會で小生を博士に推薦されたに就て、右博士の稱號を小生に授與になる事かと存じます。然る處小生は今日迄たゞの夏目なにがしとして世を渡つて參りましたし、是から先も矢張りたゞの夏目なにがしで暮したい希望を持つて居ります。從つて私は博士の學位を頂きたくないのであります。此際御迷惑を掛けたり御面倒を願つたりするのは不本意でありますが右の次第故學位授與の儀は御辭退致したいと思ひます。宜敷御取計を願ひます。敬具

二月二十一日 夏目金之助

專門學務局長福原鐐二郎殿

それから四月になる迄文部省からも何とも言つて參りません。この手紙の返事が來たのはやがて二ヶ月も過ぎて四月十二日附の福原さんの御手紙です。

復啓 二月二十一日付ヲ以テ學位授與ノ儀御辭退相成度趣御申出相成候處已ニ發令濟ニ付今更御辭退ノ途モ無之候間御了知相成度大臣ノ命ニ依リ別紙學位記御返付致候此段申進候 敬具

それに對する夏目の返事に

拜啓　學位辭退の儀は既に發令後の申出にかゝる故、小生の希望通り取計ひかねる旨の御返事を領し再應の御答を致します。

小生は學位授與の御通知に接したる故に、辭退の儀を申出でたのであります。夫より以前に又辭退する必要もなく、又辭退する能力もないものと御考へになられる事を希望致します。學位令の解釋上、學位は辭退し得べしとの判斷を下すべき餘地あるにも拘らず、毫も小生の意志を眼中に置く事なく、一圖に辭退し得ずと定められたる文部大臣に對し、小生は不快の念を抱くものなる事を茲に言明致します。

文部大臣が文部大臣の意見として小生を學位あるものと御認めになるのは已を得ぬ事とするも、小生は學位令の解釋上、小生の意思に逆つて、御受けをする義務を有せざる事を茲に言明致します。

最後に小生は目下我邦に於る學問文藝の兩界に通ずる趨勢に鑑みて、現今の博士制度の(は)功少くして弊多き事を信ずる一人なる事を茲に言明致します。

右大臣に御傳へを願ひます。學位記は再應御手元迄御返付致します。

敬具

四月十三日　夏目金之助

――――――殿

文部省の返事。

學位辭退ノ件ニ付四月十三日付御書面ノ趣了承致候、貴下ノ御意思ニ相背候段遺憾ニハ候ヘドモ右ハ學位令ノ解釋上辭退ノ途無之モノト省議決定致候次第ニ付不得已義ト御承知相成度尚學位記ハ更ニ御返戻相成候處辭令書ヲ受領セラルルト否トニ拘ラズ發令後ノ今日ニ於テ貴下ハ已ニ文學博士ノ學位ヲ有セラルルモノト認ムル外無之候、就テハ學位記ハ更ニ御送付可致筈ニ候得共再應御返戻相成候コト故御送付ノ義ハ此際見合當局ニ於テ保管致置候間御承知相成度右大臣ノ命ニ依リ重テ申進候也

明治四十四年四月十九日　文部省專門學務局長福原鐐二郎

夏目金之助殿

手紙の交渉はこれで一段落ついて、つまり物わかれになつたわけで、自分はたゞの夏目金之助の積りだし、文部省の方では文學博士夏目金之助といふことになつたのでございませう。學校の教師をして居りませんので、自然其後文部省との交渉もなく、この文學博士もその後役立ちもしなかつたやうでございますが、亡くなつてからなど、日本博士録とか何とかいふものを作るから、文學博士夏目金之助の略歴を知らせてくれろなどゝ、物好きなことを言つて來た方もありましたが、今でもかういふ博士號のついた夏目云々には一切相手にならないことに致して居ります。

この最後の手紙の往復のあつた前日の日附で、どこかへ發表する積りで書いたらしい原稿が殘つて居りますが、其日でしたかに芳賀博士

あたりおおいでになつたり、福原さんがお見えになつたりしたのでせうか、書いた切りで發表しなかつたやうでございます。當時の經緯がわかるやうに思はれますので、少々くどいかも知れませんが、こゝにのせます。

學位授與の問題が大分八ヶ間敷なつて居る。學位を與へやうとした人々の書見が好意に出でたのであると云ふ事は勿論の事である。

とはいへ世間が一般に名譽と思ふものであるからと云ふて推辭した人々の了見が好意に出でたのであると云ふ譯で、受けない方が無理だと論ずるのは餘りに單純である。

親切は押し賣をすべきものでない。押賣をすれば既に親切と云ふ事は出來ない。

學位を與へるのは命令であるとか、與へられる者は之を受けべき義務があるとか云ふのは俗論である、屁理窟である。

學位を與へるのは名譽の爲だと云ふならば無理に與へねばならぬ理由はあるまい。官職さへも強制せぬのである。名譽を強制する理窟は到底發見するとか出來ぬのである。

與へると云つたら喜んで受けるだらうと思つたのは、思つた人の誤りである。謂はゆる己を以て人を量つたものである。手前の手落の爲めに人に迷惑をかける理由はあるまい。

學位に頓着しないで獨り自ら高うする者があると云ふのは、國家の體面に關する事ではあるまいか。

與へやうとした相手の意志に背き、受けたくないと云ふならば、愈よ先きの決定を取消せば夫で濟むのである。餘り當局に考へるから物事が面倒になるのである。餘に語らぬ問題と自分は考へる。

この博士辭退については、隨分世間でいろ〳〵と取沙汰をしたやうでした。痛快がつて漱石は漱石だなどといつて來られる方もあれば、つむじを曲げたのひねこびれてゐるの、貰らつておいたつて何になるものぢやなしの、賣名だらうの、結果はこの方がかへつて器量を上げたのと、いろ〳〵勝手な說をなす方々があつたやうでございますが、世評はどうあらうと、平常から博士が嫌ひだつたことをよく知つて居りますので、私たちは別に何とも申しませんでした。自分でもあたり前のことをあたり前にしたのだと思つてゐるのでせうから、誠に評が喜ぶ沙汰になつてからといふものは、なほ更のこと何のかんのと私などに迄とやかくこの事で申したこともございませんでした。それでもそんな眞意のわからない親類のものなどは、やつぱり博士を大層な名譽と心得てゐるのですから、自分ではいらなくても、子供たちの名譽の爲めに貰らつておけばいゝのに、金ちやんはすね者だからなどと惜しがつてゐた者もありました。ともかくこの問題については、文部省のやり口を面白くなく思つてゐたのは事實でございます。

四十五　良寛の書など

この修善寺で大病を致します前に、朝日新聞で懸賞小説の募集をしまして、幸田露伴さんなどと御一緒に選者に頼まれました。二三篇は義理堅く讀んだやうでしたが、どれもこれも大したものでもなく、又大したものもありさうにもなかつたのでせうし、其上丁度病院通ひをしてゐる矢先で、とても自分で悉皆目を通すことも出來ないし、又それ程の必要もないと思つたのでありませう、代理を森田さんに頼んで修善寺へ參つて了ゐました。さうして修善寺ではあのやうな大患にやられて、結局森田さんに前以てお願ひしたのがよかつたやうなわけでございました。

その賞金が一等三千圓かでしたので、冗談に私が森田さんに、そんな選者なんかして居るより、御自分で懸賞して三千圓お取りになつたらいゝでせうにと申上げたものです。すると森田さんが、そりや懸賞作品が皆下手で、そのうちの上乘なものでも、あんなものならいくらでも書ける自信はあるが、しかしいくら匿名にしたつて先生には僕の書いたものだつてことがすぐわかる。わかれば先生といふ人は、自分が選者をして居つて、自分の門下生を當選させるなどといふことはてんから嫌ひで、殊に門下生には全く皮肉な程片意地なんだから、よし一等の實質があつてもわざ／＼二等にするし、二等たつたら落選にするにきまつてる。だからてんでだめですよ、融通がきかない程公平過ぎるんだから、と笑つたことがありましたが、全くさういふ點はそのとほりで、世話する時は随分世話はしますが、あるべきところには全く潔癖な位厳格だつたやうでございます。

ところがこの懸賞作品のうちで、一等に値するものがなく、田村俊子さんのものがわづかに二等に當選致しました。幸田さんのつけられた點も森田さんの點もほゞ同じ位で、兩方共つまり同意見だつたわけです。すると程へて田村俊子さんが宅へ御禮に見えました。何でも秋の頃だつたと覺えて居りますが、丁度胃腸病院に入院してゐた時なので、私が玄關でお會ひして、折角ですが今入院中だといふことを申しました。尤も其時改まつての御挨拶に、賞はあれは森田さんですから、あの方へ御禮にいらつしつて下さいとも言へなかつたのです。此事を後で森田さんにお話しますと、奥さんはつまらない遠慮をする、賞は僕だと大びらに言つてくれゝばいゝのにといふことでしたが、どうも訂正するわけにも參りません。ですがよくしたもので、その後どこでどう知れたものか、田村さんの方でわかつたと見えて、ちよい／＼森田さんの方へお見えになるやうになつたらしうございます。

長い病院生活から家へかへりまして間もないと、長いこと常住ついてゝ御世話になつた醫者の森成さんが、お國の越後の高田へかへられて御自分で開業なさいますことになりました。何でもお父さんが高等教育をうけると田舎の若いものは皆國へ歸へつて來ないとか何とかいふ

ましたのを、ともかくも[illegible]あたりでもといふので[illegible]になられたので、其頃はしきりに歸國を促されて、開業する家も見立て、其上嫁さん迄嘱めて御待ち兼ねの様子でした。そんな一切を下見とでも申しますか檢分とでも申しますか、とにかく一度歸つて見てくると仰有つて歸國されて、それから東京へかへつていらした時に、どうでした、御貰ひにならうといふ娘さんはと訊ねますと、何もかも僕の望みとは反對の女房ですよなどと笑つて居られましたが、さて何にしても厳格な伯父さんかが御世話なさるとかで、當節の若いものは、嫁を貰ふのに顔がどうの器量がどうのといつて不心得千萬だ、昔は家柄とか心掛けとかをまづ言つたものである。若し自分の見立てゝ世話する嫁がいやだなどといへば、自分は腹を切つてども申譯を立てなければならないといふ見幕なのだから、文句はないのだなどゝ冗談がてらに仰言つてられたことがありました。

四月になつていよく歸國ときまりましたので、大變御世話にもなつたことだしするので、送別のおしるしに御馳走がしたいと思ひまして夏目に話しますと、それは非常にいゝことを思ひついてくれたが、しかし御馳走といつてもごたく何かならべ立てゝ見ても仕方がない、それよりか森成は鳥の肝臓や臓物が殊の外好きだから、さういふもので呼んで皆で集まつたらどうだと申します。そんなら方々へ案内をやつて下さいといふわけで、修善寺大患以來森成さんと心安くなつた心置きのない方々を澤山お呼びして鳥鍋會といふものをやりました。さうし、出立の前に皆で記念の撮影をしました。四月十三日のことで、中々盛な會合でございました。

其頃のことだつたと思ひますが、森成さんにお頼みして、越後の方から良寛の書を手に入れました。紙をつなぎ合はせた中々の大幅で私どもが見てはさつぱり讀めない草書が書いてありましたが、其頃はまだ良寛熱の盛にならない前のことで、三十五圓か何かそんなことのやうでした。がこれはあんまり出來がよくないとか申しまして、もう少しいゝ良寛が欲しいといつて又御願ひして居たやうでした。するとそれから程經て、森成さんのお存じの方かで良寛を集めて珍藏してられる方があつて、それ程お好きなら外ならぬ先生のことだから、珍藏の一幅をわかちませう、その代り何か字を書いてくれろといふことで、自分でも喜んで半折か何かを書いて上げて、其上五十圓ばかりの謝儀をつけて上げたやうでした。物は小い横物で、和歌が書いてありました。これは大變氣に入つて珍重して居たやうです。

大正五年に亡くなりまして間もないこと、この小幅良寛の所藏者から私宛に手紙が參りました。あの良寛は私の珍藏品で、先生だつたから惜しいけれども手離して上げたのです。けれどももう先生が亡くなられた以上御不用になつたでせうから、どうか舊藏者の私の手元へかへして下さいと書いてありました。が故人手澤のものは出來る丈當時のまゝ保藏しておきたいと思ひまして、折角でしたけれども御手紙の趣に添ひませんでした。

良寛のことが出ましたから、少し夏目の書畫のことをお話致しませう。元々書畫を觀ることは好きなやうでしたが、此頃からよく散歩に出ては、書畫屋や古道具屋などをのぞいて、何かと安物を漁つて參ゐりました。ほんのお小使で買つて來るので、贋物であらうとそんなことは一向お構ひなしで、自分が觀て繪が面白ければそれでいゝといふ風で、ぼろ〳〵のきたないものを買つて來てはかけて見て樂んで、さうしていゝと思つたものは、表具屋へやつて表裝を仕かへて、自分で箱書きをして居りました。勿論お金を出さないのですから大したもののあらう筈はありませんが、ともかくこんな風にして自分では樂しんで居りました。

一體謠をうなる位で外に何といふ道樂のある人ではなし、まあ〳〵本を讀むの位が道樂で、一時は隨分本も買ひましたが、段々その本も買はなくなつて、全く自分の爲めに使ふお小使といふものゝいらない人でした。隨分つましい儉約なところもあつた代りには、又お金には至極恬淡で呑氣なものでもございました。お小使なども、物を書き出して居ますと一向いらないのですが、それでも私が頃を見計らつて紙入れの中にいくらかづゝ入れて置きます。それがいくら入つてゐるのか知らない樣子で・月によつてはちつともへらないことがあります。それでも時々入れておいてやりますと、それが二ケ月三ケ月の間には少し纏つた額になります。とそこへ誰かゞ來て泣きついてその金を借りて行くとか、自分で好きな書畫骨董を買ひに行くとか、そんなことでございました。今でもかうして自分で買つたり、又人樣から頂いたりした書畫骨董（といつても美術倶樂部あたりに出るやうな金目のものは一つもないでせうが）が、そつくりその儘殘つて居ります。隨分ガラクタもあるやうですが、ともかく自分の趣味でつましく集めたのが面白いと思ひます。

良寛をしきりと習ひまして、あんな細い字を書いたりしたとは、これからしばらく後のことでしたと思ひますが、此頃からしきりに人樣から何か書いてくれるやうにと頼まれます。自分でも嫌ひぢやないので書き書きしてゐたやうですが、書いてゐるうちには面白くなつて手習ひもして居たやうです。

良寛の外に好きで集めたものに、仙臺の明月上人と藏沢がございます。二つとも松山出身の森圓月さんがもつて來られて、夏目に字を書かせてお禮に寄せられたのが元で、自分でも所望して手に入れたやうでした。誠に藏沢の墨竹は大變珍重しまして、自分でもそれをお手本に竹を描くといふので、毛氈の上に紙をひろげて、尻をはし折つて一氣に、墨痕淋漓と勢よく描き上げようといふので大騷動でした。尤もこれはたしか翌年たつたと思ひますが、この藏沢張りの墨竹をやたらに描いた時代がございます。

四十六　善光寺行

六月の中旬頃、長野の教育會で講演に來てくれろといふ賴みがあ

りまして、自分でも彼方の方へは行つたことがないので、行く氣になつてお引きうけ致しました。けれども私の身になつて見れば、又汽車に揺られて折角なほつた腸をいけなくするやうなことがあつてはいけないといふので極力反對するのですが、ナーニもう大丈夫だ。心配することはないといつて承知してくれません。そんなら私も一人旅をされてどこでどう病氣をされないものでもなし、家に留守居をしてゐてもそんなことを考へては不安でなりませんので、ついて行くと申します。夏目は夏目で、講演に行くのに女房なんか連れて行くのはいかにも見つともよくないからよせととめます。しかし私はどうしてもついて行くと頑張ります。そこへ丁度子供が少し熱があるかしてゐたので、小兒科の照田鐵三郎さんがお見えになりました。すると夏目がいゝ幸に、

「ねえ、照田さん、こん度長野へ講演に行くのに此奴がどうしてもついて行くと云ひ張るのですが、小學校の先生の集まつてる中に、女房なんか連れて行くのは見つともないですね。」

と援けを求めました。すると照田さんが、

「いゝえ、そんなことは決してございません。僕の先生の弘田博士なんかは、講演にいらつしやる時には、いつも奥さんと御一緒です。」

といふ返事に、さういふ先例があつてはとう／＼夏目の方が敗けで、一緒に行くことになりました。

一等は高崎迄といふから、二等でいゝかいなどゝ上野の驛で自分から切符を買つて來て、其晩長野の犀北館へとまりました。途中輕井澤あたり迄迎への人が出てゐられて、いろ／＼說明やら案內やらをしてくれられるのを、夏目は物珍らしさうに頷いて汽車の窓から眺めて居りました。

其晩宿へ高田から森成さんが訪ねて來られて、高田へ行くと、高田へ行つては、森成さんの母校だといふのでそこで講演をすることなどをきめてかへられました。

翌日善光寺に參詣しまして、それから講演をしました。お禮を六十圓か貰ひましたが、丁度善光寺の門前で松崎天民さんにばつたり行き遭ひました。私は存じた方ではなかつたのですが、其後間もなく松崎さんの書かれた紀行文か何かの中に、善光寺の門前で白チョッキに麥藁帽で、細君を連れてにこ／＼やつて來る人がある。誰か笑つてるのかと思つたら夏目漱石だつたとか何とか書かれて了ゐましたので、それ見ろ、かう書かれると見つともよくないだらうといふやうなことでした。

其日のうちに高田へ行き、森成さんの新居に御厄介になつて、一日は中學の講演をやり、一日は五智へ遊びに參りました。講演は私も聞いたことがないので、其時も森成さんに誘はれましたが、雨の中だつたものでとう／＼行かずに了ゐました。長野で御約束したのでしたが、それから諏訪中學で講演することになつて、松本へ出て、そこのお城へのぼり、それから諏訪で講演をすませて、諏訪神社へ參つて、さうして歸京いたしました。旅中いろ／＼食べ物に氣を使つて、そん

な體いものはいけないとか、今度はパンがいゝでせうとかいふ風に口やかましく申しまして、ともかく何事もなくいゝ工合に元氣でかへつて參りました。自分でも自信が出來て安心したやうでしたし、私も大變安心致しました。

四十七　二つの緣談

少し話が前後しますが、この四月五月の頃に、家から二人嫁入りをさせて、一人は親代り、一人は媒酌をしたお話です。

私の母の妹の子で、つまり私たちの從妹にあたるお房さんといふのが、小いうちに家が零落して、親子共私の父が面倒を見て居りましたのですが、其うちに叔母は死に、兄は奉公に出て、そのお房さん一人が私の母の元に居りました。丁度私のところでは子供が澤山あつて、いつも人手が足りない一方なので、其後ずつと手傳ひに來て貰らつて居りました。年頃にもなつたし、良緣があつたらどこかへ片付けたいと言つてるところへ、折よく名古屋の親類のものが自分の下に使つてる建築の技師かでいゝ人があるからと口をきいてくれたので、本人に聞いて見たら行かうと言ひ、先方でも貰らはうといふわけで、見合ひもせずに、手取り早く話がきまつて、ともかく式はお婿さんの方が名古屋から出て來て日比谷の大神宮であげるといふとになりました。

前々から兄の方へ、當節は何もかけないやうにといつても、それでも女一人を嫁にやるには相當かゝりもかゝるのだから、いざといふ時になつて一度に出すのも外へつとめてる人にして見れば大變だから、五圓でも十圓でも月々私に預けておいて準備をしておくといゝと言つておいたのですが、當の本人には五圓でも十圓でも大變だ、其時になつたら又どうにかするとか何とか申しまして、少しも世話をしやうとしません。ましてから話がきまればなほの事出來る道理もなく、仕方なしに、出來ないながらも私の古いのをやつたりなほしたり、それに買ひ足したりで、どうやら私の手一つでみすぼらしい仕度を調へました。

夏目と私とが親代りでお嫁さんについて日比谷の大神宮へまゐります。お互嫁方も婿方も知らない者同士なので、夏目が男が出るか蛇が出るかなどゝ興がつて冗談言つて居りましたが、ともかく其場は納まつて、其夜新郎新婦相携へて名古屋へ下りました。けれども半年ばかり後にはどういふわけでしたか不緣になつて夫婦わかれをして了ひました。

お房さんの方がともかく片付いてやれ／＼と思つて居ますと、すぐ追つかけて、もう一人手助けに居たお梅さんといふ、西村誠三郎さんの妹さんに又結婚話が持ち上がり、これも難なく纏まつて、又一切合財私が世話しなければならないことになりました。前のお房さんの時には皆が妙に氣が與つて何かとその積りで世話もしたのですが、こう重なつたので、この後の方は何だかがつかりして身が入らないといつ

た風でした。がこれは東京で嫁入ることになつて、私たち夫婦が仲人をしなければならない破目になりました。兄の西村さんは其頃大連に行つてられるし、又私が無けなしの算段をして、これもどうやらお嫁さんのお仕着せを調へました。つまり親元兼仲人なのです。そこで何から何迄私たちがしてやらなければなりません。

結納の目錄を書かなければならないといふので、私が大奉書を夏目の前に持ち込みます。どう書くもんだといつたわけで、それをどうやら書いて貰つて先方へ屆けます。それから式は先方の家であげるので、長女の筆子が十三でしたがお酌に頼まれ、何でも家つこでといふのはいゝが、さて私始め、夏目などはなほ更のこと、こんなことには不調法ですので、ともかく老人に聞くに限るといふので、私が母に大體教はつて來て、それを夏目と筆子とに教へるわけなのです。ともかく口で言つたばかりぢやいけない、一應稽古しておかなければならないと申すことで、夏目がお婿さんになり、お嫁さんには誰がなつたか忘れて了ゐましたが、多分本當のお嫁さんだつたでせう。何でも座敷に二人向ひ合つて坐はつて居ると、筆子がお銚子をもつて出て來て、お辭儀をしては三三九度の盃をまはす稽古をしました。私が謂はゞ舞臺監督なのだから笑はせます。

さていよ〳〵當日となつて式が始まります。先方の家が手狹なので宅とは勝手が違ひます。そこへ御銚子に雌蝶と雄蝶とを結びつけなければならないのですが、どうも私たちの手ではうまく結びつけられません。そこで仕方無いですからと夏目に頼みますと、今度はどちらが雌蝶でどちらが雄蝶だかわからないといふ始末です。それをいゝ加減に當て推量で結ぶと、今度はあんまり強く引つぱり過ぎたものと見えて糸が切れて了ゐました。

「あつ、切れた、切れた」

失策つたと思つたものでせう、夏目が頓狂な聲を出します。場合が場合ですから、いやなことをいふ、切れたの何のと甚だ御目出度くないことをいふので私が氣にします。其うちにいよ〳〵三三九度の盃といふ段になつて、兩方から向ひ合つて出て來て、いゝ鹽梅に坐はつたのはいゝけれども、今度はいくら待つてもお酌が出て來ません。間のぬけるつたらありません。仕方がないので私が筆子の待つてる唐紙の腰をとん〳〵と叩くと、漸くにこ〳〵出て來て盃をまはすといつた工合で、氣のもめるつたらありません。一ぺんで仲介には懲り懲り致しましたが、このお嫁さんは折合よく行つてゐましたが、七年目かに氣の毒なことにお産で亡くなつて了ゐました。

四十八　朝日講演

坪内さんの文藝協會が、ハムレットを公演されたのは此頃ではなかつたでせうか。私も誘はれたやうですが、一緒に行くことが出來ませんでした。朝日新聞かにその批評を書きまして、あんまり有難くなかつ

たやうな批評をしましたが、それからといふもの、文藝協會で招待の切符を下さるのが、いつも樂近くなつての日取りたので、初めに惡口を書かれたので、又書かれると困ると思つてか、いつも終頃になつてくれると笑つて居りました。

大概切符を二枚頂くので、よく一緒に行きました。オセロの結末の慘酷なのを見て、私があんな慘酷なのは嫌ひだ、どうも芝居は罪もない人が殺されたりなどするのは見て居ても氣が氣でない、やつぱり勸善懲惡式のゝがいゝと申しますと、あれが本當の悲劇といふものだと說明してくれましたが、その外マグダとか人形の家とかいふのにもついて參ゐりましたが、須磨子の女主人公が、どうしてもお三どんめいて居て、いくら情熱的に西洋人の仕草をしても情が移らないなどと申して居りました。

一體芝居でも不自然なことは嫌ひのやうで、一時自分でも芝居を書いて見やうとでも思つたものですか、よく私を誘つて芝居を觀に參ゐつたことがございました。しかし結局にはどちらかといふと同情のない方で、腹を切つてから長々と文句を言つたり、先代萩で子役が不自然な聲を出したりすると、芝居の方はそつちのけにして、ぷり〳〵して皮肉な批評を呟いたりして居りました。それから私が呂昇が好きで、よく聞きに參ゐりましたが、それに誘ふと快く一緒に參ゐりまして、いゝ聲だと言つてはうつとりと聞いて居りましたものです。

八月に入つて大阪朝日新聞社が關西で講演會をするといふので、講演を頼まれました。今度は眞夏のことではあり、暑さは暑し、健康の人にしてからがうだつて了ふ時なのですから、病弱な人がよしたらいゝと申すのですが、まさか講演旅行に味をしめたわけでもないでせうが、第一眞夏で家に居ても仕方がないし、知らない土地や違つた土地に行つて見たくもなつたのでせう、其上外と違つて義理のある朝日新聞社からのお話なので、前に信州へ行つて大丈夫だつたのに自信を得て、大丈夫だと言つて出かけました。行く行かせないで又言ひ爭つたのですが、結局私がまけて、今度は一人で出かけました。

和歌の浦、堺、明石、などで講演をすませまして、一番最後の大阪の講演に、お腹の具合が惡くつて藥をのみ〳〵堪えてすませたさうですが、とう〳〵それが終るとたほれて了つて、宿へかへるなりすぐに床について了ゐました。これではならないと、自分では氣を勵まして、ともかく東京へかへらうと思ふのださうでしたが、何としても起きることが出來なかつたさうです。朝日の小西さんたんでは、自分が御丈夫なものですから、夏目さん、胃が惡るいやうだつたら、一寸有馬の溫泉へでも行つてらつしやい位のことを言つてられたさうですが、夏目にして見れば丁度大患をやつた一年目に又も寢込んだのですから、外の誰よりも惡いのがわかつたのでせう。どうにもならないと見極わめがついたので、どこか胃腸病院を世話してくれろ、入院するからと朝日の方に申出ましたので、初めて朝日の方でも驚くといふ始末で、ともか

く湯川病院に入院することにして、私へすぐに來てくれろといふ電報を打つて參りました。暑さの中を驚いて私も大阪へかけつけました。

病状は案じた程の大事でもありませんでしたが、何しろ去年酷い經驗をして居ますので、始めに流動物ばかり當てがつて大事をとりました。其頃大阪朝日の記者でした長谷川如是閑さんなどが御見舞においでになつて、どうも夏目君は不養生だ、此間和歌の浦で[illegible]をしきりにたべるから、そんな不消化ものをたべて大丈夫ですかと心配して注意して上げても、大丈夫だといつてはしきりに食べるんだからといふことに、夏目も聞かねたから、ナーニ、[illegible]のせいぢやないよと抗議を申込んで居りました。

社の方がよく代る代る御見舞に來て下さる中に、小西勝一さんは毎日毎日顔を出して、初め私がまだ參らない前には、お氣の毒な位心配して何かと氣をつけては買ひとゝのへたりして下すつたさうですが、病氣にしたのも自分の發議で夏目さんを引つぱつて來たのだから、と自分がしたやうなものだとあつて中々よくして下さいました。夏目はかへつてお氣の毒な位だつたと申して居りました。後でも社が退けるときつと一度は顔を出されて、奥さんの前だが、夏目さんの講演は宜いところ女學生に大持てでしてねなどと話してかへられたものでした。

其の入院中には津田青楓さんだとか、兄さんの西川一草亭さんだとか、その外大阪の俳人で水落露石さんだとか、青木月斗さんだとかいふ方々がよくお見えになりました。此間青木さんにお目にかゝつた時のお話に、何でも病院に訪ねていらした時夏目の指圖でアイスクリームを出したさうですが、その頃の大阪ではそれが大層珍らしいものに思はれてびつくりしたといふお話でした。

湯川病院には三週間入院して居りました。漸く順調になほりまして退院間際になつた時、すぐ病院の脇に居た[illegible]屋の主人かと、扇子を持つて來て何か書いてくれと申します。餘り結構な扇子でないので、近所の扇子屋にかへにやらすと、こん度は扇子屋が、私にもどうかと言つて持ち込みます。そんなわけで都合五本かの扇子を描かされて書きましたが、夏目が出來映がよかつたのか、自分でかいた扇子を見ながら、これなら一本五十圓のものはあるねと申しますと、丁度病院から歸りかけに立ち寄られた小宮さんが、そんなら五本あるから二百五十圓だ、只今持ち合せがないから、これでどうぞ入院料をと院長にかけ合つて來ませうかなどと冗談言つて笑つたことがありました。

同じく退院間際のことでしたが、こゝの便所が西洋式になつて居りまして、水で流すやうになつてゐるのですが、それがどうしたのか壞はれてゐて始終じやあじやあ水が流れて居りました。夏目がそこへ入つたのはいゝが、長いこと出て參りません。又便所の中でゝも卒倒したんぢやないかなどと心配して居りますと、やがて何のこともなく出て參りました。どうしたのですと尋ねますと、水がたゞ流れてゐるのが勿體なくて、それが氣になつてどうしてもその儘出て來られない。そこで便器の上にのつて、上の水槽をいろいろいぢくつて、壞はれたのを

なほさうとしたが、やつぱり駄目だつたと申して居ります。で、おお、危い、まだふら〳〵してゐる癖に便器の上にのぼつたりなどして、若しや足を踏みすべらして倒れでもしたらどうするんですと小言を言つたことでしたが、こんな些細なことにも氣を使つて、バカ〳〵しいやうなことを丹念にして居ることがございました。

もう大概大丈夫といふので、一等寢臺にのせてかへりましたが、又汽車の中でどうかしやしないかと思ひますと、全く氣が氣でありません。動けば動いたでどつか苦しいのではないかと思ひ、すや〳〵眠つて居れば、若しや息がたえてるのぢやないかと案じて、そつと手をのばして觸はつて來て、手が溫くて、その上息をしてゐるのではつとするといつた工合に、氣を使つておち〳〵眠りませんものですから、朝方になるとこん度は私の方がかへつて半病人になつて、東京につくとかへつてあべこべに私が世話して貰ふといつた工合でした。それも名古屋を通過するのが夜中の十二時頃で、親類の鈴木がわざ〳〵見舞かてら會ひに來てくれたのですが、口をきくのが退儀だといつて、ひつそり寢たまゝで居たりしたので、さては又惡くなつたのぢやないかと、私の方がえらく心配して了つたものなのです。

四十九　破れ障子

九月の半頃大阪からかへつて參りましたが、それから間もなく痔が惡いといふので、又も病院通ひでとう〳〵切らなければいけないとあつて手術を致しました。切つた時は局部麻醉で痛たくすんだのでせうが、後で床を步るいても響けるといつて飛び上つて痛がりました。でもこの病は中々しつこくて、翌年にたつてもまた膿が出たりしてなやまして居りました。

そんな工合で、其頃の夏目の體は、全くのこはれもので、病氣ばかりしてゐる上に、いつ何時命にかゝはるやうな病氣にやられないものでもないので、實際體のことには氣を使ひました。けれども急場を通り越すと自分では案外平氣で居りました。

少々きたないお話になりますが、此頃胃は惡るし、肛門は惡るしで、よく瓦斯が出るのですが、それが誠に妙な音を響かせます。中村さんでしたか菅さんでしたか何誰でしたかおいでになつてゐてその奇態なおならを聞きつけて、まるで破れ障子に風の鳴る音だとか何とか言つたので、それから破れ障子は面白い、全くその通りだといふので、落款をほらせる折に「破障子」といふのをたのんで、自分の書に捺してゐました。

これで思ひ出しますのは、もう少し後のやうでしたが、子供たちがいろは歌留多を取つてゐますと其のお仲間に入ります。みんな目が早いのにこのお父さん一向に取れません。たゞ「へをひつて」といふ札と「あたまかくして」といふ札との二枚切りがお得意で、それを自分の前にならべて睨めつこしてゐますが、それさへよく子供たちにぬかれて凱歌をあげられて居りました。

一體に世間からは、皮肉ばかり言つてるつむじまがりで敗けん氣の、しかめつ面したこわいいかめしいをぢさんのやうに思はれて居りましたやうですが、こんな時には本當に好々爺で、子供たちとよく角力をとつたりなんかしますし、全く他愛がありませんでした。さうして随分子供らしいところがあつたやうです。

それから非常に派手好みの癖に大のおしやれで、着物などは自分でいい着物をきることも好きでしたし、子供たちなんかに美しいものを着せて眺めるのも好きのやうでした。よく私が新らしい着物をこさへてやつたりしておきますと、それが大の自慢で、おい、小宮、こん度こんない、着物をこさへたから見せてやらうといつた工合で見せびらかします。

さうかと思ふと私がいゝだらうと思つて買つて來た柄が氣に喰はず、こんなもんが着られるか、すぐにかへして來いといつた見幕で劔突を食はせる時もあります。それをいつの間にやら下着に仕立てたりして着せますと、これも重ねて見ると案外いゝなと、けろりとしてはめて着てゐる事などもありました。それから二枚襲ねがきちんと合はないと大變なのですが、それを又そつと着てくれゝばいゝのを大變氣にしまして、着るとは下の方の袖口を引つぱつてみたり、襟先を引き出して見たり散々に引つ張るのだから、並の仕立では出て來るにきまつて居ます。さうすると見ともないといつて叱られるので、いつも引つ張つても大丈夫なやうに、少し寸法をつめてこさへて置たものです。

洋服などでもきちんとしてゐないと氣がすまない方で、中々のハイカラでしたが、さうかと思ふと變なところで非常に質素で頑固で可笑しい位のことがありました。例へば此頃になつてもまだ石油ランプを使つてゐて、電燈は贅澤だといふ風に申しまして、どうしても電燈をつけやうといふことに賛成してくれません。ランプより電燈の方が便利だといふことも知つて居り、又ランプの方が趣があるといふわけでもないのですが、許してくれません。子供は多いし、ランプ掃除から第一たまりませんし、それに女中や子供がランプを引つくりかへして幾度危い目にあつたか知れないのですが頑張つて居ります。其頃一燈一階で引いてくれるので、これは許しをうけてゐたんではいつ迄立つても埒があかないと思ひまして、病院に入つてる留守中に一存でさつさと引いて了ゐました。するとかへつて來て驚いて、家の細君は御大名だよと何誰かに話したことがあるさうです。

誰でも非常にむつつりしてるかと思へば、(又さういふ印象をうけて居られる方も多いだらうと思ひますが)調子にのると案外の輕口で、駄洒落や皮肉をかつ飛ばして面白がるといふ風で、生粋の東京人のさうした一面をよく表はして居たかと思ひます。

此年の十一月頃のことでしたでせう「朝日」で主筆の池邊三山さんがおやめになるといふので、自分でも言はゞ池邊さんから迎へられ

て、池邊さんを信じて入社したやうなわけなので、それに殉じてと申しますか、辭職をするといふので脱社したやうでした。

事の起こりはどういふところにあつたものか、私のやうなものにはわかりませんが、ともかく大分社内が動搖したらしうございます。ただ夏目からは、今度朝日をやめることにするかもわからないが、おれは一體世間に出て融通のきく方の人間でないから、これから朝日の月給を離れたら、或は筆一本で從前とほりの收入の途が立たないかも知れない。かといつて又教師をする氣もしないが、どうだ、それで家の經濟はどうなりやつて行けるかといふ相談がありました。そこで私も、印税や何かで、まあ〳〵どうにかかうにかやつては行けませう。收入が少くなればなつたで、そのやうにして出ればやつて行けると思ひますから、どうか名分の立つやうに自由にやつて下さい。しかし去年の大患の時には「朝日」から一方ならぬ世話になつて居ますが、今おやめになつて其方は差支ないのですかと念を押しました。すると夏目も、成る程世話にはなつてるが、それとこれとは別だからと申しまして、辭職の決心をきめたやうでした。

そこへ澁川玄耳さんだとか弓削田さんだとか其他いろ〳〵な方々がなだめにおいでになつて辭職を思ひ止まるやうに仰言られます。さう頼まれて見ると、元々自分が排斥されてるのではない、皆さんの意志がわかつてるのにいつまで女々しく自分一人強情を張つてるでもないとあつて、それぢや自分の方はきつぱり辭職を思ひ止まらうと申しまして、脱社は引つ込めたやうでございました。しかしとう〳〵池邊さんはおやめになつて了ゐました。

それから間もなく、たしか二月頃の寒い眞夜中のことでございました。寢てゐたところを俄かにおこされましたが、今池邊さんが急に危篤になられたから、此俥にのつてすぐに來てくれろといふお迎へです。眞夜中ではあり、何となく不氣味でもあつて、それではすぐにまゐりますといつてその俥屋をかへし、家で乘りつけの俥屋の寢込を起こしてまゐりました。池邊さんは急死されたのでした。

澁川さんなどの「朝日」の方が澤山居られたので、

「わざ〳〵、この寒い眞夜中におれを起こして、何にするんだい。又何か書かせるつもりなんだらう。」

と夏目が申しますと、澁川さんが

「まあ、そんなところだね。」

と仰言つたとかへつて來て話して居りましたが、早速「三山居士」といふ追悼文を書きました。しかし澁川さんもお亡くなりになつて、書かれた人はいふ迄もなく、書いた人も、書くやうにすゝめた人も、今ではみんな亡くなられて了ゐました。

短詩九章

高橋新吉

I

生が唯一のものではない。
言葉の上で跳躍するのにも倦いた
生きる上に何の辯解が要ろう。

II

動物園の虎に永らく僕は御無沙汰してゐる。
地上的な感情の一切を棄てるのだ。

III

枇杷の種を海に棄てました。
海の中で生えますやうに、

IV

何と云ふ下手な卑弱(ひじやく)な齊なんだ
其の海の泡！

V

雨の中を走る食物もある。
蕨が山で拳を伸ばしてゐる。

VI

鐙(あぶみ)を踏み外す事は生なり。
全き調和は死なり。

VII

一つの事をする事
それは外の事をしない事だ。
何かを考へる事
それは他の事を考へない事だ。

VIII

風吹き募(つの)れ
雨降りしきれ
犬の尾が
ちぎれ飛ぶやうな
日和(ひより)になれ、

IX

本を讀む事、それは目を疲れさす事以外の何で
あらう。



仁義以上

大佛次郎

一

『甚藏、孫次郎、頼むぜ。』

飯岡の助五郎は、二人を指名して、かう云つた。またこれだけで、助五郎が何を意味してゐたか成田の甚藏にも三浦屋の孫次郎にもよく分つてゐた。

佐原の女郎だつた女を女房にして、これに小料理屋をやらせてゐるし、文字も讀め、才覺もあつて、いつも小意氣なりをしてゐる孫次郎は淺黒い顔をにつとさせて、

『畏りました。……大役だな。』

と云ひながら、選に當つたのを得意らしく居並んでゐる身内の者を見廻した。

成田の甚藏は、例によつて、丸顔をむつつりさせた儘で

『ようがす。』

と、言葉短く云つて頭をさげた。甚藏は孫次郎のやうに別にこの大任にあたつたことを光榮とも思つてゐないらしかつた。目は、いつもの遲鈍に近い光を放つてゐるだけで、死生を誓つて兄弟の盃をかはした親分の言附だから、眞直ぐにそのとほりにするといふだけのことらしかつた。助五郎にして見れば、反つてそれが心強く見えるのだつた。

『成田の、御苦勞だな。』

と、滿足らしく云つた。

「相手は亂暴な野郎だし、腕前もしつかりしたものだ。油斷なくやつてくれよ。」

「へえ。」

と莊藏は答へた。

ほかの乾分達は選ばれた二人に羨望の目をそゝぎながら、助五郎の言葉から、これから二人が斬りに行く笹川の繁藏の豪膽なやり口を思ひ出してゐた。この飯岡一家と笹川との喧嘩は何年にも渡つてゐる。相手の繁藏は百姓の家に生れたのだが、渡世人として恐しく好い度胸を持つてゐて、銚子の陣屋から十手を預つて八州の役人を後楯に持つてゐる助五郎の勢力にびくともしないでゐるのだつた。一同は繁藏が單身で長刀を提げて親分の首を取りに來た去年の春のことを、まだなま〱しいことに覺えてゐる。誰れか明るい外からぬつと入つて來たと思ふと繁藏だつた。八州の役人に追はれてゐる身で、しかもこちらの本城と云つていゝこの家へ、どうやつて來たかも話だが、眞晝間だつた獨りで入つて來て顏色も變つてゐないとは何といふ度胸だつたらう。

「助五郎はゐるか？」

と、云つた。

こちらが返事も出來ないでゐる内に、ぱつと足で、上へ飛びあがつてゐる。

「何をしやがる！」

一度に、そこらにゐた飯岡身内の者が立つたのだ。

「やかましい！」

繁藏は、梯子の中段から叩き附けるやうに答へた。

「助五郎の首を貰ひに來たんでなくて、ほかに俺れの來る用があるか？」

凄い笑顏だけが殘つた。

氣が違つたやうに昂奮して續いて驅けあがつた。後でわかつたが、助五郎は、繁藏の聲を聞いて窓から屋根づたひに隣りへ逃げてゐたのだ。

繁藏は齒嚙みした。そして、襲ひかゝる助五郎の身内三人を屋根瓦の上へ斬り伏せて、その頃雲のやうに集つて來た八州の役人に追はれながら畑の中を走つて、この飯岡から姿を消したのだつた。

その繁藏が、笹川の名主平左衛門の家へ遊びに來てゐると云ふのである。かねて助五郎に内通してゐた平左衛門から、そつと使ひを寄越して知らせて來たのである。

二

三浦屋の孫次郎と成田の甚藏は、早くから庚申塚の藪の中に隱れて繁藏の歸りを待ち伏せてゐた。

眞夏のことで藪の中には蚊が多かつたから二人はまくつてゐた浴衣の裾をおろした。孫次郎は、長刀を拔いて竹を一本切つて、槍をこしらへ始めた。甚藏は木の根に腰をおろして相變らず、むつつりと默り込んでゐる。孫次郎は確かに多少の昂奮を見せてゐた。連れの手前わざと何でもないやうな樣子を作つてゐたが何となく、そは／＼してゐて、いつもより饒舌だつた。

藪は、森だつた。柔かい葉が、二人を包む闇の中で、さや／＼風に吹かれてゐた。やがて、その闇が、上の方から明るくなつて來たやうに思ふと二十日の月があがつた。

月から算へると、時刻はもう四つを廻つてゐた。

『こゝは、すこし明るすぎるやうだ。』

孫次郎がかう云ひ出して、二人は隱れ場を變へることにした。月は段々と明るくなつて、二人の顏も肩も蒼い光の斑で濡らしてゐた。二人は、道を突切つて、逆側の雜木林の中へ隱れた。もう間もなく來ると云ふ豫感が、孫次郎のお喋りを默らした。しめつた土の匂ひや、草の匂ひを嗅ぎながら、二人は石のやうに默つて待つてゐた。

『來た！』

突然、孫次郎がひく／＼叫んだ。

甚藏も、道の右手に月光をあびて來る黑い人影を認めた。知らずに二人とも、ぴたりと地に伏してゐた。

甚藏は、そツと鞘をすべらして、長刀を拔いた。

その間にも片側から投げかけてゐる藪の影を近くなる繁藏は、確かに醉つてゐるやうな足どりだつた。内通した平左衞門が酒を出したものに違ひないのである。

双方の間隔が詰つて、肥つてゐるが肉の緊つた繁藏の顏が月を受けて、一筋づゝの皺も算へられるくらゐはつきりと、二人の目の前に來た。

それに吸寄せられたやうに甚藏は猛然と起つた。

『誰れだ！』

鋭どく、繁藏が叫んだ。身を斜めに本能的に左の肱を突き出して防ぎながら、甚藏が振りおろした長刀を、巧みに躱した。殆ど同時に、醉つてゐても確かな右手は、宙に白い光を走らせてこれも拔き、あびせ掛けるやうに追ひすがる甚藏の二の太刀を危く防いだ。

『卑怯な野郎だ。』

繁藏は怒つた。

しかし相手はこの甚藏一人だと信じたのが不覺である。その刹那

に、三浦屋の孫次郎がぬつと突出した竹槍が、繁藏の腋を突いてゐた。

何か叫んで繁藏は蹌めいた。

その上から甚藏は、刀を揮つて、肩口を、斬ると云ふより撲り附けてゐた。その打擊の下に繁藏は俯伏せに地面に仆れた。

飛出して來た孫次郎も、甚藏も、繁藏がまた起き上つて來ると思つて、用心深くすこし離れて立つて睨んでゐた。

繁藏が起きようとして片膝を杖に背を曲げるのが見えた。しかし、これは最後の努力だつた。

『殘念だア……』

と、一際叫んだ。次に埃の中へがくりと顏を埋めた。

『首だ、首だ！』

孫次郎が、はしやいでから叫んだ。甚藏は、そのとほりにして、この飯岡身内多年の敵の首を掻落して、思ひ附いたまゝに自分が着てゐた浴衣を脱いで、これにつゝんだ。汗で濡れてゐる背中を月があかるく光らした。

『行かう。』

孫次郎は竹槍を捨てた。裸かの甚藏は捨てた鞘を拾ひに雜木林の中へ戻るのに、繁藏の首を丁寧に庚申塚の石の上に置いた。

雜木林の中には蚊が唸つてゐた。甚藏は屈みながら、繁藏の白い鞘の根の、甘い匂ひを、はつきりと嗅ぎ知つた。

三

二人が助五郎の家へ首を持つて歸ると、集つてゐた身内の者が家中ごつた返しにして悦んで騒いだ。

助五郎は、奥座敷に蚊遣りを焚いて妾の酌で酒を飲んでゐたが、知らせを聞くとこれも躍り上つて走り出て來た。

『やつたと？』

と、叫んだ。

騒いでゐた乾分たちは親分のために道をあけた。三浦屋の孫次郎がひとりで土間に立つてゐた。孫次郎は大仕事の後の昂奮で顏色を心持蒼くして目をぎら〳〵光らしてゐるし、着物も泥だらけになつてゐ。

『や、手柄だ、手柄だ。』

助五郎は、熱に浮かされたやうに叫んで、自分も知らずに力を入れ浴衣の裾をまくつて渡世人にしては白すぎる肉付のいゝ足を出して立ちはだかつた。

『首はどこにある？　甚藏はどうした？』

『首ア成田の兄貴か、井戸端で洗つてゐます。』

と孫次郎が答へた。

乾分たちは、どつと笑つた。「井戸端で洗つてゐます」が一同に魚屋が來て井戸端で鰯の生身でもつくつてゐるやうた響きを與へたのだ。助五郎もいよ／＼上機嫌だつた。孫次郎に、さあ、あがれと云ふやうに目配せして、自分は、座敷へ引返して行つて、妾のお濱に

『今、いゝ肴が來る。』

と云つた。

乾分の一人が迎ひに行くと、成田の甚藏は、太い指で、繁藏の首の髮を丹念に撫で付けてゐるところだつた。傍に三人も身内の者が立つて見てゐたのだが、この男は相變らず何か腹を立てゝゐるのではないかと思はれるくらゐ默つてゐた。乾分が、糊のこわい浴衣を渡すとこれを着て、助五郎の註文どほり、庭から奥へこの淨められた戰利品を運んで行つた。身内の者が、はしやぎながらぞろ／＼とこれに續いた。

助五郎は、椽まで出て、片胡座を搔いて待つてゐた。直ぐ傍に今夜の手柄をたてた孫次郎がもう上へあがつて控えてゐた。

妾のお濱が、百目蠟燭を附けた燭台を持つて出て來た。

成田の甚藏は、なれない樣子で首を持つて直ぐ前まで出て、

『どこへ置きませう？』

と云つた。

助五郎は、沓脫石を顎で差した。暫く一同の目が、石の上に行儀よく置かれた首に灯が集められた。凝とそゝがれた。

『違えねえ、繁藏だ！』

助五郎は、多年の怨恨と憎惡と、また最後の決定的な勝利の歡喜とを、一時に押し出したやうな聲で云つた。

『いゝ態よ！』

から云つて突然にかつと、唾を吐き掛けた。

見てゐただけの者が動いた。次に、どつと笑ひ聲が爆發した。その笑ひ聲の中に、助五郎は庭下駄をひつかけてゐた足をあげて首を蹴り落した。

首は、騷ぐ乾分たちの足を縫つて水瓜のやうに遠くまで轉がつて行つた。

『これでいゝ。』

助五郎は晴々と云つた。

『さ、みんな、上つて來い。今夜はいくらでも飮ましてやるぞ。成田の、御苦勞だつたなあ。話は三浦屋から聞いた。』

この言葉が切れると甚藏が

『親分。』

と、ひくい聲で呼び止めてゐた。

助五郎は、相變らず、何を考へてゐるのかわからない腫ぼつたい眼

蔵の顔を見た。

『お頼みが御座います。』

『なんだ?』

『この首を私に貰ひてえんで御座います。』

貰つてどうするんだ……と云ひかけて、悟りの早い助五郎の頭にはもう別のことが映つてゐた。

『妙な、佛氣を出しなさんな。』

と、笑つた。

『さうぢやありません。』

甚蔵が、これを、ちよつと、むつとしたやうに聲を高めて云つたので、助五郎は醉眼をひらいた。

その時、甚蔵が云つた。

『なアに、ついでに、私に、ひまが貰ひてえんです。』

『成田の。』

と、驚いたやうに三浦屋の孫次郎が、叫んだ。ほかの乾分たちも意味も知らず制めようとした。

突然に、甚蔵が『五月蠅え。』とこれを叱咤した。人々は、この、牛の怒つたやうな權幕にあつけに取られた。ひとり助五郎は、これを見てゐて、ふウむと云ふやうに顎を笑はした。

『つまんねえことを云ひ出すな。何が氣に入られねえんだ?』

『何がつて……いゝい、お前さんが、氣に入られねえンだ。』

『なんだと……』

ひらき直らうとした助五郎を女が團扇をあてゝ輕く抑へた。

が助五郎は、勢ひ烈しく云ッた、

『われア自惚れやがつたな。』

『さうぢやねえ。』甚蔵はゆッくらと云つた。それから一語一語、母指で押込むやうに力強く云つた。『俺れア嫌ひだ。いくら、喧嘩相手の笹川の繁蔵の首だらうと、佛に青痰をかけ足蹴にすることはあるめえ。俺れア、そんなことは、嫌ひだ。お前がそんな男だらうとは、知らなかつたんだ。』

『畜生ッ!』

助五郎は緣板を蹴つて座敷へ驅け込んでゐた。そこには、長刀がある。驚いて、人々は荒れくるふ親分の腕に振下つた。その間にこれも動かうとしない甚蔵を庭にゐた者が、狼狽して無理やりに、外へ連れ出した。

助五郎の狂氣のやうに喚く聲が制めようとする女や乾分の騷ぎの中

に響く外まで聞こへてゐた。

四

この剛情な男は、仲間の者が集つて何と説いても親分に詫びようとは云はなかつた。一同も手を焼いて、暫く捨てゝ置いた方がいゝだらうと云ふことになつた。

成田の甚藏は、佐原の瀬屋に行つてゐると云ひ置いてこの昔の仲間に別れた。そして、その言葉どほり、瀬屋へ行つて二階に泊つた。相手の女は去年あたりから、この家できまつてゐた。その女にも、飯岡から貸し元なりお人が來たら通してくれと云つてあつた。甚藏は、助五郎が誰れか人を寄越して自分を刺しに來るだらうと思つてゐた。いつものやうに無口で、冗談一つ云はず女を相手に酒ばかり飲んでゐるので、女は、事のいきさつを知らず、男が何を考へ何を待つてゐるのか、不幸にも氣が附かないでゐた。

間近い筑波に毎日のやうに雲の峰が立つて、蒸暑い日が續いた。間取りの暗い女郎屋の二階は、寢てゐて脂汗が流れた。格子窓の外には、瓦屋根が熱日に焼けてゐる。そこに夾竹桃の花が燃えてゐて、垣に白茶け葉の間から、かつと眩しいくらゐ明るい往來が見えた。甚藏はこの晝間を多く寢て過してゐた。その間に、飯岡からいよ〳〵人が來ないのなら故鄕へ歸らうと考へ始めた。しかし親身にしてくれる女に別れかねる心持も手傳つて、十日ばかりこの家に暮らした。

その内にいよ〳〵最後の午後が來た。

その日は朝から、曇つてゐる癖に、むし〳〵と暑くて、裏で鷄がずつと啼き續けてゐた。筑波もガスで濁つてゐて、雲を洩れる光が當つてゐるところだけ、絲の柳條を流してゐるのが餘計鬱陶しく見えた。

その人聲を聞いた時、甚藏は例のやうに疊の上にうたゝ寢をしてゐたのだが、目が醒めて、はつとして、油斷なく長刀を傍へ引寄せた。折惡しく女はゐなかつた。この家の樓婆に遮られながら、誰れか梯子をあがつて來るのだつた。

來たなと信じられた。

しかし、障子をあけた男を見ると、豫期してゐた飯岡一家の者でなく、笹川の繁藏の乾分で顏を知つてゐる夏目の新助に角力上りの勢力の富五郎と云ふ男だつた。

『御免なせえよ。無理押しにあがつて來た。』

勢力は、立つたまゝ肥つた肩を揺さぶりながら笑つてから云つた。

『來なさつたか?』

二人が、繁藏の敵を討ちに來たのは明瞭だつた。

甚藏は、この方角にも借りがあつたのだと、それをすつかり忘れて

ゐた自分を苦笑しながら、敏捷に心は働いて、いざと云ふ時自分の立つ位置を部屋の闇に取つた。

『俺を云ひに來たんだ。』

から云つて、勢力が先に坐つて、夏目の新助がこれに倣つた。さうしてゐて二人の目付に油斷のないのが見えてゐた。

『ふむ、禮をね？』

こちらはどんよりした顏に目を光らして笑つて、心持片膝を浮かした。

『お前さん、俺等の卑怯た仕打ちに、喰つてかゝつてくれたつて云ふおやあねいか？』

と勢力は意外なことを云ひ出した。

『その禮か？』

甚藏は無念をこの一語に叩き附けて叫んだ。叫ぶと一緒に、この最上の侮蔑と感じられた口をきいた勢力の頭目きい軀を狙つて、素迅やく刀が鞘を走つてゐた。

勢力は後へ飛んで、障子ぐるみ蹌けた。危いところを輕捷な夏目の新助が拔打つた切尖が、伸びた甚藏の腰を拂つてなぎ倒した。

『亂暴な野郎だ。』

勢力は息を喘いで、甚の上に自分の體から吹き出る血の中に倒れてゐる甚藏を睨んだ。こつちが禮儀を盡してゐるのに、こいつア暗討でもされると思つたのだなと勢力も新助も考へた。

そのまゝ、もう動かない甚藏を凝と見詰めてゐる間に、軒の風鈴が冷たい風に煽られて涼しく鳴つた。と、その音にかぶせ、二人の頭の上の暗い天井を蔽ふて、ざあッと凄じい白雨が降つて來た。勢力がまた何か云つたが、この雨の音に消されて意味が取れなかつた。新助は、身を屈めて甚藏の浴衣の袖で切尖をきれいに拭つて立上つた。

『行かう。禮を云つてから立つて斬合はうなんて、最初の註文がちと無理だつた。』

夏目の新助は輕くから云つて、ぱちんと刀を鞘におさめた。悧口さうな脣が靜かに綻びてゐるのだつた。（終）

創作餘談

（志賀直哉集の卷末に附す）

志賀直哉

此集に入れた作品に就いて思出でのやうなものを書いて見る。

「ある朝」「荒絹」「網走まで」「速夫の妹」「子供三題」など最も古いものである。「或る朝」は二十七才の正月十三日亡祖父の三回忌の午后、その朝の出來事を書いたもので、これを私の處女作といつていゝかも知れない。私はそれまでも小說を始終書かうとしてゐたが、一度もまとまらなかつた。筋は出來てゐて、書くとものにならない。一氣に書くと骨ばかりの荒つぽいものになり、ゆつくり書くと瑣末な事柄に筆が走り、まとまらなかつた。所が、「或る朝」は內容も簡單なものではあるが、案外樂に出來上り、初めて小說が書けたと云ふやうな氣がした。それが二十七才の時だから、今から思へば遲れてゐたものだ。こんなものから多少書く要領が分つて來た。

「網走まで」は或時東北線を一人で歸つて來る列車の中で前に乘合はしてゐた女とその子から、勝手に想像して小說に書いたものである。これは帝國大學に籍を置いてゐた關係から「帝國文學」に投稿したが、沒書された。原稿の字がきたない爲めであつたかも知れない。

「荒絹」。或冬湯ヶ原に行つてゐて書いた。オペラの梗概のつもりだつた。オペラがどういふものか全で知らない時代の事で「サムソンとデリラ」の譜の本を丸善から買つて來て、仕組だけでも知らうとしたが、結局手がつけられずに了つた。あの話は獨逸人のギリシヤ神話を描いた畫から想ひついたもので、その出所を示す意味で「アラクネ」を「荒絹」と題した。然し、話の大體は私自身の想像であつた。

「濁つた頭」は夢からのヒントと神經衰弱の經驗から作り上げた小說である。若い頃の事でかういふ病的な刺戟の強いものを書くと如何にも仕事をしたやうな氣がした。三四日位で書き上げたやうに思ふ。風俗

壞亂の個所があると內務省で大分削られた。此本に載せたのは其檢閱濟みのものである。

「老人」これは短かいものだが割りに骨を折つた。形式上の試みで、さういふ事を離れては餘り價値あるものとは思つてゐない。然し形式上の試みとしては成功したやうに思ふ。アメリカで出る「カレント・リテラチュア」といふ雜誌に毎號大陸作家の短篇が載つてゐて、アンドレーフの「ラザルス」とかストリンドベルヒの「フェニックス」とかその他色々あつたが、さういふ中に今は題名を忘れたがビョルンソンのもので、或る寺の僧が、一人の人間の一生を見る事を書いてた短篇があつた。赤兒として洗禮を受けに抱かれて來る所、それから一人前になつて結婚の儀式を受けに來る所、最後にその男が死んでその僧が葬式をしてやる事が書いてあつた。この三つの場合が簡單に書かれ、しかも鮮にその人間の一生が感じられる點で感心した。そしてこれから想ひついて試みたのが「老人」であるが、然し「老人」はビョルンソンの短篇の眞似ではない。

「母の死と新しい母」少年時代の追憶をありのまゝに書いた。一ト晩で素直に書けた。小說中の自分がセンチメンタルでありながら、書き方はセンチメンタルにならなかつた。此點を好んでゐる。他人から自分の作品中何を好むかと訊かれた場合、私はよく此短篇をあげた。苦勞して書いたものには苦勞しただけの長所があり、素直な氣持でスラスラと書けたものには又さういふいゝ所がある。作者自身では多くの場合後者の方に愛着を感ずるらしい。

「正義派」車夫の話から材料を得て書いたもので、短篇らしい短篇として愛してゐる。

「出來事」これは自身で目擊した事實を殆どそのまゝ書いた。「正義派」は正義の支持者といふ誇りを自ら段々誇張して行つて、しかもそれが酬ひられない所から來る淋しさを主題としたが、「出來事」の方はもつと直接な感情、——子供が電車に轢かれかけて助かつたといふ——或る者は一時の驚きと、亢奮から喧嘩もするが、結局は皆、子供が死を免れたといふ事を喜んでゐる、その善良さに好意を感じ、此小說を書く氣になつた。

餘談になるが、此の小說を書き上げ、其晩里見弴と芝浦へ涼みに行き、素人相撲を見て歸途、鐵道線路の側を歩いてゐて、どうした事か私は省線電車に後からはね飛ばされ甚い怪我をした。東京病院に暫く入院し危い所を助かつた。電車で助かる事を書き上げた日に自分も電車で怪我をし、しかも幸に一生を得た。此偶然を面白く感じた。此怪我の後の氣持を書いたのが「城の崎にて」である。それから此時の經驗は「ある男、その姉の死」の中に書き入れてある。

「速夫の妹」少年時代の追憶で、事實に大分潤色してある。甘い感じのものであるが、のび〳〵と自身でも面白がつて書いてゐるやうな所が今から云へば又追憶的の氣持で眺められる。

「襖」これも事實の幾らか潤色された追憶で、箱根芦の湯での經驗を數年後、季節はづれの淋しい小涌谷溫泉で、憶ひ出し、書いた。

「剃刀」床屋で恐らく誰れもが感ずるだらう恐迫觀念から作り上げたものだ。似た材料の詩がビアズレーにあるといふ話を後ちに聞いた。

「祖母の爲めに」これは病的で、如何にも空想的に見られるものかも知れない。然し當時の私では少しも潤色しない事實の記錄であつた。今から見れば自身も病的であつた。近頃は段々病的といふ事に興味が薄くなつたが、病的といふ事は飛躍であり、正氣では感じられないもの、又正氣では現はせないものを、此飛躍で現はす場合があるので、それを否定はしてゐない。

「子供三題」簡單なスケッチに過ぎない。前には子供を書く事が好きだつたが、自分に子供が出來ると却つて書かなくなつた。見てゐるだけで充分になつたのかも知れない。後ちに發表した「眞鶴」なども子供のない時代に得た材料である。

「鵠沼行」失敗した長い小說の一部分を切離した日記のやうなものである。總て事實を忠實に書いたものだが、唯、一ヶ所殘も自然に事實ではなかつた事を書いた所がある。さういふ風にはつきり浮んで來たので知りつゝさう書いた。後ちに其時一緒だつた私の二番目の妹が、色々な事を私がよく覺えてゐると云ひ、然し自分も此事はよく覺えてゐると云つたが、それがその一ヶ所だけ入れた事實でない場所だつた。私は其所は作り事だとは云ひ惡くゝなつて默つてゐたが、妹が出鱈目を云ふ筈はないので、私に最も自然に浮んで來た事柄は自然なるが故に却つて事實として妹の記憶に甦つたのだらうと考へ、面白く思つた。

「二十代一面」二十代の生活の一面を書いた。話としてはまとまつたものではない。座骨神經痛で八十日間寢た切りになつた時、雜誌社との約束で古い原稿からこの部分を抽出し直して書いた。八十枚、床に腹這ひになつて書くのは容易でなかつた。然し出來たものには自信がなかつた。

「クローディアスの日記」苦勞して書いた。これを書く動機は文藝協會の「ハムレット」を見、土肥春曙のハムレットが如何にも輕薄なのに反感を持ち、却つて東儀鐵笛のクローディアスに好意を持つたのが一つ、もう一つは「ハムレット」の劇では幽靈の言葉以外クローディアスが兄王を殺したといふ證據は客觀的に一つも存在してない事を發見したのが、書く動機となつた。クローディアスといふ「ハムレット」

中の人物をとつて來た以上「ハムレツト」に書かれた事と矛盾したくないと思つたので辻褄を合はすのに聊々骨が折れた。坪内さんの「ハムレツト」をゆつくり隨分丹念に讀んだ。ハムレツトといふ人物は土肥春曙のハムレツトが先入主になり、本で見ても、それ以外に出られず、仕舞まで好感を持たなかつたが、何年かして、帝國劇場でフオーブス・ロバートソンといふ英國の役者のハムレツトを見、初めてハムレツトの氣持に同情出來た。父を失ひ、母が自分の好きでない叔父と結婚したといふだけでも、感じ易い若者には（頭の中だけでども）立派にあれだけの悲劇は作り上げられると思つた。可憐ではあるが、ハムレツトのさういふ憂鬱な氣持を導く力のないオフイリアも如何にも女らしい女で面白く思はれた。私は「ハムレツトの日記」も書けると思ひ、我孫子に住んでゐた頃少し書きかけたが出來なかつた。

「清兵衛と瓢簞」これはこれに似た話を尾の道から四國へ渡る汽船の中で人がしてゐるのを聽き、書く氣になつた。材料はさうだが、書く動機は自分が小說を書く事に甚だ不滿であつた父への私の不服で、中に馬琴の瓢簞といふのが出て來るが、事實では山陽の瓢簞なのを何故さう變へたかといふと、尾の道へ來る前父が「小說などを書いてゐて、全體どういふ人間になるつもりだ」といつた時、「馬琴でも小說家です。然しあんなのは極く下らない小說家です」こんな事を私は云つた、父が馬琴好きでよく八犬傳を讀んでゐるのを知つてゐたからで、かういつた私は馬琴の小說は團十郎の圓塚山を見た折りにその條だけ讀んだほかは全然知らないのだから馬琴も災難である。丁度「讀賣」の元日の新聞に頼まれてゐたのでそれを送つたが、原稿料として一篇三圓の禮を貰つた。

「范の犯罪」支那人の奇術で、此小說に書いたやうなものがあるが、あれで若し一人が一人を殺した場合、過失か故意か分らなくなるだらうと考へたのが想ひつきの一つ。所がそんな事を考へて間もなく、私の近かい從弟で、あの小說にあるやうな夫婦關係から自殺して了つた男があつた。私は少し憤慨した心持で、どうしても二人が兩立した場合には自分が死ぬより女を殺す方がましだつたといふやうな事を考へた。氣持の上で負けて自分を殺して了つた善良な性質の從弟が齒がゆかつた。そしてそれに支那人の奇術につけて書いたのが「范の犯罪」である。同じ材料から武者小路も里見も書いてゐる筈だ。

「冬の往來」古い原稿を後年書き直したものである。家族連れで城の崎に行つてゐて、新年號の原稿書きが忙しく、雜誌社の人の督促を受けつゝ二日半で書いたものだ。書き出しの會話はそんな所から來てゐる。雅さんといふ女主人公は私の知つてゐる二人の人から出來てゐる。

「黒犬」これも古い材料で、麻布今井町の交番を一寸曲つた所に小さい駄菓子屋があつて、その獨者の婆さんが殺された事がある。犯人は遂に出ず了ひ、或る夜おそく其所を通り、不圖此小説にあるやうな空想に陥入つた事があつたので、書いて置いた。そして後年それを書直して見たが、若い頃のやうにその氣持に本統にしつくりは入れなくなつた事を感じた。黒犬はその婆さんの飼犬ではなかつたが、全く見分けのつかぬ位よく似たのが二疋ゐて、私が變な空想にとらへられてゐるのを二疋で見送つてゐたので、又氣味が悪くなつた事を覺えてゐる。

「佐々木の場合」新聞の三面記事から想ひついた。新聞には書生は逃げて了ひ、女中は自分の肉を提供した、これだけが書いてあつた。私は逃げた書生にも言譯けの根據はあるかも知れないと思つた。それが、書く動機となつた。此小説は丸四年間全く何も出さずにゐて、武者小路に勸められ、久しぶりでその頃あつた「黒潮」といふ雜誌に出したものである。

「好人物の夫婦」メーテルリンクの「智恵と運命」に感心し、愚さから來る誤解や意地張りで悲劇を作る事が如何に下らないかといふ事を思ひ、それから救はれる場合の一つとして此小説を書いた。「智恵と運命」は永い間よくなかつた父との關係にも大變よく働いた。

「赤西蠣太」伊達騒動の講談を讀んでゐて想ひついた。講談ではこの小説の小江が觸れば落ちるといふ若いおさんどん風の女になつてゐて、下等な感じで滑稽に使はれてゐたが、私は若し此女が實は賢い女で赤西蠣太が眞面目な人物である事を本統に見拔いてゐたらばといふ假定をして、其所に主題を取つて書いた。最初私は芝居や講談や徳川時代の小説の智識から、その時代らしく書くつもりで書いたが、私にはそれがハンデイキヤツプになり、うまくいかなかつた。それから四五年して又それを書くつもりで、舊稿を探したが遂に見當らず、人物の名も分らなくなつたので、いゝ加減に作り、書き方も前にそれで失敗したから殊更さういふ事を無視した書き方をして見た。その後二年程して舊稿も原の講談も出て來たが、講談は典山で人物の名は淵倉仁兵衞といふのであつた。所が更に近年聞いた所によると、此講談の作者は悟道軒圓玉だといふ事だつた。自分は伊達騒動などといふものは昔からのもので新しくさういふ風に自由に作られる事を知らなかつた。最初からそれが同時代の創作と知つてゐれば私は此材料は使はない。自分がさういふ事に少しも氣づかなかつた事は手落ちで、圓玉には氣の毒であつた。圓玉の講談中の女中と此小説で書いた女中とは解釋が大分異ふ。此異ひは一方は所謂大衆對手、他はさうでないといふ所から來てゐる。所謂大衆といふものは私が現はした女中よりも、圓玉の

現はした女中の方を尊ぶらしい。若しさうとすれば、そして若しさういふのが大衆といふものであるならば、その大衆を目標にして仕事をする事は自分には出來ない。己れを一人高くするといふ態度は不愉快であり、いやな臭味であるが、現在の大衆に迎合するやうな意識を多少でも持つた仕事は娯樂にはなつても、仕事にはならない。

「流行感冒」事實をありのまゝに書いた。此小説の主人公は暴君であるが、手一杯に我儘を振り廻はしながら同時に反省してゐる所があり、大體に於て女中を許さうといふ意志があり、そしてその機會は逃がさず捕へてゐる所に自分は興味を感ずる。私は書く時さういふ事は思はなかつた。出來上つた物を見てさういふ所のあるのに氣附いた。然し子供の病氣に對する恐怖心は今から思へば少し非常識であつた。此小説の左枝子といふ娘の前後二児を病氣でとられた私は此子供の爲めには病的に病氣を恐れてゐたのだ。

「十一月三日午後の事」これも事實そのまゝを書いた日記である。然し直ぐ書けばよかつたのを何日か經つて書いた爲め、その事から受けた氣分がその時程強く現はれず、自分では物足らない物になつた。

「城の崎にて」これも事實ありのまゝの小説である。鼠の死、蜂の死、いもりの死、皆その時數日間に實際目撃した事柄だつた。そしてそれらから受けた感じは素直に且つ正直に書けたつもりである。所謂心境小説といふものでも余裕から生れた心境ではなかつた。

「濠端の住ひ」生き物を書く事が好きで、此小説も大部分それである。小説中「夏の蒸々した氣候から急に涼しい氣持のいゝ夜になつてゐた。物産陳列場の白い、ペンキ塗りの擬洋式な洋館の上に青白い半かけの月がぼんやり出てゐた」かういふ所がある。私は實際の場合でかういふ印象を受けてゐたが、これを書いて直ぐ松江の此往來で、往來の北側にある物産陳列場の屋根に月を見る場合は決してない事に氣がついた。松江の人が見たら、腑に落ちない事であらうと思つた。然し一たん先入主になつた印象を捨てるのがいやで私は誤りを承知で書いたまゝにして置いた。

「小僧の神様」屋台のすし屋に小僧が入つて來て一度持つたすしを値をいはれ又置いて出て行く、これだけが實際自分が其場に居あはせて見た事である。此短篇には愛着を持つてゐる。

「焚火」前半は赤城山で書き、後半は四五年して我孫子で書いた。赤城山で書いた時には如何にも書き足りない氣がして止めて了つた。然し四五年して讀むと案外書けてゐるやうに思はれ、後半をつけ、雜誌に出した。そして今では自分でも好きなものの一つになつてゐるが、昨年奈良の若い友達が赤城山へ行き、歸つてからの話に「焚火は好きものでいゝと思つてゐましたが、赤城へ行つて讀むと何んだか非常に

物足りない氣がしました。どうも書き足りないやうに思ひました」と云ふ事だつた。此友達は初めて赤城へ行つて大變氣に入つてゐた。私は友達の此感じは屹度本統だらうと思つた。これと同じではないが、十何年か前、松江の方の加賀の潜戸といふ所を見に行く途中、船の中でハーンの其所を書いた物を讀みながら行つたが、書き方が如何にも誇張してあるやうで、私は少し滿足しなかつた。所が、實際其場へ行つて見ると、それ程強く書いてあつて、受ける感じから云へば未だ足りない位で、自然そのものはもつと強い力で迫つて來るのを感じた。そして自然から迫られるだけにそれを強く現はさうとするのは大變な事だと思つた。そして作品によつては全體の調子に合はし、それを和らげる方がいゝ場合もあると考へた。その場合々々の問題である。

「雪の日」我孫子の日誌で、此翌日の事まで書くと、一篇の小說となるものであつたが、早く新聞に出す必要のある事情があつて、其所まで書かずに了つた。今からではもう書けさうもない。然しあれだけでも私には我孫子生活の思ひ出として愛着は持つてゐる。

「眞鶴」湯ヶ原へ行く輕便鐵道の中から見た兄弟の子供で想ひついた。自身の經驗からは、同じ年頃に聯隊の軍旗祭を見に行き、下士室で下士達や客に酌をしてゐた場末の酌婦のやうな女を非常に美しく感じた事があつたので、それを書いた。後年どう考へても、それがそれ程美しい女である筈はないと思はれるのであるが、その時は、その通りに白に塗つた顏が自分には此上なく美しく思はれた。この記憶を眞鶴で見た子供と一緒にした。「我戀は千尋の海の捨小舟」こんな歌が出て來るが、これは中學の一二年の頃圖畫の教室の板に樂書してあつたのを、並んでゐた友が「戀」とは何の事だといふので說明してやつた記憶がある。それを覺えてゐて使つた。

「雨蛙」「暗夜行路」といふ小說の主人公が前半では母の不義の子である故に苦しみ、後半では自身の細君の不義で苦しむ事を書くつもりだつたので、これは又その反對にその事で妻を一層いつくしむ氣持になる事を書くつもりで、「暗夜行路」を書上げたら書かうと思つてゐたのを、「暗夜行路」が何時まで埒あかないので、これを先に書いて了つた。初めの方はいゝが後半は失敗した。短かいものだが力を入れ過ぎ却つて失敗したやうな所がある。

「轉生」氣輕な戲作。

「大津順吉」「ある男、その姉の死」「和解」これらは材料の點から云つて一つ木から生えた三つの枝のやうなものである。「大津順吉」と「和解」は事實、「ある男、その姉の死」は事實と作り事との混合である。

「矢島柳堂」これは「白藤」「赤い帶」「鷭」「百舌」を集めて一つにした。「鷭」と「百舌」だけに愛着がある。

「暗夜行路」は前篇たけを此本に載せたが、後篇は未だ完結してゐない。然し前篇たけでも一つの小說として見られるもの故、只「暗夜行路」として出す事にした。此小說の主人公を作者自身であると思ふ人があり、批評でもさういふ見方で批評したものもあるが、何所まで作者自身で、何所からがそれを出た人物かを說明するのは困難だ。謙作の出生にからまる事實は總て架空の想像であり、謙作の祖父、兄の信行、お榮などには遂にモデルを見出す事が出來ず了ひになつた。「暗夜行路」に就いての思ひ出だけでも色々あるが、紙數の都合で書ききれない。以下の九篇と共に略する事にした。(昭和三年六月七日)

維新回天史の一面（其七）

久邇宮朝彦親王を中心としての考察

蘇峰 德富猪一郎

（第四十八）青蓮院宮の攘夷論

そもく青蓮院宮の攘夷論は、一朝一夕の謂でない。それは隨分根深きもので、恐くは宮が奈良一乘院に在せられたる時からの事であらう。今宮に側近したる山田勘解由の語るところによれば左の如し。

『安政元年の春、我が主人青蓮院宮様の御殿へ近衛公、三條實萬卿、三條實美卿、綾小路卿の御四方前後一時に御出になつたことがある。其時宮様より酒肴を出されて、四方山の御話の末に、宮様が當時幕府で拵へた一朱銀を御見せになつて、御前方は此金を知つて居るか。と御尋になつた。四人の御方は何れも、唯今始めて拜見致しました。と仰しやつて珍らしがつて居つしやつた。其時宮様は、此頃西洋人が浦賀に來てゐるのは實に我國に取つて心配の事ではないか。一體お前方はそれを何と思つて居るか。と仰せられた。綾小路卿は慷慨して、同論の御答へがあつたが、近衛公仰せらるゝには、天下の政治は關白の關する處であります。宮様御法身でありますから、其様な國家の政事向の御話を遊すのは甚だ宜しくございませぬ。御所に聞え

て萬一御不都合でもあつてはなりませぬから、以後は御愼み遊ばして然るべく存ずる、と申上げられたが。獨り三條實萬卿は始終默して何とも仰しやらなかつた。それから後は誰も外國人の事などを口にするものはないやうになつた。それより程經て三條實萬卿御一人で宮樣の處へ御出でになり、日外尊邸へ伺つたる節仰せられた外國人の一條は私も至極御同論で、實に國家の大事であると存じます。是は京都に於ても傍觀して居られる場合ではなからうと存じます。と所謂胸襟を披いて御話になつた事がある。是が公卿方に於て攘夷論の起つた始である』

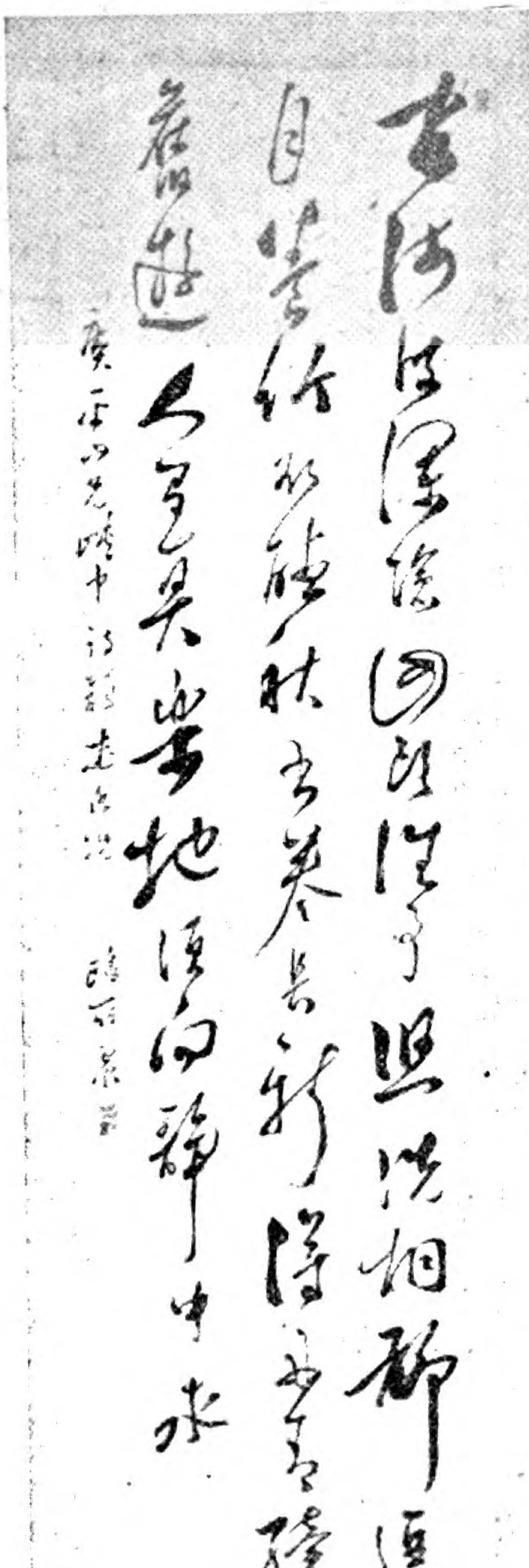
斯る次第であれば、堀田が川路岩瀨を率ゐて手もなく關東の思ふ樣に宮を說服せんとするも、とても出來べき事ではない。當時宮の思ふところが、即ち孝明天皇の宸慮のあるところ、孝明天皇の宸慮のあるところは、即ち宮の思ふところで、宮を動かさざる限りは到底宸慮を動かす事が出來ず、さりとて宮を動かすことは容易でないから、幕府側にて宮を目の上の□としたのは、無理もない事だ。

(第四十九) 靑蓮院宮と橋本左內

扨て人を射れば先づ馬を射よといふ言葉の通りで、橋本左內には先づ宮の最も親しき三條實萬卿を動し、次に追々宮の方に深入りして行つたことは、前にも書いた通りである。而して彼は宮に向つて、それぐ〜その意見を申述べた。その顚末は彼の報告書にそれぐ〜書いてある。今これを左に掲ぐるであらう。

『三月六日粟田へ罷越、靑蓮院宮樣へ歎願仕、何分廷議相決仕候樣、相願候積にて罷越候處。過日來、御里坊へ被レ爲レ成、未だ還御無レ之旨申居、依て一封相認密疎仕候。其趣意は、當今之事實に不ニ容易ー御事柄、既に過日來『御寵臣迄主人存込、並乍レ恐も賊臣見込之義言上仕候處、爲ニ皇國ー厚心配仕候條、御滿悅之趣被ニ仰下ー誠以身に餘感激仕候『藏人(近侍役奉行兼勤伊丹義賢)內密之義は、御目見相願候か、又は書取にてと申聞候譯も御座候故奉ニ恐入ー候得共、御左右の侍史迄內々書取奉ニ指上ー候。乍レ恐近來廷議遷延仕候義、無レ據御事柄とは申條、畢竟公臨の御爭よりは、正邪之爭と相成居候樣

奉レ存候。此儘にて彼此日數も遲延仕候はゞ、忽内亂可レ生、左様相成候ては、御國内之奸雄窺隙て動候者も可レ有二御座一、夫等より益關東之事惡様御聞込候はゞ、實に外患より内變共可二相成一歟に奉二愚考一候。
主上には御聰明、宮様には御相談も不レ絶被レ為レ在候御儀に御座候へば、兼て御懇命蒙居候、川路左、内々御呼出に相成東方之、見込と御所之思召と御打合せに相成、矯レ枉爲レ直削レ此塡レ彼候様極内御決定被レ遊、廷議に不レ拘、叡慮にて右御斟酌之處、斷然御降勅とも相成候はゞ、天下之人心忽相定可レ申、諸大名の内通も相止、却て天下清肅可レ仕候。乍レ去川左之義自然御疑も被レ為レ在、先日罷出候砌様の御咄振にては、彼も赤心は打明し申間敷奉レ存上一候。且又乍レ恐宮様に御定見被レ為レ在不レ申候ては、彼も屈服仕退考候て盡力は申間敷、御定見之處は過日之御論にても、三百年來之徳川故、其厚誼は於二朝廷一堅御忘不レ被レ遊、依て和戰治亂共賢明之副將無レ之しては不レ叶よしと奉レ伺候。愈其處にて御主張も被レ為レ在候はゞ、誠以難レ有仕合に奉レ存候。偖諸大名近來縉紳家へ手筋を求瞞弄致候様相聞申候。此似レ忠非二眞忠一と奉レ存候。其故は天朝を崇奉可レ奉義は天下統一之義にて、主人抔には兼て王室之義は格別に存罷在候得ども、今日之事柄に致候ては、眼前之幕府へ不レ盡レ力して、却て内々言上仕候は畢竟賞レ忠獻佞之手段と奉レ存候。此等浮薄之者爲に御動搖



岩瀬忠震筆蹟

御座候ては、朝廷之御威光にも拘り可レ申哉と心痛仕候。此邊は南北朝の節、諸も有レ之事に御座候て、彼朝共南北申出を中黒に仕候様の人々を御倚被レ成候と、乍レ恐皇位危之基にも可二相成一、幸ひ主上始め徳川家御扶援之御見込に被レ爲レ在候はゞ、益々衆目を醒し候程此處へ御盡力有二之上一候。云々。人意認取、伊丹藏人へ相渡（此中は諸留を恐候故、直に御返し不レ職、後手に入申候）歸掛候處、忽還御の御沙汰故、又暫時控居候所へ藏人を急に召に參り、藏人出勤後、小拙申上候趣々且自分了簡之口上仕候處、暫小拙に控居候様の事にて、無レ程退出の扱延議甚御困難に相成申候。其譯は九條殿門景況一轉、依レ之宮様御相談の處、殊の外御忌被レ成、傳奏より内々移りを以て宮之御參内指留申候（此時宮御中坊に被レ爲レ在候處、御耳に入るや否、疾風の如く御供揃被二仰出一、御本坊へ御引取の由）近衛家も同様三條へは未だ何之沙汰も無レ之よし。依レ之指當り事務は御論不レ被レ遊御考之由、西城（一橋公擁立）之義は宮にも格別の御心配にて、既に一兩日以來は、其處のみ御熟慮に相成、今兩三日も立候はゞ、主上にも其御手段御始可レ被レ遊之處、爲二奸人一被二離間一候は口惜と、只今殊之外御憤怒被レ爲レ在候。川左之義は可二相考一旨被レ仰候。多分今後は通商と相成可レ申、萬事關東へ御任せに可二相成一哉。扨一橋西城之義、陽明家、近衛左大臣忠熈公）轉法輪家、三條公、宮等は御決心候へ共、關白は南紀之よし、何れ紀より指込候哉と不レ存候。乍レ去宮之御參内表向御指留には無レ之、主上には御承知不レ被レ爲レ在御事故、何れ近日には御參内可レ被レ爲レ在、其節は尚又近衛家へ御相談被レ遊、此一義丈は是非爲レ遂可レ申上と申居、依て關東方にも、諸大名より手筋相廻り候儀も、尚又心得居候。至極尤なる事と被レ仰候。』

（第五十）川路聖謨と青蓮院宮

尚ほ川路と宮との取合に就いては、橋本の報告書がある。今これを左に掲ぐるであらう。

『八日粟田より今晩明早朝之内可レ來旨被二仰越一候故、午後野道より大津迄行き、歸途罷出候處、門前に馬鈴有レ之、此は果して川左也。心中に得計と悦び、夫より伊丹へ忍入候處、今日は未だ退出不レ致旨に付、稍久待居候。兩合の上拶察

一に川左如何申候哉と相尋候處、今日宮より川左可レ被レ召思召之處、彼より推掛參上申候。依て宮被レ話候は、今日は此方も萬事打捨、我も（宮樣は奉行にてもワレ〳〵と言放に被レ成候）役前を忘れ話致度、扨捨身之體にて預る事には無レ之候得共、此宮は近衞寺元にて第一の旦那に候。其旦那より被二相賴一候一事有レ之に依て、我れの才智を假て事成就致度如何、無二伏藏一可二申呉一かと御問被レ成候處。奉レ畏候、私力の所レ及は可二申上一候と御請申上げ、夫は何事に御座候哉と申す、夫は外に無レ之、大樹御病身虛弱に相違無レ之、依て西丸養君立度旨御台（將軍家定公の室篤姬君）御方より御賴み、外諸侯よりも申參り候よし、依て何とぞ我に賴度候。此事を備中へも談可レ呉か、此方之考にては、當今天下之勢を振ひ、諸侯之疲弊を救ひ、夷狄の禍を遠け候爲には第一の上策と存込、近衞申すも尤と存候。我は如何存候哉と御詰問。川『御請に御尤至極』宮『去らば我と備中と心配可レ致呉』川『夫は參不レ申』宮『何故に』川『私共君之病身を嫌、明君を擇立候と、丁度廢立を行ひ候に當り、皇國の大道に背き申候。此一義私共手にては首は落候ても出來不レ申と御答申上候』宮『夫は隨分尤なり、去らば德川は亡びても、皇國は滅びても、我の首は落さぬ見込か』川『夫は左に非らず、廢立を計候臣有レ之時は、皇國は忽滅亡可レ申、廢立を謀らぬ臣多き時は、御萬安と奉レ存候』宮『夫は隨分聞えたり、左あれば我等は今日之衜艱少爲に、明君は不レ用と見えたるな』川『左樣に無二御座一候。私共も天下大計急務此に止ると存じ、同志者一統種々肝膽を碎居候へ共、右之廢立に當り候事は不レ得レ行勢、御推察奉二仰希一と申候。』宮『至極尤なり。去れば勅諚に出候はゞ如何』川『難レ有奉レ存候』宮『乍レ去其次第は如何、我之智惠を假度者也』川『其は御使が大事にて關東役人共に於ても叡慮難レ有奉戴不レ申しては、却て害とも相成可レ申、其思召を熟く被レ移候御方御人撰之上は、御至當不レ過レ之と申。』宮『左あれば廣橋は不レ叶、東坊城は如何』川『不足に御座候』宮『議奏は如何』川『不足に御座候』宮『三條內府は如何』川『彼御方は長く傳奏御勤にて御行諸御方辨一統奉二感服一候。此ならば十分に御座候。』宮『夫はよけれど、此は大臣故、關東へ勅使には餘程六ケ敷、併尙又勘考可レ申候。扨櫃は出來たれど主は未だな

し、此玉は誰々ぞ。『川稍久しく考居、關東宗家中一橋に過る者なし。是非此に限候』と申上候處、宮『此方も大抵右樣に存じ候』と御話被レ成候。其は鎖港和戰之兩字何を取候に哉と被レ仰候處、川『和を取候』宮『其に見詰有レ之候哉』川『見詰無レ之候』宮『十年位は倒には成間敷哉』川稍久しく考候て『今年にも來年にも知れ不レ申』宮『左らば何故和の字に候哉』川『其外致方なし。若打拂之命御降候はゞ、私共一同東へ向歸りは申間敷候と御答申上候由。其外の義は略レ之。

右川路罷出候は、全く宮樣迄御模樣探索之樣に御考被レ成候よし、偖右川路之說大に害を惹出申候。』

（第五十一）青蓮院宮と幕吏

猶又た宮に就いては左の通り報告書がある。

『一、十五日朝、青蓮院宮樣、三條樣、中山樣、海防係被レ仰付（依レ之正論家安心仕）三條樣には來る十六日御遷官にて前内大臣に被レ成、廷議には御關無レ之樣御成可レ被レ成筈〇處、御遷官後も矢張御參與（一條家は退て御與り無レ之方宜中位）可レ有レ之と申事にて、此節日々の御參内に相成候事。昨日今日共、三條家へ罷出候處、別之御咄も無レ之、『取りに西城の御一事御下問御座候て、若此關東の趣意に背反致し候ては如何と申し御懸念被レ仰聞候故（蓋事關東へ御念入候事如レ此）其義は必定無レ之段申上候。然る處被レ仰聞振之義も、内密御相談御座候て、遂に年長、英傑、人望之者と申すに相定る』此頃土侯（松平土佐守山内侯）より轉法輪家（三條家）への御内書に、政多門に出候は識者之所レ忌、且後醍醐帝云々の御論御座候。此義を殊之外御心痛被レ遊、萬一過日申遣候内々此方手控同樣の書付、越公抔へも御見申上、諸方へも響候て役方へも耳に入り候樣の義は有レ之間敷哉との御沙汰に御座候故、土侯は蕩東磊落の御氣象には被レ爲在候へども、機事には存外御愼密、決して傳播氣遣無二御座一候。又此御論も今日の爲に御發御座候義に相違有二御座一間敷と申上候處、聊か御安心の御樣子に奉レ伺候。

『西城御發之義は、今般勅答同時の御見込の由御物語。』

此日粟田（青蓮院宮家）よりも早々來與候樣申來、委趣

候處、長談に相成、夜分罷歸候。今般廟堂一變致し、強勢に相成候得共、此は全く虚陽亢盛之事にて（大閤も眞の見詰不レ被レ爲レ在）迚も朝に實力無レ之故甚不安心の至、依て何ぞ充全の策も有レ之間敷哉、乍二內々一建策致異候樣にとの頼有レ之、依て一通挨拶致し置、何分公武御熟談にて速に長策相定め候事、肝要之條（談話略レ之）陳述し、罷歸る』

× × ×

而して如何に宮が當時の幕府側に睨らまれてゐたかは、三月二十四日附橋本左內が中根靱負に與へたる書中に、

『此表近來宮家の嫌疑夥、諸藩の者公家へ立入候事迄六ケ敷相成申候。是迄は武家を怖居候へども今日よりは宮家を恐れ申候』とある。

この宮家とは申迄もなく、靑蓮院宮の事である。尙ほ宮と川路との問答に就いては前にも揭げた通りで、川路が宮を嚇しつけ、その爲に大いに宮の感情を害したる由であるが。尙ほ川路の記錄をみれば、宮はなか〳〵上手く川路に應接して居られるやうである。今少しく川路の方面からして宮を描くであらう。

川路の日記をみれば、安政五年二月十日の項に左の如くある。

『十日晴。靑蓮院宮より御尋被レ下、是非御逢被レ成度候處此節柄、世間之聞え如何可レ有レ之哉、依而は御用濟之上にて、一日必參り候樣との御沙汰なり。然るに御用濟之上は、其翌日にも出立之含に付、難二罷出一、其以前に候はゞ、備中守殿江伺之上、否可二申上一旨申遣す』

又た十八日の項に左の如くある。

『靑蓮院宮より、大造に立派なる御菓子、並御茶被レ下レ之。御使之者申に、南都にて御懇意の昔に被レ爲レ替候ことは無レ之候に付、來る二十日參殿之節、刀をも菊之間まで可二持上一、且午刻より可二罷出一被二仰出一候得共、兼而御噂も有レ之、必朝より御待可レ被レ成候間、少も早く參殿候方、御氣色可レ宜旨等に候』

又二十日の項に左の如くある。

『廿日雨。九ツ時より靑蓮院宮に罷出る。歸宅六ツ半時なり。不二相替一之御懇に而、兩親より妻子孫共のこと迄、夫々御尋有レ之。八ツ半時頃より、御酒被レ下候而例之御酌等給り申候。當春主上御內宴之節、御用ひ有レ之候御陶盃にて、御酒被レ下候に

付、甚恐入而、雖レ有レ存、これは江戸えの、みやげにいたし度と申上、御返盃は不ニ申上一其まゝ所数に而拝飲候。扨々奈良一乗院宮に、被レ為レ入候頃よりは、乍レ恐御學問も、御進之御容子に而、當春、孟子滄浪之水の章にいへる自取之也と申所に、深く御感ありて、御戒のため、日々御覽の出仕にて、侍讀の儒に御記させ有之候。御扇子拝見被ニ仰付一候ゆゑ、感心仕、人君の御學問は、孺子が滄浪の歌を、かく孔夫子の仰せられたるがごとく、耕夫漁人等が、いふことにても、よきは御取用ひあることにて、よく諫言をも御用ひあるべきは勿論なり。よりて此章に、御心を用ひさせられたるは、奉レ感候よし申上る。夫より左衛門尉が、例のおどけ話等にて、かしこくも御勘定所にて、はなしのごとくなるなど、申上候處、大に御笑ひにて、京都に參り、六七年中關東の人と、かくはなしたることとなし、久く奈良以來の懇意別段なることとなりと仰せありて、強て御とゞめ故に遲くなりたり。又これみよ、われが片みと思ひて、今に持居ると御意ありて、先年奈良にて差上たる、橫づくしの御きせるを御取出し、拝見被ニ仰付一たるぞ、ありがたし」

又三月八日の頃に左の如くある。

「八日晴。青蓮院宮へ、御暇乞として罷出る。いつも御目見も難レ計由申上たるに、幸ひ御閑暇なりとて、御居間に被レ召候而、いろ〳〵御物語あり。けふはよい所の日なり、扨これにも、それがために、逢ふことも出來るなりと、御意あり。兼而尊圓親王之御書、拝見之義願置たるに、其御大字之御卷物、又は御掛物の御うた合、御たんざく等拝見被ニ仰付一、就中尤御短尺は、丈も巾も小さく至て御手輕なるものなり。御歌合など、古き經文の裏に記しあり。いにしへのさま、思ふべし。御暇乞申上たるに、いつ再會もしれず、さて〳〵殘り惜しきこととなりとて、御酒被ニ下置一、不ニ相替一御懇之御事に有之。夜に入退散なり。いろ〳〵御意ありて、さて〳〵惜しきわかれなり。品に寄、其土ならでは逢がたしとの御詞ゆゑ、上には千歳の後、佛とならせ給ふべし。私は遲くとも十年、廿年には、其地へ可レ參ことなれど、武士故に修羅道へ陷りて、義烈の鬼となるも、又其分とも可レ申哉、いづれにも別段ゆゑに、御目見は今世よりも、かたかるべしと申上たるに、殊之外の御笑なりき。御家和のはなしに、左

衞門が、奈良にてかく申たりなど、よく御異見めきたるとは御覺にて御意あるよし、難レ有ことなれば、けふも又例の狂直をも申上たるに、よく御聞有レ之たるけしき、難レ有ことなり。』

併し宮はなかく\川路輩が勝手に操縱し得る御力ではなかつた。繼嗣問題では、むしろ宮も川路も同一意見であつたが、假條約の一件に至つては、宮はなかく\手剛かつた。而して橋本左内は、いづれかと云へば、目的は繼嗣問題であつて、外交問題は、繼嗣問題が定つて後に定むるも晩しとせぬわけであつたから、强ひて外交問題では宮と爭ふやうなことはしなかつた。されば橋本の意見は宮に最もよく入つたものと思はるゝ。



川路聖謨肖像

であつた。その事に就いては、誰よりも主上が最も宸襟を惱まし給うてゐた。今その事に就いて孝明天皇から、左大臣近衛忠凞に賜りたる宸翰を掲ぐれば、左の通りである。

『左大臣殿　　　此　花

御机下江

不順之時候専一御用心と存候事、早々御快復拜貌吳々も願入候事。

實に天下之一大事深悲痛仕候事、

乍レ毎大々亂書高免御推覽願入候事。

此花謹言

快晴乍レ兎角難レ去春寒候處、倍々尊公御安泰令レ賀候。御所勞追々御快方に被レ爲レ在候哉、承知致度候。精々御大事に御用心御壯健之段祈々存候事、餘り々々御無沙汰申候間、御面働之段者恐縮乍一筆令レ啓試レ候。且亦過日者以二青門一（青蓮院宮）愚存申試候處、御承

（第五十二）　孝明天皇と鷹司太閤

元來京都に於て歎派の大將は九條關白よりも、寧ろ鷹司太閤

知之上段々承忝存候。其後モ段々ト日々議奏抔共談候ニ、何共心配之至ニ候。太閤（鷹司政通）右府（鷹司輔凞）之處何共見込違之様子内々承、其上武傳モチト堀田申條ニカタフキ掛候模様聞候半デモ無レ之、誠ニ々々心配仕候。此節デハ關白（九條尚忠）ハ大分キバリ被レ居候由、先々其ガ頼ニ有レ之候。何卒關白之心得違無レ之様ト其已存候事。尤キバル可聯分ガ心得違有レ之、虚端ナ返答振ニ成候而ハ、實々一大事ニ候。諸大名以下人々者叡慮次第ト申、皆ドウカ私ヲ當ニ目サレ候様子ニモ承候得共、私モ兼而御承知之通愚昧短才之質中々前件ハ少シモ無レ之候。然又過日御目に掛候書取之様成物乍萬々一ハ麁忽乍モ、所存出候義モ無レ之ニモ無レ之乍、其サエ諸方江不レ通中道ニ而霧隔候而ハ、誠ニ々々歎ケ敷存候。實々今度之義ハ誠ニ々々重大事ト他事ト替、少シモ見込ハヅレ候而者後世ニ至、天下之禍ト實々心配仕候。其上關白江不ニ申聞一太閤邊斗ニ而濟候事モ、ドウカ内々乍武傳方ニ有レ之由モ承候半。而モ無レ之左候バ私モ不レ知又所存不レ在可笑ナ物ニテ事治定ニ成候ハ、誠ニ心配之至ニ候。世上の風評モ此節太閤ハ甚悪敷様子、扨々氣毒々々之事ニ候。

關白ハキツウ善評判之様子左程ニモ無レ之候半ヲ然々右一件ハ餘程キバラレ候由ニ候。右ニ付私存候者何分ニ茂人心折合、人和肝要ニ存候。何卒過日も以ニ宮門一申入候通御親族之大名方（薩摩、仙臺、津輕等近親トス）へ内々ニ而モ右存意御洩有レ之候而各承知致居候ハ、萬一今度可笑ナ返答振ヲ成候共、一筋之心意ハナレ間敷哉。ツマリ私ガ宜者ニ成度ニ而ハ實々決シテ無レ之何分ニモ日本國之爲故私一人之爲ニ而ハ決シテ無レ之候。其段御賢察希入候。何分ニ茂此度之返答之處、只今之模様ニ而ハ私始勅答方々之御所存通ニハ、チト成兼候半ヤト、心痛仕候。仍鳥渡御尋申試候者

御親族之武邊之見込沙汰ハ、以ニ何様一成義ニ候ヤ、實ニ只今之處ニ而堀田申通戰爭ハ致難ヤ、又者隨分好候模様ニ候哉、鳥渡御尋申入候事。

昨日モ武傳ヨリ披露候而亞米利幹約條和文下案一冊

右者約條ドウカ治定之様ニ而中々私所存相談ニ而者無レ之様子ニ候。此中ニハ大分之事モ有レ之候事、

此餘實に六ケ敷世ニ成、扨々困り々々入候。右鳥渡此段申入置候。又々御所存モ被レ爲レ有候ハヾ無二御隔意一承度、左候バ、又々勘考之種ニモ成忝存候事、何分ニモ御快氣次第得二拜顔一度候事。

甚々申兼候義且

御心慮之種茂以何カ難レ斗候得共、押而申入候ハ、他事ハ扨置此一件ハ必々

鷹司一家之沙汰ニハ

御ナヅミ無レ之樣ト存候。何卒願ハ尊公モ私之味方ニ御成被レ遊被レ下候ハヾ

厚恩難ニ申盡一畏々入候事、呉々モ御ジヨサイハ不レ被レ爲レ有乍、御キバリ御配慮希入候事色々ムザト不二相替一御心易之不レ顧二前後一申入死罪難レ逃候事。

誠ニ過日ハ兼而ノ薩州ヨリ之寶筒被二送下一先以忝存候。即開見候處過分之御品大ニビツクリ扨々御立派之仕立、誠ニ誠ニ日々々用候ニハ宜過候事ト存候。然々珍敷仕立萬端實ニ大ニ喜悦無レ限候宜御禮申入候。又々御序之節右喜悦之段御傳達希入候事、何モ荒々。

呉々モ色々ムザト申入恐縮不レ少高免願入候事。御所勞之折柄

御面働恐入候事。尤々御快節御勝手ニ御覽願入候、御返事ハ尤亞相ニ而モ

御代筆ニ而賜候樣希入候事、何モ荒々。

(安政五年戊午)

二月十六日午半刻認　　此花

左大臣殿

御机下江

(第五十三) 鷹司太閤と九條關白

然るに橋本の盡力のみとは云はぬが、彼の盡力にて鷹司家の諸大夫小林を動かし、小林及三國大學等の手をもつて漸次鷹司太閤政通、及その子右大臣輔熙を動かし、いつの間にか彼等は硬派となつてかへつて從來正義派と云はれたる九條公が、その本色を暴露して來た。九條公は幕府に向つては極めて軟論を唱へ、朝廷では硬論を主張してゐたが、最早いづれにか本色を定めねばならなくなつて、公々然として、幕府方となつて來た。

而して彼の背後に井伊直弼あつたことは云ふまでもない。當時橋本の向うを張つて如何に長野主膳が運動したかは、左に掲ぐる長野主膳の九條尚忠に答へたる文書をみても、理解せらるゝであらう。

「右の御出之御趣意奉レ畏候。早々江戸表主人方へ申入御返事候て可ニ申上一候。併今より江戸表へ飛脚相立候共、御返事有レ之候迄は餘程の日數も掛可レ申、且拙者も追て申上急々下向仕度譯柄も御座候得共、此一件は天下之大事ヲ思召候處より御懇命之次第ニ付、拙者一分はいつ迄も逗留仕候ても宜布御座候得共、其内ニは御老中も歸府可ニ相成、尚又此義ニ付てハ主人存意之旨ハ兼て承知は仕居候間、乍レ恐拙者より御答奉ニ申上一候。兼て主人之思召承り候處ニては元來紀水いつ方ニて茂御人之好嫌は更ニ無ニ御座、又薩州申上候如く當時之御事一ツニても御年長之御方と申も理之當然には御座候得共、併世間之樣子考へ申候處、夫々存意之旨相違之廉も可レ有レ之候へども、終ニ野心を指挾異存申張候大名も無レ之。治平打續候事は全く大將軍家之御威德ニテ第一東照宮之御恩澤天下ニ溢れ候故ニテ御座候。然ば天下之治平は大將軍家之御威德ニ有レ之事ニテ賢愚ニ而已有レ之儀ニテハ無ニ御座、且亦ニ皇國之風儀ニシテ外國と異る處ニ御座候。然ルに今御血脈近き御方をおきて發明之方にと申候ハゞ、外國流ニして正統ヲ可レ奪儀、皇國之風儀ニは無レ之事ニ御座候間、主人ニは何國迄も御血脈近き御方ニ天下之人望ハ可レ有レ之との思召候。此一條ヲ以主人之無レ私所存は御賢察奉レ願度、其餘は可ニ申上一よしも無ニ御座一候。大將軍家は武家一統之棟梁ニテ御座候へば、大將軍家之威德は天下治平之根元ニ御座候間私意ヲ以て論義トハ不レ奉レ存候。尚又拙者共之愚存ニ仕候而も如ニ台命一大將軍之思召ニ可レ有レ之義にて御相談之節も候て御內間之大名ヲ以可レ被ニ申上一候。然ルニ外樣之處持衆之荷擔ニテ西丸御相續之內願は第一不レ得ニ其意一事共に御座候。ケ樣之義を御取持被レ遊萬一相違之節も出來候節は、國亂之基本是より早きは有レ之間敷奉レ存候。右申上候條趣意相違之義も御座候ハゞ、主人より早々可レ被ニ申上一候。其邊之事ニテ候はゞ此返事は[illegible]之上迄御猶豫奉レ願度候。

右之通申上候處、尤之義ニ候間、猶爲レ念早々江戸表へ申遣候テ別義無レ之候はゞ、返事ハ義言歸府之上ニテ可レ然旨の仰出候間、猶此上可ニ相成一ば別段御返事ニ及不レ申樣ニ迄仕罷歸度義と奉レ存候。以上。』

こゝにある義言とは、長野主膳の名乘りである。

(第五十四) 江戸における暗中飛躍

扨又た當時江戸に於て、如何に狂言が仕組まれつゝあつたかは、井伊直弼が長野主膳に與へたる長文の書翰が、最もよくこれを說明してゐる。今左にこれを掲ぐるであらう。

秘密入り組候儀察讀、猶不審ハ早々可ニ申越一候。

一、我等見込と申は兼而聞置候通赤坂(紀州のこと)より外には致方も無レ之、此節柄ニ付明君を立可レ申と下より上を撰ミ候ハ、全く唐風と申者、況や我身之者ニ勝手ケ間敷御撰出可レ申譯合て無レ之事不忠之至りニ候。右は堀田にも初めより同意之候然る處、今時小石川(水戸家)之一黨御役人にも歷々之者之人氣集り候節には、是又失望致し人氣散じ候一も一大事、如何可レ有レ之哉と堀田申聞候間、我等申候には、明君を撰出候からは直に御代に不レ致而は其詮もなき事、是れ眼前之儀、然る時は乍レ恐公方樣には大御所樣と申樣に相成可レ申。右樣之義出來候ては累代御厚恩の者共、彌是失望候より人氣立可レ申、是は誠に目前之儀より御大事に無レ之哉と申候處。堀田にも至極尤之義何れにも下より上を撰み候と申事、何國までも道ならぬ事、兎角に此頃之人氣今又御續柄はケ樣〳〵と申事言上之御英斷を伺ひ候より外は無レ之。其上思召候處何國迄も申通いたし候樣心配致候より外ハ無レ之、未だ老中一同相談も無レ之、近日是非相談之上言上に可レ及と申事に付、未だ老中一同相談無レ之旨申おくれ候次第、早々相談可レ然と申居候。其後堀田思切りて老中一同相談に及諸人之爲御用御取次をも席へ加へ、堀田發語相談有レ之候處内心は如何にも表向之處、何れも堀田同意其内にも伊賀守(松平忠固)は全く之同意に有レ之、一老之事に付大に强ミニ而正月十六日御前に而御養君之義不レ遠の極に相成可レ然段言上に及候處。上意には此儀猶而深く心配致居可ニ申出一とも仰候處、今日迄其義に不レ及、右ハ彼是申立候者共有レ之候とも、一橋に而は決而不ニ相成一儀

御先々代様御續も近く紀家ゟ被而御心ニ御取極御座候由。誠に御速成下意、老中共も感伏仕不殘御尤ニ思召、御内意之段奉レ畏候趣御請申上候と申事、其節伊賀には別而難レ有思召之段言上も致候と申事、右之御手續き委敷儀は夏目左近將監より内々承り、兼て萬事深き思召被レ爲レ在候儀には伺居候得共、右御一言は實に難レ有次第に候。尤前父通り我等にも如何之上意可レ有レ之も難レ計、其段御案思申上、堀田にも道行何とか申上置度と託申候へども、其儀にも不レ及思召通り御仰出候御様子、實に難レ有事に候。右御一言に而老中には決断に及、一向右一條ハ當時談合も無レ之、堀田歸府之上と申事に相成候由。猶又土岐丹波守、鵜殿民部少輔正月八日頃、御前へ被二召出一アメリカ之一儀御直に御尋之砌、右兩人御養君之儀御進メ申上候由、御目代とは申せど事柄にも依候處、彼等の身分として御直に右御大事を己が勝手に宜敷様御進め申上候と申すは、以て之外なる事と風聞も有レ之。右之人物如何にも右様の儀申上候も難レ斗、如何哉と存居候處、此節御側衆之内に而右兩人御前へ出候節、自然右邊之儀申上不レ申哉段、相伺候處。上意に如何にもアメリカ之事濟て養子の儀申聞候得共、聊も取合不レ申との御沙汰之由。誰とても氣に不レ入事など申せば、先は默止難きものに候處、御心に御納め被レ遊御伺申上候迄は御沙汰も無レ之と申も、中々拙者に而恐多き事申上候樣成譯に而は決而無レ之、感服仕候儀に御座候。何となく右兩人にも思召に不レ叶と申事ひどき候事哉、元來輕卒人之事に付氣味惡敷思居候と申聞も有レ之候。猶又越前には是非〳〵一印に致度と種々骨折、田安殿抔へも申込、種々之催促に而御困りと申風聞も有レ之候。土岐、鵜殿、越前へ同意、老公之誤り證文出候も、此邊に而取扱候と申事色々謀斗も有レ之樣子に付、油斷は成間敷、堀田にも何卒早々歸府無レ之而は、萬一留守之虞に乘じ如何樣之儀出來も難レ斗、歸府を而已待居申候。右荒増之處、極秘密を申遣候。右樣上之御英斷御振り被レ爲レ在候儀、元來本筋之御事にも有レ之。たとへ越前如何樣に申立、薩州又は御臺樣之御賴たりとも上の思召通りに取計可レ申は、臣下の當然之儀、堀田とても同樣之見識は兼而承り居候次第、伊賀守も右之上意を殊之外難レ有心得感服致居候樣子に候故、御子細は此上有間敷事之樣に我等には存

候。尤此御一條は我等へ御尋に而も有レ之節の御答萬一大と申事、是は上御決心之上に而御尋に候へば彼是は無レ之、其上道理に於ては御尋可レ有も難レ斗候へ共、今日之模樣に而は我等一人で御尋と申儀は決而無レ之、御尋となり候へば同席一同之儀に相違無レ之、先は夫迄には及申間敷と存候。右等之儀心中に相ニ含之、程能關白殿へ御答に及樣致度、然し此一條は餘り餘り御膝元之義洩れ申間敷事柄に付萬一評にても他へ洩れ候ては相成不レ申、關白殿へも其段堅く御心得被レ下候樣、事少なに申上可レ然と存候。

一、當地此節相替る儀も無レ之、堀田留守中老中退出も早く相成、先々御手透と申事ニ候。然ル處去ル廿日京都より飛脚着ニ付廿一日又々退去遲れ候由、未ダ子細相分り不レ申、堀田よ



堀田正睦肖像

り八何事も申不レ來、川路、岩瀨抔より同役へ之文通と申事ニ候。何ハ京都ハ思ふ樣ニも不レ參甚心配と申事、歸府も何頃ニ相成可レ申哉不ニ見通一之段申越候由。猶又アメリカ使節大病之處此節全快ニ付、又々出府致度と申候由、何れ堀田歸候迄は下田に居候樣ニと諭ニ相成候由ニ候へ共、兎角江戶へ出待居申度と申何か疑惑も致候由ニ付來月節句迄にも出府ニ相成可レ申哉ニも風聞致候。右之御用ニ付退出遲れ候賦ニも申候。扨川路左衞門儀ハ姦惡之者ニ候處、追々不レ宜儀も相分り近々左遷ニも相成可レ申風聞當人耳ニも入候樣子ニて、彌御不爲を取計候由、此度抔も如何之隱謀企候も難レ計。右樣當人覺悟致候位之者も矢張其儘使ニ〳〵と御使ひ被レ成候儀ハ實ニ不ニ覺成一御處置と存候事。

一、此一兩日風聞ニ殿下關白殿急病と申事又ハ縊死抔とも申候。如何之儀ニ候哉、老人之事ニ付定而病氣儀ニ發シ候事抔と遙察致候。一寸爲御知申入候。外ニも種々申遣度儀も有之候へども、指掛り存出シ不申、何れ書殘之儀ハ又々申遣可申候。早々以上。

二月廿六日認メ　左九良田（井伊直弼）

桃之屋大人（長野主膳）

以上所記によりて、如何に井伊直弼が、虎視眈々として、京都に於ける一橋派の運動を狙ひつゝ、其裏を掻く可く、暗中飛躍をなしつゝあつたかゞ思ひやらるゝ。

（第五十五）　京都の情勢

憐れむべし、橋本等は生きる死ぬるの骨折をして、京都から勅諚をもつて繼嗣問題を定めんと努力したが、最早江戸では將軍膝下にて一切の事は殆ど決定してゐた。而して切角橋本等の骨折も、殊に一橋と名指し給はざる迄も、人望、賢明、年長の三ケ條に就き、特に其の意味を勅諚中に書添へることになつたが、九條關白の手筋から井伊一派の逆動の効果があつて、遂にそれらの特定的文字は一切削去ることとなつて、唯だ言葉の上では、年長などといふこともあつたさうであるが、文句の上には一切それを書き表はさず、折角出來上つたる勅諚も淡々水の如し、一橋黨にとつて、殆ど何等の効果もなかつた。抑又當時に於て幕府の勢力は九條關白を通して漸次正論派に及び、遂に三月六日九條關白は青蓮院宮及近衞忠熈、三條實萬の參朝を止むることになつた。その次第は前に掲げたる川路の日記にも示してある通りだ。これに就いては近衞忠熈より孝明天皇に左の如き書を奉つてゐる。

『尙々恐入候時勢何共難ニ申上一盡ニ奉ニ存上一候事。青門（青蓮院宮）之處甚案思候事ニ候事、是ハ誠ニ々々極秘に何卒此獻書御覽後、早々返給候樣分而相願候事。』

益御機嫌克被レ爲レ成奉ニ恐悅一候。先日以ニ青門一拜見之書付奉ニ返上一候。扨關東ヨリ御返答申上候趣傳承候。今日ハ言上ト乍レ恐御心配樣熟々御察奉ニ申上一候。昨夕當職（九條關白）ヨリ廣橋（光成）ヲ以テ、青門、内府、忠熈[illegible]

々談合不レ穩儀御政事向御差支ニ相成候趣、以後其心得會合ナド致間敷、御直ニ言上無レ之樣被レ示候。青門ヘモ同樣世話卿ヨリ申渡、内府ヘハ當職江家來招ニテ被二申示一候趣ニ付、青門モ今日本坊江引取ニ候。右之次第故、勅書ナド賜リ候モ甚如何恐入候次第ニ候由申上置候。且青門キビシク申上置候御次第モ内々承リ候。尤ニハ候得共コトニヨリ西事ニテモ天下大亂之基ニ相成候儀モ在レ之候儀、其邊ハ深御勘考不レ被レ爲レ在候ハデハ不二相成一ト乍レ恐存上候。誠恐誠惶謹上。

忠煕

極密々

謹言上

尚この書に就いては、早速左の如き御宸翰を賜つた。

『左大臣殿　此花

極密々

時候御用心頼入候、風雨ニテ認二散紙一擲付恐入大々亂書高免御推覽願入候事。何モ荒々。

御兩人御用御承知呉々モ願入候事。

快晴候

倍々

尊公御安泰令レ賀候。

只今者玉章拜見候處、誠大變之御書之趣、實ニ力落當惑仕候事ニ候。此事何共合點ユカズ大不審之至リニ候。從先關白(九條尚忠)面會候處、如二別紙一關東返答言上候間、私申候者カヽル返答振ハ元ヨリ心配致居候事ニ候。然於二此方一是限承知トハ如何體ニモ難レ申候。何卒今一應ヲシテ御申遣ハ成間敷色々申談候處、關白被レ申候ニハ私ニヲイテモ實々恐懼之至リニ候。然加樣申參候者何レ堀田細工ニ無二相違一被レ存候。何分此返答甚六ケ敷人心居合者於二關東一如何樣ニ茂引請イタス之文言、當時愚昧之大樹(將軍家定)ト申者、コチラ内話之事表向大樹之事故征夷將軍之イカ體ニモ引受クルト被レ申候ヲ、コチラカラ何共申遣難キ譯ニハ無レ之、乍レ去此通リニテ御承知之旨ハ申遣候譯合無レ之間、先天聽ニ達シ置タト斗返答ニ而、何卒備州歸候事成間敷イカヾ被レ尋候間、其邊至

極尤ニハ可レ有レ之乍、其ニテハ於二關東一モ早許容ニ（條約）成候而ハ大事故、何卒私了簡ニハ先引受之處ハ鳥渡此書附ニテハ、タトイ承知不承知之者モ無二差別一大樹之厳命ニテ無理カラニテモヲシ附候樣見候。左候而ハ人和ニハナカラズ、元ヨリ歸復候訳無レ之候半哉。其邊深心配之譯合ニ候間、右引受ハ不レ被レ成候段ハ安心之模樣ニ候得共、實々一等人和ニテ無レ所レ存一事ニ候ヤ。後難有候テハ如何ト申處ト、又如レ斯次第ニ而ハ所詮六ケ敷義故、神奈川斗許容、五畿内、近海ハ固無用ト申ノト兩樣一先書附、猶又兩役勅問之人々右返答書付ト兩方ニテ御相談可レ然哉、猶得ト御思案後難無レ之可レ然ト答置候。全體關白之所存ハ眞實之處如何哉私申候故、御附合ニ候ヤ、又太閤之御同意ニテハ甚以心配仕候至り、約條之通逐一許容ニテ宜事ニ思召哉尋候處、私ハ始ヨリ申通り御許容ニテハ近忠元ヨリ不レ好之事ニ候ヘ共、時勢變革有之返答振次第ニテハ配ト詰り致方無レ之仕合、又格別厳敷被レ仰候而御受ハ申サズ、公武之御隔間ト成候而ハ今日之事ニ掛り、甚心配之至りニ候。役外之人ハ所存通ツヽト申上候ヘ共、役人ニ成候バ心ニ以ケ程思候共、又々左程ニモ致シガタク心配之旨申居ラレ候間、何分ニモ前之兩條ニハ得ト可レ有二御配慮一申置候。其餘數話ニ候ヘ共、一々難二書取一要斗認申入候。仍青門邊ノ處モ何ゾ噂有レ之歟ト存候ヘ共、何モ無レ之候。私存候ハ是限リニテ御引越ニテハ實ニ心配仕候間、何之通御入來之程賴入候。其故先暫ハ青門御參ニテモ是迄ノ樣に議奏抔共御話合ハ御止、只々是迄通思入候ヘ共、私倆ニ御出ニ候ハバ元ヨリ太閤（鷹司政通）モ承知之事故無二子細一ト存候。萬一關白デモ私ヘ何卒被レ申候ハバ頓ト異件之話ハ無レ之、是迄モ申候通トキニ御出之工合ニ申候。且此節大心配醉氣之時節故、青門ニテモマギラシニ御出有候テハ誠ニ困リ候間、此節ハ毎ヨリ度々招候ニ申置候間、何卒御安心ニテ御入來之樣尊公ヨリ得ト御サトシ希入候事。實ハ又此間話致カケノ事モ有レ之候間、何レ七八九日之内關白入來無日御出之樣尊公ヨリ得ト御諭呉々モ賴入候事。今日之次第御書ニテハ不レ分候間、委細ニ承度、明日明後日之内尊公御出賴入候。青門ト同日ニテ無力可レ然存候。御兩人共御出段々頼入候事。左樣無候而ハ、私一身茲

ニ極不慮之發念難レ斗候間、何卒其邊御推察ニテ青門へモ得ト得ト御教諭是非々々願入候事。

御承知承度候事實々此上ハ又々

御シカリ承候半乍、私モ所存居難位歎ケ敷至リニ候事。何分御兩人共御日遊關（關白乎）參無日御來臨賴入候事。

青門之處外之咄トキニ參ナレバ何も不ニ差支一、此段承知被レ致候ヤウ呉々モ

尊公之御力拜願候事。　何も粗々

御返之品被レ爲レ有候御書取乍、御一封之外何モ不レ被レ有候。若御落シ可ニ恐入一候へ共、承度候事仔ニ御申ニ御書返上候事。

呉々モ御推察是成安心之樣願ひ入候事。

大々急別亂書恐入候事。

（安政五年戊午）

三月六日未半刻　　此花

左大臣殿

極密』

苟も有心の者は、此の宸翰を捧讀して、難レ有聖慮に感激しないものはあるまい。

× × ×

要するに九條公と井伊その他の力は、七、八分通りは宸製運動の功を奏したが、何を申しても、當時の陛下が頗る強硬に在したから、九條關白も幕府側の希望を充分に容るゝことを得ず、又公家一般の議論も喧しく、その爲に遂に堀田正睦はその目的を達するを得ず、二月以來長々滯在したが、遂に今一度諸大名の意見を聞いて、然る後かさねて上奏するといふ勅諚を賜り、四月五日に京都を引上げた。而してこれがもつとも宮の力大きに居るものと幕府も睨んで、幕府はいよ〳〵宮をもつて大なる邪魔物とみなすに至つた。

尚ほ宮の參朝を止め給ふたのは全く九條關白が命を矯めたとも云ふべきものであつて、六日に參朝を止められて、同じく十二日には勅召にて參内あらせられ、それより不ニ相變一引續き參内あらせられた。當時の情態では孝明天皇は未だ一日も青蓮院宮なくてはならない程の御間柄であつた。而し宮が至尊の信寵を此の如く得給うた程、それ程、幕府では宮を邪魔物とした。

現代日本文學全集

▼八月配本（七月中旬開始の豫定）

石川啄木集

情熱の詩人、革命詩人として現代人に最も尊敬され、愛慕されてゐる薄命の天才兒石川啄木は、現代に生き現代人を動かしつゝある。今や我社、會員多數の熱望に感激し特に本集を編み八月配本とするに決した。收むるところ創作全部、詩、散文詩、短歌、感想、評論、書簡の精髓、及び佚文數十篇。敢て言ふ、此一集は斷じて他全集には這入らぬ、我社全集のみの特色だ。

內容

〔創作篇〕雲は天才である　葬列　病院の窓　天鵞絨　二筋の血　鳥影　赤痢　足跡　葉書　道　我等の一團と彼

〔詩篇〕あこがれ　あこがれ以後　心の姿の研究　呼子と口笛　その他

〔散文詩篇〕曠野　白い鳥、血の海　火星の芝居　二人連　祖父

〔短歌篇〕一握の砂　悲しき玩具　その他

〔感想評論篇〕高調(佚文)　秋風記　綱島梁川氏を弔ふ　卓上一枝(佚文)　手を見つゝ(佚文)　一握の砂(佚文)　食ふべき詩　きれぎれに心に浮んだ感じと回想　一年間の回顧　卷煙草　性急な思想　硝子窓　利己主義者と友人の對話　歌のいろいろ　その他

〔書簡篇〕百數十通

年譜・筆蹟・照影

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

世界大衆文學全集

第四回配本開始　（一册五拾錢）

シヤアロック・ホウムズ

コーナン・ドイル作　延原謙譯

ホウムズの面白さは――急ぎの用事にもタクシーを飛ばすことなく、古風な辻馬車に揺られてゆく。電話のかはりに電報を打つてゐる。ドイルは巧みな筋の組立に、深く根ざした人間の詮索本能の虚を突いたその本格探偵小説の完成者である。そして延原氏はドイルに私淑してその飜譯に十年、譯文の正確にして、洗練に洗練されてゐると勿論である。

（目次）

深紅の絲（第一部六章、第二部七章）。
四つの署名（十二章）。
赤髮聯盟。
口の曲つた男。
まだらの紐。
白銀號事件。
マスグレーヴ家の儀式。
金縁の鼻眼鏡。
六つのナポレオン。

東京芝區愛宕下町　改造社　（振替八四〇二）

黒島傳治著

最新刊

短篇集 橇

恐らく、新作家の新作にしてこれ程素朴に、平明にプロレタリア事象を描破したものは少からう。徒らに理窟を弄するなく、思想から思想を抽く事なく、沈着の中に溢るゝばかり藏したプロレタリア意識を、その情熱を飽まで藝術意識に働かせて、的確に人生と藝術に立向うてゐる。卽ち全文壇の期待を一身に負うて新興文藝の新拓野を行く所以、今や氏の全作集を一先づ「橇」に托して明日を約する勇躍の鈴の音と共に滿天下の讀者におくる。

【目次】

四六判 ◆ 四百頁

定價壹圓八拾錢

送料二十錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

最新刊

新選名作集

新選 葉山嘉樹集

（四六判並製 五百三十頁）

定價壹圓 送料十八錢

（收載内容）

（短篇小説）淫賣婦。誰が殺したか。別離。被害者。出しやうのない手紙。セメント樽の中の手紙。むごたらしい出來事。遺書。支那人の糞。馬鹿を見たけりやこいつらを見よ。牢獄の半日。正札つき貴婦人。刺された男。眼。勞働者の居ない船。そりや何だ。住むべき處を求めて。山拔け。散歩。どこも冷たい。赤い荷札。春の惱み。燒けた金で拂ふ。田舍者が都會を見る、追跡。鞴。校正係。櫻の咲く頃。浚渫船。印度の靴。乳色の靄。プロレタリアの乳。マドロスと鼠。生爪を剝ぐ。死屍を食ふ男。首を賣つた話。坑夫の子。聾の話。苦鬪。天の怒聲。鼻を覘ふ男。無風帶を行く船。船の犬「カイン」。火夫の顏と水夫の足。電燈の油。鴨獵。（長篇小説）海に生くる人々。

以上四十七の長短篇は、著者がその出現以來僅か二年の間に描破した全作品の網羅であり、實質に於て著者今日迄の全集である。

世にプロレタリア的作品は多い。が、眞にプロレタリアが自己の手を以つてその生活を再現した作品は尠い。著者は嘗て、水夫、職工、坑夫、或る時は囹圄の下に繫れて凡ゆる被抑壓階級の生活苦を嘗めて來た。その體驗が生んだ本著こそは、眞に無上の力强さを以つて階級文學の最高水準を行くものである。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二



足輕三左衞門の死

吉田絃二郎

第一幕　第一場

時　元治元年初夏

場所　瀬戸内海に沿ふた或る小藩の城下。三左衞門の家。

人物　藩の足輕　兵藤三左衞門　二十五歳

三左衞門の母　おしん　五十二三歳

藩の足輕　遠山眞吾　二十三四歳

同　仙波東作

同　金谷新助

同　木村辰九郎

同　加治木六郎

同　大西又八

同　川股正九郎

同　丹野謹三郎

同　牧野正七

同　轟　甚四郎

同　甲斐山　九兵衞

他に足輕數名
家老　稻垣森之進の伜　稻垣兒太郎　十六歲
同　稻垣の家來數名
長州の浪士　野村勘策
寺子屋の師匠　加唐傳七郎　五十三四歲
同娘　おたね　十七歲
避難民男女多數
長州藩の兵多數

上手に座敷があり。下手に勝手及び土間。濡れ緣。奧にさらに一室あるつもり。座敷には床の間につゞいて一間の押入れがある。波の音が靜かに聞える。三左衛門は旅から歸つて來たばかりでひどく疲れて眠つてゐる。床の間には柄袋をかけたまゝの大小の刀が置いてある。壁に羽團扇が懸けてある。おしんは濡れ緣の上で絲繰り車を廻してゐる。時々手を止めては三左衛門の方を覗いて羽團扇で蠅を追ふ。上手に桐の花が咲いてゐる。下手は隣り境になつてゐて、木立があり、桔梗が見える。木柵の籬があり、その一部分は切り開かれたまゝになつてゐて、そこから自由に出入りができる。おたね、重箱をかゝへて木柵の籬の間から登場。

おたね　小母さん。
おしん　おたねさんですかい。
おたね　おつ母さんがこれをこちらの佛さまへおあげして來いつてまをしましたので。
おしん　まあようお氣にかけてくださいまして。けふは三左衛門の父の命日でございますので、早速佛さまへおそなへいたしませう。(重箱をかゝへて奧に入る)
三左衛門　(眼をさまして起き上る)あゝ、おたねさんですか。よく眠つたものだ。もう何時だらう。
おたね　せつかくおやすみになつてるところをお邪魔いたしまして。
三左衛門　なあに、もう起きなけりやならぬ時でしたから、ちやうど宜うございました。
おしん　(登場)もう眼がさめたのかい。今おたねさんが佛さまにといつて御馳走をこしらへて持つて來てくだすつたんだよ。
三左衛門　そいつはどうもありがたうございました。お父つあんもよろこびなさるだらう。
おしん　お父つあんがよろこびなさることはお前もうれしいだらうな。
三左衛門　ふむ、またおつ母さんのお說敎か？
おしん　お說敎ではない。わたしはお前のこのごろのことがどうも心配でならぬのですよ。
三左衛門　もうそのことなら放つといてください。

おしん　放つては置けません。お前が島田監物さまのお使だといつて今度京都へ行つて歸つて來たことにしても、わたしはどういふ御用があつたのか知らぬが案じられてならぬのだよ。

三左衛門　おつ母さん。あなたは時勢といふことをお考へなさらぬから、そんなことを心配なさるのですよ。今この時期を逸してはわれわれのやうな足輕風情の人間は一生浮かぶ瀨はないのですよ。天下は廻り持ちだ……

おしん　お前はまたそのやうな大それたことをいふ。かうやつてわづかでも殿さまからお扶持をいたゞいてをればこそ貧しいながらも親子がどうにか命をつないでゆけるのではないか。

三左衛門　おつ母さんはいつもそれだ。お父つあんのことを考へて見なさるがいゝ。長崎くんだりまで御主人さまのお伴をして行つて、おまけに御主人さまの落度を引き受けて牢にまではいつて、それが原因で歸つて來ると間もなく死んでしまふやうなことになつても、お褒めのお言葉一つ頂戴するではなし。足輕はやつぱり死ぬまで足輕だ。

おしん　お前はそんな氣でをるから、このころのやうにいつもそはそはしておつとも落ち着いて御奉公ができないのだよ。

三左衛門　御奉公！………もうそんな言葉は止しにして下さい。何も彼もいまに世の中は引つくらかへるのだ。いつまで足輕が足輕でをるものぢやない。

おしん　おや、お前は島田監物さまのお口添へで今に士分にでも取り立てゝもらふつもりでをるのかい？

三左衛門　士分に取り立てゝもらふですつて、ハ、ハ、ハ……そんな小つぽけな望みは持ちません。おつ母さん安心して待つておいでなさい。今におつ母さんなんか鋲打ちのお駕籠に乘せて上げますから。

おしん　まあお前は夢を見ておいでなのかい。

三左衛門　さうかも知れませぬ。あまり長く浪人をしてゐたのでハ、ハ、ハ……

（傳七郎下手より釣竿と魚籠を抱へて登場）

傳七郎　三左衛門さん。長い旅をつゞけてもどつて來なさつたばかりだらうが、どうぢやこなひだから黒鯛がよう食ふやうになつた。わしは昨夜も尺二三寸のやつを五尾釣りました。これから日が暮れるまでわしと一緒に黒鯛釣りに出かけないかな。

おしん　傳七郎さんでしたか。さきほどはおたねさんに結構なものをありがたうございました。

傳七郎　どんなものを差し上げましたか。あゝさう／＼。けふは親父さ

んの御命日だ。三左衛門さんを殺生に誘うてはすみませんでした
な。年寄り甲斐もないハヽハヽハ……
おしん　いや、さうではありません。三左衛門や。お隣りの傳七郎さんのお伴をして濱にでも行つて來たら、どうです。お前も今度京都から歸つたら久し振りで魚を釣りに行きたいといつておいでではなかつたかい。
傳七郎　魚を釣るのがいやなら、まあわしと一緒に久し振りに濱へ出て波の音でも聽いて見たらどうです。
三左衛門　傳七郎さんはいつものんきですな。今にも天下がひつくらかへらうといふこのごろ、波の音でも聽いて樂しまうといふやうな氣には、とてもわれ〳〵若い者はなれません。わたしもあなたくらゐな年配になつたら、濱に出て波の音でも聽いて暮らしませうよ。
傳七郎　そこぢや。今の世のなかは成るほどあんたがいふとほり、今にも引つくらかへるかも知れぬ。若い、血の氣の多いあんたがたにぢつとして濱にしやがんで波の音でも聽いてゐろといふのは無理かも知れぬ。だが、藩の若い人たちは心の底から………
三左衛門　無論、實行しようといふからは勤王か、佐幕か。何ゆゑの勤王か、何ゆゑの討幕か。自分の信念は持つてゐます。
傳七郎　無論さうではあらう。しかしそのためにあんた等は稻垣先生を仇敵のやうに考へてゐるといふことぢやが。
おしん　三左衛門、お前そんなことを考へておいでなのかい……お前が今日それほどになつたのはみんな稻垣先生のおかげではないか。
傳七郎　三左衛門ほどの若者を足輕にしとくのは惜しい惜しいといつても稻垣先生はいつておいでなさるさうぢやが。
三左衛門　さうかも知れぬが、足輕は一生足輕だ。今の世の中が惡いのだ。わたしらはその世の中を善くしてやるのだ。
傳七郎　それは結構なことだが、そのために恨んでならぬ立派な人を恨むやうなことをしては………
三左衛門　感情や私情に囚へられてゐる場合ではありません。
傳七郎　感情や私情に囚へられてはならぬ。まことに結構なことです。だが、人間が理窟だけで、はたして動くものだらうか。自分では道理によつて動いてゐるつもりでも、存外感情のために動かされてゐるものぢやないかな。
三左衛門　理窟はどうでもいゝ。わたし等はこのまゝではをれぬのです。
傳七郎　このまゝではをれぬといつて、無闇に騷ぎ立てたところでどうにもならぬ。
三左衛門　傳七郎さんのやうにいつもそんなことをいつて、みんなが

こんな田舍にくすぶつてばかりゐた日には日本をどうします。あんた程の學問があればこんな場合にはもつと働いてもよささうに思ひますが。

傳七郎　成る程日本をどうしますか？さういはれるとわしには一言もない。それかといつてわしにはあんたらのやうな無法なことはできぬ。わしはもう年を取り過ぎてゐる。時代がちがふ。……時代の波だな。その波に乘つてみんなが動いてゐる。それがどんな結果を持ち來たすかは誰も知らぬ。だが動かずにはをれぬのか。それもよからう。おや今日はわし一人で濱に行くことにしよう。（退場）

三左衛門（後を見送りながら）時代の波！　その波に乘つてみんなが動いてゐる！　それがどんな結果を持ち來たすかは誰も知らぬ！ちえツ！　またいつものあの親爺さんの世迷ひ言だ！……だがあの親爺さんの言葉はいつも妙にわしの心を惹きつける。……いや、やつぱり世迷ひ言だ……だが……恨んでならぬ人を恨み、敵としてならぬ人を敵とする……（ものに取り憑かれたかのやうに庭に下り、濱の方へ行かうとする。下手より加治木と仙波登場。）

加治木（あたりを憚り低い聲で）おい……同志の士はみんな揃つた。

仙波　十六人の同志はお前の來るのを待つてゐる。

三左衛門　よし（うなづいて見せる。急いで袴を着け、上手へ退場。）

日が暮れかゝつて來る。瀨戸内海の美しい夕燒空が靜かに燃えてゆく。

おたね木檣の陰より出でて三左衛門の後を見送つてゐる。

おしん奧より登場。行燈を提げて部屋の中央に置く。

同第二場　濱の臺場火藥庫内の場

地下に掘り下げられた石疊みの部屋。天井の梁や、天井を支へる太い柱がちよつと古い寺院などを聯想させる。左右に石の階段があつて臺場の砲床へ通ふこころ。中央にかなり大きな容箱があり、上に蠟燭の火が一つ燃えてゐる。室内はまだ作りかけたまゝ捨てられた形になつてゐて、廢墟の感じをたゝへてゐる。荒蓆を布き蠟燭のまはりに坐つてゐる者あり。やゝ後方左右に腰を卸してゐる者もある。見張りの男二人階段の上に立つてゐて時々階段の中程まで降りて來て合圖をする。森山は一人うしろの石の壁の前に立つて蠟燭を持つてしきりに壁にとまつた蚊を殺してゐる。波の音が絶えず聞えて來る。三左衛門は中央に腕を拱いて坐つてゐる。みんなかなり興奮してゐる。

金谷　どうも暗いな。

大西　よし、もう一つ明りをつけよう。

（さらに蠟燭を點す。）

金谷　大分明るくなつた。

川股　蚊がゐるなあ。

仙波　人間がゐるとなると、蚊の奴等こんな穴の底までもはいつて來るんだなあ。

丹野　おれもさつきから大分喰はれたやうだ。

加治木　おい、眞吾、きさまはさつきから蠟燭をかゝへて壁のまはりをうろ〳〵してるが、いつたい何をしてるのだ。

遠山　おれかい。おれはかうやつてみんなのため、壁にとまつた蚊の奴を片つ端から退治てるんだ。

加治木　のんきなことをいふ男だ。

遠山　さうか。お前たちにはおれが蚊を殺してゐるのが可笑しいのか。しかしおれはたとへ一匹の蚊でも、ぶうんと鳴いてやつて來られると神經に應へておつとしてはをれぬのだ。

三左衛門　眞吾は眞吾でよい。ともかくもおれたちは直ぐにさつきからの議論のきまりをつけやうではないか。

遠山　だがちよつと待つてくれ。お前たちはたしかにその決論がそんなに容易につくと思ふのか。

三左衛門　それはどういふ意味なのだ。眞吾…………

遠山　だッて考へて見るがよい。すべて世のなかのことゝいふものは、お前たちが考へてゐるやうに、さうこれが白、これが黑と無雜作にきまるものぢやない。たとへばだ。今夜おれたちがかうやつて集まつてゐるこのお台場だつてさうぢやないか。殿さまが藩の苦しい財政のなかから無理算段して、こんな怪物見たいなお台場をお作りなさつた。いつたいこのお台場を作られた動機は何だ……夷狄の黑船を撃つためであらう。

三左衛門（眼をつむつておッと考へ込んでゐる）

仙波　言はなくても知れたことだ。

遠山　ところでお前たちはこんなお台場にモルチル砲の三門や四門を据ゑて夷狄の黑船を撃ち沈めることができると思つてるのか。

大西　ぢや、眞吾、お前はわれ〳〵勤王黨を罵倒するつもりか。

遠山　おれだつて勤王黨の一人だ。だがさ、よく考へて見ろ。このお台場だつて殿さまが莫大な金をかけてお拵へになつたころは、殿さまには殿さまで立派なお考へがあつてなされたことにちがひない。ところでどうだ。まだ、モルチル砲の一門も据ゑつけぬうちに、このお台場には草が生えるやうなことになつたぢやないか。

大西　そりや時勢ぢや。

遠山　時勢か？　それもあらう。だが殿さまのお考へ以上のものが、

最初からあつたのぢやないか。

加治木　そりやどんなものだ。

遠山　いや、人間の考以上のものだ。

川股　そんな漠とした言葉でなく、もつとはつきり言へ。

遠山　うむ、いつてやらう。お前たちはこの暗い火藥庫のなかで議論をしてゐる。そしてやがてはこゝから日本中がひつくらかへるやうな大きな仕事をしでかすこともできるやうに考へてゐる。

大西　無論さうではないか。

遠山　ところでだ。殿さまのお考さへ、これを見い、これではないか。この石の一つ／＼がどれだけの犠牲を拂つて積み上げられたものかそれはお前たちも知つてる通りぢや。この石の蹟を見てくれ。おれにはこの石の一つ一つにおれたちの仲間や、あの町人どもの血に染まつた指の痕が殘つてゐるのが見えるのだ。おれはさつきからかうやつて蚊を殺してゐたが、蚊は一つ一つの石に指先から滴り落ちた眞つ赤な血がにぢみ出してゐるのが眼について仕方がないのだ。

大西　そりや、一つ一つの石に血がにぢみ出してゐる筈だ。毎日毎夜石を運び、石を積んでゐた百姓どもの指の爪は一本でも滿足なものはなかつた。あの寒い雪の日にあいつらの指先はみんな白い骨が出るほどに裂けてゐた。

遠山　そこだ。おれたちもあのころは殿さまと同じ心になつて百姓や町人どもをこきつかつてこのお臺場の石を積み上げたものだ。岩の下になつて死んだ男もあつた。おれたちはまつたく人間の血でこの石の一つ一つを積み上げたのだ……それがどうだ。人間の幸福のために、日本のために何一つ役立つたか。おれはそれをいふのだ。このお臺場がいゝ手本だ。百年の後おれたちの無理を笑ふ奴が出ては來ないかなあ。おれは百年の後の笑ひ聲が氣になりかけて來たのだ。

加治木　今になつて變なことをいふ奴だな。

大西　三左衛門京都の話のあの先を川股君にも話してやれ。

三左衛門　では話をつゞけることにしよう。ともかく長州藩の志士、つゞいて土州藩の志士たちにも逢つた。知つての通り今京都には所謂諸藩の志士と自稱する奴が寄り集まつて天下の形勢を窺つてゐる。しかし一人一人がいかに志士でござる、勤王黨でござるといつて力んだところで誰も對手にしてくれる者もない。力と頼むのは藩の後楯だ。薩藩、長藩、土藩……これ等の雄藩に生まれ合はせたものは一代の幸運兒だ。いかにわれわれに非凡の力量識見があつたにしてが、この中國の無力な小藩を背景にしたのでは誰も對手になつてくれぬ。こゝはどうでも大藩と結びつかねば仕事はできぬ。そ

こで考へついたのは先づ長州藩だ。つゞいては土佐藩だ。

遠山　うむ…………

三左衛門　ところで小藩者の悲しさ。最初はてんでわれ／＼を對手にしてくれぬ。先方ではやはり今時流行の志士とのみ思ふのだ。われわれは先づわれ／＼の實際の力を證據立てなければならぬ。結局、おれたちはおれたちで勤王黨たるの仕事をして見せなければならぬ。

遠山　勤王黨たるの仕事といふのは？

三左衛門　土州の武市半平太は參政吉田東洋を斬つて大義名分を明かにした。

遠山　そこでどうしようといふのかわれ／＼は。

三左衛門　奸賊を斬るのだ！

金谷　稻垣森之進はじめ佐幕派の巨頭を斬るのだ！

加治木　泣いて馬稷を斬るのだ。

遠山　馬稷を斬るのはいゝが、いつたい稻垣森之進は果して佐幕黨なのか？

三左衛門　眞吾、またお前は今になつてそんなことをいふ。

遠山　佐幕黨でもないものを殺すわけにはゆかぬではないか。

三左衛門　佐幕黨でなくて、何でこれまで作り上げた藥場を溝のなかに埋めて置くものか。

遠山　薩州の島津侯にしても、土州の山内侯にしても公武合體といふのは要するに佐幕ではないか。

三左衛門　今はそのやうなのんきな議論なんかしてゐる時ではない。佐幕であらうと勤王であらうと、そんなことはどうでもいゝ。そんな理窟の議論をいつまでも議論してゐる場合ではない。薩州の志士にしろ、土州の志士にしろ誠心から勤王だ、佐幕だと思つてかゝつてゐる奴が一人としてあるものか。今は日本國中が眞つ暗なのだ。どうしていゝんだか誰にもわかりつこはない。理窟は後からくつ付ければいい。實行だ！　實行だ！　結果なんか考へてはをれぬ。ともかく何でもやつつけて見るのだ。腕が鳴つてる。

大西　さうだともさうだとも。

三左衛門　ともかく實行だ。思ひ切つて劍を投げばよいのだ。家老の首を斬ればよいのだ。

金谷　稻垣の首を斬ればよいのだ。

遠山　だがお前にしたところで三左衛門、稻垣先生に刄を向けられるか。お前はあれほど先生には目をかけていたゞいてゐるぢやないか

三左衛門　大義親を滅すぢや。泣いて斬るのぢや。今われ／＼が立たなければ永久におれたち足輕仲間は立てないぞ。

遠山　おれにはどうもお前たちのいふことはわからぬ。

三左衛門　おい木村あれを出せ。

木村　うむ。(懐から斬奸狀を出す)

三左衛門　木村讀め。おい誰も見えぬか。(見張りの男の方を覗く)

見張りの男　あゝ、犬の子一疋見えはせぬ。

三左衛門　木村讀め！

木村　斬奸狀。方今幕府の當路者政道宜しきを失ひ、民塗炭に苦しみ、外夷狄に慴伏して、祖宗皇帝の稜威を汚さんとす。憂國の士立ちて幕府當路者の責を問ひ宜しく王道の正しきに歸せしむべきなり。尊王報國は我が藩祖雅正公以來の御趣意にして宇内の形勢一日も苟安を貪るを許さゞるところ也。然るに家老稻垣森之進殿藩政を紊り今日、天下の大勢を察せず因循姑息終に一藩の士をして天下に處すべき道を誤らしむ。吾等輕輩と雖も坐視するに忍びず、一身を抛つて奸を斬るものたゞ邦家百年の爲めのみ。何等私怨の存するに非ざるなり。年――月――日

三左衛門　あゝそれで宜い

木村　では銘々に血判だ。名を書いてくれ。

三左衛門　よし、おれから書かう。

木村　(讀み上げる)これは何だ。賴春親王十二代兵藤三左衛門藤原高康……(笑ふ)おい、三左衛門これでよいのか。

三左衛門　それにちがひないのだ。

木村　出鱈目ではないのか。

三左衛門　出鱈目ではない。

木村　變だな。

(人々順次血判をする)

見張りの男一　誰れか來た。

三左衛門　誰れか來た？

見張りの男二　牧野と轟らしい。

三左衛門　歸つて來たか。

見張りの男一　さうだ。牧野だ。

(牧野、轟二人酒を持つて階段を下りて來る)

牧野　ひどい目にあつたよ。

轟　何せ一文なしで徴發して來たんだからな。

牧野　酒屋の親爺を擲りつけたのはすこし可哀想だつたな。

轟　でも、ものゝはずみだから仕方がない。

三左衛門　ちようどよいところに歸つて來た。お前たちも斬奸狀へ血判してくれ。

轟　みんなすんだのか。

三左衛門　みんなすんだ

(人々盃をまはす。)

三左衛門　いよ／＼おれたちの天下が廻つて來たのだ。

木村　氣の毒だが家老の首を斬られねばならぬ。序に兩執政納所五藏と熊野小助も斬る必要があるぞ。

三左衛門　あの二人を斬るのはちと可哀想なやうな氣もするなあ。

木村　この際姑息な手段は却つて禍根を殘す。根本的に大掃除をして置く必要がある。

三左衛門　どうだ諸君。木村の意見は？

人々　贊成！　贊成！

木村　一國を取るも誅せられた！

人々　贊成！

三左衛門　では兩執政納所五藏、熊野小助も今夜斬ることにしたければならぬ。(ちつと考へる……)

木村　酒だ！　酒だ！　みんなもつと大に飲め。(ぐつと盃を干す)薩州の西郷吉之助、土州の坂本龍馬、我が藩の兵藤三左衛門だ！

三左衛門　おだてるな(うれしげに笑ふ)。それにしても愈々面白くなつて來た。おれは明日の天下が目に見えるやうだ。

木村　いよいよわれ／＼の天下が來たのだ。おれたちはよい時に生まれ合せたのだ。

見張りの男一　松並木の方から走つて來る奴があるぞ。

見張りの男二　甲斐山らしい。

見張りの男一　甲斐山だ！　甲斐山だ！

(緊張した男階段を降りて來る。)

三左衛門　御苦勞だつた。形勢はどうだ？

甲斐山　稻垣先生は今夜も例の御講義だ。いつもの時間に。

木村　納所と熊野は？

甲斐山　ちやうど都合がいゝことには納所も熊野も今夜は夕方から家老の家におよばれだ。

木村　それこそ天の與ふる機會だ。講義に出席する藩中の人達は？

甲斐山　やはりいつもの通り二十人足らずだらう。いつもの連中ばかりだ。

三左衛門　恐るゝに足らぬが、講義がすんで、みなが歸る。そのすぐ後を襲ふた方がいゝ。それから納所と熊野は手を分けてその歸り道を要へて斬ることにしよう。ではもう出かけることにしよう。

遠山　ちよつと待つてくれ。

三左衛門　何だ。

遠山　おれはお前たちに訊ねたいことがある。

三左衛門　お前はもう血祭をすませたのだらう。

遠山　血判はすませた。

三左衛門　ではもう何もいふことはない筈だ。絶對にわれ〳〵の行動に服從さへすればいゝのだ。

遠山　しかしおれはどうも……

木村　叩き斬つてしまふぞ。(刀に手をかける)

遠山　おれを斬る？

三左衛門　まあよい。

金谷　雨が降り出した。

三左衛門　雨か！

甲斐山　風も強くなつたやうだ。

加治木　波の音が高くなつて來た！

三左衛門　みんな刀を拔け。殺刄を合せて置け。

(人々一緒に刀を拔く。)

三左衛門　長いこと待つてゐた日が到頭やつて來たのだなあ。何だかぞく〳〵するやうだ！

(三左衛門、その他二三涙を拭ふ者がある)

木村　ひどい風になつたなあ。

(蠟燭の火が消える。)

三左衛門　さあ行かう！

暗黑

同第三場　稻垣森之進の館門前の場

門の左右に長き塀。塀に沿うて並樹。雨が降つてゐる。遠く蛙が鳴いてゐる。螢が飛ぶ。覆面の男數名門の左右に立つてゐる。みんな刀を拔いてゐる。

三左衛門、門内から首を小脇に抱へ、拔刀のまゝ出て來る。つゞいて木村、金谷、甲斐山等數名。

低い聲でさゝやき合ふ。

うなづきつゝ去らんとする。

稻垣の家來甲追つかけて來る。

三左衛門斬り倒す。

下手へ退場す。

森之進の倅兒太郎門内より槍を持ち後を追つかける。つゞいて家來乙。

家來乙　兒太郎さま、殘念ですが、あなたお一人でおいでなすつたところで、所詮、あの多勢では……

兒太郎　放せ。どれほど多勢であらうと、武士の子がこのまゝ親の仇を見のがせるか。

家來乙　それは御無理もございませんか………

家來丙（奥より登場、同じく兒太郎を抱き留めようとする）兒太郎さまお危うございます。

兒太郎　お前たちはおれの心を知らぬのだ。おれは父上と一緒に死ぬ………（二人を突きのけて後を追ふ。二人同じくつゞく。）

蛙鳴き、螢飛ぶ。　　幕

第二幕　第一場

時　元治元年七月十九日の夜

場所　京都桂川の土堤

桂川をへだてゝ兵火につゝまれた京の町が見える。鐘が鳴り、小銃の音、大砲の音など聞ゆ。

土堤のこゝかしこに避難民多勢たゞずみ、おびえつゝ京都の空を眺めてゐる。

避難民甲　あゝまた火が上つた。

避難民乙　何處の見當だな。

避難民丙　建仁寺さまやろ。

避難民丁　あれが八坂の塔やからなあ。

避難民乙　これで京中の宮も寺もみんな燒け落ちてしまうた。

避難民甲　いつたい戰さのはじまりは昨夜八つころからかな。

避難民丙　さう。八つころであつたな。東寺見當でもあつたらうか。恐ろしい狼煙と石火矢の音、あれが最初の合圖であつたらう。

避難民丁　いつたい何處に石火矢を打ち込んだのぢや。

避難民戊　三河守さまの番所へ長州の侍が石火矢を打ち込んだのが戰さのはじまりといふではないか。

避難民己　將軍さまも御苦勞なことぢやが、もうかうなりや關東の奴等も威張れぬぞ。

避難民甲　いよ〳〵世替りぢや。

避難民戊　でも今朝は蛤御門目がけて長州の衆が石火矢を打ち込んだといふが、長州も無茶なことをするもんぢやな。元々長州は勤王な筈ぢやが、何で蛤御門に石火矢を打ち込んだものかな。

避難民乙　どつちにしても今の大名たちのやることはわけがわからぬ。何が勤王やら、何が佐幕やら………

避難民丙　あゝ、また燃えた。あのやうに黑い煙が………

避難民丁　粟田宮さまあたりかな。

避難民己　あゝ日本中がどうなるものかなあ。（激しき銃聲）

避難民甲　あゝあれを見い。

避難民丙　黑い影が。

避難民戊　こつちやに來る。走つて來る。

（人々上手へ逃げる。下手より長州藩の武士多勢。槍を持ちたる者、銃を持ちたる者、刀を持ちたる者、負傷したる者等急ぎ足に登場。振りかへつて火焔を眺むる者もあり。すべて敗軍の疲勞と絕望とを示す。上手へ退場。）

間。（ふたゝび銃聲聞ゆ。三左衛門と遠山、銃を持ち下手より走り登場。土堤の木立の蔭に臥し、しばらく下手を眺めてゐる。）

三左衛門　もう大丈夫だ。ずゐぶん執拗い敵だな。

遠山　薩州の奴等ぢやないか。あいつらはまるで山犬のやうな奴だからなあ。

三左衛門　まつたくだ。今朝の蛤御門の戰さではもう一息といふところを、横あひから薩州の奴等に擊たれたんでこんなことになつたのだ。何藩もなか〱油斷ならぬが薩摩と來た日にやまつたく憎い奴ぢやなあ。

遠山　そりやさうだが、敵となりや仕方がないぢやないか。おれはそれよりもだ（銃を構へて下手を見ながら）第一長州や土州の奴等の氣が知れぬ。

三左衛門　何で長州や土州の奴等の氣が知れぬ。

遠山　この前お前が京都に上つて來た時は何といつた。

三左衛門　勤王の志士なら、志士らしい仕事をして見せろといつた。

遠山　さうだらう。それにちがひないのだな。

三左衛門　それがどうしたといふのだ。

遠山　だからおれたちは稲垣先生を斬つた。熊野半助も斬つた。

三左衛門　納所五藏も斬つた。

遠山　おれたちは十七人で藩を脫走した。三つの首を抱へて……おい、三左衛門、あの三つの首はみんな立派な首だつたぞ。

三左衛門　今になつてそんなことをいつたところでどうするものか。

遠山　でもあんまり立派な首であつた。お前だつて、それだけは否定することはできぬ筈だ。

三左衛門　節吾お前はまた……

遠山　それだのにどうだ。長州の奴等にしても土州の奴等にしてもあの首を見て何といつた。そんな死首が何になる。生きてゐたところでたかゞ二萬石そこ〱の小藩の重役の首ぢやないがといつたぞ。……あの憎々しい長州の重役等の顏がまだ眼に燒きつけられてゐる。

三左衛門　そりやちやうど折が惡かつたのだから仕方がない。賴みにしてゐた土州藩自身の輿論が一朝にして引つくらかへつてしまつた

のだから。おれが最初京都に上つて來た時は、土州藩は尊王攘夷一點張りの硬論派の世であつたが、故郷に歸つて三つの首を提げてやつて來た時は、硬論派の人たちはすでに殺されてしまつて、公武合體といふやうな生ぬるい一派が勢力を握つてゐたのだから、諦めるより仕方がない。長州藩にしたところでやつぱり同じやうな變り方をしてゐた。みんな時勢だ。

遠山　だからおれは最初から稻垣先生を斬るのは不贊成だつたのだ。あんな立派な人間が今の日本中を歩いたところで何處にあるものか。それだのにあいつらは先生の首を犬の首より賤く見積つてゐる。納所五藏にしたところで、熊野半助にしたところで薩州や長州あたりの第一流の人物に比べて優るとも劣りはせぬ。おれたちはあの偉い三つの首を土州藩や長州藩の奴等に捨賣りにしようとしたんだ。

三左衛門　馬鹿なことをいふな愼吾。時勢が悪かつたのだ。場所が悪かつたのだ。

遠山　うむ、場所が悪かつたのだ。稻垣先生や他の二人がもし薩州藩か長州藩に生まれてゐたのだつたら、おれたちも先生方を斬る必要もなかつたであらう。また先生の首ももつと高く買はれたにちがひない。何をするにしても今の世の中では雄藩に生まれなかつたのがみんなの不仕合せだ。

三左衛門　愼吾も泣き事は止せ。おれはお前のやうに一々ものを考へたり、歎いたりしては生きてをれぬ。考へたところで、歎いたところで世の中のことはなるやうにしかならぬ。一寸先のことは人間にはわからぬ。

遠山　三左衛門、お前はのんきだ。どこまでものんきだ。三つの首をさげて國を出る時は、お前は何といつた。今度こそおれたちは立派な志士として迎へられるにちがひない。すくなくとも一方の隊長にはなれる筈だといつたではないか。

三左衛門　今になつてそんなことを並べたてたところで何になる。それよりか早く引き上げようぢやないか。（銃聲が聞える。）まだ追つかけて來てゐるかな。（銃を執つて下手を見る。）

遠山　三左衛門、長州の奴等はあの首をどうした。石ころでも捨てるやうに、あの偉い三つの首を鴨川に捨てたではないか。そしていざ戰さとなるとお前たちは鐵砲をかついで最後まで殿をしてくれといつた。あんまり蟲がよすぎるぢやないか。一緒に國を出た連中もどうなつたか昨日からの戰さでお互の生死も知れぬ。おれにはこんな馬鹿な役目は引き受けられぬ。

三左衛門　引き受けられぬといつたところで、今になつて逃げることも隠れることもできない。徳治、ともかく、もう長州の奴等も追つては来さうもない。早く山崎の方へ行つて本隊と一緒にならう。

遠山　三左衛門、お前はまだ長州の奴等と一緒になるつもりか。これだけ馬鹿にされりやたくさんぢやないか。

三左衛門　馬鹿なことをいふな。こゝいらにまごまごしてをれば賊軍の片割れだ。首を斬らるゝのはわかり切つた話だ。

遠山　三左衛門、ぢやお前はやつぱりあいつ等と一緒に行くのか。

三左衛門　さうだとも、おれたちはまだ生きてゐなければならぬ。今夜一緒に淀を下つて大阪に出るんだ。

遠山　長州まで逃げるつもりか。

三左衛門　生きるためにはそれより他に道はないぢやないか。

遠山　そしてこれからもやつぱり足輕格で散々長州の奴等にこき使はれて行くつもりか。

三左衛門　いつまで足輕でもあるまいよ。

遠山　お前はまだそんな夢を見てるのか。お前は長州へ下つて二三年もあいつらにこき使はれてゐる間には槍の一本も立てさせるつもりだらう。三左衛門、おれはほんたうにお前がうらやましいよ。お前はよい生まれつきだ。お前はいつでも夢を見て生きてをれる人間だから。

三左衛門　おれが夢を見てゐるか、夢を見てゐないかは直ぐにわかることだ。徳治、さあ引き上げよう。

遠山　おりやもうこゝから一歩も退かぬ。この上お前の夢のお伴はできぬ。

三左衛門　ぢや、どうするつもりだ、徳治。

遠山　どうでもいゝから、かまはんで置いてくれ。おれはもうあいつらの勝手にはならぬ。

三左衛門　馬鹿をいふな、徳治。

遠山　馬鹿はいはぬ。おれはいつまでもお前の夢のおつきあひはできぬ。可哀想に十六人の仲間はみんなお前の夢のおつきあひをしてしまつたのだ。

三左衛門　何だと、尚一度いつて見ろ。お前はおれ一人に責任をなすりつけようとするのか。

遠山　さうではないか。みんなお前の夢物語を真に受けてこゝまでやつて来たのだ。

三左衛門　きさまは！

（刀を抜いて斬らうとする）

遠山　斬るなら斬れ・

(はげしき銃聲)

三左衛門　愼吾、さあ、早く立て。長州の奴等が追つかけて來たらしい。

(下手より十數人の長州藩の武士登場。)

三左衛門　や、野村さんぢやありませんか。

野村　お前たちは？

三左衛門　殿を仰せつかつたのです。

野村　御苦勞ぢや。そして本隊は？

三左衛門　この右手の道を眞つ直ぐに竹山のなかを通りぬけて山崎の方へ引き上げました。

野村　さうか、たゞ二人くらゐこゝにゐたところでどうもならぬ。あしらと一緒に引き上げえ。(はげしき銃聲)

三左衛門　おや、さういふことにしませう。愼吾一緒に行かう。

(無理に引き立てる。人々急いで上手へ入る。遠山は最後からやゝおくれて歩いて行く。流彈が遠山の胸をうしろから貫く。遠山ばつたり倒れる。三左衛門驅け寄つて抱く。)

三左衛門　愼吾、どうした。

遠山　やられた。苦しい。

三左衛門　大丈夫だ。しつかりしろ。

野村　おい、しつかりしろ。

遠山　歩けぬ。打つちやつといてくれ。

(三左衛門抱きかゝへて二三歩歩む。倒れる。

銃聲近づく。

野村、三左衛門に目くばせをする。三左衛門躊躇する。つひに捨てて去る。遠山たゞ一人とりのこされる。數人の武士、銃、槍などを持ち下手より上手へ走る。繃帶をしてゐる者もある。遠山ふたゝび立ち上らうとして草の上に倒れる。)

間。

(三左衛門立ちもどつて來る。)

三左衛門　愼吾ッ！……愼吾ッ！

遠山　誰だッ！

三左衛門　三左衛門だ！

遠山　何しに歸つて來たのだ？

三左衛門　お前を伴れに來たのだ。

遠山　おれを伴れに？

三左衛門　うむ

遠山　さうではあるまい。

三左衛門　何だと！

遠山　お前はおれを殺しに來たのだ。

三左衞門　眞吾ッ！

遠山　今わざ〳〵伴れにもどつて來るくらゐなら、さつきみんなと一緒に伴れて行つた筈だ。

三左衞門　いやまつたくお前を伴れに來たのだ。

遠山　お前は普段からおれの神經がばかに感じ易く出來てゐるのを知つてゐる筈だ。おれはお前がさつきおれを捨てゝ行つた時、倘一度おれのところに立ちもどつて來ることをちやんと胸に感じてゐたのだ。

三左衞門　また妙なことをいひ出した。

遠山　いや、たしかにさう思つた。だからおれはお前がもどつて來ないうちに何處かへ隱れるつもりだつたが、生憎の傷で隱れることができなかつた。隱れてさへをればお前のためにもそれが仕合せだつたのだが。

三左衞門　そんな妙な疑りぶかいことをいはないでおれの肩につかまつて一緒に來い。

遠山　おれのそばに寄るな。お前はおれを殺しに來たのだ。お前はあの野村といふ長州の隊長にいひつけられたのだ。

三左衞門　おれはおれ一人の考でお前を迎へに來たのだ。さあ一緒に來い。

遠山　お前の聲は顫へてゐるぢやないか。それが何よりの證據だ。

三左衞門　疑りぶかい奴だな。

遠山　いや、おれは今朝から味方の奴が、逃げてゆく道々、幾人味方の負傷者を斬つたかちやんと知つてるぞ。

三左衞門　そりや武士らしい死に方をさせるために介錯をしたのだ。

遠山　さうではない。傷ついた味方を道に殘して置けば、そいつ等の口から味方の機密がみんな敵にばれると思ふからだ。

三左衞門　そりやおれが知つたことぢやない。おれはほんたうにお前を伴れに來たのだ。

遠山　三左衞門、おれにお前の心がわからぬと思ふか。お前は惡い人間ではない。だがお前はまだあんまり夢を見過ぎてゐるのだ。その夢のためにはお前はまるで判斷といふものを失つてゐる。お前はそのためにあいつらに命ぜられておれのこの口を塞ぎに來たのだ。咽喉を締めに來たのだ。

三左衞門　眞吾、お前こそ變に病的な神經を持つてゐるのだ。

遠山　さうではない。おれの神經は病的かは知らぬが、何でも見透すことができる。お前はおれが長州の奴等に捕へられて何も彼も味方のことをしやべるといけないと思つてこの咽喉を締めに來たのだ。

三左衛門　賤吉、お前とおれは子供のころからの幼馴染ではないか。

遠山　幼馴染が何になる。お前はあれほど御恩になつた稻垣先生さへ殺したではないか。ばかばかしいお前の夢のために。

三左衛門　ばかばかしい夢だと！　今に見ろ日本中がひつくらかへるのだ。おれたちの天下が生れるのだ。そのためには犠牲も止むを得まい。

遠山　だからおれにもこの上の犠牲になれといふのだらう。この馬鹿め。長州人の犬奴。おれはこの口で薩州の奴等に何も彼も打ちまけてやるぞ。

三左衛門　何だと！

遠山　三左衛門お前は長州人の犬だ！　犬だ！

三左衛門　きさまはおれを侮辱したな。

遠山　犬だ！　犬だ！

（三左衛門飛びかゝつて行つて遠山を打ち伏せる。遠山の首を締める。遠山呻きながら草のなかに倒れる。

京都の空さらに紅く燃え上る。

三左衛門、草の上に倒れたる遠山を見つめ呆然として立つてゐる。）

間。

三左衛門　賤吉ゆるしてくれ。

（賤吉の首を切り袖に包んで小脇に抱へすつと立ちつくす。片手で涙を拭く。）

第三幕　第一場

場所　兵藤三左衛門故郷の家　第一幕第一場に同じ。

時　明治三年ごろの晩秋の夜。

（第一幕から約六年ばかり經過してゐる。部屋の中央に行燈が點されてゐる。壁に懸けられた白い羽團扇は元のまゝになつてゐる。庭の桐の葉が時々落ちる。秋の草花が咲いてゐる。蟲が鳴いてゐる。

空には星がまたゝいてゐる。

おしん、緣側に坐つて糸繰り車を繰つてゐる。おしんの髮は十年以上も經つたかのごとく白くなつてゐる。

部屋のなかの空氣が第一幕とは見ちがへるほど寂寥に充ちてゐる。

浪の音が靜かに聞える。

しばらくおしんはたゞ一人で糸を繰つてゐる。下手より傳七郎登場。釣竿を擔いでゐる。）

傳七郎　おしんさん。今晩は……

おしん　傳七郎さんでございますか。さあお上がり下さい。

傳七郎　いや、また今夜もこれから黒鯛を釣りに出かけにやなりませ

んので。

おしん　でもまあちよつと……それにもう夜分は大分冷てまいりましたで……

傳七郎　けさなんぞ霜が下りてゐたやうでしたな。

おしん　さやうでございました。

傳七郎　明日は知事さまが東京へおかへりなさるとかいふことで、みんなにもお城下はづれまでお見送りをするやうにといふお觸れだつたが、おしんさんも行きなさるか。

おしん　わたしはあの……（もぢ／＼する）

傳七郎　あゝこりや、うつかりしたことをいつてゆるして下さい。

おしん　わたし、知事さまは元よりお屋敷のかた／＼にもとてもお顔を合せる義理はございません。

傳七郎　いや、三左衛門さんにしたところで何も惡意や、勘定づくで稻垣先生はじめお三方を斬つたわけではない。みんな時勢が若い者をあゝさせたのです。わたしでも、もし若かつたら三左衛門さんと一緒になつてあれくらゐなことはしでかしたかも知れぬ。

おしん　お氣の毒な。あのやうに立派な御家老さま方をあのろくでなしが……わたしはよくけふまで生き恥をさらして生きのびて來たと思ひます。

傳七郎　何も彼も御維新ぢや。あのころは日本中に氣ちがひ風が吹き荒れたのぢや。長州でも、薩州でも、土州でも、どこにも氣ちがひ風が吹きめくつたので、ずゐぶん殺されてはならぬ方々が殺されなすつた。しかしもと／＼大嵐だからどの木を助けて、どの木を倒さうなどと容赦はない。殺された人が不仕合せなら、殺した人も不仕合せぢや。

おしん　しかし三左衛門のやうな馬鹿者に殺されなすつた方のことを思ふと氣の毒でなりませぬ。

傳七郎　三百年の幕府が倒れて新らしい世界が生まれて來たんぢやもの、そりやもうあれくらゐのことは過ぎ去つた大嵐と思つて、一切のことは帳消しぢや。多勢の人が殺したり、殺されたりしたのも、みんな今日の世の中が生まれるための生みの苦しみと思つてあきらめるより他はない。

おしん　傳七郎さん、あなたはそのやうなことをおいひなさるが、親を殺され、兄弟を殺された方々にはそのやうなあきらめはなか／＼につきますまい。

傳七郎　さういへば稻垣さんの御子息もあれからは山鹿さんの御指南で、劍術の稽古ばかりなさつておいでのやうな噂であつたが……

おしん　そのことも聞きました。納所五藏さんの弟御新九郎さん、

それから熊野半助さんの兄さんの太郎三郎さんと御組頭の方々八人とかで仇討ちにお出かけなされたとかいふ噂も聴きました。いづれ三左衛門なども仇を討たれて何處かの旅の空に浅猿しい死顔をさらすことでございませう。

傳七郎　いや、何ふ彼も帳消しの御維新ぢや。もとく斬るも殺すも私怨があつてしたことではなし。まあおしんさんあまり心配せぬがいゝ。いや飛んだお喋喃をしました。（釣竿をかつぎ上手へゆきかける）あゝすつかり秋も老けた。空が高くなつた。しかし何時まで生きてゐても人間といふものは死にたくないものだな。わしは秋のこの靜かな夜になると一層いつまでも生きてゐたいやうな氣がする。（空の星を仰ぎながら退場。おしん、紡績車を廻しはじめる。）

おたね　（登場。赤ん坊を背負つてゐる。）おさみしいでせう。

おしん　あゝおたねさんですか。赤坊はよく起きてゐますね。まだ眼をあけてゐますよ。

おたね　どうしたんですかちつとも寝てくれないのでこまりますよ。

おしん　ほんとうにね。さあこつちへ來てあたりませんか。もう夜は火が戀ひしいやうになりました。（火鉢を出し、火を焚きつける）

おたね　夜になると何だかたまらなく寂しくなりましてね。

おしん　おたねさんのやうな若い人が……

おたね　あたしいつも秋のこのごろになると妙に寂しくなるんです。

おしん　年をとればいやでも淋しいこと悲しいことばかりになります。おたねさんなんか若い今のうちはなるたけ面白く可笑しく暮さなくてはうそですよ。

おたね　さうでせうか。それよりね、あたしこのごろは不思議にこちらの三左衛門さんのことをつゞけて夢に見て仕方がありませんよ。どうしたのでせう。

おしん　夢にでもあんな悪黨のことを見てくださるのは、世界におたねさん一人でございませう。ありがたうございます。

おたね　子供のころから三左衛門さんにはお隣り同志で可愛がつていたゞきましたからでせうよ。あんなことになつたのも、みんな時のはずみですから、小母さん三左衛門さんが悪いとばかりはいへませんよ。

おしん　さういつて下さればうれしうございますが、わたくしはかうやつてこゝに生きてゐて、みなさんにお目にかゝるのさへ恥かしうございます。

おたね　でも三左衛門さん一人がどうしたといふのではないのですもの。

おしん　わたしは幾度自殺をしようと思つたか知れませぬ。

おたね　お察しします……小母さんあたしでもなぜだか知らぬが時々そんな寂しい心持になることがありますよ。でも刀やなんかで胸を突くのは仕損じたら苦しいでせうし、首なんか縊るのはみつともよくないし……さうでせう。

おしん　ところでわたしは珍らしい藥を持つてゐますよ。

おたね　藥ですつて？

おしん　これ、こんな藥ですよ（押入れのなかから小さな切子の玻璃罎に入れた藥を持ち出して見せる。）

おたね　ギヤマンの罎にはいつてるのですか。

おしん　三左衞門の親爺さんが御主人樣のお供をして長崎へ行つてゐましたころ、あんなことでお牢舍にはいつてから、夜になつても眠れない病氣にかゝつて苦しんださうでございます。その時和蘭人のお醫者からもらつて來て大事にしといたものでございます。

おたね　へえ……

おしん　これを耳搔き一杯くらゐ飲めば夜眠れぬ時にもよく効くさうでございます。もし耳搔きに七八杯くらゐ一緒に飲めば何の苦しみもなく眠るやうに死ぬことができますさうでございます。

おたね　まあ………

おしん　ですからどのやうなことがあつても人に見せてはならぬといつて親爺さんが大事にしまつて置かれたものですよ。今では長崎の土産といつてはあの時にかゝつてゐる羽團扇とこの藥ばかりが殘つてゐるのでございます。

おたね　あたしあの時こちらの小父さんに長崎の鼈甲の簪をおみやげにいたゞいて、今に大事に持つてをります。

おしん　さうでしたかね。

おたね　小母さん、そんな魔法の藥なんぞ海に持つて行つて捨てた方がいゝでせう。そんな氣味の惡い藥が家の中にあつて魔がさすといけませんよ。

おしん　わたしも最初は氣味が惡いとおもひましたが、このごろではこの藥さへ見ればどんなに寂しいことを考へてゐましても、何だか氣強いやうでございますよ。

おたね　どうしてなんでせう。

おしん　いつでもいざとなれば樂に往生を遂げることができると思ひますので。

おたね　でも、氣味がわるいぢやありませんか。早く捨てゝおしまひなさいよ。

おしん　いや、わたしはもう三年も四年も前にこの藥を服んで死んでゐなければならなかつたのですが……

おたね　小母さんそんなことを。

おしん　いえ、人間はやつぱりなか〳〵この世の執着を断つことがむつかしいやうです。あんな悪黨でも、この母が生きてゐると思へばまだ一度は乾度人目を忍んでも故郷へ歸つて來るにちがひないと思ふのでございます。あんな悪黨に逢ひたいとは思ひませぬが。それでもあの悪黨がこゝへもどつて來て、もしわたしがゐなかつたらどのやうに氣を落すであらうと、それを思ふとつひ、死ぬこともできずからやつて生きのびてをります。

おたね　ですが小母さん、三左衛門さんが今でももどつて來たすつたら、かへつて悲しいことになりはしませぬか。

おしん　もどつて來れば仇呼ばはりされるにきまつてをります……それを思ふと十年でも二十年でも生きてさへゐてくれゝば、どんな遠い世界に住んでゐてくれても、それにましたことはないと思ふのですが……

おたね　三左衛門さんはあれで子供のころからおつ母さん思ひでしたからねえ。

おしん　わたしもそれを心配してをるのでございます。わたしに逢ひにもどつて來る。わたしはもうこの世にはゐぬ。みなさんには殺されるといふことになれば一層憫然にも思ふものですから。

おたね　このころから時々こゝいらを二三人づれで見まはつてゐる方を小母さんは御存じですか？

おしん　もう三月くらゐ前からわたしは氣付いてをります。

おたね　稻垣さんの身内の方々でせうか。

おしん　稻垣さん、それに納所さん、熊野さんのお身内の方々でございませう。つひ三日前のあの嵐の夜などは、わたしあまり波の音が高くて眠れませんでしたので、起きてこゝにぽつねんと坐つてをりましたが、勝手口で何か倒れたと見えてひどい物音がしました。急いで行つて雨戸を明けて見ましたが、ねえおたねさん、黒い覆面をした男たちが七八人裏の垣の下にしやがんでをるではありませんか。（おたねの背の子ひどく泣く）

おたね　まあ……でも稻垣さんやみなさんをあんなことにしたのは三左衛門さん一人ではなかつたはずぢやありませんか。

おしん　でもあの子が仲間の頭といふことになつてをりましたので……
……赤ちやんがどうかしたのでせうか。よくお泣きぢやありませんか。

おたね　小母さん、ちよつと家へかへつて赤ちやんを寝かしつけて來ませう。

おしん　あゝさうなさい（背の子をいたはつてやる）

おたね　小母さんあまり心配なさらない方がいゝですよ。

おしん　ありがたう。

（おたね退場。おしん藥の罐をそこに置きふたゝび絲を繰りはじめる。波の音。風の聲）。

間。

（桐の葉が落ちる。三左衛門下手より登場。道中姿にて編笠を冠り、合羽を着、顔を隱してゐる。あたりを警戒しながら靜かに土間の戸を叩く）。

おしん　どなたです？

三左衛門　おつ母さん、わたしですよ。早く明けてください。

おしん（土間に下りて戸を明ける）三左衛門！　お前は……

三左衛門（急いで土間にはいり、草鞋を脱ぎ、座敷へ上る。ひどく憔悴してゐる）。

おしん　よく達者でもどつて來てくれましたなあ（三左衛門を抱き泣く。あわてゝ表の戸を締め、内より突つかい棒をする）。

三左衛門　おつ母さんもお達者で。こんなうれしいことはありません。でもおつ母さんもすつかり白髪がおふえになりましたな。御心配ばかりかけてすみませんでした。

おしん　それよりも三左衛門お前こそよつぽど苦勞をしたと見えて……

三左衛門　おつ母さん、人間はやつぱり運ですよ。どんなに、もがいてもあせつても時が來ないではどうにもなりませぬ。やつとこのごろになつてつまらぬ悟りを開きました。

おしん　そしてお前他の十六人の方たちは？

三左衛門　あの夜十七人の仲間が稽古の道場の火事で相談をして、相垣先生を始め納所、熊野の首を斬る。その夜すぐに國を捨てゝ京都までまいつたのですが、それからのことは大方こちらでも噂にも御存じのことゝ思ひます。七月十八日からの蛤御門の戰さだけで仲間の六人は討死……………殘りはわたしと一緒に逃げたのでしたが…………これも相川の土堤でたうとう………

おしん　あの人は善い人であつたがのう。

三左衛門　散々な目に逢つて長州まで逃げ落ちたのでしたが、長州に行けばまた長州で外國との戰爭、つゞいて日本中を向うにまはして幕府との戰さ。仲谷、大西殘りの者もみんな病死か戰死。わたし一人がかうやつて生きのこつたのでしたが、……

おしん　うむうむ。おや十六人のお方はみんな亡くなられたのかい。お氣の毒な……

三左衛門　長州の奴等最初の約束は忘れたやうに、何時まで働いても

十分にさへ取り立てゝはくれないのです。そのうちに御一新にはなる。これまで命を捨てゝ働いて來たことが何のためであつたのやら。まるで日本中が大嵐か龍卷にでもつゝまれてゐたやうな氣がいたします。わたしらも夢のやうな心持ちでその大嵐のなかに吹き上げられて、まるで木の葉のやうに吹きまくられたのでした。自分からどうしよう、どうして見ようといふ考へもなかつたやうでございます。一時に嵐の風が吹きまくつて十七人の仲間が取り憑かれたといひませうか、そのまゝ空高く吹き上げられてしまつたのでございました。或る者は京都の空で落とされてしまふ。或る者は長州の邊まで飛んで行つて、そこで落とされてしまふ。わたし一人がまた元の濱邊に吹き送られて落ちて來たやうなものでございます。

おしん　まあ、かういふ時節に生まれ合はせたのがお前にしろ十六人の方々にしろ不仕合せであつたのぢやのう。

三左衞門　時節ばかりではありません。生まれた場所も不仕合せだつたのです。これで長州か薩州にでも生まれ合せてゐてごらんなさい、同じ足輕でもわたしたちが盡したゞけのことを盡せば今ごろは、明治政府の何かにはありついてをりませうよ。

おしん　出世せずとも、何にならずとも、無事で歸つて來てくれたのでこんなありがたいことはない。いそ〳〵として勝手より酒を持ち、飯を運んで來る。）久し振りぢや、佛さまにも拜んで、それからお前も一杯いたゞいて今夜はゆつくり休むがいゝ。

三左衞門　さういたしませう。（佛壇を拜み、それから酒を飲みはじめる。）おつ母さんはさつきまでその糸繰り車を廻しておいでだつたのですね。

おしん　お前がこの家を出て行つてからけふまでまる六年の間、夜も晝もわたしはこの糸繰り車を廻してをりました。

三左衞門　糸繰り車を廻してそれでおつ母さん一人の命をつないでをられたんですな？

おしん　さういへばさう。（糸繰り車の傍に寄り糸を繰りはじめる。）わたしはこの糸繰り車を賴りに生きてゐたやうなものであつた。わたしはこの車を一つ廻してはお前のことを思ひ、二つ廻してはお前のことを案じてをりました。六年の間夜晝、ちよつとでもお前のことを忘れる暇はなかつた。考へて見ると長いことであつた。

三左衞門　さうやつてそこに坐つておつ母さんが糸を繰つておいでになると、何も彼も昔のまゝでございますな。たゞおつ母さんの髮だけが眞つ白になりましたな。

おしん　お前も大分老けて見えるやうになりました。さうやつてそこに坐つてゐると、お父つあんが長崎からお歸りなさつた時そつくり

ぢや。

三左衛門　そんなに亡くなつたお父つあんに似てゐますかなあ。

おしん　そつくりです。旅窶れしたせいか……お父つあんも長崎からの長い旅であの時はすつかり窶れておいでだつたので……

三左衛門　お父つあんはそれにあんなお氣の毒なことでおかへりなさつたのでしたからなあ。

おしん（俯向いて袖口で涙を拭く）

三左衛門　あれほどの犠牲を拂つても足摺はやつぱり足摺で死んでおしまひなされた。わしはそれが無念でならなかつた。そのやうな不合理なことがいつたい有り得べきことか。わしはそのために藩を脱け出して、今日まで働けるだけのことは働きもし、努めもして歸つて來たのであつたが、わしもやつぱり元のまゝの足摺ぢや。こんな馬鹿馬鹿しい世の中といふものがあり得べきことか。

おしん　三左衛門！　またそのうちには良いこともあらう。お前が無事に歸つて來てくれたことだけでわたしはもうこのまゝ今夜死んでも殘り惜しいことはない。今夜はゆつくり休んでおくれ。

三左衛門　それではさうさしていたゞきませう。わたしはあんまり疲れてゐるやうですから、お先に休ませていたゞきます。久し振りで心から醉へたせいかすつかり眠たくなりました。

おしん　ぢや、奧に行つてお休み。今、床をとつて來てあげますで……

……（奧に入る。）

月が出る。浪の音。

三左衛門（緣に凭り、ちよつとあたりに氣をくばり）あゝいゝ月だ。海も見える。昔のまゝだなあ。波の音、海の表、このかすかな夜風の具合までが昔のまゝだ。（桐の葉がばた〳〵と落ちるそれをぢつと見つめてゐる。）

おしん（奧より出て）ぢや、休んだがいゝ。床を取つて置いたから。

三左衛門　おつ母さん、ありがたう。ぢやお先に休ませていたゞきます。（刀を取り、家の内外を警戒して奧へ入る。）

おしん………（脱ぎ捨てられた草鞋や脚袢、笠などを片付け乍ら暫し悲しげに考へこんでゐる。）

間。

傳七郎（下手より登場。低い聲であたりをはゞかり戸口からおしんを呼ぶ。釣竿を擔ぎ魚籠をさげてゐる）おしんさん……おしんさん……

おしん（戸口へ寄り）どなたでございます。

傳七郎　わたしです。

おしん　あゝ、傳七郎さんでございますか。もうおかへりでございますか（戸を開ける。）

傳七郎　今夜は夜明かしで釣るつもりぢやつたが、魚の口から釣針ばかり取られて、魚はてんで釣れぬし、結局ぢやから引き上げて來ました。

おしん　おや、ちよつとお寄りなさつて、お茶でも……

傳七郎　おしんさん。ちよつと表まで……

おしん（戸口まで出る）

傳七郎　實は心配なことが起りましたのぢや。

おしん　心配なこと〻いひますと？

傳七郎　三左衛門さんが今夜旅から戻つておいで〻したな。

おしん（驚きを隠さうとつとめて）はい、實は先程歸つてまゐりました。

傳七郎　それでわかつた。わたしがいつものやうに濱で釣りをしてをると、三人連れの男が濱に來てそこにあつた二艘の船の櫓を海の中に捨て〻しまひました。妙なことをすると思つてゐますと、八九人の男たちが一緒になつてこつちの見當へ歩いて來ましたが、たしかにあの仲間にちがひありません。

おしん　では今夜にもこ〻へ押しよせて來て三左衛門を殺すつもりでせうか。

傳七郎　三左衛門さんはあのやうに腕も達者だし、三人や四人か〻つて來たところで心配なことはあるまいが、あ〻多勢では何が何でも所詮切り抜けることはできまい。

おしん　どこからか落してやる道はないものでせうか。

傳七郎　一番安全なのは濱に出て船を漕いで淡路に逃げることだが、生憎の月夜だし、あ〻見張りが嚴しうては……

おしん　そんなに嚴しう……

傳七郎　この家を取りかこんでもうすつかり見張りをつけてをりますやうぢや。

おしん　こんなことならわたしに逢ひに戻つて來てくれなければよござんしたに。

傳七郎　ほれ、もうあれぢや……（上手の藪のなかを指さす）

おしん（その方を見る）

傳七郎　黒い人影が二つ見えましたらう。おしんさんお氣の毒ぢやが、わしはかうしてはをれませぬ。戸締りでも嚴重にして先づ今夜だけでも無事に過すやうに、明日はまた何とかよい工夫がつかうも知れませぬ。

おしん　でも、もし今夜押し入つて來るやうなことでもあつたら。

傳七郎　對手も武士だ。夜盗のやうな眞似はしますまい。ぢやわたしはこれで失禮します。おやすみ……（急ぎ下手へ退場）

おしん（戸を締め、一人ぽつねんと考へ込んでゐる。）

三左衞門（奧より）おつ母さん、水を一杯くださいませんか。

おしん　あい、今すぐ持つてつて上げます。（湯呑み茶碗に水を注ぐ。奧へはいらうとする。立ちとまつて不圖足音に耳を傾ける。戸の間より表を覗き見る。七八人の男たちが顔を包んで下手の籬の間より登場。戸にさらに突つ掛い棒をして、上手にまはりあたりを見まはす。そこにも數人の人影を發見して茶碗の水をこぼす。ぢつと考へ込んでゐる。）

間。

三左衞門（奧より）おつ母さん、冷たい水を一杯ください。酒を飲んだせいか咽喉が乾いて仕方がありません……

おしん　あい、直に持つて行きます。（ふたゝび茶碗に水を注ぐ。そこに置いてある切子の玻璃罎の薬に氣付いて手に取る。ひどく手が顫へる。ふたゝび下手の戸の外を覗く。七八人の男たちは釘付けられたやうにそこに靜かに佇立してゐる。上手を覗く、そこにも男たちは同じ姿勢でたゝずんでゐる。）

三左衞門　おつ母さん冷たい水を一杯ください。

おしん　あい今直ぐに……（思ひ切つて玻璃罎の薬を茶碗の水に入れて飲み干す。ふたゝびさらに茶碗に水を注ぎ、玻璃罎の薬を入れ部屋の行燈を消し奧へ入る。）

覆面の男たち、上、下手へ退場。

間。

おたね（下手より登場。戸口に寄り）小母さん……小母さん……（家の内を覗いて見る。）おやもうお休みか知ら……小母さん……小母さん、もうお休みなすつて……小母さん……小母さん……

：

桐の葉落ち蟲鳴く。　　　暗轉。

同第二場　奧の間

行燈が點つてゐる。

第一場より約三四十分の時間が經過してゐる。月の光りが蒼く庭の秋草を照らしてゐる。遠くかすかに浪の音が聞える。蟲が鳴いてゐる。上手に桐がある。庭境に玉蜀黍などがある。下手に月下の海をへだてゝ淡路島の影が墨繪のごとく浮かんでゐる。

三左衞門は寢てゐる。枕許に刀と茶碗が置いてある。三左衞門もおしんも顏色がひどく蒼白くなつてゐる。おしんは三左衞門の背を撫でゝゐる。物におびたやうに刀を取り立ち上らうとして再び寢る。

三左衛門　おつ母さん、ありがたう。もうたくさんです。長い道中を歩いて來ましたのですつかり疲れたんですね。ありがたうございました。わたしは六年振りで今夜はじめて心から安心して眠れさうです。わたしはこの六年間といふもの熟睡といふものを忘れてゐましたが今夜はほんたうに氣持ちよく眠たくなつて來ました。おつ母さんも早くお休みなさい。

おしん　ありがたう。お前こそ早くお休みよ。（そうつと袂で淚を拭く）

三左衛門　さつき傳七郎さんの噂かしたやうでしたが？

おしん　お前、傳七郎さんの噂をおききだつたのかい？

三左衛門　ゑゝ。六年前こゝの家を出た日にもあの人と話をしました。あの時は濱に鼈を釣りに出かけておいでゝしたが……

おしん　今夜もあの人は濱に鼈を釣りにおいでだつたさうな。

三左衛門　今夜も濱に鼈を釣りに行つたんですつて？

おしん　あい……

三左衛門　（獨語のやうに）あの人はこの六年が間每夜濱に出ては一人で鼈を釣つてゐたんですか……わたしらが人を斬り、人に斬られ、夜も晝も明日の世界を夢みては大暴風に吹き飛ばさるゝ木の葉のやうに日本中を飛びまはつてゐた間に……あの人は六年一日のごとくこの濱で………

おしん　傳七郎さんは若いころから世の中を悟り切つた人のやうだつたかのう……

三左衛門　おつ母さん……わたしは稻垣先生を斬りました。熊野、納所を殺しました。また京都の桂川の土堤では鐵砲にあたつて呻いてゐた仲間の首を斬らねばなりませんでした。わたしのために十六人の仲間はみんな旅の空で死んでしまひました。おつ母さん、わたしは惡いことをたくらんで稻垣先生を殺したわけではなかつたのでした。わたしは立派な自分の考を持つてゐたのでした。それだのに………

おしん　もう、そんなことは考へないがよい。

三左衛門　おつ母さん、わたしは誤つてゐたのでせうか。自分の力を信じ過ぎてゐたのでせうか。夢を描いてゐたのでせうか。

おしん　何も彼も時世時節なんだよ。何でお前のせいなものか。

三左衛門　おつ母さんはほんたうにさう思ひますか。

おしん　さう思ひますとも。

三左衛門　おつ母さん、わたしが惡かつたのではありませんね。わたしはみんなのため、われ〱の仲間のために立つたのでしたね。そのために人を殺し、仲間を殺したのでしたね。

おしん　さうですとも。何でお前が悪いものか。大風暴雨には静かに沈んでゐる石さへ飛ぶんだもの。

三左衛門　大暴風雨！大暴風雨でしたね……みんな大暴風雨が時代の人たちを狂人にしてしまつたのでしたね。

おしん　大暴風雨も吹き止んでしまひました。さあ静かにおやすみ。

三左衛門　おつ母さん、あなたはやつぱり今日も糸繰り車を廻し、傳七郎さんは黒鯛を釣りに行くし、何も彼も六年前そつくりですね。わたしは長い夢を見てゐたんですね。おつ母さん。おつ母さんの膝を貸してください。わたし眠たくなりました。

（行燈が消え、月の光りが部屋のなかに流れ込む。静かに子守唄が聞えて來る。）

三左衛門　おつ母さん、誰ですうたつてゐるのは？

おしん　おたねさんだよ。

三左衛門　お隣りのおたねさんですか。

おしん　よいお嫁さんになりましたよ。可愛いゝ子でしたからね。要介さんを婿にもらつて去年男の子が生まれましたのさ。

三左衛門　おたねさんですか……ほんたうにおたねさんの聲だ……

……（懐かしさうに聴く。）

おしん　夕方來てあそんでゐましたが、子供が泣くんで歸つてゆきました。夜中に子供が眼をさましたんでせう。

（桐の葉が落ちる）

三左衛門　桐の葉が落ちるやうですね。

おしん　このごろは夜になるといつもあのやうに高い音を立てゝ桐の葉が落ちますよ。

三左衛門　また桐の葉が落ちますね。

おしん　あ…………（意識を失ひはじめる）

間

三左衛門　地を搏つ音が静かぢやありませんか。人間の偽るすべてのことも結局は落ちてゆくところに落ちてゆくのですね。

おしん　…………

三左衛門　（やゝ意識を失ひつゝ）落つるところに静かに落つる……

…………

おしん　どうしました（意識を喚びさまして）

三左衛門　おつ母さん……手を貸して下さい（ちつと母の手を握る……）おつ母さん眠い……

おしん　どうしました。どうしました。

（子守唄の聲……）

三左衛門　……………（眠るがごとく静かに意識を失ひはじめ

る。）

おしん　ゆつくりおやすみなさい。わたしももうやすみます。（立ち上らうとするがひどく痙攣を起したらしく三左衛門の上によろめきかかる。）

三左衛門　（同じやうに痙攣を起し、ほとんど無意識的に）おつ母さんどうしたんです……

おしん　おやすみなさい……（突つ伏してしまふ）

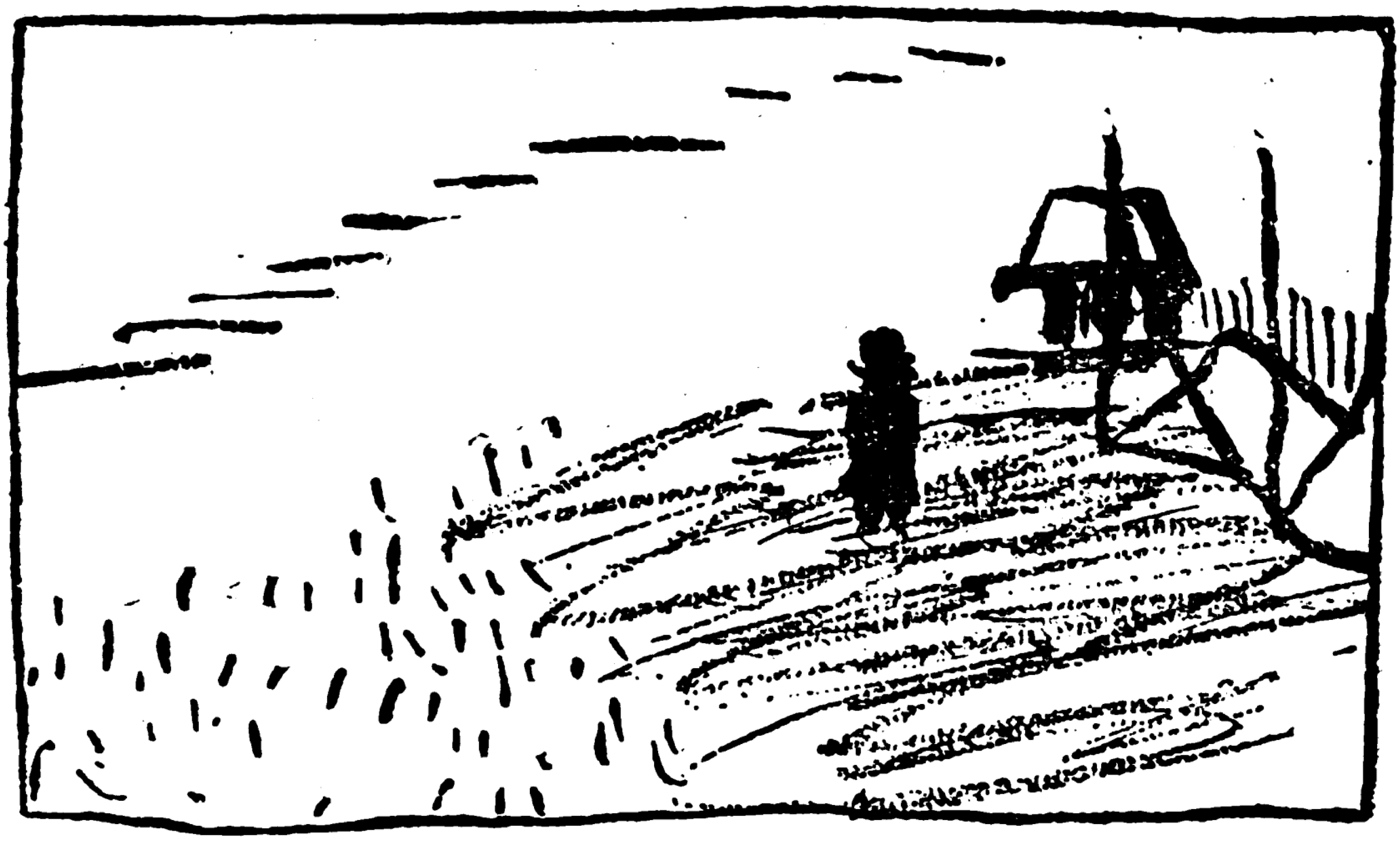
三左衛門　おつ母さん……（手さぐりに母をもとめる）

やがてかすかに痙攣しつゝ呻きつゝ二つの肉體が、欄間を洩れて來くろ月の光りを浴びて横たはる。十五六人の黒い覆面の武士たちが太刀を拔き影のごとく靜かに戸口及び庭にあらはれる。

おたねの子守唄の聲がつゞく。

靜かに幕

—一九二八・五—



氾濫

黒島傳治

一

晩に人々は、寺の廣場へ出かけて行つた。手拭を繼ぎ合して縫つた派手な浴衣を着て、老婆が扇を持つてゐた。娘達が四五人づゝ群がつて、輕るく笑ひながら、小さい櫂をかついで、田の中を急いで行つた。手には綠色の手甲をはいてゐた。

「おい、八重ちやん。今夜は俺と踊らうや。——安ツさんは待つてゐ來やせんぞ。」

「いやだよ。」

「何だつて……いやなら、むかむちに腕力で行くぞ。」

娘達のあとから、鉢卷をした肌ぬぎの若衆が追ひかけるやうにつゞいて來た。

「いやな奴！——十の阿呆。」

娘は、うしろへ振りかへつて、十吉に云ひかへした。一番うしろの小娘は、不意に、一人の青年にくすぐられて、故意に、仰山な悲鳴をあげた。

「どうしたんだい？」くすぐつた青年は白ッぱくれてゐた。

うしろの方で、誰れかゞ突然、おかしさうに高く笑ひだした。八月の夜は、さわやかに、透明に、落ちついて黑ずんで行つた。遠く山際で稻妻がきらめいた。寺の廣場には赤い提灯が點がり、篝火が燃えてゐた。火の粉がパチ〳〵飛んだ。そこの廣場の一角だけは、空が赤く火事のやうに照りはえてゐた。

人々は、草履を引きずつて、廣場やその附近にそよめいた。土ほこりが、篝火にすけて、眼に見えつゝ、黄粉のやうに立ち上つた。荷桶を擔つて、寺男が亂暴に水を打つてまわつた。水の飛沫をさけて、女達は、キヤア〳〵叫びながら、一方へ密集した。

「なんて勿體ないことをするんだ。」隅の方では、ある爺さんがぶつぶつ云つてゐた。「一荷の水だつて、田へ汲んでやれや、よれかけとる稻が息づくんだ。」

提灯をつるした四本の柱に支へられてゐる櫓へは、やがて、太鼓や三味線が持ち運ばれた。囃し方が、水瓶をさげて梯子を上つて行つた。

雜然と群がつてゐた男女は、互ひに組みあつて、櫓の周圍に輪を作つた。

闇に沿うて、長く一筋にのびてゐる松原のかげに墓場があつた。そこには、燈火が點々と靜かに、ねむるやうにともされてゐた。啓助が燈火をともし、墓前に線香を立てゝ田の畦道を引つかへしてゐると、いくえに出會した。青い稻の香はしい匂ひがたゞよつてゐた。稻田は夜間吸ひこんだ熱を靜かに吐き出してゐた。

「私も、あんたに用がありさうな氣がしてゐたの。」いくえは、白い反ッ歯をあらはして笑つた。

「俺もなんだか、そんな氣がしとつたんだ。」

啓助は、いくえについて、また墓場の方へ下つた。波の音が稻田の上を傳つてきた。海岸は、人影が少くひんやりしてゐた。墓場へ來た者は、用事をすますと、すぐ寺の廣場へ引つかへして行つた。微風につれて、稻田は、なほ強く、香はしく、稍乾いた感じをもつて匂つてた。松原の沖には、蒼白い銀色の波が眞一文字に、砂濱に碎け散つてゐた。八月の波は、夜光蟲で青くきら〳〵かゞやくのであつた。

いくえが、燈火をともし、線香を立て、墓石の間をくゞりぬけて來ると、二人は、別の道を川傳ひに寺の方へ上つて行つた。稻田の夜は、透明に暗く靜かであつた。

「お月さんが出なけや、お盆のやうな氣がせんわのう。」いくえが云つた。

「十二時すぎたけや、暮れたから、月は出ないんだ。」

「あら。さう。」
啓助は、闇の中に、嬉しさうないくえの横顔を見ながら、二人が初めて手をつないで一晩中踊りぬいた夜のことを思つた。またその時は、納屋でお盆をしてゐた。大きな月が踊つてゐるうちにいつか山の峡から出て來たことを聯想した。月は、薄い霧に包まれて、踊場の上へおりてきた。櫓から手を伸せば屆く位ゐに、それは地上に接近してゐた。あれから何年たつただらう。——その時、彼は二十才になつたばかりであつた。いくえは四ツ少なかつた。
彼女は、町の莫大小工場へ年期で稼ぎに出てゐた。盆と正月とには、ひまを貰つて村へ歸つて來る。啓助は、顔を合せるたびに、彼女が次第に年を取り、やつれてくるのを見た。初め、彼と手をつないで踊つた時には、彼女はまだ、内に充實した處女の生氣を持つてゐた。青い林檎を割つたやうな匂ひを彼女の肩は放つてゐた。
「いつ年期があくんだつたかな？」
「この十月いつぱい。」彼女は、頰に血潮をみなぎらせ華やかにたつた。中から嬉しさがこみ上げて來るのであつた。「でも、今年中は、居らなけやならんかも知れんわ。」
「どうして？」
「私、モスの羽織くらゐ一枚ほしいと思ふの……これでもお嫁さんに行くのよ。」彼女は、おかしさと、嬉しさをこらへてゐた。
「どこへだ？」闇の中で啓助の聲は笑つた。
「それはね……」彼女は、おどけた調子を精一杯に現はし、囁くやうに男の肩を捕へた「ここ。」
大きな欅が、村の上にぬきん出て、傘のやうに擴がつてゐる、その杜かげに彼女の家があつた。踊があると毎晩、彼は、そこの納屋かげにかくれて、彼女が扇を持つて出て來るのを待つたものだ。彼は、すつかり暗くなるのが待ちきれなかつた。夕方、たそがれだすと、そこへ行つて立つてゐた。蚊がやかましくうなりながら、物置から湧き出てきた。彼の手足に喰ひついた。
いくえは、白い反ッ齒を見せながら、土藏の細あひから、そつと忍び出て來た。
「たいぶ待つた？」
「いや。」
「あの林のかげから廻つて行かない。」
二人は、家人に氣つかれないやうに、草履の音をしのばせて、家の裏から人通りの少ない林の方へ行つた。その家は抵當に這入つてゐた。從兄は、家を取り上げやうとしてゐた。いくえが莫大小工場へ行くことになつたのは、その借金が主な原因だつた。

啓助は、盆がすむと、あくる年の盆が來るのを待つた。そして翌年の盆がすむと、またその次の盆が來て、いくゑが町から歸つて來るのを待つた。彼は、幾年盆を待つたであらう。彼は二十七才になつてゐた。いくゑは二十三だつた。そして、なほ今だに盆を待たねばならなかつた。

啓助は、小作料を三年分滯納してゐることを思つた。また西瓜が出だしたばかりの頃である。だが百姓達は、既に、食ふべき米を殆んど持つてゐなかつた。二人が結婚するには、米がとれなければならなかつた。

二

薪を加へられて、篝火は、花火のやうにパチ〳〵火の粉を散らし、一層高く燃え上つた。周圍には不快な熱氣が滿ちた。踊子が輪を作つてゐる外側に、踊に加はらない老人や中年者が、筵を敷いて見物してゐた。太鼓が調子をとつて鳴り始めた。おぼつかなげな三味線がそれに和した。踊子は、日の丸の扇を揚げて振つた。派手な水色の中柄や、花模様の長襦袢が彼等が手足を動かすにつれて、提灯と篝火の光りの下にひら〳〵ひるがへつた。

「いくちやん踊れよ。」

「手拭をくれるまで踊つてやらうかしら。」いくゑは、啓助を見て微笑した。「あんた踊らない？」

「さあ、俺れや、今年はやめとく。――誰れかいゝ相手はないかな。」

いくゑは、見物人の間をかき分けて、相手をさがして歩いた。彼女がほかの男と踊つても啓助は嫉妬する男ではなかつた。しかし彼女は、意識して相手を選んだ。啓助と同年輩の者と手をつなぎたくなかつた。

太鼓の音は、廣場の空氣を震動させた。連日の野良仕事に、日に焦げ、汗に汚れた音頭取りの顔にも張氣があつた。盆の休日を、彼等は、夕方まで寢て暮し、休養したのだ。踊子は、輕く見物人の前を踊りながら通りすぎて行つた。

いくゑは、十一になる彼女の從弟をつれて來た。彼女は、細紐でたすきをかけ、長い着物の裾を引き上げた。

「仙ちやん、さ、踊らう。」

「あんまり恰好がよくないよ。」

「一寸だからいゝでせう。」

潮風で皮膚を焦がした、肉づきのいゝ仙吉は、いくゑに手を引かれて、見物の間から早足に走り出た。彼女は、踊子の輪の切れ目を探して、そして、そこへ、投げられた石のやうに全速力ではまり込んだ。

啓助の前を幾組もの男女が、扇を振り、分れては、また手をつなぎながら、キリ〳〵廻つて行きすぎた。バネ仕掛で、規則的に、はねてゐる人形のやうだ。バネが狂つて、音頭の調子にはづれた踊り方をしてゐる組もやつて來た。わざと滑稽なしぐさをして見せる老婆も交つてゐた。老人は、踊りながら、傍の若い男女にわるさをしかけた。啓助はそこに、町へ稼ぎに出てゐる澤山の若い男女を見た。紡績工場へ行つてゐる者があつた。女中奉公から歸つてゐる者もあつた。石鹸工場から歸つてゐる者もあつた。また、彼は萬問屋の息子の喜作を見た。彼は、急に嫉惡と不快を感じて顔をそむけた。女の服裝をしてよろ〳〵戯れ半分にやつて來る、それが喜作であつた。喜作は鶴龜算さへ完全に解けない癖に親爺の威力で小學校を常に首席で通した。次には、金の威力で町の學校を卒業した。啓助は、羨望と反感をいまだに忘れることが出來なかつた。しかし、彼が顔をそむけたのは、それにのみ起因してゐるのではなかつた。

喜作は、踊りつゝ衆目を憚らず、薄い浴衣を通して、肉體の温度や、柔い皮膚の感觸が殆んど直接的に感じられる、發育しきつた背ひ高い女の腰に抱きついた。相手は、憐憫を求める捨てられた戀人のやうに、喜作に反抗しなかつた。その女は、健かな、汚れない血を持つてゐた。篝火のかげに、彼女は紅みを帶びて昂奮し、かゞやいてゐた。彈力ある二つの腕は、強い速力で、磁石のやうに、相手の肉體を引きつけた。二人は一つになつた。そしてバネのやうに脚をはね上げながら見物人の前を廻つた。喜作は故意によろ〳〵した。女は、倒れさうになる彼を支へた。それが妹のお清だつた。

「何てことをしやがるんだ！」啓助は、齒痒ゆさと同時に、腹立たしさを感じた。

二人は、離れて扇を振つた。そして幾秒かの後、再び手をつなぎ合つて、尾のあるアミーバのやうにむすぼれ、一つにとけ合つた。啓助は、お清を引きずり出しに、とびこみたくなつた。彼は、自分の顔がほてつて來るのを感じた。妹の醜い、ふしだらな恰好は、多くの踊子の中で特別に目立ち、見物人に對して、彼自身が羞恥を感じた。喜作は、親からして、小作人との結婚を眞面目に考へる男ではなかつた。それだのに、お清は、一圖に、喜作の云ふがまゝに、柔順になつてゐるのだ。

太鼓が不意に鳴りやんだ。夢中に廻つてゐた踊子は、號令でもかゝつたやうに、立止まつた。坐つてゐた見物人の中から五六人の老婆が立上つて、踊子の方へ早足にやつて行つた。

寺の廊下へテーブルにのせて、紅木綿の手拭が持運ばれて來たのだ。皆、その紅い手拭に眼をつけた。見物席から、また、五六人立上

つた。踊子は列を亂して、廊下の紅木綿の方へなだれよつた。
「待て、待て！　隊を作つて來い。慌てないでも、皆に一つ宛やるんだ。」
テーブルの傍には、萬間屋の下男と、お作とが立つてゐた。お作は、にこ／＼笑つた。彼女は、五十才をすぎたばかりだが、髮は眞白になつてゐた。下男は、さきに、紅い手拭を一筋取つて、鉢卷をして人々に叫んでゐた。
「おい、おい。隊を作つて來い。隊を！　皆に一と筋づつ、流れにでもやるんだ。」
廣場からは、黄色の土埃が、篝火にすけて、再び、ひどく立上つた。

村の中ほどに、新しくつけられた道路に面して、新しい二階建がある。村に使ふ必要な品々を、なんでも殘らず並べたてゝ賣つてゐる。菓子、荒物、雜貨、酒、醬油、鹽、肥料、それから賣藥、肝油。これが、萬間屋の半次郎の店だ。
そこには、主人の姪の新子が店番に坐つて、酢つぱい聲で笑ひ喋つてゐた。新子は三十をすぎてゐた。が獨身だつた。口の惡い青年は猥褻な表現で――その表現を臆ら甦びつゝ――彼女に生れつきの性的缺陥があると云つてゐた。
半次郎は、小作地の差配をも兼ねてゐた。地主の節田組は村の近くに事務所がなかつた。彼は、節田組の手代の仕事をやつてゐた。小作料の籾粒を口に入れて、乾燥の程度を噛んで試すことを忘れない男だつた。掌に籾粒をのせ、口を細くしてそれを吹くと、空殼が呼氣の力でとび落ちたりする。彼は、さういふ籾を見つけると、籾俵を秤にかけることを要求した。節田組の社長はF男爵である。その男爵から、年に一回、仕着料を貰ふことを名譽と心得て、彼は忠義立てをするのだ。
その外、金貸し、穀物問屋、木間屋など、儲かる商賣なら何にでも彼は手を出した。
店の品物は、粗惡で高かつた。醬油は鹽水のやうだつた。酒には藥や、水がまざつてゐた。彼が貸した金は、まるで高利貸のやうな利子を取つた。百姓達の苦情は、絶えなかつた。だが、半次郎は、「これで氣に入らなければ店へ厄介をかけに來るな。」と叫るやうにがみ／＼云つた。
新子は、村に一軒しか雜貨店がないのにつけこんで、小作人を見くびり、自分の好惡に從つて値段に高低をつけたりした。
彼女は、金をよこす男には、いくらでも水の混つた酒を押し賣りし

た。金のない男には、コップ一杯の酒をさへ融さなかつた。節季に、掛が拂へない家からは、穀物でも、薪でも、鍋でもそこらにあるものをなんでも金の代りに取り上げた。

牛次郎の妻は、信心ばかりに凝りかたまり、商賣には、全然かゝずらはなかつた。彼女は――名前はお作と云つた――近所の老人達をさそひ合して、よく隣村の眞言宗の寺へ參つた。どこかへ參る時、お作は、店へ這入つて、駄菓子と一緒に向うへ供へるものを持出した。

新子は、腹立たしげにふくれ面をして、何にも、ものを云はず、叔母の行爲を睨むやうに見てゐた。

「あとをちやんと閉めといて頂だい！」

新子の物惜みと不服は、かういふ表現をとつた。そして、叔母が閉めたばかりの障子を彼女は、手荒く開けたて、梯子段をぎし〳〵踏みならして、二階へ馳せ登つた。

「また叔母さんが店のものを持ち出したぞな！」

牛次郎は二階で帳面を繰り、利子の勘定をしてゐた。

「ふむ。」彼は眼鏡を外づして考へこんだ。

「煎餅を二十五枚に、線香を三束……」

「ま、えゝよ。持つて行かせ。」

「なんぼ持ち出したつて切りがあれせん！」新子の疳高い聲は、近くの田で草を取つてゐる百姓にまで聞えた。

「えゝよ。信心ごとに使ふたものは、また御利役で、ひとりでに戻つて來るもんぢや。えゝよ、えゝよ。」そんな時、牛次郎は、滿ち足りた者の微笑を浮べた。

お參りごとの行きかへりに、お作は、何かむしや〳〵食つた。老人達に煎餅を分けてやつた。

彼女の信心とお供へものは、村人の心を和げた。牛次郎と新子に深く反感を抱き憤つてゐる者も、同じ家に信心深いお作が住んでゐることを思ふと、まだしも許せるやうな心持になつた。宗教が民衆の闘爭力を鈍らせるやうに、彼女の信心と施物は、百姓達の燃え上る反抗心に安全瓣の役目をした。

彼女は、毎年、お盆に、手拭をやることを例としてゐた。百姓は、何ケ月かの勞力を積んで作つた穀物を賣らなければ、一錢の金さへ得られなかつた。また、彼等は、その金を出さなければ、一枚の紙だつて只では得られなかつた。お作の手拭は、彼等を喜ばせ、彼等の懐愁を解いた。人々は、只で貰へる手拭をあてに廣場へ集つて來た。

小娘達は、貰つた手拭を早速擴げて頭にねえさん冠りをした。娘はそれで、頭や顏をかくして踊るのだつた。お作は、提灯の光の下に喜ぶ婆さんや若者や娘達を見て、自分までが嬉しさうにほく〳〵した。

下男は、脇からひよいとテーブルのさきへ現れた者を突きのけ、眼隠を作つて來るやうに力いつぱいに繰りかへし叫んだ。

踊子は、褒美を貰ひに行く生徒のやうであつた。椅に上つてゐた太鼓方も、三味線方もおりてきた。見物人は席から立上つた。彼等も踊子のうしろに列を作つて押しかけた。

「何だい！ こんな安物の手拭をくれたつて！」誰れかゞ列の中で腹立たしげに叫んだ。

「水のやうな酒を賣りやがつて、こんな手拭でごま化さうたつて、ごま化されやせんぞ。」

「さうだ。その通りだ！」ほかの聲が應じた。

お作は、ほく〳〵笑ふことをやめなかつた。

「定五郎！」彼女は下男に云つた。「あの爺さんにも一つやつておくれ。」

定五郎は、文句を云つた男の方へ別な手拭を投げた。人々はどよめき、手拭を受取ることを急いだ。定五郎に突きのけられた男が、反動的に強く押しかけた。

廊下の柱の提灯は、ぼんやり周圍を明るくしてゐた。奧の佛壇には、かすかな燈明がふるへてゐた。そこは、暗く無氣味で、抹香の匂ひがたゞよつてゐた。喜作が突然その闇の中から折り疊んだ手拭を腕一杯にかゝへてむつくり廊下へ現れた。彼は、だらしなく笑ひ、依然としてよろ〳〵した足どりだつた。廊下に出ると彼は、腕から急に力を拔いた。かかへられてゐた手拭は、一時に、廊下へ落ちた。

「そらッ、行くぞ！」

不意に彼は、のど一杯の聲を出した。人々は彼に眼を注いだ。喜作は手拭を摑み上げた。そしてつゞけさまに、群集の頭をめがけて、摑んだ手拭を投げた。手拭はさう遠くへはとばなかつた。

人々はどよめき、列が亂れた。喜作は出たらめに、大聲で叫びながら、手にあたるまゝに手拭をまるめて、踊場の方へ投げだした。

篝火のあかるみは慄へ、提灯はゆらめいた。群集は、階を通してとんで來る手拭を眺め、その方へ殺到し、互に手をかきむしり合つた。

三

稻田の面に霧がたなびいた。破れた藁屋根の甍は、乳色の霧の中に、かすかに息づいてゐた。東の空が紅くなり、太陽が登り始めた。白い、爽かな夜明けは、いつか、灼熱燒くやうな日中に變つて行つた。夜半すぎまで踊りくたびれた人々は、泥臭い溝の水が煮えかへり、惡臭を放つてゐる稻田へ水を取りに出かけた。

暑氣つゞきに、田の水は涸れ、所々、龜裂を生じてゐた。稻の休み

に水を汲まなかつたことは、直ちに稲の發育に影響した。葉末のよれ方が一層ひどくなつた。溜池近くの田には、病氣がさした。青い眞直な稲葉が、錆色に變りだした。

啓助は、父親の啓太郎と二人で池の水を汲んだ。彼等はいつも、休日の後に於て、休んだ分をも取かへすべく、二倍も三倍も働かねばならなかつた。百姓が休んでも、太陽は、水分を蒸發させ、稲を枯らすことをやめはしなかつた。雑草は、根をからませ、はびこることを中止はしなかつた。

太陽は、薄い襦袢を透して焼きつけるやうに肌を射た。何百回となく重い釣瓶を引き上げると、腰が筋ばり痛んだ。啓助は、百姓がつくづくいやになつた。稲はこのまゝ四五日も放任すれば、枯れてしまふだらう。すると、春以來の勞力や、肥料や、稲苗が一擧にして烏有に歸するのだ。

出稼から歸つてゐる者達は、正月以來、着汚し、着破つた着物を洗ひつゞくつて、行李につめ、村の背後の丘を登つて、再び町へ稼ぎに出かけた。いくえもそこを登つた。妹のお清もそこを登つた。それから、與吉も、浪次も、てい子も、俊次も。

啓助は、撥釣瓶を引き上げながら、それを見送つた。彼も二十才以前に、醤油工場で働いたことがあつた。工場の勞働の方が野良仕事よりも遙かに容易だつた。勞働時間が、たとへ十時間働くとしても限られてゐる。それだけでもよほどましだ。野良仕事はさうは行かない。彼は今、十三時間も、十五時間も働いてゐるのだ。さうしてなほ、仕事はあとからいくらでも追つかけて來る。

丘の上には、松林があつた。松林を登りきると、道は平坦になつて、細く眞直につゞいてゐた。若者達は、そこを行つてゐた。一里半歩いて停車場へ着くのだ。

彼等は、それ〲町でいくらかの金を稼いできた。お清が稼いだ金は、家の生活費や借金の利子にあてた。派手な、賑やかしい町から彼女が、歸つて來ると、生家は、むさくるしく、汚く、家中に、小便の臭ひがぷんぷんしてゐた。瓦斯でも停滞してゐるやうな氣がして、彼女は思はず立止つた。親達や兄妹は、不潔なゴミの中で、まるで動物のやうに蠢動してゐる。――妹がさう感じてゐることを啓助は知つてゐた。

お清が稼いで來ただけでは、半次郎への節季の支拂に足りなかつた。金の代りに不足分だけ麥を渡さなければならなかつた。啓助は、物置きから俵に入つた麥を出して、手車に積んだ。それは、獨り、彼等の家でさうするばかりではなかつた。百姓達は、それぞれ、息子や娘を稼ぎに出し、儲けてきた金は、すつかりそのまゝ半次郎へ借金の利

子や、肥料代や、日用品の掛代金に拂つてしまつた。その不足は、食糧とする麥を節約して金の代りに渡すのだ。

彼等は、理由なしに、只で、大豆一粒さへ半次郎へ渡しはしなかつた。半次郎へ渡すものは、小作料であつた。肥料代であつた。醤油、その他の日用品を買つた代價としてであつた。ところが要求されるままに、それ等を渡してゐると、一年中、家族の者全部が町と、村で汗を流し、骨身を削つて働き得たものを悉くやつてしまはなければならない破目になつた。

彼等は、自分の空腹を幾分か滿し、餓死すまいとすれば、それだけ小作料が拂へなくなつた。そこで、一年分滯納した。彼等は小作料一石六斗を一石一斗に負けることを要求した。要求は容れられなかつた。二ケ年分滯納した。……

彼等は、半次郎へ麥を渡さずに、現金を渡さうがために金がほしかつた。啓太郎は、紙楮を作り、蜜柑を植ゑ、除蟲菊を咲かせることを考へた。それ等のものも、生活の窮乏を補ふには足りなかつた。

百姓は、酒を二合のむところを一合に節約した。團子の砂糖餡を鹽餡にかへた。ある者は、欲しい酒をやめてしまつた。またある者は、茶碗に五杯の麥飯を食ふところを、四杯で辛棒した。空腹を怺へた。

啓助が荷車を引いて行つた麥は、粒が細く瘦せてゐると半次郎が難癖をつけた。彼は、見す〳〵相場よりは八十錢安くで渡さなければならなかつた。それだから、彼等は、麥を渡さず、現金で拂ひたがるのだつた。彼は、盆の前日の夕方、十圓も損をさせられたやうな氣持になつて、ふさぎこんで空車を引いて歸つた。

「素麵はよこしたか？」

「あゝ、二貫目だけ借りてきた。」

「砂糖は？」

母の千代が納戸から蒼白い顏に、髮を亂して這ひ出て來た。

「こつちをいぢめられるだけいぢめてやがるんだ！」啓助は母の言葉が耳に入らないもののやうに獨り言つた。「向かッ腹が立つて仕樣がない！」

ランプは薄暗く、屋内は陰氣だつた。生家で休養しようと思つて歸つたお清は、ひそかに、奉公先の病院長の家の輝やかしく、清楚なことを思つた。……

四十人ばかりの若者が町へ行つてしまふと、村は急に空ッぽになつてしまつたやうに感じられた。目立つて淋しくなつた。ひよろ〳〵して手脚のきかない老人が殘されてゐた。あとをついで百姓をすべく習慣つけられてゐる長男が殘されてゐた。殘された者の前に希望はなかつた。貧乏と義務があるばかりだ。

一反歩ばかりに、啓太郎父子は、正午からかゝつて汲んだ水が、まだ夕方になつても、田の隅々に行き渡らなかつた。

「また蟹が孔をあけとるんやらしれんぞ。」啓太郎は、薄暗くなつた田の面を足先でさぐりさぐり見まわつた。

田に、海岸から上つてきた、大きな黒い強欲蟹が澤山住んでゐる。それが田の底や、畦の端へ深い孔を掘つた。蟹は稲の根や雑草をついばみ、肥料を孔の中へ引つぱりこんだ。百姓は、見つけ次第、その甲羅を叩き潰した。その蟹の孔が、鰻のやうにぐい／＼水を呑みほしてしまふのだ。

「啓助！　また孔を開けとるわい！」向うの畦の近くで啓太郎が腹立たしげに云つた。

啓助は、がつかりした。急に疲労が押して来た。半次郎が完全に修繕したいからだ。

あたりは次第に暗くなつた。人家では老人が蚊遣火を焚き始めた。蓬の煙が稲の上を靜に流れ匂つて來た。

啓助は、ふと、手に持つてゐる釣瓶の竿が見えなくなつたことに氣づいた。汲み上げられて底淺くなつた水面に釣瓶があたるのが手に感じられる。が、池の石崖が見えない。稲も、畔も見えない。汚れた指を單衣の袖で拭いて眼をさぐつてみた。濁れてゐるのではない。開いてゐる。それだのに眼が見えない。

「お父う。俺ら、鳥眼にやられたやうぢや。」彼は悲しげに泣き出しさうな聲を發した。「眼が見えん。」

「どうした？」

「俺ら、鳥眼にやられたやうぢや。眼が見えん。」

「半次郎の二階に電氣がついとるだらう。――あれが分るか？」

「いゝや、分らん。」

彼は、父親に手を引いて貰つた、そして、畦を踏外さないやうにさぐり／＼細道に出た。

どつか遠くから、御詠歌と鉦の音が、なごやかに傳つて來た。

「あれはどこ？」

「あれか、あれが半次郎の二階ぢや。お作が人を集めて御詠歌をあげとるんぢや。」

「あゝ、成る程。」

「あの電氣が見えんかい？」啓太郎は口惜しさうに繰かへした。「十燭が光つとるんぢやが。」

父子は、細道をさぐりながら、ぼつ／＼家路をたどつた。

啓太郎は、寸時、立止つてなごやかな御詠歌に耳を傾けた。彼は、悲しい、滅つた心持になつた。

「我男も、とう／＼去んでしまふたか！」

四

九月がすぎ、十月が來た。軟い北風が陸から海へ向つて稻田稻穗をそよがせて通つた。蝗が叢から叢へ、はねとんだ。鳴子の板が立てられた。

「半次郎から刈入れまでに昨年の地子を納めろちうてやつて來たが。」

或る夕方、晩飯を食はうとしてゐると、誰れかが戸口で云つた。そして、なほ、何か小聲で喋つて、聲の持主は向うへ消へてしまつた。

啓太郎が蒼くなつて這入つて來た。その唇がぴく／＼慄へてゐた。

「今のは誰れぢや？」勝手元で鍋を洗つてゐたお鹿がきいた。「ぢやらおやらしたことを云ふてくれな。刈入れまでに地子を納めろたつて、米も籾も有れやせんが、刈入れてから始めて籾が取れるんぢやないか！」

箸を持つてゐた小さい榮枝の手がぶる／＼慄へた。

「なんでも、地子を納めなんだら、半次郎はお上に頼んで、今年の稻刈らさんといふ手段を立てとるらしいといの。」

啓太郎の聲は慄へた。何か目に見えない惡魔が家の上から襲ひかゝつてきたやうだつた。

「何ぢやつて？」婆さんは、二本の前齒を露はした。「そんなことになつたら、うら等、どないしたらえゝんぢや。地子に納める米は一升もないのに。」

「立毛差押へをやらうといふんぢやな。」鎌の柄をすげかへてゐた啓助が云つた。

「うら等、昔人間にや、今の者のすることが譯が分らんわ。」お鹿は泣き出しさうな顔をした。「こつちに、汗水たらして休みもせずに作つたものを、むざ／＼と取り上げて、餓ゑさそうとは譯が分らんわ。」

土間の隅でミノルカが、何かに驚いて、けたゝましく騒ぎだした。

「どうしたんぞいの？」

病氣で寢てゐる千代が納戸から這ひ出て來た。榮枝を産んで三十日も經たないうちに、田稻に這入り、それがもとで血の道が出た。彼女はそれから始終健康がすぐれなかつた。ひどく黒血がおりて、身體を引き縮めてゐる筋が狂つてしまつたやうな氣がする、彼女はそんなことを繰りかへしてゐた。彼女の病氣は七八年もつゞいてゐた。

「なアに、なんでもない。俺がたしかめて來てやる。」啓助が茶瓶をかきこんで外へ出た。

家の中には、薄暗い豆ランプが一ッともつてゐるきりだつた。ホヤには黒い煤がこげついてゐた。ホヤの上邊のふちはかけてゐた。油壺にはほこりが積んでゐた。芯がチヂヂヂイと不吉な音をたてた。

「苗一本も植付けん者が刈らさんやこし、そんなぢやら／＼したことがよう云へたこつちや！」お鹿は繰かへした。「誰れが川普請をしたり、溝をつけたりしたと思うて、刈らさんやこし云ふんぢや。……砂のやうな田だけ有つたつて何が作れるもんか！」

「今年や、もう麥も蒔つてしまふたし、」啓太郎は嘆息した。「稲が刈れなんだら何を食うて暮すか……芋や大根でもかぢるか。」

ランプの芯がつゞけて、チイチイヂイチヂと音をたてた。そしてどうしたのか、暫らくチイチイチがつゞいて、急にポッと消えてしまつた。

家の中がまつ暗闇になつた。

「石油はないかな？」孫の千代がきいた。

「もう徳利に一としつくも入つとらん。」榮枝が答へた。

「ごそ／＼してランプを割るとまた錢がいるぞ！」お鹿は孫を叱りつけた。「われ、おつとしとれい！」

病氣の母親は溜息をついた。

動いてゐた子供は、身體を小さくちゞめて、手を兩脇につけた。誰れも微動だもしなかつた。やがて、榮枝は、祖母の耳に入らないやうに、ひそかに敷き流しの寢床の方へこそ／＼這つて行つた。

五

スコップのやうな大きな手を持つてゐる啓太郎は、一度に二株づゝ握つて鎌に引つかけた。榮枝がそれを眞似て、手頸を曲げて二株を一緒に無理に握りこまうとした。稲は彼女の手にあまつた。そして、濕つた粘土の上へバラ／＼に亂れ倒れた。

「てんごをするな！」お鹿は、黒く煤けた手拭を冠り、孫と並んで稲を刈つてゐた。稲のもとにしやがみつゞけて、彼女の腰は痛み疼いた。それを無理やりに我慢した。「倒れたやつを拾うて、ちやんと揃へとけ！」

千代も姑と並んで刈つてゐた。彼女は、血の道の頭痛を無理やり押し怺へてゐた。彼女は刈りおくれ勝ちになつた。

「お母あ、これや、まだ青いことないん？」榮枝は倒れた稲を揃へながら、籾を指先でひねりつぶしてみた。がさ／＼、はしつかい感觸の籾の中から白い乳のやうな汁が出た。「まだ米になつとらんのが有らあ。」

「だいぶ青いたあ。」千代も腰の痛みを怺へかれてゐた。彼女の腰は、狂つた筋が引きつつた。一と握り刈つて、娘に答へる間、彼女は姑の

様子に氣を配りつゝ背後へ反るやうに腰を伸した。
「背いとてだんない。しやん〱刈れい！」すぐお胎が腹立たしげに二本の前齒をむき出した。逆にして、いゝなるに掛けとけや、晝は入つて來るんぢやっ」

祖母は、心で豫算を立てゝゐた。今日のうちには、この一枚だけは刈つてしまへる。明日は、朝からほかの田を刈る。お前からは、刈つたのを束ねて家へ取りこむ。なんでも刈取ることが急ぐのだ。千代は姑に負けないやうにした。お胎は嫁と孫とが腰を伸すために、ぼんやり立たないやうに、自分からさきになつて追ひたてた。

雀が、彼女等の附近で戯れ、穗をついばみ、騒つてゐた。未熟な、白い汁の出る籾が雀にとつてはうまいのだ。人間か、捕へたり、驚つたりするひまがないのを見ぬいて、雀は、大膽に撓へた稻穗をかきさがしつゝいた。やかましく喋りながら角力をとつたりした。

「シツ！　シイツ！　こらッ！」榮枝が手を振り上げて追うた。雀は子供を見くびつて知らぬ顏をしてゐる。

榮枝はまた手を振り上げた。祖母と母とは、互ひに刈りまけないことにばかり心を奪はれてゐた。常々の、ひそかないがみ合ひが、こんな時にまで現はれた。二人は早く刈る競爭を始めた。

「シイツ！　シイツ！」

榮枝は土塊を拾ひ上げて、雀に投げつけやうとした。その時、彼女は急に狼狽したやうに口を噤んで棒立ちになつた。

向うの畦の近くまで刈り進んでゐた父親も、稻を置いて突ッ立つてゐる。執達吏が、四五人の警官と、役場の書記と、人夫をつれて、松林の方から阪道を下つて、田の畦へやつて來たからだつた。

「こら、刈るでない。やめろ！　刈つちやいかん！」

執達吏は、四分の一ばかり刈り倒されてゐる田を見渡しながら、太い、精力的な聲を傳へた。

「こらッ、刈るでない。畦へ出ろ！」

お胎と千代は、刈ることに夢中になつて、その聲に氣つかなかつた。執達吏は、精力的な聲を再三繰りかへした。身體の締つてゐる警官か、故意に高く劍を鳴らして、田の中へ這入つて來た。

「こらッ！　こらッ！」警官は、靴を粘土にぬめりこまさないやうに、刈株の上を選つて踏んで行きながら、なほきつく劍を鳴らした。百姓の暴力に備へてついて來たのだ。だが、百姓や、勞働者を、、、、、、、、、、無意識に婆さんを引きずり出しに行かせた。

お胎は、ひよいと突立つた。彼女は、何事が起つたのか理解できないやうな顏をして、きよゆげな眼で、畦の方を眺めた。

「なんでございますか？」

「畦へ出ろ！」
「稻を刈るのが悪いんでございますか？」
「早く出ろ！——刈つちやいかんのだ！」
「この稻は、わし等が作つたものでございますが、それを刈らさんといふんでございますか。」
「早くこつちへ出ろ！」
千代はくたびれ、顏に血の氣がなくなつてゐた。彼女は、苦るしい競爭から救はれて、ほつとした。だが、裏に泥が粘着した重い草履を引きずつて畦へ出る時には、恐怖に、動悸がひどく高まつて來るのを感じた。たうとう豫期したものがやつて來たのだ！
「この稻を刈つて米にせんと、家にやもう食ふものがないんでござりますが。」婆さんは繰りかへした。「芋がちつとあるばかりで、麥もないし、六人の家内が食ふものが無うて餓えにやならんのでございますが。」
「早く出ろつて云つてるんだ！」
お鹿は警官に襟頸を攫まれた。せいの高い警官の肩は、彼女の黑い手拭をかむつた頭の上にあつた。
襟頸は、力強い手でぐさりと攫まれた。お鹿は、ぴつくりして泣くやうな、また反抗するやうな、恐怖に滿ちた叫聲を發した。泥のついた骨ばかりの兩手を後頭部にまわして、警官の手を握り、力いつぱいに、それをのけやうとした。が、肉づきのいゝ一本の手は襟頸から離れなかつた。彼女は、畦まで引きずり出された。お鹿は尻に力を入れて、反抗的に田の中にへたばりつかうとしながら、必死に呪ふやうな言葉を發して呻いた。帶がゆるみ、着物がぬげさうになつた。
執達吏は、人夫に、將棊の駒のやうな立札を打ちこませた。田の四隅へは杭を打ち、畦に添うて、拵へて來た繩を張りめぐらした。人夫は卷いてある繩の端をほぐして、畦を走つた。繩の輪が一方の杭の下で、敏速に、たぐり出された。畦に穗をもたせかけて並べてあつた刈つた稻は、無關心にびしやびしや人夫に踏みにじられた。
「苗一本植えるでなし、水一杓汲みこさん者が、こつちの稻を刈らさんやこし、ようも云へたこつちや！」お鹿は、髮が亂れ、襟頸からぬげさうになつた着物をそのまゝ、つくらはうともせずに、そこらにゐる人間に呪咀をあびせかけた。「お前さん方、誰れの作つた米を食うてそんなことが出來るんぢや！ 覺えとるがえゝ。今にそのむくひが來るんぢや！」
彼女は執達吏と警官を睨みまわした。
「覺えとるがえゝ。」
だいぶ離れて立つてゐる警官の方で、誰れかゞ婆さんの言葉を眞似

て笑つた。

「お前等、苗一本さへ植ゑん者が……畜生！　罰があたるんぢや！」

「覺えとるがえゝ。」

今度は人夫が笑つた。

丘の下から海岸まで、一面に筵を敷き擴げたやうに、稻田は遠く伸び擴がつてゐる。そこには百姓達が、人家や杜かげに、見えつかくれつ、こぞつて、せわしさうに稻を刈り取つてゐた。

「來たぞを！」

そこで、誰れかが、猛獸に襲はれたやうに悲しみを帶びた聲で叫んだ。

「來たぞを！」

稻は、いづれの田にも、まだ十分實つてはゐなかつた。だが、彼等は、食ふだけの米を取入れることを急いでゐた。假差押へをされないうちに手を廻してゐたのだ。老人や子供達も緊張してゐた。

「來たぞを！」

急に百姓達が、戰爭のやうに田の中を走りまわりだした。稻束を、先の尖つた六尺棒に突きさして、若者が納屋へかついで走りだした。老人は刈つた稻を集めて束ねかけた。女は、稻束を轆子につけて畦をころびさうに走つた。

騷ぎは萬間屋へ響いて行つた。店から半次郎が、ひよろ／＼道へころび出た。新子が、赤のゴム管を持つてとび出て來た。酒に水を割つてゐたところだ。彼女は、小作人が勝手に稻を刈取つてゐるのに腹立て、八升の水を割込むところへ、一斗五升を流し込んだ。

「まあ、氣味たいがいゝ。」彼女は蛇のやうにベロ／＼舌を出して喜んだ。舌には酒の臭ひがしてゐた。「とう／＼お上に來てくれた。まあ、氣味たいがいゝ！」

「うむ。」半次郎は一人でうなづいた。「これで助かつた。これで助かつた！」

嬉しさうに吐息をつきながら、半次郎は、執達吏が繩を張つてゐるところへ、ちよこまか走つて行つた。そして、ペコ／＼頭を下げた。

繩張り內の稻は、たとへ刈り倒したものでも、一切、手を觸れることは許さない。啓太郎は執達吏から云ひ渡された。彼は、きゝながら脚がぶる／＼慄へた。若し觸れると罪になる。精力的な肉づきのいゝ執達吏は、おどかすことを忘れなかつた。

「どうも、御苦勞さまでございます。」半次郎は、眼の周圍に、いつぱい皺をよせて笑ひながら頭を下げた。「どうも御苦勞さまで……。」

向うの田では、小作人が必死に働いてゐた。「早くしろ！」「路を踏み外すな！」「何ぐづ／＼してるんだ！」口々に呶り罵る聲が傳つてき

た。

「お前さん、刈つとる分だけは、持つていんでもえゝんぢやらうが！」お婆が云つた。

「いゝや、それやいかんのぢや。」平次郎が答へた。「この縄張り内の稲は、お上のものぢやせに、一本でもとることたならんのぢや。」

「なんぬかすぞい！」婆さんは二本の前歯をむき出して、「お前等、苗一本さへ植ゑん者がへちやこちや云ふて呉れな。きゝたうもない！」

六

籾の腹がふくらみ、秋は深くなつて來た。

百姓達の前には、彼等が苗を作り、植付け、水を汲み、育てあげた稲が瑞々しく熟つて、穂を垂れてゐた。彼等は、目前にある、その稲を手を伸して刈取ることが出來なかつた。どの田にも、いかめしい公示札と、縄張りが、稲に手を觸れることを禁じてゐた。

彼等は落ちつかず、仕事がなく、何もせずにぶら／＼日を過した。

折角、春以來、あらゆる努力と、よりすぐつた種苗や肥料をいれて、秋の收穫のためにのみ努めてきた。それが烏有に歸してしまつたのだ。小作人は集會を開いた。憎悪と憤怒と反抗が、彼等の胸中を渦巻いた。彼等は、この稲を取入れなければ、一年間、食ふべき糧が得られないのだ。餓死しなければならないのだ。稲は、差押へられても、まだ完全に地主に取り上げられてはゐないことが明瞭になつた。差押へたものは、必ず競賣に附せたければならなかつた。

「この稲を二束三文に買ひ取つてみろ。その方が、よつぽどいゝ復讐ぢやないか。こつちが團結して競賣場へ押しかけさへすれや、うまくやれるんだ。」筆のやうに頭のさきが尖つてゐる、それで筆吉といふ名がつけられてゐる細高い男が集會で云ひだした。

「どうするんだつて？」

「お寺で競賣をやる時にさ、誰れも彼れも、皆んなそこへ押しかけて、寺のぐるりを取卷くんだ。さうして地主や平次郎が入札にやつて來たら叩き返へして這入らさんのだ。こつちだけで安くで落札するんだ。」

「そんなことが出來るかのう？」

「出來るも出來んもない。無理やりにやるんだ。それをやらんけや俺等は餓え死にするばかりぢやないか！」

彼等は、準備を整へて競賣日を待つた。競賣日は、木曜日だつた。

彼等は、朝から寺の廣場へ押しかけた。十時がすぎ、十二時が來た。彼等は、執達吏がやつて來るのを待つた。二時がすぎ三時が來た。彼

等は、寺の廊下の其處、此處に腰かけ、ボンヤリ待つた。本堂はからんとして空虚だつた。廣場には、枯れ松葉が落ち穗がころんでゐた。お祭に賑ひ騒いだ踊のあとは全然見られなかつた。村は眠りを靜め、ひつそりした。四時頃、誰れかゞ日延べされたことを小次郎からきいて來た。

―（七）―

「何だい。おやどうして前からそのことを知らせなかつたんだ！」彼等は知らして來た、小さい男が癪に障るかのやうに腹立てた。

「何で日延べをしたか、その理由を追及しやうぢやないか！　こつちを馬鹿にしてるんだ！」

―（八）―

彼等は、終日、全然働かなかつたのに、非常な疲勞を覺えた。ひどい損をしたやうな心持を抱いた。そして不服に分れ散つた。

稻は熟れすぎた。青くかり〳〵してゐた藁が枯れて灰色に變つた。穗の重みに壓されて、稈が折れだした。

一週間を經た、次の日曜日だつた。日曜日に、執達吏がやつて來る筈がなかつた。啓助は見るともなく自分の家の前から、石に腰かけて、松林の方を眺めやつた。二人、見覺えのある男が急ぎ足におりて來た。町へ出稼ぎに行つてゐる男だ。仲仕をしてゐる俊次と、仲さんと、縱松だ。仲さんと縱松は、鹽田稼ぎをやつてゐる。啓助は、さうきいてゐた。二人は村に這入ると、何故か、大聲に喋りだした。それは、すぐ、人々の注意を惹いた。

二人より、一と汽車おくれて、若者が四人揃つて、土埃を立てながら走せつけて來た。工場へ出稼に行つてゐる作や、中年者の三男だ。娘が三人、桃色の浴衣を着はに、裾をまくりあげて、若者にまじつてゐた。娘は、男達からおくれまいと息を切らしてゐた。

「俺ら、親方の工場を叩き潰して失業しとつたんだ。さうすると、俺等、失業者仲間の鉦太といふ、こいつも眼かんちだかな、そいつが西條の小次郎へ稻刈に傭はれて行くちゆうぢやないか。」俊次は人人に取かこまれてゐた。彼は途中で誇らかに喋つて自分の家へ歸つてゐなかつた。「西條つたら俺等の村だらう。それで俺れや、こいつはおかしい、と睨んだんだ。これにや、何か仔細がなけれやならん。そこで俺れや、播州の者だつて、だまして、傭ふてくれないかと、そこへ行てみたんだ。すぐ譯は分つたよ。小次郎は、差押へた稻の處分を受けてさ、一氣に刈るとて、澤山の人夫を募集しとつたんだ。」

「なんでも、この稻を殘らず、四百圓で買ふたちゆう話だ。」仲さんは鰻のやうな顔をして俊次の話を補足した。彼は村に生れ、村に育つた男だつた。が、家は離散して落ちつくあてはなかつた。

「だが、稻は競賣に附せなけやならん筈だ。」誰れかゞ云つた。「いつたい、いつのまに、俺等に内所で賣つちまつたんだ。」

「そんなこた、どうやつたか、俺れや知らねえ。たんでも、この稲みんなで（仲さんはかきまわすやうに両手を拡げた。）四百両ちゆうんだで。なんてベラ棒な値だ。まるで只ぢやないか。普通の相場にしてみろ、四千両がところは鳴つとらあ。」

「、、も半次郎も、ぐるになつて、くそたれめが、悪いたくらみをして居つたな！」群集の中から溜息と同時に呟きが聞えた。「くそたれめが、俺等をひぼしにしようといふんぢや。畜生とるがえゝ！」

「俺れや、そこで、村から行とる者全部にふれてまわつたよ。」俊次はつゞけた。「町のことは放つといて去れ。去んで半次郎を、、、、てしまへつて！」

人々は次第に多く集つて来た。最初の競売が延期され、彼等の眼にふれないところでどんなからくりが遂行されたか、それはすぐ了解された。啓助のあとについて来た栄枝は、訳が分らずにがちぐ慄へてゐた。正吉が速急に集會をふれてまわつた。

「くそツたれめが！　、、も半次郎もぐるになつて、悪いたくらみをやりやがつたな！　もう承知がならねえ！」溜息が憤怒に變つた。「俺等を餓えさそうといふんぢや。……ぢつと慄えて居るもんか、覚えとるがえゝ。やつてやる！」

隣村の安右衛門を集合に加へるべく、一人が阪道を走せ登つて使ひにたつた。

七

近道をして、啓助は蜜柑畑を横切つた。そして、山の方へ急いだ。山の中に壊れかけた祠がある。スパイを避けて、そこで會合をすることになつてゐるのだ。重ッ苦しい鉛色の雲は、空一面に擴がつてゐた。彼が蜜柑畑を出はずれると、今さつき、通りかけに、半次郎の居の前に集つてゐた、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。十五六の少年が畦から二階へ石を投げつけてゐるのが見えた。二階には手すりの内側に戸が閉めてあつた。、、、、、、、、、屋根瓦の上にころがり落ちた。居の前から湧きかへるやうな叫聲がひびいてきた。

そこに集つてゐるのは、主に、老人や、中年者だつた。

「半次郎を引つぱり出せ！」彼等は口々に叫んだ。「今こそ、長い間、むざぐと俺等をいぢめやがつた、、、つて見れる。引つぱり出せ！　引つ張り出せ！」

、、、、、、、、、、、、鉢卷をしてゐる卅ッさんが、薄暗い居へ這入つた。あとにつゞいて三四人が押しこんだ。中でまた、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

「牛次郎出て来い……出て来い！」群衆は叫んだ。「俺等が汗を流して作つた米をむざむざと取りやがつて！　高利貸め！　出て来い！　出て来て話をしろッ！」

、、、、、、、、、、、、、、、、、。若い一人が、土のついた手に駄菓子を掴んで頬張り乍ら、群集のために戸に押しつけられさうになつて出て来た。人々は、先を争つて、そこらにある煎餅や、南京豆や、棚菓などを手あたり次第に掴み取つて、懐へねぢこんだ。酒樽の呑口が引きぬかれた。彼等は冷い酒を貪りのんだ。瞬間、彼等は、平常ならば、新子がちやんと見はつてゐて、必ず金を出さなければ、煎餅一枚、酒一滴でさへ、只では得られないことを思つた。長い間、、、、、、、、、、みすみす水の混つた酒をのまされ、高い菓子を買はされたことを思ひかへした。彼等は、よくもこれまで、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

「何だ、けち臭いことをするな、やれッ！　かまふか、やれッ！　やつちまへ！

戸棚や容器か、、、、、、、、、、、、、、、さうにぶつかつた。

「なむあみだぶ。なむあみだぶ。」

二階では、お作が恐怖に慄へながら、一図に、阿彌陀如来の救助を求めてゐた。戸を閉めきつて、そこは何も見分けがつかなかつた。

「なむあみだぶ！　なむあみだぶ！」

彼女は必死に救助を求めた。

ふと、全身ずぶぬれになつて、誰れかゞ、勝手元からの細い梯子を這ひ上つて来た。そしてお作の傍へしのびよつた。

「誰れッ！」

お作は、冷たさと恐怖にびつくりした。

「わたし。」それは新子であつた。寒さに歯をかたつかせてゐた。

「まあ、お前どうしたん？」

「覚えてろ！　ドン百姓が、ドン百姓が！」彼女はがたがた慄へた。

「私を泥ン中へ突きこんだんだ。銭つたら一文もないくせに！」

不意に荒々しい騒音を張り上げて、新子は泣きだした。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、。

「喜作はどうした？」押入れの襖を細目に開けて、牛次郎が顔へ聲で囁いた。「喜作はどうした。、、、、、、、、、、くれたかいなア？」

「おそくなつちやつた。どうするかきまつたかな？」

祠の前の芝生には、庄作を中心に集つてゐる青年達が、それぞれ好きた恰好をして坐つてゐた。鉢卷をして細帶を締めてゐる老人もゐた。啓助は正吉の傍に坐つた。

「何もせずに、泣き寢入りぢや！」

「何に？」

「安右衞門が暴力反對なんだ。」正吉が囁いた。

壞れ放だいにされてゐる祠の下に、兩肩を持ち上げ、鶴のやうに頸をすくめてゐる老人が坐つてゐた。それが、隣村から來た安右衞門だつた。彼は四十歳だつたが、六十に見えた。彼ま暴力に訴へることに反對した。暴力を以てすれば結局負ける。

「競賣をやり直さすんが當然ぢやないか。」

團栗にもたれて立つてゐる良助が云つた。

「それや、出來んのぢや。」

「どうして出來んのですか？」

安右衞門は、一度賣られると、たとへそれが任意處分でも、あとへ取り戻すことが出來ない。それには、損害賠償を要求する方法があるのみだ、さう說明した。

啓助は、聞いて、物足りなさと、いら〳〵しさを感じた。

「何だい、あんな爺さんに何が分るか！」傍で正吉が呟いた。

附近の農村で、一番早く、小作人の團結運動に氣づいた人たといふ、そのことが皆なをして、安右衞門に反對するのを躊躇させた。彼等は、落ちつかぬ眼で安右衞門の故意に持ち上げられた肩や、壞れかけた、祠の屋根を見上げた。彼等は退屈した。彼等の耳は何事をも聞かず、腦髓はほかのことを考へてゐた。

啓助は、安右衞門に對する輕蔑を、皮肉を含んだ眼に表現しつゝ、庄作に合圖を送つた。庄作は安右衞門の傍に坐つてゐた。庄作は、いつも彼等が思つてゐることをさきになつて表現してくれる男だ。ところが、彼は、故意か、偶然か、啓助の眼くばせをそらしてしまつた。

集會には、激しい討論もなければ、親しみのある空氣も出なかつた。決議はすんでしまつた。皆、山を下りかけた。各自、不滿と腹立たしさを怺へてゐた。彼等の腦内には、熱い狂暴なものが渦卷いた。

「今夜こそ殺られるもんか！」啓助は、うしろにおくれながら、庄作に近づいた。「俺ら、やつてやる！　やつてやるんだ！」

庄作は決議を守らなければならないことを考へてゐた。彼も、皆の胸中に醸成されてゐる狂暴な情熱を感じてゐた。はげしく外へ迸り出ずにはやまない生きてゐる人間の力だ。このはりきつた感情は、青年達の胸中にあるばかりではなかつた。老人にも、中年者にも、女にも、子供にも、それは行き渡つてゐた。彼はそれを知つてゐた。

祠から下り、杉の谷を通りぬけると、村が一望の下に見おろされる圓東山に來た。田の面から、崖にぶつかる波のやうな群衆のどよめきと叫喚が傳り上つて來た。つひ一時間ばかり前まで厳めしく立つてゐた立札は粉碎され、綱はずたくに切斷されてゐた。人々は暴々しく吠え叫びながら鍬を振り、穗を叩き落し、稻をなぎ倒してゐた。

山を歩いてきた青年達の體内に緊張し煮えかへつてゐた感情は、瞬間に、パッと破れ、迸り出だした。石ころの多い細道をさきに行つてゐた者は、急に歡喜に燃えるやうな叫聲を上げて、一散に山を馳せ下つた。と、一列にあとからつゞいてゐた者も、同樣な叫聲をあげて馳せだした。彼等の眼下には、妹や弟までが、鍬を持つて田に入り亂れてゐた。子供を背負つた母親が、稻穗をすごいて、籾を手籠に取つてゐた。

「綿屑からやるつもりだつたんだ！　からやるつもりだつたんだ！」

彼等は馳せ下りながらさう思つた。彼等は自分の周圍が輝やかしく明るくなつたやうな氣がした。

「やれ、やれッ！　やつちまへ！」

安右衛門は、立ち止つて、自分の眼前をフイルムのやうに走り去る青年達をポカンと見てゐた。青年達は、猫背の爺さんに突きあたつた。安右衛門は、突きとばされないやうに、道から山の中へ引つこんだ。彼は、眼で庄作を捜した。庄作は、彼を支持するだらうと思つてゐたのだ。

庄作は、うしろから皆におくれまいと歩度を伸して來た。

「君、君、どうしたこつたい！」安右衛門は自分の言葉が相手の耳からそれるのを恐れるやうに早口に云つた。

庄作は、何も聞えなかつたもの丶やうに彼には眼もくれず、馳せすぎてしまつた。

青年達は、つゞけて歡喜に滿ちた叫聲を放ちながら、山を下つてゐた。彼等の間隔は次第に距つてきた。

「何としたこつたい！　何としたこつたい！」

安右衛門は、山に立つて村を見下してゐた。彼は動かなかつた。村に下ると、青年は、火藥を撒くやうに田の中へばらくに分れ散つた。

稻田に入り亂れ渦巻いてゐた百姓達のうごめきは、なほ一層はげしく怒濤のやうに強く熱してきた。罵り叫ぶ憎惡と憤激に滿ちた聲は、龍巻きのやうに上空へ巻き上つて來た。そこには、むかむちに稻を刈取つてゐる老人があつた。穗をすごき取つてゐる娘があつた。運動帽子をかむつて、棒で稻をなぎ叩いてゐる少年があつた。その間を縫つて青年達が走つてゐた。

安右衛門はいつのまにか、知らず〳〵百姓達の動めきに引きつけられ、自分の心が熱してくるのを覺えた。

「これや、實に壯觀だ！　壯觀だ！」彼は、自分一人であることを忘れ、傍に誰れかゞ立つてゐるかのやうに、左右を顧みて云つた。そして彼も山を馳せ下つた。

八

けたゝましくベルを鳴らして、、、、、自轉車が、一直線に突進して來た。それ等は、松林を突つ切ると、阪道を、全速力で瀧のやうに流れ下つた。

それには、鼻の平つたい男がのつてゐた。ちよんびり髭をおいてゐる男が乘つてゐた。眼窩の奧に小さい眼が光つてゐる男が乘つてゐた。――いづれも戰爭に行く者のやうに、殺氣立ち、緊張してゐる。

警官隊が繰込んで來たのであつた。

三十分ほどたつと、また、、、、、、自轉車が先を競つて突進して來た。それから二十分たつと、また〳〵やつて來た。彼等は、交通妨害になるのもかまはず、道路の兩側へその自轉車を並べたてた。そして、鐵葉のやうなサーベルを靴にもつらせながら、田の中へ急ぎ散つた。

濃翠色の雲は、その黑さを加へ、頭を壓しつけるやうに、重つ苦るしく村の上にのしかゝつた。太陽は黑い雲のかたまりに包まれ、夕映一ツ殘さずに、いつのまにか沈んで行つた。村は暗くなつてきた。稻田は物が見分けられなくなつた。百姓は、依然として、田に入り亂れ、渦卷いてゐた

「なに、おまわりが來た。」彼等は冷笑した。

「おまわりなんど、何が怖いもんか。俺等が作つた稻を、俺等がどんなに處分しようと勝手ぢやないか！」

彼等は俯向いて稻を刈るのがまだるつこかつた。、、、、稻を完全に半次郎のものとして保存せしめやうがためにやつて來たのだ。それは、彼等の反抗力を押し潰さうとしてやつて來たのだ。彼等は、今稻を烏有に歸せしめ、胸に湧きたぎる憤怒と憎惡を幾分なりとも癒すより外、とるべき方法がなくなつた。それがせめてもの復讐であつた。

彼等の憤激と憎惡は、一層強く奔放に溢れ狂ひだした。

最高度の能率に於て、鎌は振りまはされた。稻は頭からなで切られ、左右へ激しくとんだ。子供は稻を踏みつけ、田の中を走りまはつた。娘達も同樣に走つた。彼女等の髮や着物には、ちぎれた穗がさゝつて、ぷら〳〵ゆれた。

警官の靴は田の粘土にずりこんだ。稻は鎌にまつはりついた。それ

は丁度、稲か警官を引きとめて動かせまいとするかのやうだつた。懐中電燈が銃を發射したやうに背くところどころに光つた。子供達は、その光を見ると、稲をかき分けて逃げた。

啓助は、池の堤を走つてゐた。向うから兩手を前にさし上げて一散に馳せて來る少年があつた。、、、、、、、、、、、、、を振り上げて、あとからせいの高い男が追つかけて來た。

「お母ア！　お母ア！」子供は必死に叫んだ。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。子供は瞬間、、、、、やうに、道の上にへたばつた。

「お母ア！　お母ア！」子供は拜むやうに兩手をさし上げた。「お母ア！」

啓助は、またしても、子供の、、、、、が鳴る音を聞いた。恐怖と痛さから、子供がえれるやうに泣きだした。

、、、顔をあげると、不意に山猫のやうに啓助にとびかゝつて來た。堅い、氷のやうな金屬か、彼の耳を切らんばかりに打つた。頭がくらくらツとした。鼓膜が破れたやうだつた。と、彼の背後から別の手か、頸を掴み上げた。拳か、、、、が來た方とは反對側の耳の上へ螺旋釘のやうにとんできた。彼は、有りつたけの力を絞つて四ッの手を振りもがうとした。今度は、つぶてのやうた拳か、彼の鼻を天に向けてもぎ上げた。彼は眼が見えなくなつた。、、、、、、、、、、、落ちだした。

「さあ、こつちへ來い！」四ッの手が彼を引きたてた。こつちへ來るんだ！」

彼の背後では、さつきの少年か、たゞ、泣きわめき、母を呼んでゐた。

重ッ苦るしい、星のない空から雨がぽつぽつ落ちだした。

一時間、或は、一時間半毎に通過する列車から、出稼人達があたふたと、さびれたプラットフォームへ吐き出された。彼等は身輕く裾を端折つて、村へ急いだ。

眞ッ暗な、さきの見えない、濁つた晩であつた。空氣は生温く、窒息するやうに蒸した。道は狭くうねつてゐた。人形屋に奉公をしてゐる辨吉が眞ッ先に歩いた。

「私、お母あが急病だつて、親方に嘘をついてきたの。」

辨吉のあとから行つてゐる君江がくすぐられたやうに、げらげら笑ひだした。

「何がおかしいんだ。俺れだつてさうだよ。」辨吉があとへ振りかへつて腹立たしげに云つた。

「――まともなことを云ふて、親方がかへしてくれると思ふとるんか！」

「私もだまして歸つたん。」うしろの方で、いくえは、お清に囁いた。お清が啓助の妹であることに、肉身のやうな親しみを感じながら、彼女はよりそつてゐた。

「私だつてさうよ。」

白石をすぎ、北向地藏の前を通つた。人々は疲れて息を切らした。細い雨が降りだした。生活の糧がなくなるかどうか、必死になつてゐる際、いくえは、結婚が延期される、そのことは考へたくなかつた。もう一年、結核菌がうよ／＼してゐる莫大小工場へ年期を入れて、妹や弟を養はなければならないかもしれない。

「稲を差押へるつて、田に生えとるものをどうするんでせう！」彼女はお清に訊ねた。お清は、喜作がどうしてゐるか！　それを思つてゐた。

「成程な。」お清よりさきに、放浪好きの老人が答へた。「それや、いんで見なけや、分らねえ。」

北向地藏から大江に來る途中で雨裝束をした青年の一隊が、あとから追ひついてきた。彼等は顔が分らないやうに、頬冠りをして、細の帶を引きしめてゐた。

「橘の衆ぢやないか。」老人があとへ振りかへつてきいた。

「さうだ。――西條はどうなつとるか知らんか？」てきはきした聲が云つた。

「分らねえ。俺等も歸りよるところだ。」老人が答へた。「……田に立つとる稲を差押へるつて、お前さん方、どないするんだね。俺等のやうな昔人間にや、皆目想像がつかねえ。」

青年は、二十人くらゐ一隊をなしてゐた。橘村の農民組合からの應援隊であつた。大江をすぎ、一本道を、やう／＼松林へやつて來た。墨のやうに黒い暗闇の中に、鈍く松林の梢がすけて見えた。

「あ、聞える。聞える！」辨吉が歩きながら耳を澄した。村の騒動が松林を越してひゞいて來た。

彼等の脚は慄き踊つた。そして速力が早まつた。心臓がドキ／＼波立ちだした。松林へさしかゝつた時、突然、威嚇するやうな聲が闇の中からひゞいた。

「待てッ！」

松の下で、四五本のサーベルが、ガチ／＼鳴つた。帽子をかぶり、靴をはいた、屈強な男が、彼等の行手に立ちふさがつた。

「待て！お前達はどつから來たんだ？」

青い懐中電燈が、殺人光線のやうに、サツと彼達の顔を射た。

警官隊が、松林の中に張りこんでゐるのであつた。そこは關所だつた。隣村からの應援隊も、各列車から吐き出された出稼人も、殘らずそこで捕虜になつてゐた。

「俺達は、たんにも惡いことはすれやせん。一寸、村へ歸るだけかへしてくれんかのう。」老人が哀願するやうに云つた

（註）——

「いや、待て!」

娘達は慄へた。

「俺達は、女や、子供や年寄りで、たんにも亂暴はすれやせん。ほんの一寸だけ通してくれんかのう。」老人は繰りかへした。「俺れやもう長いこと村へ歸へらんので、孫がどうしとるか氣にかゝるんぢや。ほんの一寸だけ通してくれんかのう!」

「みんなこつちへ來い!」

部長が下の者に何か命令した。老人も娘も橘の青年達も、頭から闇

——（註）

の、二三尺さきさへ分らない松林へつれこまれ、檢束されてしまつた。

雨が大粒に落ちて來た。彼等は、一緒に歸つた者がどこにゐるか、それさへ分らなかつた。いくゑは、一人で家のことを心配した。お清は、喜作の顏を思ひ浮べやうとした。それは、劍の音と共に、彼女の腦裏から破壞され、消えてしまつた。彼女は、冷い石のやうな牢屋を想像して、恐怖に慄へた。

坂の下から、捕虜のやうに、檢束された百姓達の群が登つて來た。

九

河水が、堤防から溢れ、物凄い響をたてゝ流れた。雨は來る日も來る日も降りつゞいた。そして氣温は降下した。潮が滿ちて來た。誰も、河口の水門を閉す者がなかつた。潮は河水を逆に押し上げた。水は溝を埋め、田を浸し、稻を浸した。昨日まで黄金色に熟つて美しかつた稻は、折れ、踏にじられ、穗を失つて死んでゐた。

町へ引つぱつて行かれた者達は歸つて來なかつた。家々では、女や子供が寒さと不安に顫へながら飢えてゐた。村は火が消えたやうに滅入つてしまつた。雨に細道の土が流され、石がでこぼこ地中から露出した。その細道に添ふた或る茅屋の前には、雨にぬれた堆肥がおせて、白い蒸氣をたてゝゐた。家の中には、老婆が息たえだえにうめき、あがいてゐた。雨水は破れ屋根を通して、座敷へぽつぽつ落ちてきた。そのしづくは煤の間を通つて、黒茶色に染つてゐた。千代と森枝とは、納屋で、前日必死に穗からごき取つた籾を人に氣づかれぬ片隅へかくさうと骨折つてゐた。籾には、ごみや土がまじつてゐた。穗頸から切取つたそのまゝのもあつた。その籾は、すぐ皮を脱して食

はなければならないものだ。
一束ばかり、慌てゝ根元から刈取つた稻があつた。それは榮枝に分けさして、母親が稻扱きで扱いた。新しい藁の匂ひが、彼女に娘の時代を思ひ起させた。青つぽい藁は、若々しく牧歌のやうに匂つた。
「おーい、おーい、おーい。」婆さんは、苦るしさうにうめいてゐた。
「おーい、おーい、誰れぞ來て、さすつて呉れ。—痛うて辛抱が出來ん。おーい！」
千代は、芥子を水に解いて納戸へ持つて行つた。
「おーい、おーい、おーい。」婆さんはうめきつゞけた。「なんとかしてくれい。苦しうてならん。早よ死ぬ方がえゝ。おーい、おーい！」
お眤は、餓えまいがために、食ふべき米を取りこんで置かうとして、必死に稻を刈り、穗をすごき取つたのであつた。彼女は、一生、餓えまいがために、—たゞ、餓えることにのみおびやかされて、始終、慾ばり、息子や嫁を休みなく働かせやうと、がみ〳〵追ひ立てゝきたのであつた。彼女は、鎌を取り上げた警官に反抗した。枯枝のやうな手を爪立てゝ、、、、、、、、、、、。彼女は、手や脚や、頸を毆られた。ひからび皺のよつた皮膚には、打撲のあとが到るところに刻みこまれてゐた。それは、細長く、黑紫に、死色を呈してゐた。

「痛た、痛たあ！あ、あ、痛うてたまらん！」
「さすらうかな。」
千代の手が老婆の腕に觸れると、老婆は劈れるやうな悲鳴をあげた。彼女の手は、ほんの一寸觸れたばかりであつた。それが老婆の肉體に堪へ難い疼痛を起すのであつた。千代は、何か自分がひどいことをしたものゝやうに、びつくりして手を引いた。老婆は寢がへりを打つことが出來なかつた。彼女は、、、、、、、ゐるのであつた。
榮枝が學校で手習ひに使つた紙の裏へ、千代は、芥子をのばした。そして、恐る恐るそれを老婆の身體へ貼りつけた。
「痛たあ、痛たあ、なんとしてくれい、痛たあ！」
戸外では、水に浸された細道を、与次郎が人夫をつれて、茅葺の家家を縫つて歩いてゐた。人夫は、大きな箱を六尺棒で擔つてゐた。頑丈な荒つぽさうな男だつた。そのあとから、、、、をさげた男が、長靴を大事さうにして歩いてゐた。細あひから、ぢかに納屋をめがけて這入つて行くと、そこで与次郎は、何か大聲に奴鳴つた。暫らくすると、人夫は箱に籾を滿して、六尺棒を撓ませながら出て來た。
「取られたものを取りかへすんは、あたりまへだ。それや當然だ！」
与次郎は、ぶつ〳〵云つてゐた。
「籾があんたの所有であつた確證さへあれや取りかへすのは一向差支

ないこつてす。」、、、が云つた。
「さうですよ。みんな、わしが錢を出して買つたもんですさ。このドン百姓の奴つたら、一粒だつて有る筈がねえ。」
「は、は。」
牛次郎は、一つの納屋から出て來ると、また次の家へ這入つて行つた。そして、それからまた次へ行つた。やがて彼は、裏の脇から湯氣が立つてゐる家へやつて來た。家の中から、老婆の瀕死のうめき聲がもれて來た。
「おい、おい。誰れかゐるか。」彼はいきなり怒鳴つた。
「へい。」千代が、若い、血の氣のない顔をして出て來た。
「納屋の口に種を三束置いてあるが、あれについとつた粒はどこへかくした？」
「置いてあります。」
「出して來い。」
牛次郎は、土のついてゐる下駄でかまはず納屋へ這入つて行つた。
彼は、筵をびしや／＼踏んだり、空俵の束を蹴つたりした。下駄の泥がそこら中に散つた。彼の足は、先日店へ押し入られたその仕返へしをするやうに、殘酷に執拗だつた。
叺に四斗ばかりの粒が入れてあつた。

「これだけか？」
「へい。」
「まだかくしとるだらう。」
「いゝえ。」
「嘘を云へ！」彼は背伸びをして、唐箕の漏斗へ手を突きこんだ。「そら、ここにかくしとる。だましたつてすぐ分るんだ！」
「ほう。前の家にもそこにかくしてあつた。」入口に立つて見てゐた、、、、が愉快さうに笑つた。「は、は、そこには必ず入つとるんですな。」
「へえ。百姓の奴は、後はかですからな。」
「ふゝ。ふふふ。」、、、は、繰りかへしおかしさうに笑つた。
千代は、眼を落して、下駄の土をぬりつけられた新しい筵を見てゐた。顔を上げる勇氣がなかつた。、、、、と牛次郎に對する憤りと共に、折角、長い間、あらゆる辛苦を積んで作つた粒が、結局、一粒も殘らず取り上げられてしまつた、口惜しさと、悲しさを同時に感ぜずにはゐられなかつた。
牛次郎は、人の家へ侵入する權利が十分にあるかのやうに、納屋、木納屋、物置きの隅々をくまなく、そこらに置いてあるものを、引つくりかへしながら、探しまわつた。彼は、手當にある最後の粒の一粒

まで、人夫の大籠に移した。そして、それ以上、かくしてゐないことをたしかめると、性急に人夫を追ひたて、千代には一言も、物を云はずに、眼で挨拶さへせず、横柄に出て行つてしまつた。

、、、、と半次郎に對する憎惡と反感は、千代の胸にこみ上げて來た。彼女は、厚顔にして貪慾な半次郎と、貧乏人が餓ゑるのもかまはず、滿ち足りてゐる半次郎に、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、を腕がすくまで、罵倒しつくしてやりたかつた。彼等の面の皮を引きむいてやりたかつた。しかし二人の冷酷な男は、近道をして、納屋の脇の細あひから、隣家の方へ消えて行つてしまつた。彼女は自分達が無茶苦茶に踏みにじられてしまつたやうな氣がした。

彼女は、薄暗い納屋の隅へ行つた。一家が食つて行く何物も殘つてゐず、わざ〳〵娘に分けさして稻を拔き、穂をすごき取つたことが、全然無駄な骨折りであつたことを思つた。嗚咽が激しくのどもとへこみ上げて來た。彼女は、壁に顔をむけて、それを押し怺え、嚥み下さうと努力した。

「どうしたんぢや。籾は見つけられやせなんだか?」

お品は痛さに顔をしかめ、唸りながら、いつのまにか上り框へ這ひ出て來た。薄暗い納戸では、はつきり分らなかつた紫暗色に腫れ上つてゐる縛られたあとが、痛々しく眼だつた。

「半次郎と、、、、の聲がしよつたが、なにしに來たんぢや?」

「なんでもありません。」

千代は狼狽した。が、突嗟に、瀕死の祖母に一粒の籾もないことを知らせてはいけないと考へた。

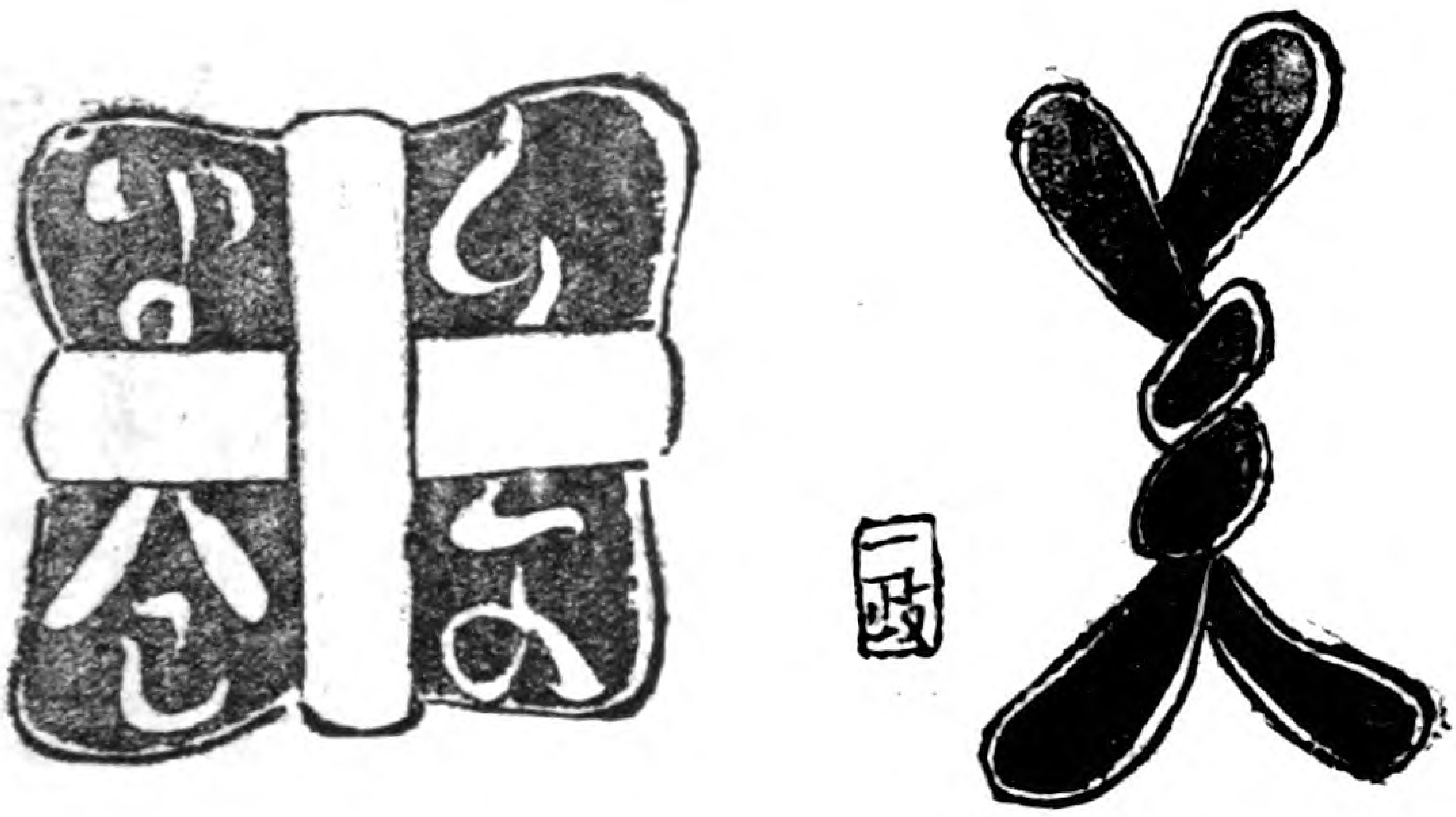
「籾は取つて行かれやせなんだか?」

「いゝえ。」

「あんじようかくしてあつたんか?」

「……。」

千代は祖母から顔を見られるに堪へなかつた。胸の奥から再び激しい、のどがつまるやうな嗚咽がこみあげて來た。



老女マノン

宇野千代

1

去年の夏の初めから、私は、伊豆の山間にある或る小さな温泉場で暫く暮した。前後五ケ月も居たと思ふ。

私はぢきにその土地に馴れて了つた。そしてぢきに、どこの家の池には鯉が何尾泳いでゐるかと言ふことや、どこの家の乙息子は昨日裏山で鶺鴒の雛を何羽巣取りにしたかと言ふことや、どこの家の嫁さんは去年双兒を生んだ許りでまた妊娠してゐるらしいと言ふことや、そんなことまで知るやうになつて了つた。だから私は、その村の殆んど誰とも馴染になつてゐたのである。

それらの私の馴染の中へ一番遲く這入つて來たのは「船屋の小母さん」であつた。誰も一種へんな惧れと親しみと與し易さとをもつて「船屋の小母さん」と呼んでゐる。船屋と言ふ小料理屋の女中頭のやうなことをしてゐると言ふことであつたが、誰もこの小母さんの年齡を言ひあてることだけは出來ない。それはまるで分らない。或るときは三十七くらゐに見え或るときは四十六くらゐに見え、また或るときは六十二くらゐにも

見える。幾つに見えるときでも、誰もそれをほんたうにしはしない。さう見えるのはたゞ自分が騙されてゐるからなのだと言ふやうな感じしか持たなかつた。

或るときのこと私は街外れの駄菓子屋で何かの買物をしてゐた。――この駄菓子屋では、石鹸、元結、髪油、繪ハガキ、封筒、そのほかのこまごましたいろいろなもの・丁度私のやうな客の入り用なものを何くれとなく商つてゐたので、如何かすると日に一度くらゐ私はこの店へ出掛けて行く。それは買物のためでもあつたが、私はこの店先に立つて、そこからは丁度谷底のやうに低くなつてゐる温泉宿のある方角から、誰かゞ、その谷川ぞひの細い細い石ころ道をうねうねと上つて來る、その誰かの頭が、ふいに私の眼の前の道端に現れて、軈て帶になり着物になり、それから一人の人の姿になつて、（それはまるで思ひがけなく舞臺に上つた素人芝居の役者のやうに、大急ぎで、極り惡さうにして）私の前を通り過ぎて行く、それを見る樂しみのためもあつた。――私はそのときも私の眼の前の道端に、ぽつかりと鮮かなお納戸色の洋傘が浮き上つて、軈てしなしなと細かい匹田絞りの浴衣を着た女が街道を右へ折れて行き過ぎるのを見たのである。だが、見る間もなく後姿になつて了ふ。そのほつそりとした腰つきと、吾妻下駄をつつかけにした素足の白粉でも刷いたやうな灰白さとが遠くまで眼に續く。あれはきつと、昨日東京から來たと言ふ長唄の師匠ででもあるかも知れない、私はさう思つたのであつた。それはこんな山間ではなほのこと、人の眼を惹き易い或る人爲的な水水しさを感じさせる役目の一つであつたからである。

けれどもぢきに私は次のやうなことを見た。向うから一臺の馬力が遣つて來た。その空き車の上に足を投げ出して乘つてゐた工夫らしい二人の男が、ふいに何か大聲に呼び掛け乍ら、手にしてゐた鞭のやうなものを振つて見せた。一寸の間それは誰を相手にしてゐるのか分らなかつた。だが直ぐに私はいま行き過ぎたその女の立ち留るのを見た。それから、その鮮かなお納戸色の洋傘を仰山に振りかざし乍ら、何か私のところまでは分らない言葉をもつて男たちに答へてゐるのを聽いた。私はその聲を思ひ出した。それは毎朝のやうにまだ朝寢をしてゐる私の部屋の窓のそとを、打ち水でもしてゐるらしい宿の料理番の正どんに揶揄ひ乍ら行き過ぎるその女の聲にそつくりなくらゐ似てゐるのだ。ひよいとあれが、「部屋の小母さん」と言ふその女ではあるまいかと、私がさう思つたとき、女は擦れ違ひざまに馬力のあとを追つて來乍ら、ふいにまともに顏を上げた。――それは私の待ち設けてゐたものといくらかでも同じであつたらうか。――私の眼からは忽ちにあの後姿の色つぽい水水しさが消えて了つた。その代りにこれはま

た何と言ふ淺ましい感じのものであらう。年齢は五十を越えて居ようかと思はれるその醜く老つた濃い脂粉の顏の中に、熟んだ茘枝の實のやうな口紅の鮮赤さが、それはあまりに似合はしくないと言ふよりも、見る人の心を寒くさせる。私の眼に一番に來たものはそれであつた。

「嘘を言ふと承知しないよっ」

「おつかねえこつたさ、屹度行くつたら行かねえでか。」

馬力はさう言ひ乍ら私の前をも通り過ぎようとして、その車の上の一人が、女に向けたざれ顏のその朴訥な好色の眼をそのままに、ぎろりと私をも見て通つた。

私は何となく眼を伏せた。私は私の持つ或る病的な考へから、この男の視線の中に、あ、ここにも同じやうな女がゐる、とでも言つてゐるやうな感じを見たやうに思つたのだ。だから私は買物の包を抱へて何となくせかせかと狼狽てて谷の方へ下りて行き乍ら、ふいにこんなことを呟いた。あのお婆さんはお前だよ。お前がもつとお婆さんになつたらそつくりあの通りさ。——私はいつもの癖のやうに自分の心にざれごとを言ひ始める。すると、どんな曲りくねつた醜いものも忽ち私には親しいものに思はれる。そして如何やらそのざれごとの中にある幾分かの眞實は私を苦しめる代りに私を慰める。これは私の持つてゐるただ一つの魔法である。私はだから言ひ續ける。——さう言ふと、お前はまだ三十二にもたつてゐないお前の年齢のことを言ふ積りかも知れない。だが、三十二と五十一とではその數の差が示してゐるほどに、青春との距りにも差があるとは言へないのだ。お前にもあのお婆さんにも同じやうに十八の春があつた。その日から、一日經ち一日經ち一日經ち、それが積り積つたのにお前もそれからあのお婆さんも、同じやうに毎朝の化粧鏡に映る自分の顏が昨日と今日とそれからその次に次に無數に續く昨日と今日との間に少しの變りもないのだと信じ乍ら、つい長い年月を暮して來て了つたのだ。ふいに今日から、老衰に這入つたと自覺することは恐しい。それは女にとつては恐しい。たとへいくばくでも色を賣る感じなしには、いまのこの世の女らしい存在の凡てが困難なと言ふよりも、生れ乍らに知らず識らずたとへいくばくでも色を賣る感じなしに、女らしいほかの凡ての本能を持つと言ふことそれ自身が困難なのだ。だからそれはお前のやうな傷れ易い傷き易い心を持つた女にはなほさらに恐しい。お前は恐る恐る鏡に向ふ。そしてお前の口紅がお前に殘された僅かな若さをしのぐほどに鮮かではあるまいか。お前の白粉がお前の衰へた皮膚には馴染まないほどに色濃くはあるまいか。だが、こんな惧れはお前を反對にけしかける。お前はこの惧れにたてついて、却つて思ひ切つた粉飾を施すのだ。お前は若い、お前は若い。お前はさう言つて居ないでは鏡の

前に坐つてはゐられない。――そんなお前と、いまあの街外れで見たお婆さんとどれほどの差があらうぞ。お前がもし五十一まで生きのびて居たとしたら、それはそつくりあの通りに違ひない。われとわが眼が、己れの老醜を信じない、それは何と言ふうそ寒い、身の毛のよだつやうなことであらう。――

私が「船屋の小母さん」を感じたのはこのやうにしてであつた。私はそれから、この小母さんに少し許りの注意を集めるやうになつた。私の耳に聞えるこの小母さんに關する凡ての噂話は、何れもあくどく、そのために傷しい。それは私の心を微かに刺す。だが、何れの噂話に依つてもこの小母さんを正しく知ることは困難であつた。それは澤山の過去を持つてゐる者に就いていつでも見られる現象であるやうに、正しくはその人自身にさへも知られてはゐないものだからである。

私はそれでも、自分の眼で見た一つか二つのことを書いて見ようか。ときどき、この山あひの小さな村にも芝居のかかることがある。それは昨日峠を越えて來て明日はまた峠を越えて行つて了ふそんな種類のものであつたが、それでも、そのお寺の裏の空地にあるトタン葺の掛け小屋に充分に人を集める。五錢か八錢かの木戸を拂はせ桟敷きの莚の上に坐らせるのだ。私はよく、その木戸の丸太で組んだ高いところに赤い毛布を敷き箱火鉢を前にして坐つてゐるづんぐりとした大男の、蔭に隠れてそれとなく嬌笑を送り乍ら出入りの見物に聲をかけてゐる小母さんの姿を見かけた。

「おや、もうお歸り？」

などと私たちの後からも聲をかけることがあつた。暗いカンテラの灯かげのせいか、そんなときの小母さんは妖女のやうに若く見える。

「おくさん、あの木戸口にゐた大きな男を見ましたか、彼奴があの小母さんの旦那なんですよ。」

「では、あの小母さんは、あれでお妾をしてゐるの。」

「いろんなことを遣つてゐますよ。お妾も遣るし、あの男の代理になつて芝居の請元も遣るし、だから雨降りなんぞで不入りが續くと、小母さんは折角稼ぎ溜めたものをすつかり吐き出した上に、借金で身動きのならないこともありますよ。」

「まあねえ、仲々仕事もするんですのね。」

私と宿の料理番の爺どんとがそんな話をし乍らゆつくりと暗い谷の方へ下りて行く後から、ときとしては、もはや芝居ははねたらしく、今晩は、今晩は、と口口に聲をかけ乍らむせ返る白粉の匂を殘して、夜目にも鮮やかな舞臺顔をそのまま頬冠りした三人五人の役者たちと

一緒になつて、大股に忙しなく追ひぬけて行く、その闇の中に尻端折つた役者たちの細い白い幾本かの脛と入り亂れ、小母さんの、同じやうに痩せた細い踝が、大股に忙しなく追ひぬけて行くのであつた。小さな提灯のあかりが螢火のやうに田圃の中へ消えて行く。私はその灯の中に、一つの形になつてゐる小母さんの「生活」を感じるやうな、或るさはやかさを見たことを覺えてゐる。

直ぐに、けれども私は次のやうなことを聞いた。小母さんはもはや船屋にはゐない。ほかのもう一軒の萬屋と云ふ小料理屋の手傳ひをしてゐる。或ひはそこでお客になつてお酒をのんでゐる。小母さんは船屋と喧嘩をして出て了つたものらしい。そして、あの肥つちよの旦那とも別れて了つたものらしい。——私は直ぐにまた次のやうなことを聞いた。小母さんはひとりで汁粉やを始めた。それは面白い汁粉屋である。おしるこはめつたに出來てはゐない。その代りに、酒と小皿に盛つた青菜のしたしものとは何時でもある。——或るとき私は二三人の友だちと一緒に、その小母さんの汁粉やと言ふのへ寄つて見た。それはでこぼこした石ころの多い宿外れの間道に、道に沿はず、斜めにいくらか後向きのやうな具合にさへなつて立つてゐるたゞの小さな百姓屋で、ついこの間まで住む者もなくて軒の低い雨戸が雨に叩かれて破れたまゝになつてゐたのを見てゐた眼には、その縁側に立てめぐらされた障子のふんと匂のするやうな新しい障子紙の眞白さが却つてさむざむとして見えた。だから若し、その軒からそんな旗が出てゐたかつたら、（それは丁度綺麗にかいてある田舍家の大提燈のお祝ひの旗ででもあるやうな、そのはすかひの街道の方へ長くはすかひに竿をさし立てて、たどたどしく田舍しること書いた薄い寒冷紗の布を幼い赤い絎け紐で幟のやうにしてあつた。）誰れもそれとは氣のつかぬことであらう。だからまた、私たちのやうな客の姿を、あるじである小母さんさへもふいにはほんたうにしないのかも知れない、丁度爐端でいぶり立つ釜の下を吹きつけ乍ら、けげんさうにこつちへ向いた。その爐の中からさへ、何といふぽつかりと白粉の浮いて見える芝居の殿樣の乳人のやうな生眞面目な顔が、忽ち笑ひこぼれて仰山に愛想よく私たちの方へ遣つて來た。だが、私たちはお汁粉の注文はしなかつた。その代り長い間その縁側に腰掛けて、番茶の振舞ひに預り乍ら澤山の小母さんの話を聞いた。私たちのつい爪先には、ほんの二寸程の出たばかりの青菜が拙く一列に蒔いてあつた。堀り返された土の匂ひがまだ漂つてゐるやうなこの青菜の育つのを待ち、したしものにして客に出す積りか、或ひは己れ一人の朝餉の汁の實に摘む積りか、私はそんなことを思ひ乍ら、却つて、小母さんはぢきにこの家から居なくなつて了ふであらうことを感じた。家の中には何もない。僅かの納屋にも何もな

い。何とそれは荒寥として居ることであらう。だが、小母さんは何も知らぬげに話してゐる。そして私たちは不思議な話を聴いたのだ。——小母さんは若いころ歌を詠んでゐた。女歌人と言はれたこともある。そのころの或る一つの夜、こんなことがあつたのだが、——さう話してゐる小母さんの顔を見乍ら、(もはや私はこの忙しなく動いてゐる熟れた桑苺の實のやうな色鮮かな小母さんの脣を見ても、はじめてそれを見たときほどに驚きはしなかつた。私はもう長い間、この小母さんと向ひ合つて暮してでも來たやうな、或る心易さを感じてゐたからである。)私は、いつかあの宿外れの街道で私の心を掠めた感じが、もう一度強く戻つて來るのを感じた。小母さんは私だ。私は小母さんだ。それはまるで同じものだ。——いまや私は二人の過去がまるで一つのもののやうに似通つてゐることを、迷信のやうに信じ始めた。さうなのだ。だから私はその小母さんの話を、まるで私自身のことででもあるかのやうに私の言葉で書いて見る。

2

何か、短歌のための小さな集りであつたと思ふ。私は私の女友だち(貴下がたは秋月なほ子といふ女流歌人の名を覺えてゐるであらうか。)と一緒にそこへ出掛けて行つたのであつたが、丁度支那との戰爭のすんだあとで、いま思ふとほんたうには出來ないくらゐ思ひ切つた洋風の、あの和蘭の宣教師でもが掛けさうな思ひ切り短い、(それはマントと言ふよりもほんの肩布に過ぎないと言ふ方があたつてゐる。)ひどく氣取つたマントの流行つたころで、類に洩れず私もそのときその薄い青羅紗の短いマントを着てゐたので、そのために酷く氣持が悶はれて(それはまるで、自分がすつかりマントばかりになつて了つたやうな)哀れにぎこちない感じで一ぱいになり乍ら、私はさきに立つて、その料亭の階段を上つて行つた。それから、敎へられた部屋の唐紙のそとに立ち留つて、そつとマントを脱いだのであつたが、それを見た私のきさくな友だちは、いくらかはそんな私の有様を人に見せたいいたづらででもあつたらうか、すうつとその唐紙をあけて了つた。ふいに、私は私の方へ振り向いた一團の顔を感じた。その一團の顔の中から、はつと思ふ間もなく、ただ一つの顔を、それは私の昔の戀人でも情人でもなく、昔私に金を呉れたことのある男の中の或る一人の顔を見出した(——私がそれらの男のことを昔の戀人と言はないのは私の一つの潔癖のためだ。また、私がそれらの金子を呉れた男に身を任せなかつたと言ふことは、私の一つの迷信のためだ。私は身を任せさへしなければ金は貰つても賣笑婦ではないのだ。そのころの私のやうな女にとつては、あの男に身を任せたと言ふことより、あの男を欺

いて金をとつたと言ふことの方が名誉なのだ。）は、は、この男も歌詠みになつたのか。私は私の心に湧いて來る或る息苦しい感じをごまかすために、微かな冷笑をもつて呟いた。するとそれを合圖のやうに、その男はそれが癖のひよいと人を小馬鹿にしたやうな氣輕さで頭を振つて見せ乍ら、私の方へ笑ひかけた。

「やあ、暫く。」

私は殆んど反射的に賣笑婦のやうな媚笑をつくつてその氣輕さに應じたのだ。ほんたうを言ふならば、私はこんな男に向いて笑つてはならない。私は私とこの男との過去を一ぺんに淸算して、憤りを持たなければならない。それだのに、（私はいつの間にか世の常の人の言ふ誇といふものを失つてゐる。憤るべきもの、嘲笑すべきもの、嘆くべきもの、そのほかの凡ゆる激しい感情に對して、何と殆んど習慣的な、如何かすると職業的にさへ思はれるこの媚笑が、われとわが心を裏切つて私の口邊に浮ぶのだ。それに、昔の情人同志が、何時何處で出會はうとも、笑つて、何事もなかつたやうに話し合へると言ふやうなことは、そんな器用なことはあの洒落者のフランス人にだけ任せて置くべきことではないか。）私は却つてこの男のへだてのない社交的な笑ひから、或る氣易さをさへ感じた。暫く？　何と言ふ暫くであらう。私は指で、その七年を數へた。七年の間に、この男の美しかつた顏はいくらか卑俗な落付きを示して、その知らぬげになかなかと伸した縮れ毛の掻上げのために、どこか歷史の教科書にあるマルチンルーテルの插繪の顏にも似てゐたが、一體にうす暗い老衰のかげが或る狡猾な感じとまざり合つて、人の心まで安易にさせる。そんな世馴れた表情があつた。その顏は丁度私の坐つてゐるところからまともに見える側柱の立鏡にそのまゝ映つて、まるで私を見守つてゐるやうであつた。あの男のところからも、私の顏の映つてゐるのがそのまゝ見えるに違ひない。私の顏だ。七年の間に、昔そのためにあの男が僅かな金を拂ひ、僅かな執心を拂つた青春の美しさはなえしぼんで、いまのか細い精神的生活の貧しくもつなぎとめてゐるものと云つては、まるで芝居に出る紙子を着たさむらひの蒼白い神經的な誇のやうなものであつた。私は何となく恥に似た感じが私の心を掠めるのを感じた。――だが、それはこの男との昔のことに就いてでは、少しもない。いまでは私も、いくらかはまともな生活に戻つてゐる。戻つてゐる。さうだ。私がこの男を知つてゐた頃には、働いても働いても、（おお、それはほんとうに私の手と足とをもつて私は働いた。）食へなかつた。私は私ひとりではなく、誰にも隱れてただ一人の情人を持つてゐた。誰もそれを、（凡ての男はただ己れ一人のことしか考へぬものだ。己れ一人のほかにほかの男の居ると言ふことを考へぬものだ。）私の情人とは思

はなかつた。それは誰の目をも惹かないほどたゞのあり來りの男に過ぎなかつたからだ。だが、そんな男でしかなかつたと言ふことは、それは一つの仕合せでもあつた。誰にも情人のあることを知られこはならぬ。私は私の生れた田舍の町の言葉をもつて、「あにさん」と呼んでゐた。この「あにさん」のためにも、私は食べものを作らねばならなかつた。では、如何して？　如何してほかの方法があらう。私はほかの一人の男から、またほかのほかの一人の男から金を貰つた。どの男とも街を歩いた。だが、それらの多くの男の中の一人が、或るとき私に訊いたことだ。

「あにさんは、あれでひよいとあんたの許婚のやうな氣でゐるのではあるまいね、もしさうだとすると、僕は少うし氣の毒に思ふんだが、」

また或る一人が或るとき私に言つたことだ。

「何て急いで歩くの。いまに僕の赤ん坊を生むやうになるかも知れないのに、そんなにはにかむことはないぢやあないか、」

は、は、——私は大きな聲で怒鳴つて遣りたい。するとどんなに吃驚してこれらの男は立ち留ることであらう。私はいま、その「あにさん」とぐるになつて、、、、、をしてゐるところなのさ。——

だが、如何して、生活に困らぬ金を貰ふことはよくて、困る金を貰ふことは醜いのか。如何して、食へなかつたときに貰つた金のことばかりを、こんなにも醜く情けなく思ひ出さなければならないのか。それは、貧を切實に考へるものの貧に對する反撥なのだ。私はよく、こんなことが話されるのを聽いた。男から金を貰つたりする奴は生れ乍らにそんな奴さ。どこに居てもそんな奴さ。——では、そんな奴でない女がどこに居ようか。若し男に金を貰はなければならないやうなことがあつたときに、そんな奴でない女は、みんな、舌を嚙み切つて死ぬのであらうか。男に金を貰はなければならないところまで、凡ての女を連れて行つて遣りたい。それは丁度、私がさうであつたのと同じやうな順序をもつて連れて行つて遣りたい。それでも、やつぱり、生れ乍らにそんな奴でない女と言ふものは舌を嚙み切つて死ぬものであらうか。——私は呼吸苦しいときにいつもするやうに、せい一ぱいの大きな呼吸をした。それはまるで溜息のやうであつた。あんまり考へ過ぎることを止めよう。考へることを止める！　すると私は完全に賣笑婦になつて了ふのだ。

この歌の集りは、私のためには一つの自嘲を呼び起すものとしてしか終らなかつたやうに思ふ。だから私は、その場のこまました有樣はみんな忘れて了ひ乍ら、ただこの慘めな感じだけを、いまもはつきりと覺えてゐる。私と秋月なほ子とは、みなよりも早くそこを出て行

つたのであつたが、恐らく私の面上に現はれたであらう或る躊躇を見逃さなかつたこの友達は、何の苦もなく訊いたことだ。

「ねえ、あの男たれ？」

私は、己れの肩にかかつた青羅紗のマントの風にはためく音にさへ身をすくめた。このマントの下にある體が、あの自分のものであらうか。——何か私には、その夜の惨めな有様が、みなこのマントのせいであるやうな氣がしたのだ。さうだ。これをかなぐり捨てよう。そして？——私はなほ子の問ひに應じてその男の名を告げた。するとなほ子は御山に躍り上る眞似をして見せ乍ら、

「ああ、あの男？　知つてる、知つてる、」

さう言つて、ふいにくすくす笑ひ出した。

「あんたが氣を悪くしなければ、それは面白いものを見せて上げるんだけれど、」

この前置のあとのなほ子の話に依ると、私の知らない或るグループでは、この男に依つて話し出された私の知らない私に就いての面白い話が話されてゐると言ふことであつた。その話は、もはや一人の作家に依つて一篇の小説になり、そして巷に賣られてゐる。それは面白い小説だ。それは、私が、自分がその中に描れてゐると言ふ事實に寛大でさへあるならば、私さへも一緒に笑ひ、面白がるに違ひない、それほどに面白い小説だ。だから若し、それを私が讀みたいならば、今夜にもそれを貸して遣らうと言ふのであつた。私はそこで、それを借りて讀んだ。

それはまことに面白い小説であつた。その小説の中では、誰の眼にもこの私とよく似たと思はれる（おお、それはまるで違ふ。）一人の、貧しい生活しか知らず、その貧しい生活をまるで生活の雛形ででもあるかのやうに愛らしく暮してゐる愛すべき若い女と、誰の眼にもあの男とよく似たと思はれる（おお、それはそんなにもよく似てゐる。）一人の伊達な、もの好きな、金を持つた男とが一緒に街を歩いてゐる。その男は上機嫌だ。街も街の灯も街の空氣もそれから側に寄りそつて歩いてゐる女も、なにごともその男にとつては樂しい。男は、この女をこれからどこへ連れ込まうかとそのことばかり考へてゐるからである。と、とある八百屋の店さきで、ふいに女が立ち留つた。

「これ、頂戴な、」

とその女の指したのは、一つ四錢と摺り附木の札を立てた一莖の葱であつた。それは何て臭い葱だらう。それは見つけものだ。女はいそいそと嬉しさうに、その葱の束を抱へて歩いて行く。おお、何と言ふ不風流なことだ。青くさいことだ。忽ち、男の伊達な、もの好きな心は根こそぎに嘘のやうに消えてしまつた。男は、二度ともはやその女

に逢はうとは思はなかつた。さう言ふ小説なのであつた。——これが面白いのか。それは面白い。まるで粋なフランス種の洒落本をでも讀むやうに面白いではないか。

は、は、は、——と、そこで小母さんは齒ばかり立てて卑しげに笑つた。にも拘らずその白粉の醜く硬はつた面のやうな顔が、一瞬間、微かに慄へるやうなのを私たちは見たのである。而てまた、小母さんは嘲けるやうな同じ調子で語り出した。

だが、こんな話はみな、昔、私が紙子を着たさむらひのやうな誇を持つてゐたころの話である。いつの間にかそんなものも、摺りへらし摺りへらし、あと方もなく消えて了つた。若しいままでもそれに似たものがあるとすれば、それは自分の賣笑婦的生涯が、せめてそれ自體としての價値を持つてゐたものであるやうに誇負し妄想することだ。だが、私のこんな風な生活ももうその一番お了ひのところまで來て了つた。私のやうなものにとつては、賣笑の終るとともに死が來る。さう思ふことは、それは一つの悟りのやうなものだ。よその人の眼からは、それさへも私は知らぬげに見える。知らぬげに見えることそれ自身がまた、私のやうなものの生活なのだ。まだもつと若かつたころには、この考へは私を戰慄させた。私は見知らない誰も通らない道端の松の木の下でのたれ死にするであらう自分を想像する。私の屍の上にはぢきに烏が下りて來る。それから雨が降り、風が吹いて、白い棒きれのやうな骨だけが殘る。——どんな恐しい考へにもいつか馴れて了ふものだ。とは言へ、私は絶え間なく自分に言ひ聽かせることを忘れない。お前はひとりで死ぬ。朝になつたら死んでゐる。それで好いのだ。自分の死ぬ枕許に誰かに居て貰ひたいと思ひ、大切に看られたいと思ふのは、そしてその死を惜しまれたいと思ふのは、みな、死そのものとは何の關係もない、浮世への執着だ。浮世への虛榮だ。

私は、ただ一羽だけで飛んでゐる烏や、ただ一匹だけで歩いてゐる犬を見るとさう思ふ。彼奴も、ふいにどこかで死ぬだらう。そしてそれを誰も知らない。——或るとき私はひとりで川つぷちを歩いてゐた。と、その川つぷちの叢の中の一つの大きな平たい石の上に、小さな白い猫のしやがんでゐるのが眼についた。その白い毛のへんに長くつつ立つてゐる上からも非常に痩せてゐることが分る。それが、へんにべしやんこに腹をおとして坐つてゐるのだ。だんだん近づいて行つても動かない。その側を通り過ぎても動かない。そのときは何とも思はなかつたのであつたが、翌くる日、同じところを通つたら、まだそのまま同じ格好でべしやんこに坐つてゐるのだ。死んでゐたのであ

つた。

私は自分とその猫とを同じものに思ふ。私はだから寝るときには、いつも自分の枕の下に僅かな金を敷いて寝る。それは若し、私の死んでゐるのが見出されたなら、埋めるだけはどこかへ埋めて貰ひたいからだ。だが、この金は、私は誰にも貰ひはしない。私はただ、私の最後の、、によつてそれを得たばかりである。――

この小母さんの話は、凡ゆる意味で、、あくに満ちて息苦しい。それは、歪み捻ち曲つて、聴くものの耳をおほはせる。小母さんの貧しい心は、己れに触れた凡てのものを憎み蔑むことにしか動かなかつたかのやうにさへ見える。けれども、この捨て鉢な、自分勝手なものの考へ方の中に、哀切な、ただ一本の糸のやうな感情の通つてゐることを私たちは（――私は、）認めなければならない。それはまた、私（さうだ、私だ。）の心をも慰めるからである。

3

軈て、秋になつてその山あひの小さな村にもまた寒い雨が降り出した。そんな日のある日のこと、私は長い間通ることもなかつた宿外れの間道を通つて、あの小母さんの汁粉やのある方へひとりで出たことがあつた。その家はもう、ほんたうに汁粉やでもないのであらう。傍めに長く往還の方へさし立てたあの薄い寒冷紗のお稲荷さまの幟のやうな旗が、いまはそれを立てることを思ひついた小母さん自身にさへも忘れられて了つたのかも知れない、寒い雨にしほたれて、くたくたと風のままにはためいてゐるのが、遠くからも何となく人なげに淋しく見えた。だが、その頃のうすら寒さに障子が少うしあいてゐた。その隙間から、人影は見えない乍ら、ひつそりと何もない部屋の中に一つの古ぼけたちやぶ台が、上にはただ一つきりの茶碗と箸と皿と、鍋でも這入つてゐることであらうただひとりの人の喰べるほどの小さないゆきひらとをのせたまま出してあつた。何といふうそ寒いただ一人きりの暮しであらう。声もかけず、私はその前を通り過ぎた。――雨に濡れ風にはためいてゐるのは、ただあの田舎汁粉の旗ばかりではなく、ゆくりなくその家の前を通り過ぎたこの私のやうなものの心まで、さうなるのかと思はれた。

私はその雨の中に傘をすぼめ乍ら、その傘の中にわれとわが体をもすぼめ乍ら、ひよろひよろと石ころ道の上を歩いた。――他人の生活に打たれるのは、自分も同じやうな運命の近くまで知らぬ間に来てゐるせいではあるまいか。いまこそ私は、よき良人に愛せられよき家の中にうまうまと暮してゐる。それは如何いふことなのであらう。愛せ

られてゐると言ふことは、いま既に愛せられなくなりつつあると言ふことではないか。うまうまと暮してゐると言ふことは、いま既にそのうまさの破れつつあると言ふことではないか。(さうだ。ひとはいつも、運命のもう一つの側であるその儚なさにも馴れねばならぬ。)ではお前は、いまその良人からも離れ、そのいまの生活の方法をも失ふとしたならば、あの小母さんと同じやうな道筋をたどる氣でゐると言ふのか。それを誰が言ひ得よう。私は何も知らない。ただ私の知つてゐるのは、何となく私の前にもあの恐しい雨の中のちやぶ臺が私を待つてゐるやうな、そんな氣がしてならないことだ。——私はひよろひよろと石ころ道の上を歩いた。そして宿へ歸ると直ぐに、それはまるで、愛情のかけらを拾ふ乞食ででもあるやうな、哀れな、もの狂しい便りを東京にゐる良人へ宛てて書き送つたことであつた。

いくばくもなく、私は東京へ歸るやうになつた。それは何となく、安易な氣持であつた。歸るとまた、私はよき家の雜用の中に埋れて、よき妻として暮すことに餘念がなかつたので、後へのこして來たもののことを忘れるともなく忘れてゐた。だが或るときのことそれはもう冬になつて、その頃までひとり溫泉場に殘つてゐた或る一人の友だちが、私の家へ遣つて來た。

「船屋の小母さんはもう居なくなりましたよ。」

私の顏を見ると直ぐにその友だちは言ひ出した「あの小母さん、幾いつくらゐになつてゐたんだと思ひます？」

「五十くらゐ？」

友だちは仰山に首を振つて、投げ出すやうに言つたことだ。

「六十二、」

私はだが、如何いふ譯かずつと前からそれを知つてゐたのでもあるかのやうに、少しも吃驚はしなかつた。私たちはあの小母さんのそれのやうな老女の粉黛をどこででもよく見たではないか。どこでそれを見たのであらう。銀座の鋪道に横づけにされた自動車の暗い幌の中で、或ひは帝劇や歌舞伎の明るい廊下や座席の中で、或ひはその舞臺の上で。——私はそんな氣がしたのであつた。(どんな女も粉黛を施さねばならぬ。そして年を老つてはならぬ。それは、自分ひとりの顏だけを頼りに思はねばならぬ種類の凡ての女の、生活の方法である。)

「ほんたうに可笑しいわ。あれで顏なんかあたしたんかより若いくらゐよ。それはつやつやして、」

「それはさうであることが必要だからですよ。ほら、いつだつたか、貴方が馬鹿な假想趣味を出して、貴女とあの小母さんと同じだなんて言つたことがあつたでせう？ あんな馬鹿なことがあれで矢張り

僕の頭に殘つてたと見えて、偶然、こないだ、あの村の義太夫大會といふのへ行つて見たんですよ。すると、あの小母さんの出語りの番になつて、——あててごらんなさい。その貼り紙に何て名前が書いてあつたか、」

「あたしのと同じ？」

「ほう？　知つてたんですか。僕はまた、あなたがあんなことを言つてたもんだから、何だかへんで、沈默つてゐようかと思つたんだけれど、」

「それごらんなさい。千代なんて、ありふれた古風な名前はどこにでもあるわ。何にも珍しいことではないわ。だのに貴方がそれを取りたてて言ふから可笑しいぢやあない？　矢張りあたしとあの小母さんと、同じみたいなところがあるんでせう？」

「さう言ふのが貴女の文飾ですよ。それどころぢやあない、僕はこつちへ來かけに途中で馬車で一緒になつて、閉口しましたよ。實に辟易しましたよ。僕だの、ほかにも知つてる顔があるもんだから、わざと聽かせて意識に入れて、それは呆れ返るやうな猥雜な言辭を弄するんですからね。少し醉つぱらつてもゐたやうだけれど、それをまた、相手にするやうな奴がゐてね、あのうす汚い雜馬車の中でせう？　まるで、やけ糞なんですよ。何か氣に入らないことがあつてあの村から出て了ふ積りらしかつたけれど、如何も、あんな不貞腐れ方は困るな、」

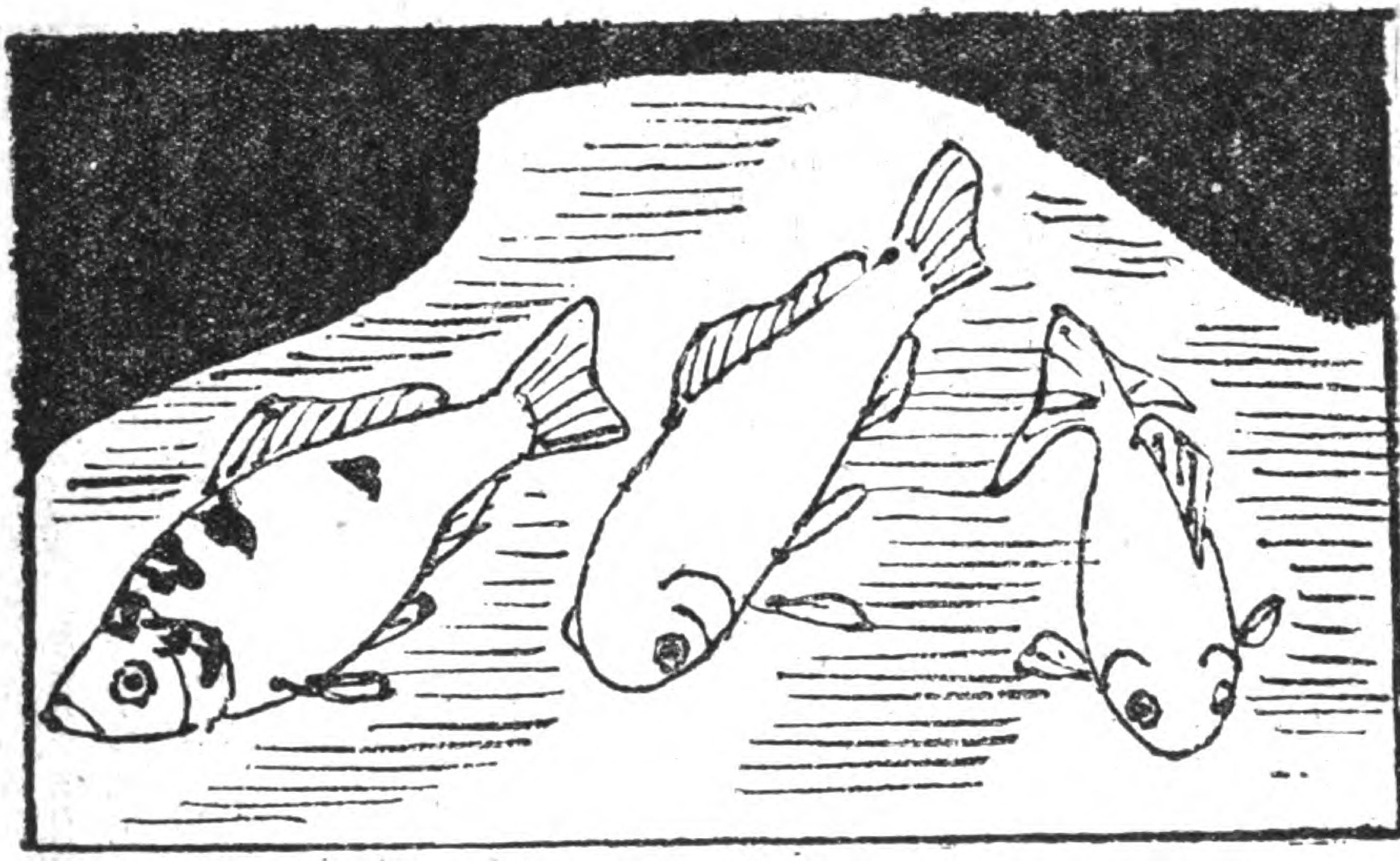
「何か、荷物のやうなもの持つてゐて？」

「さあ？　風呂敷包みか何か持つてたか知らん、」

ああ、——小母さんは、どこへ死にに行くのだ。私はその友だちの吐き出すやうな口調にも拘らず、不思議なものの錯覺を見たのであつた。それはぼんやりと私の頭にうかんだ。私はそれをついこの間、シネマ銀座で見たばかりであるけれども。——ゆく道道に一ばいに櫻の花が咲いてゐる。行けば行くほど咲いてゐる。馬車のうしろに殘るものは、その花びらと轍のあとばかりである。古風な、日本の牛車のそれのやうな長い轅を二頭の白い馬に曳かせて、その雜馬車のばら色の幌のかげから見えるのは、あのやけ糞な猥雜な少うし醉つぱらつてさへゐる小母さんの代りに、薄命の美姫マノンがのつてゐる、その白い襟の肩にかかつたうすい青羅紗のマントではないか。行く道道に一ばいに櫻の花が咲いてゐる。行けば行くほど咲いてゐる。

ああ、——小母さんは、どこかへ死ににゆくのだ。

——一九二八、五、三〇——



魚の心

佐佐木茂索

雪ごとに梁たわむ住居哉　岱水
けぶらで寒し浦の鹽やき　路通
さまざまの魚の心も年くれて　芭蕉

一

或夏の眞夜中、仕事が一區切りつくと、不意に蚊やりが鋭く嗅覺を刺戟した。同時に彼は忽ち猛烈な空腹を感じた。そのままでは眠られさうもないので、彼は何か探しに臺所へ出て見た。冷藏函を開けると、ゼリイとチーズとアスパラガスとがあつた。どれも腹をふくらせさうもなかつたが、外に何もないとあつては仕方がないので、彼は取敢へずゼリイを食つた。一人前——一切れは夢中で食つた。二人前目は、もうこれで止さうと思つた。が空腹は三人前目も瞬く間に喰はせてしまつた。衛生に悪いと思つたが、もう咽を辷つたあとだつた。胃散を呑んだ、口の中を淸掃する爲に麥湯の冷えたのをもぐもぐとやつた。

翌朝彼は少し痛んでゐる腹を我慢してゐると、昨日交した細君との會話の一節を想ひ浮べた。

「此次ぎの土曜日にWomen's Club で On Japanese Literature といふ講演をするのよ。」

「On Japanese Literature? 廣汎なものだね。英語でかい？」

「え、さう。」

つつましやかに見えたが、幾分得意でもある樣だつた。彼は細君の机の上に積まれてゐる參考書を見ながら、冷笑ともつかぬものを浮べた。

「大したものだね。」

――そんなことを想ひ出したら、腹が急に痛さを增して來たので、彼は細君に云ひかけた。

「せめてビスケツトとか煎餅とか、少しは腹の足しになるものも、ちつとはあつてもいいだらう。あんなものは、凡そ空腹の對症藥でないもの許りだ。――ビスケツトもあつての上の ゼリイにしてくれ。――ものの例へがだ。――俺は惡德俱樂部で、亭主の空腹に就てといふ[illegible]戲語の講演でもしたいや。」

語氣が激しかつたので、彼自身不愉快になつて來た。細君は勿論つんとして答へなかつた。

二

冬になつて、彼は足が冷えると眠れないから、細君にならつて湯たんぽを入れることにした。ところがこれは直きゴムに穴があいて、役に立たなくなつた。それで代りがいづれ出來るだらうと思つて、數日冷えるのを我慢して寢た。しかし、ある寒い晩、彼は寢卷の裾で足を包むだけでは堪えられなかつたので、氷枕に湯を入れて眠つた。すると翌朝、彼の蒲團の裾が少し口のゆるい氷枕が漏れたので濡れてゐた。

その日の晩、彼は細君よりも早く寢に行つた。もとより彼の蒲團には湯たんぽは入つてなくて氷の樣だつた。彼は立上ると細君の寢床から湯たんぽを取り上げて自分の方へ持つて歸つた。そしてやつと足が暖つて來ると、どうして細君は彼に代りの湯たんぽを買つてくれないのだらうと憤然とした。彼は枕許のノオトを一枚引破つて、オレモ寒イトキハ寒イ、と書いて、湯たんぽを取り上げた代りに細君の枕許へ置いた。

三

たがやがて細君もゼリイを拵へない日が來た。Women's Club の會費さへ滯つてゐては、それも尤だつた。それと同時に、彼も彼等の分際で細君に不機嫌になつたりするのは、虚榮の餅の皮だと思ふ樣になつてゐた。今までの細君は今迄の彼の反映に外ならないので

あつたらう。指弾すべき細君だつた様に、彼自身も何處か（或は大いに）指弾さるべきだつたのに違ひない。彼はそれからそれと、さういふ隨感隨想にゆらゆら漾ひながら、彼自身が憐まれると共に、細君も可哀想な生き物だと思ひ始めてゐた。彼は彼自身が打しほれ始めると一緒に、打ちしほれてゐる者を不憫だと思ひ出した。彼は、打ちしほれて隣りに坐つてゐる細君に、先づ柔かい目を向け出した。彼は細君が時時唄つてゐる「ライフ・イス・ハアド」といふ唄にどうかすると、ぼんやり耳をかしてゐた。

細君がWomen's Clubに籍を置いてゐる様に、彼もMen's Clubの會員だつた。Men's Clubは一種の共濟組合だつた。彼は或春の總會で、一人の會員が、月月二圓の會費は苦痛だから、半額の一圓にしないかと提議したことを想ひ起した。その時、二圓位は金と思つてゐなかつた彼は、なに高くない、これ位でなくちや、會の性質上成立たないと冷笑的に反對する者の一人だつた。事實半額の會費では會員の冠婚葬祭にどうしやうもなささうでもあつたのである。だが今彼はこの二圓を納めるのに苦痛を感じ、高いと思ひ出してゐた。すると人間とは經驗してみないと本當には分らない何處まで進歩の遲い動物なのかと不愉快だつた。

彼はもう金なんか何うでもなると嘯く癖を忘れてしまつた。さうして、彼も時折り、細君のゐない時には「ライフ・イス・ハアド」と、その一句だけを記憶してゐて小聲に呟いた。

その頃彼の友人が首をくくつて死んだ。友人は相當の資産家だつた。彼は金持ちだつたから死ねたのだらうと考へた。彼に殘つてゐる幾分の見栄は、——。

彼は何もしないで、唯不機嫌になつた。暗澹とした顔をさらしてゐた。

四

憂鬱な顔を見合す日が多くなつた。

細君が起きたやうだなと思ふと、彼も起きて茶の間へ出て行つたさうして毎朝の事で、顔を洗ふ氣もないから、煙草を啣へながら、新聞を開いた。不眠で憔悴たる頭に無刺戟な大小の活字が映る。

顔を洗つた細君は茶を焙じながら訊いた。

「何か面白いことあつて？」

彼は新聞を離すと、細君を見ることなしに、

「何もないよ。」

さう答へて、依然として昨日の様に興味のない顔をした。——

五

生活は毎日あつた。それがどんな生活であつたにしろ、毎日押し寄せてくるものは生活に違ひなかつた。それは何時まで經つても締めくゝりのつかない化物じみてゐた。

月日は重く來て、すぐ輕輕と飛び過ぎて行つた。その重く輕い妙な氣もちを幾度か經驗したのち、彼はやうやく一つの行手を見た。すると莫迦になつた樣な、ほつとしたやうな云ひ難い日々が來た。

…………………………………

それぞれに、そんな考へを持つてゐることを、殆ど同時にお互が氣附いた。すると、その瞬間からお互に相手をいたはり出した。しかしそれは、愛するものを失ふからと云ふよりは、お互が何か可哀さうな生き物だと不憫がる氣使ひからだつた。だが、そんなものでも、何かの役には立つた。彼等はお互を問ひ詰めずに、衷心に少しも觸れることなしに、何もかも分り合ひ、それでは此際、もう一度何とか工風仕合はうと、銘銘にうなづいた。

そして、これからはお互の部屋になるべく引籠つて、顏を合せる時には極めて機嫌のいい顏を合せる樣にした。

夫は部屋から出てくると、日の當る芝生に古ぼけた籐椅子を持ち出し、ゆつくり煙草に火をつけた。細君はそれを見ると、讀みかけた本を措いて彼女の部屋から茶を入れて持つて來た。

「ハンス・カアヴルの指輪といふのを御存知？」

「何だつたつけ。知つてゐる樣でもあるが。」

「今讀んでゐたら、そんなことが書いてあつたの。」

「アナトオル・フランス？」

「え、その傳記。」

「知つてゐる樣でもあるが、話して御覽。——」

細君がそんな話をすると、夫は何か別の話題を見つけた。

「ダアキンはね、鼻の恰格が惡いので、もう少しでビイグル號に乘り組みそこねたさうだよ。何でもキャプテンがラウアテルの心醉者でね。ダアキン青年の鼻を見ると、キャプテン・フイツロイは——」

煙草を吸つて茶を飲み終ると、彼等は又それぞれの部屋へ歸つた。

しかし——。

——何か面白いことあつて？

——何もないよ。

さういふ毎日が直ぐ戾つて來た。どうしても彼は所用の何ものかを獲る事が出來なかつたからだ。全く、早い話が（さうして）最後の話が——。

六

或晩、彼は細君の様子が何となく變なことに氣がついた。此頃の彼は、どういふ微細な變化にも直ぐ神經を震へさせた。

彼は一旦寢床に這入つて、いつもの様に讀みかけの本を開いたが、半頁も讀まないで床の上に坐り直した。今夜は眠つてはいけないぞ、本を讀みながら遂ひ眠りでもしては大變だ、さう思ふと立ち上つて廊下へ出た。すると、細君の部屋の電燈がもう消えてゐた。平常なら、まだまだ本を讀んでゐるか、床の上でトランプでも弄してゐる時分だのにと考へると、彼は躊躇なく細君の部屋の障子を開けた。スキッチを焙てみると、彼女はひどく蒼ざめて横になつてゐた。

「眠つたのかい。」

彼女はかすかに首を動かした。

「具合が惡さうだね。」

彼はかゞんで、彼女の額に手を置いた。すると、驚くほど冷たかつた。彼は憫然としたが、默つて、今度は手首を執つてみた。脈が細ぼそと打つてゐる。彼はそれから彼女の足の裏へ手を觸れてみた。全で氷の中の様だつた。

「ひどく冷たいよ。どうかしたかい？」

彼女は答へなかつた。彼はしばらく様子を見やうと枕許に坐り直した。彼女はどうやら眠つて行きさうである。二十分程經つて彼はまた手首を握つてみた。さうして今度こそ、水よりも冷たい手首にぞつとした。彼は靜かに立つて茶の間へ行くと、戸棚を開けてみた。さうだらうと思つたとほり、ヴェロナアルの瓶が空だつた。少くも三瓦は殘つてゐたから——。

彼は致死量は何瓦か知らない。恐らく三瓦は何でもないかも知れない。しかし、ありたけを呑んだといふことは、もつとあつたら、もつと呑んだであらうといふことを示すだけだつた。

彼は細君の部屋へ引返した。さうして彼女をゆさぶり動かした。こんな時には、眠りに落さなければいゝに違ひないと彼は信じてゐたから、やたらに搖り動かした。

「おいおい、起きろ。」

細君は冷たくてくなくなだつた。

「おいおい、起きろ。」

彼は可哀さうな生き物の上半身を引起すと、もう一度同じことを繰りかへして、一層強くゆさぶつた。

「眠らせて。——」

彼女はやつとこれだけ云つた。

「まだなかなか眠らせないよ。」
彼は眠るならこつちが先に眠つてからだと思つた。何か縡に觸りながら彼は搖り動かした。一足先きに眠られては、間尺に合はん樣にも思つてゐた。だが彼は細君が大丈夫さうだと見極めると同時に、俺なら本當だがこいつでは嘘だといふ樣な氣がしてきた。そんな考へ方は困るとも思つたが、困つても仕方がなかつた。しかし、細君のぐんなり樣を見直すと、少くも半分は本當だと考へた。半分は本當だとすると、――大抵の事は半分だけ位しか本當でなくて、あとの半分は、――あとの半分をも本當にしてしまふのはチヤンス――チヤンスに似た程度のものだらうと思つた。
彼はまた細君をまめまめしく構ひ出した。
夜が明けると、彼はほつとした。細君は蒼ざめたなりに目を閉いてゐた。彼は細君を强制して椅子にかけさせた。雨戸を明けると、肌寒い風が流れ込んで來た。
「風を引くわ。」
パジヤマきりの彼を見ると妻はさう云つた。
「風くらゐなら引いた方がいゝ。」
「Better than self-poisoning, eh?」
「Much better!」
さう答へたものゝ、本當の返事でもなささうだつた。だが彼は細君に向き合つて腰をかけた。そして彼女が返事をしなければならない樣に仕向けて、多少の寒さを感じながら、斷へずしやべつてゐた。

七

小粒なら七八錠、大粒なら一錠半、これだけの催眠劑がないと、彼も彼の細君も眠られない樣に、何時からか習慣づいてゐた。だが或晩以後の彼は、眠れなければ眠くなるときまで起きてゐるといふ野蠻な方法を執ることにした。彼は細君にもさう云ひ渡した。ヴエロナアルは高價過ぎるから、もう買はない事にしやうと云つた。そのあへと、
「僕もどうかした拍子に、大粒を小粒と間違へないものでもないからな。」と付け加へた。
彼等はまたお互をビイドロのやうに勞り出した。

八

月末がやつて來た。だが支拂ひには足らない金高しか持つてゐなかつた。
「どうするの？」
「どうしやうもない。」

「だつて——。」
「取りに來る者の方が、幾分か樂だらうからな。」
　さうは云つたものの、小此木は金策に出かけてみた。だが最初目ざした一軒が不調に終ると、彼はもう十軒も奔走したやうな疲勞を感じて、どうにも別のところへ廻る勇氣がなくなつてしまつた。彼は不調に終る次ぎ次ぎを想像した。想像だけで彼はくたくたになつてしまつた。
　衰へた顏で彼は細君に云つた。
「八方塞がりだ。」
「何處も駄目？」
「ああ。尤も一軒より行きはしないがね。それで澤山だ。考へてゐるだけで目がくらみさうになつて來た。」
　幾度でも踏みとどまることは造作はない。造作なくもないかも知れないが、踏みとどまつて踏みとどまれぬものではない。尠くもそれが、どんなに苦しくても、割り切れる性質のものである限りは。しかしそれに何か他のものが加るとき、——加つたと信じたとき、それは傍から見ては割り切れるに違ひなくても、もうどうにもしやうがない——
　一番簡單な場合、——「もう面倒臭せえや。」そんな莫迦げたものが加はつても、あとの半分を本當にする可能性は十分に生じて來る。では此簡單な一部を殺してしまはうか。——
　彼は細君に向き直ると云ふた。
「だがまあいいや。」
「さう。——」
「そして、くたびれ休めに何處かへ旅行でもしやう。」
　細君の色のない顏が急に元氣づいて來た。
「出來ればどんなにいいことだか。——」
「出來る。それくらゐのことが出來なくて堪るか。直ぐ仕度をしろ。」
　云ひ捨てて彼は外へ飛出した。たつた一つ殘つた最後の財産——嘘をつくことによつて彼は友達から金を借りてしまつた。
「さあ行かう。」
　歸つてみると細君は半信半疑で、それでも鞄をつめかけてゐた。
「で、お金は？」
「電話を賣つたよ。あんなもの俺達には不似合だからね。」
「電話を。だつてあれは、——」
「云はなくたつて分つてゐる。いかにも借りものさ。しかし——
　しかし？　しかし損の出來る者が損をするだけさ。と云はうとして彼はよした。こんなことはまだまだ云ふものかと——。

九

彼等は東海道を走つてゐた。

「別府へでも行つてみよう」

その程度で出かけたのだつた。

國府津から男ばかりの四人連れが乘込んで彼等の隣席へ腰をおろした。四人連れは此附近の溫泉場から引上げて來たものらしく、まだはしやぎ足りないらしい元氣を持つてゐた。高聲に誰はばからない連中だつた。皆香具師染みた顏をしてゐた。金ベンとか白ベンとか藝者とか高いとか安いとかいふ話ばかりだつた。そのうちに年嵩のが、

「しかし瀨戸內はいいね。何處が好いたつて瀨戸內より好いとこはないからな。」

と云ひ出した。瀨戸內といふのは瀨戸內海のことらしかつた。

「ああ瀨戸內はいいね、本當に。」

誰かが應じた。

「何しろ波が立たないからな。立派な遊覽船があつてさ。ぶらぶら行つた日には何とも云へんぜ。夜なんざ、眞暗な沖に漁師の篝火が並んでさ——。」

高い安いの藝者から忽然として篝火に變つたので、これならまだしもだと思つてゐると、再轉してまた驚かされた。

「——何しろお前、何の島に行つても藝者がゐると來てゐる。それが又べら棒に安いと來てゐるからな。」

「へえ、そんなに安いかね。」

「安いやね。安い代りにはお前、高くつくんだよ。好いことばかりはないやね。」

「へえ、安いものが高くつくかね。」

「それやお前、安いからつひ大勢呼ぶだらうが。幾らでもないと思つたやつがお前、數となるとお前、存外高くなると來らあね。」

「なるほどな。」

「心からだがね。あはははは。」

話の合の手にお前を入れる年嵩の男は大口を開いて笑つた。莫迦のやうな感心をしてゐた男も外の男も一せいに大笑ひをした。

——彼は細君を、どうだと顧みた。同時に、「諸拂ひ當分延期」と書いて貼つて來た自家の玄關の戸をまざまざと思ひ浮べた。

——三六、十一、——



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その五

さうさう、それからちやうどその時分にあのいつかの觀音さんの繪が出來上りましたので、それを夫にみせたことがありました。「ふうん、光子さん云ふたらこんな人か。お前にしたら此の繪はうまく出來すぎてるなあ」と、夫は晩御飯のときにそれを膳の上へひろげて、一と箸たべては見、一と箸たべては見いして、「此れやつたら、さも繪にかいたやうやけど、ほんまに此の通りかいな」と、あやしみながら念を押しました。「そら、此の繪が問題になつたくらゐやもん、よう似てるわ。ほんとの光子さんは此の神々しさの上にちよつと肉感的なところがあるねんけど、日本畫にしたらその感じが出えへんねん。」――その繪はわたし、大分骨を折りましたので自分でもよう畫けてゐると思ひました。夫はしきりに傑作だと云ひましたが、とにかくわたしが繪と云ふものを習ひ始めてから、これほどいつしよ懸命に、興味を以て畫いたことはありませなんだ。「いつそ此の繪を表具してもろたらどうやねん。そんでそれが出來上つてから、光子さんに見に來てもろたらええやないか」と、夫が云ひますので、わたしもその氣になりまして、そんな

ら京都の表具屋へやつて立派に仕立てさせようと思ひながら、ついそのまゝに捨ててあつた或る日のことでした。「實は斯う斯う云ふつもりやねんけど」と、光子さんにその話をしますと、「表具にやるぐらゐやつたら、もう一ぺん描き直してめえへん？——あれはあれでよう出來てゐるけれど、——顔はよう似てゐるけれど、——體のつきがちよつとたけうちと違ふよつてなあ」と云はれるのです。「違ふて、どう云ふ風に？」「どう云ふ風に云うたかつて、口で云うたぐらゐやつたら分れへんわ」と、さう云はれたのが、ただ自分の感じを正直に述べられたので、「わたしの體はもつともつと綺麗です」と云ふやうな自慢の意味はなかつたのですけれど、でも何となく不滿足に思うてゐなさる樣子でしたので、「そんなら一ぺん、あんたのはだかの恰好を見せて欲しいなあ」と云ひますと、「そら、見せたげてもかめへんわ」と、すぐに承知しなさいました。

そんな話があつたのはやはり學校からの歸り道か何處かであつたでせう。「そんならあんたとこへ行つて見せたげるわ」と云はれて、たしかその明くる日の午後、學校を早退きして二人でわたしの家へ來ました。「うち、はだかになつたりなんかしたら、あんたとこの人びつくりしやはるやろなあ」と、みちみち光子さんは云つてをられましたが、きまりわるがるより、なんぞ面白い遊びでもするやうに、やんちやな眼をしてをかしがつてをられるのでした。「家にええ部屋があるわ。二階やねんけど、そこやつたら誰にも見られへんわ。西洋間になつてるよつて」と、わたしはさう云つて寢室へ連れて行きました。「まあ、感じのええ部屋やなあ、とてもハイカラなダブルベッドがあるなあ」と、光子さんはそのベッドに腰をかけて、お尻にはずみをつけてスプリングをぐいぐい撓はせたりしながら、しばらくおもての海のけしきを見てをられました。——宅は海岸の波打ち際にありますので、二階はたいへんに見晴らしがよいのです。東の方と、南の方と、兩方がガラス窓になつてゐまして、それはとても明るうて、朝なぞおそうまでは寢てゐられません。お天氣のよい日は松原の向うに、海を越えて遠く紀州あたりの山や、金剛山などが見えます。はあ？——はあ、海水浴も出來るのです。あそこら邊の海はちよつと行きますと、ぢきにどかんと深うなつてゐますので、あぶないのですけれど、香櫨園だけは海水浴場が出來まして、夏はほんとに賑やかなのです。ちやうどその時分は五月のなかば頃でしたから、「早う夏になつたらええのになあ、そしたら毎日でも泳ぎに來るのに」と、部屋の中を見廻しながら、「うちも結婚したら、こんな寢室を持ちたいわ」などと云うたりしました。「あんたやつたら、これどころやあるかいな。もつともつとええとこへ行けるやないか。」「そやけど、結婚してしもたらどんな寢室に住ん

でも、綺麗な籠の中に入れられた鳥のやうなもんと違ふかしらん？」「そら、そんな氣がすることもあるけど、……」「あんた、此處は夫婦の秘密室やないかいな。わたしをこんな部屋へ引つ張つて來て、旦那さんに叱られへん？」「秘密室かつてかめへんやないか、あんただけは特別やもん。」「そない云うても、夫婦の寢室は神聖なもんやと云ふさかいに、……」「そしたら、處女の裸體かつて神聖なもんやよつて、ここで見せてもらふのが一番ええわ。今のうちやつたら光線の工合もちやうどええよつて、はよ見せてほしいわ。」私はさう云つて急きたてました。「海の方から誰ぞ見てはれへんやろか。」「あほらしい、あんな沖の方にゐる船から何が見えるもんかいな。」「そやけど、ここはガラス窓やよつてなあ、――そこのカーテンを締めてほしいわ。」五月云うても眼が痛うなるほどキラキラするお天氣でしたから、窓はところどころ開け放してありましたが、それをすつかり締め切つてしまうたので、部屋のなかは汗がたらたら流れるぐらゐの暑さでした。光子さんは觀音さんのポーズをするのに、なんぞ白衣の代りになるやうな白いきれがほしいと云ふので、ベッドのシーツを剝がしました。そして洋服簞笥の蔭へ行つて、帶をほどいて、髮をばらばらにして、きれいに梳いて、はだかの上へそのシーツを、ちやうど觀音さんのやうに頭からゆるやかにまとひました。「ちよつと見てごらん、こないしてみたら、あんたの繪と大分違ふやろ。」さう云うて光子さんは、簞笥の扉に附いてゐる姿見の前に立つて、自分で自分の美しさにぼうつとしてをられるのでした。「まあ、あんた、えらい綺麗な體しててんなあ。」――――わたしはなんか、こんな見事な寶を持ちながら今までそれを何で隱してなしたのかと、批難するやうな氣持ちで云ひました。わたしの繪は顏こそ似せてありますけれど、體はY子と云ふモデル女をうつしたのですから、似てゐないのはあたりまへです。それに日本畫の方のモデル女は體よりも顏のきれいなのが多いので、そのY子と云ふ人も、體はそんなに立派ではなく、肌なんかもあれてゐまして、黑く濁つたやうな感じでしたから、それを見馴れた眼には、ほんとに雪と墨ほどの違ひのやうに思はれました。「あんた、こんな綺麗な體やのに、なんで今迄隱してたん？」と、わたしはとうとう口に出して恨みごとを云うてしまひました。そして「あんまりやわ、あんまりやわ」と云うてゐるうちに、どう云ふ譯か淚がいつぱいたまつて來まして、うしろから光子さんに抱きついて、淚の顏を白衣の肩の上に載せて、二人して姿見のなかを覗き込んでゐました。「まあ、あんた、どうかしてるなあ」と、光子さんは鏡に映つてゐる淚をみながら呆れたやうに云はれるのです。「うち、あんまり美しいもんを見たりしたら、感激して淚が出て來るねん。」わたしはさう云うたなり、とめどなく淚が流れるのを拭かうともせずに、いつ迄もじつと抱きついてゐました。（つづく）

芥川龍之介を憶ふ

佐藤春夫

一

自分と芥川との交友關係は、江口渙を中間にして始つた。芥川は時に流行兒として文壇の檜舞臺へ上らうとしてゐる前後であつた。自分はその五六年以前から二三の同人雜誌などに今試みるときまりが惡いやうな幾つかの詩歌や散文の習作などを活字にして貰つた事があつて芥川の方でも自分の名前位は知つてゐたらしい。自分はその頃文學上の自信をなくし方向を見失つてゐた。さうして斯ういふ狀態の常として自分に對しても元より世上一切のことを白眼で見る惡い癖が付いて了つてゐた。芥川の文學は自分に面白くないことはなかつた。自分は彼の「新思潮」にのつけた作品を二三讀んで、此處に藝術上の血族が一人ゐることを發見して喜んだが、不滿もたしかく無いではなかつた。日本の文壇に取つては非常に目新しい作風ではあつたが、アナトール・フランスなどを少しばかり見たり聞いたりしたことのある自分はそれ程驚かなかつた。自分は芥川の作品を全部讀んでそれを批評すると同時に、自分の抱いてゐる文學論を披攊して見たいといふ氣持ちがあつた。このことを當時の友人江口に話すと江口は彼が持つてゐた新思潮の一揃ひを自分に貸してくれた。自分は一讀して自分の意見の一端を江口に述べた。江口はこの以前から芥川と交友があつたから自分のことを彼に傳へたものと見える。自分は或る日芥川から手紙を貰つた。手紙は慥、江口方氣付になつて、それがもう一度江口の手紙に卷き込まれて江口の新しい封筒で自分の手に屆いた。芥川からのその手紙は彼が一生使ひ通した松屋の原稿用紙へ書かれて一千字位はあつたと思ふ。この手紙を自分は保存してあるのだが、北海道に居る弟が持つて行つて了つてそれが仕舞ひなくしてでもしたのか、先日から催促をしてあるのだけれども未だに手元へ屆かないのは殘念である。全文を揭

げることは出來ないが、横須賀へ行く汽車の中で書いたといふ文句があつたやうに思ふ。さうして、手紙の大意は一江口から君が僕のことを批評する意志があるのを知つたが、自分の藝術は未だ未熟なものだから今しばらく批評して貰ひ度くない、」と云ふことや、また「君が以前に書いた短篇『陽光』などは僕にかう云ふ小説ならば自分にも出來さうだと云ふ暗示を與へたものだ、」と云ふことも三行ばかりあつたと憶へてゐる。また、「君のところに犬さへゐなければこちらから君を訪問したいとも思つてゐるが、」と云つて自分に遊びに來ることを歡迎してくれてゐた。――これは或は第二の手紙であつたかも知れない。第二の手紙と云ふのは自分が彼の第一の手紙に對して書いた返事に向つてまた折り返してくれたものであるが、之も北海道の弟が持つて行つて了つて今手元にない。自分の方から出した手紙はどんなことを書いたか憶えがない。慥、大正六年の一月か二月であつたと記憶する。

彼が大學を卒業したのはその前年で卒業論文は「ウヰリアム・モリス研究」であつたことは周知のことであるが、彼の話に依ると社會主義者としてのモリスや、理想を持つた事業家のモリスなどに就いては論究する暇がなかつたので、結局詩人としてのウヰリアム・モリスと云ふのが眼目であつたらしい。彼の諧謔を憶えてゐるが、詩人としてのモリスもどうやら論じ切れないらしいので、少年時代と改めやうかなと云ふと、誰かが寧ろ嬰兒時代としてはどうだね、と笑つたものださうだ。

彼に始めて會つたのは文通を始めて間もなく三月の初旬であつたかと思ふ。自分は思ひ立つて獨りで行つて見た。女中が曖昧な態度で取り次いだが、すぐに主人公自身が二階から下りて來て再び二階の書齋へ自分を伴うてくれたが、坐るとすぐに

「今朝程は有難う」

と、云はれて自分にはちよつと意味が通じ難かつた。氣がついて見ると一月程前自分が讀賣の文藝欄へ寄稿して置いた「雉子の裂肉」と云ふ小品がその朝偶然掲載されてゐて、それは芥川に獻じてあつた。月曜附錄が出た筈だから、するとその日は月曜であつたと見える。十分程話してゐたが、氣が付いて見ると芥川はへんに落付のない樣子であつた。たうとう彼は事情を話し出したが中央公論の創作の締切日がさし迫つてゐて原稿便を下に待たしてゐるといふのである。

「さう云ふ譯で氣が落付かない。何、創作を一日位遲らせるのは構はんとしても、せつかく始めて話をするのにかう云ふいら／＼した氣持ではお互に面白くない、君にも御迷惑をすると大變だからね」

と、さう云ふ意味の言葉を氣の毒さうに云つた。自分は別の日を約して歸つて來た。

その頃芥川は日本室の疊の上へ椅子と卓子とで書いてゐた。床の間の傍が机を置けるだけ別にくぼんで造られてあつた。その狹苦しい所にきつちりと體をおさめて書くのが芥川らしいと思つた。後に谷崎潤一郎がそれを見て、あんな窮屈な狀態でよく書けるもんだ、と、云つてゐたが、自分も體だけ這入るやうな小さな書齋は好きであるから、此點は芥川と似てゐる。似てゐると云へば外にも隨分似てゐる所があるらしく自分がその頃飜譯しかけた「人間悲劇」を芥川も譯しようと企てたことがあると聞いた。——いや例の彼からの最初の手紙にこの事が書いてあつたらしい。齋藤茂吉の歌に感心する點も君と同じだと云ふやうな文句もたしかあつた。少し後にピアヅレエの「アンダー・ザ・ヒル」の話が出て、あの一癖ある文章をちよつと譯して見たいやうな氣がする、と自分が云ふと、彼も以前にさう思つたことがあつたと云ふ。以前と云ふのは何れ大學を出た前後のことであらう。その外時々そんな暗號がある。後に之は文藝讀本編纂の用事で四谷信濃町の自分の寓居を訪問してくれた時、確九月の末であつたと思ふが、自分の彼に進めた夏の座蒲團が、彼の家で使用してゐるものと全く同じ品であるさうで、彼は

「變な氣がする」

と、云つた。それは支那麻で中央には濃い淺黄で壽の字を、四方には蝙蝠を染め出したものだ。芥川の云ふ所では支那商人が上海の日本領事館の爲めに輸出したものださうだが、商人は一向賣れないと滾してゐるとのことであつた。つまり芥川と自分とはその一向賣れないものを買つてゐた譯けである。その日はそればかりでは無かつた。暫時して一緒に散歩しようと云ふ段になつて、自分は着物を着換へて机の抽出しから時計を取り出すと、芥川は

「オイ、ちよつと〳〵」

と、多少わざとらしい頓狂な聲で笑ひ乍ら手を差出した。自分は自分の時計をあやしみ乍ら渡すと、彼は

「オイこれも一緒だよ」

と云つて、袂から鎖もなんにもついてない時計を取り出して自分の前につきつけた。二十圓そこ〳〵のニッケルの片側で文字板にはアラビア文字がクッキリと非常に大きく周圍一杯に書かれたものであつた。この二つの品物の暗號には自分も亦多少驚いて二人で「亦一奇」と云つて笑つた。

二

自分が谷崎潤一郎と知り合ふやうになつた機縁も亦、芥川に關係してゐる。「羅生門」が出版されるに就いて、羅生門の會と云ふものを

やらうと云ふ考へはどうも僕が最初に思ひ付いたものらしい。その以前に北原白秋の詩集の爲めに「思ひ出の會」の前例はあつたが、當時では今日のやうにかう云ふ催しが習慣的流行にはなつてゐなかつた。今日時々有名無名の著作物に關してその記念的祝宴があるのを見て自分は時々小うるさい感じがするのだが、思へばかう云ふつまらない時間つぶしの會合の習慣を作つたに就いては自分も多少その責任があるかも知れない。それは兎も角も、その「羅生門の會」の發起人として新思潮の同人や、また江口や自分達のやつてゐた同人雜誌「星座」の同人だけでは氣勢が揚らないので、鈴木三重吉氏や、小宮豐隆氏やそれに谷崎潤一郎も加はつて貰ふと云ふことになつた。それで江口と自分とが當時原町にゐた谷崎を訪うたのは梅雨の季節の午後四時頃であつた。谷崎は寢坊をしてゐたが、起きて來て自分達の用向を承諾した。「羅生門の會」は、日本橋の通りへ新築したばかりの鴻の巣で開かれた。自分は着物が無つたのでよれ〳〵の久留米絣へ袴は誰かから借りて行つた。梅雨あけの蒸し暑い晩で、この家の屋上へのぼるとなま温い風がきびしかつた。さうして遠方の燈火が初夏らしくきらめいてゐた。會が始まつて發起人の挨拶が必要だと云ふので、小宮氏などに賴んだが誰もうるさがつてやつてくれない。事實上の發起者がやるがいいと云ふので僕が立たされることになつて、よせばいいのに簡單なことだつたが何んかしやべつた。芥川は確モーニングを着て出席してゐたやうに思ふ。この家の主人は文學者を愛好してゐたので、それに花の多い季節で、卓上にはどつさりスイトピーや薔薇などが盛られてあつた。自分は迚も希望のない自分の文學的生涯を考へ乍ら、颯爽として席の中心にゐる芥川を幸福だと思つた。會の終に此家の主人が稍々大きな畫帳を持ち出して芥川に記念の揮毫を求めた。芥川は「本是山中人」の五字を六朝まがひの餘り上手でない字で書いた。――四五日前谷崎とその頃の話をして谷崎はこの會へは出席した憶えがない、どう云ふ譯だか、多分旅行でもしてゐたらしいと云つてゐたが、今いろんなことを思ひ浮べてゐる中に會場の隣室の西洋風の床の上へ手巾を敷いて、その上に膝をついて字を書いてゐる洋服姿の芥川を思ひ出すと同時に、その後に立つてそれを覗き込んでゐる谷崎も憶にゐた。さうして谷崎は散會して階段を降りて行く後藤末雄を大聲で呼び止めて、後藤が大きな體を大儀さうに階上へ上つて來ると

「君は字がうまいのだから、どうだね序に書いては」

と云ふのを、後藤は何んだつまらないとか何とか云ひ乍ら、また降りて行くのを谷崎はいたづら小僧らしく笑つてゐた。この光景は決して僕の憶え違ひではないから、若しそれが羅生門の會でないとすれば何か別の會合であつたかも知れんが、自分にはどうもその會としか思は

れない。

此の會より稍後であつたと思ふが芥川が皆を誘つた。

「谷崎もあゝやつて誰も友達なしに獨でゐるのだが時々は押しかけて行つて友達になつてやつたがいいよ、あれではいくら谷崎でも淋しいだらう」

と、云ふ意味のことを芥川は云つた。

七月始頃の雨上りの日で、自分は泥土で汚れた足袋を谷崎の玄關で脫いだのを憶えてゐる。一緒に行つたのは少くとも五人以上だつたが芥川と赤木桁平と江口と自分とそれから外の人は忘れて了つた。皆は、一度どこかで落合つてから、勢揃へをして谷崎のところへ押かけたのだ。多分芥川か誰かが谷崎を訪問する日を打合せてあつたらしい。赤木を一番はつきり憶えてゐるのは、赤木がこの席上でも談論風發したからである。當時の近松秋江や長田幹彥の文學を排斥したこの遊蕩文學撲滅論者は、白樺の人々に批評的好意を寄せてゐてその日も長與善郞の戲曲を、皆には多少遠慮をし乍ら推賞した。赤木と云へば「芥の川の知識なりけり」と云ふ駄洒落を作つたのも、彼であつたらしい。谷崎を訪問した時に芥川がどんな話をしたかは忘れて了つた。ただ武林無想庵か加藤謙を連れて偶然吾々の仲間と一緒になり、谷崎の八疊の書齋は人で一杯になつて了つた。讀賣の訪問記者であつた加藤は年少でもあり遠慮して部屋の隅に小さくかしこまつてゐた。

「まるで親族會議で野良息子の加藤君が叱られてゐるやうではないか」

そんなことを谷崎が云つた。皆は四時間ばかり谷崎の家にゐた。

十二年前の事である。

三

その間に自分は最初に同棲した女と別れて二度目の女と家を持つことになつた。最初は動坂で次に駒込神明町に住んだ。谷崎は曙町へ越して來た。自分の家は田端の芥川の家と谷崎の今度の寓居との殆ど中間位にあつた。それも多分殆ど同一直線上にあつただらうと思ふ。どちらかと云ふと谷崎の家が近かつた。さう云ふ地理的の關係もあり谷崎と自分とは思ひがけない程氣が合ふ所があつたので、半年とは經たない間に日夕往來するやうになつた。時々二人連で芥川を訪問したこともあつた。谷崎と自分とは人の口眞似をして會話をすると云ふ惡い癖を生じ、いつも自分の句調では物を言はずにいろんな共通の友人の眞似をした。上山草人の句法と語調とが基調になつたが、その合間合間に久米正雄やら、芥川のやら、或は武林などの眞似をした。久米のはその所謂る微苦笑を帶び乍ら「恐縮だな」と云ふのだし芥川のは

「例へば？」と云ふのであつた。それはその頃よく議論などすると芥川は相手の議論の混線を整理するらしい調子で屢々この「例へば？」を繰り返すので自分たちはそれの眞似をしたのだ。影で云つてゐるだけでは面白くなくなつて、仕舞には久米に向つて久米の眞似をしたり芥川に向つて芥川の眞似をする程この冗談は昂じて了つた。この無作法を久米は元より芥川も苦笑して許してくれたが、最近になつて聞く所に依ると、以前に非常に芥川と親密にしてゐた某君が後に稍々疎遠になつたのにはいろ／＼理由はあるだらうが、某君が或時芥川と議論の末に芥川からやりこめられて了つて、苦しまぎれの冗談にこの「例へば？」のやうなことをやつたらしく、芥川は無禮だと云つてそのことを外の人にまで話したさうだ。さう云へば自分も一度鵠沼でその地へ避暑してゐた谷崎の所へ遊びに行つて、そこで落ち合つた久米の眞似をあまり圖に乘つてやり過ぎ濃厚な久米の顏色を少し變らせたことがあつたやうに思ふ。思ひ出したから序に記してこゝに謝罪の意を表する。この鵠沼の時であつたが、吾々は皆海岸へ出た。皆で海に這入らうと云ふことになつたが、芥川は贊成しなかつた。自分はその頃洋服を着ると（妙な話だが）猿又を用ゐない習慣があつたので、そのことを云つて海へ這入れないと云ふと、芥川はそれではと彼のをその場で脫いで自分に貸してくれた。芥川が、佐藤は詩人にも似合はずなかく立派な體をしてゐると、その後時々言つたのは、この時に自分の裸を見て以來である。

自分は谷崎の友情に依つてどうやらかうやら文章が書けるやうになり、また世の中へも出して貰つて、兎も角も芥川の後にもついて行け、同じ仲間として議論をしたり話をしたりしてゐた。自分は無論芥川の書くものを好きとか嫌ひとか善いとか惡いとか云ふ以上に注目してゐた。自分の癖で、甚だ善くないとは思ふが、自分は誰かゞ惡いと云へばその中から善い所を發見せずにはゐられないし、また善いと云ふ人があるとその中にある缺點を數へ上げずにはゐられない。ところでその當時に於ける芥川の著作は到る所で好評であつた。自分は自然彼の作品の中から缺點を拾つては直接作者に、或は又間接にその藝術の缺點を述べることがよくあつた。自分は芥川の長所は充分に認めた上でのことなのだし、また藝術上の友達と云ふものは齒に衣被せず感じたことを云ひ合つて切磋琢磨することは當然のことだと考へるので、忌憚なくどん／＼と何でも云つて除けると云ふ風があつた。から云ふ點では昔も今も自分は一介の野人である。さうしてよく敵を作つてゐる。然し自分を殺して敵を作らないよりは假令敵は作つても傍若無人に自分を表現した方が生き甲斐があると思つてゐる。理窟は拔にして自分は言ひ度い放題のことを何時でも云ふことにしてゐる。その代り

には成べく陰口ではなく大つぴらに直接その人に聞えるやうな所で云ふやうに心掛けてゐる。このやうな自分の氣質としては明けすけに云ふと云ふことが一種の親愛の表現なのである。

芥川と自分との性格の相違は正にこの一點にあつたやうに思ふ。芥川は自分自身に對しては仲々忠實な妥協的な所の少い人であつたが、一面には他人に對してさう傍若無人に振舞へないらしかつた。例へば芥川は谷崎に向つて、

「それは佐藤の藝術はいいにはいいけれども、要するに一つ穴の貉なのだから心細い」

と、云つたと聞いた自分が、その後の機會に芥川のその說に贊成して、

「全く今のままではいけないのだ、どうかしなければ。――一つ穴の貉で」

と、言ひ出すと、芥川は

「しかし君がもし一つ穴の貉ならば、今日の文壇悉く一つ穴でないものに誰があるかね」

といふ。けれども猿又まで貸して貰ふ自分としては、どうも芥川の社交的な返事が氣に入らない。かう云ふことが時々あるので、自分は芥川の言葉に表裏があるやうな氣がしてその不服を谷崎によく洩らしたものだ。谷崎はすると自分をなだめて

「君は偏屈な一克な所があつて、田舎者だからさう思ふのだらうが、芥川は江戸つ兒で社交性があるから自然さう云ふことになるので、それは君の方が惡いんだよ。」

さう云はれて見ると自分は默つて了ふより仕方がない。その癖どうも芥川の、谷崎の所謂都會人芥川の社交性が矢張り氣に入らない。

或る時自分がポオーの「影」と云ふ小品を譯したことがあつたが、芥川が五六人の友人や後輩とこの翻譯の噂をして、間違ひだらけで迚も讀んでゐられないと云ふ意味のことを言つたとかで、それをその席上にゐた一人のおしやべりが自分の所へ來て傳へた。自分は語學に就いてはまるで自信がないので、その譯文を發表するまでに谷崎やその外の友人にも見て貰つたり、直して貰つたりした程なのだから、若し時間さへあれば芥川にも見て貰ひ度いと思つてゐた。それで芥川がさう云つたと云ふのを聞き、甚だ心配すると同時に然し自分にも多少の己惚はあるから、まさか讀んでゐられないと云ふ迄の酷いものとも自分で思ひ度くなかつた。自分はその感情を素直に述べて、近日芥川の所へ教へを乞ひに出掛けると、自分に芥川の言葉を傳へた男に言傳をした。後になつて分つたがこの男と云ふのが、まるで人格も何も無いやうな人物であつたから、その言葉をその儘に信用する譯にも行かなかつたし、

またこちらの言傳てもどんな風に傳はつたか分らないのだが、兎も角も一週間と經たぬ中に、或る夕方芥川が自分の所を訪ねた。自分は彼の顏を見ると、先日から彼の所へ出掛けやうと思つてゐたことを早速述べると、彼はちよつと早口で

「いや、實はそのことで來たんだがね、大へん失敬した。君の飜譯はゆつくり讀んで見るとなか〱惡くないんだよ。これを進呈しよう」

と云ひ乍ら彼はエドモンド・ゴスが譯したフーケの「ウンデイーネ」を懷から取り出すと自分の机の上に置いた。

此の時に限らず自分は芥川に會ふと多少氣に入らないことがあつてもすぐにそれは忘れて了つて急に親愛の感じの方が先に湧く。かう云ふと自分も卑屈な人間のやうに聞えるかも知れんが、自分は他の相手に對しては必ずしもさうではない。厭な人間に逢へばいきなり厭な顏もするし、厭でないまでも多少氣に入らない氣持を持つた相手にはその感情を顏にも言葉にもすぐに出して了つて、その後に了解して打ち解けるなり何なりするのだが、芥川の場合に限つては、彼に會ひさへすれば自分はその間だけ何の濁つた感じもなしに、素直な親しみを感じられるのであつた。今考へればそれは彼の一つの人德であつたかも知れないのだが、その當時自分にはそれが明かに一つの重荷であつた。何んだか巧く丸められて了ふやうな氣がした。さうして別れて了つてからまたしても都會人芥川の社交性を二重に呪ふのであつた。

また一度かう云ふことがあつた。それは芥川が「妖婆」を書いた頃だから、調べて見ると大正八年の秋だ。さうして今の「影」のことがあつたのもその頃だが自分は當時新潮へ月評を續けてゐた。その月評で自分は宇野浩二の「苦の世界」と芥川の「妖婆前篇」とを取り上げて批評した。「妖婆」は芥川として明かに失敗の作品であつた。自分はその批評で可なり判然とそれを說明した。その年の十二月も、さうだ大晦日であつたが、芥川は自分を散步に誘ひ出した。芥川はオーヘンリーやアブロスビアスの作品を自分の爲めに紹介し乍ら本鄕の通りを歩いてゐて夕方であつたからあそこの鉢の木と云ふ家へ行つて、夕飯を一緒に食つた。その時に芥川は話の序にかう云ふことを云ひ出した。

「君一つ友人としてかう云ふことを了解してくれないか。つまりお互に誰が見ても明かに失敗したと思ふ作品を書いたやうな場合には敬意を表し合つてその批評は緘默し合ふことにしようぢやないか。天下の誤解を避ける爲には、之は確に必要なのだよ。例へばまあ誰でもいいが、例へば水守龜之助が一生一代の傑作を書いたとする。その同じ月に谷崎潤一郎が之は一生一代の惡作を書いたとする。それを並べて一遍に同じやうに論じ出したらその批評を讀んだものは水守龜之助よりも谷崎潤一郎の方がつまらない作家の樣な錯覺に陷入つて了ふ。之は明

かに批評家としての本意ではない筈だからね、」

何處となく自分の氣を兼ねるやうな口調であつた。自分は答へた。

「全くさうかも知れん。何しろ自分はもう批評はやらん。作家の爲めにも成らず、自分の爲めにもならず讀者だつて啓發出來るかどうだか分らないのだから……」

恰度その晩であつたと思ふが自分は外に憂鬱なる事件がありへんに淋しくつて芥川と別れ度くなかつた。その感情を彼に傳へると彼はそれでは自分の家へ來いといふ。そこで自分は彼に隨いて行つた。道々自分は芥川程の人物が、敢然と孤高の生活をすることをせず身邊に澤山の同輩や後輩を集めて何か世俗的の勢力のやうなものを喜びまた藝術上の精進を一心に練るだけで充分とせずに、社交的の方法でその市價を維持しようとするかのやうに考へた。四五回位で自然立ち消えのやうになつて了つたが、その頃あつた三十會といふものなども芥川などが中心になつて、その頃の有力な新進作家を有ゆる方面から網羅して毎月第三土曜日に集會する會合だつたが、この會なども、自分もこの會員ではあつたが何となく、一種の朋黨的結社のやうな氣がしないではなかつた。自分はそれ等のことを思切つて今晩彼に話つてもよいと考へたのだ。彼の家へ行くと彼は例日ものやうにいろんな畫集などを出して見せた。その頃彼はデューラーの版畫が好きで殊にその「メランコリヤ」の隙間のない構圖を大へん好いてゐた。またルーベンスの愛好者でもあつた。前者の方は後年にはあんまり言はなかつたが、ルーベンスは後までもよく話の種になつた。その晩は吾々が座に落付くと間もなく芥川の所謂お隣の先生たる香取秀眞氏が來られた。近世の日本の美術や工藝美術の話などが出た。夏雄の話が出て芥川はこの明治初期の金工の名家の名を知らなかつた。非常に熱心な態度で香取氏の話を注意してゐた。自分は彼の好學の氣風を目のあたり見ると同時に彼がたゞ讀書に依つてだけでなく澤山の各方面の先輩と交友することで見聞を廣めてゐるのを見た。自分は香取氏の來訪の爲めに言ひ度いことを言はずに了つたが、その感情が思はず漏れて

「君には文晁のやうな一面があるね、」

と、云つて了つた。芥川は眞面に自分の顏を見つめたが、すぐに

「文鳥にでも目白にでもなれさへすればいいのだね」

と、輕く受け流した。

自分は當時非常な神經衰弱で隨つて物事をひがんで解釋してゐたかも知れない。今にして考へると芥川は見かけの颯爽としてゐたに關はらずまた議論に俊邁の氣があつたにも關はらず實際は非常に氣の弱い細心な性格であつたのを自分は氣付かなかつたのである。さうして自分は彼を一種の八方美人的な政策家だと誤解してゐた。この頃の大半

は元より自分にあるが一半は彼もこれを認めなければなるまい。

芥川は自分が彼をかう云ふ點で非難してゐることは知つてゐた。さうして或る時

「今日の文壇が政策的になつてゐるとは云ふけれども、それは何も今日とは限らない。森鷗外のやうな人でも、讀賣新聞は早稻田派になるから用心をしなければならん、と云ふやうな手紙を友人に書いてゐるんだから」

と、云ふやうな言葉でそれとなく、自己を辯護したことがあつた。

四

自分が何か書いたことがあつて故郷へ引き籠つてゐるやうな時には彼はいつも親切な友情を示した手紙をくれた。自分は痩我慢で生活に屁古垂れてゐるやうな素振も成る可くしなかつたし、また芥川に直接會ふ機會も少くなつた後にも、芥川は何人よりもよく僕の生活の樣子を呑み込んでゐるらしかつた。筆無精な自分も芥川には時々手紙を書いた。故郷にゐる時ばかりではない東京にゐてもすつかり參つてゐるやうな時に、彼はひよつくり自分で訪ねて來たり或は言傳を人に托して來たりした。自分が或る出來事で谷崎とも交友が絶え家庭も破壞して了つて東京の市中を半ば放浪するやうに生活してゐた頃、芥川は瀧田樗蔭に言傳をして、

「佐藤は僕が佐藤の好まないやうな澤山の友達を持つてゐたりなどするものだから何にかと僕まで誤解して僕にもいい感じはしないでゐるらしいのだが、その點よく言つて貰ひ度い。僕は恐らく何人よりも佐藤の才能を買つてゐるつもりなのだから」と云ふ意味を、瀧田が自分に傳へてくれた。全くその頃自分は二三年間殆ど文壇の何人とも交際しなかつた。隨つて、今までとは格別の感情を懷いた譯ではなかつたが自然と芥川に逢ふ機會もなく文通も暫時絶えてゐた。自分は瀧田の言葉を聞くと芥川に手紙を書く氣になつた。

實際自分と彼とは一面に於いて非常な親愛の感情を持つてゐ乍ら、他の一面ではどうしても融合出來ないやうな何物かゞあつた。ひよつとするとこれは吾々の二人の中に餘り共通し過ぎる點があつたからかも知れない。芥川も此の點を不滿に思つてゐた事は、震災後間もなくであつたが新潮の佐藤春夫の印象の中に、芥川が「佐藤の誤解」と云ふ文章を書いてゐるのを見ても分る。それは半分は冗談句調だけれども柔かな調子の中になかなかしつかりと抗議を申し込んだものを自分は受け取るのである。この一文は隨筆集「梅馬鶯」の人物記の中に藏められてあるが自分がそれを讀むと彼と自分との性格の相違が可なりはつきりする。此の意味でこの短い文章は自分には非常に面白い。芥川

川は自分が彼を旗幟鮮明に物を言はないと批評したことがあつたのに對してから云つてゐる。——

「僕はいつも旗幟鮮明である。まだ一度も莫迦だと思ふ君子に、聰なるかな、明なるかななどと云つたことはない。唯莫迦だと云はないだけである。それを旗幟不鮮明のやうに思ふのは佐藤の誤解と云はなければならぬ。」

この引用文は芥川の生活態度をよく語り、また自分には彼と自分との相違をはつきり示した。成る程芥川は莫迦だと思ふ君子に聰なるかな明なるかなと言つたことは一度も無かつたらう。若しさう云つたとすればそれは旗幟不鮮明どころではなくて心にもないおべんちやらを云ふことになる。芥川はたゞ莫迦だと云はないだけであると云つてゐる。芥川の云ひ分は如何にも都會人らしい云ひ分である。假令相手を馬鹿だと思つても相手を馬鹿呼ばはりすることは流石の田舍者の自分でも愼む。然し、藝術の世界などに於いては、就中、批評などでは自己を表現する必要上隨分、馬鹿だと思つてゐる人物をその通りに告白しなければならない勢ひに驅られることは屢々ある。實に屢々ある。また文字に書いた批評ではない迄も文學上の交友の場合には一般社交の場合と違つて、凡ては明けすけに自己を表現し合つた方が愉快な結果が得られると自分は思つてゐる。恐らく論理としては芥川も自分の此の說を認めるだらうとは思ふが然し都會人としての彼の社交性とまた彼の氣質の弱さとが邪魔をして、心中彼が馬鹿だと思つてゐる人物に對しても唯聰なるかな明なるかなとは云はないだけで、唯莫迦と言はないところではなく、態度に於て態度相當の人としての好意を示しそれをまた人として當然の義務であると信じたに違ひない。さう云ふ彼の見地からすれば自分の如き粗野な態度は野蠻な不作法なものとして彼をいくらかは憤らせたには違ひない。それに彼に取つては殆ど無意識であつたらうが、最初に江口から自分の話を聞いて以來自分が彼の藝術を愛顧し乍らもなか〱文句があると聞かされてゐたので、それに自分の態度が今も云ふ通り時々無禮なので、彼は何んとなく警戒すべき相手として自分を感じたのではなからうかと思ふ。また自分としては最も不遇な時代に幸福な羨望すべき同輩として目に映じた彼に對する競爭的心理が、無意識であつただけに一層露骨に現れることがあつたに相違ないと今になつて反省されるのである。

世間の人々は芥川と自分との多少相容れない感情の方面だけをよく知つてゐてその根柢に於いて案外しつかり結ばれてゐる友情と云ふものに就いては一向氣がつかないらしかつた。然し、當事者たる吾々同志はその兩方を無論よく氣付いてゐた。芥川は或る時から云つて笑つたことがある。

「おい、君知つてゐるか、君と僕とは高村光太郎に依つてレオナルドとミケランゼロに比べられてゐるが、愉快だね。――いやからなんだ、或る男が高村氏に、佐藤と芥川とはなぜああ仲が惡いんだらうと、云ふと、高村氏はおもむろに、一體昔から藝術家と云ふものはレオナルドとミケランゼロにしても……と云ひ出したと云ふんだよ。レオナルドとミケランゼロを持ち出した所が高村氏らしいね」

また或る時、

「一體吾々の感情を時々疎隔させる奴があつて困るよ。君さう思はんか。×××××などの連中がすることなんだね」

×××××と云ふのは或る男の著書の名前で、此のくだらない雜文家は、以前「影」の飜譯の出來事に芥川と自分との間へ立つてお饒舌りをつとめた男であつた。

芥川が編纂した文藝讀本に就いてその中に作品を集錄されてゐる或る先輩が著作權のことに就いて芥川の企に多少の不平があるらしかつた。若しその先輩が云ふ通りだとすると、自分もそれを聞いた以上芥川にそのことを傳へた方がいいと思つたので自分は別に誰がそれを云つたとは云はずにただしかじかの意見を述べてゐる人があつた、とだけ云ふと、芥川はすぐに領付いて、その話ならばもう聞いてゐるがその人は直接君にもそんな話をしたか、と云ふから自分はさうだと答へると、芥川は、

「やつぱり君と僕と仲が惡いと思つてゐるんで大いに君の同感を需めた譯けなんだね。有難う、何んとか一つ誤解を說く方法を講ずるよ」

と、答へた。

餘談だけれども芥川はこの先輩に對して如何なる譯か多少被害妄想的と思はれるばかりな一種の感情を持つてゐた。比較的新しいことであるが或時、

「某氏は僕のことを支那旅行で何にも仕事が出來なくなつてゐる、氣の毒だなあ、と云ひ觸らしてゐる序でに君も同樣の卷添ひを喰つてゐるぞ」

と、云ふから自分は笑つて、

「某氏も一つ支那旅行にでもなつたら仕事は出來なくなるかも知れんが、多少質のいいものは出來るでせう、と、匿名でさう云つてやるかな」

自分はたいして氣にも止めずに聞いたが芥川はそんなことを云はれてゐると云ふので餘程苦にしてゐるやうであつた。

先日彼の全集のことで小島政二郎に逢ひ彼のことをいろいろ話したが、小島は自分と芥川との間柄を爭友とも云ふ可きものだつたらうと評したが或ひはそれが適評であらう。

兎も角も一種特別な友情がからして十年近く續いてゐた。友達と云ふものを殆ど持たない自分としては、芥川は可なり重要な友人であつた。文通をしたばかりでなく、思ひ出したやうにではあつたが、芥川がわざわざ田端から或ひは四谷へ或は小石川へ出かけて、時には話し込んだり時には散歩に誘ひ出したりした。また自分を彼の家へ招いたりした。自分が故郷へ歸る前に約束をして置いて行けないことがあつた。恰度その日に行き合せた或人の話だと、今日は佐藤が來る筈だと云つて芥川はそわそわして自分を待つてゐてくれたさうである。然し家を疊んで一年ばかり田舍で住む積りをしてゐた自分は、いざと云ふ時になつて用事が續出してたうとう彼を訪ねられなかつた。自分は大阪から事情を述べて彼に違約謝罪の手紙を出した。彼の返事では少し怒つてゐたが君の手紙を見て怒りが解けた、と云ふことや、田舍にゐる間に若し著書でも出すやうなことがあれば不便だらうから自分が代つてその爲めに努力していいと云ふことなど何時もより特別に親切な文言があつた。後輩や文學青年や用事のある人は別として、同輩でお互に家を出入りするやうな友人は谷崎以外には芥川室生位よりない自分としては、芥川を何んと云つてもほんたうの友達に數へてゐたのだが、ただ恐れる所は芥川には自分などよりももつと古い親密な友人が澤山ある筈だから自分に取つて程彼に取つて自分は重要な友達ではないかも知れないと云ふ氣持がいつも先に立つてゐた。それに前述のやうな一面に於いてはぴつたりと一致し難いやうな點があり別の一面では非常にしつくりと合つてゐるだけに一層もどかしく思ふ事がよくあつた。然し、今にして回想すると自分が諦めて此友情の爲めにもう餘り努力しなくなつてゐたにも關はらず、昔は自分の方から肉薄するとそれを避けるやうな傾きのあつた芥川は、今度は進んで自分との友情を深めやうとする跡が瀝々として見えるのである。第一に自分に手紙をくれる度數が非常に頻々になつた。それ等の手紙は一二を除いて殘らず保存してあるし全集にも出るからこゝでは省略して置くが。然も自分は彼が亡くなつた後になつて始めてそれを悟つたのだから全くそのことを思ふ毎に斷腸の感がある。然し徒にそんな感傷を續說するよりも出來るだけ事實を多く書いてせめては彼の風丰を後に傳へる方がよささうである。

五

回顧すると大正六年の春から去年の七月まで滿十年の間に吾々の友情は、三つの時期に分つことが出來る。第一は大正八年の暮位即ち鉢の木で芥川が自分の「妖婆」評に妥協的抗議を申出た頃までであり第二期はその後から震災の時まで位である。これ等の時期のことは大體

今迄にも書いたが、此の第二の時期は殘念乍らその以前よりも疎遠になつて了つてゐたと云はなければならぬ。それでも今にして考へるとそれは自分の罪で芥川のせいではない。戀をも友情をも藝術上の自信をも失つて了つてゐたその頃の自分は思へば芥川の友情をも寧ろ自分の方から、消極的にではあつたが冷たく拒んでゐた傾きがある。自分は殼を閉ぢた磯の貝かなどのやうに芥川の暖い心を拒んでゐたやうな氣がする。彼は決してさういふ積りでなかつたものを自分が彼から憐まれてゐるやうな氣がして素直にそれを受け入れなかつたのだ。これ等の時期にでも芥川は實に屢々自分に友情を示して吳たのを後になつてやつとはつきりと氣がつくのだから吾乍ら、ひねくれた自分を恥かしく思ふ。瀧田樗蔭を通じて自分を勇氣附けるやうな言葉を傳へて吳れたのも、亦自分の作品「星」の譯文がアメリカの雜誌に出てゐると云つてそれを送つてくれたのも、亦自分が二三の支那の詩の譯を發表したのを見てヂューディス・ゴーティエの支那詩集の英譯を自分に吳れたのもこの時期のことである。だから彼の氣持ではこの時期に於いても前の時期とは何んの變化も無かつたのであつたが、變つてゐたのは自分の方である。然しこの自分とても特に芥川にだけ冷淡でなかつたことを思へば彼に對する申譯も立ち自分でもいくらか慰められる。第三の時期は、震災の後の年頃から始つた。吾々の友情はその以後段々純粹なものになりそれが年と共に深められやうとしつゝあつたのでさうして思ひ掛けなく絕えて了つたのだ。全く呪はれた友情の歴史だと云はねばならぬ。さうして、自分の回想の最も肝要な部分はその最後の時期の吾々の友情に關することであるのは云ふまでもない。

支那服の座蒲團とニッケルの片側時計との二種の贈合に吾々が打ち興じたことは前にも書いたが、そのことのあつた日自分は彼に誘はれるまゝに興津庵で御馳走になつた。食卓での話題は谷崎潤一郎論で終始した。また、風流では小說が書けないといふ說で我々は一致した。その歸りに日陰町の村幸へ立ち寄つた。震災の翌年の九月頃のことでバラック建の町の中は非常に暑かつた。村幸では芥川はギリシャやペルシャの陶器などを見てゐたが、その中の一つの綠色の光つた小さな壺を愛玩してゐる中に壺は不意にまるで卵の殼のやうにくしやくしやに潰れて了つた。芥川は吃驚して文字通り靑くなつた。然しその壺は元からこた〳〵になつてゐたものを裏から紙で繼ぎ合して原形を保存してあつたものであつた。さうしてこの店と馴染のある芥川の粗忽を店の主人は無論愛相よく取り做したが微細な碎らの一つ一つが見えなくなつたのを一生懸命さがしてゐた。花川は實に驚いたを連發し乍ら乾度冷汗であつたらう、ハンケチを出して頻りに額を拭いてゐた。彼は元祿古板の好色本の小册子の爲めに百五十圓(?)を支拂つた。吾々は

銀座を散歩し、震災後分り難くなつた街通りをうろつき作ら自鳴社をさがした。用事は無かつたんだけれども覗いて見度かつたのだ。そこで我々はゴヤやルーベンスを語つた。芥川がルーベンスを愛したことは前にも云つたがゴヤに對しても亦非常な愛好の情を寄せてゐた。自分はルーベンスは芥川が云ふ程よく分らなかつた。芥川は「小杉未醒はルーベンスを分らぬと、つまり油繪と云ふものが分らんことになるとまで云つてゐるよ」なぞと云つた。序にも少し繪のことを云へば、「或る阿呆の一生」の中で彼はゴッホの繪を見て以來繪畫を愛好するやうになつたと書いてあつたと思ふが、後にはセザンヌの方をより多く愛しゴッホは見てゐていらいらさせると云つたこともあつた。ずつと後には何處かで、ゴーガンの實物を見てそれ以來酷くそれを愛好し普通の繪なぞと云ふものよりも特別な生々しい實感があると云ひ、チスコートにあると云ふゴーガンのコレクションを切りに見度がつてゐた。──ゴーガンのことは、「文藝的な餘りに文藝的な」にも出てゐたと思ふが。レンブラントは生涯欽敬してゐた。

話が盡きなかつたのでその夜、我々は新橋の或料亭へ上つて十時頃までそこにゐて語つた。二人きりでさう云ふ家にゐたことは前後唯この時きりである。

この散歩の時に自分は近い中に當分故郷で住むことになると話して一度それまでに彼を訪はうと云ふ約束をしたのだ。その約束を果さずに歸つて了つたことや、またそれを謝罪した大阪からの自分の手紙に對して彼が自分にくれた手紙のことなぞは前に述べた。この頃彼は病氣で鵠沼に引き籠つてゐると云ふことが、折々の手紙にもあつたし、また東京から訪ねてくれた人の話では餘程酷い神經衰弱のやうであつた。自分の頼に應じて彼は自作の今様風の詩を三つ書いてくれた。「字はつまらんが紙は朝鮮で男女の相聞に使ふものださうだからこれだけを珍重してくれ給へ」と、云ふやうな文句の手紙が一緒であつた。これ等の手紙は前にも云ふ通り皆保存してあるが、唯湯ケ原からくれた繪葉書が一枚紛失して了つてゐる。それは自分の「砧」と云ふ小品を讀んで自分達夫婦の田舎の生活を想像してそんなものは一向羨ましくは無いよこちらにもこんな作があるがどうだと例の「沙羅の水枝に花咲けば」云々の詩を披露しただけのものであつた。自分はそれを書いてくれと云つてやつたに對してその外に別に二枚一月とは經たぬ中に書いてくれた譯である。その時自分が世話してゐた青年が自分の故郷で死んでそれに就いて自分は實に思ひがけない腹立たしい無責任な批難を受けたが、芥川はそのことでも心配して自分をなだめてくれた。自分の父は芥川の字を見て彼も芥川に書いて貰ひ度と云ふ慾望を起した。

自分は一年ばかし田舎にゐて再び翌年の十一月に上京し小石川に寓居を構へると、その年の年末彼は早速自分を訪ねてくれた。實は彼の病氣のことを知り乍ら、久し振りの上京に澤山の用事を控へてゐて、まだ彼を見舞ふこともせずにゐたのであつた。午後の四時頃に來て引止めると十一時頃まで話し込んで行つた。自分の父が彼の書を求めてゐることを話すと、彼は思ひの外喜んでそれを引受けた。畫帳へ俳畫と句とを書かうと云ふ。自分は田舎から持つて來たガラクタのやうな品物を——之は全く文字通りガラクタなやうな品物を彼に見せると、彼は一々それを取り上げて、何んか言つてくれた。それはその後半月程して室生犀星が來た時には、まるで見向きもしなかつた品物である。室生の態度を正直な露骨な田舎者らしさとすれば芥川のそれは、都會人らしいものであつた。室生の嚴格な鑑賞家らしい態度も無論よかつたが、持ち主を劬はるやうな芥川の言ひ分ももとく自分の蒐集をそれ程貴重としてゐないだけにその場合自分に取つては決して不愉快ではなかつた。實際このやうな社交的な場面に於いては芥川の態度は宜しきを得たもんであつた。その夜は堀口大學も同席であつたし、話は格別の題目でも無かつたが、病氣と云ふにも似ず快活によくしやべつた。或人がワイルドのことを「彼は話をしてゐるさへすればいつでも幸福に見えた」と傳へてゐるが、芥川に就いても全く同じことが云へる。さうして斯く云ふ自分も人が見たならば、或はその通りかも知れぬ。芥川の文章は彼の話振りの感興豐かなのに較べると、まるで光彩がない。喘ぎくで書かれてゐるやうな氣がするが、その同じことが口で言はれる時には、殆ど言葉は跳梁してゐた。病人らしい影などは何處にもなかつた。ただ、胃酸過多症だと云つて食後の柑橘の類には手をつけなかつた。

話しと云へば彼は無論藝術論かこの上なく好きであつたし、好んで書物を讀んだことから話題を得てゐたが、また世上の所謂ゴシップ風の話もしないではなかつた。いや、どちらかと云ふとなかくさう云ふ話題をも持つてゐた。自分は以前芥川としては少しつまらん事に興味を持ち過ぎると思つた程だつたが、後になると自分がさう感じなくなかつたのか、芥川もあまり世上の誰彼の噂を面白さうにはしなくなつた。さうしてその代りに古人の逸話などをよくしたが、これは芥川らしくつて、如何にもよかつた。思ふに斯う云ふ些細な方面でも彼はその教養を自分で加へて行つたんだらうと思へる。

父から芥川に賴んだ畫帖は自分がその畫帖を屆ける暇もなく彼の方から彼自身でそれを用意して賴んでから一月とは經たぬ中に屆けてくれた。繪はどうしても駄目だと云ふので元旦と四季の句とを記した掌大のものであつた。自分の父は間もなく病氣になり自分は老齡の爲

じて歸省したが、芥川はすぐに病狀見舞の手紙を父の方へも自分の方へもくれた。その自分にくれたものゝ中には、彼自身の病苦を訴へて彼自身でも長い生命でないと云ふことを訴へてゐる。言外にある感傷を見て自分は彼を勇氣付ける短い手紙を父の枕頭で書いた。「君に死なれることは君自身はどうでもいいとしても自分に取つては困ることだ。出來るだけ長生きをして自分の藝術が少しでもよくなる所を君に見て貰はなければならぬから」と云ふ意味をあつさりと自分は書いた。幸に自分の父は恢復した。芥川の畫帖を非常に喜び父は仰臥したまゝで禮狀を書き、さう云ふことで自分の父とも芥川は二三の文通をしてゐる。

その年の秋の午後芥川は自分を訪ねた。その日は來てすぐに——と云つて二時間位ゐたやうに思ふが、格別の話もなく歸つた。自分に外に出て夕飯をすることを誘ふたやうに覺えてゐるが、自分は當日無一文で外出出來なかつた。自分は殆どいつでもいろんな點で芥川の世話になりつ放しであつた。これは、芥川のみには限らないで大概の人に向つて自分はその通りであるが、芥川は無論さう云ふ點でこせこせ考へるやうな人ではなく、自分も全く呑氣でブウ〳〵しいから一向苦にもならんけれどもあんまりそれが度重づてゐた。それにその頃は自分の家庭に不和があつて芥川と散歩するとすれば晴れ三時間や五時間はしやべり合ふのだらうが、その時間さへも邪魔されさうな懼れがあつた。若しこの時一緒に散歩に出て、しみ〴〵と話し合つたとしたらもう一層早く彼との交情を深め得たであらうと思ふ。何故かと云ふのにその頃の彼は後に思へば非常な淋しさに襲はれてゐたらしいからである。——即ち一昨年の秋のことである。冬になつて彼は「梅馬鶯」と云ふ隨筆集の装幀を自分に試みさせた。自分は喜んで引き受けると、彼はその用事で我々の中に立つた新潮社員渡邊氏に托して、それ等の用件を記した手紙の末に

「渡邊君に頼んで病餘の退屈を紛らす爲めに君の退屈讀本を一冊せしめた。『妖婆』の批評は今では、ちつとも惡い氣持でなく讀める。あの作は後に『アグニの神』といふお伽噺に書き直したから序があつたら見てくれ給へ」

といふ意味の手紙をくれた。惜しいことにこの手紙は、どこかへ紛れてしまつて、未だに現はれない。自分は友人の手紙は決して捨てない事にしてあるのだからそのうちどこかから出て來るだらう。さうして後

自分に装幀をたのんだのも彼らしい友情の表現である。

に聞けば彼はこの頃、もう自殺の第一回を企てゝみてゐたらしい。

六

年を越えて、即ち去年、彼にとつては最後の年、その一月の下旬に、夕方、彼は自分の家へひよくりやつて來た。この時のことはもう一度書いた事があるから、ここでは簡單に記すけれども、これは彼が自分に示した友情の最も高潮に達したものであつた。夕刻の六時から翌朝の三時に及ぶ長い對談であつた。もしこの一夕がなかつたら、自分の彼に對する追憶を多分今日の半分も痛切でなくて濟むであらうと思ふ。

彼は「梅馬鶯」の裝幀の御禮だと云つて、エローブックの第二卷をくれた。自分がそれを喜ぶと

「我々九十年代の文學者にはとにかく懷しい本だから君なら喜んでくれるだらうと思つて」

と、云つた。また彼の極く近い身内に刑事事件の嫌疑者があつて而もその人が鐵道自殺をして了つたが爲めに、彼は病軀を以つて奔走してゐたと云ふので、彼はその事件には酷く參つてゐた。また見掛けも窶れてゐた。けれども「河童」を書き上げたすぐ後らしく新作の內容を話し出すと、段々元氣がよくなつて來た。文學論をした。彼はメリメの書翰集などから、面白い二三節を話して聞かせた。その晩彼の云つた多くのことは「文學的な餘りに文學的な」の中に澤山書かれてある。一體彼は此點も自分と同じでよく自分が行かうと思つてゐることを話して聞かせたのである。我我はお互に我我の文學的才能に就いて悲觀した。十年前の抱負が失はれたことを告白し合つたのだ。

「君は自尊心が強いから」

と、自分が云つた時に彼は強く頷いて、

「さうだよ僕は見得坊だから。見得坊だから見得の爲めには隨分犧牲を拂つてゐる。だからそのお蔭で何をし出來すか分らない」

と、そんなことをも云つた。それからまた「見得の爲めにはそんなことは云ひ度くないんだが、僕は自分の文學的生涯を君と一緒に踏み出す可きであつたと後悔してゐる。××や○○(ここで彼は一二の人名を揭げて)などと道連になつたのは間違つてゐた。」

「それは氣質から云つても、體質から云つても、藝術的見地から云つても、君と僕とは非常に似てゐるのは確なのだから。今まで一緒に踏み出さなかつたとしたら何もこれからだつて遲くは無いんだからね」

「いや遲い。もう遲い」

彼はいつに似ず非常にぶつきら棒に答へた。自分は彼と今迄もつと親密であることが出來なかつた重大な原因を自分自身のせいだと云つた。一體自分は努めて明けすけに生活しようとし乍ら、根抵にはやはり最後の一つの物をどうかすると人に打ち明けないでゐる。さうしてその爲めに自分はいつも孤獨であると云ふ犧牲を拂つてゐる。自分は

心の陰部に無果花の葉をいつもくつつけてゐる種類で、自分が此のやうな態度である限り他の人に向つて心持の全部を披瀝することを要求することは出來ない筈だつた。芥川を見得坊と云ふ意味に於いて自分も慥にさうでありさうしてまたその犠牲を拂つてゐる。思ふに芥川と自分とはかう云ふ點に於いても非常に類似してゐた。然し田舎者である自分はそのことをはつきり偏屈に現はしてゐるのに八面玲瓏な都會人である芥川は彼の性格の癖をも巧みにぼかして了つてゐた。つまり「自分は或程度までは胸襟を開きますがそれ以上は御免を蒙ります」と云ふのに對して、芥川の態度は、よく「歯に衣着せず」と前置きし作らなかなか思ひ通りに云はないこともあつた。彼の氣の弱さを自分は一概に政策的だと思つたり彼の自己韜晦をただ一種聰明なずるさとのみ思ひ込んで彼も亦孤獨の人であると云ふことを自分はほんとうに知らずに居たのだ。

「僕は君を誤解してゐた點が多々あるからね」

と、自分が云ふと彼は

「君と僕とを近づかせなかつたものは、君と谷崎との友情だよ。僕は嫉妬を懐いてゐたんだね」

彼はまた云つた。

「若し僕が死んだならば、覺えて置いてくれ給へ、誄を書くのは君なのだからね」

自分はそれに對して出來るだけ正直に自分は彼の藝術を恐く贊成することは出來ないし充分のものとは思はないけれども彼が藝術に注いだ熱情とまた何事を爲さうとしたかと云ふ意向とは充分に之を了解する積りだと答へると、彼はそれで滿足すると云つた。冬の夜は更けて行つて自分達は自分達として勢一杯な程度で感傷的になつてゐた。

彼は非常に盛に煙草を吹かし大きな火鉢のぐるりには吸殻が林立し氣が付いて見ると部屋には煙が立て籠め、障子を隙けて置いた位では間に合はなかつた。煙草の箱は何度もすぐに空になつて了つた。どんなに少く見積つてもその一晩中に彼は九十本以上は吸つてゐる。自分も煙草は休みなく吹かす方だが、彼のは餘りに極端で、どうしても健康上有害だと思つたから自分は忠告をしたが、彼は、「そんなことはどちらでも同じだ」と多少捨て身のやうなことを云つた。夜が更けるに隨つて例に依つて話に實が入つたが、此日はいつに無く話すにつれて彼は段々不幸な人になつて來て了つた。彼は愚痴つぽく彼の肉體と心理とを訴へ出した。非常に簡單ではあつたが、彼の境遇などをも述べた。今までに無い事である

「くよ〱こんなことを考へてゐるよりは何彼も簡單に片を付けて了つて、是亦生涯と云ひたい氣持になることが時々あるよ」

と、云つた言葉がへんに實感を持つてゐた。そして彼がさつき云つた「僕はこの頃自殺の方法ばかり空想してゐるよ」とか、「鐵道自殺の現場の話を聞いてこの方法だけはよさうと思つた」とか、「若し僕が死んだならば謎を解く者は……」などの常談めいた言葉も、彼の是亦生死云々の言葉と結びつくとそれは自分を不安にした。自分は彼が心の中に重大な苦しみを持つてゐるらしいことを察してそれを人に打ち明けることを勸めた。言つて了ふと云ふことは心の荷を輕くするからである。然もその時の自分の言葉は今にして考へると自責に堪えぬ程非常に無責任なものである。自分は云つた、

「然し今僕に打ち明けてくれても困る。一體僕はおしやべりで人の秘密を引受けるには適しない。それに君には此度僕よりも親しい友達がある筈なんだから」

芥川は自分の意見に對して彼の苦悶を少しづつ人に明すように努めてゐると答へた。さうして自分の不安を打ち消さうとするが如く

「さうしてもうどうやら峠は過ぎて了つたのだから、かう云ふ氣持も今に癒るよ、今に癒るよ」

彼はその身邊にゐる二三の友人や知人（それは多くは自分の未知の人であつたが）の戀愛的生活に關して話し出した。それは噂話などと云ふ程度のものではなく小說家らしい生彩ある描寫に充ちてゐた。それ等の話の末に彼は嘆息した。

「何しろ身邊にこう云ふ傑作がゐるものだから、ついうつかりその氣にはなつても我我のやうな氣の弱さでは迚もかう云ふ超人のやうには振る舞へるものでない。さうかと云つて俗人のやうにてきぱきと金錢で解決出來るやうな事件でもなければ假令さうだつたにしてもそんな氣持にはなれん。かう云ふ點××などは實際幸福だ。あゝ云ふ實際家も一面に於いては超人と同じだね」

確に彼は若し自分が敢てそれを問はうとしたならば何も彼も自分に打ち明けていいような心持になつてゐたやうな氣がする。而も自分はそれを引き出さうとはしなかつた。實際自分は交友の多い彼にはそれ等の打ち明け話を聞くのにもつと適切な人がいくらもあるような氣がしたのだ。どうやらこれも自分の誤解であつたらしい。小穴隆一は彼のいい友達で彼の晩年の生活を偕にしたのは人の知る通りである。が、年少で比較的に交友の新しい小穴を芥川がそれ程力にしたかと思ふと友達が多いやうに見えてゐても實際は孤獨に近い彼であつたかと思ふ。自分は餘りに個人主義的なあの夜の自分の言ひ分に自ら腹が立つ。腹の立つのはそればかりではない。最期にもう一つ重大なことがあるのだ。

自分は「處世術」と云ふほんの五六枚の小品を書いてゐる。それは

或時つまらない週間刊行物から頼まれてほんの責を防ぐ爲に書いたものだが芥川はそれを「退屈讀本」の中で讀んだらしい。さうしてその主人公とも云ふべき人物を彼のことだと自から感じたらしい。その晩話の途中で彼は殆ど不意に言ひ出した。

「君、かう云ふことは訊いていいものか悪いものかは知らないが若し差支へなかつたらちよつと一言漏らしては貰へないだらうか。君の「處世術」の中に出て來る人物はあれは僕のことかっ違ふか」

彼は如何にも思ひ切つて云つたと云ふ態度であつた。決して怒つてゐるのではなかつた。が、白刃を閃かしてゐるやうな意氣込みだつた。僕に向つてと云ふよりは寧ろ彼自身の自尊心に對してと云ふべきである。自分は全く參つた。と云ふのは、處世術の中に漫畫として表現したのは無論その全部が芥川であらう筈はなくまたその作中人物に對して持つてゐる感じはたとひ以前に書いたものではあつたけれども芥川に對する感情そのものではなかつた。然し、その部分の中には作者自身も書き乍ら芥川を決して思ひ浮べなかつたとは云へない部分があつた。さうして恐らく芥川もそこに注目したに違ひなかつた。この複雜した自分の感じを自分は成るべく簡單に云ひ度いと思つた。然も自分は相手の餘りにひたむきな態度にちよつと狼狽して了つた。

「そんなことを君、あれは君、架空談ではないか。さう開き直つて問はれては……」

自分がさう云ひかけると芥川は自分の言葉を引き取つて、

「困るか――濁してはくれられないか」

自分は尚は一層うろたへ乍ら言つた。

「君のやうに獨りできめて了つては困るな……」

自分は寧ろ卑屈な態度でじつと芥川の顏を眞面に見た。見ると彼の目には涙が浮んでゐた。自分は始めて彼の顏をゆつくり見たやうな氣がした。一杯涙の溜つて來た切れの長い大きな眼を美しいと思つた。自分は彼の氣魄に呑まれて了つた。

「いいよ〳〵。漏らし度くなければいいのだよ」

彼は相手をなだめるやうにやさしく云つた。さうして言ひ足した。

「僕は一種精神的のマゾヒストかも知れん。一遍散々に誰かから思ひ切つて言はれて見度いんだ。」

ちよつと沈默した後で彼は自分の感情を隱さうとするかのやうに非常に多辯になつた。眞夜中まで話に夢中になつて、湯もたぎり立つてしまひ水さしの水さへなくなつてゐたのを見出して茶を用意しようと立つた自分の素足などを見て彼は、寒中に足袋を穿かないでゐた自分を驚嘆しそれからわざ〳〵彼の足を出して足袋を脫いで見せた。毛皮の裏のついた足袋を穿いてゐた。

自分は後になればなる程あの時何故もつとはつきりと、今日では既に充分消えてゐたとは云へ以前に彼に對して持つたことのある不滿を羅列しなかつたかと自分の卑怯な態度を自から激しく批難しないではゐられない。然しまた自分を辯護する。あの晩の彼は餘りにもヒステリカルで立ち向ふにしては餘りにも痛はしかつた。然し再び重ねて思ふ。その痛はしいばかり眞劍な狀態にゐる彼だつたればこそもつと何も彼も云つて了ふべきであつた。嗟。この夜、自分は友に對しては不信であり、自分に對しては卑屈であつた。

その後廿日程して自分は谷崎に逢つた。さうしてその夜の芥川の狀態を話し自分が彼の氣魄に壓せられて怯えてしまつたことを告白した。谷崎は自分と一緒に云つた。

「さう云ふ心持で生きるやうになれば芥川もずつと偉くなるだらう」

七

その一晩のことを、自分と彼とは宛も暗の中で恥かしいことをし合つた同士が、明るみで互に知らん顏をしてゐるやうに、その後人中で二人が顏を合した時にどちらも素振りには現はさなかつた。たゞ彼の樣子はその後非常に快活になり、又仕事も何時になく捗つてゐるのを見て自分は稍安心した。さうして或る時その喜びを簡單に彼に云ふと、

「有難う、あの時君があれだけ云つてくれただけでも餘程助かつた。感謝してゐるよ。」

彼は自分の耳元で囁くやうに云つた。その後彼はもつと客觀的になつた。話の序に「何時か大いに夜更まで君を惱ました頃のことだのだ」などゝ云ふやうになつた。

二月の末に我我は改造社の講演會の爲めに大阪へ一緒に行つた。岡本の谷崎の家で一晩泊つた。岡本の梅林の中で彼は、

　　梅散りかゝる葱畑

と、云ふ句の上五字を案じわづらうてゐた。谷崎が酒を飲む爲めに這入つた酒場で下戸の彼と自分とは手持無沙汰だつた。芥川はクンメルを飲まうと云ひ出した。酒を知らない自分は彼が薦めるまゝにそれを飲んでメルヘンの味がすると云つて喜んだ。彼は自分の批評に酷く贊成した。谷崎は我我にアニゼットを飲んで見よと薦めた。それはクンメル程うまくないと云ふのが二人の同じ意見だつた。

「クンメルをメルヘンの味ひとすればこれはたゞリリカルなだけだ。」

さう云つたのは芥川であつたか自分自身であつたか忘れて了つた程全く同意見であつた。この大阪行とどちらが先であつたか、とにかくやはり同じ頃にやはり改造社が招待した觀劇會の歸りに自分は卑見

彈の自動車に誘拐されて、吉原の引手茶屋へ連れて行かれた。別の車の中に芥川もやはり醉拂ひ達のポン引にかゝつた仲間だつた。自分と彼とは隣り合つて坐つてその場を逃出す時期を見はからつてゐた。外の人々は殆と皆酒を飲むので大分醉態を演じてゐた。芥川は自分に囁いた、

「君は酒を飲んで踊る氣持になれると思ふか、まあ醉位ならば微吟するかも知れないが」

「迚もく、踊るなどは思ひもつかん、歌たつて醒めてゐたら却つて歌つて見るかも知れんが醉拂つては迚も駄目だね。」

「さうか、」彼は笑ひを浮べ乍ら「所詮吾等は郊原だや」

佐々木茂索や芥川と一緒にその場を拔け出した自分は一旦家へは歸つたがすぐに再び帝國ホテルに在留してゐる谷崎を訪ふ氣になつた。行つて見ると谷崎は留守で、そこに宿を取つた佐々木夫妻の部屋に芥川が來てゐた。芥川は自分の借りた一室へ來て二人でしやべり出したが我々の聲が大きかつたので隣室の宿泊者が怒つて向ふから壁を蹴つた。もう一時であつたのだから當然のことである。我々は仕方なくサルンの焚火してゐるストーブの前へ腰掛けた。間もなく留守だつた谷崎が歸つて來てやはり焚火の前に坐りその中にこれも引手茶屋にゐた連中の一人である久米がひよつくり表のドアを探してすぐに我々三人を見つけた。この焚火はすぐ玄關側にあつたからである。吾々の四人はこの一晩中段々勢の衰へて行く焚火の前で久し振りに藝術談で夜を徹した。どんなことを言ひ合つたかは頭が疲れてゐたからその詳細既に思ひ出せなかつたが、自分と芥川とは時々外の人達よりも異見の合ふ所が多かつた。例へば谷崎はウエデキントを認めなかつた。自分は大いた認めると芥川は「彼の藝術には奇峭で孤高の點がある」と云つて自分に賛成した。自分がトルストイを餘り推服しないのに反對して谷崎と芥川とは同じ意見であつた。然し芥川は自分がトルストイを偉大と思ひ乍ら好かない理由をすぐに了解した。我々この四人の藝術觀或は藝術そのものを較べて見ると久米と自分とは互に一番遠距離で恰度その中間の二階に谷崎と芥川とがゐるやうな氣がする。つまり久米と谷崎とは一定の距離を隔てゝ隣合つてゐるし、それと殆と同じ位の距離を隔てゝ谷崎の隣りに芥川がゐるし、また同じだけの距離を隔てゝ別の端に自分がゐるやうな氣がする。自分は交友の上に於いては谷崎とは非常に密接ではあり、藝術の上でも血族には相違無いが單に藝術の距離の近似に於いては谷崎よりも寧ろ芥川にずつと似てゐるやうな氣がする。この一晩の偶然な會合を芥川は非常に喜んだ。それ等の對話が文字にすることも出來ず消えて了ふのを非常に惜んだ。さうしてその翌晩その時の討論を試に我々は思ひ返さうとしたのだが、

今も云ふ通りもう些とも衰へてはゐなかつた。それ程頭が疲れてもゐたしまた話題が豐富でもあつたのだ。

この頃自分はちよつと外國へ旅行したい考へがあつてそれを聞いた或る人が親切に自分の爲めに物質的の便利をはかつてやらうと申込んだ。自分は自分だけでなく道連があるといいと思つた。その道連の一人として芥川を數へ上げると自分の後援者は芥川の爲めにも旅費を支出していいやうな話であつた。この事を芥川に話すと、彼は非常に乘り氣になつた。露西亞を通つて佛蘭西からスペインや伊太利の方を通りエジプトから土耳古近東の諸國若し出來るならペルシヤなどへも行つて見たいと云ふ點で彼と自分との意見は殆と全く一致してゐた。後に聞けば彼は某實業家が事業上の視察の目的で派出したアマゾン河流域の踏査團に投じ度いと云ふ希望も持つてゐたさうである。彼が愛好したアンブロース・ビアスのやうに行衞不明になつて了ふと云ふやうなロマンテツクの考もあつたかも知れん。

春の終りに書肆アルスが兒童文庫刊行の計畫でその一册として芥川と自分とに支那童話集を執筆させやうと云ふので下相談があつた。ほゞ承諾した上で芥川は打ち合せの都合もあるし一度彼の家まで自分に來ることを希望した。さうしてアルスの編輯員を使ひとして自分を迎ひに來さした。用談は簡單に濟んで編輯上の意見として芥川は物語りを年代的に編纂して見たいと云ふこと、出來るだけ早く原物を纒めやうと云つた。後で思ふと出來るだけ早くと云ふことを力說してゐた。都合に依つては二三週間程、何處か温泉へでも出掛けてそこで一緒に仕事をしていいと云つた。二人で何處かへ出掛けると云ふことはその前にも云つてゐた。自分は四五年前に支那の詩を譯しようと思つて、然し自分では譯するのに適當の詩を選び出せないし、また切角選び出してもそれが難しかつたら中絶したりまた出來て見ても果して出來榮がいいか惡いかも心元ないので趣味の似通ふた芥川に相談して貰へるといいと云ふことを間接に申込んだことがあつた。芥川はそれを覺えてゐて何處か温泉宿ででも支那詩集をやることにすれば滯在の費用位は出るし二人で遊べると云ふ考へがあつた。それを近年になつて自分に勸めたのだが自分は機會を得ずにゐた。支那童話集の話に就いて芥川は矢張りこの詩集と同じやうな方法を考へたのである。然し自分は家庭上の都合でちよつと當分出かけられさうもなかつた。アルスの編輯者は早く歸つて了つて――（こゝまで書いて來てちよつと不思議なことに芥川はその日自分に火燵の中へ這入ることを勸めたのを思ひ出すが、若しそれが外の時と混同してゐるんでないとすればこれは春の末ではなくて春の早い頃だつたかも知れぬ）兎もかくも二人切りになつた時に芥川は自分に云つた。

「ちよつと君に聞いて置いて貰ひ度いことがあるが、友達として相談をするがね。僕は菊池がアルスと似たやうな、と云つてゐるで同じでもないやうだが、ともかくもまあ少年物のシリーズを作らうと云ふので僕も編輯者の名を貸せることになつてゐる。所が今のアルスの所だが本來なら僕は引受けない方がいいのかも知れんが、君も知つてゐる通りアルスは僕に取つては最初に「羅生門」を出してくれた關係もあり、今まで頼まれるだけのことは何一つ斷らなかつたのだ。今度もどうも斷り度くないのでこの點を君含んで置いてくれ給へ。何れは同じものではないんだから差支はないと思ふが後になつて君がへんに思はんとは限らんからね。」

そんな話もあつた後で彼は澤山の愛玩品を取り出して自分に見せたり説明したりした。(さうだやつぱり春の初であつた、彼は二階から離の書齋の方へ下りて行つて品物を持つて來た。さうして「離れは君にはまだ見せないかね。そこは冬は寒くつてね、」と云つたものだ) 彼は三時間はかりもそんな品物を見せたり話たりして自分には珍しい分銅の下つた自鳴鐘の掛時計を柱からはずしてくれた。またルーベンスの大きな三色版、何かのデテールであつたと思ふが、それを見せて

「僕は谷崎潤一郎にルーベンスになることを要求し度いんだ」

などゝも云つた。取り擴げた品物を片付け、元の場所に、ちよつとしめやかな口調で、

「かう云ふ物などをもて遊んで、雅客を迎へるのも僕に久し振りだなあ。もう何年振りかしら」

夕刻自笑軒で御馳走になつたがその時には

「いま〳〵しいが關西趣味の藝術にはちよつといい所があるな」

何故、自分は彼と一緒にあの時旅行して置かなかつたらう!

八

六月、新潮合評會席上で芥川は彼の傍の椅子を敲いてそこへ自分を坐らせた。珍らしく彼はモーニングを着て白いネクタイには綺麗な蝶の刺繍があつた。古い支那の布である。血色は悪くなかつたけれども思ひ做か今思ふと彼は何時に似合はず見當はづれの議論をしたやうな氣がする。またその歸りがけには田端の彼の家と目白坂の自分の此家とを同じ方角だと云ひ出してどうしても同じ車で歸らうと云ふのである。さうしてたうとう彼は自分を送つてやると云つて自分の車に乘つた。片上伸は之は大塚で自分とは同じ近い方角だ。三人は車の中で餘り話さなかつたがたゞ自分は今まで同じ席上にゐた正宗氏のことを思ひ出してその人が自分には分り難いと云ふと、芥川は

「あの人は非常に弱い人で人生が恐しいからいつも人生に對して白し

牙を出してゐるのだ。僕には實によく分る」

と云つた。果してそれが正宗氏をよく解釋してゐるかどうか知らないが少くともその言葉は芥川自身を可なりよく語つてゐるように思ふ。自分は車が自分の家の近所へ來た時落し合つてゐるらしい芥川を自分の家へ誘ふた。

「それでは一度君の新しい家も見て置くかな」

彼はきつかり一時間自分の家にゐて恰度その頃精神に異常を來してゐた我々共通の友達のことを非常に委しく話した。おかしい位その話に興味を持ち、殆ど自分には何も話させず、また外の話題は一つも言はなかつた。歸りがけに自分がその頃八釜しくなつてゐた小學生全集對兒童文庫の競爭戰で彼も迷惑してゐるだらうと思つたのでちよつとそのことを云ふと、彼は門を出ながら、

「さう〳〵そのことでも君に云ふ可きことがあつたな」

さう云つて車に乘つた。

その翌日當時自分の家に來てゐた上海の文士田漢の爲めに改造社の山本社長が一夕の宴を張つてくれたので芥川は自分で希望して飛入の客としてその席上へ來た。それ等のことは「人間事」と云ふ自分の記錄的小說の中に記した。赤坂の樹亭の玄關で別れたのが最後であつた。この夜は夏羽織に袴をつけて白扇まで持つてゐた。瀟洒たる面影が今も自分の眼前に消えない。自分は彼の思ひ出に最後に會つたこの晩彼が着てゐた着物を片身分けとして貰ひ受けた。支那趣味の古風な細い縞で泉鏡花をして抑いくらするかと云はせたものだ。當夜笑ひ乍らの芥川の話では反六圓とかだと云ふ話であつた。六月に改造社は文士を各地方へ講演させた。自分は九州に行くことになつてゐた。芥川は北陸か北海道に行くことになつてゐた。彼は自分と同じ所へ行き度いと云つて自分をして改造社へその交渉をさせようとしたが、もう決定して了つてゐた。七月自分は上海から杭州南京揚州などの地方を旅行した。芥川の舊遊の入地であり自分はいつも彼のことを思ひ乍ら歩いた。二十八日に西湖を見て歸ると不意に上海の人から彼の死を教へられた。當時は信じなかつたが思ひ合して頷けるやうな氣がした。

歸つて來て彼の家を訪ね細君からいろんなことを聞いてゐる中に、自分が海外へ彼を誘ふたのは彼の行詰つてゐる生活を救ふ爲めに自分がわざ〳〵工風したものらしいと言つたと云ふことを聞き、自分が抱いてゐた友情よりも彼が自分に想像した友情の方がどれだけ深かつたかを思うて自分は胸が切なかつた。

故人の宅への幾度目かの訪問に一番幼い子供は自分を見乍らその母に自分のことを亡くなつた父に似てゐると云ふ意味のことを云つた。自分はその直ぐ後で自分の妻を彼の靈前に案内し自分もそこへ額付く

と淚が出た。その少し前に全集の講演旅行で關西へ行つて大阪から京都までの汽車の中で齒車を讀み淚がにじんで來たこともあつたが、淚が落ちたのは、靈前で始めてであつた。齒車と云へばあの作品はアルス兒童文庫のことで自分が訪ねた時彼が机邊からその最初の一章を取り出して自分に見せたものだ。その時題は「夜」と書いてあつた。その上に二三字消した跡があるので自分はそれを見てゐると彼は題が氣に入らぬかと云つた。さうして消してあるのは「東京の夜」だと云つた。東京の夜は氣取り過ぎるし「夜」ではあまり個性がなさ過ぎるので自分は「齒車」と云ふ題を薦めて見た。彼は即座にペンを取上げてさう直した。さう云ふ因緣もあるせゐか自分はこの作を彼の作中第一のものと思つてゐる。

彼の遺書以來彼の死因の中に女人のゐることは人の知る通りであるが、さう云ふ問題に就いて自分は何にも知らない。たゞ興津庵から村幸へ行つた日散歩の間に自分が宅では書けない爲めに『賣笑婦マリ』の書出しを山ノ手の或る小さなホテルで書いた話をすると、彼はそのホテルのことを細々と聞いた後に、

「その家はランデブーには適しさうだらうかね」

と、云つたことがあつたのを思ひ出す。彼が何時からどう云ふ理由でそんなに陰鬱になつたか自分は知らないが、『支那游記』の中には友人ジョンスと共に人生は薔薇を敷いた道であるとも云ひまた辜鴻銘を訪ふた歸りには辜鴻銘の老を憐れみ彼自身の若さを意識してゐる、あの時の中には少くとも彼の憂鬱の影はまだ萌してゐないのだが……

(彼の一周忌を前にして、六月九日)

追記。短かく書かうと思つて彼の藝術に就ては初からあまり書かなかつた。それでも豫定の倍の長さになり、しかも校正を見ながら、たくさんの書きおとした事を思ひ出した。仕方がない。今はただこの不幸な友情の年代記だけを讀んでもらふ。

編輯だより

◇北方軍閥沒落して一先づ南方新軍閥が北京を占領した。しかしわれ／＼はこれを以つて直ちに南北が統一されたと斷言するの、尚早なるを思ふ。

◇それはどうでもよいとして我々の切望にたえないのは日支紛爭の一日も早く除却されることだ。我々は玆に重ねて云ふ、東洋の大局の爲に忍べるだけ我慢して手打としたいと。我の寛容は我の尊嚴を冒さるる所以ではない。田中內閣はせめてこの一事だけでも手際よくまとめて彼我の交誼を舊に復すべき義務がある。

◇「マルクス、エンゲルス全集」第一卷漸く出來、第一卷は九百四十二頁の堂然たる大册となつた。書翰集全部の譯載といひ、初學者にも解るやうに題目ごとの解題掲載といひ、一卷づつの通解といひ、マルクス、エンゲルス傳の附錄添付といひ非常の好評で第一回配本に不足をつげるやうな狀態だ。

◇我社の全集は系統的に長い準備の下に刊行されたものだ。第二回の內容見本を見られた方は內容がいかに完備せるものであり、そして一流の譯者が一卷毎にチヤンと決定して陣容の一糸亂れぬのを看取さるるだらう。

◇全集中の全集としてソビエツト國立刊行のそれと共に完全といひ得ると思ふ。そして、一人一人の譯者がいかに飜譯界の精英であることは讀者各自が均しく認めらるる所だ。試に譯者の一々についていかに信用のある人と實力のある人を集め得たかを喜んで下さい。

◇そして本社の出版良心は本全集を以つて完全な全集たらしむべく努力の總てを傾ける。この點も親愛なる讀者は我々を信じそして熱烈に支持して下さることと思ふ。

◇さきほど募集した懸賞創作の「逆外作作」は帶には短し襷には長しで掲載を見合はせておる。もう少し檢討していいと確信のついたものがあつたら登載する。

◇來るべき懸賞創作は出來るだけ構想の雄大なもの、新鮮味のあるもの、そして專門の知識的傾向あるものなぞもほしいものだ。

◇近く本社から浮世繪全集を集大成した「日本美術全集」が出る。また「上田敏全集」の一卷は漸く出來上つた、近來にない裝幀が立派で氣持のいい全集である。

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	五拾錢	參錢
半ケ年	參圓	郵稅不要
壹ケ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和三年六月十八日印刷納本
昭和三年七月一日發行

(五拾錢)
(郵稅貳錢)

編輯兼發行兼印刷人 東京市芝區愛宕下町四ノ六 山本三生
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ六 改造社
振替東京 八四〇二
電話芝(43) 一一三一 一一三二 一一三三 一一三四

犠牲版本日發行

―申込順序により配付―

第一巻は五百頁の公約を倍加して九百四十二頁の尨大な犠牲版となつた。その内容は第二回内容見本に見らるる通りである。しかし本社の出版良心はただにマルクス、エンゲルス文獻の翻譯だけを印刷して讀者に配付するのは難解でもあるし趣味少きことでもあるので各題につき詳細なる解題を附したその上重ねて一巻ごとに大體の通解を附してその巻の使命と內容とを明かにした。解題と翻譯は平易と流暢とを兼ね大衆のたれにもマルクス學が呑込めるやうな至れり盡せりの心づかひを拂つた。

第一巻の大附錄

その上第一巻にはマルクス、エンゲルス全集の序論をなす、リヤザノフ著の「マルクス、エンゲルス傳」を附錄とした。佛つくつて魂いれずの出版界にこれほどの心やりをするのには異常の苦心と多大の犠牲が拂はれているのを諒として貰ひたい。

書翰集全部の飜譯

―第一回内容見本と第二回見本―

「書翰集」は「資本論」と共にマルクス、エンゲルス全集中の最も大きな部分の頁をしめる。この書翰集（五〇〇頁分の五冊位）の全部の飜譯はなか／＼の至難であるが我社は廿巻のうちに全部を譯載することになつた。從つて一巻の頁數も一冊につき百頁乃至四百頁の增加を見る。これ實に出版界の一大犠牲である。從つて第二回內容見本は完璧のものだ。

趣味多き全集

尙本社はマルクス、エンゲルスに關係ある寫眞を蒐集して各巻の巻頭をかざり趣味多き全集たらしめんと思つておる。この點他の追隨を許さないものがある。現代に生くるものは本全集を讀まずしては生きられない、一切の社會思想と社會運動はすべてが本全集に淵源し、世界觀の根柢としてマルキシズムを體得し、そして世界の諸現象を理解する武器としては本全集の外にない。敢えて大衆諸賢が本全集を支持さるることを切望してやまない。

『マルクス＝エンゲルス全集』總內容

第一卷　マルクス、マルクス＝エンゲルス

學位論文（マルクス、一八四一年）　服部英太郎

『アテネウム』（一八四一年）より

詩二篇（マルクス）　河野密

『アネクドータ』（一八四三年）より

プロシャ新檢閲條例論（マルクス）　後藤信夫

シュトラウスとフォイエルバッハとの判官としてのルーテル（マルクス）　服部英太郎

『ドイツ年誌』（一八四二年）より

ブルーノ・バウエルとグルッペ博士の大學敎育の自由（マルクス）　石濱知行

『ライン新聞』（一八四二―四三年）より（其の一）

第六回ライン州會の議事（マルクス）
出版の自由と州會議事の公表とに關する討論
中央集權問題（マルクス）
ケルン新聞第百七十九號論說（マルクス）
歷史法學派の哲學的宣言（マルクス）　楢崎煇

共產主義とアウグスブルグ一般新聞（マルクス）
第六回ライン州會議事（マルクス）
――木材竊取法討論――

『ヘーゲル法律哲學批判』より

ヘーゲル國法批判論（マルクス、一八四三年）　服部英太郎　新明正道

『獨佛年誌』（一八四四年）より

ルーゲに與ふ（マルクス）　嘉治隆一

ユダヤ人問題に就て（マルクス）　石濱知行

ヘーゲル法律哲學批判序論（マルクス）
『パリ・フォルウエルツ』（一八四四年）より
プロシャ王と社會改良（マルクス）　嘉治隆一

神聖家族（マルクス・エンゲルス、一八四五年）……河野密

第二卷　マルクス、エンゲルス

『ライン新聞』（一八四二―四三年）より（其の二）

ハノーヴァーに於ける自由主義的

第四巻　マルクス、エンゲルス

ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日（マルクス、一八五一年）
革命及反革命（マルクス＝エンゲルス、一八五二年）　後藤貞治

ケルン共産黨事件の闡明（マルクス、一八五三年）
（序文）共産主義同盟の歴史（エンゲルス―一八八五年）
（附錄）共産主義同盟に對する中央局の告示（マルクス―一八五〇年三月）
同告示（マルクス―一八五〇年六月）　平井新

高義なる騎士（マルクス、一八五三年）　有澤廣巳

イギリス通信（マルクス―一八五二―五三年）　交渉中

東方問題（マルクス、一八五三年）　石濱知行

第五巻　マルクス

支那印度論（マルクス、一八五三年）　佐々弘雄

パーマーストン（マルクス、一八五三年）
露土戰爭（マルクス、一八五三―五四年）
ドナウ公領纂奪（マルクス、一八五四年）　住谷悅治

スペイン革命（マルクス、一八五四年）　堀眞琴

クリミヤ遠征（マルクス、一八五四年）―

イギリス軍事行政（マルクス、一八五五年）
聯立内閣の倒壞（マルクス、一八五五年）
パーマーストン内閣（マルクス、一八五五年）　松澤兼人

パーマーストン傳（マルクス、一八五五年）
汎スラブ主義（マルクス、一八五五年）
議會内外に於けるイギリスの批判（マルクス、一八五五年）
ジョン・ラッセル卿（マルクス、一八五五年）
イギリス軍隊（マルクス、一八五五年）　佐々弘雄　蠟山政道

カルスの沒落（マルクス、一八五六年）　堀眞琴

一八五五年に於ける一つの示威運動に就いて（マルクス、一八五五年）　龜井純

ホーヘルツォルレルンの神權（マルクス、一八五六年）　山田盛太郎

十八世紀外交史の内密暴露（マルクス、一八五六―五七年）　青野季吉

オーストリヤの海外貿易（マルクス、一八五七年）　中西寅雄

第六巻　マルクス、エンゲルス

七〇年）

國際勞働者協會總務局の告示（一八七〇年）

國際勞働者協會總務局の宣言（一八七〇年）

國際勞働者協會總務局よりヨーロッパ・アメリカの全支部へ（一八七〇年）

國際勞働者協會總務局より會員への對普佛戰爭告示（マルクス、一八七〇年）　松下芳男

釋明（「パリ誌」に對する、一八七一年）

國際勞働者協會の一般規則及管理規定（一八七一年）

國際勞働者協會總務局の聲明（一八七二年）

國際勞働者協會總務局の決議（一八七二年）　岡田宗司

其他

ジョン・ステューアート・ミルの經濟學說に對する一勞働者の駁擊（マルクス＝エカリアス、一八六八年）　鹿島昂

フランスに於ける内亂（マルクス、一八七一年）

序文（エンゲルス、一八九一年）　山川均

ルールタールに於ける罷業鑛山勞働者に與ふ（マルクス、一八七二年）　波多野是也

アムステルダムの國民大會に於ける演說（マルクス、一八七二年）　後藤信夫

政治上の不偏不黨主義（マルクス、一八七三年）　服部英太郎

バクーニン著「國家中心主義と無政府」の評論（マルクス、一八七四年）　大森義太郎

國際勞働者協會に對する陰謀（マルクス＝エンゲルス＝ラファルグ、一八七三年）　塚本三吉

ゴータ綱領批判（マルクス、一八七五年）

序文（エンゲルス、一八九一年）　堺利彦

『宣言』ロシャ版第二版への序（マルクス、一八八二年）　土屋喬雄

ポーとライン（エンゲルス、一八五九年）

サボア・ニースとライン（エンゲルス、一八六〇年）　石濱知行

プロシャ軍事問題とドイツ勞働黨（エンゲルス、一八六五年）

資本論第一卷批評（エンゲルス、一八六七　山川均

第一七卷

一八九一年）　大塚金之助

ドイツに於ける社會主義（エンゲルス、一八九二年）　加田哲二

辯證法と自然（エンゲルス、一八七二—一八九二年）　平野義太郎・有澤廣已

『猿の人間化に於ける勞働の寄與』　石濱知行

マルクス小傳（エンゲルス、一八九四年）　嘉治隆一

新に發見せられたる群婚の一例（エンゲルス、一八九三年）　石濱知行

資本論第三卷紹介（エンゲルス、一八九五年）　高畠素之

原始キリスト教史考（エンゲルス、一八九四年）　石濱知行

佛獨に於ける農民問題（エンゲルス、一八九四年）　宗道太

ヨーロッパは軍備撤廢をなし得るか？（エンゲルス、一八九四年）　高井三郎

資本論第三卷補遺（エンゲルス、一八九五年）　高畠素之

其他——將來發見せらるべき論文

附錄

マルクス＝エンゲルス著作年表　向坂逸郎

第一八、一九、二〇卷

伯林大學在學中父へ送れる書翰　福田徳三

マルクスとエンゲルスとの往復書翰　大塚金之助

ハイネに宛てたる三つの手紙
フライリクラートに宛てたる手紙
ヴェラ・ザスリッチに宛てたる手紙
クーゲルマンへの手紙
ロシヤの經濟狀態に就ての手紙
ラサール宛てのマルクス、エンゲルスの手紙其の他
ゾルゲ宛のマルクス、エンゲルスの手紙
母及び兄弟への手紙
アメリカの一社會主義者への手紙
ルードルフ・マイヤーへの手紙（未來國の一片）
ベルンシュタインへの手紙
ベーベルとマルクスに就ての手紙
フランス勞働黨に就ての手紙
メーリング宛の手紙
コーンラト・シュミット宛の手紙
ベッカー宛の手紙（忘れられたる手紙）
政治的遺言其の他

三輪壽壯　石濱知行　山村喬　石川準十郎　山田盛太郎　淺野正一　細野三千雄　堺利彦　杉野忠夫　榎本謙輔　猪俣津南雄　笠信太郎

組方見本

然しながら、階級の區分が斯の如く歴史的に多少の理由を持つとしても、それは只だ或る期間内に於いての事であり、或る社會條件の下に於いての事である。それは元來、生産の貧弱に基づいたものである。從つてそれは、近代生産力の充分なる發展と共に一掃されるであらう。そこで實際上、社會階級の廢止といふ事は、歴史進化の程度が、或る特殊の支配階級の存在を必要とせぬばかりでなく、何らの支配階級の存在をも必要とせぬ事になり、從つて階級別その者が既に時代錯誤となり、廢物となるに至つた事を豫想するものである。故にそれは又、或る特殊の社會階級が生産機關および生産物を領有し、從つてそれと共に政權を掌握し、文化を獨占し、智識的指導の地位に立つ事が、單に無用であるばかりでなく、經濟的、政治的、及び智識的に、進歩の妨礙であるといふ程度の、生産の發達を豫想するものである。

十一　自由の國

斯くの如き時は今正に到來している。ブルジョアジーの政治的および智識的破産は、彼等自身に取つても、もはや殆んど秘密ではない。彼等の經濟的破産は既に十年目毎に規則正しく繰返されている。社會はその恐慌の來るたび毎に、自分で使用する事の出來ない、自分の生産力と生産物とに壓せられて窒息し、そして、生産者が少しも消費物を持たぬ、それは消費者が無いからだといふ、馬鹿げた矛盾の下に、ヒヨロ〳〵と立つている。そこで生産機關の膨脹力が資本家的生産法の束縛の綱を切り棄てる。この束縛から脱する事は、將來に於ける永續的な、不斷に急速に前進する、生産の發達、從つて又、生産その者の、實際上無制限な増大に對する、唯一の豫備條件である。まだそれだけではない。生産機關の社會的領有は、現在行はれている生産上の人爲的制限を除去するばかりでなく、又實に、現在に於いて生産の不可避的隨伴物であり、殊に恐慌の際、その頂點に達する所の、生産力および生産物の、積極的の浪費と破壞を防ぐ事となる。猶又、その場合、今の支配階級および其の政治的代表者等の、馬鹿々々しい奢侈贅澤をやめさせる事に依つて、生産機關および生産物の多量を、社會全體の爲に殘す事になる。此に於いて、社會の全員が社會的生産に依つて生活を保證される事の可能性、――而もその生活が、物質的に充分豐富であり、更にその豐富が日々に増大するばかりでなく、猶ほ全員の肉體的および精神的能力に對し、その完全に自由なる發育と活動を保證する事の可能性――が、今や初めて生じている、現にこゝに生

改造社版「マルクス＝エンゲルス全集」に對する

賞讃と反響!!

文字通り完全な『全集』

山川均

今度の大増補により、マルクス＝エンゲルスの遺業は、その斷簡『零墨』にいたるまで、少くとも現在吾々に調査の手段の存する限りは完全に網羅し盡され、文字通りに完全な『全集』として世界に誇り得るものとなつた。この事實は、從來現はれてゐるマルクス＝エンゲルスのいかなる著作目錄と比較して見ても、一目瞭然だと思ふ。

最も廣汎な範圍に亘つて反譯の適任者が求められ、有ゆる方面において輝いてゐる最善の能力を、この全集の焦點に集中し得たことも、この全集の成功を、出發點において、決定的に定めたものだと言ひ得られる。

然しながらこれだけの能力と精力とを以てしても、『資本論』三卷を含む全內容を、二ケ年間に忠實に譯了することは、到底望まれない。幸ひにこれだけの全精力は、擧げてこれを『資本論』以外の部分に傾倒し得られるから、綽々たる餘裕をもつて、各々の擔任者は、滿足すべき完全な反譯を期し得ると思ふ

私はこの全集の完成は、量においても質においても（それが國家的事業として遂行せられてゐるロシアの場合を除いては）全世界の出版界に聳立するものだと考へる。そして特に吾國の思想上に於ては、劃期的意義をもつことを確信する。

改造雰圍氣の醞釀する所

堺利彥

『改造』の讀者と、執筆者と、經營者と、これを漠然たる一個の自然的大集團と目することが出來る。この大集團は實に、日本の現代に於いて、特殊の意義を有し、特殊の役割を演ずるものである。『日本』の發生の如きは、即ち其の意義の最も奇拔にして優秀なる現はれの一つである。殊に『圓本』の發展が遂に『マルクス・エンゲルス全集』を見るに及んで、その役割の最も重大にして深刻なる

ものの一つに到達したのである。これこそ實に改造大集團が醞釀した雰圍氣の間に於ける、自然の發生物、當然の産出物であつて、集團を構成する三要素が、それぞれの親愛と、歡喜と、滿足とを感ずべき、絕好の對象である。微々たる私の一身も亦、幸ひにして此の大事業の一端に參加するの光榮を有することを、玆に深く感謝します。

改造社の率先的計畫

大森義太郎

この一兩年來の出版物において、マルクシズムに關するものの占める量は、非常なものである。レーニン、ブハーリンはもちろんのこと、實に些細なものまでが譯出された。しかし、誰れしもが感じてゐたのは、何か不足したものがあるといふことである。そしてこの不足こそ『マルクス＝エンゲルス全集』であつた。いま、改造社が、率先してこの不足を充してくれるといふのは、マルクシストにとつてはもとより、マルクシズムに興味をもつ者にとつてもまた、大きな喜びでなければならぬ。

この『全集』の仕事は決して容易でない。古典的なものであり、譯すに困難なものであるから、譯者にその人を得なければならない。『全集』といふからには少くも今日手にしうるものを掲げ盡さねばならない。それは日本においてはなかなか骨の折れることだ。わたしは改造社がこの困難を見事に切拔けられることを希望する。また從來の事業から見て、そのことを我々は期待していゝと思ふ。

全著作が包含されて

石濱知行

マルクス主義に意義を認める人にとつても、又マルクス主義を難んずる人にとつても、本全集の發刊は大に意義のある事である。けだし前者にとつては更に全班に亙つてマルキシズムの核心をよく把握するために。又後者の大部分はマルクス・エンゲルスの著作全體を讀まず又讀み得ざるものであるから彼等に全部に亙つての著作を讀む便宜と機會を與へるといふ意味に於いて。本全集は今日に至る迄發見された兩人の著作全部を包含してゐる。思ふにリヤザノフの努力によつて續いて發見されるであらう所のものも追加されて名實共にマルクス・エンゲルスの思想の全偉容が日本の讀者の前に提供されるであらうと信ずる。

何より先き、本全集に

猪俣津南雄

マルクス・エンゲルスの文献ほど、全集としてもつことの必要なものはない。彼等の思想それ自體が「全集」的で、人間思惟の一切の分野を包括する一大體系をなしてゐる。マルクシズムの批判者や歪曲者は、極つてこの體系の一斷面をひねくり廻す。マルクシズムが難解なのではない、全面を見ないから解らないのだ。全集の讀者

は、或所では極めて抽象的に堅苦しく書いてある思想をば、他所では極く解り易く具體的に、思想家の血と呼吸とを感じるくらゐ親しみのある說明や主張として見出すであらう。マルクス・エンゲルスが偉大なのは、彼等が單なる思想家ではなく、最大の革命思想家であるからである。野火の如く現代を燃立たす彼等が思想の生ける力は、屢々その個人的な手紙や一見不用意な短篇の中に躍つてゐる。不穿鑿や考證のためよりは先づ端的に此の思想の創造的な生活力、不可思議な征服力を掴むために、吾々は直ちにマルクス・エンゲルス全集に行かねばならぬ。

本全集の努力の一つ

向坂逸郎

マルクスとエンゲルスは現に吾々の中に生きて居る。彼等は吾々のものである。完全なるマルクス・エンゲルス全集をもつ事は吾々の衷心の願でなければならぬ。だが、彼等のものならば斷簡零墨をも包含する所の無缺の全集は、現在の我國に於ては、何人によるも企て得られない。從つて吾々の第二段の願ひは現在の我國に於て出來得る限り多くを收錄せる『全集』を、といふ事になる。本全集の努力の一つがそこを目指して居る事は實に嬉しい。

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.